日本上流文化圏研究所

研究年報Vol.1

1996.4 - 2000.3

鳥の目 虫の目

1-4/1000

日本上流文化圏研究所
研究年報Vol.1

1996.4 - 2000.3

鳥の目
虫の目

1 - 4 / 1000

理事長　下河辺淳

日本の国土は水系によって地域の特性を表しています。国土を川の「流域」としてみることは常識でした。

しかし明治以降、国土は交通体系によって管理されるようになり、戦後、上流に暮らす人々は中流、下流に流出し、上流の過疎化、高齢化が進んできました。こうした背景から、現在の上流域はネガティブなイメージで語られることが多くなっています。

しかし歴史的に見ると、上流には縄文時代から様々な形で人が住み続けてきました。そこには文学、思想、宗教もあれば生活の知恵もありました。上流に暮らす人々の文化レベルは、実は非常に高かったのです。ここを上流文化圏と位置付け、地域の文化的な再発見を日本上流文化圏研究所では試みてきました。

また日本列島は小さな島国であるだけに、上流と海が非常に深い関係を持っていました。河川の上流・中流・下流が一体となって、海の文化と山の文化とが結合した文化を築いてきたのです。この上流文化と海洋文化が結合するところに、日本のアイデンティティがあったはずです。

近年、自らの文化的創造のために、都市から上流文化圏に移住する人々が現れてきました。これからも、本来日本に築かれていた上流文化に目を向けて、これから上流文化圏で生きていこうとする人々が増えていくと思われます。

このたび発刊に至ったこの研究年報は、日本上流文化圏研究所の設立から4年間の研究活動記録です。まだ歩みはじめたばかりではありますが、この研究所がその起点となり、上流文化圏と日本のアイデンティティを再構築していくことができればと考えています。

早川町長　辻一幸

早川町は平成6年より、第4次の長期総合計画「日本・上流文化圏構想」を進めています。

南アルプスの山懐に抱かれた辺境の地に位置するわが町は、昭和31年、流域6ヵ村が合併して今日に至りますが、その時代から始まった国の高度経済政策の波の中で、林業の衰退、若者の流出、高齢化、過疎化を余儀なくされ、厳しい現実に直面してきました。

新総合計画を策定するに際し、広く町民と議論する中で、新しい時代に対応すべく生まれた、時代転換を想定した地域づくり、町づくり計画が本計画であり、時宜を得た構想の中で着々と町づくりが進んでいます。

上流文化圏研究所は、こうした構想をもとに開設いたしました。上流域に位置する早川町が、もう一度足元から自分たちの地域、人々が歩んできた歴史や文化、暮らしを見つめ直し、再び生き生きと甦らせるべく、あらゆる試みと、新たな地域哲学を構築し、町民が確信をもって行動できる規範となるものの研究を進めています。

行政にできない広い発想と、研究所の目的に声援を送ってくれている全国の多くの仲間の支援の中で、今日まで取り組んできた研究所の歩みを、年報第1号として発刊することができました。

忌憚のないご意見をお寄せいただくことと、これからの研究所へご支援を節にお願いいたします。

所長　三井啓心

日本上流文化圏研究所が、町内外の人たちによる、知恵の結集によって、少しずつ歩みを確かなものにしていることは、喜ばしい限りです。

過去の出来事、未来への夢、身近な日々の暮らしの中に、この地域ゆえに生きている文化があり、それを大事にすることは、この地に生かされている人の使命ともいえましょう。

研究活動というと、何か難しいことのように考えられがちですが、今回発行された、この活動記録のように、その気になりさえすれば、楽しみながら取り組めることばかりです。研究所は、そうした仲間の集まりです。

この活動に一層の御理解と、発展を期待していただけることを、切望しています。

■もくじ

1．学術論文

1998年第33回日本都市計画学会学術研究論文集P427～
山梨県早川町における「日本・上流文化圏構想」と「日本上流文化圏研究所」の取り組み 1
1997年日本建築学会大会学術講演概要集6042
山梨県早川町における子供の地域学習環境に関する研究 -地域学習教材の開発に向けて- 7

2．研究論文

「山梨県早川町における子どもの地域学習環境に関する研究 地域学習教材の開発に向けて」 9
「中山間地域の寺院が移住に果たす役割に関する研究 早川町京ヶ島集落を事例として」 19
「中山間地域におけるまちづくり中間セクターのあり方に関する研究」 27
「まちづくり学習から見た地域学習の可能性と限界に関する研究」 39
「福祉空間としての道に関する考察 早川町茂倉集落を事例として」 47

3．地元研究班

遊び部会の活動 55
すばく愛好会の活動 61
ヤマトイワナの研究 65
ビュースポット探索班の活動 71
水環境調査班の活動 77
歴史考察と古文書の研究 81

4．自主事業

上流文化圏会議の開催 83
早川町民塾の開催 87
上流文化圏ライブラリーの整備 91
インターネット活用に関する取り組み 95
早川町カレンダーの制作 103
「インド先住民族アート展」と「ミティラー美術展」の開催 107
その他の活動 113

5．支援事業

五箇地区養蚕資料の保存・活用 115
全国上流域への支援 118
町内各種事業への支援 121

6．軌跡と展望

研究所の歩み 125
常任理事の声 129
事務局の面々 134
今後の展望 135

7．資料

上流圏だより 137
雑誌 154
新聞記事 178

1 学術論文

1998年度第33回日本都市計画学会学術研究論文集P427～

山梨県早川町における「日本・上流文化圏構想」と「日本上流文化圏研究所」の取り組み

1997年度日本建築学会大会学術講演概要集6042

山梨県早川町における子供の地域学習環境に関する研究　-地域学習教材の開発に向けて-

■セツブンソウ（キンポウゲ科）2～3月
高さ5～10cmくらいの茎に白い小さな花をつける。節分の頃から咲き始める。

72. 山梨県早川町における「日本・上流文化圏構想」と「日本上流文化圏研究所」の取り組み

The Challenge of Hayakawa Town, Yamanashi Prefecture :
－Its Affiliate "Japan Upper River Culture Institute" and its Comprehensive Plan "Japan Upper River Culture Plan"－

鞍打大輔*・後藤春彦**
Daisuke Kurauchi and Haruhiko Goto

The Comprehensive Master Plan of Hayakawa Town titled "Japan Upper River Culture Plan" is one of the few examples of local governments' master plans which hold a clear vision based on their regional socio-cultural context. In the same plan, the idea to establish an affiliated particular research institute was shown as a practiced measure. Authors, being members of "Japan Upper River Culture Institute," have been responsible for research activities on regional development of Hayakawa Town through community participation. In this research paper, the philosophy of Comprehensive Master Plan of Hayakawa Town as well as the experiences and results of its research institute were evaluated, and some matters worthy to be considered for regional development of Japan's local inland town were extracted.

Keywords : comprehensive plan, regional culture, community participation, nationwide network
総合計画，地域文化，住民参加，全国的ネットワーク

1. はじめに

1-1. 本研究と対象地の位置づけ

これまでわが国の市町村では、地方自治法第2条第5項に従って，基本構想・基本計画（以下，総合計画）が策定されてきたが，その計画内容は各都道府県で示されている「市町村計画策定の手引き」に準拠したものが多く、画一的，形式的になりがちな点が指摘される。しかし、総合計画が示す地域の将来像は，市町村における諸計画の上位計画としての位置づけだけでなく，地方分権がますます進むことが予想される現況において、地域づくりの指針として今後重要性を増すことが予想される。

本研究で対象とする山梨県早川町は、平成6年度に第4次総合計画「日本・上流文化圏構想」（以下「上流圏構想」）を策定し、環境保全を地域の大きな役割とみなし、川の上流域で培われた地域文化に依拠した地域の将来像を描いた。さらに，町内外の活力を積極的に活用することとし、平成8年に「日本上流文化圏研究所（理事長，下河辺淳・元国土庁事務次官）」（以下「研究所」）が設立され，構想実現へ向けての取り組みが始まっている[1]。

中山間地域問題の議論は，国土における公益機能の保全論や条件不利地域対策論に終始しがちであるが，このように，いち早く時代の転換期を見つめ，中山間地域の生活文化に依拠した地域づくりを総合計画で明示した例は数少なく，その実践機関として研究所を設立した試みも希有である。従って、これらは今後の中山間地域の地域づくりの一つの方向性を示すものと考えられる。

1-2. 研究の目的

筆者らは，総合計画の策定をはじめとして，「研究所」の設立準備当初から現在に至るまで，「研究所」の理事・学生研究員として早川町の地域文化に関する研究や地域づくり活動，及び「研究所」の運営に参加してきたという経緯を持っている。

その筆者ら自身が，「上流圏構想」が策定された背景やその思想，そして「研究所」設立から平成9年度までの研究活動への取り組みを、自ら総括することは論説として有意義であると考えられる。本論では早川町の取り組みをもとに、これからの中山間地域における地域づくりの計画論を考える視座を整理することを目的としている。

2. 早川町の概要

2-1. 位置、地勢

山梨県早川町は県南西部に位置し，南アルプスを挟み静岡県と接している。総面積369.86平方kmは県内で最も広く，そのうち96％を森林が占めている。急峻な山々の谷間を富士川の支流である早川とフォッサマグナが南北に走り，旧6ヶ村[2]からなる36の集落が谷間に散在している（図1参照）。

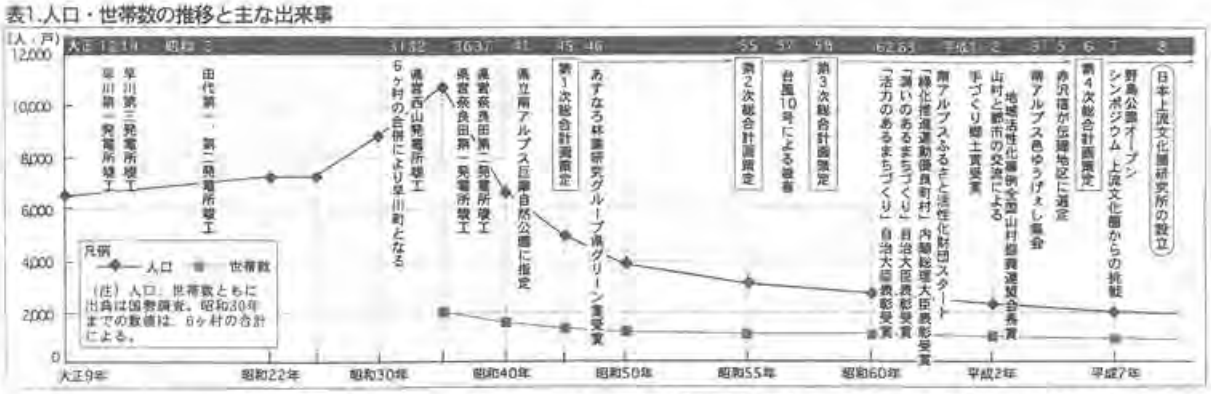
図1.早川町の概要

2-2. 歴史，人口，産業

早川町では，縄文の生活遺構や金・木材産出で栄えた

＊学生会員　早稲田大学理工学研究科　修士課程　(U. of Waseda)
＊＊正会員　早稲田大学理工学部建築学科　教授・工博　(U. of Waseda)

表1.人口・世帯数の推移と主な出来事



近世までの歴史を背景に、独自の農山村文化が培われてきた[3]。大正時代になると水力発電所の開発が相次ぎ、建設作業者を主とする人口が流入し、ピークを迎えた昭和35年には10,679人（国勢調査）を記録した。しかし、その後は急速に過疎化が進行し，平成7年には1,977人（国勢調査）となった（表1参照）。また高齢化率は41％と県内で2番目に高く，一次産業の衰退とともに，温泉などを活かした観光業と，建設業が町の基幹産業となっている[4]。

2-3. これまでの総合計画の流れ

昭和45年に策定された第1次総合計画、また昭和55年の第2次総合計画は，「生活基盤の整備」「産業振興」「社会福祉の増進」などを基本施策として位置づけ、生活環境の整備によって人口増加を目指すものであった。しかし，これらの計画策定にあたって、町の現状調査は行なわれたものの、具体的な地域の将来像とその実践手法は示されず。過疎化を食い止める成果を上げるには至らなかった。

現町長の就任以降、昭和57年の台風10号による大規模な被害を機に，第2次総合計画の見直しが始まり，各集落でのヒアリングや50名の町民からなる「50人審議会[5]」による話し合いを経て，昭和59年に「旧村一拠点」「観光業と農林業の振興」「生活環境の整備」を基本施策とした第3次総合計画が策定された。その中でも旧村を単位とした各地区に、拠点となる施設を整備するという「旧村一拠点」や、観光業に着目した産業振興などは、生活環境の整備に基づく人口定着を目指したもので、地域の現状を的確に把握した具体的な施策の提示であったといえる。

この第3次総合計画の「旧村一拠点」に従って、観光や地域づくりの拠点となる施設が各地区に建設され[6]，現在の早川町の地域づくりのハード面における基礎が築かれた。また，この施策はいわゆる施設のばらまきにとどまらず，計画策定に町民の意見を積極的に反映させたこととも相俟って、地域づくりの運動を誘発・促進することにも効果を発し、住民主体の地域づくり活動も多数芽生えた。本建地区では集落の青年層で組織した赤沢青年同志会が結成され、下水道の自力建設、往還の石畳による整備など精力的な活動を展開した。そうした結果、平成5年には同地区赤沢宿の江戸時代から残る講中宿の街並みが，首都圏では初めて重要伝統的建造物群保存地区に選定されるまでに至っている。（表1参照）

3.「日本・上流文化圏構想」の概要

3-1. 策定までの経緯

3-1-1.「50人審議会」

第4次総合計画である「上流圏構想」策定への取り組みは、平成4年から2年間に渡って行われた。第3次総合計画で芽生えた住民主体の地域づくりが構想策定プロセスにおいても継承され、第3次総合計画策定の際に組織された「50人審議会」による話し合いが再びもたれた。

3-1-2.「南アルプス邑ゆうげぇし集会」

平成3年に、町では、町外から約30名の地域づくり活動家や研究者・有識者を町に招く、「南アルプス邑ゆうげぇし集会」を開催した。

これは、町の実態を参加者に把握してもらい，忌憚のない意見を得ることを目的としたものであった。しかし，この集会後も，町外の地域づくり活動家や研究者・有識者との関係は続き，「上流圏構想」策定にあたっては，この集会の参加者をはじめとする町外者から，ボランティアによる助言や指導を受けることが可能となった。

表2.「上流圏構想」の思想

日本・上流文化圏宣言 早川に根ざし 早川に生きる その信念と行動の規範です
・早川の情景のごとく－絶えず 撓まず 記まず 晴れの日も雨の日も早川は流れ続けます。私たちは、この上流圏に生き努力を重ねながら、下流の文明を支え続けた先人を誇りとし、その歴史と遺産を継承していきます。そして、早川の赤の姿に学びながら、地域を見つめ、ちえを出し、汗を流しながら、きょうをあすに伝えていきます。 〈農山村文化の見直し〉
・南アルプスの峰峰のごとく－清らかな理想を高くかかげ 高い峰峰は朝日に映え夕日に輝きます。厳しい山村にくらしながらも、その美しさに私たちは自然への感動と生きる喜びを新たにします。私たちはこの南アルプスの崇高な姿に力強く清純な地域に生きる倫理を見出し、あすの地域の理想のすがたと、その地域に生きる人とくらしのあり方を追い求めます。 〈新しい文化や暮らしの創造〉
・蒼空にまたたく星のごとく－地域を光きらめかせる 澄みきった大気のなかでは、真昼でも大空に星がまたたきます。山あいの小さな宇宙であるこの早川には、固有の哲学が光り、美しい風習が光り、やさしい人の心が光ります。時をかけて磨きぬき、自らきらめくような、そんな地域の姿をめざして、私たちはい生行動をはじめます。ゆっくりとしかし確実に、私たちのふるさと早川を創り続けます。 〈長期的視点での地域づくり〉
上流圏構想の基本的な考え方 山梨の一山村 南アルプス邑 早川町から全国へ呼びかけます　〈全国へ向けて提唱〉
早川がいち早くかかげる「日本・上流文化圏構想」 ■地球規模での視点　■緑と水に恵まれた日本からの発想
21世紀中100年かけてすすめる 別名「早川・32世紀計画」 ■100年先の地域のビジョンを目指す　■人を育てながらの21世紀の行動計画
これからの10年間の行動指針が「早川町第4次総合計画」 ■南アルプス邑計画の継承　■日本・上流文化圏宣言と3つのシンボル施策

3-2.「上流圏構想」の思想

「上流圏構想」は、これまでの総合計画が目標としていた過疎化の抑制・人口増加という、地域の実態に合わない達成不可能ともいえる目標をあえて掲げてはいない。

それよりも、急激な近代化の進行こそが上流域に様々な問題をもたらしたと明確に位置づけた。そして水を命の源となぞらえ、その源である上流域の自然環境と、山村生活の中で地域の先人が培ってきた農山村文化を見直すことから、地域づくりを再度進めていくことを基本的考えとした。さらに、それをベースに新しい農山村文化や暮らしを創造し、長期的な視点から地域づくりを展開することで諸問題解決の糸口を探り、それらを実践して生まれた新しい地域のすがた・哲学・行動を、町から全国に向けて提唱していくことを試みている。（表２参照）

3-3.「上流圏構想」推進の３つのテーマ

この構想を進めるにあたって、以下に示すように、早川町の方言[7]をキーワードとした3つの計画推進のテーマを掲げた（図２参照）。

図2.「上流圏構想」推進のテーマ

①第3次総合計画の「旧村一拠点」を継承し、各地区の風土・歴史・文化・暮らしを際だたせ、固有のビジョンを描く「みんなで"かたる"むらづくり」

②それぞれが個性を競い合うことによって、町全体が個性的なものになる「全町で"まるかる"早川のくにづくり」

③町内外から知恵を出し合い、多くの人と協力して進める「ふるさとを息づかせる"ゆうげぇし"」

3-4.「上流圏構想」の３つの重点施策

「上流圏構想」が掲げる３つの重点施策を以下に示す。

①上流域が育んできた文化や暮らし、そして自然環境を見直すことから始まる「上流文化圏にふさわしい環境とくらしと文化の創造」

②それらをベースにして、新しい地域の姿を提案する「上流文化圏の核になる第７のむらづくり[8]」

③その実現へ向けて町民を巻き込んだ研究活動を展開し、その成果を全国へ情報を発信する「ひろくちえと心をあつめた日本上流文化圏研究所の開設」

4.「日本上流文化圏研究所」の概要

4-1.「研究所」の位置づけと役割

前掲のように「研究所」の設立は、「上流圏構想」の重点施策の中に明記され、今後展開される地域づくりの中で中心的な役割を担っていく研究機関とされている。その役割は、「上流圏構想」に描かれた地域の将来像の実現を目指し、「地域資源の発掘・活用」「新しい農山村文化と暮らしの創造」「住民参加によるネットワークの構築」「それらの成果の全国への情報発信」といった、様々な地域づくり活動や地域文化の研究を町民とともに進めていくことである。

4-2.「研究所」の組織と運営

「研究所」は正式には、早川町の企画振興課に位置づけられ、事務室及び研究室は、五筋地区の交流促進センター内に設置されている。運営の財政的側面は現在のところ全て町に依存しており、それぞれの研究活動ごとに企画振興課の予算として割り当てられている（表３参照）。

表3.「研究所」の予算

平成８年度（総務費の総務管理費の企画費より）
総額12,105,977円 （うち国土庁過疎地域振興等整備事業　5,150,000円）
平成９年度（総務費の総務管理費の企画費より）
総額10,262,700円 （うち山梨県地域づくり推進事業費　1,350,000円）

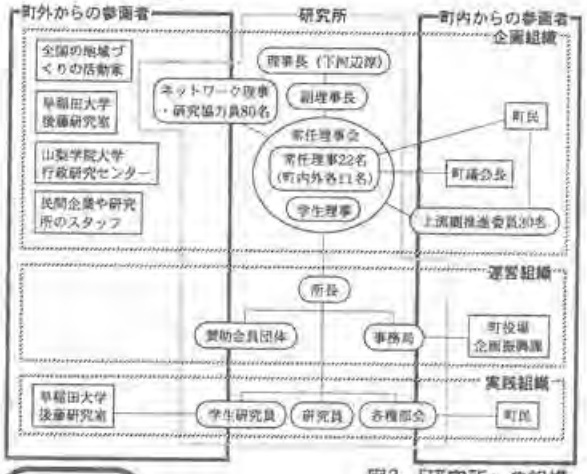


図3.「研究所」の組織

「研究所」の組織は、図３に示すように、常任理事会を中心に構成されている。また、全国の地域づくり活動家をネットワーク理事・研究協力員[9]と位置づけ、人材のネットワーク化を図っている。

研究活動は常任理事会で立案され、ネットワーク理事・研究協力員に意見を求めたり、協力の要請をする。

そして専従の研究員と学生研究員各１名、及び事務局である町役場企画振興課の２名が、主に研究活動を推進し「研究所」の運営を行っている。

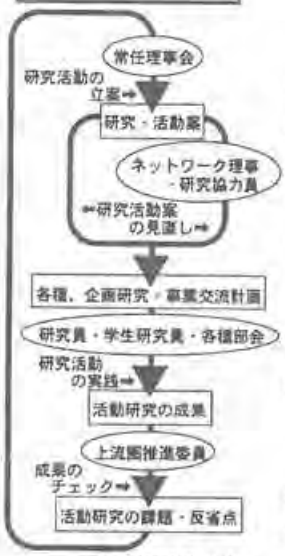


図4.研究活動の流れ

さらに、研究活動の一年の成果は町民によって組織された「上流文化圏推進委員会[10]」でチェックされ、次年度の研究活動の企画や進め方に活かされる（図４参照）。

4-3.「研究所」の研究活動のプログラム

「研究所」の研究活動は、地域の潜在的な資源を掘りさげる虫の目の視点と、地球的な規模で地域づくりの戦略を眺めわたす鳥の目の視点。また上流域である中山間地域からの発想と、その対極に位置づけられる下流域の都市部からの発想をクロスオーバーさせた、7つの調査研究と2つの実践活動が、当面の研究活動のガイドラインとして定められている。そのガイドラインの内容、またそれぞれの位置づけと流れを図5に、研究活動の具体的なプログラムを図6に示す。

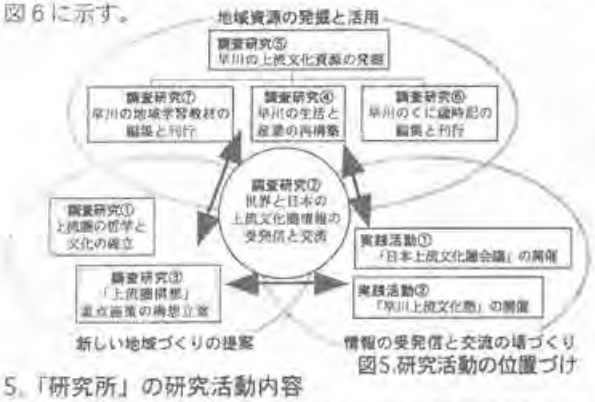


図5.研究活動の位置づけ

5.「研究所」の研究活動内容

ここでは、「研究所」の具体的な研究活動内容を報告する。

5-1.地域資源を発掘し活用する取り組み

5-1-1.遊びの歳時記づくり（調査研究⑤）

小学校長を中心とする「遊び部会[11]」では、お年寄りへのヒアリングなどを通し、農山村の昔の遊びの収集と同時に、町の内外から多くの客を集める町のイベント（山菜祭りとそば祭り）において、昔の遊びの体験コーナーを開いた。成果は歳時記という四季の時系列を通してまとめている。

5-1-2.ﾅﾁｭﾗﾙ・ﾐﾈﾗﾙｳｫｰﾀｰの商品化（調査研究④）

町の特産品の開発・販売を手がけてきた南アルプスふるさと活性化財団と、「研究所」が協力し、湧水を活用したナチュラル・ミネラルウォーター「白鳳の水」の商品開発を行った[12]。

5-1-3.その他の研究活動

さらに、古文書に見られる早川の食文化調査や、高品質とされる町内産の大豆を使った料理に関する研究活動を続けている。そうした成果の一つとして、早川の伝統食「すばく」に着目した「すばく愛好会[13]」も発足した。また、釣り愛好家によるヤマトイワナ[14]の生息状況の調査、上流文化圏ライブラリーの整備[15]などを行っている。

その他、平成8年度には、学生研究員が、早川南小学校を対象とした子供の地域学習環境に関する研究[16]をまとめた。

5-2.情報の受発信と交流の場づくりへの取り組み

5-2-1.「上流文化圏会議」の開催（実践活動②）

「上流圏構想」の思想を全国に呼びかける活動として、「上流文化圏会議」を開催している。これは、「上流圏構想」に共鳴した全国の地域づくりの活動家が持ち回りで主催

表4.「上流文化圏会議」のテーマと参加者数

開催日 開催場所	メインテーマ ・サブテーマ	参加者数(カッコ内は早川町民)と 主な参加者(参加者名簿より)
平成8年3月8日 早稲田大学	「地域から国を考える」 －上流に生きる －上流からの展望	70名 (3名) 大熊政成/篠嶋久好/藤井群三郎/松島登美/ほか
平成8年 8月30,31日 山梨県早川町 奈良田	「フォッサマグナの鳴び －もうひとつのくにづくり原義－」 ・ようこそ上流文化圏・早川へ ・4年間封印原義 ・地域で生きる未来を展望する ・手年と宇宙	131名 (25名) 秋本治/市村次夫/岡崎昌之/岡田文淑/古島敏子/久木田一/川木靖夫/桑野和泉/中谷健太郎/ほか
平成9年 11月2,3日 宮崎県五ヶ瀬町 やまめの里	「日本のブナ帯文化蘇生を目指して －もうひとつのくにづくり－」 ・新しい森と流域の哲学とくらしの創造 ・消えゆく森のくらしとその作法 ・ブナ帯文化とツーリズム	148名 (4名) 進坂誠二/緒方英樹/近藤廣平/鈴木隆雄/辻一幸/林のり子/結城登美雄/ほか

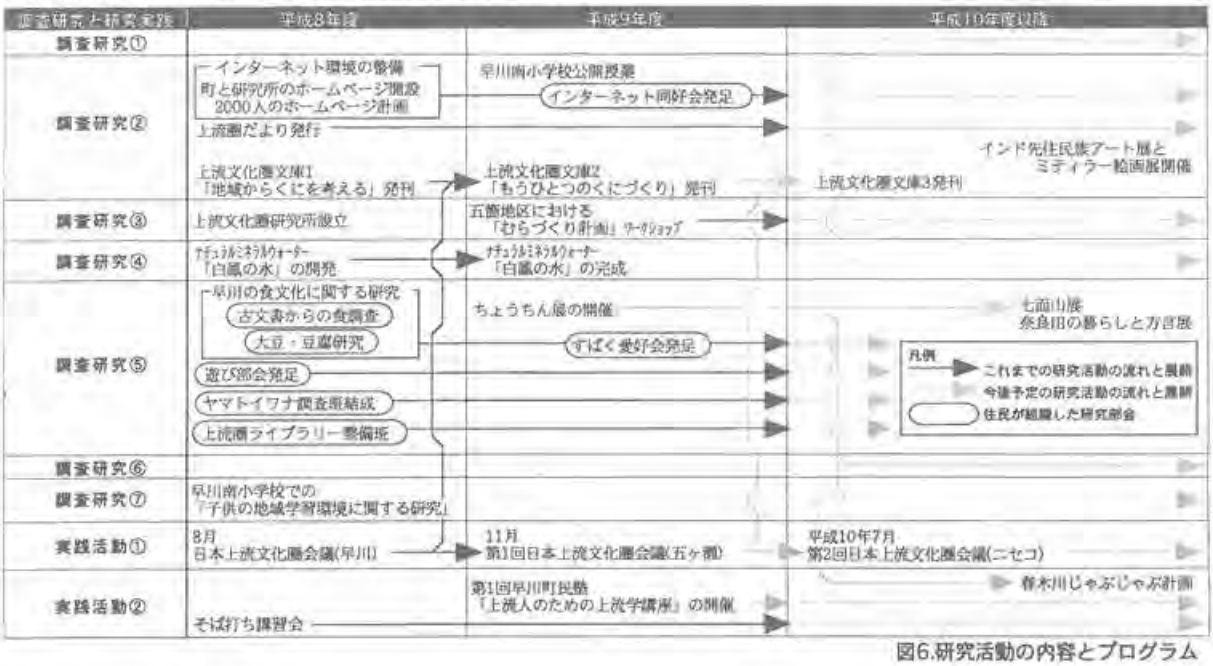


図6.研究活動の内容とプログラム

し、これからの地域づくりや国土計画について現場の視点から議論や意見交換をしようとする試みである。平成8年3月の早稲田大学でのプレ会議を皮切りに、同年8月には早川町で、平成9年11月には宮崎県五ヶ瀬町で開催した（表4参照）。これらの会議には理事長である下河辺淳をはじめ全国各地から「上流圏構想」賛同者が無償で多数参加し、手づくりの会議の中で、忌憚のない意見交換や、活発な議論が繰り広げられ好評を得ている。平成10年度は、7月に北海道ニセコ町において、地元民間活動団体の主催で開催する予定である。

また会議の記録は「日本上流文化圏文庫」[17] として発刊している。

5-2-2.「早川町民塾」の開催（実践活動①）

平成9年度、山梨学院大学の教員を講師として招き、4回に渡って町民を対象とした講座「早川町民塾」を開催した（表5参照）。この塾は地域の食文化を味わいながらの井戸端会議的雰囲気の懇談が効を奏し、毎回定員を超える町民が参加し、活発な意見交換がなされた。

表5.「早川町民塾」の内容

	開催日	テーマと参加者数（定員30人）	
1回目	9月6日	「高齢者の多い地域の内発的発展」	58人
2回目	9月13日	「水の飲料と暮らし」	35人
3回目	9月27日	「登山と地域振興」	32人
4回目	10月25日	「もっと知りたい人のための追加講座」	38人

5-2-3. インターネット環境の整備（調査研究②）

町では平成8年9月にサーバーを立ち上げ、ホームページ[18] による情報発信とともに、町内の公的機関や教育機関などとの情報ネットワークの強化を図っている。

特に早川南小学校では、授業におけるインターネットによる情報収集、児童や教師が制作したホームページ[19] の開設など、インターネットの活用に意欲的で、平成8年11月には、同校の教師や父母を交えて研究を重ねた結果、授業風景を全国にリアルタイムで発信することができた。

それを機に、町民によるインターネット同好会[20] が発足し、町のサーバーを利用した住民の電子メールのやりとりやホームページの開設・閲覧などが可能となった。

町のホームページの更新は「研究所」が全面的に手がけ、山梨県内の市町村では群を抜いて、開設1年半で1万人のアクセスを集めるまでになった。また、全町民を紹介するホームページの製作を計画しており、「研究所」とインターネット同好会との協力のもと、平成11年度中の完成を目指している。

5-2-4. その他の研究活動

その他に、町民にこれまでの研究活動の成果と途中経過を報告するとともに、活動への参加を呼びかける広報誌「上流圏だより」を季刊で発行している。また、研究所主催のそば打ち講習会を適宜開催している。

さらに、全国各地で開催される地域づくり活動への協力要請にも積極的に応えており、研究員・学生研究員は各地のイベントやシンポジウムのスタッフとして企画段階から参加している[21]。

5-3. 新しい地域づくりの提案への取り組み

5-3-1.「むらづくり計画」策定ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ（調査研究③）

「上流圏構想」推進のしくみの一つである「みんなで"かたる"むらづくり」を受けて、それぞれの地区での住民参加型ワークショップによる「むらづくり計画」策定を進めている。

平成9年度は、五箇地区を対象に、早稲田大学後藤研究室の協力のもと、2回のワークショップを開催し、地区の問題点、交流促進センターの活用方法などの意見収集[22] を行っている。

6.「上流圏構想」と「研究所」の総括

6-1.「上流圏構想」策定と「研究所」設立の総括

時代の転換期といわれ、将来の見通しが立てにくい現在において、地域の将来像を明確に描いた「上流圏構想」の思想と試みを以下に整理する。

①新しい農山村文化の創造

②自然と共生した暮らしの創造

③長期的ビジョンに基づく地域づくりの創造

④住民参加による新しい地域のすがたの提唱

⑤地球規模で事柄を考える新しい地域哲学の提唱

⑥長期的視点に立った新しい地域の行動の提唱

これらの、全国的にも訴求力のある総合計画策定を可能とした手法は次の通りである。

第4次総合計画の「上流圏構想」策定のプロセスに、「50人審議会」と「ゆうげぇし集会」に端を発する町外の活力を積極的に導入したことで、町内外の意見収集と知恵の交換ができた。また、これらの手法は、将来像の実現へ向けた「研究所」設立のための、町内外のサポート体制の基礎を築くことにも効果を奏した。

6-2.「研究所」の手法の総括

「上流圏構想」に描かれた将来像を実現するには、長期的な視点と多数の人々の参加が不可欠である。「研究所」の設立は、地域づくり活動と地域文化研究の充実のみならず、恒久的な地域づくりへの意志表明、日常的な住民参加による地域づくり活動の展開が可能となったという点で非常に重要な試みであるといえる。

「研究所」の研究活動と組織づくりにおける手法を、以下に整理する。

①住民とともに進める綿密な現地調査に基づき、地域を見直し、地域資源の活用計画を立てる

②住民参加を促し、町内の地域づくり活動のネットワークを構築し、その中心的役割を担う

③民間の企業、研究所にも人材を求め、研究を促進させ

るとともに、成果を社会に還元する手段を持つ

④全国の中山間地域と問題の共有化や解決へ向けて連携を図り、その姿勢・成果を全国的に発信する

これらは、五全総で計画実現の手法として明記された、「地域主体」「多様な主体の参加」「地域間の連携」を軸とした「参加と連携」方式を、先取りしたかたちで明確に打ち出し、また実践を試みている先駆的な例である。

6-3.「研究所」の研究活動の総括

「研究所」の研究活動の成果は、現在のところソフト的な部分が多く、目には見えにくいが、以下にこれまでの成果が得られている。

地域資源発掘と活用への取り組みでは、「遊び部会」「すばく愛好会」などの住民主体のグループが自主的に立ち上がり、「研究所」が掲げた研究活動を、住民が主体となって進めるようになった。また、イベントにおける体験コーナーの開催など、その成果を町民や子どもたちに還元する試みも行っている。

情報の受発信と交流の場づくりへの取り組みとしては、インターネット環境の整備を行うことで、町民の自由な情報受発信の機会が確保された。その一方で「上流文化圏会議」や「早川町民塾」を通して、直に全国の人々と交流する機会が得られ、町民の地域づくりへの参加意欲を向上させるとともに、諸問題解決へ向けて協力する試みが全国的規模で行われつつある。

新しい地域づくりの提案へ向けての取り組みでは、「研究所」が設立されたこと自体が成果である。さらに、少しづつではあるが、「研究所」が中心となって、住民参加型の地域づくりが着実に展開されている。

7. 今後の課題

7-1.「研究所」と町民の関係強化

「上流圏構想」を背景とした「研究所」の活動と、多くの町民がイメージしがちな住環境整備、産業振興といった地域づくりは、現状においては必ずしも整合するものではない。今後とも「研究所」の研究活動に住民参加を促すとともに、その成果を町民に分かりやすく伝える努力が必要である。

7-2.「研究所」の将来的あり方

「研究所」の円滑な活動や運営の妨げとなっている3つの点を、以下に整理する。

①「研究所」の位置づけが現状に置いて不明確である。

「研究所」は町役場企画振興課の一部に位置づけられており、独自の研究活動の展開が保証されていない。

②「研究所」が財政的に自立していない。

「研究所」の予算が町財政に依存しており、また「研究所」独自での予算配分権限を有していない。

③「研究所」の運営組織が弱体である。

「研究所」の運営に主に携わる4名のうち、2名は町役場企画振興課との併任であり非常に負担が大きい。また専従の研究員は現在のところ役場の嘱託職員という立場であり、身分が明確に保障されていない。

これらの点を踏まえ、今後は、NPOとしての「研究所」の活動など、役場との連携は保ちつつ、「研究所」としての自立を視野に入れた活動を進める時期にきている。

謝辞

私達に早川町の地域づくりに参画する場を与えてくださった、早川町、早川町役場、日本上流文化圏研究所の皆様に感謝の意を表すとともに、今後の地域づくりの発展を祈願いたします。

注 (1) 早川町では「上流圏構想」の策定から4年を経て、以下の対外的評価を得ている。
全国農村アメニティーコンクール優秀賞受賞（平成5年）
三里地区「野鳥公園」が県建築文化奨励賞受賞（平成7年）
「小鳥がさえずる森づくり運動」環境庁長官賞受賞（平成8年）

注 (2) 旧6ヶ村とは西山村、三里村、都川村、視島村、五箇村、本建村である。昭和31年の合併を経て、それぞれ、西山地区、三里地区、都川地区、視島地区、五箇地区、本建地区となった。

注 (3) 西山地区の焼畑農工用具が国定指定農耕具、重要有形民俗文化財に、本建地区赤沢が国選定重要伝統的建造物群保存地区に、西山地区奈良田の生活用具が県指定民具になっている。

注 (4) 産業別人口構成は、一次産業が9%、二次産業が37%、三次産業が54%である。高齢化率、産業別人口構成はともに平成7年国勢調査より。

注 (5)「50人審議会」とは、第3次総合計画策定に住民代表として携わり、策定後は諮問機関となった、青年、婦人、各種団体の代表者などからなる組織である。任期は2年間であるためメンバーは入れ替わったが、町民の意見を計画に反映させることに有効に機能したとの評価から、第4次長期総合計画策定まで携わった。

注 (6) 旧村一拠点によって建設された施設は以下の通りである。
西山地区：奈良田の里（歴史民俗資料館、白鳳史跡山岳写真館、ほか）
三里地区：ヘルシー美里（温泉・宿泊研修施設）
都川地区：草塩温泉（温泉）
視島地区：ヴィラ雨畑（温泉・宿泊研修施設）
五箇地区：交流促進センター（生涯学習・交流施設）
本建地区：南アルプスプラザ（レストラン・物産販売施設）

注 (7) 使用された方言の意味を説明する。"かたる"とは、誘いあって仲間に加わり、参加すること。"まるかる"とは心を一つにして、力を合わせ行動すること。"ゆうげぇし"とは互いに知恵と力を出し合うこと、結返しの意。

注 (8)「第7のむらづくり」とは、第3次総合計画で掲げられた「旧村一拠点」の次の展開として示された、早川町全体の拠点となる施設や場所をつくる計画のこと。

注 (9) ネットワーク理事・研究協力員とは、上流圏の活動をそれぞれの立場からサポートする人々で、全国各地の地域づくりの活動家と民間の企業や研究所のスタッフなど、約80名で組織されている。

注 (10)「上流文化圏推進委員」とは、町長の諮問に応じて「上流圏構想」の進捗状況などを調査審議し意見を具申する組織。青年、婦人、各種団体の代表者など30名の町民からなる。

注 (11) 遊び部会は早川南小学校の校長（常任理事）が中心となり、地域のお年寄り8人とともに平成8年に発足した。平成10年3月現在、会員数13名。

注 (12) ボトルのデザインは、常任理事であるデザイナーの水野卓史が手がけた。

注 (13) すばくとは、丸麦を使った麦飯で、山梨県峡南地方の郷土食である。愛好会は、三里地区茂倉に住むお年寄りを中心に設立され、平成10年3月現在、会員数15人である。

注 (14) ヤマトイワナとは、イワナの中でも中部山岳地帯の太平洋側の渓流だけに棲息する貴重種である。

注 (15) 上流文化圏ライブラリーの整備では、これまでに早川町を対象にした調査研究に関する書籍や資料の収集活動を行っている。

注 (16)「山梨県早川町における子供の地域学習環境に関する研究　－地域学習教材の開発に向けて－」1997年日本建築学会大会学術講演梗概集6042参照。

注 (17) 早稲田大学、及び早川町での会議の記録は、上流圏文庫①「地域から国を考える」、上流圏文庫②「もうひとつのくにづくり」として発行されている。

注 (18) URLは http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/

注 (19) URLは http://www.kls-net.or.jp/user/hnansyo/

注 (20) 会員数は平成10年3月現在21名。月に一度程度集まり、インターネットのノウハウや、ホームページの作り方などの勉強会を開催している。

注 (21) これまでに協力した各地での地域づくり活動は、
平成8年12月、静岡県菱岡村：「日本列島どまんなかの会」フォーラム
平成8年12月、新潟県高柳町：月潟女塩泉活性化会議
平成9年3月、長野県高森町：生活文化フォーラム
平成9年8月、新潟県高柳町：地域資源商品化専門委員会
平成9年10.11月、北海道新得町：『SHINTOKU 空想の森映画祭』
平成9年11月、新潟県高柳町：「素材への回帰展」

注 (22) 一回目は平成9年4月、誤植アンケートによる地区の課題のアンケート調査。二回目は平成9年10月、ポラロイドインタビューによる交流促進センター活用方法の意見収集。

参考文献
日本上流文化圏文庫①「地域から国を考える」、1996年8月、日本上流文化圏研究所・編、早川町・発行
日本上流文化圏文庫②「もうひとつのくにづくり」、1997年3月、日本上流文化圏研究所・編、早川町・発行

6042

日本建築学会大会学術講演梗概集
(関　東)　1997 年 9 月

山梨県早川町における子供の地域学習環境に関する研究
－地域学習教材の開発に向けて－

正会員○鞍打 大輔*
同　後藤 春彦**

1. 研究の背景と目的

山梨県早川町は南アルプスの南東に位置する、典型的な中山間地である。平成8年、早川町は町制40周年を迎え、長期総合計画において「日本・上流文化圏構想」を打ち出した。同年4月から日本上流文化圏研究所も開設し、少しずつではあるが地域づくりの活動が展開されている。その中でも特に、今後の上流域を担っていく人材育成が非常に大切であると考えられており、子供の地域学習環境の整備や地域学習教材の開発に取り組み始めている。

そこで本研究では、子供の地域学習環境の整備や早川町独自の地域学習教材の開発に向けての基礎研究として、子供達の地域学習環境の現状を把握し、問題点や課題点を明かにすることを目的としている。なお今回は、日記調査と行動範囲調査のみを掲載した。

調査対象は、早川町に2校ある小学校のうち早川南小学校（平成8年度、全校児童49人）とした。

2. 日記調査

子供の普段の生活から、地域学習環境の現状を探るために、子供達が先生に提出している日記を分析した[注1]。

(1) 話題

日記の話題となっている場所に注目し、3つの生活環境（学校・地域・家庭）に分類した（図1参照）。

話題の重複具合が最も多かった「学校」では、吹奏楽活動[注2]に関する内容が4割を占めている。また、最も少なかった「地域」では、自然環境に関する話題は学年が上がるにつれ減少する傾向にあり、5,6年生ではほとんど見られない。「家庭」では話題の共通性が低いため、「その他」が多くなった。

(2) 登場人物

登場人物を抽出し分類、分析した（図2参照）。

最も多いのは「南小の友達」で、次に「家族」となっている。「南小の友達」の中では同級生の登場回数が最も多いが、1～6年生まで全学年の子供達が登場している。「先生」も同様にほぼ全員が登場し、少人数の学校らしい傾向がうかがえる。

(3) 地名・場所

地名・場所を抽出し分類、分析した（表1参照）。

町外の地名の登場回数は、総回答数58回のうち51回と非常に多い。町外のなかでは県内より県外の地名が約4倍多く、近隣の県が中心ではあるが全国に広がっている。場所では、ホテル、遊園地、テーマパークなどが多く、自然環境は少ない（表2参照）。

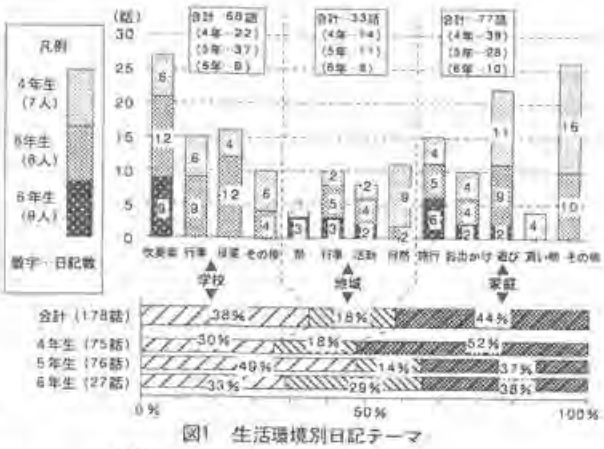


図1　生活環境別日記テーマ

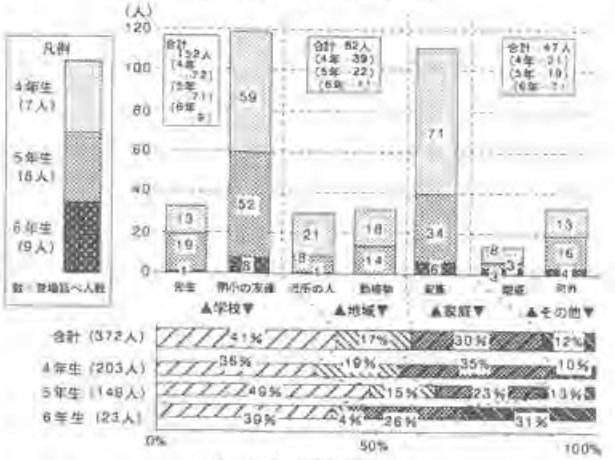


図2　生活環境別登場人物

県内では、身延、飯富、市川大門といった近隣町村から甲府市などの中心市街地まで多岐にわたる。場所も、遊園地、湖、塾、ショッピングセンターと様々で、休日を町外で過ごすだけでなく、日常の生活行為も町外にあふれ出しているといえる。

一方町内の地名の登場回数は58回中7回と非常に少ない。場所では学校関係の施設が多く、次に家の周辺、特に公民館などの町の施設となっている（表3参照）。反面、山や川といった自然環境に関する場所は少なく、町

A study on children's learning environment through experiencing the locality in Hayakawa town, Yamanashi prefecture.
-Developing teaching program for locality learning through experience-

KURAUCHI Daisuke et al

表1　登場地名分類

生活環境	地名	6年	5年	4年	合計
町内	集落名	1	2	4	7
	赤井　夏秋　小縄　茅葺　高住　等				
町外	県内	2	4	5	11
	甲府　市川大門　山梨　身延　等				
	東京	6	3	0	9
	品川　新宿　千代田城　等				
	神奈川	0	1	1	2
	横浜　八景島　鎌倉　等				
	静岡	7	7	0	14
	浜松　伊豆　等				
	埼玉	1	0	2	3
	所沢				
	長野	0	3	0	3
	飯田				
	その他	3	6	0	9
	群馬　長崎　北海道　大阪　等				
	小計	19	24	8	51
	合計	20	26	12	58

■単位…回

表2　登場場所名分類

	場所	6年	5年	4年	合計
町外	レジャー施設	4	11	5	20
	遊園地　テーマパーク　ホテル　等				
	文化施設	4	3	7	14
	水族館　動物園　美術館博物館　等				
	名所	1	4	2	7
	東京ドーム　ランドマークタワー　等				
	自然へ	3	8	0	11
	海　川　高原　等				
	買い物	1	0	5	6
	ユマ　くろがねや　ヤギノ　ジョート　等				
	生活密着	0	4	7	11
	塾　ピアノ　病院　等				
	その他	3	8	18	29
	合計	16	34	37	87

■単位…回

表3　登場場所名分類

	場所	6年	5年	4年	合計
町内	学校	2	20	31	53
	教室　体育館　中学校　プール　等				
	家の周辺	6	7	25	38
	公民館　駅　花畑　近くの家　等				
	自然	0	7	4	11
	川　河原　山　空と地面がつながった感じ台　等				
	その他	2	11	14	27
	ヘルシー家里　保育園　交通安全センター　等				
	合計	10	45	74	129

■単位…回

内での生活は集落内のみというような狭い範囲に留まっている。

3. 行動範囲調査

行動範囲から子供の地域体験を探るために、「大人がよく連れていってくれるところ」「今までで最も楽しかった事柄」を調査した[注3]。

(1) 大人同伴の行動における特性

表4より、町内の場所より町外の場所を挙げた子供が圧倒的に多いことがわかる。しかも、町外の中でも「買い物」が最も多い内容になっていて、次に遊園地などである。ここでも日記調査と同様に、海など自然の場所を挙げた子供は少数であった。

(2) 子供の価値観と行動のギャップ

表5よりここでも、町内の場所より町外の場所を挙げた子供たちが圧倒的に多く、ほとんどの子供が町外に楽しみを求めていることがうかがえる。

また表4,5を比較してみると、表4より表5では「買い物」という回答は減少している。これは、必ずしも子供は買い物に行くことを望んでいないことを示している。また町内の回答では「釣り」という回答が表4より表5の方で多く見られる。

4. まとめ

子供達が地域社会や地域の自然環境に接する機会が非常に乏しいことや、子供達も親達も大半が都会や町外に目が向いていること、さらには日常生活も町外に依存していることが明らかになった。その反面、釣りなど地域の自然の中に楽しみを見いだしていたり求めている子供がいることも分かった。

日本上流文化圏研究所の今後の取り組みとして、子供が自らの体験を通し地域を学ぶことが出来る環境の整備の必要性があげられる。幸い学校が子供同士の生活の核となっていることも明らかにされたので、研究所と学校との協力も重要になってくるであろう。

表4　大人がよく連れていってくれる場所

集落名	学年	性別	大人がよく連れていってくれる場所	町外	買物	遊園地	自然へ	町内	自然へ
小縄	5年	女	夏は海、冬は遊園地	●●		○	○		
	5年	女	買物	●	○				
	2年	女	買物	●	○				
青梨	6年	男	買物	●	○				
	6年	女	海、遊園地	●●		○	○		
	5年	男	海、富士急ハイランド	●●		○	○		
	5年	女	買物	●	○				
	4年	女	無回答						
	3年	男	川に釣り					●	○
	3年	女	買物	●	○				
	2年	男	中富の信号の所	●					
	2年	男	買物	●	○				
	1年	女	川で釣り					●	○
浜原	6年	男	旅行	●					
	5年	女	スキー場、買物、プール	●●●	○	○○			
	4年	女	スキー場	●		○			
	3年	女	池川の白藤里ちゃんの家、クラフトパーク	●●					
	1年	女	家まり出かけない						
羽衣	2年	男	無回答						
	1年	男	無回答						
	1年	女	買物	●					
	1年	女	無回答						
倉沢	4年	男	買物	●	○				
	4年	女	遊園地、公園	●●		○○			
	2年	女	無回答						
千頭和	5年	男	無回答						
東之上	5年	女	祖父さんの家に花火を見に行く						
	4年	女	おばちゃんの家						
大島	6年	女	夏は海が長岡、冬はスキー場	●●		○	○		
	5年	男	無回答						
	3年	男	クラフトパーク	●					
久田子	6年	女	ショッピングセンター、プール、映画館	●●●	○	○○			
	6年	女	川、ショッピングセンター	●	○		○	●	○
	4年	女	買物	●	○				
	3年	男	買物、川	●	○		○	●	○
	1年	男	ショッピングセンター	●	○				
戸隠	2年	男	ショッピングセンター	●	○				
老平	5年	男	お兄ちゃんのところ						
北村	3年	男	ショッピングセンター	●	○				
	1年	女	ショッピングセンター	●	○				
殿村	6年	男	川に釣り					●	○
	6年	男	オモチャ屋	●	○				
	4年	女	ショッピングセンター	●	○				
	3年	男	買物	●	○				
	3年	女	買物	●	○				
	2年	男	白いたい炭にいる					●	
	2年	男	ショッピングセンター	●	○				
	2年	女	買物	●	○				
宮ヶ島	1年	男	公園	●					
			合計（回）	45	22	11	4	9	3

表5　最も楽しかった事柄

集落名	学年	性別	最も楽しかった事柄	町外	遊園地	ゲーム	自然へ	町内	自然へ
小縄	5年	女	泊まりに行って遊んだこと						
	5年	女	遊園地でいろんな乗り物に乗った	●	○				
	2年	女	ゲームで遊んだ			○			
青梨	5年	男	無回答						
	5年	女	遊園地でいろんな乗り物に乗った	●	○				
	5年	男	富士急ハイランドでジェットコースターに乗った	●	○				
	5年	女	買物	●	○				
	4年	女	ハ景島シーパラダイスに行った	●	○				
	3年	男	川に行った					●	○
	3年	女	ゲームセンター	●		○			
	2年	男	川で魚を取った					●	○
	2年	男	東京ドームに行った	●	○				
	1年	女	川で泳いだ					●	○
浜原	6年	男	コスモボールでボーリングをした	●	○				
	5年	女	夜叉でスキーをした	●			○		
	4年	女	スキー場で夜景に連った	●			○		
	3年	女	三代市公園でパンダの乗り物に乗った	●	○				
	1年	女	海岸に泊まりに行った	●					
羽衣	2年	男	海に行った	●			○		
	1年	男	無回答						
	1年	女	ない						
	1年	女	無回答						
倉沢	4年	男	クラフトパークで遊んだ	●	○				
	4年	女	遊園地でジェットコースターに乗った	●	○				
	2年	女	サンリオフェスティバル	●	○				
千頭和	5年	男	無回答						
東之上	5年	女	海で花火を見てきれいだった						
	4年	女	ハ景島シーパラダイスに行った	●	○				
大島	6年	女	海釣り	●					
	5年	男	無回答						
	3年	男	クラフトパークの遊具	●	○				
久田子	6年	女	ホテルのプールで泳いだ	●					
	6年	女	川で魚釣り					●	○
	4年	女	遊園、デパート	●	○				
	3年	男	川で釣り					●	○
	1年	男	デパートの遊具やゲームセンター	●		○			
戸隠	2年	男	川でキャンプ					●	○
老平	5年	男	花火						
北村	3年	男	八王子のレインボープールに行った	●	○				
	1年	女	ゲーム			○			
殿村	6年	男	釣り					●	○
	6年	男	遊園地でおばけ屋敷に行った	●	○				
	4年	女	東京に行った	●					
	3年	男	川で釣り						
	3年	女	ウオハンでゲーム	●		○			
	3年	男	海で泳いだ	●			○		
	2年	男	釣りとゲーム					●	
	2年	女	海で泳いだ	●			○		
宮ヶ島	2年	男	海で枝遊び					●	○
			合計（回）	28	11	6	5	9	6

注1：先生と7/4/4～9/23にやり取りされた4年生（7人）…75話・5年生（8人）…76話・6年生（5人）…27話・合計…178話の日記を調査対象とした。
注2：何小では、20年ほど前から吹奏楽活動に力を入れており、4年生以上は放課後毎日のように練習がある。
注3：7/8/1.3に全校児童49人にアンケート形式（大人と　複数回答可、楽しかった…一問一答）で調査し、全て回収した。

＊　早稲田大学大学院修士課程　Graduate School,Dept.of Architecture,Waseda univ.
＊＊　早稲田大学助教授・工学博士　Assoc.prof.,Dept.of Architecture,Waseda univ.,Dr Eng.

2 研究論文

「山梨県早川町における子どもの地域学習環境に関する研究」
「中山間地域の寺院が移住に果たす役割に関する研究」
「中山間地域におけるまちづくり中間セクターのあり方に関する研究」
「まちづくり学習から見た地域学習の可能性と限界に関する研究」
「福祉空間としての道に関する考察」

■フクジュソウ（キンポウゲ科）２～３月
高さ５～10cmくらいの茎に黄色い花をつける。早川には、３箇所の自生地がある。

平成８年度　学生研究員研究論文

山梨県早川町における子どもの地域学習環境に関する研究

～ 地域学習教材の開発に向けて ～

鞍打　大輔
平成８年度早稲田大学卒業論文

第１章　はじめに

1-1. 研究の背景

山梨県早川町は、南アルプスの南端に位置し、高く険しい山々の緑と、そこから流れ出す早川の豊かな水によって、独自の山村文化を育んできた。しかし、戦後の相次ぐ水力発電所の建設や、農林業の衰退によって大自然は原形をとどめていない。そのうえ多くの住民が町を出て、一時、１万人近くいた人口も、現在では２千人程度である。当然子どもの数も急速に減少し、学校の統廃合が進められた。現在、小学校が２校、中学校は１校となっている。

平成８年に早川町は町制40周年を迎え、町の長期総合計画で「日本・上流文化圏構想」を打ち出した。同年４月から「日本上流文化圏研究所」（以下、「研究所」）も開設し、早川町や全国の上流域の地域づくりを考え、さらにはそこに生きる哲学を模索し始めている。そして「研究所」の活動テーマの中に、これからの上流域を担う人材の育成が掲げられている。現在の早川町をはじめ全国の中山間地域では、子どもたちが地域の価値を良く理解し、そこに生きる意味を見出すことができるような環境づくりが切に望まれているのである。

1-2. 研究の目的

本研究では、地域学習教材の開発に向けて、早川南小学校の子どもたちの地域学習環境の現状を把握すること。また、問題点・課題点を明らかにし、地域学習環境や地域学習教材のあり方を提案をすることが目的である。

1-3. 研究の方法

まず、子どもの普段の生活から、地域学習環境の現状を探るために、普段、子どもたちが先生とやりとりをしている日記を分析する「日記調査」を行う。この調査では日記を生活環境、登場人物、地名・場所の３つのフィルターにかけ、それぞれの特性を探る。

次に遊びに注目する「遊び内容調査」を行う。この調査では子どもと大人それぞれに遊び内容に関するアンケート調査を行い、そこから歴史的な遊び内容の変遷を探る。また生活環境の変化が遊びに与えた影響も検証する。

最後に、現在の子どもたちの早川町内、町外の行動範囲を明らかにし、場所の共有性を探るために、「子どものみの行動範囲調査」と「大人同伴の行動範囲調査」を行う。また子どもの価値観と行動のギャップを明らかにするために、「子どもの価値観調査」を行う。

1-4. 研究のフロー

第１章　はじめに
1.研究の背景
2.研究の目的
3.研究の方法
4.研究の構成

第２章　研究対象地の概要
1. 早川町の子供達の概要
2. 早川南小学校の概要

第３章　日記調査
1.生活環境
2.登場人物
3.地名・場所
▼
4小括

第４章　遊び内容調査
1. 現在の子供の遊び
2. 過去の子供の遊び
▼
3.遊びの変遷
4. 生活環境と遊びの関係
▼
5小括

第５章　行動範囲調査
1. 子供の行動範囲
2. 大人との行動範囲
3. 子供の価値観
▼
4.場所共有性
5. 価値観と行動のギャップ
▼
6小括

第６章　まとめ
1.　対象地における地域学習環境の現状と問題点
2.　地域学習環境及び地域学習教材への提案

第２章　研究対象地の概要

2-1. 早川町の子どもたちの概要

約２千人の町の人口のうち、中学生以下の子どもの人数は151人である。早川中学校は全校生徒27人、早川北小学校は29人、早川南小学校は49人と、どれも少人数の学校である。現在子どもはさらに減少しつつあり、どの学校も少人数化に頭を抱えている（図2-1参照）。

図2-1.早川町の子どもの概要

2-2. 早川南小学校の概要

早川南小学校は、本建地区の角瀬という集落に位置し、五箇地区、本建地区、硯島地区と都川地区の一部を校区としている。校区内には30弱の集落があるが、そのうち14集落から男子24人、女子25人、計49人の子どもたちが通学している。家から学校までの距離がある子どもはスクールバスで通学し、その他の子どもの多くも親が自動車で送迎するといった現状で、歩いて通学する子どもは非常に少ない。

また同小では、20年程前から吹奏楽に力を入れており、4年生以上は吹奏楽の練習が放課後毎日のように行われている。

角瀬という集落は、学校の横に春木川が流れ、裏には七面山を抱えた景観的に素晴らしい要素を持っているが、砂利採取場があったり、新しく七面山への登山口が開かれたために、現代的な旅館が立ち並び、早川町らしい景観を残しているとはいえない。現在、３億円をかけて、音楽ホールを持った近代的な新校舎を建設中である。

第３章　日記調査

学校で先生と子どもたちが普段やりとりしている日記を調査した。日記調査の対象学年は、自分の考えが日記から読み取れるようになる４年生から６年生の24人とし、平成８年４月４日から９月23日までに書かれた、全178話を調査対象とした。

3-1. 生活環境

日記に書かれている内容を、３つの生活環境（学校・地域・家庭）に分類した（表3-1参照）。

３つの中で最も少なかったのは地域の中での出来事である。その中でも集落単位での祭に関する内容

表3-1　生活環境別日記テーマ分類

生活環境	日記のテーマ	6年	5年	4年	合計
学校	吹奏楽	9	12	6	27
	演奏会	8	7	3	18
	練習合宿	1	3	1	5
	その他	0	2	2	4
	行事	0	9	6	15
	縄文土器づくり	0	4	3	7
	演劇鑑賞会	0	3	0	3
	その他	0	2	3	5
	授業	0	12	4	16
	その他	0	4	6	10
	小計	9	37	22	68
地域	祭	3	0	1	4
	赤沢千灯祭	2	0	0	2
	雨畑湖上祭	1	0	0	1
	高住のお祭り	0	0	1	1
	行事	3	5	2	10
	品川旅行	3	3	0	6
	町内めぐり	0	0	1	1
	その他	0	2	1	3
	活動	2	4	2	8
	そば打ち会	0	3	2	5
	その他	2	1	0	3
	自然	0	2	9	11
	猪を見た　サクランボ取りに行った ツバメの雛が生まれた　夏の山と冬の山の話 キノコ狩りに行った　クルミ取りに行った　等				
	小計	8	11	14	33
家庭	旅行	6	5	4	15
	東京　横浜　長野　新潟　北海道　大分 おばあちゃんの家　家族旅行　海　等				
	お出かけ	2	4	4	10
	富士急ハイランド　河口湖　市川大門　四尾連湖 花火大会　クラフトパーク　ボーリング　等				
	遊び	2	9	11	22
	ファミコン　キャッチボール　かくれんぼ 自転車　バスケットボール　トランプ　等				
	買い物	0	0	4	4
	コマ　オギノ　Jマート等				
	その他	0	10	16	26
	小計	10	28	39	77
合計		27	76	75	178

■単位…話

は4話であった。これは、祭などを通して地域社会が果たしていた「地域を担う人材の育成」という機能を果たせなくなってしまったことを示している。

また、地域の自然環境下での出来事や遊びは学年が上がるにつれて減少傾向にあり、5年生以上ではほとんど見つからない。5年生と言えば一般的に、自分の考えや価値観を持ち出す頃と言われているが、いかに子どもたちが自然環境に関心がないかが良く現れている結果となった。

日記に書かれた話題の重複具合を見ると、学校での出来事に重複がよく見られ、地域、家庭での出来事ではほとんど重複は見られない。これは子ども同士が話題を共有できる生活環境は学校のみであることと、集落や家庭に戻ってからは、他の子どもと接触することが少ないことを示している。同小では4年生以上は吹奏楽の練習が放課後ほぼ毎日あるために、家に帰ってから遊びに出かける時間が無いことも理由の一つである。逆に重複した話題の中に、吹奏楽に関する内容は学校でのテーマの4割を占めるほど多くなっている。

3-2. 登場人物

日記に登場する人物を抽出し分類、分析した（表3-2参照）。

登場回数が最も多かったのは、南小の友達であり、次に家族であった。ここでも近所のお兄さんなど、地域社会の人の登場回数は少なく、さらに動植物よりも登場回数が少ないことは、深刻な状況を表している。

南小の友達の中では同級生の登場回数が最も多いが、その他にも1年生から6年生まで全学年が登場している。先生も担任の先生だけではなく、ほとんどの先生が登場しており、少人数の学校らしい傾向がうかがえる。

表3-2　生活環境別登場人物分類

生活環境	登場人物	6年	5年	4年	合計
家庭	家族	6	34	71	111
	祖父母	3	3	4	10
	両親	0	22	33	55
	兄弟	0	5	30	35
	その他	3	4	4	11
学校	先生	1	19	13	33
	南小の友達	8	52	59	119
	同級生	1	20	22	43
	上級生	0	10	22	32
	下級生	3	10	10	23
	その他	4	12	5	21
	小計	9	71	72	152
地域	近所の人	1	8	21	30
	大ちゃん(僕のこと)	0	0	2	2
	大人	1	2	8	11
	近所の兄ちゃん	0	3	3	6
	子ども	0	2	7	9
	その他	0	1	1	2
	動植物	0	14	18	32
	猪　山羊　蛍　コウモリ　向日葵　ヘチマ　等				
	小計	1	22	39	62
その他	親戚	3	3	8	14
	町外	4	16	13	33
	小計	7	19	21	47
合計		23	146	203	372

■単位…回

3-3. 地名・場所

日記に登場する地名・場所を抽出し、分類した（表3-3参照）。

町外の地名の登場回数は、58の総回答数のうち51回と非常に多く、さらに県内より県外の方が約

表3-3　登場地名分類

生活環境	地名	6年	5年	4年	合計
町内	集落名	1	2	4	7
	赤沢　夏秋　小縄　薬袋　高住　等				
町外	県内	2	4	5	11
	甲府　市川大門　山梨　身延　等				
	東京	6	3	0	9
	品川　新宿　千代田橋　等				
	神奈川	0	1	1	2
	横浜　八景島　箱根　等				
	静岡	7	7	0	14
	浜松　伊豆　等				
	埼玉	1	0	2	3
	秩父				
	長野	0	3	0	3
	諏訪				
	その他	3	6	0	9
	群馬　新潟　北海道　大分　等				
	小計	19	24	8	51
	合計	20	26	12	58

■単位…回

表3-4　登場場所名分類

	場所	6年	5年	4年	合計
町外	レジャー施設	4	11	5	20
	遊園地　テーマパーク　ホテル　等				
	文化施設	4	3	7	14
	水族館　動物園　楽器博物館　等				
	名所	1	4	2	7
	東京ドーム　ランドマークタワー　等				
	自然へ	3	8	0	11
	海　川　温泉　等				
	買い物	1	0	5	6
	コマ　くろがねや　オギノ　Jマート　等				
	生活密着	0	4	7	11
	塾　ピアノ　病院　等				
	その他	3	8	18	29
	合計	16	34	37	87

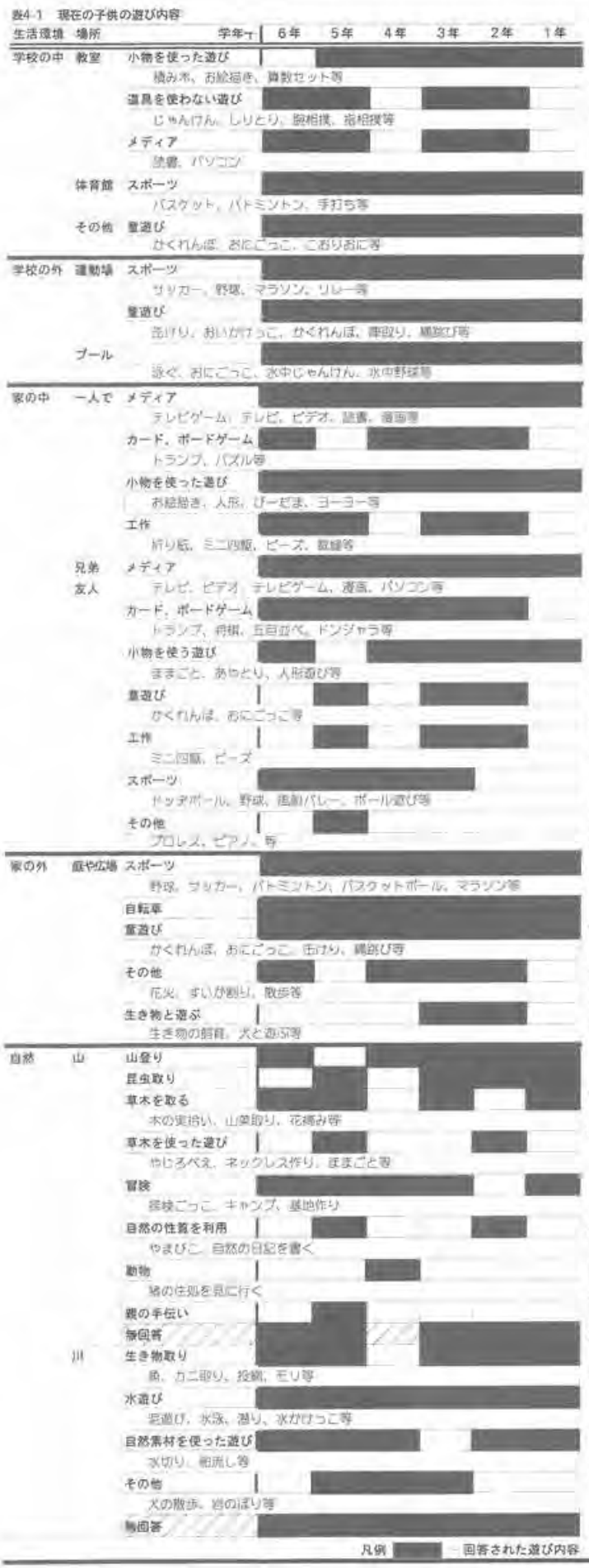
■単位…回

表3-5　登場場所名分類

	場所	6年	5年	4年	合計
町内	学校	2	20	31	53
	教室　体育館　中学校　プール　等				
	家の周辺	6	7	25	38
	公民館　庭　花壇　近くの家　等				
	自然	0	7	4	11
	川　河原　山　空と地面がつながった滑り台　等				
	その他	2	11	14	27
	ヘルシー美里　保育園　交流促進センター　等				
	合計	10	45	74	129

■単位…回

表4-1　現在の子供の遊び内容



4倍多くなっていて、東京、神奈川、静岡などの隣県を中心に、北海道から九州まで広がっている。場所では、ホテル、遊園地、テーマパークなどが多く、逆に海などの自然環境は少ない（表3-4参照）。

県内では、身延、飯富、市川大門といった比較的近くの地名から甲府市、山梨市などの距離の離れた地名まで多岐にわたる。場所も、遊園地、湖から塾、ショッピングセンターと様々で、休日を町外で過ごすだけでなく、日常生活も町外にあふれ出していることがわかる。

一方町内の地名の登場回数は58回中7回と、非常に少ない。場所では学校関係の施設が多く、次に家の周辺、特に公民館などの公共的な施設が多くなっている（表3-5参照）。反面、山や川といった自然環境に関する場所は少なく、町内での生活は集落内のみというような、小さな範囲に留まっているといえる。

3-4. 小括

以上の日記調査から、集落などの地域社会に活力が無くなっていること、町内の自然に接する機会が子どもたちに乏しいこと、子どもたちも親達も大半が都会に目が向いていることなどの地域学習環境の問題点が読み取れた。

この後、4章では、子どもが自ら体験したり自然や人と触れ合うことから生まれる地域学習の1つとして「遊び」を、5章では、都会の生活に憧れを抱いている子どもの実際の「行動」を切り口に、子どもの地域学習環境について、より深く追求していく。

第4章　遊び内容調査

4-1. 現在の子どもの遊び内容に見られる特性

現在の子どもたちが普段どのような遊びをしているのかについて、アンケート調査を行った（表4-1参照）。アンケート実施日は平成8年8月13日で、全校生徒49人に配布し全てを回収した。アンケートの形式としては遊ぶ場所として学校、家庭、自然の3つの欄を設け、複数回答可で自由に記入してもらった。

結果からいえることは、学校、家庭で遊ぶことは多いが、自然の中で遊ぶことは少ないということである。

学校では、体育館や運動場で遊ぶことが多い。種類を見ると体育館、運動場の両方でス

ポーツがほとんどである。特に体育館では、遊ぶ回数は多い反面、種類は少なくなっている。これは子どもがいかに同じ遊びしかしていないかを表している。その他に、注目すべき遊び内容はなく、都会の子どもたちとなんら変わりはないといって良いであろう。

家庭では、ファミコンなどのテレビゲームが多くテレビ、ビデオなどのメディア関係、トランプなどのカード、ボードゲームも目立つ。家の周りでは自転車、スポーツが多い。この項目にも注目すべき遊び内容はなく、家庭での遊びに関しても、都会化が進んでいるといえる。

自然の中の遊びは、「遊んだことがない」という回答が見られたり、種類も非常に少なく子どもたちの自然離れが深刻であることがうかがえる。その中でも、僅かではあるが、自然の草木や動物を相手にした遊びもあったことは望ましい点である。

4-2. 過去の子どもの遊び内容に見られる特性

小学生時に早川に住んでいた早川町役場に勤める18歳から58歳までの人に、小学生の頃の遊びについてアンケート調査を行った（表4-2参照）。調査日は平成8年10月31日で、10代から50代までの50人に配布し、25人から回収した。アンケート形式は学校、家庭、地域を含んだベースマップを季節ごとに4枚配布し、自由記入形式で行った。

50歳代に見られる特徴は、まずどこの場所でも遊びの種類が非常に多いことである。それから食材探しなど親の手伝いを兼ねた遊び内容が多いこと、また集落のお祭りなどが登場していることである。このような結果から、遊びによって地域を学習していた年代といえる。

40歳代の遊び内容は、50歳代とあまり変化はなく、まだ自然と密着した遊びが多い。この世代も、遊びを通して地域を学んでいたといえる。

30歳代になると変化が見られる。まず、遊びの種類が非常に少なくなったことがいえる。また遊ぶ場所も学校に集中し始めている。逆に里山、河原、道での遊びは極端に減少し始めている。また、家庭での遊びにテレビという内容が現れはじめた。

18歳から20歳代では、昔からの遊びも残ってはいるが、現代の遊びの割合が多くなった点が特徴的である。学校ではスポーツが多くなり、田畑、神社・寺などでの遊びが無くなった。また、家庭ではテレビゲームや音楽鑑賞などが登場し、遊びの上での都会化が進んでいることがうかがえる。

4-3. 遊び内容の変遷

50歳代から現在残っている遊びは、鬼ごっこなどに代表される童遊びとスポーツ、漫画、そして冬の雪遊びである。逆に衰退した遊びは、里山、田畑、河原、道などでの自然を利用した遊びである。道や田畑は、30歳後半から40歳前半あたりに急激に減少した。また同時期に、神社・寺などでの遊びも減少している。

また、時代が進むにつれて、山菜取りのような食材採取を兼ねたり，草履作りなど親の手伝いを兼ねた生活と密接に関係した遊びが減少している。遊び内容に登場する草木や生き物の種類が減少していることも、憂慮される点である。

4-4. 生活様式と遊びの変化の関連性

大人への遊び内容アンケートと同時に、遊びの変化にインパクトを与えたと思われるものの調査を行った（表4-2参照）。形式はテレビや自動車といった遊びに影響を与えたと思われる物を16種挙げ、小学校時に家庭に存在した物に印を付けてもらった。

まず、テレビが普及し始めた30代世代に、遊び内容にテレビという項目が登場し、それに伴いプロレスごっこ等のテレビの影響を受けたと思われる遊びが登場してきた。テレビの普及が家庭での子どもの生活時間を長くしただけではなく、遊びの内容にも影響を与えていることがうかがえる。

次に自動車が普及し始めると、道での遊びが急激に減少しているが、これは集落間の移動手段が徒歩から自動車に移行し、道端で遊ぶ子ども達の姿が見られなくなったことを示している。さらに、現在の子どもたちは通学手段として、スクールバスや親の送迎にかなり依存している。そのために登下校時に道草をして遊ぶようなことは皆無に等しい。

最後に、クーラー、テレビゲーム、CDプレイヤーなどが普及した時期には外遊び、特に夏の外遊びが減少し、家の中での遊びが増加している。家での生活の快適さと、屋外での遊びの衰退に関係があることがうかがえる。

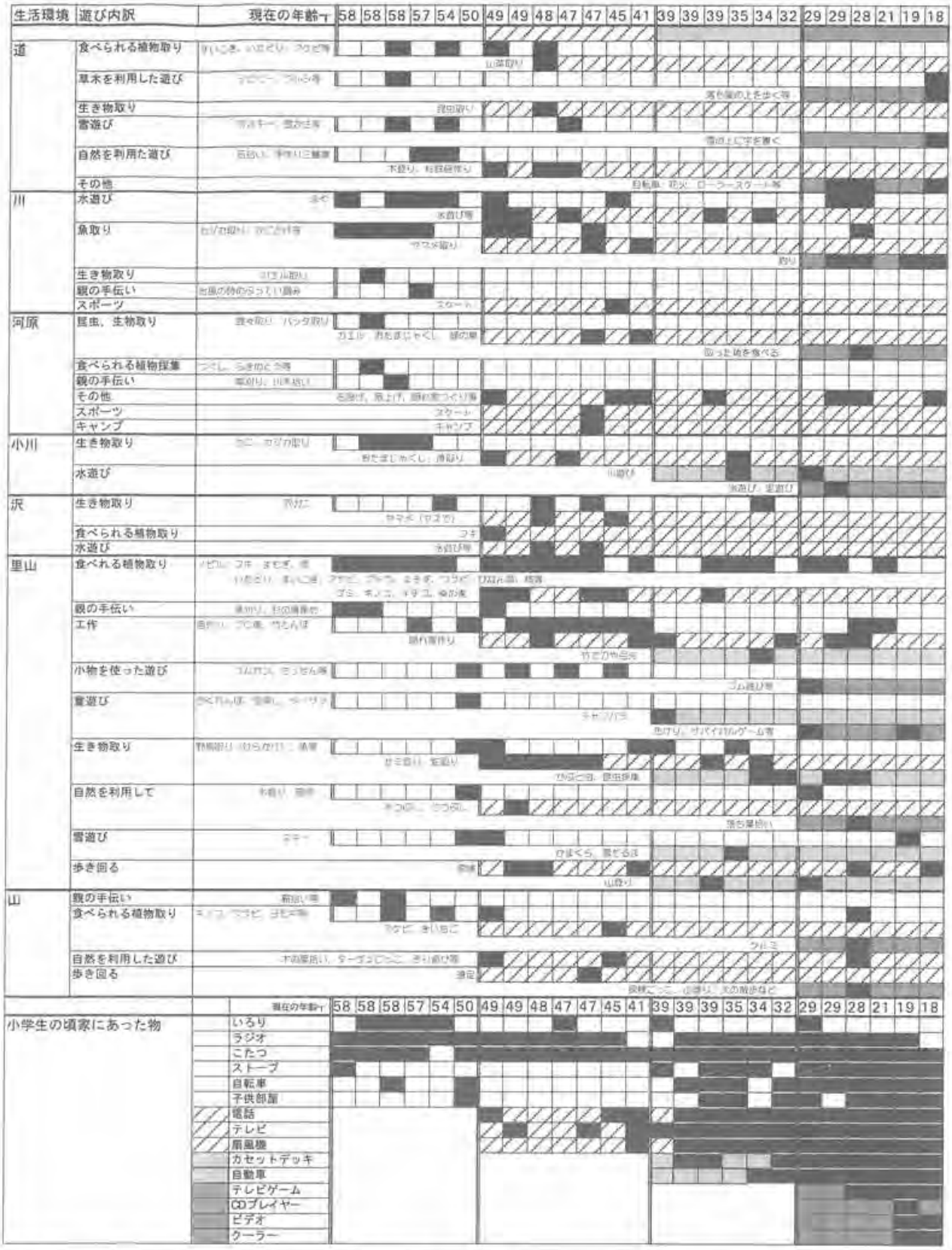
4-5. 小括

50歳代が小学生であった40年以上前から、自然を利用した遊びがかなり衰退してしまった。また、集落で祭りがなくなり、神社や寺が子どもの遊ぶ場所として身近でなくなってしまった。さらに、テレビ、自動車、その他の様々な家電製品の普及といった生活様式の都会化が、道端や田畑、里山での自然と接する機会を奪ってしまった。

表4-2　過去の子供の遊び内容

生活環境	遊び内訳	現在の年齢	58	58	58	57	54	50	49	49	48	47	47	45	41	39	39	39	35	34	32	29	29	28	21	19	18
学校の中	小物を使った遊び	お手玉、ビー玉、めんこ																									
		輪ゴム跳び等																									
		カルタ																									
	童遊び	かくれんぼ、車輪遊び、縄跳び等																									
		鬼ごっこ、お医者さんごっこ																									
	学校行事	運動会、学芸会																									
	工作	紙飛行機、紙カブト																									
		ミニ回転、ビーズ																									
	メディア	漫画																									
	スポーツ	卓球																									
		バスケットボール、バドミントン等																									
学校周辺	童遊び	石ひい、鬼ごっこ、車輪遊び																									
		かくれんぼ、ろんぱた、縄跳び、まりつき、手毬ころころ等																									
		たなばた、いろおに、お医者さん等																									
	食べられる植物取り	タケノコ掘り、ウド取り																									
	雪遊び	雪合戦、雪だるま																									
	スポーツ	バッティング、ソフトボール																									
		野球、ちょなー、スケート等																									
		プール、ラグビー、ボール、エキー																									
	小物を使った遊び	ちっさい、メンコ、お医者様																									
		縄跳び、ビー玉、ゴム跳び等																									
家の中	メディア	読書、ラジオ、雑誌、漫画																									
		テレビ																									
		テレビゲーム、カラオケ																									
	親の手伝い	掃除、洗濯、ちんべたり等																									
	カードゲーム	ちんや、花れん、ちんー遊等																									
	小物を使った遊び	あやとり、お手玉、めんこ等																									
		塗り絵																									
		ままごと、人形ごっこ、戦争ごっこ																									
	工作	新聞でカブトや財布																									
		プラモデル																									
	大人と	将棋、こいこいつぎ																									
	ボードゲーム	野球ゲーム																									
		オセロ																									
		人生ゲーム、どっつなど																									
神社・寺	お祭り	おまつり、みこし等																									
	昆虫取り	セミ取り																									
	食べられる植物取り	山菜採り																									
	草木を使った遊び	枝の束でシャボン玉																									
	童遊び	手毬ころころ、石けり等																									
		おままごと、かくれんぼ、車輪遊び、石けり等																									
	小物を使った遊び	ビー玉、ラダコ、ちっせん、ゴムたん等																									
	スポーツ	野球、野球																									
		ソフトボール、野球、ホッピング																									
集落	食べられる植物取り	柿取り																									
	小物を使った遊び	ちっせん、ゴムたん等																									
		ベタンコ、馬とび																									
		ビー玉、ゴム跳び																									
		竹馬つくりとゴルフ																									
	童遊び	鬼遊び、かくれんぼ																									
		ちゃつかり																									
		縄跳び、石けり、おけり																									
		鬼ごっこ、お医者ごっこ、ままごと等																									
	雪遊び	雪合戦、雪だるま																									
		かまくら																									
		カヌー																									
	生き物取り	蛇取り、ひらかけ																									
		とんぼ取り																									
	工作	竹とんぼ作り																									
		水鉄砲、草の水鉄砲																									
	自然を利用して	ロケット																									
	スポーツ	キャッチボール、三角ベース、テニス																									
	その他	花火																									
		回転車																									
田畑	草木での遊び	ジャンボ、田の畔でもぐり																									
	親の手伝い	田植え、草刈り、いも植え等																									
	生き物取り	蛇取り、ひらかけ																									
		とんぼ取り																									
	雪遊び	モノ遊び																									
		かまくら、雪だるま等																									
		現在の年齢	58	58	58	57	54	50	49	49	48	47	47	45	41	39	39	39	35	34	32	29	29	28	21	19	18
小学生の頃家にあった物		いろり																									
		ラジオ																									
		こたつ																									
		ストーブ																									
		自転車																									
		子供部屋																									
		電話																									
		テレビ																									
		扇風機																									
		カセットデッキ																									
		自動車																									
		テレビゲーム																									
		CDプレイヤー																									
		ビデオ																									
		クーラー																									

右頁へ続く


生活環境
遊び内訳
現在の年齢
58 58 58 57 54 50 49 49 48 47 47 45 41 39 39 39 35 34 32 29 29 28 21 19 18
道
食べられる植物取り
草木を利用した遊び
生き物取り
雪遊び
自然を利用した遊び
その他
川
水遊び
魚取り
生き物取り
親の手伝い
スポーツ
河原
昆虫、生物取り
食べられる植物採集
親の手伝い
その他
スポーツ
キャンプ
小川
生き物取り
水遊び
沢
生き物取り
食べられる植物取り
水遊び
里山
食べられる植物取り
親の手伝い
工作
小物を使った遊び
童遊び
生き物取り
自然を利用して
雪遊び
歩き回る
山
親の手伝い
食べられる植物取り
自然を利用した遊び
歩き回る
小学生の頃家にあった物
現在の年齢
58 58 58 57 54 50 49 49 48 47 47 45 41 39 39 39 35 34 32 29 29 28 21 19 18
いろり
ラジオ
こたつ
ストーブ
自転車
子供部屋
電話
テレビ
扇風機
カセットデッキ
自動車
テレビゲーム
CDプレイヤー
ビデオ
クーラー
凡例
50歳代の人が小学生だった頃に既にあった遊び、物
40歳代の人が小学生の頃に登場したと思われる遊び、物
30歳代の人が小学生の頃に登場したと思われる遊び、物
18歳～20歳代の人が小学生の頃に登場したと思われる遊び、物
回答された遊び内容、物

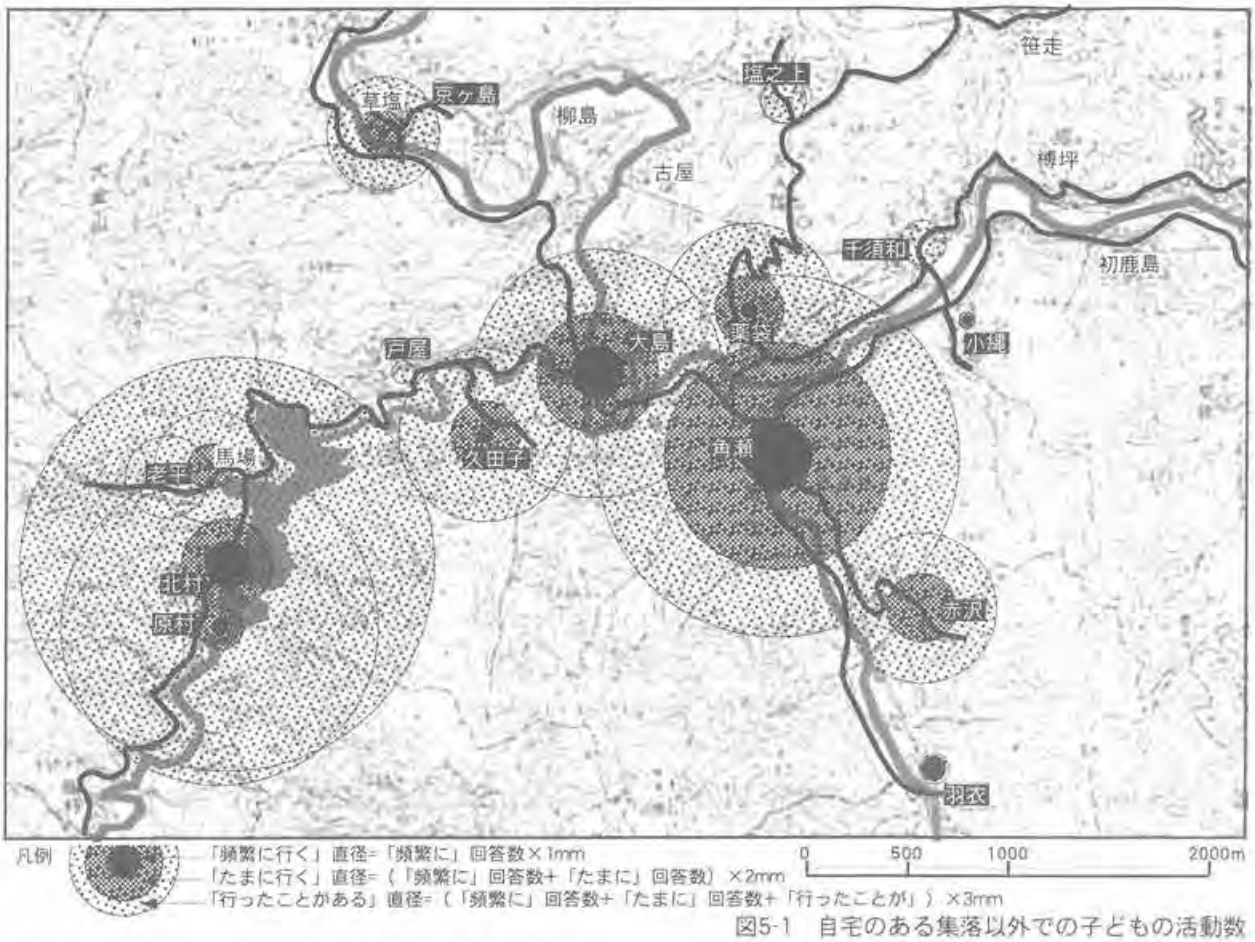


図5-1　自宅のある集落以外での子どもの活動数

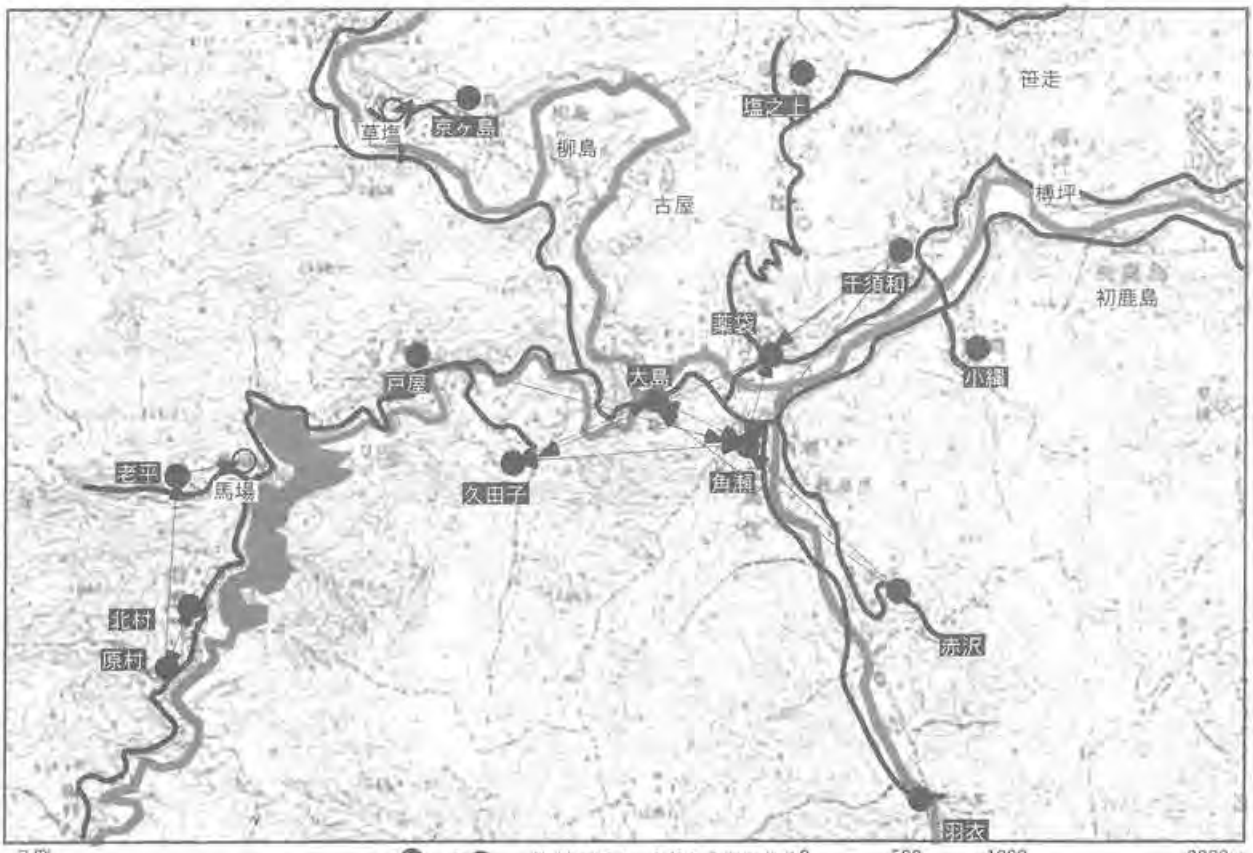


図5-2　「頻繁に行く」集落のベクトル

その傾向は、30歳代の世代から現れ始めているが、その世代というのは現在やこれからの子どもたちの親にあたる世代である。その世代の人々が既に自ら地域を体験するような遊びを経験していないということは、親世代から子どもへの地域を学習できるような遊びの継承は、非常に困難であることを示している。

第5章　行動範囲調査

子どものみの行動範囲、大人がよく連れていってくれるところ、今までで最も楽しかった事柄を、全てアンケート形式で同時に調査した。調査実施日は平成8年8月13日で、全学年の49人に配布し全て回収した。

5-1. 子どものみの行動における特性

子どもだけで行ったことがある集落を、「頻繁に行く」「たまに行く」「行ったことがある」の3つの段階別に調査し、子どもの行動範囲や活動状況を明らかにした（図5-1,2参照）。

どの段階に関しても、「無い」という回答が最も多かった。子どもだけではあまり、集落外に出ないということである。特に南アルプス街道から離れた集落では、子どもだけでの移動はほとんど見られない。逆に街道沿いでは多少移動が見られる。全体で見ると、行動の核となっている集落は、角瀬、大島、原村などである。その中でも角瀬、大島は頻繁に子どもが活動していて、生活の核となっているといえる。原村は、「行ったことがある」の回答が多く、生活の核よりは、町内の人にとっても観光地的な意味あいを持っているといえる。

また、行動のベクトルは街道や角瀬、大島など中心に向かっていて、子どもがいない外側の集落への行動の広がりは見られない。

5-2. 大人同伴の行動における特性

大人が、よくどこに連れていってくれるかについて質問し、複数回答可で調査を行った（表5-1参照）。表より、町内の場所より町外の場所を挙げた子どもが圧倒的に多いことがわかる。しかも、町外の中でも「買い物」が最も多い内容になっている。その次に遊園地などである。ここでも日記調査と同様に、海など自然の場所を挙げた子どもは少数であった。町内での行動はほとんど「川に釣り」であり、子どもに町内での他の楽しみ方を伝えている親はあまりいない。

5-3. 子どもの価値観に見られる特性

子どもに今まで行ったところで最も楽しかった事柄について、一問一答形式で調査を行った（表5-2参照）。

ここでも、町内の場所より町外の場所を挙げた子どもたちが圧倒的に多く、ほとんどの子どもたちが

表5-1　大人がよく連れていってくれる場所

集落名	学年	性別	大人がよく連れていってくれる場所	町外	買物	遊園地	自然へ	町内	自然へ
小縁	5年	女	夏は買物、冬は遊園地	●●		○	○		
	5年	女	買物	●	○				
	2年	女	買物	●	○				
角瀬	6年	男	買物	●	○				
	6年	女	海、遊園地	●●		○	○		
	5年	男	海、富士急ハイランド	●●		○	○		
	5年	女	買物	●	○				
	4年	女	無回答						
	3年	男	川に釣り					●	○
	3年	女	買物	●	○				
	2年	男	中富の祖母の家	●					
	2年	男	買物	●	○				
	1年	女	川で釣り					●	○
赤沢	5年	男	旅行	●					
	5年	女	スキー場、買物、プール	●●●	○	○○			
	4年	女	スキー場	●		○			
	3年	女	靖川の祖母ちゃんの家、クラフトパーク	●●					
	1年	女	あまり出かけない						
羽衣	2年	男	無回答						
	1年	男	無回答						
	1年	女	自室	●					
	1年	女	無回答						
東原	3年	男	買物	●	○				
	4年	女	遊園地、公園	●●		○○			
	2年	女	無回答						
千頭町	5年	男	無回答						
塩之上	5年	女	お父さんの実家に花火を見に行く						
	4年	女	おばちゃんの実家						
大島	6年	女	夏は海か高原、冬はスキー場	●●		○	○		
	5年	男	無回答						
	3年	男	クラフトパーク	●					
久田子	6年	女	ショッピングセンター、プール、映画館	●●●	○	○○			
	6年	女	川、ショッピングセンター	●	○		○	●	○
	4年	女	買物	●	○				
	3年	男	買物、川	●	○		○	●	○
	1年	男	ショッピングセンター	●	○				
戸屋	2年	男	ショッピングセンター	●	○				
吉平	5年	男	お兄ちゃんのところ						
北村	3年	男	ショッピングセンター	●	○				
	1年	女	ショッピングセンター	●	○				
原村	6年	男	川に釣り					●	○
	6年	男	オモチャ屋	●	○				
	4年	女	ショッピングセンター	●	○				
	3年	男	買物	●	○				
	3年	女	買物	●	○				
	3年	男	だいたい家にいる					●	
	2年	男	ショッピングセンター	●	○				
	2年	女	買物	●	○				
花ヶ島	2年	男	公園	●					
			合計（回）	45	22	11	4	6	5

表5-2　最も楽しかった事柄

集落名	学年	性別	最も楽しかった事柄	町外	買物	遊園地	ゲーム	自然へ	町内	自然へ
小縁	5年	女	泊まりに行って遊んだこと							
	5年	女	遊園地でいろんな乗り物に乗った	●		○				
	2年	女	ゲームで遊んだ				○			
角瀬	6年	男	無回答							
	6年	女	遊園地でいろんな乗り物に乗った	●		○				
	5年	男	富士急ハイランドでジェットコースターに乗った	●		○				
	5年	女	買物	●	○					
	4年	女	八景島シーパラダイスに行った	●		○				
	3年	男	川に行った						●	○
	3年	女	ゲームセンター	●			○			
	2年	男	川で魚を取った						●	○
	2年	男	東京ドームに行った	●		○				
	1年	女	川で泳いだ						●	○
赤沢	5年	男	コスモボールでボーリングをした	●		○				
	5年	女	長野でスキーをした	●				○		
	4年	女	スキー場で夜雪に遊った	●				○		
	3年	女	三代南公園でパンダの乗り物に乗った	●		○				
	1年	女	旅館に泊まりに行った	●						
羽衣	2年	男	海に行った	●				○		
	1年	男	無回答							
	1年	女	ない							
	1年	女	無回答							
東原	4年	男	クラフトパークで遊んだ	●		○				
	4年	女	遊園地でジェットコースターに乗った	●		○				
	2年	女	サンリオフェスティバル	●		○				
千頭町	5年	男	無回答							
塩之上	5年	女	外で花火を見てきれいだった							
	4年	女	八景島シーパラダイスに行った	●		○				
大島	6年	女	海釣り	●						
	5年	男	無回答							
	3年	男	クラフトパークの遊具	●		○				
久田子	6年	女	ホテルのプールで泳いだ	●						
	6年	女	川で魚釣り						●	○
	4年	女	映画、デパート	●		○				
	3年	男	川で釣り						●	○
	1年	男	デパートの遊具やゲームセンター	●			○			
戸屋	2年	男	川でキャンプ						●	○
吉平	5年	男	花火							
北村	3年	男	八王子のレインボープールに行った	●		○				
	1年	女	ゲーム				○			
原村	6年	男	釣り						●	○
	6年	男	遊園地でお化け屋敷に行った	●		○				
	4年	女	東京に行った	●						
	3年	男	河南で釣り							
	3年	女	ヤオハンでゲーム	●			○			
	2年	男	海で泳いだ	●				○		
	2年	男	野球とゲーム						●	
	2年	女	海で泳いだ	●				○		
花ヶ島	2年	男	海で砂遊び						●	○
			合計（回）	28	1	13	5	5	9	8

町外、特に遊園地などのレージャースッポットに楽しみを求めていることがうかがえる。

数少ない町内の回答の内容では、「川に釣り」が最も多くなっていて、他の遊びはほとんど見られない。

5-4. 場所共有性に見られる特性

5-1,2を合わせて見ると、早川町内ではほとんど場所に関する共有性が見られなかったのに対し、町外では近隣の町の3つのショッピングセンターを中心にして場所の共有性がみられる。ショッピングセンターは身延、増穂など、近くの町に立地する大型スーパーであり、土日休日は家族揃って買い物に出かけるパターンが多い。

5-5. 価値観と行動のギャップに見られる特性

5-3,4を比較してみたときに、よく連れていってくれるところでは「買い物」が多いが、楽しかったところでは「買い物」は減少していることが目につく。これは、必ずしも子どもは買い物に行くことを望んでいないことを示している。さらに、よく連れていってくれるところよりも楽しかったところの方で町内で「川に釣り」という内容が、わずかに増加している。これは非常に望ましい点であるといえる。

5-6. 小括

まず、問題点として挙げられるのが、子どもが地域を歩き回っていないということである。地域を理解するに際して、人やメディアを通して伝えられる「情報」よりも自ら歩き回ることによって学ぶ「体験」の方が非常に重要である。また、町内の場所は共有していないのに、町外の場所を共有してしまっているということは、学校での子どもたちの話題として、共有性のない自分の住む地域の話題より、共有性のある町外での話題を多くする結果を生み、子どもの目を町外に向けてしまう原因の一つになっているのといえる。

第6章　まとめ

6-1. 対象地における地域学習環境の現状と問題点

早川町の地域学習環境は、決して良い状況であるとはいえない。確かに、子どもの絶対数の問題、集落間の距離、高低差といった問題、日常生活ですら町外に依存せざるを得ない生活環境など、努力では解決不可能なことが原因となっているものも多い。

しかし、親の世代が地域をよく理解しているとはいえないこと、親も子どもたちも、町内よりも町外へ目が向いていること、そのような状況下で地域での楽しみ方を親も子どもも見いだすことができずにいることなど、早川町に住む人々が地域で生きる意味を見い出せなかったり、その必要性を感じていないことがさらに問題であるといえる。

6-2. 地域学習環境、地域学習教材への提案

これからの提案として、まず子どもたちにもっと町を歩かせ自ら地域を体験させる環境づくりを行う必要がある。具体的な方法として、登校時のスクールバスの路線短縮、親の送迎の規制なども、効果的な方法ではないだろうか。子どもたちは1日の大半を学校で過ごし集落内での移動もほとんど見られず、登下校時の移動は平日の唯一の移動といってもよい。その貴重な移動を自動車に頼っていては、町の風景はイメージとして捉えられても、足下の小さな草花や昆虫までは学習できないであろう。この問題は、集落間を結ぶ道のほとんどが歩道がなく、特に登下校時にほとんどの子どもが通過する南アルプス街道はトラックの往復が激しく非常に危険であり、子どもが安心して道草をしながらが歩けるような環境ではないことも原因である。この問題を解決することも、地域学習環境の整備として非常に大切である。

すでに学校では、春木川の清掃を兼ねて子どもたちを川で泳がせたり、町内に残る縄文遺跡付近から採取した土を使い、縄文人が行っていたであろう野焼きによる縄文土器作り等の試みがなされ、「研究所」でも、先生方と協力して町の特産であるそばを地域資源とみなし、子どもたちにそば打ちを教える等の活動を行っている。こういった体験的でもあり、技術や知恵といった地域資源の伝達も兼ねた地域学習の場作りも非常に大切である。

地域学習教材としては、地域資源の発掘と同時に、それを子どもたちにいかに伝達するかが重要である。昔ながらの遊びや食文化、個性的な集落の情報等を地域資源としてまとめた歳時記や、広くて現地を訪れることが難しい町内の隅々まで学習できるような「すごろく」など、子どもにも親しみやすいゲーム感覚の物が考えられる。

さらに、中山間地域では、単に地域への愛着といったものではなく、そこに住む意志を持っていなければ、住み続けることは困難であると思われる。こういった地域に住み続ける意味や意志をしっかりと持った人々を、地域に生きる人的な教材とみなし、子どもと接する機会を設けることも良い地域学習となりうるのではないだろうか。

平成10年度　学生研究員研究論文

中山間地域の寺院が地域社会と移住に果たす役割に関する研究

～ 山梨県早川町京ヶ島集落を事例として ～

河村　康孝

平成10年度早稲田大学卒業論文

第1章. はじめに

1-1. 研究の背景

近年、中山間地域への移住を希望する人々は増加傾向にあり、また、そのような人々を積極的に受け入れ、地域の担い手として地域の活性化に役立てようとする動きも見られる[1]。しかし、中山間地域への移住者と地元住民との間には意識の違いなど様々な問題点があり、定着の妨げとなっている。

問題点の原因として、まず中山間地域の地域特性を考えてみると、地域内に「イエ」[2] を中心とした血縁関係が残り、古くからの日本における村落の形態である「ムラ」という地縁関係を形成していることが挙げられる。この血縁・地縁関係は閉鎖性を生じる原因として考えられているわけであるが、同時に相互扶助などに代表される人々の強い絆を生み出し、その中で築かれた独自の文化が地域への帰属意識を高めていることも確かである。つまり「ムラ」という地域社会の中で生まれた独自の文化を守っていくことも一方において重要なのである。

図1　研究のフロー

そこで地域独自の文化が形成されてきた過程について考えてみると、その形成に大きな影響力を持っていた寺院に注目する必要がある[3]。現在の都市部では人口の流出入や生活様式の変化によって「イエ」や「ムラ」の崩壊が進み、寺院と地域との関係が希薄になってきているが、中山間地域においては未だに地域内に寺院と檀家の関係が残り、様々な側面で寺院が地域の中心的役割を果たしている可能性がある。いいかえると中山間地域の寺院は移住者と地元住民との間に生じる様々な問題の解決に何らかの影響を与えることが可能なのである。

1-2. 研究の目的

本論文では以下のことを目的とする。

①山梨県早川町への移住の現状と問題点を探ることにより、地域内社会活動の必要性を明らかにする。

②一方で、寺院が地域と密接に関係していることを把握しながら、寺院の地域内社会活動が地域住民に支持されていることを明らかにする。

③以上より早川町において寺院が地域社会と移住に果たす役割を明らかにする。

1-3. 研究の方法

対象とする寺院と集落の選定にあたり、山梨県早川町において現在でも集落内で寺院が活動しつづけていることを選定の条件とした。更にその中で町の無形文化財に指定されている行事（活動）を行っている唯一の寺院である常昌院と常昌院の位置する京ヶ島集落（以下京ヶ島）を取り上げた。

次に、常昌院が移住に果たす役割を考えるに当たり、以下の方法を採る。研究のフローを図1に示す。

①まずヒアリングによる早川町への移住者の現状調査、アンケートによる京ヶ島住民の意識調査から、現在の早川町への移住の問題点と方向性を明らかにする（第3章）。

② 寺院と檀家の関係、常昌院の存在に対する住民

の意識の２つの視点から、常昌院と集落が密接に関係していることを明らかにし、京ヶ島住民への常昌院の地域内社会活動に対する意識調査から、常昌院の地域内社会活動が地域住民に支持されていることを明らかにする（第４章）。

③ ①②より、移住における寺院の意義を社会活動の観点から述べた上で、今後の課題と展望について述べる。

1-4. 研究の位置づけ

寺院と地域との関係についての論文は社会学・民俗学等の分野において多数あり、また移住や地域の活性化に関してはその問題点を論じた論文も存在するが、寺院の役割について移住や地域の活性化の観点から論じた論文はない。

都市とは異なった社会構造を持つ中山間地域において、大きな影響力を持つと思われる寺院について研究することは今後の中山間地域への移住、さらには地域の活性化の視点からも十分に意義のあることだと思われる。

第２章　調査対象地の概要

2-1. 早川町の概要

早川町は山梨県の南西に位置し、周りを山々に囲まれた南アルプスの麓の町である（図２-1）。昭和32年に五箇村・硯島村・西山村・三里村・都川村・本建村の六ヶ村が合併して町政を布いた。大正時代から始まった水力発電所建設による人口流入で、昭和35年には１万人を超える人口が住んでいた（国勢調査調べ）が、平成10年10月１日現在では、人口は２千人を切っている（住民基本台帳調べ）。林野率は96％で、中山間地域として位置づけられる。

1994年に総合計画において「日本・上流文化圏構想」を掲げ、川の上流域で培われてきた独自の文化の見直しを基本的な理念として位置づけている。また、移住者の受け入れ、他地域との交流など、町外の活力の積極的な導入を図っている。

2-2. 京ヶ島の概要

京ヶ島は、早川町の集落の分布の中で、ほぼ中央に位置する集落であり、町内では珍しく平坦な地形に位置している。早川町の主要幹線道路である県道「南アルプス街道」と川を挟んで隣接し、町の中枢である町役場や町民会館からも車で10分圏内にある

図２-1　早川町と京ヶ島集落の位置

表１　地域内社会活動の定義

□本論の地域内社会活動の範囲

活動の領域 ＼ 物理的範囲	社会活動		個人的又は「イエ」内の活動
	寺院の社会活動	寺院以外の社会活動	
集落（※）	A1	A2	
旧村地区		A3	
早川町又は早川町を超える範囲		A4	

※旧村地区、早川町及び早川町を超える範囲に活動が及ぶ場合にも集落内で毎年行われる活動はここに含まれる

＜京ヶ島地区における例＞

A１：元旦祭・厄除・大念仏・獅子舞・彼岸（３月・９月）・念仏回礼・布施花火・送り念仏・風の神送り

A２：祭（４月・１１月）・天神祭・大祓・道づくり（４月・１０月）・水揚げ・年度末総会

A３：体育祭・炎の祭典

A４：文化祭・そば祭・山菜祭

図2-2　京ヶ島集落概況図

早川町内では比較的立地条件の良い集落であると思われる。全38戸（平成10年ゼンリン住宅地図調べ）であるが、ここでも人口の減少は徐々に進み、現在でも京ヶ島に住んでいる世帯は25戸、49人（現地踏査による）である。集落内の寺院は曹洞宗常昌院のみである。(図２－２)

2-3. 活動の定義

本論では活動の地域的拡がりを大きく３つに分けて考える。１つ目は京ヶ島集落内で行われる活動。２つ目は旧村（六ヶ村）の単位で行われる活動。３つ目は早川町全体で、または早川町という枠を超えて行われる活動である。本論では、「地域内活動」を集落内及び旧村の範囲内で完結される活動として定義する。また、「社会活動」とは「イエ」の関係を超えて行われる活動とする。寺院の活動において法事などの檀那[4]個人の活動においても、今回取り上げた常昌院の場合は他人との交流を伴うので、本論では社会活動と定義する。地域内社会活動の定義を表１に示す。

第３章　早川町への移住の問題点と方向性

3-1. 早川町への移住者から見た移住の現状と問題点

中山間地域での生活を希望して早川町へ移住してきた人[5]が過去20年間で11人いる[6]。この11人のうち４人は現在町外で生活している。この他に確認されているだけでも早川町への移住を希望している人が２人おり、その他にも希望している人がいる可能性は高いと思われる。

3-1-1. 調査の概要

上述の早川町への移住者のうち、調査可能な移住者9人に早川町での生活や早川町に対する意識に関する調査を行った（表２）。調査日は８月20日～11月４日である。

3-1-2. 早川町への移住者に見られる傾向

まず、中山間地域の【閉鎖性について】では、閉鎖性を感じる人がいる反面、感じない人も多くいる。

そして、早川町での生活を希望して早川町へ移住し現在でも住み続けていること、また【地域内社会活動への参加状況】から、早川町への移住者は地域内社会活動に参加していること、さらに、出ていった人も【出ていった理由】や【早川町の悪いところ】で地域内社会活動に関しては全く触れていないことから、地域内社会活動が移住者の定着を妨げる主要な原因ではないと思われる。

また、【来た理由】からもわかるように、町の活性

表２　移住者へのヒアリング結果

来た理由	土地の入手に関して	早川町の良いところ	早川町の悪いところ	地域内での交流について	閉鎖性について	地域内社会活動への参加状況	お寺との関係	出ていった理由
・山村での経験を生かしたかった ・海の関係 ・町長の魅力 ・地元に近い ・山や自然環境が好きだった ・過疎地の再生に興味があった ・町長の考え方に惹かれた ・芸術活動のため ・ゆっくりと生活するため ・町長の魅力 ・芸術活動のスペースの問題 ・土地のお金の問題 ・東京からそう遠くない ・早川町の過疎化対策の一環 ・独立したかった ・お金、スペースの問題 ・早川町と交流活動をしている品川区に学校があった ・材料の木の問題 ・早川町が過疎化対策のための募集を広告に出していたのを見つけた ・山梨県で建具屋を１年間していた ・知り合いが早川にいた ・田舎が好き ・芸術活動の関係 ・田舎が好き ・早川の住んでいた集落は人が生き生きしていて、文化の香りがした	・問題はない ・公共住宅 ・牧場の紹介 ・大家は現在町外 ・現在と違う土地で借家住まい ・後に土地を購入 ・役場ですぐに紹介してくれた ・公共の土地を斡旋された ・町の過疎化対策のため ・役場による紹介 ・空き家を貸してもらえない ・３つのうち、大家とのトラブルがいやだったため、公共の町の土地を借りた ・町の過疎化対策で役場に紹介してもらった ・直にブレハブを建てようと思っていて、工場付きの物件だったから ・大家は甲府在住 ・他にもあったが、そんなに大きくなくてよかった ・特に苦労はしていない ・大家は町外在住 ・お寺のイベントで町長を紹介される ・早川町の財団が仲介	・自給自足ができる ・道路などの地域メンテナンスを自分達でやる ・どこでも駐車ができる ・自給自足ができる ・土地（畑）を無償で使える ・自然が豊か ・後まで移動者が来るので、言い物が便利 ・水や空気がおいしい ・将来的にも自然が残りそう ・食料などの（コンビニ、レンタルビデオなど）がない ・情報に振り回されない ・選択の幅が狭い ・自然 ・温かい人情 ・静か ・温泉がある ・水や空気がおいしい ・人がいい ・穏やかでのんびりしている ・なし ・山奥である ・人がいない ・人との関係	・選択肢が少ない（物） ・選択肢が少ない（人） ・車がないと生活できない ・プライベートがない ・町内きな受験がない ・社会の波に流わなければならない ・人が少ない ・外からの刺激が少ない ・外の人を受け入れる体勢が整っていない ・なし ・医療施設がない ・高校がない ・寒いところ ・なし ・日当たりが悪い ・視界が狭く暗いイメージ ・車がを持っていないので不便	・プライベートがない ・芸術を教える ・あまりない ・すぐに良くしてくれた ・信用が第一 ・無理してでも合わしているので、特に問題はない ・できるだけ活動に参加している ・人口が少ないために逆にやる事が多くなる ・温かく接してくれる ・区長に推薦されそう ・野菜をくれたり、親切しい ・義務である ・世代間の違いは感じない ・あまりない ・文化祭に出席 ・人はいい ・あまりない ・そういった行事が残っているのが凄いし、やってて楽しい ・いろいろと教わったりして楽しかった	・考えが固まっている ・山の閉鎖性というものがある ・ない ・人なれしていない人が多い ・やはりある ・最初の２，３年はまわりの目線が気になった ・町外との交流活動によって、閉鎖性が薄まった ・町外の態度の悪い人によって警戒心が強くなった ・閉鎖性が強くて交流しないのではなく、高齢化のためできない ・とくに感じない ・特に感じない ・特に感じないが目線は気になる ・感じない	・道づくり、当番制 ・総会、道づくり、神社の祭りなどに参加 ・春・秋の道づくり、当番制、運動会、神社祭礼などの行事に参加 ・出られるときは全部出ている ・管理水道、管理費徴収、全会、運動会、祭などできるだけ参加している ・ほとんどの活動に参加している ・参加はしている ・現在組長 ・ほとんど参加 ・婦人会の活動、三味線を教わる、踊り、冬の地域祭参加	・檀家の人はある ・なし ・今で町長を紹介してもらった ・裏庭の人は活動しているが、自分は檀家でないのでしていない ・なし ・ほとんどの活動に参加している ・何もない ・ない ・イベントで町長を知る	・大家さんが事業に失敗 ・転出先に知り合いがいた ・東京との接点を持ちつづけたかった ・仕事場の利用の仕方の問題で持ち主と意見が合わなかった ・車がなく不便

化対策や品川区との交流がきっかけで来た移住者もいるため、【土地の入手に関して】において、物件紹介などの町からの支援を受けている移住者もいるが、それ以外の移住者からは土地を購入する前に借家暮らしをしたという意見や「空き家を貸してもらえない」といった意見がある[11]。また、【出ていった理由】で大家とのトラブルといったケースも出ているし、それを避けるために行政の土地を借りているといったケースもある。

3-1-3. 移住者から見た早川町への移住の問題点と方向性

前節で述べたように、早川町では閉鎖性を感じない人も多くいたが、多少は閉鎖的な面が残っているようである。【早川町の悪いところ】の項目で人を受け入れる体勢が整っていないという意見もあるように、人を受け入れる体勢づくりは今後の課題として挙げられる。

そして、地域内の行事・活動については【地域内での交流について】の項目で「義務である」という意見が出ているが、どの項目に関しても地域内社会活動についての不満は出ていない。また【地域内での交流について】の項目で地域内社会活動が楽しいという意見が出ているように、移住者が地域内社会活動を今後とも続けていくことは十分に考えられる。

3-2. 京ヶ島住民から見た移住の現状と問題点

3-2-1. 調査の概要

実際に住民側が移住者に対してどのような考えを持っているかを見るために、京ヶ島住民に対しての意識調査を行った。対象者は京ヶ島の集落、全37戸（寺院は除く）のうち現在でも京ヶ島で生活している25戸を取り上げた。25戸49人のうち2人は幼児であるため的確な判断がまだ不可能である為対象から外し、計47人を対象とした。調査日は10月8日～10月25日。調査は聞き取りによるアンケート用紙記入方式を主とした。回答者は30人、回答率は64%であった。調査項目は【どのような移住者が良いか】（図3）【空き家を貸すことができるか】（図4）【空き家を貸すときの条件】（図5）の3つである。

3-2-2. 京ヶ島住民の移住者に対する意識

【どのような移住者が良いか】という問いに対し、図3では「元気のある若い人」（60.0%）、「嫁」（43.3%）、といった限定された存在としての人物を望んでいる他に、「地域の社会活動に参加する人」（63.3%）、「地域内の話し合いに参加する人」（43.3%）といった、その人物の持っている性格や中身を望んでいる。そして、図4を見ると、ほとんどの人が「空き家を条件付きで貸すことができる」（86.7%）と答えている。図5は図4で「空き家を貸すことができる」と答えた26人を母数としているため、全体的に回答数は減少している。「元気のある若い人」（42.3%）と答えた住民は「地域の社会活動に参加す

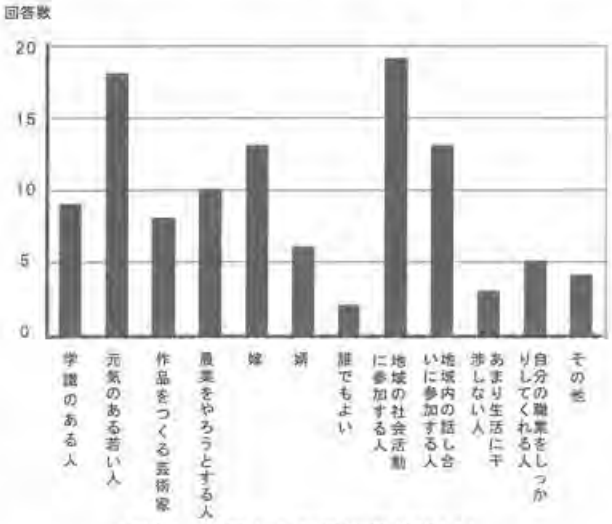


図3　どのような移住者が良いか

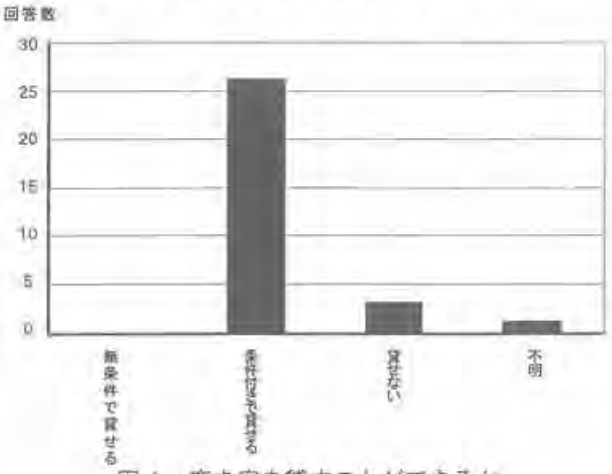


図4　空き家を貸すことができるか

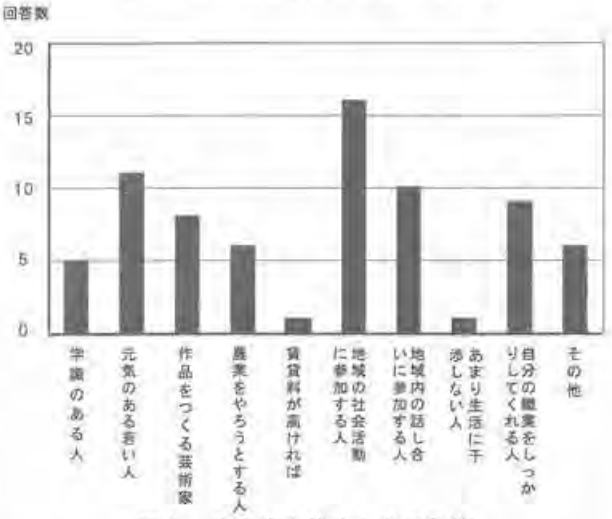


図5　空き家を貸すときの条件

る人」(61.5%) や「地域内の話し合いに参加する人」(38.5%) と比べ減少率は大きい。またしっかりした生活を持っていると思われる「自分の職業をしっかりしてくれる人」(34.6%) が図3と同じ回答項目の中で，唯一増加している（その他は除く）。

3-2-3. 京ヶ島への移住の現状と問題点

京ヶ島住民の移住者に対する意識調査の結果から、住民は移住者に「地域の社会活動に参加する人」を望んでいることがわかる。また、空き家を貸すという条件下ではもめごとを恐れて、社会活動に参加するようなしっかりした人に貸したいと考えていることが伺える。

3-3. 早川町への移住の方向性

住民は地域内社会活動に参加する人を望んでいて，早川町への移住者も大きな不満もなく地域内社会活動に参加している。移住者が地域内社会活動に参加することは移住者が住み続けるための一つの要因であると考えられる。移住者と住民の意見から判断すると、移住者が地域に定着するには地域内社会活動に参加することが重要であると言える。

第4章 常昌院と京ヶ島の関係

4-1. 早川町の寺院

早川町の寺院は現在日蓮宗31、曹洞宗5、臨済宗1、真言宗1の計38の寺院が存在する[8]。そのうち無住[9]の寺院は31ある（図6）。京ヶ島の寺院は曹洞宗常昌院である。開山は1597年，山梨県身延町下山・龍雲寺の末寺であり，現在の住職は23世として1962年からこの寺院の住職として活動し、1995年にはこの寺院で行われる大念仏が早川町の無形文化財に指定されている。

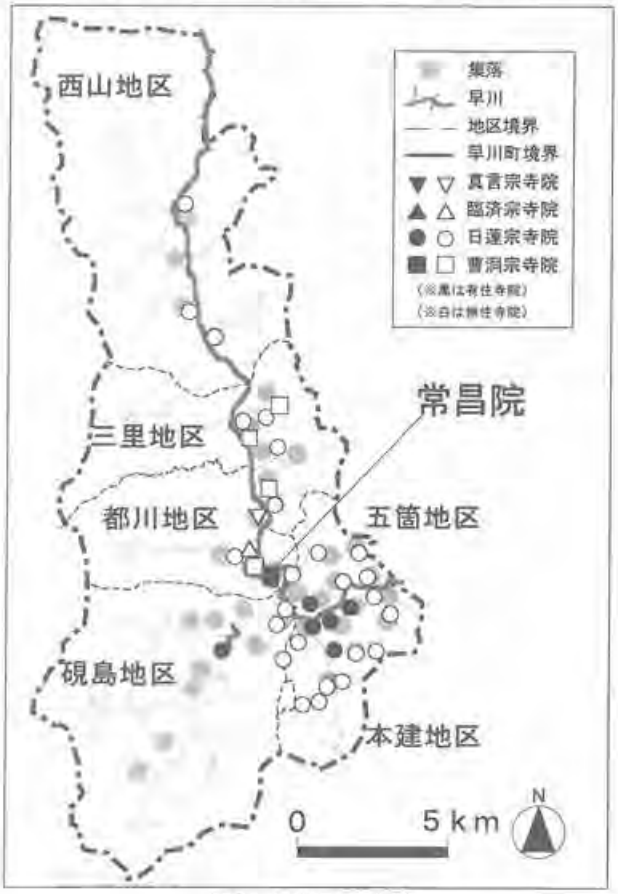


図6 早川町の寺院

4-2. 常昌院と集落の関係

中山間地域である京ヶ島において、寺院と地域社会との関係はどの程度残っているのであろうか。以下の2つの視点から見ていきたい。

4-2-1. 檀家と寺院

常昌院へのヒアリングによると、まず京ヶ島の集落では全37戸中36戸が、先祖の代からこの地域に住んでいる。残りの1戸は京ヶ島唯一の移住者である。そして、その36戸中、34戸がその集落の寺院である常昌院の檀家となっている。残りの2戸は常昌院の本寺である龍雲寺の檀家である。移住者を除く全戸が先祖からの檀家である。このことから、これらの「イエ」とこの集落の寺院との関係を見ることができる。

4-2-2. 住民の意識調査にみる常昌院

住民と寺院との関係を調べるに当たって、住民の常昌院に対する意識調査を行った。

(1)調査の概要

対象者、調査日、調査方法は第3章と同じである。調査項目は【常昌院があなたにとってどういう存在であるか】（図7）である。

(2)結果の分析

図7では、「地域の中で主体となって活動している」(66.7%)、「地域に安心感を与えてくれる」(56.7%) と良いイメージを持つ家が多くなってい

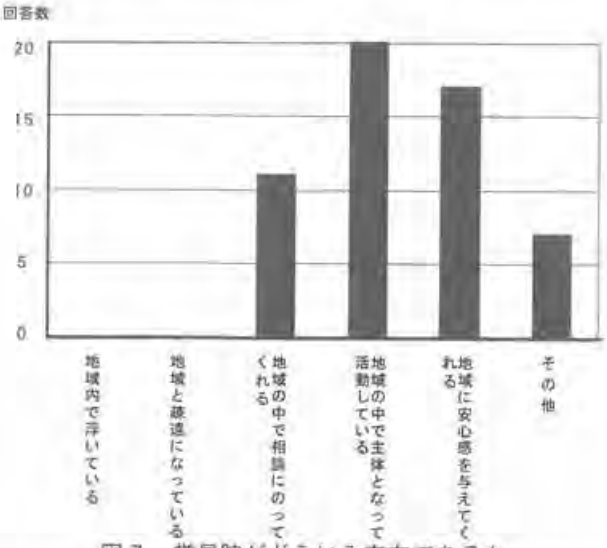


図7 常昌院がどういう存在であるか

る。また「地域内で浮いている」、「地域と疎遠になっている」といった悪いイメージを持っている人は一人もいない。「その他」の内容も（檀家である）（先祖の供養をお願いしている）という意見であり悪いイメージは全くない。

4-3. 常昌院の地域内社会活動

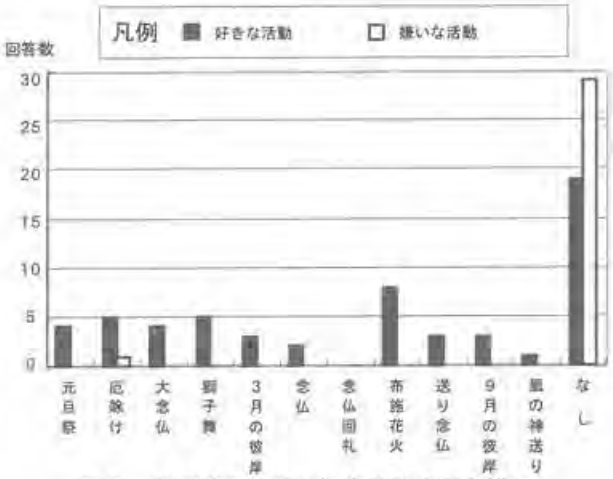
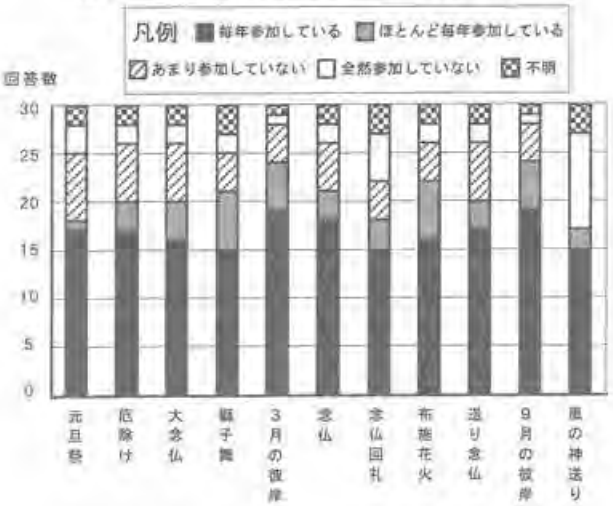


図8　常昌院の地域内社会活動の好き嫌い



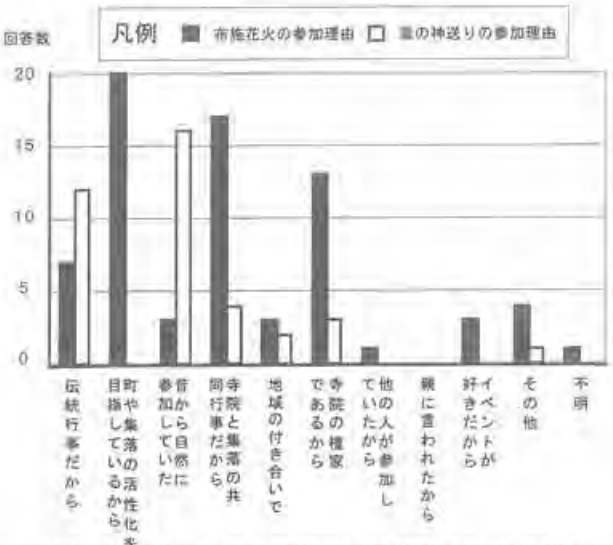


図10　布施花火・風の神送りに何故参加しているか

常昌院の地域内社会活動と住民の関係を調べるに当たって、常昌院の地域内社会活動に対する住民の現状調査及び意識調査を行った。

(1)調査の概要

対象者、調査日、調査方法は第3章と同じである。調査項目は【常昌院の地域内社会活動の好き嫌い】（図8）、【常昌院の地域内社会活動の参加状況】（図9）、【布施花火・風の神送りに何故参加しているか】（図10）である。参加理由を調査する地域内社会活動として、特に文化的要素の強い布施花火と風の神送りの2つの行事を取り上げる。これらは、他の地域にはなく、この地域独自のものであること、そして、イベント的な要素が強いという理由で選定した。布施花火は12年前から行われている、比較的新しいもの。風の神送りは30年近く前に活動の主体である子供の減少により中止された古いものである[10]。

(2)結果の分析

図8では、常昌院の活動の中で嫌いな活動のある住民がほとんどいないことがわかる。さらに図9では、住民が常昌院の社会活動に対してほぼ毎年参加している、または参加していたことがわかる。そして、図10をみるとその参加する理由には、風の神送りでは「伝統行事であるから」(63.2%)、「昔から自然に参加していた」(84.2%) が多く、布施花火では「寺院と集落の共同行事だから」(56.7%) といった回答が多く見られた。また、布施花火において「町や集落の活性化を目指しているから」(66.7%) という回答が多かったことも注目される。

4-4. 考察

京ヶ島住民が常昌院の檀家として京ヶ島で生活し続け、常昌院が住民にも良いイメージを持たれていることから、常昌院と常昌院の位置する集落である京ヶ島との関係は強いと思われる、そして常昌院の行う地域内社会活動に住民は嫌がらずに参加していることから、常昌院の地域内社会活動は住民に支持されているといえる。文化的要素の強い布施花火、風の神送りといった活動も支持されていることはもちろん、風の神送りについては伝統的な行事として認識され、布施花火については「町や集落の活性化を目指しているから」と布施花火という地域内社会活動の意義について理解を示している点についても評価できる。

第5章　中山間地域の寺院が地域社会と移住に果たす役割と課題

5-1. 早川町の現状調査からみた常昌院の意義

常昌院は京ヶ島において、高い評価を受けている。そしてその理由としては京ヶ島において、常昌院が集落と密接に関係していること、そして常昌院が行ってきた地域内社会活動が伝統的な行事であり、地域の活性化を目指しているという事実とともに支持されていることが考えられる。移住の促進を積極的に行い地域の活性化を目指す早川町においては、地域内社会活動は今後とも必要とされることが考えられ、そうしたときに住民に支持されている常昌院の地域内社会活動を今後とも続けていくことは大変重要であると思われる。

5-2. まとめ

本論では、現代において地域と疎遠になってきている寺院の存在をもう一度見つめ直すことを目的としながら、中山間地域への移住に対する寺院の役割を明らかにするために、以下の事を順を追って説明した。

①早川町への移住者の現状調査と京ヶ島住民の意識調査から現在の早川町への移住においての問題点を把握した。現在の早川町には閉鎖性が存在し、早川町への移住者の受け入れ体勢も課題であるが移住者は地域内社会活動に不満は抱いていないこと、そして住民は地域内社会活動への参加を期待していることを把握した。そのことから地域内社会活動の必要性を述べた。

②寺院と檀家の関係が昔から変わらず残っていること、常昌院の存在に対する住民の意識調査で住民が良いイメージを常昌院に抱いていたことから、常昌院と地域の関係が強いことを明らかにした。

③常昌院の地域内社会活動に対する住民の現状調査及び意識調査から、寺院の社会活動が住民に支持されていることを明らかにした。

④最後に、移住に地域内社会活動が必要とされる早川町において、住民に支持される常昌院の地域内社会活動を続けていくことは大変重要であることを述べた。

5-3. 今後の展望と課題

本論では、常昌院の地域内社会活動を今後とも続けていくことが重要であることを述べた。今回は常昌院について述べてきたが、寺院のもつ歴史的背景と中山間地域の現状を考えると、寺院の地域内社会活動がその地域の伝統として継承され地域独自の文化として住民に支持されている可能性は高い。そのような寺院の地域内社会活動、更には寺院そのものを見直すことは、中山間地域への移住はもちろん、内発的な発展を促し地域の活性化を行う上で大変重要であると考えられる。

ただ、先にも述べたように今回は中山間地域において寺院が精力的に活動している特殊な例であり、現在の中山間地域の課題として、多くの寺院が経済的に成り立たず、無住である場合が多い。更にはこうした寺院や寺院の活動を支援していく組織としてはまず行政が考えられるが、政教分離のため行政は宗教を支援できない。こうした課題は今後とも検討する必要があるだろう。

謝辞

本論の作成にあたり、ご協力いただいた常昌院・京ヶ島の皆様、早川町への移住者の皆様、早川町役場の皆様並びにご指導いただいた皆様に感謝の意を表すとともに、今後の皆様のご活躍を期待いたします。

(1)「住んでみたくなるむらづくり運動推進調査報告書」(財) 財政経済協会・1992年3月)

(2) 長谷川昭彦は「近代化の中の村落 ～農村社会の生活構造と集団組織～」(日本経済評論社) の中で「イエ」のことを、『各世代を貫く一種の自己同一性の観念を以って、過去から不断に連続してきた直系の系譜体のことである』と述べている。

(3) 今堀太逸は「村の生活と社寺 -滋賀県神埼郡五個荘町からの報告-」(日本仏教研究会) の中で、地域社会における寺院が葬式や先祖供養といった宗教的な枠を越えて、村の自治や生活と深く結びついていたことを述べている。

(4) ある寺院に対し檀家になる場合、その寺院のことを檀那寺と呼び、檀家の個人のことを檀那と呼ぶ。

(5) Uターン者、婚姻・会社・家族の影響という理由の移住者は除く。

(6) いずれも行政、住民 (移住者も含む) へのヒアリング調査によるため、全数ではない。

(7) 早川町役場企画振興課調べによると、10年前に空き家調査で、空き家を貸すことができる人は空き家所有者の極一部であった。

(8) 平成10年度版ゼンリン住宅地図と早川町史の両方に掲載されている寺院を上げた。

(9) ここでいう無住とは、住職の兼務などにより、寺院に普段住職がいないことを意味する。これに対し有住とは、寺院に普段住職がいることを意味する。

(10) 正確な文献等は残存せず、中止された年度については特定できなかった。

歴代学生研究員の紹介

平成8～10年度学生研究員

鞍打　大輔（くらうち だいすけ）
【早稲田大学建築学科→早稲田大学大学院→日本上流文化圏研究所】

卒業論文、修士論文と早川町をフィールドに書いているうちに、人生のフィールドまで早川町になってしまった鞍打です。今回この研究年報をまとめるにあたって自分の卒論を久しぶりに読み返してみました。読んでみると、この頃の様々な体験の積み重ねが、ちゃんと今につながっていることが良く分かります。

「春木川じゃぶじゃぶ計画」。早川南小学校のすぐ横を流れる春木川で、かつての子どもたちが興じていた「石積みプール」を再現し、今の子どもたちに体験させようというこの計画も、卒論のまとめにおぼろげながら出てきてます。「2000人のホームページ」。この取り組みの今後の展開として考えている、子どもたちと一緒に取材するという計画の意義もそこには書いてありました。

どちらもまだ実現には至っていませんが、このように早川町の子どもたちにも様々な体験をさせることで、早川町のことを真剣に考え町の将来を担ってくれる人材もきっと出てくると思います。うちの子どもが学校に入るころまでには、そういった環境づくりも研究所で取り組んでいかなければ思ってます（笑）。

平成10年度学生研究員

河村　康孝（かわむら やすたか）
【早稲田大学建築学科→(株)イングス アーバンデザイン部】

舞鶴市でまちづくりに関わっております河村です。早稲田大学の後藤研究室を卒業して、ここ舞鶴にやってきました。そう、研究所の鞍打さんの後輩になるのかな。学生時代に早川町で研究させていただいたこともあって、こうして紹介させてもらっているところです。こうしてここにあるのは、本当に私を温かく迎えてくれた早川町の方々のおかげだと思っています。

私は「ひと」との交流ができるところが「まち」（村も集落も含めてですが）だと思っています。研究当時は、紙や文章だけを見て「まち」を見ていました。そんな時やはり「ひと」との出会いやお話を聞くことにより「まち」が見直せたと思っています。

これからも研究所の「ひと」を大事にした取り組みに期待しています。もちろん、どんどん私も関わって行きたいと思っていますが。

「ひと」があって、「まち」がある。最近殊にそう感じている河村でした。

平成10年度　学生研究員研究論文

中山間地域におけるまちづくり中間セクターのあり方に関する研究

～山梨県早川町「日本・上流文化圏構想」と「日本上流文化圏研究所」の取り組み～

鞍打　大輔
平成10年度早稲田大学修士論文

1.序章

1-1.研究の背景

これまでのわが国の中山間地域問題の議論は、国土における公益機能の保全論や条件不利地域対策論などに終始する傾向にあり、また施策レベルでは公共事業や補助事業などが各自治体の経済基盤と自治の崩壊をもたらしたことは否定できない。さらに今後ますます地方分権化が進むことが予想される状況下において、中山間地域の各自治体には国や県への強い依存体質から脱却し、地域独自の将来ビジョンに基づいた自律的なまちづくりを展開する必要がある。

またまちづくりを担う主体を考えるとき、平成10年12月に施行された特定非営利活動促進法が活動分野の一つとして「まちづくり」を掲げた流れからも、NPOに注目せざるを得ない。今後はまちづくりの分野でも、より多様な主体が行政とのパートナーシップのもとに活躍することが期待される。しかし過疎化、高齢化をはじめとする様々な問題を抱える中山間地域においては、行政以外にまちづくりを担う主体を見いだすことが困難な現状にある。よってまちづくりを担うNPO（以下、まちづくり中間セクター）の中山間地域におけるあり方は、社会的諸条件の異なる都市部におけるそれと同様に語ることはできない。つまり、中山間地域のまちづくり中間セクターのあり方には独自の計画論が必要なのである。

1-2.研究の目的

本論文では以下のことを目的とする。

①.中山間地域におけるまちづくり中間セクターの現況把握とあり方の提示

②.山梨県早川町における「日本上流文化圏研究所」の取り組みを中山間地域計画論、まちづくり中間セクター計画論として総括

③.「日本上流文化圏研究所」の課題の整理と今後の方針の提示

④.中山間地域におけるまちづくり中間セクター計画論の一視座の提示

1-3.既往研究と研究の位置づけ

建築、都市計画分野においてNPO全般に関する研究は報告が少ないが、まちづくり中間セクターに関しては先進事例報告がいくつかある。まちづくりに限らずNPO全般では、これまでの研究は次の3つに分類できる。①海外における制度研究と先進事例研究(文1)。②我が国の法制度のあり方に関する研究(文2)。③我が国におけるNPOのあり方と先進事例研究(文3)。これらの中で本研究は③に属するが、これまでの研究は都市部の先進事例を報告するものや、地域の社会的条件を考慮に入れない総論にとどまりがちで汎用性のある計画論が存在しない。

本研究は都市部と中山間地域におけるまちづくり中間セクターを分けて考察した点が新しく、中山間地域限定ではあるがまちづくり中間セクターの具体的な計画論の一視座を提示するものである。

1-4.研究の流れ

本研究は3部構成となっている（図1参照）。

1部では都市部と中山間地域におけるまちづくり中間セクターを取り巻く諸条件の比較、及び団体の現況把握を行い、まちづくり中間セクターのあり方を提示する。

2部では山梨県早川町の第4次総合計画である「日本・上流文化圏構想」とそれを背景に設立された「日本上流文化圏研究所」の取り組みの総括を試みる。筆者は早川町において、まちづくり中間セクターと位置づけられる「日本上流文化圏研究所」の設立準備当初から現在に至るまで、学生研究員として地域文化に関する

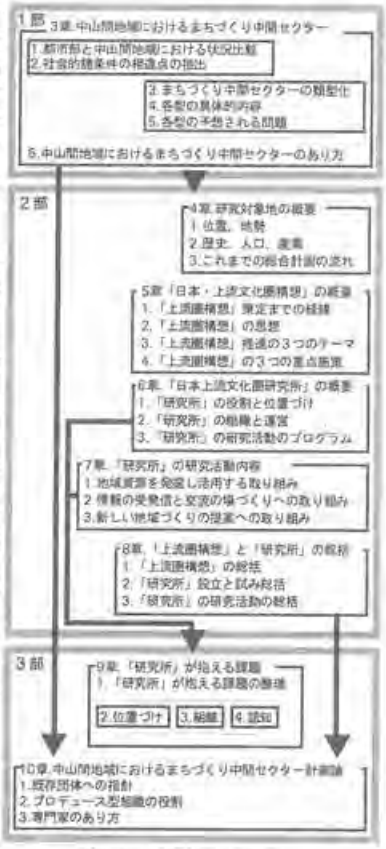


図1　研究のフロー

研究やまちづくり活動、及び運営に参加してきた。ここでは早川町の取り組みを中山間地域計画論、また中山間地域におけるまちづくり中間セクター計画論として総括する。

3部では、これまでの取り組みで明らかになった、「研究所」が抱える課題を整理し今後の方針を提示する。さらに中山間地域におけるまちづくり中間セクターの計画論の一視座を提示する。

2.研究の前提

2-1.用語の定義

「中山間地域」…「中山間地域」とは元来農林統計上の用語で、政策用語としての定義はなく様々に解釈されてきたのが現状である。ここでは農林統計における農業地域類型の中間農業地域と山間農業地域を中山間地域とする。

「まちづくり」…都市部においては、コミュニティーづくり、身近な環境整備など建築や都市計画の分野として解釈される場合も多いが、中山間地域においては産業や経済、社会福祉分野なども含んだ地域振興全般を指す言葉として用いられる傾向にある。本研究でも「まちづくり」を経済活動、社会福祉活動なども含んだ地域振興全体と捉える。

「まちづくり中間セクター」…本研究では行政以外の先に定義した「まちづくり」を担う主体と定義する。具体的には任意団体、地縁自治組織、民法34条に定められる公益法人、その特別法に基づく広義の公益法人、各種組合、さらには株式会社、有限会社なども含めて考える。

2-2.1部における分析の限界と分析の対象

経済企画庁の調査[文4]によると、全国にNPOは任意団体だけで8万5千団体ある。またNPOが様々に定義され、かつ組織の結成、解散は頻繁に起こっており、これら団体全体の恒常的な実態を正確に把握することは不可能である。そのため全国規模でのNPOの動向を把握した資料は存在しない。ここが本研究におけるまちづくり中間セクターの全体像の把握の限界である。これを前提とした上で、本研究では地域づくり団体全国協議会が平成7年に編集・発行した「全国地域づくり団体プロフィール集」[注1]を対象に独自に分析する。

2-3.1部における分析対象の整理

先の資料に掲載されている2,772団体のうち、「活動内容」「設立主体」「運営主体」「運営費」の質問項目に対し「その他」という回答と記入漏れがあった560団体と広域的な活動団体のため所在地を特定できない22団体を除き、2,190団体を分析対象とした。さらに1995年農業センサスによる農業地域類型により、所在地を都市部（都市的地域＋平地農業地域）、中間農業地域、山間農業地域と分類（所在地分類）した。また運営主体、活動主体を7主体から「住民」「行政」「民間」の3主体[注2]に、活動内容を12分野（以下、活動内容12分野）から「産業・経済」「福祉・教育」「文化・環境」「イベント・交流」「全般」の5分野[注3]（以下、活動内容5分野）に再分類した。

2-4.2部における研究対象地の選定

各自治体はこれまで、まちづくりの指針として地方自治法第2条第5項に定められる基本構想・基本計画（以下、総合計画）を策定してきた。しかしその計画内容が画一的、形式的になりがちである点が指摘される。しかし、総合計画は各自治体における諸計画の上位計画としての位置づけだけでなく、まちづくりの総合的かつ長期的な指針という意味からも重要であり、各市町村の性格や現状にあった主体的な計画が望まれる。

本研究の2部において対象とする山梨県早川町は、平成6年度に第4次総合計画「日本・上流文化圏構想」（以下「上流圏構想」）を策定し、環境保全を地域の大きな役割とみなし、川の上流域で培われた地域文化に依拠した地域の将来像を描いた。さらに、町内外の活力を積極的に活用することとし、平成8年に「日本上流文化圏研究所（理事長、下河辺淳・元国土庁事務次官）」を設立し、構想実現へ向けての取り組みが始まっている[注4]。

このように、いち早く時代の転換期を見つめ、中山間地域の生活文化に依拠したまちづくりを総合計画で明示した例は数少なく、その実践機関として研究所を設立した試みも希有である。従って、これらは今後の中山間地域のまちづくりと、その担い手としてのまちづくり中間セクターのあり方の一つの方向性を示す重要な試みであると考えられる。

3.中山間地域におけるまちづくり中間セクター

3-1.都市部と中山間地域における現状比較

3-1-1.設立主体と運営主体の比較

所在地分類別の団体の担い手を、設立主体、運営主体、設立主体と運営主体の組み合わせ（以下、設立主体/運営主体）の3点から比較した（図2参照）。共通する傾向として設立主体、運営主体ともに「住民」、「行政」、「民間」と単一の主体が担っている割合が非常に高く上位3ケースを占めており、その6割が「住民」主体の任意団体である。二つ以上の主体が担う団体は非常に少なく、運営においてはほと

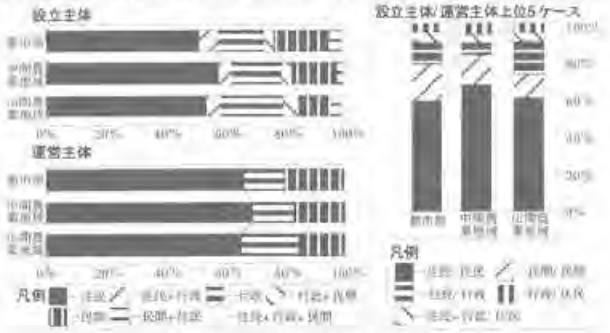


図2　所在地類型別設立主体、運営主体

んど見られない。またその上位3ケースのうち都市部、中間農業地域、山間農業地域と社会的条件の厳しい地域へ向かうに従い、「民間」が主体となっている割合が減少し、「行政」の割合が増加している。

設立主体/運営主体（「行政」/「行政」は行政が設立し行政が運営していると解釈する）ついて見てみてもこの傾向は変わらず、山間農業地域においてのみ「行政」/「行政」が「民間」/「民間」を上回っている。上位3ケースに続くものとして「住民」+「行政」/「住民」、「行政」/「住民」という「行政」と「住民」の協力によって設立、運営されている団体の割合が多くなっている。

3-1-2.活動内容の比較

所在地分類別の活動内容を、活動内容12分野と活動内容5分野についての一団体あたりの回答数から比較した（図3参照）。まず大まかに5分野の比較を見ると、「産業・経済」「文化・環境」「イベント・交流」の3分野において明らかな差が見られた。「産業・経済」と「イベント・交流」においては中山間地域が、「文化・環境」においては都市部の割合が上回っていることが分かる。「福祉・教育」については、山間農業地域が特に少なくなっている。「全般」についてはそれほど違いは見られない。

活動12分野による比較では、農林業、特産品、観光、イベントの分野において中山間地域が明らかに都市部を上回っている。反面、福祉・教育分野、環境・景観の分野においては中山間地域、特に山間農業地域における割合が著しく少ない傾向にある。

3-1-3.運営費による比較

運営費を7段階分類[注3]し、該当団体数の割合の変化と、設立主体別の割合から、所在地分類別の運営費の比較を試みた（図4参照）。全般的にみて10万円以上50万円未満に運営費を持つ団体の割合が

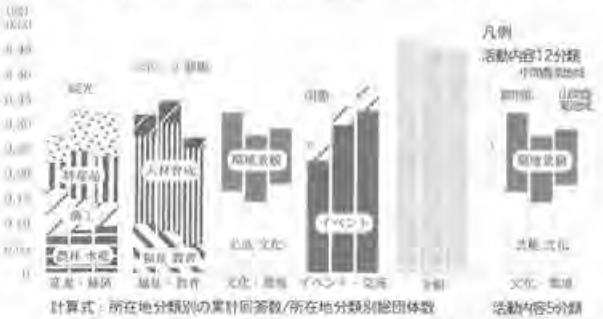


図3　所在地類型別活動内容

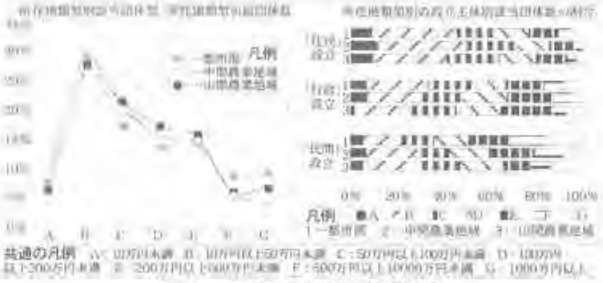


図4　所在地類型別運営費

集中し、運営費が高くなるに従って団体数が減少していく傾向にある。どの所在地類型でも運営費が500万円以上の段階になると団体の割合が急激に減少し、80％以上の団体が100万円以上500万円未満の間の運営費を持つことが分かる。500万円以上の運営費を持つ団体の割合は、中山間地域においては都市部の半分ほどであるかわりに、100万円以上500万円未満の間で都市部の割合を上回っている。

設立主体も考慮に入れると、全般的に「住民」が設立する団体は運営費が低額で、「行政」「民間」と高額な運営費を持つ団体の割合が高くなる。しかし、「民間」設立の団体は、都市部より中山間地域の方が運営費の低額な団体の割合が多い。

3-2.社会的諸条件の相違点の抽出

以上のことから都市部との比較において、中山間地域の以下の特性が明らかになった。

①民間のまちづくりの担い手としての機能が弱い。またその分を行政が主体となり補っている。

②産業や経済など営利活動が活動内容の重要な柱となっており、その反面民間活力の導入が叫ばれる環境や福祉の分野がまちづくり活動として定着していない。

③民間はまちづくりに高額な資金提供をできない状況にある。

④以上のすべての状況が山間農業地域ほど顕著に表れている。

3-3.まちづくり中間セクターの類型化

次に中山間地域に存在する1,182団体に対して、所在地分類、活動内容5分野、運営主体の9項目について数量化Ⅲ類による分析を試みた。その結果、1軸（寄与率22.6％）は「行政が運営する総合的まちづくり団体-住民が運営する地域の見直し団体」の対比、Ⅱ軸（累積寄与率43.5％）は「民間が運営する地域経済活性化団体-行政が運営する社会サービス提供団体」の対比、Ⅲ軸（累積寄与率62.6％）は「行政が運営する単一目的型団体-住民の運営する総合的まちづくり団体」の対比の軸と解釈できた。

次にウォード法によるクラスター分析を行い8つの型に類型し（図5参照）、型ごとの運営費と活動12分野に着目し、型の特徴を洗いだした（表1参照）。これらから以下のことが明らかになった。

①「住民」主体の団体と、「民間」主体の多目的型団体は総じて運営費が低額である（1型、2型）。

②「行政」主体、「民間」主体とも「産業・経済」

図5　数量化Ⅲ類とクラスター分析による散布図

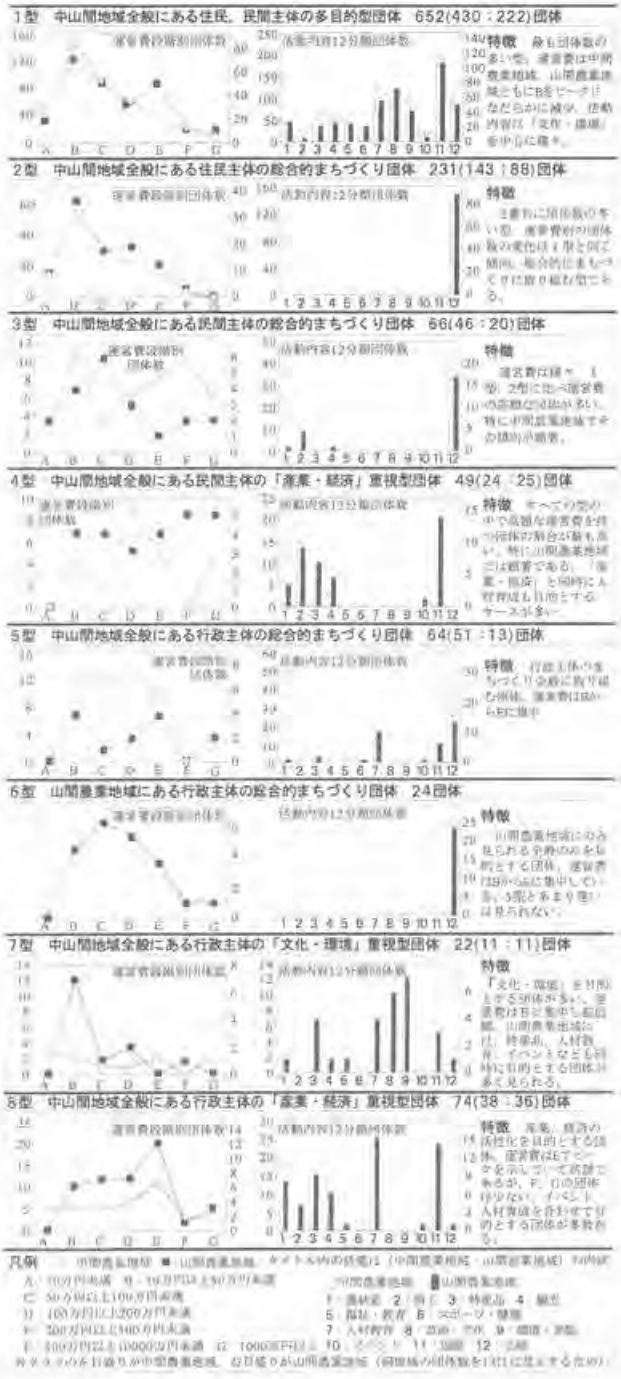
重視型の団体は運営費が高額である（4型、8型）。

③「行政」主体の「文化・環境」重視型団体は、運営費が超低額である（7型）。

④「行政」主体の団体で運営費が高額なものは少ない（5型、6型、7型、8型）。

⑤「住民」「行政」「民間」ともに「福祉・教育」分野の団体は非常に少ない（すべての型）。

表1　各類型の運営費と活動内容



3-4. 各型の具体的内容

次に型ごとの具体的な活動内容と参加者を表2にまとめた。

7型の「文化・環境」重要視型、1型の多目的型は歴史や文化の掘り起こし、伝統的な技術や芸能の継承、植栽による景観整備、子どものための環境整備など活動内容が具体的で、それぞれが自発的な意志に基づき楽しく活動している様子が伝わる。

2型、3型、5型、6型の総合的にまちづくりに取り組む団体は、学習会、研修、先進地視察など、ノウハウの習得や人材育成が主な活動内容となっている。また地域内の各種団体間のネットワーク的な役割も果たしており、情報や意見の交換がなされているようである。

8型、4型の「産業・経済」重要視型は一次産業を活かした特産品開発、イベントによる観光振興が活動の柱にである。併せて人材育成のための学習会、研修なども行っている。

また行政主体である5型、6型、7型、8型の団体が残した成果は、活動内容にまちづくりへの進言、政策提言などが多数見られ、政策に反映され地域に還元されやすい傾向にあるようだ。1型、3型、4型の民間主体の団体の中には官設民営型の公益法人や第3セクター、2型の住民主体の団体の中には町内会など地縁自治組織が少数ではあるが含まれている。

表2　各型の具体的な活動内容と参加者

	行政主体	住民主体	民間主体
非営利活動「文化・環境」多目的	7型	1型	
総合的まちづくり	5・6型	2型	3型
営利活動「産業・経済」	8型		4型

3-5. 各型の予想される問題

さらにこれまでの分析から予想される各型の課題を以下に整理する。

①8型、4型の「産業・経済」重要視型は、中山間地域の経済的現状からいえば必ずしも成功しているとはいえない。多くの団体が行き詰まりを感じているのではないだろうか。

②1型の「住民」「民間」主体の「福祉・教育」「文化・環境」重要視型は、目的が明確であり一定の成果を残しているものと思われるが、運営費も少なく個人の趣味的な活動から脱却できず、断片的な活動になっているのではないか。

③2型、3型、5型、6型の総合的にまちづくりに取り組む団体は目的が明確でないため、学習会や先進地視察の成果を地域に還元できているかは疑問である。

④5型、6型、7型、8型の「行政」主体の団体は本当に自発的な参加ができているのか、あるいは行政の負担増になっているのではないか。

3-6.中山間地域における中間セクター計画論の一視座

以上のことから中山間地域の社会的条件とまちづくり中間セクターの現況、そしていくつかの問題が予想された。これらを考慮して、中山間地域におけるまちづくり中間セクターのあり方を提示する。

「行政主導もやむを得ない」…人材不足、民間の活力不足の著しい中山間地域では、行政がまちづくり中間セクターを設立せざるを得ない場合も多いと思われる。将来的には民間による運営を目指しながらも、初動期における行政による人材、資金、ノウハウなどの支援は不可欠である。人材育成、行政とのまちづくりビジョンの共有の意味も含め、民営が成り立つまで行政は積極的にサポートすべきである。

「既存団体の育成が必要」…中山間地域ではすでに、様々な団体がまちづくりを視野に入れた活動を展開しており、新たな組織づくりは人材不足の現状から考えると、住民の負担を増やすことになりかねない。よって既存団体を育成していくことが大切であると思われる。

「目的が明確な団体に支援が必要」…個人の自発的意志による目的が明確な団体こそ、具体的な成果を残し得る団体であるといえる。まちづくりの担い手として、このような小規模な団体がさらに成果を上げるための様々な支援が必要である。

「産業に新たな発想が必要」…産業の確立、経済の活性化が中山間地域の抱える問題の解決につながることは明らかだが、中山間地域の経済的な現実を見るとこれらの団体が必ずしも成果を上げているわけではない。従来の観光や特産品開発にとどまらず新たな産業を創造する必要がある。

「地縁自治組織の見直し」…血縁や地縁社会の崩壊によりNPOが必要となったという経緯を考慮すれば、血縁、地縁的社会の残る中山間地域での地縁自治組織はまちづくりの重要な担い手であるといえる。特に福祉の分野での活躍が期待される。

「プロデューサーが必要」…このように様々な団体がまちづくり活動を展開しているにも関わらず、まちづくりの成功事例は少ない。それはこれらの活動を総合化、また構造化し活動に方向性を与える主体が存在しなかったからである。今後は活動の見直しと、明確な地域の将来像の創造と共有、また個々の活動を総合化、構造化するプロデュース能力と専門知識を有した新たな主体が求められる。

山梨県早川町での「日本上流文化圏研究所」の取り組みの意義は、このプロデューサーとしての役割であると位置づけ総括を試みる。

4.山梨県早川町の概要

4-1.位置、地勢

山梨県早川町は県南西部に位置し、南アルプスを挟み静岡県と接している。総面積369,86平方kmは県内で最も広く、そのうち96%を森林が占めている。急峻な山々の谷間を富士川の支流である早川とフォッサマグナが南北に走り、旧6ヶ村[注7]からなる36の集落が谷間に散在している（図6参照）。

図6　早川町の概要

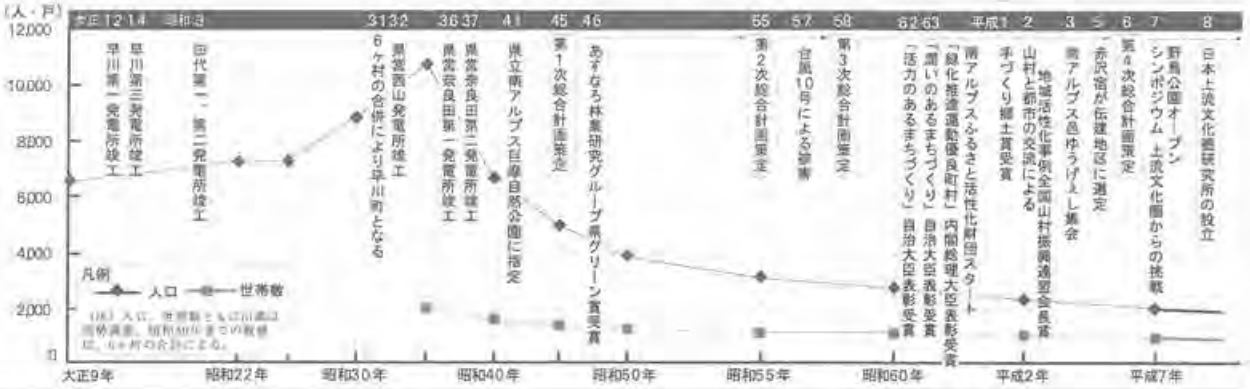
4-2.歴史、人口、産業

早川町では、縄文の生活遺構や金・木材産出で栄えた近世までの歴史を背景に、独自の農山村文化が培われてきた[注8]。大正時代になると水力発電所の開発が相次ぎ、建設作業者を主とする人口が流入し、ピークを迎えた昭和35年には10,679人（国勢調査）を記録した。しかし、その後は急速に過疎化が進行し、平成7年には1,977人（国勢調査）となった（表3参照）。また高齢化率は41%と県内で2番目に高く、一次産業の衰退とともに、温泉などを活かした観光業と、建設業が町の基幹産業となっている。

4-3.これまでの総合計画の流れ

昭和45年に策定された第1次総合計画、また昭和55年の第2次総合計画は、「生活基盤の整備」「産

表3　人口・世帯数の推移と主な出来事



業振興」「社会福祉の増進」などを基本施策として位置づけ、生活環境の整備によって人口増加を目指すものであった。しかし、これらの計画策定にあたって、町の現状調査は行なわれたものの、具体的な地域の将来像とその実践手法は示されず、過疎化を食い止める成果を上げるには至らなかった。

現町長の就任以降、昭和57年の台風10号による大規模な被害を機に、第2次総合計画の見直しが始まり、各集落でのヒアリングや50名の町民からなる「50人審議会(注9)」による話し合いを経て、昭和59年に「旧村一拠点」「観光業と農林業の振興」「生活環境の整備」を基本施策とした第3次総合計画が策定された。その中でも旧村を単位とした各地区に、拠点となる施設を整備するという「旧村一拠点」や、観光業に着目した産業振興などは、生活環境の整備に基づく人口定着を目指したもので、地域の現状を的確に把握した具体的な施策の提示であったといえる。

この第3次総合計画の「旧村一拠点」に従って、観光やまちづくりの拠点となる施設が各地区に建設され(注10)、現在の早川町のまちづくりのハード面における基礎が築かれた。また、この施策はいわゆる施設のばらまきにとどまらず、計画策定に町民の意見を積極的に反映させたこととも相俟って、まちづくりの運動を誘発・促進することにも効果を発し、住民主体のまちづくり活動も多数芽生えた。本建地区では集落の青年層で組織した赤沢青年同志会が結成され、下水道の自力建設、往還の石畳による整備など精力的な活動を展開した。そうした結果、平成5年には同地区赤沢宿の江戸時代から残る講中宿の街並みが、首都圏では初めて重要伝統的建造物群保存地区に選定されるまでに至っている。(表3参照)

5.「日本・上流文化圏構想」の概要

5-1.策定までの経緯

5-1-1.「50人審議会」

第4次総合計画である「上流圏構想」策定への取り組みは、平成4年から2年間に渡って行われた。第3次総合計画で芽生えた住民主体のまちづくりが構想策定プロセスにおいても継承され、第3次総合計画策定の際に組織された「50人審議会」による話し合いが再びもたれた。

5-1-2.「南アルプス邑ゆうげぇし集会」

平成3年に、町では、町外から約30名のまちづくり活動家や研究者・有識者を町に招く、「南アルプス邑ゆうげぇし集会」を開催した。

これは、町の実態を参加者に把握してもらい、忌憚のない意見を得ることを目的としたものであった。しかし、この集会後も、町外のまちづくり活動家や研究者・有識者との関係は続き、「上流圏構想」策定にあたっては、この集会の参加者をはじめとする町外者から、ボランティアによる助言や指導を受けることが可能となった。

5-2.「上流圏構想」の思想

「上流圏構想」は、これまでの総合計画が目標としていた過疎化の抑制・人口増加という、地域の実態に合わない達成不可能ともいえる目標をあえて掲げてはいない。

それよりも、急激な近代化の進行こそが上流域に様々な問題をもたらしたと明確に位置づけた。そして水を命の源となぞらえ、その源である上流域の自然環境と、山村生活の中で地域の先人が培ってきた農山村文化を見直すことから、まちづくりを再度進めていくことを基本的考えとした。さらに、それをベースに新しい農山村文化や暮らしを創造し、長期的な視点からまちづくりを展開することで諸問題解決の糸口を探り、それらを実践して生まれた新しい地域のすがた・哲学・行動を、全国に向けて提唱していくことを試みている。(表4参照)

表4　「上流圏構想」の思想

日本・上流文化圏宣言 早川に根ざし 早川に生きる その信念と行動の規範です

・早川の清流のごとく一絶えず 滞まず 流まず
晴れの日も雨の日も早川は流れ続けます。私たちは、この上流圏に生き努力を惜しまないながら、下流の文明を支え続けた先人を誇りとし、その歴史と遺産を継承していきます。そして、早川の水の姿に学びながら、地域を見つめ、もえを出し、汗を流しながら、きょうをあすに伝えていきます。
〈農山村文化の見直し〉

・南アルプスの峰々のごとく一清らかな理想を高くかかげ
青い峰々は朝日に映え夕日に輝きます。厳しい山村にくらしながらも、その美しさに私たちは自然への感動と生きる喜びを新たにします。私たちはこの南アルプスの崇高な姿に力強く清新な地域に生きる使命を見出し、あすの地域の理想のすがたと、その地域に生きる人々くらしのあり方を追い求めます。
〈新しい文化や暮らしの創造〉

・蒼空にまたたく星のごとく一地域を光きらめかせる
澄みきった大気のなかでは、真昼でも大空に星がまたたきます。山あいの小さな平面であるこの早川には、固有の哲学が光り、美しい風景が光り、やさしい人の心が光ります。時をかけて磨きぬき、百らきら輝くような、そんな地域の姿をめざして、私たちはいま行動を始めます。ゆっくりとしかし確実に、私たちのふるさと早川を創り続けます。
〈長期的視点での地域づくり〉

上流圏構想の基本的な考え方 **〈全国へ向けて提唱〉**
山梨の一山村 南アルプス邑 早川町から全国へ呼びかけます
早川がいち早くかかげる「日本・上流文化圏構想」
■地球規模での視点　■緑と水に恵まれた日本からの発想
21世紀中100年かけてすすめる別名「早川・22世紀計画」
■100年先の地域のビジョンを目指す　■人を育てながらの21世紀の行動計画
これからの10年間の行動指針が「早川町第4次総合計画」
■南アルプス邑計画の継承　■日本・上流文化圏宣言と3つのシンボル施策

5-3.「上流圏構想」推進の3つのテーマ

この構想を進めるにあたって、早川町の方言(注11)をキーワードとした3つの計画推進のテーマを掲げた(図7参照)。

図7　「上流圏構想」推進のテーマ

①第3次総合計画の「旧村一拠点」を継承し、各地区の風土・歴史・文化・暮らしを際だたせ、固有のビジョンを描く「みんなで"かたる"むらづくり」

②それぞれが個性を競い合うことによって、町全体が個性的なものになる「全町で"まるかる"早川のくにづくり」

③町内外から知恵を出し合い、多くの人と協力して進める「ふるさとを息づかせる"ゆうげぇし"」

5-4.「上流圏構想」の3つの重点施策

「上流圏構想」が掲げる3つの重点施策を以下に示す。

①上流域が育んできた文化や暮らし，そして自然環境を見直すことから始まる「上流文化圏にふさわしい環境とくらしと文化の創造」

②それらをベースにして，新しい地域の姿を提案する「上流文化圏の核になる第7のむらづくり(注12)」

③その実現へ向けて町民を巻き込んだ研究活動を展開し，その成果を全国へと情報発信する「ひろくちえと心をあつめた日本上流文化圏研究所の開設」

6.「日本上流文化圏研究所」の概要

6-1.「研究所」の位置づけと役割

前掲のように「研究所」の設立は，「上流圏構想」の重点施策の中に明記され，今後展開されるまちづくりの中で中心的な役割を担っていく研究機関とされている。その役割は，「上流圏構想」に描かれた地域の将来像の実現を目指し，「地域資源の発掘・活用」「新しい農山村文化と暮らしの創造」「住民参加によるネットワークの構築」「それらの成果の全国への情報発信」といった，様々なまちづくり活動や地域文化の研究を町民とともに進めていくことである。

6-2.「研究所」の組織と運営

「研究所」は正式には，早川町の企画振興課に位置づけられ，事務室及び研究室は，五箇地区の交流促進センター内に設置されている。運営の財政的側面は現在のところ全て町に依存しており，研究活動ごとに企画振興課の予算として割り当てられている（表5参照）。

「研究所」の組織は，図8に示すように，常任理事会を中心に構成されている。また，全国のまちづくり活動家をネットワーク理事・研究協力員(注13)と位置づけ，人材のネットワーク化を図っている。

表5　「研究所」の予算

平成8年度（総務費の総務管理費の企画費より）
総額12,105,977円
（うち国土庁過疎地域集落整備事業　5,150,000円）
平成9年度（総務費の総務管理費の企画費より）
総額10,262,760円
（うち山梨県地域づくり推進事業費　1,350,000円）

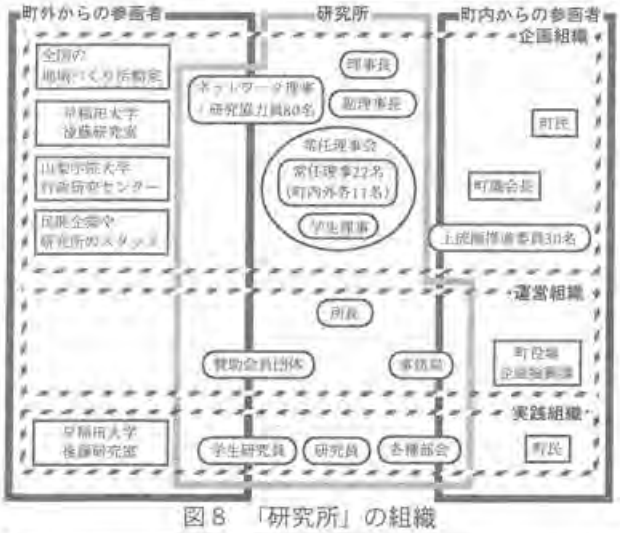


図8　「研究所」の組織

研究活動は常任理事会で立案され，ネットワーク理事・研究協力員に意見を求めたり，協力の要請をする。

そして専従の研究員と学生研究員各1名，及び事務局である町役場企画振興課の2名が，主に研究活動を推進し「研究所」の運営を行っている。

さらに，研究活動の一年の成果は町民によって組織された「上流文化圏推進委員会(注14)」でチェックされ，次年度の研究活動の企画や進め方に活かされる（図9参照）。

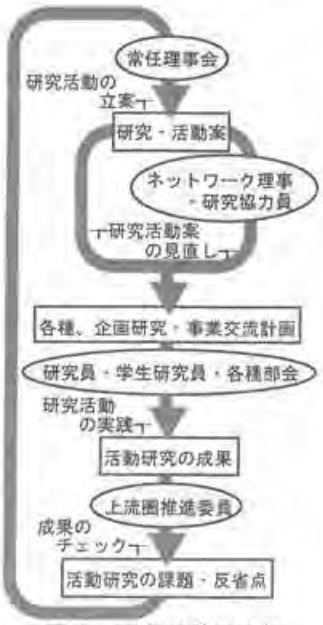


図9　研究活動の流れ

6-3.「研究所」の研究活動のプログラム

「研究所」の研究活動は，地域の潜在的な資源を掘りさげる虫の目の視点と，地球的な規模でまちづくりの戦略を眺めわたす鳥の目の視点。また上流域である中山間地域からの発想と，その対極に位置づけられる下流域の都市部からの発想をクロスオーバーさせた，7つの調査研究と2つの実践活動が，当面の研究活動のガイドラインとして定められている。そのガイドラインの内容，またそれぞれの位置づけと流れを図10に，研究活動の具体的なプログラムを図11に示す。

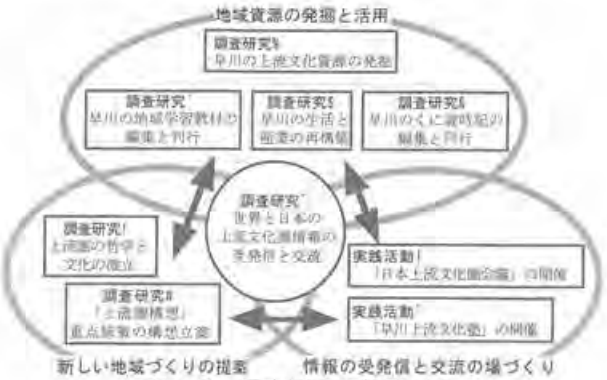


図10　研究活動の位置づけ

7.「研究所」の研究活動内容

ここでは，「研究所」の具体的な研究活動内容を報告する。

7-1.地域資源を発掘し活用する取り組み

7-1-1.遊びの歳時記づくり（調査研究⑤）

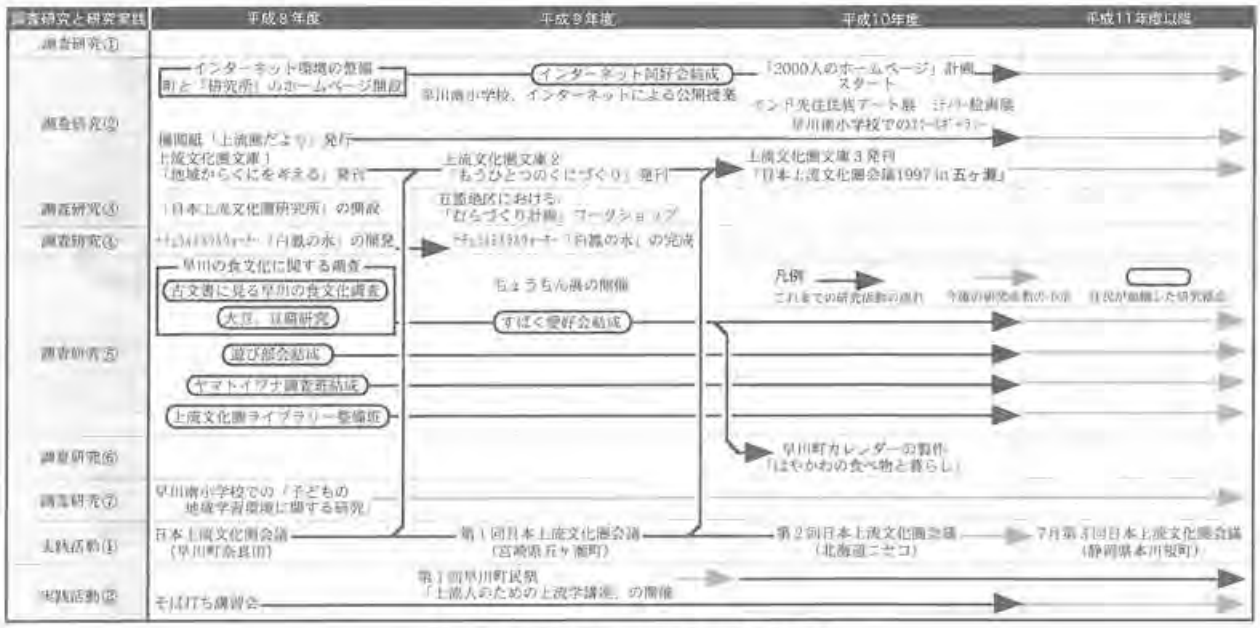


図１１　研究活動の内容とプログラム

小学校長を中心とする「遊び部会[注15]」では、お年寄りへのヒアリングなどを通し、農山村の昔の遊びの収集と同時に、町の内外から多くの客を集める町のイベント（山菜祭りとそば祭り）において、昔の遊びの体験コーナーを開いた。成果は歳時記という四季の時系列を通してまとめている。

7-1-2 ナチュラル・ミネラルウォーターの商品化（調査研究④）

町の特産品の開発・販売を手がけてきた南アルプスふるさと活性化財団と、「研究所」が協力し、湧水を活用したナチュラル・ミネラルウォーター「白鳳の水」の商品開発を行った[注16]。

7-1-3. 食文化調査と早川町カレンダーの制作（調査研究⑤、⑥）

古文書に見られる早川の食文化調査や、高品質とされる町内産の大豆を使った料理に関する研究活動を続けている。成果の一つとして、早川の伝統食「すばく」に着目した「すばく愛好会[注17]」が発足した。

また平成11年の町が発行するカレンダーの制作を「研究所」が請け負い、これまでの食文化調査の成果を題材にした[注18]。

7-1-4. その他の研究活動

その他には、釣り愛好家によるヤマトイワナ[注19]の生息状況の調査、上流文化圏ライブラリーの整備[注20]なども行っている。また平成８年度には、学生研究員が、早川南小学校を対象とした子供の地域学習環境に関する研究[注21]をまとめた。

7-2. 情報の受発信と交流の場づくりへの取り組み

7-2-1.「上流文化圏会議」の開催（実践活動②）

「上流圏構想」の思想を全国に呼びかける活動として、「上流文化圏会議」を開催している。これは、「上流圏構想」に共鳴した全国のまちづくりの活動家が持ち回りで主催し、これからのまちづくりや国土計画について現場の視点から議論や意見交換をしようとする試みである。平成８年３月の早稲田大学でのプレ会議を皮切りに、同年８月は早川町、平成９年11月は宮崎県五ヶ瀬町、平成10年７月には北海道ニセコ町にて地元民間活動団体の主催で開催した（表６参照）。これらの会議には理事長である下河辺淳をはじめ全国各地から「上流圏構想」賛同者が無償で多数参加し、手づくりの会議の中で、忌憚のない意見交換や、活発な議論が繰り広げられ好評を得ている。

また会議の記録は「日本上流文化圏文庫」[注20]として「研究所」が発刊している。

表６　「上流文化圏会議」のテーマと参加者数

開催日 開催場所	メインテーマ ・サブテーマ	参加者数（[ ]内は早川町民） 主な参加者（参加者名簿より）
平成8年3月31日 早稲田大学	「地域から活を考える」 ・上流にをきる ・上流からの視点	70人 （3名） 大熊政孝／善松入行／藤井敏三郎／松塚信吾／ほか
平成9年 8月30,31日 山梨県早川町 奈良田	・フォッサマグナの町づくり ―もうひとつのくにづくり宣言― ・ようこそ上流文化圏へ早川へ ・十年間計画論 ・地域で生きる未来を展望する ・千年と宇宙	[31名] [10名] 秋本治／小村次夫／岡崎昌之／酒田文雄／若林徹子／久永由敏／黒木靖夫／長野和男／中谷健太郎／ほか
平成10年 11月2,3日 宮崎県五ヶ瀬町 やまめの里	「日本のブナ帯文化圏生を目指して ―もうひとつのくにづくり―」 ・新しい森と地域の哲学とくらしの創造 ・消えゆく森のくらしとその再活 ・ブナ帯文化とツーリズム	[18名] [4名] 後藤誠二／横方克雄／近藤康孝／鈴木輝雄／辻一郎／林のり子／結城登美雄／ほか
平成10年 7月23～25日 北海道ニセコ町	・フロンティアとコモン ・花の一撃　コモンがもみ出す（はの字の大地） ・市場原理からの脱出へ（21世紀の「ロハ」） ・自由闊達なネットワーク社会へ（共生）（遊戯の人生論） ・森と水、豊かな成域社会の創造	[124名] [6名] 小澤俊子／中野信一／宮崎敦／水野忠義／ほか

7-2-2.「早川町民塾」の開催（実践活動①）

平成９年度、山梨学院大学の教員を講師として招き、４回に渡って町民を対象とした講座「早川町民塾」を開催した（表７参照）。この塾は地域の食文化を味わいながらの井戸端会議的雰囲気の懇談が効を奏し、毎回定員を

表７　「早川町民塾」の内容

	開催日	テーマと参加者数（定員30人）	
1回目	9月6日	「高齢者の多い地域の内発的発展」	58人
2回目	9月13日	「水の循環と暮らし」	35人
3回目	9月27日	「登山と地域振興」	32人
4回目	10月25日	「もっと知りたい人のための追加講座」	38人

超える町民が参加し、活発な意見交換がなされた。

7-2-3.インターネット環境の整備（調査研究②）

町では平成8年9月にサーバーを立ち上げ、ホームページ(注21)による情報発信とともに、町内の公的機関や教育機関などとの情報ネットワークの強化を図っている。

特に早川南小学校では、授業におけるインターネットによる情報収集、児童や教師が制作したホームページ(注22)の開設など、インターネットの活用に意欲的で、平成8年11月には、同校の教師や父母を交えて研究を重ねた結果、授業風景を全国にリアルタイムで発信することができた。

それを機に、町民によるインターネット同好会(注23)が発足し、町のサーバーを利用した住民の電子メールのやりとりやホームページの開設・閲覧などが可能となった。

町のホームページの更新は「研究所」が全面的に手がけ、開設2年半で16,000人のアクセスを集めるまでになった。また、全町民を紹介する「2000人のホームページ」の制作も早稲田大学後藤研究室の協力のもと始まっている。

7-2-4.その他の研究活動

その他に、町民にこれまでの研究活動の成果と途中経過を報告するとともに、活動への参加を呼びかける機関誌「上流圏だより」を季刊で発行している。また、研究所主催のそば打ち講習会を適宜開催している。

さらに、全国各地で開催されるまちづくり活動への協力要請にも積極的に応えており、研究員・学生研究員は各地のイベントやシンポジウムのスタッフとして企画段階から参加している(注24)。

7-3.新しいまちづくりの提案への取り組み

7-3-1.「むらづくり計画」策定ワークショップ（調査研究③）

「上流圏構想」推進のしくみの一つである「みんなで"かたる"むらづくり」を受けて、それぞれの地区での住民参加型ワークショップによる「むらづくり計画」策定を進めている。

平成9年度は、五箇地区を対象に、早稲田大学後藤研究室の協力のもと、2回のワークショップを開催し、地区の問題点、交流促進センターの活用方法などの意見収集(注25)を行っている。

8.「上流圏構想」と「研究所」の総括

8-1.「上流圏構想」の総括

時代の転換期といわれ、将来の見通しが立てにくい現在において、地域の将来像を明確に描いた「上流圏構想」の思想と試みを以下に整理する。

①新しい農山村文化の創造

②自然と共生した暮らしの創造

③長期的ビジョンに基づくまちづくりの創造

④住民参加による新しい地域のすがたの提唱

⑤地球規模で事柄を考える新しい地域哲学の提唱

⑥長期的視点に立った新しい地域の行動の提唱

これらの、全国的にも訴求力のある総合計画策定を可能とした手法は次の通りである。

第4次総合計画の「上流圏構想」策定のプロセスに、「50人審議会」と「ゆうげぇし集会」に端を発する町外の活力を積極的に導入したことで、町内外の意見収集と知恵の交換ができた。また、これらの手法は、将来像の実現へ向けた「研究所」設立のための、町内外のサポート体制の基礎を築くことにも効果を奏した。

8-2.「研究所」設立の総括

「上流圏構想」に描かれた将来像を実現するには、長期的な視点と多数の人々の参加が不可欠である。「研究所」の設立は、まちづくり活動と地域文化研究の充実のみならず、恒久的なまちづくりへの意志表明、日常的な住民参加によるまちづくり活動の展開が可能となったという点で非常に重要な試みであるといえる。

「研究所」設立における試みを、以下に整理する。

①住民とともに進める綿密な現地調査に基づき、地域を見直し、地域資源の活用計画を立てる

②住民参加を促し、町内のまちづくり活動のネットワークを構築し、その中心的役割を担う

③民間の企業、研究所にも人材を求め、研究を促進させるとともに、成果を社会に還元する手段を持つ

④全国の中山間地域と問題の共有化や解決へ向けて連携を図り、その姿勢・成果を全国的に発信する

これらは、五全総で計画実現の手法として明記された、「地域主体」「多様な主体の参加」「地域間の連携」を軸とした「参加と連携」方式を、先取りしたかたちで明確に打ち出し、また実践を試みている先駆的な例である。

8-3.「研究所」の研究活動の総括

「研究所」の研究活動の成果は、現在のところソフト的な部分が多く、目には見えにくいが、以下にこれまでの成果が得られている。

地域資源発掘と活用への取り組みでは、「遊び部会」「すばく愛好会」などの住民主体のグループが自主的に立ち上がり、「研究所」が掲げた研究活動を、住民が主体となって進めるようになった。また、イベントにおける体験コーナーの開催など、その成果を町民や子どもたちに還元する試みも行っている。

情報の受発信と交流の場づくりへの取り組みとしては、インターネット環境の整備を行うことで、町民の自由な情報受発信の機会が確保された。その一方で「上流文化圏会議」や「早川町民塾」を通して、直に全国の人々と交流する機会が得られ、町民のまちづくりへの参加意欲を向上させるとともに、諸問題解決へ向けて協力する試みが全国的規模で行われつつある。

新しいまちづくりの提案へ向けての取り組みでは、「研究所」が設立されたこと自体が成果である。さらに、少しづつではあるが、「研究所」が中心となって、住民参加型のまちづくりが着実に展開されている。

9.「研究所」が抱える課題

9-1.「研究所」が抱える課題の整理

「研究所」の設立と研究活動は有意義な試みではあるが、一方で様々な問題を抱えていることも確かである。これまでの取り組みで明らかになった「研究所」の抱える課題を洗い出し整理を試みた（図12参照）。以下に「研究所」が抱える３つの大きな課題を整理する。

①「研究所」の位置づけ…役場企画振興課という位置づけに無理があるため、「研究所」が様々な側面において自主決定権を有しておらず、自立した研究活動の展開、運営が保証されていない。

②「研究所」の組織…「研究所」の特徴でもある全国規模のネットワークに支えられた組織がうまく機能していない。また運営面においても、事務局へ過度な負担がかかっているなど、研究所としての仕組みが確立されておらず、研究活動を円滑に進めることが容易でない状況にある。

③「研究所」の認知…「上流圏構想」が掲げる思想、およびそれを背景とした「研究所」の研究活動が、町民がイメージする生活の改善に直接結びつきにくく、また「研究所」が取り組みの中で目に見える成果を上げるに至っていないので、町民に十分に理解されていない。

9-2.「研究所」の位置づけ

9-2-1.課題の詳細

組織から分かるように「研究所」は役場という枠組みを越えた研究活動を展開している。しかし役場企画振興課という位置づけのために、組織としての「研究所」が様々な自主決定権を持っておらず、取り組みの自由な展開の妨げとなっている。

図１２　「研究所」が抱える課題の因果関係

現在の位置づけに起因する具体的な課題を以下に整理する。

①独自の予算配分決定権がない（町財政の枠内でしか活動ができない）。

②自由な研究活動内容の決定権がない（行政の意志に反する活動はできないと予想される）。

③組織の長期的継続が保証されていない（政局の変化に組織の存続が左右される可能性がある）。

9-2-2.改善策と今後の方針

まず「研究所」の位置づけを役場から離し明確にするべきである。さらに法人格を取得し事業体として自立することが望まれる。

現在のところ、まちづくりの分野で活躍する法人は財団法人、社団法人、有限会社、株式会社などであるが、財団、社団は認められる公益の幅の狭さや主務官庁制による行政とのしがらみが問題であり、株式会社、有限会社は税制上の優遇が無く収益事業のない「研究所」としては資金面での問題が生じる。また特定非営利活動促進法は公益の幅や行政とのしがらみの問題点は解消されたが、現在のところ税制上の優遇措置は無く、どの法人格の取得が最善策であるかは今後見極めていく必要がある。

収益事業もなく財政面において行政に全てを依存している現在、法人格を取得し自立することは研究活動に支障をきたすことにもなりかねない。今後は収益事業の展開を視野に入れながら、数年後の法人格の取得を目指し、参画者とのコンセンサス、法人格取得後のシミュレーション、また準備を進めていかなければならない。

9-3.「研究所」の組織

9-3-1.課題の詳細

「研究所」の組織が必ずしも有効に機能しているとはいえない。以下に現状の課題を整理する。

①企画、運営、実践の組織分担が有効に機能していない（それぞれの役割分担が不明確）。

②事務局が弱体である（役場担当職員と専従研究員への負担が大きい）。

③全国的なネットワークが有効活用されていない（ネットワーク理事・研究協力員の位置づけが曖昧）。

9-3-2.改善策と今後の方針

①に関してはそれぞれの役割と関係を明確にしながらも、その枠組みを越えた動きが可能となる組織形態の確立が望まれる。②について事務局の増員は財政的に非現実的である。事務局以外の参画者に責任を持たせることも必要である。③については研究活動に対するアドバイザーとしての役割を明確にし、積極的な情報交換を図っていく必要がある。

その具体策としてとして、実践組織は研究活動ごとに一般町民を巻き込んだ研究部会を立ち上げ発案者がリーダーとなり、基本的にその研究班の活動展

開は発案者に責任を持たせることが望まれる。責任分担により事務局の負担軽減の効果も期待される。さらに研究活動の成果が有意義なものになるよう、町外の大学機関や民間研究所、あるいは全国の現場で実践するまちづくり活動家といった参画者には、研究部会のアドバイザーとして協力してもらうことが望まれる。

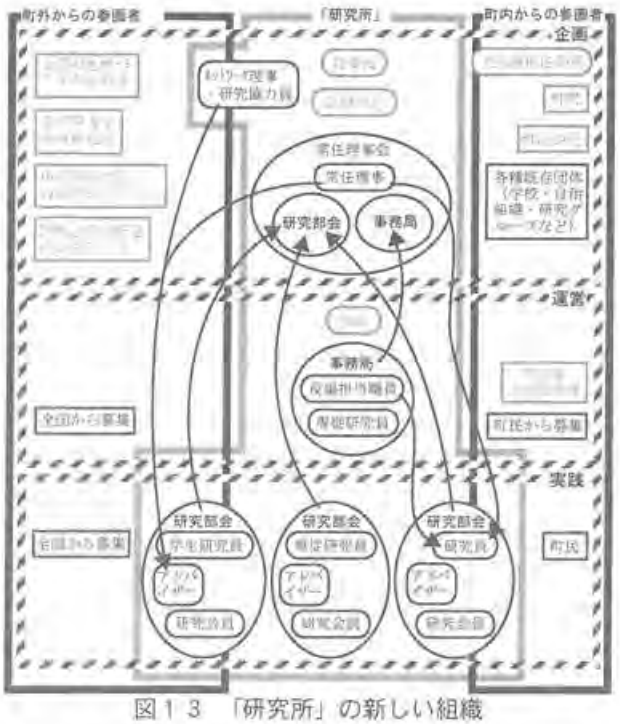


図１３　「研究所」の新しい組織

9-4.「研究所」の認知

9-4-1.課題の詳細

現状では町民から取り組みへの参加や理解などの支援を十分に得られていない。それは「上流圏構想」の思想とそれを背景とする「研究所」の研究活動が町民の日々の生活に密着していないこと、またこれまでの「研究所」の成果が目に見えにくいことが原因と考えられる。

9-4-2.改善策と今後の方針

まず町民の目に見える成果を上げること、町内への情報発信を強めていくことが重要である。

また町民の個人的な参画だけではなく、町内にすでに存在するまちづくりグループとの連携も深める必要がある。これまでまちづくりを進めてきた既存団体との情報交換、意見交換は理解や協力を進める有効な手段であると思われる。具体策として学校、自治組織、自主研究グループなどの団体を巻き込んだ研究グループの立ち上げや、共同での研究活動などを積極的に進めることが効果的であると考える。

ただし町民の理解を得づらい、あるいは成果が目に見えづらい研究活動も、長期的な展望のもとに取り組む必要性が生まれる場合もある。これに対処できるよう「研究所」に独自の行動指針を明確に打ち出せる研究能力が必要である。

10.中山間地域におけるまちづくり中間セクター計画論

10-1.既存団体への指針

これまでの考察から中山間地域に存在する様々なまちづくり中間セクターへの指針を提示する。

①目的の明確な小規模団体は成果をストックし、総合的なまちづくりも視野に入れ成果を地域に還元していく試みが求められる。

②「産業・経済」重視型の団体は、これまでの価値観にとらわれない新しい産業の創出が求められる。

③地縁自治組織は相互扶助的な面を活かし、福祉分野に力を注ぐことも一つの選択である。

④地域外との交流や情報収集に力を注ぎ、住民間のネットワーク的役割も担っている総合的まちづくり団体は、プロデューサー型組織への移行を視野に入れていくべきである。

10-2.プロデュース型組織の役割

プロデュース型まちづくり中間セクターと既存団体との関係、またその役割を整理し以下に述べる(図14参照)。

「まちづくり支援」…まちづくりを担う多様な主体を、情報、資金、ノウハウなど様々な面において支援する。

「地域内ネットワーク」…多様な主体とネットワークを築き地域の将来像の共有を図り、断片的な活動を総合化かつ構造化する。

「全国的ネットワーク」…全国的ネットワークを築き、情報、専門知識を収集し地域に還元する。

「研究能力」…地域の諸問題に対して専門的な知見と現場の視点から明確な回答を見いだし、独自の行動指針を立てる。

10-3.専門家のあり方

まちづくり中間セクターが育つか、また有効に機能するかは地域の状況に左右されやすく、財政的な側面、あるいは行政や住民の意識、首長の資質など個人の意識に収束してしまうのが現状である。これを乗り越えるためには、ある程度のリスクを負っても地域で行動できる専門家の育成とそれを支える仕

図１４　プロデュース型組織の役割

組みが必要である。

(注1) 地域づくり団体全国協議会が、各都道府県協議会に所属する地域づくり団体に実施したアンケート調査をまとめたもの。
(注2) 詳細は次の通りである。「住民」は自主的組織を、「行政」は都道府県、市町村を、「民間」は商工会議所、青年会議所、農協、その他各種団体をそれぞれ合わせたものである。
(注3) 詳細は次の通りである。「産業・経済」は農林業、商工、特産品、観光を、「福祉・教育」は福祉・教育、スポーツ・健康、人材育成を、「文化・環境」は芸術・文化、環境・景観を、「イベント・交流」はイベント、国際を、「全般」は全般をそれぞれ合わせたものである。
(注4) 早川町では『上流圏構想』の策定から4年を経て、以下の対外的評価を得ている。
全国農村アメニティーコンクール優秀賞受賞（平成6年）
三里地区「野鳥公園」が県建築文化奨励賞受賞（平成7年）
「小鳥がさえずる森づくり運動」環境庁長官賞受賞（平成8年）
(注5) 7段階とは、10万円未満、10万円以上50万円未満、50万円以上100万円未満、100万円以上200万円未満、200万円以上500万円未満、500万円以上1000万円未満、1000万円以上である。
(注6) 旧6ヶ村とは西山村、三里村、都川村、硯島村、五箇村、本建村である。昭和31年の合併を経て、それぞれ、西山地区、三里地区、都川地区、硯島地区、五箇地区、本建地区となった。
(注7) 西山地区の焼畑農工用具が国定指定農耕具、重要有形民俗文化財に、本建地区赤沢が国選定重要伝統的建造物群保存地区に、西山地区奈良田の生活用具が県指定民具になっている。
(注8) 産業別人口構成は、一次産業が9％、二次産業が37％、三次産業が54％である。高齢化率、産業別人口構成はともに平成7年国勢調査より。
(注9)「50人審議会」とは、第3次総合計画策定に住民代表として携わり、策定後は諮問機関となった、青年、婦人、各種団体の代表者などからなる組織である。任期は2年間であるためメンバーは入れ替わったが、町民の意見を計画に反映させることに有効に機能したとの評価から、第4次長期総合計画策定まで携わった。
(注10) 旧村一拠点によって建設された施設は以下の通りである。
西山地区：奈良田の里（歴史民俗資料館、白旗史朗山岳写真館、ほか）
三里地区：ヘルシー美里（温泉・宿泊研修施設）
都川地区：草塩温泉（温泉）
硯島地区：ヴィラ雨畑（温泉・宿泊研修施設）
五箇地区：交流促進センター（生涯学習・交流施設）
本建地区：南アルプスプラザ（レストラン・物産販売施設）
(注11) 使用された方言の意味を説明する。"かたる"とは、誘いあって仲間に加わり、参加すること。"まるかる"とは心を一つにして、力を合わせ行動すること。"ゆうげぇし"とは互いに知恵と力を出し合うこと。結返しの意。
(注12)「第7のむらづくり」とは、第3次総合計画で掲げられた「旧村一拠点」の次の展開として示された、早川町全体の拠点となる施設や場所をつくる計画のこと。
(注13) ネットワーク理事・研究協力員とは、上流圏の活動をそれぞれの立場からサポートする人々で、全国各地のまちづくりの活動家と民間の企業や研究所のスタッフなど、約80名で組織されている。
(注14)「上流文化圏推進委員」とは、町長の諮問に応じて「上流圏構想」の進捗状況などを調査審議し意見を具申する組織。青年、婦人、各種団体の代表者など30名の町民からなる。
(注15) 遊び部会は早川南小学校の校長（常任理事）が中心となり、地域のお年寄り8人とともに平成8年に発足した。平成11年1月現在、会員数13名。
(注16) ボトルのデザインは、常任理事であるデザイナーの水野卓史が手がけた。
(注17) すばくとは、丸麦を使った麦飯で、山梨県峡南地方の郷土食である。愛好会は、三里地区茂倉に住むお年寄りを中心に設立され、平成11年1月現在、会員数15人である。
(注18) 題材は「鹿打ち」「豆腐」「七面山坊」「山菜」「茶」「渓流釣り」「すばく」「握り飯」「山ぶどう」「山蜜」「そば」「ハム・ソーセージ」であり、どれも現在でも町民の食生活に結びついているものである。
(注19) ヤマトイワナとは、イワナの中でも中部山岳地帯の太平洋側の渓流だけに棲息する貴重種である。
(注20) 上流文化圏ライブラリーの整備では、これまでに早川町を対象にした調査研究に関する書籍や資料の収集活動を行っている。
(注21)「山梨県早川町における子供の地域学習環境に関する研究　－地域学習教材の開発に向けて－」1997年日本建築学会大会学術講演概要集6042参照。
(注22) 早稲田大学、早川町、五ヶ瀬町での会議の記録は、上流圏文庫①「地域から国を考える」、上流圏文庫②「もうひとつのくにづくり」、上流圏文庫③「上流文化圏会議 in 五ヶ瀬」として発刊されている。
(注23) URLはhttp://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/
(注24) URLはhttp://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/MINAMI/
(注25) 会員数は平成11年2月現在32名。月に一度程度集まり、インターネットのノウハウや、ホームページの作り方などの勉強会を開催している。
(注26) これまでに協力した各地でのまちづくり活動は、
平成8年12月、静岡県豊岡村：「日本列島どまんなかの会」フォーラム
平成8年12月、新潟県高柳町：月湯女温泉活性化会議
平成9年3月、長野県高森町：生活文化フォーラム
平成9年8月、新潟県高柳町：地域資源商品化専門委員会
平成9年10.11月、北海道新得町：第2回「SHINTOKU空想の森映画祭」
平成9年11月、新潟県高柳町：「素材への回帰展」
平成10年9月、北海道新得町：第3回「SHINTOKU空想の森映画祭」
(注27) 一回目は平成9年4月、旗揚げアンケートによる地区の課題のアンケート調査。二回目は平成9年10月、ポラロイドインタビューによる交流促進センター活用方法の意見収集。

(文1) NIRA研究報告書「市民公益活動の促進に関する法制度のあり方」(1996年5月)など
(文2) NIRA研究報告書「市民公益活動の促進に関する法制度のあり方」(1996年5月)など
(文3) 高見澤邦郎ほか　住宅総合研究財団研究年報No.21「まちづくり中間セクターの実態と非営利まちづくり組織への展望」(1994年)・卯月盛夫　日本建築学会計画系論文集「住民の主体的なまちづくり活動を支援する『まちづくりセンター』に関する考察　世田谷まちづくりセンターを事例として」(1995年4月)
(文4) 経済企画庁国民生活局「市民活動レポート　市民活動団体基本調査報告書」大蔵省印刷局(1997年4月)
その他参考文献
日本都市計画学会　都市計画No.194「市民まちづくりとNPO」(1995年)
地域づくり団体全国協議会「全国地域づくり団体プロフィール集」(1995年8月)
日本地域開発センター　地域開発382「まちづくりとNPO」(1996年7月)
日本地域開発センター　地域開発398「農村型第3セクターの課題と展望」(1997年11月)
東京市政調査会　都市問題 第88巻 第4号「市民セクターの可能性」(1997年4月)
山岡義典ほか「NPO基礎講座　市民社会の創造のために」ぎょうせい(1997年9月)
林知己夫・入山映「公益法人の実像　統計から見た財団・社団」ダイヤモンド社(1997年10月)
(財)ハウジングアンドコミュニティー財団「NPO教書　創発する市民のビジネス革命」風土社(1997年12月)
下河辺淳ほか「ボランタリー経済の誕生　自発する経済コミュニティー」実業之日本社(1998年1月)
地方財務 第525号『岐路に立つ第3セクター』ぎょうせい(1998年2月)
国土庁地方振興局半島振興室『『地域づくりボランティア活動等の今後の役割と課題に関する調査』報告書』(1998年3月)
山岡義典ほか「NPO基礎講座2　市民活動の現在」ぎょうせい(1998年8月)
松下啓一「自治体NPO政策　協働と支援の基本ルール　[NPO条例]の提言」ぎょうせい(1998年11月)
総理府「平成10年度公益法人白書　公益法人に関する年次報告」大蔵省印刷局(1998年12月)

平成11年度　学生研究員研究論文

まちづくり学習から見た地域学習の可能性と限界に関する研究

石川　宜裕
平成11年度早稲田大学卒業論文

第1章　はじめに

1-1　研究の背景

中山間地域では将来のまちの担い手である若者が極端に減少してしまう現状があるなか、子どもがまちを理解し、まちで生きていくことを決断させるようなまちづくり学習が必要である。

子どもが学校で地域[注2)]のことを学ぶ最初で最後の機会は、小学校3年生の社会科で行われる地域学習で、まちづくり学習の中でも大きな役割を果たす。

また、2002年には中央教育審議会の最終決定により教育基準の課程が改善される。さらに、「総合的学習時間」が設けられ、地域を学ぶ機会がより要求される。

以上より、中山間地域における地域学習の役割について見直す時期に来ているのではないだろうか。

1-2　研究の目的と方法

本研究は、地域学習の可能性と限界を明らかにすることでまちづくり学習から見た地域学習の有効性を明らかにすることを目的とし、はじめに教師へのヒアリングをもとに地域学習の現状を明らかにする。次に子どもの地域学習に対する興味関心、そして、地域学習の成果を学生へのアンケート調査で明らかにする。以上の2つより、地域学習における限界点を明らかにし、2002年以降その限界点が克服されるかを明らかにする。その結果をもとに、今後の展望を示唆する。

図2　早川町図

1-3　既往研究と研究の位置づけ

子どもが地域学習によりまちの担い手としての意識をどのように芽生えさせるかについての研究はあまりなされていない。

本研究は、地域学習の限界点と可能性を明らかにすることで、今後の地域学習のあるべき姿を探る研究に位置づけられる。

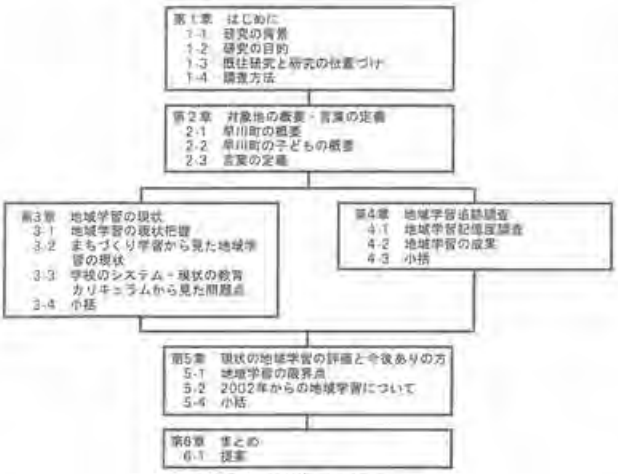


図1　研究のフロー

第2章　対象地の概要・言葉の定義

2-1　早川町の概要

早川町は昭和29年に制定された「僻地教育振興法」により同年僻地指定を受け、各小中学校には様々な施設が整えられた。しかし、少子化に伴い、6

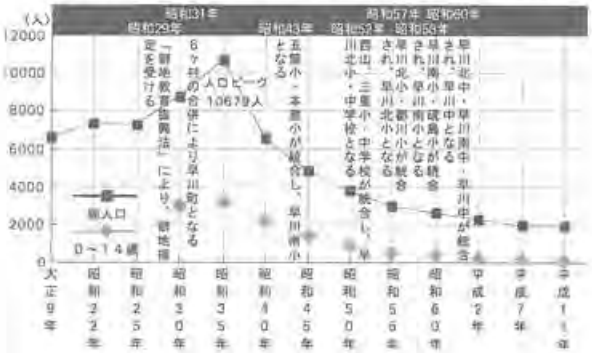


図3　早川町人口推移[注6)]

地区に1校ずつあった小中学校は、昭和58年に早川南小学校、早川北小学校、早川中学校という現在の状態になった。(注5)

早川南小学校では吹奏楽、早川北小学校では民話劇に力をいれ、学校全体で特色ある教育を積極的に行っている。

2-2　早川町の子どもの概要

平成11年9月1日現在の子どもの数は、北小学校20人、南小学校37人、早川中学校39人である。集落間が離れており、集落内にも同年代の子どもが少ないため、遊び仲間がおらず、外で遊ぶ機会が少ない。

2-3　言葉の定義

まちづくり学習

まちづくりに関わっていく意欲や態度の基礎的力を養うことを目的とする学習。まちづくり学習の目標は、「まちつくり研究・第23号」(注7) の「まちつくり学習の展望」の中のまちつくり学習の視点の4項目が挙げられる。

1.身近な環境を様々な教科・立場で利用すること
2.問題提起的、問題発見的であること
3.直接反応を高めること
4.未来へのイメージを共有すること

以上を本研究でもまちづくり学習の目標をして使う。

地域学習

文部省によると地域学習とは3、4年生の社会科の授業のことを指すが、本研究では自分が生まれ育った地域のことを学ぶ小学校3年生の社会科の授業を特に指すものとする。地域学習の目標として、「文部省告示小学校学習指導要領」(注8) の中の「社会の目標」の5項目が挙げられる。

1.地域社会の一員としての自覚を持つようにする
2.地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにする
3.地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする
4.地域社会における社会的事象を観察、調査し、地図や各種の具体的資料を効果的に活用し、調べたことを表現する
5.地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力を育てるようにする

以上を本研究でも地域学習の目標として使う。

第3章　地域学習の現状

早川町の小学校ではどのような地域学習が行われているのかを把握するために、1999年8月5日から8月23日にかけて、早川北・南小学校において3年生の社会科の授業を受け持った、北小学校過去5年間、南小学校過去10年間の教師、合わせて15人にヒアリング調査を実施した。

3-1　地域学習の現状把握

3-1-1　目的意識

地域学習の目的は、地域を知ることではじめて他のまちと比較することができ、自分の住んでいる地域を見つめ直すことができることから、「まちを知ること」と全ての教師が答えた。

3-1-2　授業形態

教師によって、「調べ学習」(注9) 中心と「見学・体験」(注10) 中心に分かれる。15人の内、前者が8人、後者が7人であった。

1内容に対しての1サイクルは、『授業開始→調べ学習→見学・体験→まとめる』のパターンである。

見学・体験後の子どもの反応は、見学や体験を通しての授業の方がいきいきしており、特に身近な内容に対して興味を示していると教師は感じている。

3-1-3　子どもへの成果

授業後の子どもへの成果は、地域に対しての関心は少し高まる程度にとどまり、授業を通じて伝達力・活用力などが高まったと教師は感じている。また、ほとんどの教師が、「3年生の授業で地域に対して何かを感じ取り、今後に影響を与えるものは難しいのではないか」と答えている。

3-1-4　学校のシステム

昭和29年の僻地指定により、県内の教師は若い時、ベテランになってから、各3年ほど僻地に赴任するが、その期間が短いため、教師自身が地域についてよく知らないというコメントが多く得られた。

3-1-5　現行の教育カリキュラム

小学校3年生で社会科の授業を行える時間数は決まっており、1単位45分で70単位時間である。そ

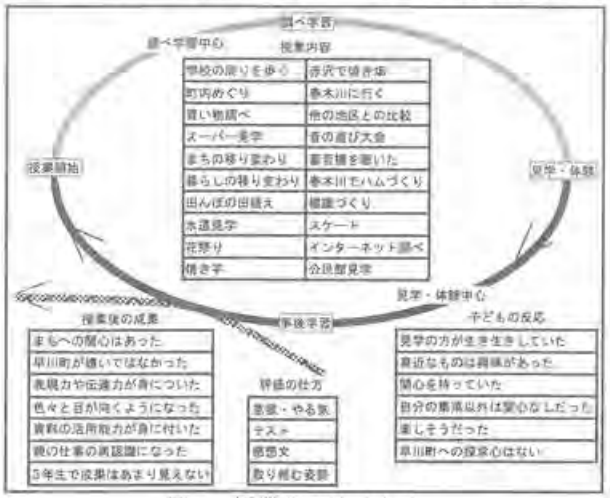


図4　授業の1サイクル

の中で教師は「調べ学習」、「見学」などを行わなくてはいけない。そのため時間調整に苦労するというコメントが得られた。特に「見学・体験」は1週間分の授業数を使うので、見学ばかりしているわけにはいかないというコメントも得られた。そして、地域の人に話を聞く機会を持つためには、学校に多くの書類を提出しなくてはいけないなど手続きが面倒で、さらに予算の関係など、その機会を持つことは難しいことが分かった。

3-2　まちづくり学習から見た地域学習の現状

3-2-1　目的意識

まちづくり学習の目的は「地域の仕組みを知ること」である。これより、まちづくり学習において地域学習は「地域の仕組みを知ること」への掘り下げができていないことが分かる。

3-2-2　授業形態

まちづくり学習の目的の一つに、「未来へのイメージを共有すること」がある。現行の地域学習の中では担任に授業は一任されており、教師個人によって授業の捉え方が変わってしまうというコメントが得られた。これより、早川町民として、子どもたちは未来へのイメージを共有することが難しいことが分かる。

3-3　学校のシステム、教育カリキュラムから見た問題点

学校のシステム、教育カリキュラムから見た問題点とそれに対して学校や教師の役割を明らかにする。(図5参照)

3-3-1　目的意識

3-2-1で「地域の仕組みを知ること」への掘り下げができていないことが分かったが、その原因の1つとして教師の赴任期間が3年ほどと短かく、教師自身が地域のことをよく知らないことが挙げられる。

3-3-2　授業形態

3-2-2で「未来へのイメージを共有することが難しい」ことが分かったが、これは校区が広すぎ、見学にしても充分な見学ができず、さらに教師が地域を知らないためにその限られた時間で子どもにその見学の意義を植え付けることができないためである。

3-4　小括

教師から見た地域学習の目的意識は「まちを知ること」であり、まちづくり学習という観点はほとんど含まれておらず、まちづくり学習から見ると掘り下げができていない。その要因の1つとして教師が地域のことをよく知らないためであることが挙げられる。

表1　アンケート回収率

	配布数	回収数	回収率	配布日	回収日
北小学校	15	15	100%	9月9日	9月20日
南小学校	24	24	100%	9月9日	9月10日
早川中学校	39	38	97.4%	9月9日	9月14日
高校生	27	15	55.6%	9月14日	9月27日
19歳から22歳までの学生	33	16	48.5%	9月14日	9月27日
合計	138	108	78.3%		

地域学習の現状

現行のまちづくり学習の問題点

学校システム・教育カリキュラムの問題点

学校と教師の役割

目的

授業形態

子どもの評価

まちづくり学習については特に考えていない

地域学習の目的は「地域を知ること」

学習が発表にとどまり、掘り下げることが出来なかった

自分でどこまで掘り下げるかなどを決めるのに悩んだ

教科書で知識を詰め込むだけになってしまう

もっと子どもに主体的にやらせて高めればよかった

まちづくり学習の目的は「地域の仕組みを知ること」

教師個人の捉え方によって地域学習は異なってくる

どのような方法で地域のことを教えていいのかわからなかった

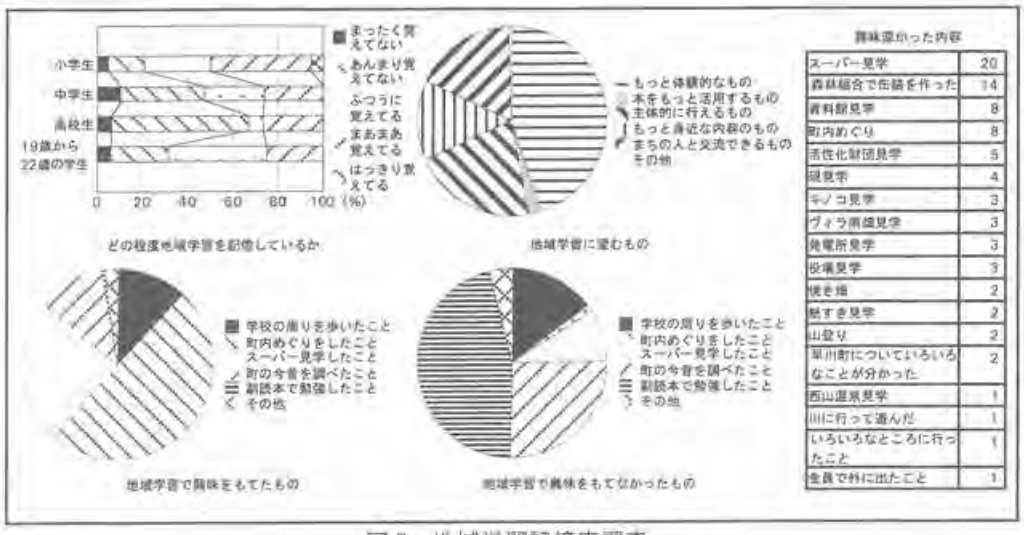
見学するとき何に注目してみていいのかわからなかった

学校と地域との交流があまりない

先生の役割

学校の役割

図5　地域学習の現状



スーパー見学	20
森林組合で缶詰を作った	14
資料館見学	8
町内めぐり	8
活性化財団見学	5
現見学	4
キノコ見学	3
ヴィラ南蛇見学	3
発電所見学	3
役場見学	3
焼き畑	2
結すき見学	2
山登り	2
早川町についていろいろなことが分かった	2
西山温泉見学	1
川に行って遊んだ	1
いろいろなところに行ったこと	1
全員で外に出たこと	1

図6　地域学習記憶度調査

供が未来へのイメージを共有することが難しいことが分かった。

第4章　地域学習追跡調査

この章では地域学習の授業で行ったことがどれほど達成されているかを早川町の小学校で地域学習の授業を学んだ小学校4年生から22歳の学生までへのアンケートをもとに探る。このアンケートは表1のように実施した。

4-1　地域学習記憶度調査

図6は、どの程度地域学習について覚えているか、興味をもてたもの、もてなかったもの、そして、どのような授業を望んでいるかについてのアンケート結果である。

まず、どの程度地域学習を覚えているかについては、年齢が上がるにつれて記憶度が減少しているということが読みとれる。これより、後々まで記憶に残る地域学習が今のところやや出来ていないことを示している。

次に、興味をもてたものは、多くが「町内めぐり」「スーパー見学」であることが分かった。また具体的内容は、「森林組合で缶詰を作ったこと」など、「町内めぐり」の中の出来事が多い。

興味をもてなかったものは、「本で勉強すること」、つまり、調べ学習が興味の対象とならなかったことが分かる。

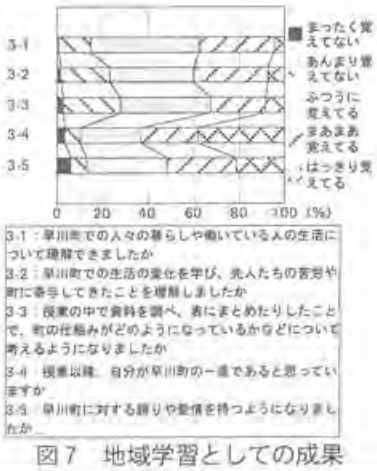


図7　地域学習としての成果

地域学習の授業に望むものとして「体験的なもの」「主体的なもの」「まちの人と交流できるもの」であることが分かる。この結果から、子どもは実際に体を動かし、自らの力で地域の人たちとふれあいながら、地域を体験していきたいと望んでいることが分かる。

4-2　地域学習の成果

ここでは、地域学習の成果として、社会科の授業としての成果とまちづくり学習としての成果を考える。

4-2-1　社会科の授業としての成果

社会科の授業としての成果を考える上で、その評価を図7の5項目、5段階でアンケートをおこなった。特徴的なのは、6割以上の人が「自分は早川町の一員であると思っている」に「まあまあ」以上に印を付けていることである。また、半数が「早川町に対して誇りや愛情を持つようになった」に「まあまあ」以上の印を付けている。

これらのことから、「自分は地域の一員であると思っているか」と「早川町に対して誇りや愛情を持つようになったか」は社会科の授業としての成果を達成しており、他の3項目については社会科の授業としての成果が達成されていないことが分かる。

表2　新しい発見一覧

自然環境	空気、水がきれい、おいしい	28
	自然の豊かさ	19
	自然で遊べる	5
	山が多くある	5
	自然の恐ろしさ	2
	早川町は涼しい、秋、紅葉が美しい	1
	他のところとくらべると寒い	1
人・人口関係	人の優しさ	2
	早川町の子どもは南北関係なく一緒に遊ぶのが楽しい	1
	谷年寄りはみんな元気だった	1
	人口が東京の方が多い	2
	昔はもっと人口が多かったこと	1
	人口は少ないが、他市町村に誇れるものを持っていることを発見した	1
生き物関係	生き物の多さ	4
	早川町は蛇が多いことを発見	1
産業関係	産業があること	5
	早川町は他の町に比べて、ダンプが多く走っているように思った	1
伝統関係	東京よりも早川町の方が、民話が多い	1
	大きな杉の木がずっと昔からあったことにとても驚いた	1
その他	落ち着ける	6
	北小の改修	2
	以外と知らない集落がたくさんある	1
	都市と田舎の違いに驚いた	1
	今と違う生活を味わってみたい	1
	私は驚いた	1

表3　まちをこうしたい一覧

お店・病院をつくりたい	23
自然豊かな早川町	12
人口を増やしたい	9
便利なまちにしたい	3
交通の便を良くしたい	3
今のままの早川町	3
観光を増やしたい	3
自然を壊さずゴミのないまち	1
インターネットなどで早川町のことを知らせる	1
都市化する	1
既の機にする	1

4-2-2　まちづくり学習としての成果

まちづくり学習としての成果を考える上で、言葉の定義の中のまちづくり学習における４項目について６つの質問をおこなった。

特徴的なものは、約8割が何らかの発見、驚き、楽しみがあったと答えており、約半数がまちをどのようにしたいかを答えていることである。この中で発見、驚き、楽しみについては、表２のように自然環境に対する発見が多く、早川町は自然が非常に身近にあるにもかかわらず、自然に対しての発見が多く占めていることが分かる。また、まちをどのようにしたいかについては表３のように「お店・施設をつくりたい」のように人口を増やしてのまちの活性化を考えている人と、「自然豊かな早川町」のように自然との共存にこれからのまちを求めている人の2者がいることが分かった。

まちづくりの成果として、半数以上が「まあまあできた」もしくは「かなりできた」であれば達成されたとすると、「新しい発見、驚き、楽しみがあった」については達成されているが、「内容は身近に感じたか」「主体的に取り組めたか」「将来まちをこのようにしたいという気持ちがあるか」は達成することができていないことが分かる。

4-3　小括

地域学習の成果は、「自分は地域の一員であると思っているか」「早川町に対して誇りや愛情を持つようになったか」である。他の3項目「人の暮らし、働いている人の暮らしの理解」「生活の変化を学び、先人の苦労を理解できたか」「まちの仕組みがどのようになっているか理解したか」「内容は身近に感じたか」は、非常に地域の人の生活に密着した内容であり、地域学習の成果として達成されていないことが分かる。まちづくり学習としての成果は、「新しい発見、驚き、楽しみがあった」であり、他の３項目「内容は身近に感じたか」「主体的に取り組めたか」「まちをこのようにしたいのはあるか」は達成されていないことが分かる。

第５章　現状の地域学習の評価と今後のあり方

この章では、第3、４章をもとに、現行の地域学習について評価し、2002年以降の地域学習のあり方を検討する。

5-1　地域学習の限界点

現在行われている地域学習の授業の内容を、地域学習の目標、まちづくり学習の目標から分類した(図８参照)。

まちづくり学習の「新しい発見があったか」「身近な内容に感じたか」の２つの項目は扱われている内容が多いことから、地域学習として実現可能なまちづくり学習であると言える。また、「主体的に取り組めたか」「まちをこのようにしたいというものはあるか」に関しては、扱っているものがほとんどないことから現行の地域学習において実現は難しいと考えられる。

「地域学習の目標」「まちづくり学習の目標」の各目標項目にその目標がどれほど到達しているかを示した。この到達率は、５段階評価のうち「まあまあできた」もしくは「かなりできた」の２段階に属している割合で示している。５割以上で目標に達しているとみなすと、地域学習は「誇りや愛情を持つようになったか」「早川町の一員だと思っているか」が目標に到達しており、まちづくり学習は、「新しい発見があったか」が到達している。

これらより、以下のことが明らかになる。

地域学習として扱える範囲として、地域学習の目標の部分はもとより、さらにまちづくり学習の目標である「新しい発見はあったか」「内容は身近に感じたか」が実行可能である。しかし、「主体的に取り組めたか」「まちをこのようにしたいのはあるか」は授業内容として扱っているものがなく、実行が難しい。

地域学習として扱える範囲は分かったが、その中で、目標に到達しているものは「誇りや愛情を持つようになったか」「早川町の一員だと思っているか」「新しい発見はあったか」の３項目であり、他の４項目「人の暮らし、働いている人の暮らしの理解」「生

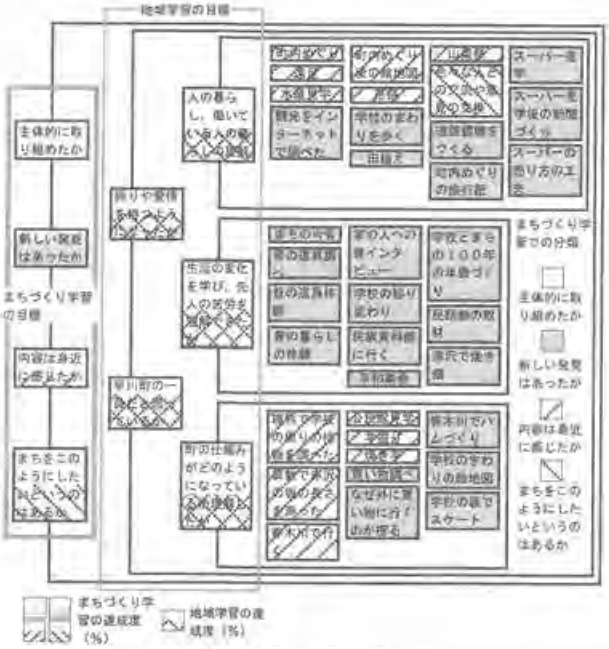


図8　授業内容の分類

活の変化を学び、先人の苦労を理解できたか」「まちの仕組みがどのようになっているか理解したか」「内容は身近に感じたか」は地域学習の目標として到達していないことが分かった。

目標に到達している3項目のうち、「新しい発見があったか」は授業で扱っている内容も多く、それによって、到達度が非常に高いと考えられる。他の2者「誇りや愛情を持つようになったか」「早川町の一員だと思うようになったか」は、授業内容よりも様々な授業を経る中で感じ取るものであるため、学校生活や家庭での生活を通して多種多様な体験が必要である。

地域学習の目標として到達していない4項目「人の暮らし、働いている人の暮らしの理解」「生活の変化を学び、先人の苦労を理解できたか」「まちの仕組みがどのようになっているか理解したか」「内容は身近に感じたか」は、非常に地域の人の生活に密着した内容であることである。それゆえに、地域との交流なしには達成することはできない。第3章の図5において地域人材の活用は「手続きや予算の関係でかなり面倒」「学校と地域との交流があまりない」などにより現行において難しいと考えられる。これより、現段階で地域学習の実行可能な部分であるこの4項目についても現行の教育カリキュラムにおける限界点となっていることが分かる。

5-2　2002年からの地域学習について

2002年には中央教育審議会の最終決定により教育基準の課程が改善されることにより、地域学習が今後どのようになっていくかについて第3章の教師にヒアリングをおこなった（図9参照）。これより、「仕向け方がむずかしい」「地域学習に関してはつっこんだことができるであろうか」「特に変わらない」などの否定的意見と「総合的学習時間と地域学習の関係が深くなる」「地域との関係は密になる」「地域学習は増えていくだろう」などの肯定的意見に分かれた。しかし、その中で総合的学習時間は「総合的学習時間を見学に使えばやりやすくなるのではないか」、「総合学習には色々な教科が混ざり込んでくる」などの肯定的な意見が多く、地域学習の時間数、人材を活用するときの手続きが解消され、特に「内容は身近に感じたか」についてその到達度が上昇すると考えられる。

全体として「地域学習に人材を取り入れた方がよい」「地域との関係は密になっていく」など、学校内だけではなく、地域の人材や環境を用いて授業を展開してい必要があると考えていることが分かる。

ここで、5-1における地域学習の限界点が2002年の教育課程の改善により克服可能であるか考える。

2002年以降、最も変わるのは総合的学習時間である。総合的学習時間は「情報・福祉・環境・国際交流」の4つの柱の中で展開される。「総合的学習時間に地域学習を取り入れ、その核にする」等のコメントのように地域学習は総合的学習時間の中心として機能していく。この中で、地域の人材活用が挙げられているが、これにより地域学習の目標として到達していない4項目「人の暮らし、働いている人の暮らしの理解」「生活の変化を学び、先人の苦労を理解できたか」「まちの仕組みがどのようになっているか理解したか」「内容は身近に感じたか」は地域の生活に密着した内容であるため克服される可能性が高い。

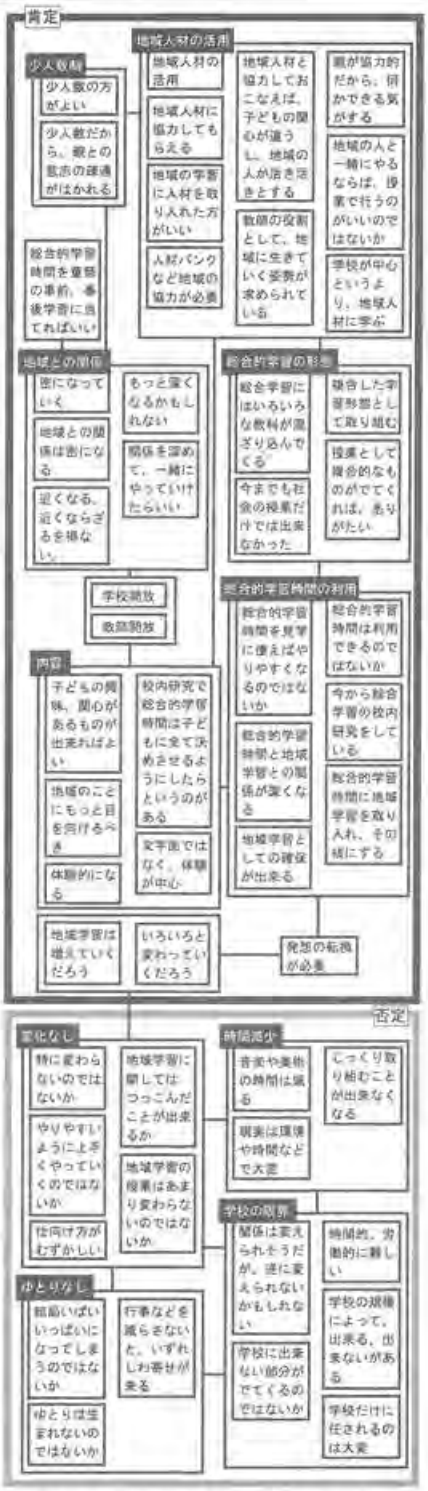


図9　2002年以降の地域と学校

他のまちづくり学習の目標である2項目「主体的に取り組めたか」「まちをこのようにしたいというのはあるか」は子どもの主体性を問うもので、2002年以降の改善では子どもの主体性を発揮させるものは少なく、2者の克服の可能性は低い。

5-3　小括

地域学習の限界点は、「主体的に取り組めたか」「まちをこのようにしたいというのはあるか」が挙げられる。また、目標到達可能であるのに、地域との交流の難しさから現行の教育カリキュラム上では「人の暮らし、働いている人の暮らしの理解」「生活の変化をどのように学び、先人の苦労を理解できたか」「まちの仕組みがどのようになっているかを理解したか」「内容は身近に感じたか」も限界点となっている。

2002年以降の地域学習では学校の中だけではなく、地域の人材、環境を用いて授業を展開していかなくてはならないことが分かった。また、現行の教育カリキュラム上限界点となっている4項目については克服可能であり、限界点の2項目に関しては子どもの主体性を失わせないで地域学習をおこなうことができれば可能である。

第6章　まとめ

この章では今後に向けての提案をおこなう。

6-1　提案

本研究は中山間地域におけるまちづくり学習の必要性から、学校で地域のことを学ぶ最初で最後の機会である小学校3年生の社会科の授業を評価し、その限界点を探った。その背景として2002年の教育基準の改善があり、それによって地域学習の限界点が克服できるように見える。しかし、本研究の結果としてすべての点が2002年以降に克服できるとは言い難い。そこで地域学習の限界部分を補完すべく、2002年以降に向けての提案をおこなうものとする。

まちづくり学習の目標の2項目、「主体的に取り組めたか」「まちをこのようにしたいというのはあるか」が最も2002年以降の地域学習における限界点となり得る。そこで、以下の提案によりこの限界点に対して克服していく。

「主体的に取り組めたか」は、まず既存の枠組みからはずれて子どもに自由な場の提供が必要である。子どもが自由に遊び、その中で自然への理解や人との交流を学び、主体性を得るだけでなく地域への理解が増していく。

「まちをこのようにしたいというのはあるか」は、実際にまちを歩き、景色のいいところ、自分のお気に入りの場所、不便で改善したいところなどを把握しなくてはいけない。そして、まちに対して住民としての意見を提示していくことで、自分がまちの担い手であることを認識することで、今後の意識にも多大な影響を与えるであろう。

本研究で扱ってきた地域学習の限界点を克服したとき、早川町を含め、中山間地域と呼ばれている地域の新たな一歩が記されると信じている。

注釈

注1）ここでは、中学生以下の年齢と定義する。

注2）ここでは、地域の範囲として早川町全体を指すものとする。

注3）木下勇　「都市との比較からみた農村の児童の自然との接触状況　児童の遊びを通してみた農村的自然の教育的機能の諸相に関する研究（その1）」　第431号　日本建築学会論文報告集　p.107-p.118　1992年1月

木下勇　「三世代への聞き取りによる農村的自然の教育的機能とその変容　児童の遊びを通してみた農村的自然の教育的機能の諸相に関する研究　その2」　日本建築学会論文報告集　第450号　p.83-p.92　1993年8月

注4）仙田満　「原風景によるあそび空間の特性に関する研究-大人の記憶しているあそび空間の調査研究-」日本建築学会論文報告集　第322号　p.108-p.117　1982年12月

室崎生子　「異年齢集団の活動拠点＝基地の空間構成、性質、役割に関する研究　異年齢集団による遊び行動と遊び空間に関する研究―その1－中津川市における豆学校の活動を事例にして」　第424号　p.89-p.99　日本建築学会論文報告集　1991年6月

和田幸信　「子供の生活空間の認識と認知対象について－イメージマップからみた農村部における子供の生活空間に関する研究　その1－」　日本都市計画学会学術研究論文集　第24回　p.103-p.108　1989年

和田幸信　「生活空間の広がりとその空間認識へ及ぼす影響について-イメージマップからみた農村部における子どもの生活空間に関する研究　その2-」　日本都市計画学会学術研究論文集　第25回　p.223-p.228　1990年

注5）早川町教育委員会　「早川町誌」　早川町役場　p.509-p.510　p.1109-p.1112　1980年1月

注6）大正9年から平成7年までが国勢調査であり、平成11年は国民基本台帳による。

注7）梶島邦江他　「こどものまちづくり学習教材としての「まちのなぞ解きブック」の有効性に関する研究」　日本都市計画学会学術研究論文集　第31回　p.163-p.168　1996年

首都圏総合計画研究所　「まちつくり研究・第23号　特集-まちつくり絵本」　㈱同時代社　p.4-p.9　1984年10月31日

注8）「文部省告示　小学校指導要領」　㈱ぎょうせい　p.25-p.28　1998年12月25日

注9）地域学習の授業として教室の中で勉強すること

注10）地域の施設を見に行ったり、行事・イベントに参加し、生活にふれること

歴代学生研究員の紹介

平成11年度学生研究員

石川　宜裕（いしかわ よしひろ）
【早稲田大学建築学科】

早稲田大学で都市計画を学んでいる石川宜裕（いしかわ　よしひろ）です。僕が早川町と関わらせていただいてから、ちょうど1年が経とうとしています。なんだか非常に短い1年間だったなと感じています。思えば、どのようにしてこの早川町に来たのだろうか。他の学生研究員のことはわからないが、僕の場合は1回目に来て以来、色々な「人」と直接ふれ合えるからかな、なんて思っています。まあ、他にも自分なりに色々と思うところはあるのですが…

自分は学生研究員としていろいろな「人」との出会いがありました。この1年間は今までで一番多くの「人」と出会った一年だったのではないかと思います。やはり、多くの「人」と出会うことは、僕の思考の過程における大きな位置を占めていると実感しています。これからも多くの「人」と出会い、さらに多くの刺激を受けることになると思います。その出会いや刺激の中から自分だけでなく、いろいろな「人」・まちに影響を与えことができればいいなと感じています。

すべてのことをまず「人」から始めてみたいと思います。

平成11年度学生研究員

多田　慎二（ただ しんじ）
【早稲田大学建築学科】

早稲田大学理工学部建築学科後藤春彦研究室4年の多田です。岐阜県の田舎で生まれ育った私は、もっと田舎を知り、より多く田舎の良いところを見つけたくて早川町にやって来ました。そして、過疎と高齢化がすすむ山村集落の現状をふまえ，中山間地域の福祉のあり方について茂倉集落を対象に一年間、調査を続けてきました。茂倉集落や上流文化研究所の皆さまの協力で何とか卒業論文を仕上げることができましたが、高齢者にやさしいという集落の現状に対する提案をすることができても、過疎、高齢化を抱える集落の将来に対する提案は何も出来ませんでした。卒業論文は私にとって地域づくりの終着点ではなく今後の出発点になりました。また、改めて地域づくりは自分一人では何も出来ないことにも気づきました。

上流文化研究所は早川町の住民はもとより、私のように外から来て、地域の将来を考える人間を一つにまとめて大きな力に変える存在であってほしいと思います。

最後に、一年間の研究を通して、田舎の良さは雄大な自然とゆっくりとした時間の中で暮らす人々の心にあるのだと感じました。

平成11年度　学生研究員研究論文

中山間地域における福祉空間としての道の考察

～ 早川町茂倉集落を事例として ～

多田　慎二
平成11年度早稲田大学卒業論文

第1章　はじめに

1－1　背景

近年、深刻な問題となっている山村集落の過疎化、高齢化は将来のわが国の姿を反映しているとも言える。故に、今後、高齢者の増加が予測され、高齢者にやさしい生活空間が必要になる。しかし、わが国の深刻な経済不況、環境問題を考えると、公共事業にも大規模な整備を望むことは出来ない。現在我々に求められていることは、開発より、もう一度生活環境を見直すことである。そして、中山間地域集落には、その限られた環境のなかで、いかに生活すべきかの術が隠されていると思われる。

また、平成１２年４月から介護保険制度が導入され、民間活力の活用のために、民間企業や非営利組織などの多様な事業主体の参加が可能となる。しかし、高齢者の数が少ないこと、人口密度が低いことにより中山間地域では採算面で折り合いがつかず民間事業者の参入をほとんど望むことができず、市町村の負担が大きくなることが予想される。加えて、ニーズの多様化に対して介護人材の不足により、ますます高齢者に十分なサービスを提供することができなくなる可能性が生まれる。

図1　研究のフロー

そこで、中山間地域の集落で昔から行われてきた相互扶助を見直し、今後の福祉政策や集落計画に生かしていく必要がある。

1－2　研究の目的

本論文では、中山間地域集落のひとり暮らし高齢者の生活とその生活をとりまく福祉活動を把握した上で、その接点としての道および、道と住居の関係のあり方を提案する。

1－3　研究の方法

３章で茂倉集落のひとり暮らし高齢者１２人にヒアリングを行い、ひとり暮らし高齢者の集落での住まい方の意識を明らかにする。４章でひとり暮らし高齢者をとりまく福祉の集落内での生活に対する依存度を行政、集落住民、ひとり暮らし高齢者にヒアリングを行うことにより明らかにする。５章でひとり暮らし高齢者の日中の行動を５日間調査し、集落の使い方を明らかにする。そして、集落の主要な道２ヶ所を定点観測を行い道の性質を調べる。６章では集落に住むひとり暮らし高齢者１２人にヒアリングを行い、ひとり暮らし高齢者の住居の間取りと生活スタイルを調査することにより住居と道の関係を明らかにする。

1－4　既往研究と研究の位置付け

ひとり暮らし高齢者の研究は古賀、高橋[注1]によってひとり暮らし高齢者が住居内に形成する場に注目して、その住まい方の特徴を明らかにしている。しかし、ひとり暮らし高齢者の集落での住まい方についての研究はなされていない。

図2　茂倉集落の位置

本論文は、ひとり暮らし高齢者の集落内での生活と、その生活と生活の関係を調査することにより、高齢化集落の今後の整備指針を提案するものとして位置付けられる。

第2章　研究の前提

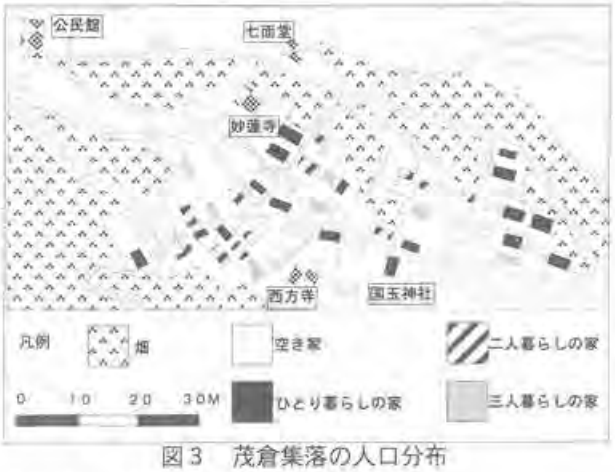


図3　茂倉集落の人口分布

2－1　対象地の概要

図4　高齢化率

山梨県南巨摩郡早川町茂倉集落は、町の中心を走る南アルプス街道よりさらに蛇行する山道を5キロほど登った山の中に位置する。かつては、炭焼き、焼き畑で生活し十谷峠を越え鰍沢町との交流を行っていたが、明治末期に石膏および銀銅鉱脈の発見で鉱山の集落として栄える。その後、昭和43年に鉱山が休止してから急速に過疎と高齢化が進む。しかし、住民の連帯感は非常に強く、春の大祭、相撲大会、盆踊り、秋祭りなどには集落外に住む家族、親戚も多数かけつけ、早川町の中でも多くの行事が存続している集落である。

2－2　対象地の人口

平成7年度の国勢調査によると早川町は、人口1978人のうち65歳以上の人口は858人で高齢化率は43.27%である。一方、茂倉集落の人口は78人で、住民はすべて50歳以上である。そのうち65歳以上の人口は51人であり、高齢化率は65.58%である。つまり、茂倉集落は早川町の中でも超高齢化集落でなのである。

表1　一人暮らし高齢者の人生と集落の出来事

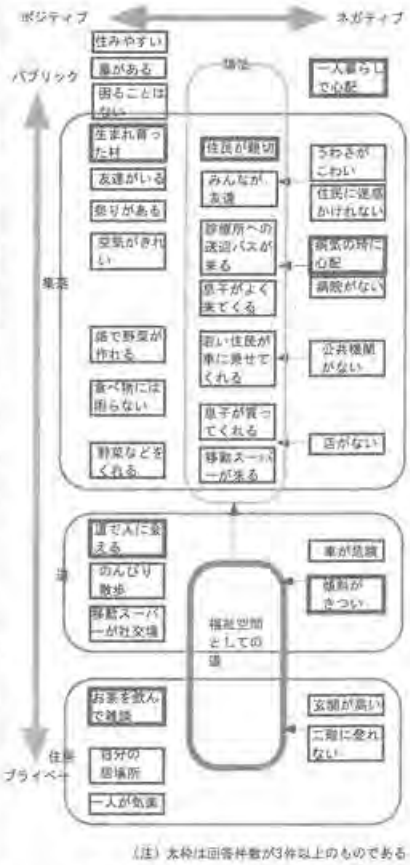
第3章　ひとり暮らし高齢者の意識

3－1　対象地のひとり暮らし高齢者

茂倉集落には、現在12人のひとり暮らし高齢者が生活する（内男性1人）。その中には若いうちに夫を鉱山でなくし、女手一つで子供を育てあげ、その後、子供が出ていってひとり暮らしをしている高齢者もいる。80歳を過ぎてもふもとの新倉集落周辺にある田んぼで稲作している人や、ふもとに用事がある時は1時間以上かけて歩いて行く人など元気なひとり暮らし高齢者が多い。

3－2　ひとり暮らし高齢者の意識

茂倉集落のひとり暮らし高齢者12人に対してのヒアリングし集落での生活についての意識調査を行った（図5）。どのひとり暮らし高齢者も根本となる考えはひとりで生活しているという事実から生まれる不安と茂倉集落は生まれ育った村であり住み続けたいという強い意志である。また、集落の外で暮らす家族の呼びかけにもかかわらず集落を出ていくつもりのないひとり暮らし高齢者がほとんどであった。それに伴って集落、道、住居についての肯定的な意見と否定的な意見があった。



（注）太枠は回答件数が3件以上のものである

図5　ヒアリング結果

ひとり暮らし高齢者が集落に愛着を持ち家族のもとに行かない理由は2つ考えられる。一つ目は、集落が生まれ育った場所であり、自分もそこで一生を終えるという強い決意が伺えるようにその土地や環境が好きだということである。他にも「空気がよい」、「祭りが好き」、「両親の墓がある」、「幼いときからの友達がいる」などがこれに当てはまる。そして、もう一つが集落住民の助けがあるこ

とである。これは、ひとり暮らしの生活から生まれる不安、例えば「病気の時に心配」、「公共機関がない」などの問題を集落住民が援助してくれることである。前者が一次的な理由だとすれば、後者は副次的な理由と言える。そして、これによりひとり暮らし高齢者の生活が可能になっている。

表2　行政福祉の利用状況（回／月）

高齢者＼行政の福祉	ホームヘルパー	長寿苑	新倉診療所
HA	0	0	0
OM	1	0	0
YF	1	2	2
YE	1	2	2
TF	0	2	2
GA	0	2	2
SM	0	2	2
UM	0	0	0
YG	0	0	0
IM	0	0	0
FA	0	2	2
MK	0	2	0

第4章　ひとり暮らし高齢者と福祉

4－1　行政の福祉活動

早川町内の高齢者福祉サービスは町社会福祉協議会[注2]によるデイサービス[注3]、給食サービス[注4]、ホームヘルプサービス[注7]、生活用具貸与[注8]がある。この中で、茂倉集落のひとり暮らし高齢者が利用しているものはデイサービスとホームヘルプサービスである。デイサービスは月に2回、町の福祉施設である「長寿苑」で健康診断、入浴、生活指導を受けた後、レクリエーション時間を過ごす。デイサービスを利用している茂倉集落のひとり暮らし高齢者は多いが、ホームヘルパーを頼んでいる人は少ない。ホームヘルパーを頼んでいるひとり暮らし高齢者の生活は自立している。これは、茂倉集落の高齢者はまだ元気な人が多いことと、逆に寝たきりになった場合は集落の外の家族のもとへ移住し介護を受けるか病院に入院することが多いためである。また、麓の新倉診療所[注8]への月に一度送迎バスが出ているが、足痛の薬を貰いに通っている人が多く、定期的に入院が必要な人は他の町村の病院に通うことが多い。

4－2　集落の福祉活動

茂倉集落では、民生委員[注9]が中心となって毎日ひとり暮らし高齢者に声をかけるようにしている。また、茂倉集落は4つの組に分かれるが、その組の婦人会の代表一人づつが、毎日、恩着せがましくならないように気を遣い道からひとり暮らしの高齢者を見て、元気に暮らしているかをチェックしている。もし外で会うことがなければ火曜日と金曜日に家を訪ねることになる。

4－3　高齢者とひとり暮らし高齢者の福祉

風呂がないひとり暮らし高齢者が多いので、風呂のあるひとり暮らし高齢者は月に数回風呂を炊き共に使用したり、畑でとれた作物や他人から貰った品物をお互いに与えあうなどしている。また、月に一度程高齢者同士が集まり郷土料理を食すなどしてお互いの顔を会わせている。しかし、基本的に自分のことは自分で行っているので、話し相手としての存在が一番大切であることがヒアリングによりわかった。

4－4　家族との関係

以前より甲府市、昭和町、竜王町などに田を持っていた住民が多いため現在家族がそこに住んでいるケースが多い。その他、東京都、神奈川県などに家族が暮らしている。ひとり暮らし高齢者は家族の所へは年に一、二回遊びにいく程度で、行っても数日の滞在がほとんどである。また、家族は盆、正月にしか集落に来ないところが多い。一方で、茂倉、新倉など近くに家族が住んでいる場合は、頻繁に出かけ、また頻繁に遊びにくる。ほとんどのひとり暮らし高齢者が、普段の生活において家族をあてにしていない。しかし、病気などの緊急の時には直ちに頼りにしている。

図6　一人暮らし高齢者をめぐる福祉

4－5　ひとり暮らし高齢者をとりまく福祉

以上により、ひとり暮らし高齢者をとりまく福祉活動を図6にまとめる。ひとり暮らし高齢者一人またはひとり暮らし高齢者同士の会話が普段の生活であり、それを集落住民が見守っている。病気などの緊急の場合は家族がかけつけ、介護が必要になると家族が面倒をみる。行政は健康状態などのひとり暮らし高齢者の生活現状の把握が集落住民ができないことを月に数回行っている。

第5章　道の機能的な把握

5－1　ひとり暮らし高齢者の日中の過ごし方

ひとり暮らし高齢者は一日中部屋で過ごすことはない（図7）。集落外で稲作をしているひとり暮らし高齢者は朝から集落外へ出かけるが、その他のひとり暮らし高齢者は診療所やデイサービスを受ける以外は集落外へ出ていくことは少ない。また、集落内での移動は散歩、畑、週に一度の移動スーパーへの買い物、そして高齢者の家にお茶を飲みに行く場合である。散歩する高齢者としない高齢者が決まっており、散歩する高齢者は日課になっている。畑作は、ほとんどのひとり暮らし高齢者が自分の健康状態にあわせて行っている。畑作は午前中で散歩は夕方に行うことが多い。また、昼食は自分の住居に戻り一人で食べ、ひとり暮らし高齢者が共に食べることは

少ない。夕食も同じで夕食後に集落内に出かけることはない。

5－2　ひとり暮らし高齢者の行動範囲

ひとり暮らし高齢者の五日間の集落内での行動を今度は空間で見てみる。(図8) ひとり暮らし高齢者の行動は大きく２種類の動線に分類される。一つは

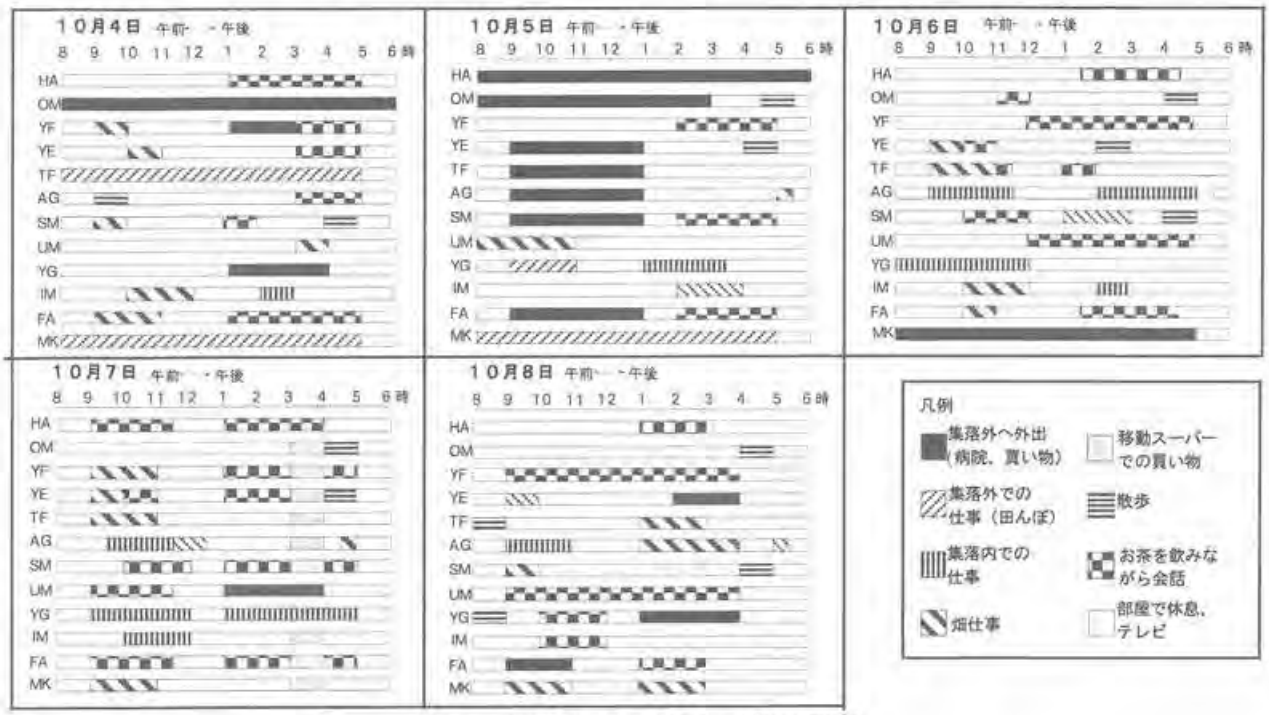


図７　ひとり暮らし高齢者の行動（時間）

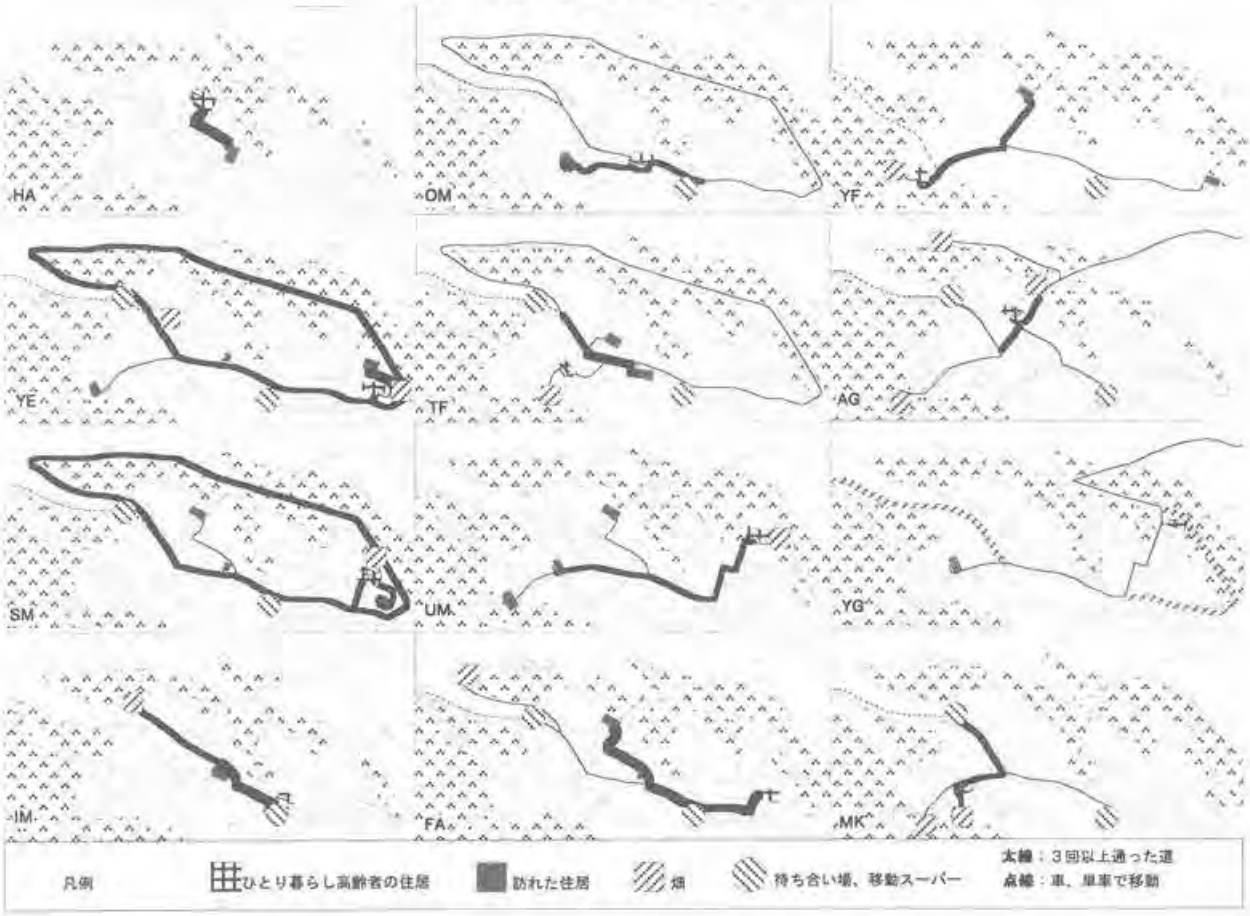


図８　集落内の行動範囲

集落全体に渡って行動する動線である。これは、集落を囲む環状の道が散歩のコースとして使用されているためである。散歩するひとり暮らし高齢者は環状の道の近くに住居がある。また、畑仕事に行くひとり暮らし高齢者も集落をまたぐように横切ることになり、広い動線となる。もう一つは住居と住居を結ぶ短い動線である。ひとり暮らし高齢者はほぼ訪問する家が決まっていてその行き来に利用される道は頻繁に使われている。また、ひとり暮らし高齢者は全体的に東西の移動よりも南北の移動が目立つ。これは、集落が東西に傾斜しており高齢者にとって傾斜のきつい東西の移動は困難なためであると考えられる。

5－3　道の使われ方

次に集落住民が実際に道をどのように利用しているかを調査するために5－2よりひとり暮らし高齢者のほとんどが通過する集落の中心で多くの道が交差する図9のA地点とひとり暮らし高齢者が散歩途中に通過するB地点で12時より6時にかけて定点観測を行った。(図9) これによると、明らかにA地点を通過する人数がB地点のそれを上まっている。時間帯ではお互いに夕方にかけての増加がみられる。A地点ではどの時間帯にも利用されているのに対しB地点では正午前後の利用は見られなかった。これは、5－1でのひとり暮らし高齢者の昼食は独自でとりその後他の高齢者の住居に向かうこと夕方に散歩することが多いことと一致する。また、A地点は5－2で明らかになった集落を広く使う動線と住居間を結ぶ短い動線の交点であるために異なる目的で道を通る住民が出会い数分間の会話が生まれたり、また、路肩に座り数十分会話をする高齢者も観察された。一方B地点を通過する人は他の住民と出会うこともなく一人でゆっくり散歩をする高齢者のみであった。

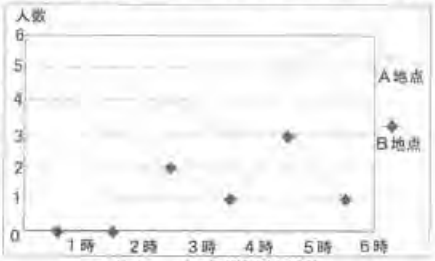


図9　定点観測結果

表3　道の種類

	率	性質	傾斜	視程空間	交通量	主な利用者
1．集落間をつなぐ道	○	南北軸	なだらか	人の出会う	会話 声かけ	住民と高齢者
2．集落を囲む道	△	環状	やや急	散歩		高齢者
3．集落をつなぐ道	×	東西軸	急	住民のチェック		住民
4．住居をつなぐ道	×	クラスター	なだらか	生活の場		住民と高齢者

5－4　道の性質

以上により茂倉集落には大きく分類して4種類の道が存在することがわかる。(表3) 一つ目は集落と他の集落をつなぐ「集落間の道」である。この道は最も広く車が通過する道であるために集落を大きく二つに分断する。加えて集落に中心性を与える軸として存在しているために集落住民が集まる道でもある。この道と他の道が交差する場所では住民が出会い会話が生まれている。二つ目は集落を大きく環状に取り囲む「集落を囲む道」である。これは、集落の住居群と畑を分断している。車も通過できるがほとんど通ることはなく、傾斜もそれほどないために集落住民は散歩の道として利用している。三つ目は

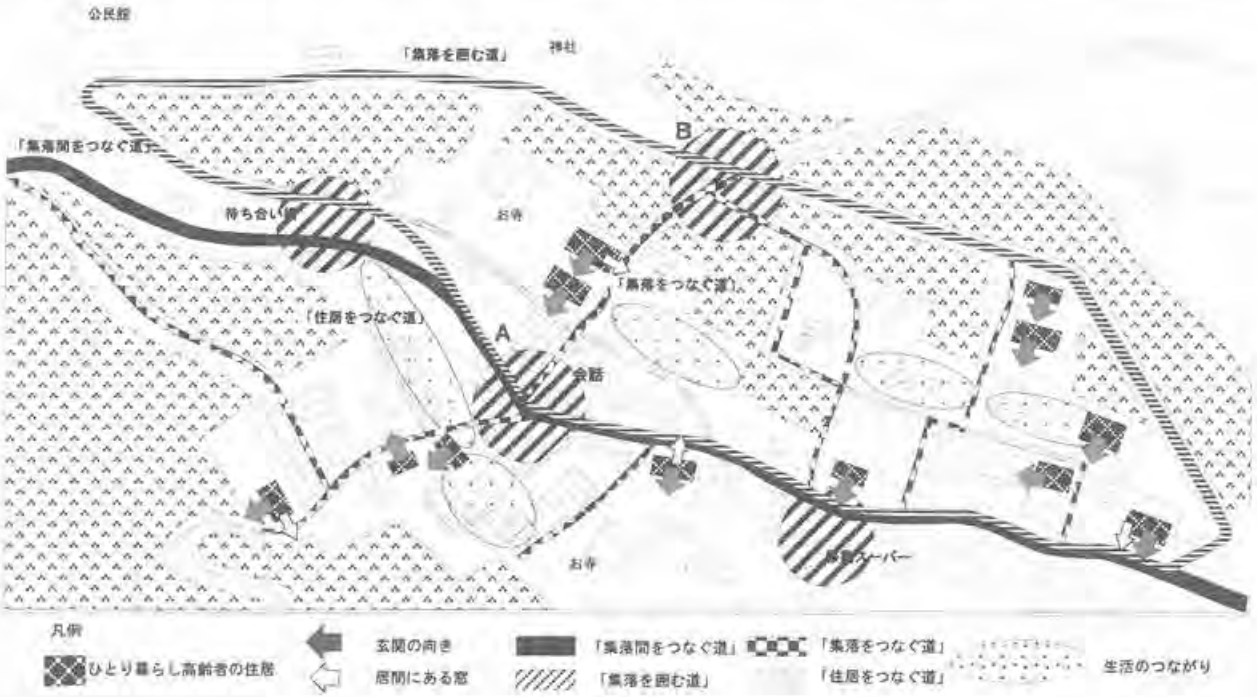


図10　道の性質

一つ目の道に垂直に走る集落を東西に結ぶ「集落をつなぐ道」である。これは、車の通ることができない歩行者専用の道で集落の傾斜に沿った最も傾斜のきつい道である。そのため、集落を東西には結んでいるが傾斜があるために高齢者にとっては利用しがたく集落内の住居の敷地を分断するための性質が強く表れる。また、一つ目の南北軸に対して東西の中心軸という性質がある。この道より垂直にでてクラスター状に住居を結ぶ道が四つ目の「住居をつなぐ道」であり、隣接する住居の住民の生活の場となっている。

第６章　住居形態と居場所

６－１　住居での住まい方

茂倉集落のひとり暮らし高齢者の住まい方をまとめる。ひとり暮らし高齢者は日中のほとんどを居間で過ごす。１２人のひとり暮らし高齢者の５日間の

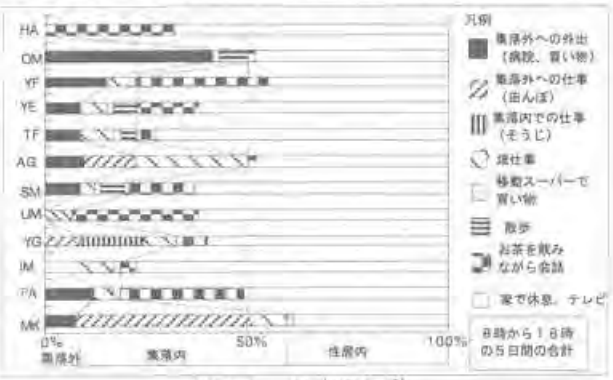


図１１　日中の行動

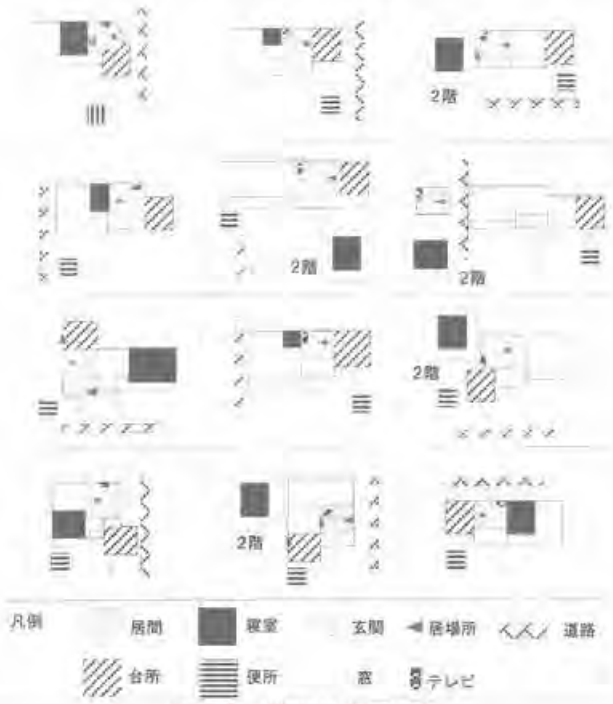


図１２　間取りと居場所

８時から１８時までの行動の平均を図１１に示す。これから日中のほぼ半分を一人住居で過ごすことがわかる。この間、居間でテレビをみたり横になっている。また、田畑の仕事をしていないひとり暮らし高齢者は同じ高齢者同士でお茶を飲みながらの会話も自分または相手の居間で行い、これも含めると８割ほど自分または他の高齢者の居間に滞在することになるため、もっともひとり暮らし高齢者の生活に密着した空間といえる。

６－２　間取りと居場所

ひとり暮らし高齢者の住居の間取りを図１１に示す。また、ひとり暮らし高齢者は居間での「常座」[注8]する位置を一ケ所に決めていて、そこからテレビと玄関の両方を見渡すことがでる。普段は居間の他に台所と寝室の３部屋のみを使用していて残りの部屋は物置きか身内の訪問の際のために使用している。台所は居間に隣接していて日中の住居内の動線はこの間のみになっている。寝室は居間と離れてとることが多く２階にとる高齢者もいる。２畳間、３畳間を使用している場合もあり部屋の広さは関係ない。他の高齢者も入ることのない唯一のプライベー

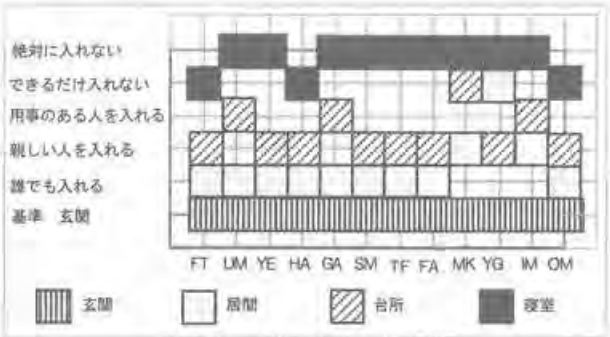


図１３　プライベート意識

ト空間といえる。便所は外にあり、それと隣接して風呂場があるが使用してない高齢者が多い。

６－３　高齢者のプライベート意識

ひとり暮らし高齢者が使用している居間、台所、寝室の３部屋をどれほどのプライベート意識を持って生活しているのかを調査するために誰もが気軽に入ってくる玄関を基準として、誰でも入れる、親しい人を入れる、用事のある人をいれる、できるだけ入れない、絶対に入れないの５段階でアンケートを行った。その結果は居間、台所、寝室の順にプライベート意識を持ち空間の配置と一致する。ひとり

表４　道と住居の関係

	住居	正面	側面	裏
1，集落間の道 2，集落を囲む道	3	2（1）	0	1（1）
3，集落をつなぐ道	8	1	7（2）	0
4，住居をつなぐ道	1	1	0	0

（注）カッコ内は居間の窓が道路に接している住居

暮らし高齢者にとって居間は道に近い公共的な空間であることが分かる。

6－4　居間と道との関係

ほとんどの時間を居間で過ごすひとり暮らし高齢者にとって、居間と道とのつながりは集落住民とのつながりともいえる。道から居間にいるひとり暮らし高齢者が見えたり、高齢者同士の話し声が聞こえたり、夜になると電気がついているのがわかるなどでひとり暮らし高齢者の生活を伺うことができる。これは、集落内での相互扶助をより円滑におこなうための重要な要素である。

表4は5章で明らかになった4種類の道でひとり暮らし高齢者の住居がどれに接しているかを示している。これによると、「集落をつなぐ道」に接している場合が多いことがわかる。また、そのうち一軒を除くすべてが住居の側面に道が接している。しかし、この中の2軒は居間からの窓で道と接しているために高齢者の生活を道から伺うことができる。また、「集落間の道」と「集落を囲む道」との重複している道に接している3軒の住居の内、2軒が正面で接していて道から玄関を通してひとり暮らし高齢者の生活を伺うことができる。また裏に道が接している住居も居間の窓から生活を伺うことができる。最後の住居をつなぐ道で接しているひとり暮らし高齢者は住居の正面に道が接しており、その道を介して隣3軒がよく行き来をしている。そのためこの道でひとり暮らし高齢者の姿を見ることがよくある。また、高齢者は居間より玄関を媒介に集落とつながっているために玄関の構造も重要になる。多くの場合は玄関が網戸にしてあるか半開きの場合が多い。

第7章　総括

7－1　調査結果の考察

茂倉集落の道には「集落間をつなぐ道」、「集落を囲む道」、「集落をつなぐ道」、そして「住居をつなぐ道」の4種類の道が存在することが分かった。そして、その特質からそれぞれが「人が集まる道」、「散歩する道」、「集落住民のひとり暮らし高齢者の生活状態のチェックの場としての道」、「生活の場としての道」という機能も同時に果たしており、集落全体が相互扶助の場となっている。道空間は、単なるインフラとしての機能を果たすだけではなく、福祉福祉空間としての機能を果たしえいることが分かる。

また、ひとり暮らし高齢者の生活スタイルは居間、玄関、道が近い意識で捉えられていることが分かる。そして、その空間で、集落と高齢者の相互扶助が行われることが理想である。一方、集落住民は

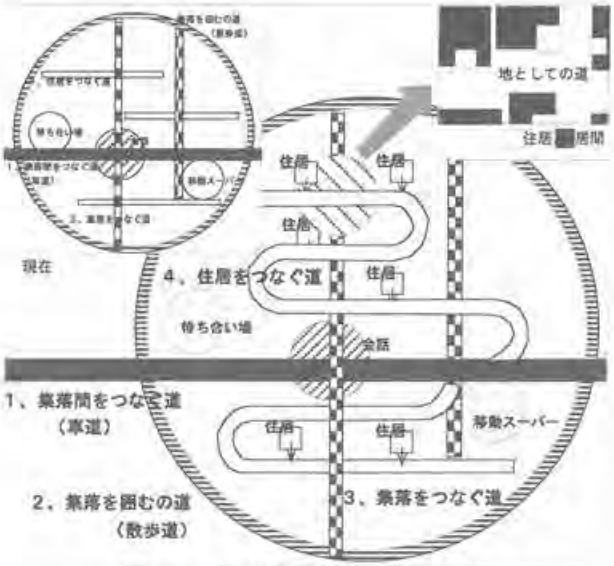


図14　道と住居のあり方の提案

ひとり暮らし高齢者を「集落をつなぐ道」から見ている。また、ひとり暮らし高齢者の住居のほとんどがこの道の側面に位置する。しかし、「集落をつなぐ道」は斜面がきつく住民の通過が少ないうえ、集落をマクロ的には集落の東西をつないでいるがミクロ的には道の左右を分断する性質が強く道の両側の住居をつなぐことがないために、相互扶助の場としての道としては理想的でないことが分かる。また、「集落をつなぐ道」は住民がもっとも出会う場所であるが、この道に隣接する住居との関係を調査すると、道が広く車が通ることがひとり暮らし高齢者と住民の交流の妨げになっていることが分かる。

7－2　道と住居のあり方の提案

以上により、道と住居のあり方に関して次の四つの提案をする（図14）。

1．集落にひとり暮らし高齢者の生活を浸透させるために、ひとり暮らし高齢者の生活場としての道を集落全体でつなぐ。

2．人が出会うための空間としての交差点を設ける。

3．高齢者の歩行の安全のために急な斜面を減らす工夫をして、ひとり暮らし高齢者が集落内を出歩きやすくする。

4．居間と道のつながりを強くするために、地としての道をつくる。

中山間地域集落は今後ますますひとり暮らし高齢者の増加が予測される。しかし、集落独自の生活様式があり、そこに目を向けて集落全体で改善していけば、ひとり暮らし高齢者にとってより生活しやすい環境を作ることが可能であると思われる。

注釈

(注１)「一人暮らしの高齢者の常座をめぐる考察」1997年　日本建築学会計画系論文

(注２)「長寿苑」の運営主体であり、早川町が出資をし町の福祉活動を行っている。

(注３)「早川町総合福祉センター（長寿苑）」で高齢者の生活介護を行う。

(注４) ひとり暮らし高齢者の栄養改善を目的として、火曜日と金曜日の２回に１食２００円で配給する。現在は５６人の人に配給されている。

(注５) 月に２回、高齢者の家庭を訪問し、食事、入浴の介助、通院の介助、調理、掃除、相談相手をする。

(注６) 高齢者が快適な日常生活を送るために、車いす、便座、てすり、火災報知器など介護機器等の給付、貸与をする。その他にも、介護しているお年寄りを短期間、老人ホームで介護する「ショートステイ」、「ミドルステイ」、「訪問看護」、緊急時に消防署に連絡が届くペンダントを配付する「ふれあいペンダント」、「居室等整備資金貸付」、「移動入浴事業」、「金婚祝金」、常時介護している人に慰労金を贈る「介護慰労金」がある。

(注８) 注２の論文で「住居内の一箇所の座で日常の食事行為や接客行為を行う場所」と定義している。

(注９) 社会福祉の増進のために、地域住民の生活状況の把握、生活困窮者の保護、指導福祉事務所が行う業務への協力などの職務をするものとする。

3 地元研究班

遊び部会の活動
すばく愛好会の活動
ヤマトイワナの研究
ビュースポット探索班の活動
水環境調査班の活動
歴史考察と古文書の研究

■ヒトリシズカ（センリョウ科）4～5月
別名をマユハキソウという。10～20cmの茎に小さな白い花をつける。

遊び部会の活動

私が、２度目の早川町の学校に勤務したのは、平成６年４月１日だった。

教師の初任地としてきた昭和36年は、人口は１万余、学校数は、小中合わせて10校もあったのに、33年間の時の流れは人口減とともに学校数の減少、児童数の減少にもつながっていった。変わらないのは、早川の流れ、そして、緑したたる自然、親しく接してくださる人々だった。このことは、何よりの早川町の宝だと直感した。

子どもたちの遊びも変わっていった。集団遊びがなくなり、休み時間も２、３人で遊ぶ子どもの姿が目立っていた。

このような子どもたちの様子を憂えた先生方から“子どもたちに遊びを”という声があがり、その結果、児童会主催の行事として加わったのが“チャレンジギネス週間”だった。これは、昔から伝わるかんけり、大なわとび、石あてなどの遊びを１週間続けて班ごとにチャレンジし、本大会の時、点数を競い合うゲーム感覚の遊びである。喜々とした子どもたちの姿を見た当時のＰＴＡの会長さんがとっても遊びの好きな方で、協力をしてくださることになった。そして、平成８年の秋の遠足に子どもたちに同行し、山を歩きながら山遊びを教えてくださった。「つばきの笛」、「葉っぱのコップ」、「ヒイラギの水車」、「ささ舟」、「首かざり」ができるのを見て、子どもたちも教師もびっくりした。自然の中で、自然のものを使って簡単にできる遊びを何とかして今後につなげていきたい、みんなが抱いた感想だった。

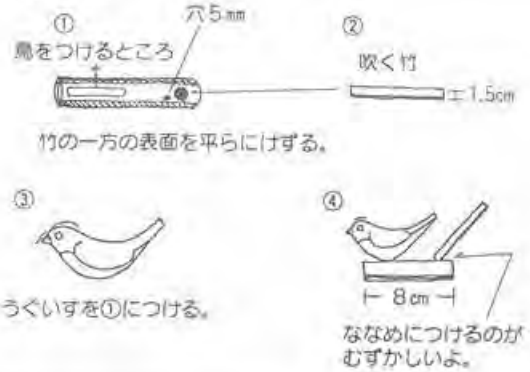
そんなころ、平成８年に「日本上流文化圏研究所」の中に遊び部会が誕生。早川町に伝わる遊びを、自然の中でできる遊びを自分達も楽しみながら子どもたちに伝えていこうという目的のもとに早川町全町からメンバーを募った。集まったメンバーは13名。みんな小さなときから山遊びが大好きで、おもちゃ作りが得意である。１回目の会合のときから、葉っぱを持ち込んで笛を作ったり、舟を作ったりして遊び楽しんだ。以降、メンバーは自分たちも遊びを楽しみながら、活動を続けている。

（文責　大倉）

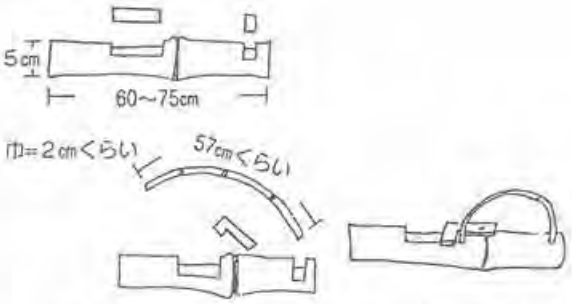
活動期間：1996年６月～

メンバー：佐野弘、佐野卓也、水野定夫、望月保博、望月海慎、望月真一、松下喜久男、深沢作一、望月敏文、深澤厚海、深澤礼子、望月敏明、矢沢文正、大倉はるみ、鞍打大輔

うぐいす笛



竹鉄砲（カッチラ）



的を作って、点取りきょうそうをすると、おもしろいよ。

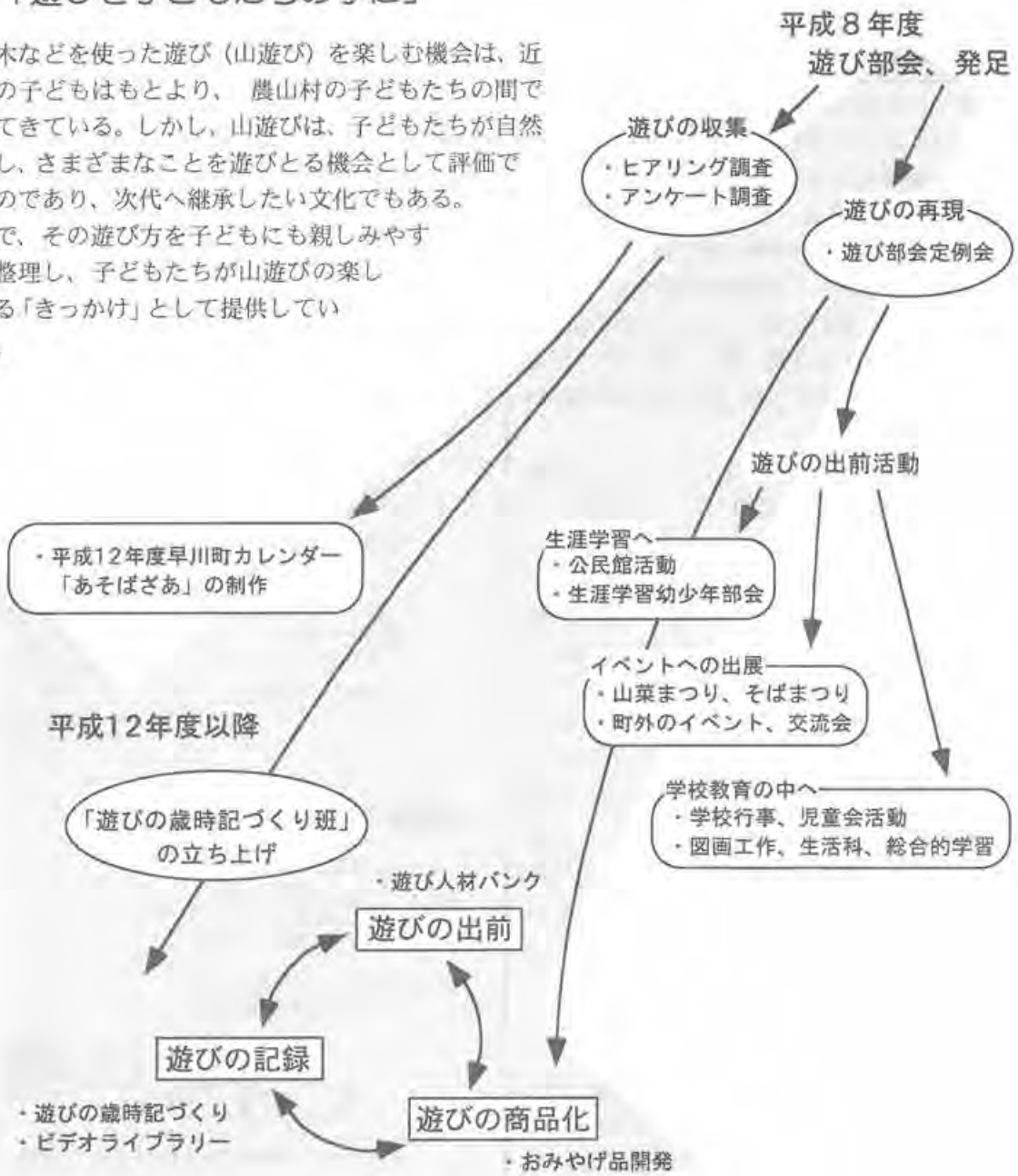
ホタルかご

大麦のワラを使う。穂先をとって上から一節の所をつみとる。ホタルかごにチャレンジしてみよう。

「遊びを子どもたちの手に」

草や木などを使った遊び（山遊び）を楽しむ機会は、近年都市の子どもはもとより、 農山村の子どもたちの間でも減ってきている。しかし、山遊びは、子どもたちが自然に体験し、さまざまなことを遊びとる機会として評価できるものであり、次代へ継承したい文化でもある。

そこで、その遊び方を子どもにも親しみやすい形に整理し、子どもたちが山遊びの楽しさを知る「きっかけ」として提供していきたい。



活動の進め方 イメージ図

メンバーの声

遊び部会の誕生　佐野弘（早川町教育委員会）

私たちの子どもの頃はテレビもなく、先輩が作った遊びの道具を真似して作り、友だちといっしょに楽しく遊んだものだった。現在は、少子化で近所に友だちもなく、集団で遊ぶことも全然なく、家の中でテレビゲームなどをして時間を費やしているのが現状だ。

遊び部会を４年前に作り、昔の遊び等を町の大イベントの山菜祭り、そば祭り等で遊び部会の人たちが昔を思い出し、遊びの文化を後世に伝えようとして、一般の大人や子どもたちに遊びながら公開した。

４年間で作ったおもちゃは、竹とんぼ、飛ばない竹とんぼ、こま、竹鉄砲、水鉄砲、弓、お手玉、ぴゅんぴゅんごま、うぐいす笛、水笛、ごろ、ゴムかん、藁で作ったお人形、輪まわし、草花等の材料を駆使して自分達の手で遊びを作り出したこと等、子ども達は遊びを通じて物事を体験することができた。

これからは、定期的に部会を開き、おもちゃの開発やおもちゃ作りの講師を招き、作り方の勉強をしたり、町内外への出前に参加し、子ども達と昔の遊びに興じながらその喜びを伝えていきたいと思っている。

早川の遊びの収集
そして　歳時記づくりへ

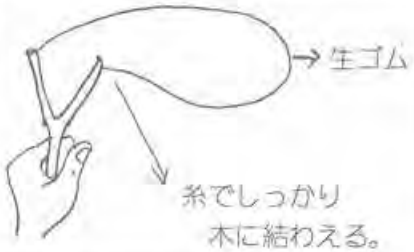
平成8年に遊び部会が発足したときに、早川の遊びを収集して"遊びの歳時記"を作っていくことも視野に入れていくことを確認した。

収集してみて感じたことは、同じ遊びでも年代によって違うことだ。たとえば、遊びの名前にしてもべったんこ、めんこというように変わってきている。もちろん、遊びの中味も多少変わってきている。だから、ひとつの遊びを年代ごとに調べていくのも面白いと思う。これから、歳時記を作っていくのにこのことも考えていきたい。

1　収集の視点として考えたこと
- 世代に着目……祖父母世代、親世代、子供世代
- 性別に着目……男の子、女の子
- 素材に着目……木、竹、草花、葉、実、枝
- 場所に着目……学校、家庭、屋外、屋内
- 季節に着目……春、夏、秋、冬

2　収集方法
- 遊び部会のメンバーへのアンケート
  1の視点別に当時の様子を書いてもらった。
- 「寿さわやか大学」でのヒアリング
  おじいちゃん、おばあちゃん一人一人に聞いた。
- 近所の人たちからのヒアリング
  お年寄り、父母が集まるイベントで聞いた。

■収集した遊びの例

	使うもの	作るもの・作り方	遊び方
木の葉	・オオバコの葉 ・さといもの葉 ・ポプラの葉 ・葛の葉　など	・ひっぱりっこ ・葉コップ ・お面 葉っぱに穴をあける。 葉っぱをまるめる。	・葉っぱと葉っぱの茎を引っかけて、引っ張り合う。茎が切れたほうが負け。 ・葉っぱでコップを作り、水を集めて飲んだりする。
木の実	・羽根木の実 ・どんぐりの実（マッチ棒） ・小さな木の実（細い麻ひも）	・羽根木の実は、そのまま落下傘になる。 ・どんぐりの実を使ってコマを作る。 マッチ棒かようじ ・麻ヒモに木の実を通して首飾りを作る。 	・高く投げあげて遊ぶ。 ・コマ回しをして長く回るのを競う。 ・首飾りを作って首に飾る。
木の枝	・二股になっている木の枝 T（生ゴム、糸） 25cm ⊥	 →生ゴム 糸でしっかり木に結わえる。	・ゴムかんの遊び ゴムの真ん中に石、木の実、紙玉（棒を使うこともある）をつけて、ねらいを定めて的に当てる。（注）周りに注意して、人には絶対に向けない。

遊び部会に思う

深沢作一（早川町奈良田）

遊び部会が今年から毎月開かれることになりましたが、都合で出席できないかたもあると思います。そこで、部員をもう少し増やして活動したら、おもちゃの開発や遊びのことなど話し合うなかで、次の月に集まるときは、だれとだれはこんなものを作って次の人はこれをと毎月作るものを変えていったら品物も増えてくると思います。

「遊び、だぁいすき」

深澤礼子（早川町茂倉）

遊び⇔子ども⇔遊びというくらい遊びと子どもとは切っても切れない関係です。また、大人にとっても、遊びは幼少時代に自分を置き換えることのできる最高のオアシスです。文明が進み、生活にゆとりが出て物が豊かになってきた昨今では、子どもたちも家の中でテレビゲーム等で過ごすことが多くなりました。一人遊びが中心の現代っ子は、昔のように戸外で仲間と物を作ったりはしゃぐこともなく、必然的に孤立します。雄大な自然に身体を置いて、草笛演奏や笹舟に夢をのせて流したり、木の実の首飾りを作り仲間と感動しあう体験こそ、人間関係を作る源と思います。

遊びを通して、物を作る喜びや仲間との触れ合いを大切にしながら「人に愛・心に愛」を与えることができるような活動を大切にしたいと思います。

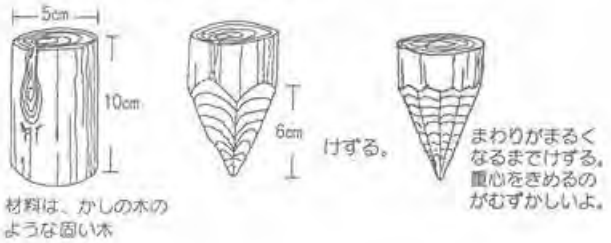
ーおもちゃ作りにチャレンジ ー

「おもちゃ作れるかな。」「最近作ってないからどうかな。」第1回遊び部会を開いた時、まず会員から出た言葉がこれである。遊び部会の活動の場として、山菜まつり、そばまつりへの出展が既に決定になっていただけに部員の意気込みは大したもの。

とりあえず、会員が得意とするものを作ってみようということになった。竹を主体にした「竹とんぼ」、「飛ばない竹とんぼ」、「竹鉄砲」、「竹笛」、板を主体とした「うぐいす笛」、紙を主体とした「びゅんびゅんごま」、木を主体とした「びゅんびゅんごま」、布を主体とした「お手玉」が候補としてあげられた。この中から、早川町奈良田に昔から伝えられている"ずんぼごま"を中心に作ってみることにした。"ずんぼ"とは、ずんどうからきているといわれている。つまり、上から下まで同じ形という意味だそうだ。

会員は、グラインダーを使って固い木を削り、こまの形に仕上げていった。この他に前述したようなおもちゃを会があるごとに作るようにしている。

"ずんぼごま"の作り方



遊びの出前 その1

早川の遊びだよ。遊んでいかんけ！

平成8年に"遊び部会"が発足してから平成11年までの4年間、早川町が主催する"山菜まつり""そば祭り"に出展している。

1年目は、会員が作ったおもちゃを展示し、希望するお客さんにはおもちゃを差し上げたり、作り方の説明もしてあげた。2年目は昨年同様、おもちゃを展示した。また、竹馬や弓矢を用意して子どもたちが自由に使えるコーナーを設けたので、大勢の人たちが集まった。3年目は、ずんぼごまやこまをまわす板を作ったり、水鉄砲ができる水槽を用意したので、子どもたちの数が増えた。

そして、4年目は、子どもちにも簡単に作ることのできる草笛、竹笛のコーナーを作ったので、昨年以上に子どもたちの数が増えた。また、おもちゃを売ってほしいというお客さんが増えたことも特記すべきことである。

4年間を通してわかったことは、部員も楽しみながら

"作って　遊んで　売ろう"ということだ。遊ばせるコーナー、作るコーナーを作り、そこで子どもたちにじゅうぶん遊んでもらうことだ。このことは、遊び部員の目ざしていることでもある。

遊び部会座談会

平成12年1月25日の会合の様子です。

-今年度を反省して-

■定夫　遊び部会のメンバーが、町を訪れる人に遊びを教えられるといい。遊びに触れたい人には、教えたい。町の人たちの支援を欲しい。財政事情がきびしいなかだけど、支援を欲しい。

■真一　そばまつりへの出展の場所は。入口付近がよい。おらんとうの活動はボランティアだから町でも認めてくれると思うよ。

■弘　山菜まつり、そば祭りには女の子が何回も来た。どの子も音のするものがすきだ。

■定夫　笛のようなものがいいいかもしれんぞ。弓矢もよかったな。

■真一　遊びが見えるというのがいい。見えるという設定をしていく。

■拓也　おもちゃを作っていくためには、道具の準備も必要になってくる。委員会で買ってくれるとありがたいんだが。

■定夫　自己資金がないんじゃあ活動の範囲もせまくなってくる。うまい方法があるといい。

-来年度の活動について-

■真一　文化振興基金がある。講習会を開いてお金をもらう

遊びの出前 その2

おじいちゃん　おばあちゃんたちの遊びだよ

— 平成10年度三世代交流事業「昔の遊びを作ろうよ」早川南小学校 —

早川南小学校の三世代交流事業「昔の遊びを作ろうよ」にはじめて出前の機会をいただいた。

当日、講師として参加したのは、10名の遊び部会部員。出前として出したのは、「竹馬」、「びゅんびゅんごま」、「シビビー」、「水笛」、「うぐいす笛」、「竹とんぼ」、「竹鉄砲」、「飛ばない竹とんぼ」、「お手玉」、草花で作るおもちゃの10個。

広い体育館にコーナーを設け、子どもたちはそれぞれ作りたいものの場所へ移動。

あらかじめ、学校で希望をとっておいて下さったので、子どもの数はだいたい平均していてやりやすかった。約1時間30分の間、子どもたちは一生懸命取り組んだ。木の葉も折り方一つで笛になり、音が出ることにびっくりした子ども。出前人のナイフの使い方にびっくりし、自分も何回もチャレンジして竹とんぼの羽根を薄く削れた子ども。水の入れ具合、息の吹き入れ具合で何種類もの音がでることを学んだ子ども……。

教える側も学ぶ側も収穫の多かった交流会だったと評価している。できれば、材料をそろえるところからはじめたらさらによかったと思う。

自然から学ぶ。自然の中で学ぶ。自然のものを使って遊ぶ。こういった機会がない子どもたちに、日常的に体験させるところがあればとつくづく思うこの頃である。

遊びの出前 その3

田富自然体験クラブとの交流会

田富町には、「田富町自然体験クラブ」がある。そこから、平成11年7月10日に早川町にある野鳥公園で行う体験学習に、出前人としての要請があった。

他町村からの出前要請は初めてだっただけに、みんなで慎重に話し合った結果、自然の中での遊び（竹細工中心）を体験させることは、子どもたちの今後の人間形成にプラスになる、また、早川町を知ってもらうよい機会になると考え、引き受けることにした。

田富からくる人数は、210名。それだけの竹を準備するのは大変だったが、部員は毎日少しずつ準備した。

当日は、15名の部員が参加。弓矢、竹鉄砲、竹とんぼ、飛ばない竹とんぼ、うぐいす笛、草花で作るおもちゃの6つのグループにわかれて実習した。

午前中作った竹箸、竹のお椀の時はナイフを扱う手つきもぎごちなかった中学生が、午後の応用編になると慣れた手つきでナイフを扱うのを見て、その進歩に驚いた。部員たちも、自分の持てる力を十分だして対応していた。

子どもたちも変わる、そして、教える側も生き生きしている。何よりも気持ちのよいことだ。

もう1つ、田富町の稲穂祭りへの出前があったことを付け加えておく。よいものは受け入れ、そして、出す、こういった交流を続けていくことの必要性を感じた。

という手もあるよ。講習会には時期にしか遊べないものをもっていくといい。

■**定夫**　遊びを町民にもっと広げるためにも、おもちゃを開発していくためにも月1回の部会を開くじゃん。

■**真一**　遊びツアーや遊びの講習会への参加を呼び掛けてもおもしろいと思うよ。金を使わないで遊ぶ方法を考えるじゃん。

■**敏明**　遊びの達人との交流だけど、あまり遠出をしないで県内の人を考えるじゃん。例えば、早川町出身の富田さんはどうかな。三珠町で「一丁」という飲み屋をしている人。器用な人で、木の葉や木の実を使って細かい物を作るよ。

■**保博**　それんいいな。おらんとうが作ったおもちゃを見てもらうこともできるしさ。やってみるじゃん。

■**真一**　かごなんか売れるじゃねえ。

■**作一**　あけびづるをまとめておくじゃん。

■**真一**　時期にしかできない遊びがある。1年間部会を続けていって、話をまとめていけばそれがそのまま歳時記になるじゃねえ。

■**定夫**　まあ続けてみるじゃん。

■**はるみ**　では、次は2月17日に部会をします。自分が作ったおもちゃ、あつめたおもちゃがあったら持って来てください。

◆田富中学校の子どもの手紙から

先日は、とても楽しい１日を過ごさせてもらい、ありがとうございました。

開校式での早川中学校の合唱には感動しました。少ない人数だとは思えないくらいひとり一人がいっしょうけんめい歌っていました。

早川町は、自然がいっぱいあって、その中で１日過ごせてとってもよかったと思っています。

午前中、竹で箸やお椀を作りました。早川町の遊びの達人からナイフの使い方を教えてもらいました。普段使ってないので、むずかしかったです。でも、自分で作ったものを使ってお味噌汁を飲んだ時には感激しました。竹の匂いが新鮮でした。

午後は、竹とんぼグループに入りました。午前中、ナイフを使ったので講師の人のいうとおりにできました。でも、羽根をうすくするところはとってもむずかしかったです。

それにしても、講師のおじさんたちの器用なことにはびっくりしました。こういう機会がまたあったら、早川町にきたいと思っています。

来年度はこんな活動を

過日、会合を開き、今年度の反省、そして来年度の活動について話し合った。話し合いの結果、来年度は、次のような活動をしていくことを確認した。

1. 今までの活動の継続

【遊びの出前活動】

■生涯学習へ　早川町の６つの地区公民館の活動の中で、子どもたちの遊びを取り入れたものがあったり、どんな活動を取り入れていったらよいか相談を受けたときには、積極的に関わっていく。

また生涯学習の幼少年部会には、保育所の保育士、小学校低学年の教師、母親などが入っているため、話題の中に子どもの遊びが出てくることがたいへん多い。こちらにも同様に働き掛けていく。

■学校教育の中へ　"子どもたちに遊びを"という遊び部会設立の目的達成のためにも、学校で計画する行事等に遊びを入れる場合には積極的に支援していく。総合的学習の導入によって、子どもたちが自ら課題を設定し解決するためには、地域の人材の活用も必要になってくる。遊びを通して、子どもたちの課題解決のための支援をしていく。

■イベントへ　これまで行ってきた山菜まつり、そば祭りへの出展は、より子どもたちを引き付けるものを考えていく。今までの、「おもちゃの展示」「遊ぶ場所の提供」だけではなく、材料や工具を用意し"作って遊べる"ような試みをしていく。また町外のイベントへも積極的に出展、支援、交流をしていく。

2. これからの活動計画

【活動の活発化】

■定例会の開催　来年度は遊び部会の活動をより活発化させ一定の成果を得ることができるように月１度の定例会を開く。

■遊びの達人リストの制作　出前活動を活発にしていくために、"遊びの達人リスト"を作成する。

【「遊びの歳時記」づくり】

■遊びの歳時記づくり班の立ち上げ　遊び部会の部員や遊びに関心のある人を募って、「遊びの歳時記づくり班」を立ち上げる。

■遊びの収集活動の充実　収集の視点にもとづいて、再度収集活動をしていく。

■「遊びの歳時記」づくり　収集した「遊び」の情報を整理し、歳時記というかたちにまとめる。

■ビデオライブラリーづくり　「遊びの歳時記づくり」と並行して遊びをビデオ等でも記録し、上流文化圏ライブラリーの資料として活用する。

【遊びの商品化】

■おみやげ品開発　これまでのイベント出展の経験から、おもちゃを商品化してみようという結論を得たため、来年度からは商品化に向けた研究にも取り組んでいく。そのために定例会での話し合いのみならず、県内外のおもちゃ作りの達人との交流会等も計画している。

遊び部会メンバー紹介（名称の五十音順）

【深澤厚海】新しい物を開発する名人。最近の作はビニールテープを利用した昆虫。【望月海模】刃物研ぎならこの人におまかせ。10年前の「肥後の守」もおもちゃ作りで活躍。【松下喜久男】山遊びが大好き。自然の中で葉っぱや木の葉を使ってコップや笛を作る。【水野定夫】遊び部会のドン。頼りになる人。竹細工が得意。竹馬、板馬作りが得意。【深沢作一】自然の素材を使って製品に変えるのが得意。あけびのつるかごは天下逸品。【望月真一】ナイフ一本あれば何でも作れる名人。山を歩きながら物を作る。【佐野卓也】子どもたちに遊びをといつも考えている人。どんな素材でも製品にしてしまう。【望月敏文】自然の中で遊んだ実体験を活かして、自然素材をおもちゃに変えるのが得意。【望月敏明】遊びの歳時記づくりを視野に入れて遊びを考えている。竹トンボが得意。【矢沢文正】竹細工が得意。水笛、竹笛は名人級。吹き方も上手で丁寧に教える。【佐野弘】遊び部会代表者。竹細工を得意とする。鳴笛は鳴を板で作ったオリジナル。【望月保博】遊びのヒットメーカー。自分で工夫したおもちゃを作る。得意は竹細工。【深澤礼子】まゆを使ったお人形、和紙を利用したお手玉はこの人の世界。【鞍打大輔】素材に命を入れることを得意とする。竹と和紙を使った提灯は逸品。【大倉はるみ】人の作品を鑑賞するのが得意。つまりほとんど作らない。手作り絵本が得意。

すばく愛好会の活動

活動期間：1997年7月～
メンバー：よしさん、うめさんをはじめ、
茂倉のおばあちゃんたち
小俣佳子・望月敏明・深沢礼子
大倉はるみ・鞍打大輔・多田慎二

「すばく」は、昭和30年代に入るまで早川町内で広く食べられていた麦飯である。丸麦に豆と米を入れて炊き上げたものだ。

丸麦とは、大麦を精白しただけのもの。現在一般に目にする大麦は平たい「押し麦」で、これは、加熱して押しつぶし調理しやすくしてあり、大正時代の初めに生まれた商品である。丸麦のデンプンは、米のデンプンよりもα化（アルファ化）に時間がかかるので、じっくり炊く必要がある。すばくを作るのにも、ぐつぐつと2時間ほどかけて炊飯することが必要で、これを地元の人は「えます」と言っている。囲炉裏の火に掛けて、気長に作るのにぴったりだったようであるが、現代の炊飯器で作るのは難しい。昔ながらの釜を使い、薪で炊かなくてはならない。

一緒に炊く豆は、小豆かうずら豆である。どちらも豆の赤色が溶け出して、麦飯全体がほんのりとピンクになる。赤飯に似た色合いが好まれて赤色の豆を使ったという人もいるが、真偽のほどは定かではない。米を加えるのは、丸麦だけだと粘り気がなくてパサつき、味も淡泊なので、少しでも美味しくするためだと思われる。従って、各家庭の台所事情や好みによって違っただろうが、概ね3割から6割くらいまでの間で調節していたようだ。

炊き上がりが「固めのおじや」といった感じになるように水分を調節する。ご飯のイメージよりもかなり柔らかく粘っているが、このくらいが咽を通りやすく、実際おいしい。

すばくには、ねぎ味噌を塗り付けて食べる。他に副食がなくても、これで充分美味しい。味噌に冷水を溶いた「冷や汁（ひやじる）」を掛けて流し込むように食べることもある。汁の具は青紫蘇の千切りと胡瓜の薄切りで、擦った荏胡麻（えごま）やおかかを入れることもある。暑気あたりで食欲がないときにも食が進む。

3度の食事に白米を食べるのが当たり前になって、すばくは次第に早川の人々の食卓から姿を消し、今ではすっかり忘れられていた。それが、研究所の食調査で"発掘"されてから、町民有志によって復活し、健康志向や米離れが進む現代の食生活の中で、広く町内外から注目を集めるようになった。作り方を伝承しようという気運も高まっている。（文責　小俣）

「すばく愛好会」発足

研究所が、郷土食すばくの存在と、今でも作ることのできる人が茂倉集落にいる事を知ったのは、研究所の発足記念イベントを控え、その時のパーティーで参加者にどんな食事を振る舞うか思案していた平成８年の初夏のことだった。当時、研究所の事務局担当であった企画課職員が、「山村のまずしい料理だけれど、早川ならではのものだ。残さなくてはもったいない郷土料理だよ。」と言って教えてくれた。早速、すばくを食べさせてくれるという茂倉のおばあちゃん、深沢よしさんの元を訪ね、ごちそうになった。

よしさんの家は地域のおばあちゃんたちの集会所になっていて、その日も数人が、われわれと一緒にすばくを食べようと、よしさんに招かれて集まっていた。実際にすばくを作るのが上手なのは、その中のひとり、望月うめじさんで、よしさんの家ですばくを炊くことになると、必ず助っ人にやってきて、いちばん肝心な火加減を調節しながらかまどを見守る。

よしさんのところですばくを再び作るようになったのは、その２年ほど前からで、町に古文書調査に来た大学生たちの要望で、思い出して作ってみたのがきっかけだったという。「思いがけず喜ばれて、こんなもんが今は珍しいんだなあとびっくりして、それじゃあ、仲間のおばあらも嫌いなもんじゃあないし、久しぶりに作って皆で食べてみるかということで、また作り始めた。だけど、しょっちゅう作るわけじゃあないよ。何ていっても手間がかかるだから。」といきさつを話してくれた。孫世代の若者たちの好奇心のおかげで、おばあちゃんたちは何十年かぶりに、また、すばくを口にすることになったということのようだ。

すばくはパーティーのメーンディッシュに決まった。おばあちゃんたちが作りに来てくれることはかなわなかったが、茂倉に住む役場の女性職員がおばあちゃんたちからコツを伝授してもらい、本番では腕をふるった。参加者には「素朴でなつかしい味」「ねぎ味噌との組み合わせは、麦とろご飯にも負けない相性の良さ」と非常に好評だった。

その後研究所では、年配の人にはすばくの味を思い出してもらい、若い人には新しい食べ物として体験してもらおうと、山菜祭りや町民塾など、郷土料理を作る機会がある度に紹介し、伝承のための講習会なども開いた。　研究所の職員がすばくの作り方を習ったり昔の食べ物の話を聞きに何度も茂倉を訪ねるようになり、ある日、おばあちゃんたちと「すばくを伝承する会をつくったらどうか」という話題になった。おばあちゃんたちは「ときどき集まるのは楽しみでいいねえ」と好反応で、その場であっという間 に名前も決まった。「すばく愛好会」の発足である。

「すばく」のつくりかた

＜ひやかす＞

丸麦、米はあらかじめ水にひたして、ふやかしておく。小豆やうずら豆は煮ておく。

＜えます＞

丸麦をじっくりやわらかくなるまで炊く（煮る）。

マスコミ報道で話題沸騰

「すばく愛好会」の存在を知り、地元紙とテレビ局が取材にやってきた。新聞記事は、よしさんの家ですばくの食卓を囲むおばあちゃんたちの写真付きで、県内各地の話題を紹介するページにデカデカと載った。テレビの方は須玉町や大和村の郷土食と抱きあわせて紹介された30分ほどの番組だった。８０歳を過ぎたおばあちゃんたちの元気なおしゃべりと鮮やかな食いっぷりが印象的だったのだろうか。その後は東京のキー局から、旅番組などの取材依頼がいくつも舞い込むようになった。リポーターの女優さんとのチグハグなやり取りなどは取材慣れしていないおばあちゃんたちならではの面白さで、どの番組も思わず口元が緩んでしまう楽しいものに仕上がった。ところが、茂倉ではテレビは限られたチャンネルしか見ることができないため、肝心のおばあちゃんたちがなかなか出演している番組を見ることができなかった。そこで、研究所の職員がビデオを用意し、公民館で一連の番組のお披露目会も行った。

全国のお茶の間に流れると、見ず知らずの人からも「ぜひ食べに行きたい」と電話や手紙がくるようになった。しかし、よしさんの家をすばく食堂にするわけにもいかず、かといって町内にすばくを提供できる飲食店や旅館もないため、恐縮しながら事情を説明してお断りしているのが現状だ。

<ぶちこむ>

丸麦が良いあんばいになってきたら、米と豆を加えてさらに炊く。（<ぶちこむ>は「ぶ」にアクセントをつけて読んで下さい。）

<おしんまい>

２時間ほどで炊き上がり。ネギ味噌をかって食べる。

「すばく」の楽し方行く末

昨年、県内の郷土料理を掘り起こし現代風にアレンジする取り組みを始めた県調理師会も、まず、すばくに着目した。8月下旬、茂倉を調査に訪れ、1ヶ月後、早川町民会館でアレンジした料理の試食会を開いた。試食会には旅館飲食店関係者や役場職員、教育委員などが参加。茂倉のおばあちゃんたちも招待され、ジャガ芋、インゲン、タマネギなどを混ぜ込んで油で揚げた「すばくおにぎりコロッケ」や「キノコとすばくグラタン」を賞味した。町民の反応は、当然ながら評価する人としない人に分れた。比較的すばくを食べている茂倉の人などは「たくさん作って食べ飽きたときに試してみたい。若い人には喜ばれるだろう」と評価。すばくに縁のない人は「手間をかけてすばくを煮るのなら、わざわざコロッケにしない方がいいのでは」「コロッケやグラタンは、そのものを作った方がおいしいのでは」と評していた。「麦飯（ばくめし）はシンプルな料理だけに、アレンジなんてしない方がいい。ネギ味噌で食べるの一番うまいから、皆そうしてきた」という声もあった。調理師会は「すばくやアレンジ料理が旅館や民宿、食堂のメニューに取り入れられて、町の活性化につながってくれれば。何よりもすばくの作り手がいなくなって消えてしまうのはもったいない。」と提案した。この指摘はきちんと受け止めたいところだ。

すばくに対する反応は、すばくを食べてきた人と食べなかった人とで大きく違う。すばくを日常食べてきた人には「今更、もう食べたくない」と思っている人が多い（山菜祭りにおける「すばくアンケート」より）。麦飯は戦後の食料不足の時の貧相なイメージなどがつきまとっていて、日常食べた世代には、米への強いあこがれがしみついているようだようだ。一方、体験のない若い世代や都市住民には健康的でふるさとを感じさせる魅力的な食べ物のようだ。姉妹交流している品川区民の中には、「最近体のことを考えて、ご飯を麦飯にしている。早川へのすばくツアーがあったら参加したい」という声もある。江戸時代の後期、米がなくて麦飯で食いつないでいた山村と対照的に、江戸では趣味的に麦飯を楽しむことが風流としてもてはやされたというが、似たような構図がありそうだ。

炊飯器で簡単に、という訳にはいかないので、すばくを食べるには時間も手間もかかる。しかし、本格的なすばくを味わってみたいというお客様にも対応できる場所がほしい。常時メニューに連ねることは無理でも、週末や期間限定のメニューにしたり、予約で対応することは可能だろう。町内のレストハウスや温泉宿泊施設には、是非一考していただきたい。また、愛好会には引き続き元気で賑やかなすばくの寄り合いを続けていただき、郷土料理の生きた姿を伝えてもらいたい。

ヤマトイワナの研究

活動期間：1996年11月～
メンバー：望月三千生、深沢肇、原福幸、望月千昭（以上、早川町）、望月和外（中富町）、佐野浩道（南部町）、後藤裕史（富士宮市）、望月優（八王子市）、

■つり好きが高じて、地元の天然魚に興味を持つようになった。とりわけヤマトイワナの希少性に気づき、野呂川・早川の44全ての本支流を調べてみる気になった。タイムリーにも研究所での「地元天然資源の発掘調査」の一環となり、いつしか私のつり道楽が使命とまでになってしまった。

■今では単なるつりを調査と称し、周囲のひんしゅくをかっている。渓流つりは季節、天候はもちろんのこと、その日の先行者の有無などに左右される誠に非効率な代物である。サラリーマン身分のサンデー・アングラーである私一人だけの数少ないデータ収集では不安があることから，何人かのつり仲間に協力してもらった。

■調査が進むにつれ、我々は愕然とした。当初、一番有望とされていた野呂川上流域ですら、絶滅寸前の状態である。それでもごく限られた範囲での生息が確認できたり、これまで不可能といわれていた人工的な放流にも成功し、一応の成果をみた。

■保護・育成することと明らかにすることとの両立は難しいことは承知の上で、この報告ではあえて具体的な場所や河川名を載せた。黙秘するより公表する方が窮地にあるイワナたちを救うのに有効であると判断したからである。当資料が決して乱獲の手助けにならずに、読者諸賢を交えた保護意識高揚に役立つよう心より願っている。

大切な大切な、地域の資源なのだから…

（文責　望月三千生）

ヤマトイワナの特徴

ヤマトイワナは、木曽川水系、天竜川水系、大井川水系、そして野呂川-早川水系といった中部山岳地帯の太平洋に注ぐ渓流だけに、比較的まとまった分布域を持っており、陸封の歴史が非常に古いといわれている。

体側線の上下に朱紅色の斑点が浮かび、一般的なイワナの特徴である背中の白い斑点が目立たず、体の模様もはっきりしていないのが特徴。

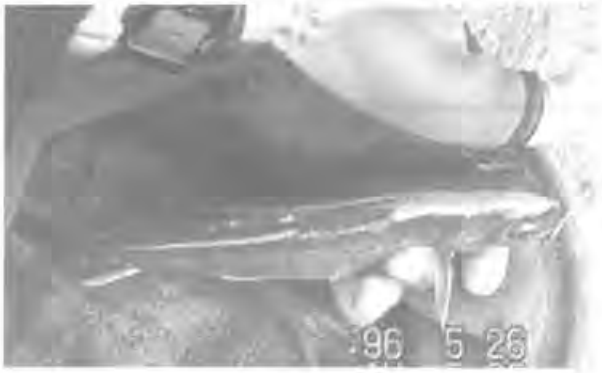
ニッコウイワナの放流や生息環境の悪化で、純系のヤマトイワナは源流の一部にしか残っていない。

第１回生息調査 平成８年５月26日

▼野呂川下流域
▼望月優、望月三千生

あるき沢橋先、右側工事用道路にて入渓し、県企業局小樺発電所（広河原手前）間を釣行する。

右写真は、５尾中１尾だけ背中に白斑が無かったもの。側面の白斑が気になるが、ヤマトイワナの特徴を充分有している個体である。



第２回生息調査 平成８年11月21日

▼野呂川本流最上流部・小仙丈沢・北沢
▼早川漁協役員９名、原福幸(森林組合)、望月敏明(事務局)、三代貴史(事務局)、望月三千生

漁協の発眼卵放流（ニッコウイワナ）関係者との同行。魚が活性していないことを想定し、投網名人である森林組合勤務の原さんに手伝ってもらった。両俣小屋手前の本流を探るが、底石、岩かげに潜む習性からか成魚は１尾も捕獲できず。北沢でとれた稚魚４尾を持ち帰り、鑑定するも全て人口放流のニッコウ種であることが判明する。

11月というのにあたり一面既に雪に覆われていて（右写真）調査には不向きな時期であった。

第３回生息調査 平成９年５月17→18日

▼野呂川本流最上流部、中白根沢、前白根沢、大仙丈沢、小仙丈沢、北沢
▼深沢肇、望月和外、後藤裕史、佐野浩道、林田秀樹、望月優、望月三千生

北沢橋手前にベースキャンプを設け、両日共３班に分かれて行動する。入渓場所も事前に情報収集し、有望とされる箇所はくまなく調べた。100尾以上の回収中、背中に白斑のない個体はわずか４尾。しかも北沢上流域にしか居ず、いかにニッコウ種の放流が悪影響を及ぼしているかがわかっ

た。今後、やむを得なく放流が続けられる限り、早急にヤマト種を生け捕りにし、別の河川に移植放流する必要性を痛感した。

回収個体（写真左頁右下）を沢水を引いた自然状態の池に入れ、観察しようと試みたが残念ながら3日めに4尾とも死んでしまった。おそらく標高差（1900m→500m）や水温差（2℃→5℃）が原因だろう。

第4回生息調査 平成9年3月31日

▼稲又谷川
▼佐野浩道、望月優、望月三千生

これまで雨畑川流域にはイワナは生息しないとされているが、6年前にヤマト種らしき個体を発見以来、今回で5回めの入渓である。色も紋様も斑点も何種類もあり、在来種が交雑したのか雑多な種の人工放流の結果なのか明確になるまで今後とも注目したい川である。ただし、熊の多さが気になるが…。

第5回生息調査 平成10年9月13日

▼北沢、深沢
▼望月優、望月三千生

第3回調査結果により、北沢のみに的をしぼった。が、釣れるのは、全て15cm前後のサイズの揃ったニッコウ系ばかりである。失意の帰り道、偶然知り合った川崎市から来たと言う東条さんの魚を見せてもらってビックリ。何と完璧なヤマトイワナ！（写真下）しかも、私たちの後からついてきての釣果だけにショック…。東条さんいわく、この1尾しか釣れず、エサは現地調達のクモとのこと。やはり、天然魚は、天然のエサでかければ…と反省する。夕刻、これまで釣っていない範囲（赤垂隧道～荒川発電所上流間）を探る。吊尾根隧道下の野呂川左岸支流、深沢で背中に斑点のない個体（写真上）をゲット。

午前中はどうなることかと思っていたが、生息域限定に大変参考となる調査ができた。

▲上2つの写真のヤマトイワナの違いについて
川魚は総じて、成育環境（水量、日当たり、川底の石の色、エサの量等）によって体色、体型を異にする。同じヤマトイワナでも、場所が変れば、これほど顕著に姿形が違ってくる。

発眼卵放流 平成11年1月31日

▼雨畑川上流部本谷沢
▼望月千昭、望月優、望月三千生

前年の10月に知人の山梨県水産技術センター研究員大浜氏よりファックスが届いた。長野県水産試験場で、ヤマトイワナ発眼卵の試験池用の余りが出れば、1万粒程度なら特別に分譲してくれるとのこと。これまで、ヤマトイワナの養殖は不可能と言われてきただけに、吉報に早速飛びつく。早川漁協も購入費用を出してくれることになり、長野漁連に申し込む。暖冬の影響もあって、通常の

▲
箱の中の袋に入っているのが発眼卵

産卵時期（12月中旬）が1か月以上ずれ込み、待望の発眼卵は日時指定の1月30日に到着。流れの緩慢な岩の下の川底を掘り、放流後は軽く砂を掛けたり、失明を防ぐため木枝で日光を遮断する。過去2度のニッコウ卵放流にはいずれも成功しているので、今回もうまくいきますように！祈る気持ちで雨畑川源頭を後にした。

第1回発眼卵放流後の生息調査 平成11年6月13日

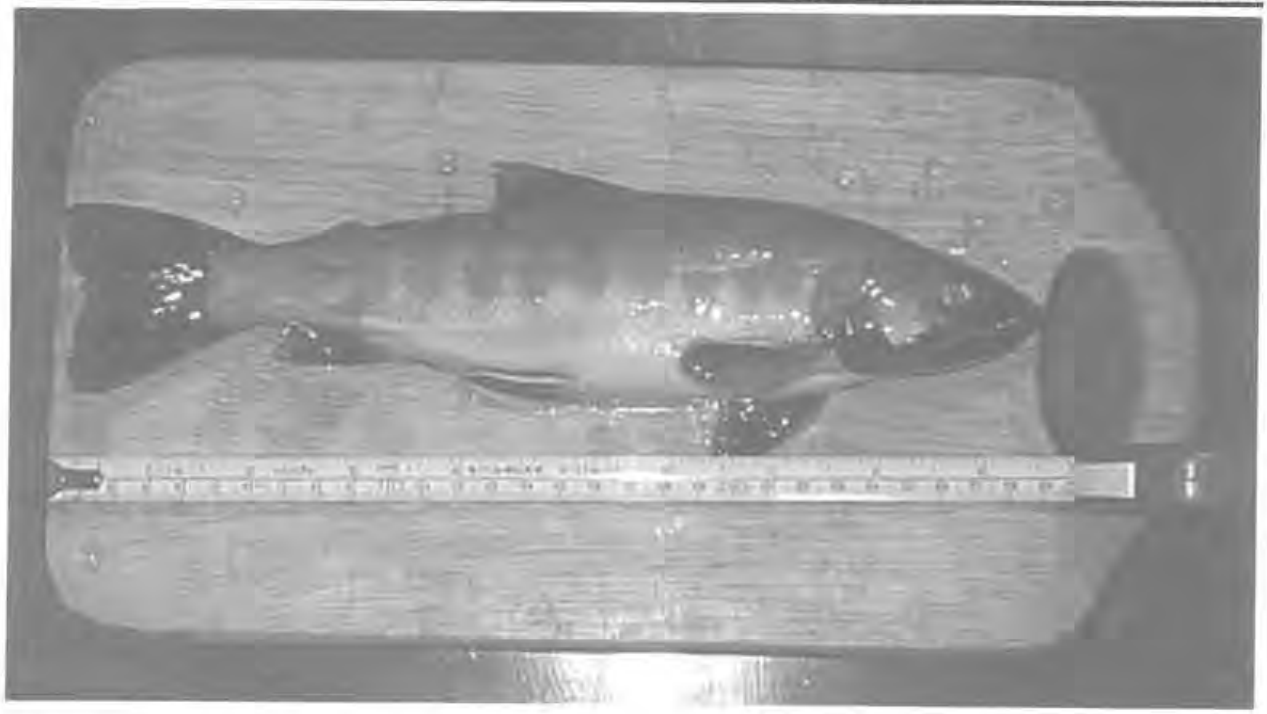
▼雨畑川上流部本谷沢
▼望月三千生

所属する雨畑野球部のバイト（行田山登山道整備）の途中、チームメートに早退をお願いし、放流場所へ直行。5か月近く経っているので、釣獲可能にまで育っていると思いきや1尾も釣れない。よく見ると、体長2ｃｍのメダカ状の個体を確認する。写真撮影するも、夕日の乱反射でことごとく失敗。でも、放流成果が確認でき、先ずは胸をなでおろす。

第6回生息調査 平成11年9月12日

▼野呂川吊尾根隧道下本流、深沢
▼佐野浩道、望月三千生

やはり、居つきの個体発見へのこだわりから、これまでのデータ中1番有望とされる吊尾根下本流と深沢を探る。写真のものは、アマゴのように丸々と太ったもの。背中にも側面にも白斑は皆無。体側線の上下に濃い朱点があり、これこそ長い間追い求めた地元純粋種のヤマトイワナ。生きたままの保存が無理なので、やむをえず現在佐野氏宅にて冷凍保存され、剥製化を計画中。



第2回発眼卵放流後の生息調査 平成12年2月11日

▼雨畑川上流部本谷沢
▼望月優、望月三千生

今回こそ、カメラに収めようと竿を入れるが、エサのミミズの端をかじられること3回。魚のあたりであることは間違いない。寒さでまだ魚が活性していないとはいえ、実物を見るまで不安。この日は、吹雪いたり薄日が差したりの山岳地特有の天候。釣獲をあきらめ、タモ網ですくおうとしたが、出てくるのはサンショウウオばかり。水中から引き上げたタモ網は、すぐにバリバリに凍りつく始末。指先の感覚は麻痺するわ頭痛はするわで、あきらめて帰ろうとしたところ、足元の岩かげにサンショウウオの黒色とは明らかに違う青みがかったものが逃げ込む。よく見ると、まぎれもなくイワナのパーマークが確認できた。捕らえようとしたが、川底の凸凹とタモ網のすき間から逃げられた。またまた撮影失敗。体長約7cm、1年魚としては、成長があまりにも遅すぎるし、3万粒中果たして何尾育ったのか今のところ不明だが、孵化の成功率は極めて低いと言わざるを得ない。今後は放流源頭からどの程度下流まで分布しているのか、春先以降改めて確認したい。

★発眼卵放流とは？
発眼卵とは、養魚場で採卵・受精させた後、受精卵が分裂を繰り返し孵化直前になった状態をいいます。卵をよく見ると、中で黒い目の魚らしきものが動いていて、孵化が間近であることがわかります。放流には他に、稚魚放流、成魚放流などがありますが、道路から遠く離れた山深い渓流への放流には、水を必要とせず軽いことから、この発眼卵放流が最も適しています。ただし源流とはいえ自然界は雑菌だらけなので、イソジンの希釈液で消毒することが多いのですが、反面孵化率が低くなるという難点もあります。今回はあえて消毒液を使わない方法をとりました。

今後の展望

1　在来種の保護

4年間の釣行記録の中からヤマトイワナに関するデータをリストアップしてみて、そのあまりの少なさに驚いている。早川・野呂川全流域にわたって人為的、自然的原因により、彼らの生息域は、ほとんどなくなっているのが現状である。かといって砂防ダムやそれに伴う道路工事を否定することはできない。なぜなら、我々自身、常に土石流や地すべりの危険地域に暮らしているし、昭和57年クラスの台風が襲来すれば、魚ですらも大打撃を被るからだ。都会暮しの自然保護運動家とは立場を異にして、現実を直視しながら今やるべきことを考えてみたい。

この調査により、限られた生息域には、次の4つの条件が整っていたことがわかった。

① 砂防工事や自然（土石流）災害などの環境異変が生じたとき、本流から容易に避難できる支流が付近にあること。
② ①の環境が回復され次第、その支流からまた元の エサの豊富な本流に戻ってくることができたり、産卵時にも往来が可能であること。
③ 砂防工事ラッシュで、つり人が敬遠するところ。
④ 釣獲や源頭放流の影響をあまり受けない比較的釣行区間の短い下流域。

①～④全てを備えているのが、広範な早川・野呂川水系中、たった1か所、吊尾根隧道下本流約500m間とその支流の深沢である。深沢合流点の約300m上流には砂防ダムがあるが、魚の遡上可能なスリット式である。イワナにとっては、大変有益な工法を採用してくれたものだとつくづく思う。一方、北沢上流部（長衛小屋下1.5km間）にもダムがあるが、下流部のコンクリート製とは違ってほとんどが金網に石を詰めた透水式のもので、魚道がないので遡上こそできないものの水は常に優しく流れる（しみ出す）仕組みになっている。堰堤裏は、土砂がたまらず穏やかなプール状になっていて、人工的環境ながら生息に適している。本流との分岐点である下流部のコンクリートダム群の光景は、つり人の趣を遠ざけるには充分であるし、（③）本流に比べて釣行区間が短い（④）ことも生き残りの条件にかなっている。

深沢にはこれまで一基もダムが入っていないが、最近になって入口付近に測量の形跡があるのが気になる。自治体（早川町、芦安村）や漁協が中心になって、早急に管轄である甲府営林局にこのエリアの重要性を訴えていただきたい。また、北沢長衛小屋付近は、山小屋の管理者が勝手に（？）立看板で周辺の禁漁を呼び掛けてくれていてありがたいことではあるが、最近ニッコウ系どころかアメマス系の稚魚まで確認しているので、もっと天然種を意識した管理（不心得者の放流取り締まり）に徹していただくようお願いしていきたい。早川漁協には、この2地域を禁漁区にしてもらいたいが、遠方ゆえ管理が行き届かなければむしろ逆効果が懸念されるので、専任監視員の委嘱なども必要ではなかろうか。

昨年の9月12日に深沢付近でとれた個体をDNA鑑定に出し、大井川源流のものと比較しようと現在静岡県関係者と検討中で、鑑定結果次第では水産学者を交えた保護活動にまで拡大していきたい。

2　放流活動

素人ながら私たちの取り組みが次第に周囲に知己を生み、中でも山梨県水産技術センターの大浜氏の特別な計らいで、天然種の発眼卵を入手・放流することができた。在来種がもっと多く生き残っていたなら必要のないことであったが、いつ途絶えてしまうかわからない現状から放流にふみきった。現時点では、数も分布も今春から夏にかけて調査しなければ把握できていないが、ニッコウ種に比べて孵化力、繁殖力共に劣っていることは間違いない。管理上の都合で、私の地元、雨畑川源流を放流場所に選んだが、今後は、捕獲の上、町内各地の在来魚のいない枝沢に移植放流したいと考えている。そのためにも、数多く育ってくれることを祈るばかりである。

他県では、静岡・長野両県の水産試験場が私などよりずっと専門的、学術的に取り組んでいる。静岡県では、大井川源流域のヤマトイワナの遺伝子研究が進んでいて1998年5月の水産関係専門誌によると、人工種苗の混入割合（ニッコウ系との交雑率）が西俣沢で2.3%、東俣沢で25.5%だそうである。早川・野呂川流域では、あくまでも私個人の推定であるがおそらく95%以上になってしまっているだろう。静岡市井川に望月正人さんという10数年来の友人がいるが、ご夫婦で地元の養魚場とオートキャンプ場の管理をされている。一昨年の夏、家族でキャンプに行き、久しぶりに旧交を温めたのだが、思わず吹き出してしまった。彼は、この頃夢中になって大井川源流のヤマトイワナを集めていて人工養殖に取り組んでいるとのこと。正しく「類は友を呼ぶ」である。現在は、その甲斐あって生けすでの発育も順調らしい。今では、山伏峠の向こうとこっちとで、良きライバルとして情報交換し合っている。長野県では、既に5年前から養殖技術が確立されていて、天竜川水系、木曽川水系への放流が一部行われている。つり雑誌にときどき「幻の…」などと載っていて、最近まで私も信じていたが、どうやら人工放流の成果のようだ。とはいえ、長野県下でもヤマトイワナの養殖業者は1つしかなく、公的な水産試験場ルートを通じなければ入手困難であるので、長野・山梨両県の水産関係者と今後ともコミュニケーションをはかっていきたい。

早川漁協によるニッコウ卵放流については、管轄区域には入漁料を徴集する限り放流しなければならない規則があり、いちがいに止めてくれとはいえない事情がある。容易に入手できるニッコウ卵に代わるだけの数のヤマトの卵及び稚魚の確保について、難題ではあるが漁協の皆さんと検討していきたい。

ビュースポット探索班の活動

2月4日：シミュレーションによる御殿山からの眺め

活動期間：1999年5月～
メンバー：天野秀一、深沢守、三代貴史、宮本高広、望月和男、望月敏明、鞍打大輔、鈴木宏記、深沢正晴

■1998年の11月に行われた研究所の地元理事会で、研究所の常任理事である深沢守の

「七面山から春分の日と秋分の日に日の出を見ると、富士山の頂上から太陽が出てくるって話があるじゃない。それなら早川のいろんな場所から毎日のように富士山の頂上から太陽が出てくる日の出を見ることができるんじゃない？これを調査してみようよ。」

という発言から、すべては始まった。

■高い山に囲まれた早川では、普段、日の出を見ることができない。そんな場所に住んでいるからだろうか。光が恋しくて、どれだけ寒くても、どれだけ眠くても、わざわざ高い山に登って太陽の光を浴びに行ってしまう。

■しかし、これほど自然に左右される活動もない。日の出を見に行くときだけではなく、日頃の行いも正しておかなければならない大変な活動である。　（文責　鞍打）

5月20日【第一回会合】

参加者：天野秀一、望月和男、望月敏明
小俣佳子、鞍打大輔、深沢正晴

▲打ち合わせ風景

この日は、ビュースポット探索班の立ち上げの日で6人が集まった。まずは早川町の地図の上に、メンバーが知っている素晴らしい眺めの情報を書き込んだ。山からの眺め、集落の眺めなど，たくさんの情報が集まった。この地図は後日、交流センター1階のロビーに貼り出して、研究所を訪れた人が自由に書き込むことができるようにした（次頁参照）。

また今後の方針についても話し合い、「とにかく現場に行って、ひとつひとつの情報を確認しよう。」「よい眺めだけではなく、ゴミが捨ててある場所など、悪い眺めをどうしたら良いかも考えたい。」といった前向きな意見が出された。

翌日から、早速、早川町の主な山から見られる、富士山山頂からの日の出の日時を、コンピューターで調べはじめた（右図・下表参照）。

山名		標高(m)	Xデーと日の出予想時刻		Xデーと日の出予想時刻		備考
山伏		2014	9月2日	5:30～5:45	4月12日	5:30～5:45	
行田山	2000年の山	2000	9月6日	5:30～5:45	4月8日	5:30～5:45	
七面山	山梨百名山	1982	9月24日	5:45～6:00	3月21日	6:00～6:15	春分
笊ヶ岳	山梨百名山	2629	10月11日	5:45～6:00	3月3日	6:15～6:30	ひな祭り
大金山		1310	10月12日	6:00～6:15	3月2日	6:30～6:45	
大黒山		1922	10月21日	6:00～6:15	2月21日	6:30～6:45	
富士見山	山梨百名山	1640	11月3日	6:15～6:30	2月10日	7:00～7:15	文化の日
御殿山		1670	11月7日	6:30～6:45	2月4日	7:00～7:15	立春
別当代山		2215	11月10日	6:15～6:30	2月2日	6:45～7:00	
白剥山		2237	11月20日	6:30～6:45	1月23日	7:00～7:15	
森山		1467	12月1日	6:45～7:00	1月12日	7:00～7:15	
笹山	山梨百名山	2717	12月9日	6:45～7:00	1月4日	7:00～7:15	
大籠岳		2540	12月14日	6:45～7:00	12月28日	7:00～7:15	
源氏山	山梨百名山	1827	12月22日	7:00～7:15			冬至
身延山	山梨百名山	1153	調査中				
布引山		2584	調査中				
稲又山		2405	調査中				
青薙山		2406	調査中				
青笹山		2208	調査中				
間ノ岳		3189	見られない				
西農鳥岳		3050	見られない				
農鳥岳		3025	見られない				
広河内岳		2895	見られない				
丸山		1910	見られない				

メンバーの声

天野秀一（早川町雨畑・林業）

「ビュースポット探索」は実によいテーマだと思います。仲間といっしょに早川町の素晴らしい場所、時、感動を分かち合うことのできる遊びです。メンバー、遊びのバラエティ、参加する自由度が広げられたら素晴らしいと思います。

ちなみに、私は、ランニングの所属チームを南アルプス遊友会（悠々会）としています。

宮本高広（早川町草塩・役場建設課）

町内で生活していると、時々"はっ"と心を奪われる風景に出会うことがある。特にその風景を見たくて訪れた訳でもないのに、至るところにそういう場所がある。谷によって深く切り刻まれた早川町は、地形だけでなく四季の変化にも富み、一年中私たちに様々な表情を飽きることなく見させてくれる。

アルプスなどの高峻な山並みを眺めるのも好きだが、それ以上に僕は山と川と集落がいっぺんに眺められる風景が好きで、そこに煙があがっていたり、農作業をしている音などが聞こえたりすると"たまらんなぁ"という気持ちになる。自然と人間活動の営みが一体となった、そんな景観がいつまでも残っていて欲しいと願う。

望月敏明（早川町赤沢・教育委員会）

峠で車を降りて山道に入った。雪を踏みしめ，あえぎながら登る身に冷気が心地よい。頂上に着く頃には体も暖まり，あたりはすっかり明るくなっていた。天気は最高。と言いたいのだが，写真を撮るについては，今回は雲がなく，少し物足りない。果たしてコンピュータの予想通り，いい位置に太陽が昇るのか不安を抱えながらカメラをセット。太陽が昇る前はちょっと気分が高揚し，時のたつのも遅い。やがて，オレンジ色をバックに富士の頂上から白く輝く太陽が昇ると，ほっとした気持ちと満足感に包まれた。下山する時は疲れも忘れ，みんなの話もはずんでいた。

三代貴史（早川町役場産業観光課）

富士山と日の出。よくあるシチュエーションです。しかし，今回は，いつもと違いました。太陽が富士山頂から現れる，また，それをここ早川で見られる，早川には，まだまだ私の知らないスポットが存在することを改めて知りました。

これからは，ビュースポットと並行しながら，早川の隠れた観光スポットも探索できたらと今後の展開に期待しています。今でも目を閉じると，御殿山で見たあの日の出を思い出します。今までで最高の日の出でした。

次回のビュースポット探索楽しみにしています。

7月20日【御殿山、富士見山下見】

参加者：深沢守、宮本高広、鞍打大輔、鈴木宏記、深沢正晴

この日は十谷峠から御殿山、富士見山を通って五箇峠に降りるというコースで、現地調査を行った。このコースは十谷峠から富士見山までは起伏も少なく楽に歩くことができた。道中は木々に覆われていて遠くの山々を見ることはできなかったが、御殿山と富士見山からは美しい富士山を、そして富士見山からは南アルプスも眺めることができた。

しかし一般に富士見山の山頂とされているところは本当の山頂ではなく、本物はもう少し奥にある。そこまで行くのは傾斜もきつく岩場もあり、かなり大変である。そんなに大変な思いをしてたどり着いたにも関わらず、本物の山頂は木々に覆われていて遠くの景色を臨むことはできなかった。

さらにそこから五箇峠までの道は、道なき道を地図とメンバーの長年の勘を頼りに歩くという感じであった。途中発見したアカゲラの巣の中にヒナがいるのが見られるなど、気持ちよく歩けるところもあったが、最後には急な難所が待っており一般の人が手軽に歩けるようなコースではないことが分かった。

11月7日【御殿山へ日の出ツアー】

参加者：茂倉から →深澤厚海、深澤礼子、深澤政治、深澤仕子、望月敏文
探索班から→望月和男、望月敏明、鞍打大輔、深沢正晴

11月7日午前5時、ビュースポット探索班のメンバー4人と茂倉集落の有志5人が十谷峠に集まった。この日はこれまでの調査を元にした初めての日の出ツアーで、御殿山へ日の出を見に向かった。天気やデータの正確さなど不安は多く、6時に山頂に到着し富士山の姿を確認したときは一安心。日の出予想時刻は6時40分前後。それまでの間、メンバーは急いでカメラやビデオをセットした。

しばらくすると、富士山の裾野当たりから赤い光が漏れはじめ、次第に空が明るくなった。富士山はうしろから照らされて真っ黒なシルエットに。しかし富士山の向こう側には黒い雲が！！しばらくの間祈り続けたが、無情にも日の出予定時刻は過ぎてしまった。「あの雲さえなかったら‥」、「自然相手のことだからそう簡単に見られるものではない」と話しているうちに、雲の上に昇った太陽が富士山の真上より少し右から顔を出した。太陽の昇る角度も考えると、どうやら太陽はちゃんと富士山の真上から出てきたようだった。

雲がなかったら…

参加したメンバー

こうして残念な結果に終わった第1回目の日の出ツアーだが、我々が調べたデータが正しいということは証明できたし、今後もデータに沿って日の出ツアーを計画できるので一応の成果は上がった。またメンバーも前向きで「この目で見届けるまで毎年来よう」と誓いあい、さわやかな風が御殿山の山頂を吹き抜けた（くっ、くさすぎる！！）。

立春の「御来光」 深澤礼子（早川町茂倉・教育委員会）

世界一の富士山は，世界一のダイヤモンドを頭の天辺につけて2000年の立春に顔を出しました。

1年に2回だけ，茂倉の御殿山から眺める富士山の山頂より御来光が拝めるということで，第1回目は1999年11月7日(日)でした。朝4時起きして，懐中電灯を頼りに眠い目をこすりながら山頂を目ざしました。御来光は初めての体験で，富士山頂から昇ることはめったにないということでしたので，こんな体験のできる自分は果報者だと思いました。闇が少しずつ明るくなり，ピンク色に染まる頃，仲間はカメラに釘付け，シーンと静まる山林に鹿の鳴き声だけが高く響きました。みんなの視線は，御来光到来の時刻を知らせる時計とカメラのみ…。期待と緊張で胸が張り裂けそうでした。だれかが，「出るぞ！出るぞ！」と言うと，一斉にカメラへ集中。ところがいざチャンスという時に雲が富士山にかかり，御来光は見えませんでした。「自然は生き物」ということを自分に言い聞かせて次回に夢を託して山をおりました。

2回目，2000年2月4日（土）立春，再度チャレンジ。秋と違い，雪道をザクザクと登りました。1回目同様，仲間はカメラに釘づけでした。仲間に無視された子犬がカメラマンの周り

12月23日【高下へ日の出ツアー《敵情視察》】

参加者：鞍打大輔・深沢正晴

この日は増穂町の高下(たかおり)という集落に敵情視察に行ってきた。ここは以前から、冬至の日に富士山山頂からの日の出が見られる場所として知られている。今回のツアーは前日にふと思いつき行くことが決まったためメンバーには連絡できず、鞍打・深沢正晴の事務局の面々で行くことになった。

早朝6時に小室山入り口に集合し、6時30分ごろ高下に到着。7時を過ぎると周りはもう明るい。しかし太陽は富士山の後ろにあってなかなか顔を出さない。ふと振り返ると、背にしていた山に富士山の影がクッキリと映っている。その影が次第に下りてきて、太陽出現の時刻が近づいた。そしてとうとう太陽が現れた。光が漏れはじめたと思ったら、あっという間に太陽は顔を出し、まぶしくて凝視することができなかった。ほんの数秒間の出来事だったが、とてつもなく美しかった。これが御殿山から見えていたら。。。また悔しさがよみがえってきた。

それにしても、カメラマンにとって富士山山頂からの日の出は、大変魅力的な光景なんだということが改めて分かった。次の日の山梨日日新聞には、高下に集まったカメラマンは150人と書いてあった。高下は自動車で行くことができるし、民宿もある。カメラマンは前日からそこに泊まるそうだ。そういった条件のおかげで人が集まるのだろう。

しかし、カメラを構えて今か今かと富士山とニラメッコをしている人たちの前を、地元の人が軽トラで横切っていく光景は滑稽であった。カメラマンもカメラマンだし、「そんな光景には興味はない」という感じであった地元の人々もどうかと思った。

早川町内にカメラマンが大挙押し寄せることの是非について議論する必要があるが、ビュースポット研究班の調査結果にはかなりのニーズがあると予想される。活用方法は後々考えるとしても、情報収集する意義はありそうである。早く町内からこの光景を見たいものである。

2月4日【御殿山日の出ツアー《リベンジ偏》】

参加者：茂倉集落から→深澤礼子、望月敏文　　メンバーから→天野秀一、深沢守、三代貴史、宮本高広、望月敏明、鞍打大輔、鈴木宏記、深沢正晴　　特別参加→望月教頭先生、鞍打墨

11月の御殿山ツアーで見ることのできなかった日の出をもう一度見ようと、冬至を過ぎて折り返してきた太陽を捕まえに行った。今回の参加者は総勢11人と1匹。午前5時45分に茂倉に集合し十谷峠へ向かった。今年は暖かい冬ではあるが、標高1500m近い十谷峠付近は雪が積もっていた。また今回は寝坊した輩がいて時間が遅れ気味で、峠に着いたときには空は既に明るくなり始めていた。車から下りたメンバーは準備運動もそこそこに急いで雪道を登っていた。

なんとか日の出前に御殿山山頂に到着。早速カメラやビデオをセットして日の出に備えた。今回は運良く雲1つない天気で、日の出は確実に見られそうだ。あとは太陽の出どころだけが問題だ。

日の出予定時刻は7時過ぎ。

そして、とうとう運命の時刻が！

急いで次のページへ！→

をチョロチョロ動き廻っていました。「おっ一出た！」とみんなの一声。パチパチとシャッターの音だけが山林に響きました。富士山頂の御来光はほんの一瞬のできごとでしたが、2000年のしかも立春の御来光が見られたことの感激で雪中での寒さも忘れていました。30度の角度で6本の光を富士山頂から放つ、それは、ダイヤモンドのように輝いていました。キラキラ輝く御来光とみんながひとつの心になって喜び合う姿を絵にも文字にも表現できないが、すばらしい体験として心のダイヤモンドとなっていつまでも輝いていることでしょう。

上流文化圏のみなさん、貴重な体験ありがとうございました。

深沢正晴（早川町奈良田・早川町企画振興課）

カメラマンの憧れのシーンであるダイヤモンド富士（山頂からの日の出）を御殿山で見ることができた。ビュースポット探索班に参加して、2度目の山行でダイヤモンド富士を手中にし？御殿山の潜在的な特長を引きだすことができたのだからうれしい限りである。ビュースポット探索の魅力はこんなところにあるのかもしれない。今後は、御殿山から南下しながらダイヤモンド富士を追いかけてみたらどうだろう。行動することでビュースポット探索班の展望が自ずと拓けてくると思うのだ。

【今年度の反省　そして来年度へ向けて】

今年度はこのような取り組みをしてきたわけだが、課題もいくつか出てきている。1つは参加者不足である。他の研究班と参加者がダブっていたり、それぞれが仕事で忙しかったりと、どうしても研究所で企画を練っていかなければならず、メンバーが主体的に取り組むような状況を作り出せていない。

もう一つは、この活動の着地点が見えない。この活動を続けていって、将来的に何を目指すのかが見えてこないし、さらには上流文化とビュースポットの接点が見えてこないのである。もちろん地域の魅力を再発見することにはなっているのであろうが、町としても研究所としても、もう少し将来的な目標も見据えて取り組む必要がある。

とはいってもこのまま活動を止めてしまうわけにもいかないので、とりあえず来年度は日の出をキーワードに活動を盛り上げようと考えている。

これまでは山頂からの眺めを中心に調べてきたが、今後は林道など車でも行ける場所からの眺めも調査していきたい。山を登るのが嫌いだったり、体力的に無理のある人でも行けるようなところを開拓し、参加者の底辺拡大をはかっていきたい。そして調査をもとに、日の出の日時、そこまでの行き方、富士山の見え方、その他のみどころ、などを入れた一覧表をつくり、それにそって一年間の日の出ツアーを計画し見に行くということも考えられるのではないだろうか。

もう一つは早川町における山岳信仰についてヒアリング、文献等から調査してみたい。そこから上流文化とビュースポットの接点が見出せないかと考えている。

鈴木宏記（早川町雨畑・早川町企画振興課）

日の出を見たのは、何年ぶりのことだろう？ 10年前、朝霧高原で生活していた時には、よく富士山の方向から昇る朝日を見ていたものだ。今でも印象に残っているのは、朝霧を離れる朝見た日の出だ。富士山の右の稜線が徐々に明るくなっていき、金色の光が富士山を浮かび上がらせる。刻々と変化する富士の姿に、暫し見とれていた覚えがある。

今回の日の出ツアーの光景は、その時以来の感動だった様な気がする。御殿山に登る途中、一休みした時の茜色の空。ビデオカメラをセットし、日の出を待つ間の空の色の変化。そして、富士山頂に昇った朝日。一緒に登った参加者からも、一様に感動の声が上がっていた。眠い思いをしても、十分に見る価値のある光景であったと思う。

早川町の中には、御殿山以外にも、富士山の良く見える所が何ヵ所もある。車で気軽に行けるところもあれば、何時間も登山しなければならない所もあるだろう。しかし、この活動を続けることで、1ヵ所でも多くのビュースポットが地図に記され、今回の我々が得た感動を、1人でも多くの人に味わってもらえればと思う。これが、今回の日の出ツアーに参加した感想である。

水環境調査班の活動

赤沢で発見した「水力猿おどし」

「ししおどし」と同じ原理で、水が貯まると缶が倒れ水をこぼす。缶が軽くなると、元の位置に戻って再び水が貯まりだす。この反復運動が動力となって、椎茸園に張り巡らされている、空き缶でできた鳴子が音を立てるようにできている。

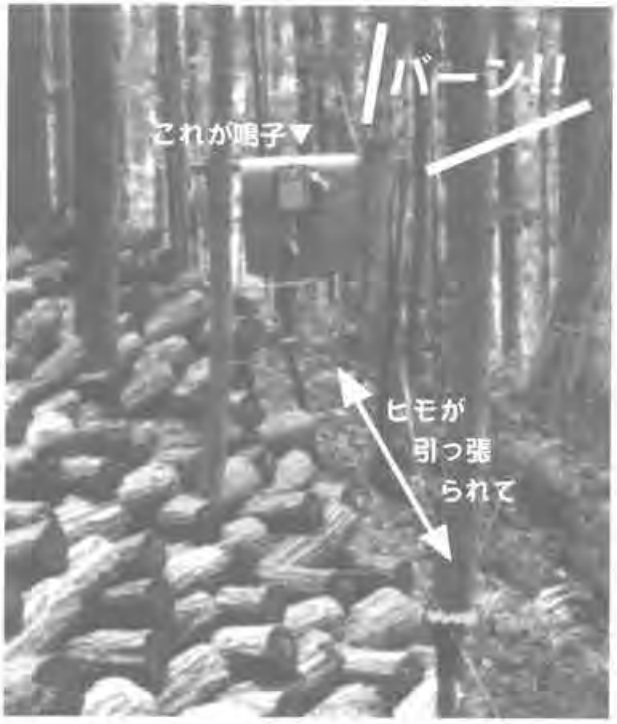
活動期間：1999年5月～

メンバー：伊藤妙子、杉山美智子、深沢守、望月敏明（以上、町内から）、小島裕一、嵯峨創平、白井信雄（以上、ネットワーク協力員）、中嶌いづみ（常任理事）、小俣佳子、鞍打大輔、鈴木宏記、深沢正晴（以上、事務局）

■上流文化圏の名に相応しいテーマとして、満を持して始まった水環境調査班の活動。町外からも力強い協力者を多数得て、森（水源）から集落、集落から海までの流域の中で水の経路の実態をひも解き、そのなかで早川の集落の暮らしの未来形を考えていこうという壮大な取り組みである。

■今年度は集落を実際に歩き、地元の人にお話を伺いながら、主に集落内の飲料水の様子を見てきた。調査を進めるにつれて、事前に予想していたことと大きく違っていたり、また集落ごとに水事情は異なり、今年1年ではとても早川全体の水環境を把握しきれなかったが、今後の活動を暖かく見守って欲しい。

■ここでは今年度3回開催した水源ピクニックの様子を報告する。　（文責　小俣）



第１回水源ピクニックin 赤沢《平成11年5月29日》

■案内人　：望月敏明
■メンバー：伊藤妙子、小島裕一、嵯峨創平、白井信雄
杉山美智子、深沢守、小俣佳子、鞍打大輔、石川宜裕

この日は水環境調査班の発足と合わせ、第一回目の水源調査（以下、水源ピクニック）を行った。最初に研究所に集合してメンバーの顔合わせを行った後、角瀬、羽衣、赤沢の３つの集落の水源の様子を望月敏明さんに案内してもらいながら見学した。

角瀬では、砂防堰堤の下に空いている穴から取水している様子を見学。堰堤に土石が溜まっているので水はろ過されて、大雨の後でも濁らないらしい。

赤沢集落では、町の簡易水道の他に、集落内にいくつかある組ごとに昔から独自の水源を持っていて、現在でもそれを利用しているという話を聞いた。町の簡易水道よりこちらの水のほうが、塩素消毒の量なども自分たちで調節できるので美味しいという。簡易水道の水はというと、もっぱら洗い物などに使われているようだ。

昼食時には、採取した水でお茶やコーヒーを飲みながら、それぞれの水に対する問題意識や今回の調査の感想などを話しあった。

したしらべ in 茂倉・京ヶ島・保・早川《平成11年5月29日》

■メンバー：小島裕一、小俣佳子、鞍打大輔、石川宜裕

第１回水源ピクニックの翌日、次の調査場所を決めるための下見に行った。京ヶ島では、集落のあちこちにある池や、家の庭先にある水場を見学。その様子から水が豊富な集落なのではないかと思っていた。しかし、たまたま出会った集落内の人から、簡易水道の水は裏の山からではなく、川向こうの山から空中に張ってあるパイプを伝って取水していると伺い驚いた。

また保では、集落内の道の両側を流れる水路に注目。水路の途中には、いくつも水をせき止めるための仕掛けがあり、その横には、せき止めるための板や、バケツやコップ、包丁といったものが置いてあることから、この水路は頻繁に利用されていたことが分かった。

▲保の中を流れる水路

メンバーの声

小島裕一（東京都・大成建設）

■判明したこと

・山村の飲み水はうまい。だがその水源確保や集落管理の実態は大変な労苦で、高齢化や人口減は水の確保という生存条件をもろに危うくしている。

・１つの水源に依存・管理する範囲を『水源住区』と呼んでみたが、一部の集落では『組』という小単位を発見した。ただし集落毎でかなり事情が異なり、集落単位、組単位、個人単位など様々である。

・集落内の水景観は余り豊富には見られず、それは農業用水需要が低いこと、簡易水道の普及で戸外の生活用水も使われなくなったためと考えられる。

■まとめ

山村では水の自主管理が前提であり、そこがほころびかけている。『水環境』を生存条件のレベルから潤いある集落景観づくりの次元までを視野に入れ、研究班の細々とした調査だけではなく、『役場による全町的な基礎調査』と『研究所による水環境の活性化の研究』の両輪で進めていくべきではないかと思われる。

『早川上流文化圏』の具体性はそこからようやく始まると言っていい。

杉山美智子（早川町赤沢）

上流文化圏の名のごとく、上流の水はとてもきれいで、口をつけて覗いっぱい飲みたくなる程おいしそう。

私たちは、普段、水に対して感謝もなく、無駄に使っていた。自然の恵みに出会い、目を見張る思いだった。名前も知らない山菜を茹でて食べたり、コーヒーを飲んだり、おにぎりをほおばったり楽しいひとときを過ごした。その時、だれが予測しただろう。一組のカップルが誕生することを。とにかく楽しかったね。今年も、呼び出してください。頑張るよ。

第２回水源ピクニックin 茂倉《平成11年９月18日》

■案内人　：深澤厚海、礼子ご夫妻
■メンバー：伊藤妙子、小島裕一、杉山美智子、望月敏明
小俣佳子、鞍打大輔、鈴木宏記、深沢正晴、石川宜裕

⇒茂倉にある水車小屋跡

第２回目の水源ピクニックの場所は茂倉。区長さんの深澤厚海さんにお願いして、まずは水源地まで案内してもらった。茂倉は山の中腹に位置する集落なので、麓の集落と比べると水の確保は大変だ。茂倉の簡易水道も角瀬と同じく砂防堰堤の下から取水し、2kmものパイプで集落まで水を引いている。茂倉郷土誌によるとかつては井戸や横穴を掘って水を確保していたようだが、今は簡易水道だけが使われているようだ。茂倉は早川と鰍沢を結ぶ峠道沿いに位置し観光客が頻繁に峠を越えてくるため、水源地周辺には悪戯防止の立て看板が立てられていた。

その後、集落のはるか下にある河原近くの水車小屋跡を見学した（写真上）。今は１つしか残っていないが、当時は４つ水車があったらしい。建物は荒れているが、歯車などはしっかりとしているようだった。その後、茂倉公民館で昼食をとりながら、それぞれの感想などを話し合った。

したしらべin 雨畑《平成11年９月19日》

■案内人　：鈴木長雄、鈴木宏記
■メンバー：小島裕一、小俣佳子、鞍打大輔、石川宜裕

茂倉調査の翌日、昨日の話し合いの最中に出た「横穴」が雨畑にもあるというので行ってみた。その穴は江戸時代に掘られたもので、入り口は厳重に閉まっていた。中にはカマドウマがぎっしりいて、ぴょんぴょん跳ねて出てきた。

今でもしっかり機能しているこの穴だが、普段は庭の池に引き込まれており、大雨や何かで簡易水道に異変が起こった場合など非常時に使われるようだ。

第３回水源ピクニックin 京ヶ島《平成11年12月11日》

■案内人　：三井啓心
■メンバー：小島裕一、嵯峨創平、中嶌いづみ、鈴木輝隆、小俣佳子、鞍打大輔、鈴木宏記、深沢正晴

今年度最後の調査は、三井所長の案内で京ヶ島集落を回った。京ヶ島の簡易水道の水源は険しい山の上にあるため簡単には行けないので、今回は水道ができる以前の水事情について話を聞かせていただいき、その後集落内を散策した。

以前の下見では水があまりないという話だったが、実際はそうでもなく、集落の中にはいくつもの井戸があったようだ。ただしその水は、京ヶ島が水はけが悪いために、使わないとすぐに濁ってしまう。田んぼも、機械を入れると抜け出せなくなってしまうぐらいぬかるんでいる。また瀬木といって、田んぼの水が常に入れ替わるような仕掛けもあるのだが、それでも収穫された米は泥臭くてあまり美味しくないらしい。また三井所長は、京ヶ島の裏山にこれだけの保水力があるとは思えないので、早川の伏流水が染み出しているのではないかという仮説も

嵯峨創平（まちづくりラボ・主宰）

「水環境調査班」のすばらしい企画に魅力を感じ、早川町のいくつかの集落の水道水源を訪ねるフィールドワークに参加させて頂きました。自然の地形を利用した巧みな水路の形や、集落ごとに違う保守管理の方法など、それに源流の水を使った美味しい食べ物など、山村の奥深い知恵を学ばせていただき、感謝申し上げます。

今後も出来るだけ応援させて頂きたいと思いますが、先行きにすこし心配事もあります。企画は良いのにそれを実行していくノウハウやマンパワーが不足して失敗することを「企画だおれ」といいます。また、企画が良くてやる気もあるのにターゲットに受け入れられない失敗を「独りよがり」と言います。上流研の自主活動では常にマンパワーの不足が課題ですが、目標設定と実行期間の設計に無理はないでしょうか。また、研究成果を伝える相手として早川町民と町外関心層が想定されますが、調査を進めるでいる途中から、特に、町内の方々に活動のねらいや意義を粘り強く訴え、また返された声に応じて活動を修正していくコミュニケーション・プロセスを設計すること…研究成果の構築と同等に扱って丁いい位の重要事のように思います。

中嶌いづみ（公職研）

水環境調査班の実地調査に参加したのはわずか一回。しかし、個人的にたくさんの発見をし、驚いた。ひとつは早川の人は早川から水を引いて飲んでいるわけではないこと（東京の人間の多くは利根川が多摩川の水を飲んでいる）。そして、集落背後の山などから水を得る工夫・水源を守る智慧が重ねられてきたこと。また、家の周りで水を溜めたり、流したりしているところには「風景」があることが多いこと。三井先生、鞍打さん、小島さんらに導かれてもっと学びたいし、どうまとめるのか楽しみで、お手伝いできればと思っている。

語ってくれた。一般的に井戸がある家は力のある家に思えるが、京ヶ島の場合、井戸がある家は水には困らないが、水はけが悪く湿気が多いため家が傷みやすく、あまり良い場所とされていなかったとも語ってくれた。

今後の展望

今年１年間の取り組みで、最も大変だったのは、やはり参加者集めである。この活動のテーマが大きすぎて、次第に何をやっているのか分からなくなってしまった参加者も少なくないだろう。

来年度はメンバーでもう一度テーマを確認しなおし、参加者個人個人の知的欲求に応えられるような水源ピクニックの形を探していくべきである。また得られた成果を、案内してくれた人や集落に返していく必要もある。水源ピクニックで全ての情報が得られるわけではないので、併せて基礎データの収集などもやっていく必要がある（今年度、何回もやると言って、結局やらなかったのだが）。

またこういったことは事務局だけで考えるのではなく、メンバーが集まって会合を開き話し合っていきたい。

白井信雄（三井情報開発）

●上流地域に共通な研究テーマを

水源住区の調査には１度だけ参加させて頂いた。それが早川町を訪ねた唯一の機会である（正確にいうと、学生時代の南アルプス登山の際、広河原を何度か訪ねているが、早川町のことは記憶していない）。こんな私であるため、少し一般的に上流文化研究の展望を記してみたい。

まず、全国の上流地域に共通な研究テーマは何であろうか。この問いから始めたい。他地域の共通テーマを、早川町でのフィールドにおいて研究することで、早川町における研究成果は他地域にも役立つものとなり、また他地域との共同研究も可能となるはずである。

●上流地域の持つ公益的機能のアピール

一般に、上流地域は、水資源かん養や大気の浄化、生物多様性の維持、自然とのふれあい、自然と密着した歴史・文化の継承、あるいは農林産物の生産・供給、水力発電等による電力供給等多面的な側面で、流域の下流側や他地域に公益的機能を提供している。しかし、地理的、地形的に経済効率性に劣り、また規模の経済性等を発揮し難い状況にあることから、生活や生産の場としては放棄される傾向にあり、上流地域の公益的機能の損失が危惧される状況にある。

こうした視点から、上流文化研究においては、他地域に提供している公益的機能をできるだけ定量的に明らかにし、受益者である他地域にアピールしていくことが必要だと考える。水環境の研究においても、早川町内及び早川下流での水収支や水への依存度を解明することにより、水循環に果たしている早川町の貢献度が明らかになるはずである。

また、下流側から早川町の持つ公益的機能の評価を把握する調査を行うことも考えられる。例えば、最近では、アンケート調査によって、公益的機能の値付けを行ってもらう（ＣＶＭ法等）ことが流行となっている。早川下流地域の住民、企業、行政等の調査を是非、実施してみたい。この結果から、早川町の実施の貢献度と下流側の認識との乖離が明らかになれば、そこをアピールしていくことも重要である。

さらに、上流地域での居住は、森林や農地等の環境基盤、道路等の公共基盤を維持する上で重要な意味を持っており、居住放棄が上流地域の持つ公益的機能を損なう恐れがあることも明らかにする必要があろう。例えば、畑を放棄することによる土砂流出、放置した二次林が荒れることによる自然とのふれあい機能の劣化、観光客以外の通行客を無くした道路の崩壊等のマイナス影響を、定量的に明らかにすることができないだろうか。

●上流地域居住を進める方法論の開発

次に、上流文化研究においては、上流地域の持つ公益機能の活用・保全に必要なマンパワー（担い手）を確保するための方法を実証的に明らかにしていくことが、重要な研究テーマになると考えられる。

この上流文化の担い手を確保する方法には、一般に森林ボランティア等のように一時的な滞在によるものと、他地域からの移住（あるいは地域出身者の帰住）によるものとがある。しかし、一時的滞在に多くを期待することは困難であり、最終的には地域への移住、帰住者の増加を狙いとすべきであろう。

例えば、手前ミソになるが、弊社は、国土庁地方振興局の委託により、「地方定住促進データベース」なるものの開発をお手伝いしている。これは、全国各地域の市町村の基礎データを網羅的に収集し、都市住民向けにインターネット上で提供するものである。都市住民は、自分が住んでみたい地域の条件を入力して、該当する地域を検索することができる。気に入った地域については、詳細情報を閲覧し、また連絡先を知ることができる。

このデータベースには、地方自治体が提供しているＵＪＩターン支援施策（体験事業、地域への就労先斡旋、住宅関連助成等）や地域づくりの関連情報も入っている。この施策と地域の移住率との関係を分析することも可能である。地理的、地形的、気候的ハンディを乗り越え、地域づくりによって、移住率を高めた地域は少ないと考えられるが、成功事例から多くのことを学べるはずである。

●上流文化研究を担う主体、訴求対象、資金

最後に、今後の上流文化研究はどのような主体により、どのような訴求対象に対して、実施されるべきであろうか。また、その研究資金はどこから調達すべきか。

まず、研究主体については、是非企業も入れて頂きたい。ボランタリーな主体による研究成果は、ボランタリーな活動の立ち上げに繋がるだろうが、そこから営利的な事業が立ち上がることは少ないだろう。上流文化を担う地域づくりにおいては、営利的な事業も不可欠だと考えるならば、ベンチャー企業や営利事業を志向するＮＰＯ等の参加を得ていくことも大切であろう。

次に、訴求対象については、地域住民だけでなく、他地域の行政職員、専門的な研究者等も対象にしていったらどうだろうか。例えば、上流文化研究者の研究成果を学会に発表すること、上流文化研究所の機関誌で、特集テーマを組み、関連する研究者の投稿を得ていくこと等、語るだけならきりがない。

研究資金については、町の予算や県の補助金だけでなく、公益法人の研究助成金等もある。また、研究所の機関誌を有料にすることも考えられるだろう。上流文化研究所として実施すべき営利事業の企画コンペ等も実施できないだろうか。

●おわりに

以上、雑ばくな文書で、勝手な提案となり、ところで君は何ができるのかと問われそうである。当方は官公庁、民間企業等の委託研究を生業としており、できれば調査を発注して頂けるとありがたい。しかし、そうでなくとも、情報交換ができるネットワークは大事にしたいと思うので、今後とも絶りずに、おつきあいをお願いしたい。

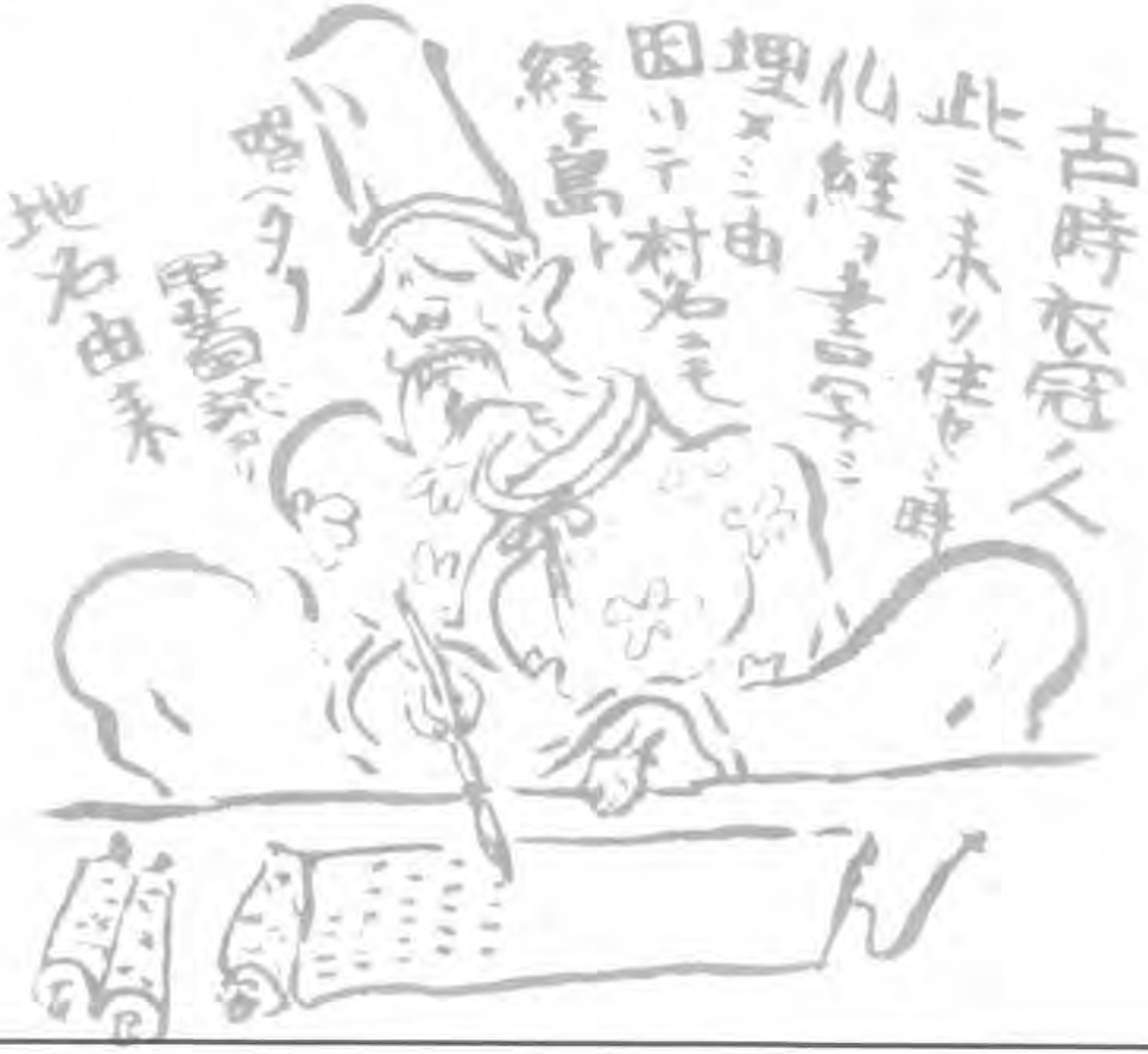
歴史考察と古文書の研究

活動期間：1996年6月～
メンバー：三井啓心

早川町に関わる、歴史的話題はきわめて少ない。この要因は何といってもその領域にたずさわる人が少なかった事と、研究資料の発掘が遅れていることがあげられる。反面、それだけにこれまで世に出なかった貴重な資料が眠っているともいえる。

近年、こうした面の発掘が盛んになって、地元でも知らなかった内容が明らかされたりして興味深い。しかし、なかには、推量による考察等が、実態と異なる記載も少なくない。こうしたことから、地元の目を通して、より内容を深めておくことは大事なことと考えている。

そこで、いくつかの話題を考察して、「峡南の郷土」（峡南郷土研究会発行）に記載してもらっている。　（文責　三井啓心）



早川の「縄文人探し」余談　三十八号

早川町における、人の居住は、伝承では、戦いの敗家や、厭世人たちの村落構成から始まったという。しかし、昭和三十五年、山梨日日新聞の夏草道中で、笹走集落において、縄文土器発見、その後「御料平遺跡」をはじめ、十七箇所からの縄文土器発掘によって、古代人の存在を裏づけた。
その土器の特徴から考えられる事について。

「早川入の逸見馬」　三十八号

享保から、安永にかけての、「早川入明細帳」には、新倉（茂倉）には三十五疋の馬がいた。大原野に十五疋、早川は七疋、黒桂六疋、いずれも北巨摩の逸見筋、武川筋の当歳馬である。

おそらく十谷峠を曳かれてきたのだろうが、その飼育のメリットは何だったのだろう。興味のあるところである。

ちなみに、文化年間になるとこの数は、著しく減少している。

「奈良田 外良寺薬縁起」　三十九号

峡中歴鑑に記載されている外良寺の薬は痰切りの妙薬だったといわれる。その後、小田原宿に権利を売却したが、ここでは、薬としてより、ウ井ラウ飴・ウ井ラウ餅としてよく売れている。

もちろん薬としては、デパート三越でも販売された。しかし効能書きの由来に奈良田の外良寺はない。

ウイロウは、元来、公家の用いる冠のにおい消しだが、この外良という名称が寺名として残ったことは、非常に興味をそそる。

「保金山と真下専之丞」　四十号

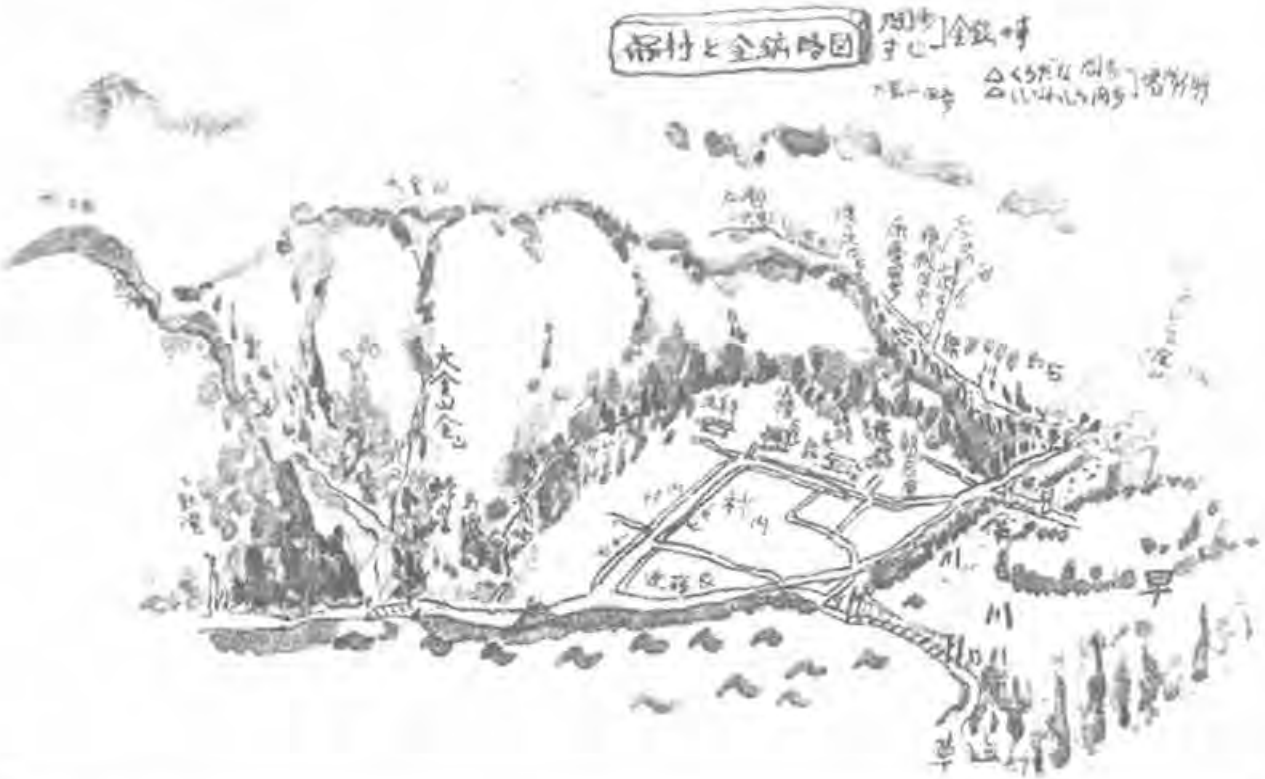
女性文人、樋口一葉の許婚、坂本三郎が書いた「馳超奈鞋」という本がある。

本当は、一葉に書いて貰いたかったらしいが、一葉は断わり、自分で書くべきだとすすめたとか。
坂本の祖父は、保金山に来た幕府の勘定奉行兼金山奉行の「真下専之丞」である。

しかし、孫という関係から身びいきが多く、その後の研究家から、その指摘もされている。

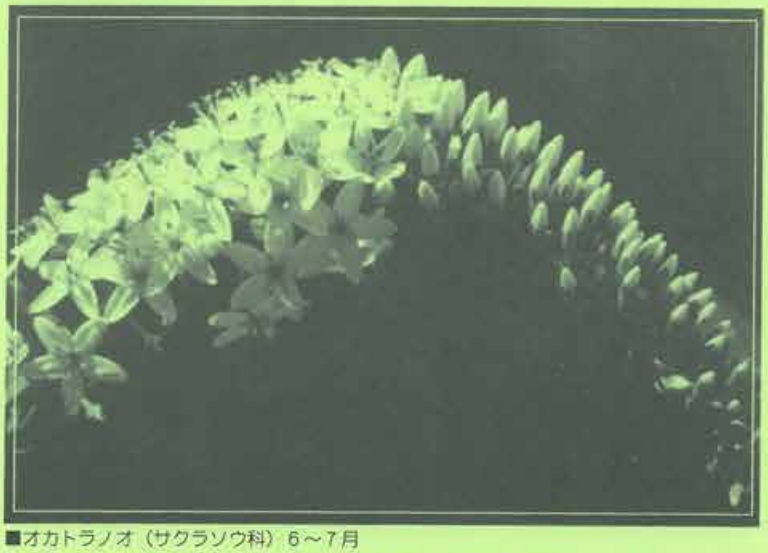
この金山奉行は、人夫として一回、奉行として二回来たことになる。

人夫として金山の様子を調べにきたことは誇張だろうが、奉行としての着任は、保の名主にあてた幕府のお触書に江戸出発の日付まで書いてある。この時、どこに陣屋を張ったのだろうか。その跡を知りたいものである。



4 自主活動

上流文化圏会議の開催
早川町民塾の開催
上流文化圏ライブラリーの整備
インターネット活用に関する取り組み
早川町カレンダーの制作
「インド先住民族アート展」と「ミティラー美術展」の開催
その他の活動



■オカトラノオ（サクラソウ科）6～7月
茎高60～100cm。虎の尾に似た花穂に小さい白い花を密につける。

上流文化圏会議の開催

「フォッサマグナの叫び もうひとつのくにつくり談義」
　早川町奈良田　：1996年8月30．31日
「日本のブナ帯文化　-蘇生を目指して-」
　宮城県五ケ瀬町：1997年11月2．3日
「フロンティアとユーモア」
　北海道ニセコ町：1998年7月23.24.25日
「1000年の学校 in 南アルプス」
　静岡県本川根町：1999年7月17.18.19日

■みんなと生きていることに感動したい。もっと素敵な自分に変わりたい。心にこつんと響くものが欲しい。下河辺理事長の話を聞くと感動する。そのわけを、彼は聞いた人自身が自分に感動しているんだという。自分の心にないもの、経験していないことには人は感動しないからである。

■こうして下河辺理事長と一緒になって、自分の中身を見つめ直し、地域を、国を論じようとごく自然になった。最初は数名で論じあおうと考えていたが、せめて聞くだけでも聞かせてくれという声で今では100名以上の人になってしまった。

　またスポンサーがいないのも人気の素であった。いろんな雑音もなく、誰に気兼ねすることもなく、妥協することもなく実行できる。邪心ではなく遊び心でできる。そして早稲田大学後藤研究室の学生をはじめ、多くの方々がボランティアで手伝ってくれて大いに盛り上がった。自分の素直な熱い志に従い、生きる力を与えられ、励まされ、感動の日々だった。友情の美味にも感謝。

■しかし「地域から国を考える」ことの大切さと、難しさを感じた。まだまだ私たちは地域に閉じこもり、心を閉ざしているのではないか。現代人には一人一人が自らの人生を語ること、国を語ることをあきらめたのか、忘れたのか。これからも全国の野生児が集まり、天下国家をダイナミックに論じあう場を創っていきたい。そこから新しい価値を感じさせる未来の人と地域が輝き生まれてくるであろうことを信じたい。

■最後に、多くの人のつながりと友情に、心からの感謝を捧げ、「ことのいきさつ」を締めくくりたい。

（文責　鈴木輝隆）

「フォッサマグナの叫び もうひとつのくにつくり談義」

■平成8年8月30～31日　■早川町奈良田

研究所の設立披露もかねたこの会議は、役場と研究所が主体となって開催した。全国から約120名の方々が駆けつけ、早川の最奥の集落「奈良田」で1泊2日で開催された。

テーマは「フォッサマグナの叫び　もうひとつのくにづくり談義」。早川町からも数名がパネラーとして出演し、町の抱える問題について議論した。また全国の中山間地域の先進的な取り組みなどが報告された。また奈良田の民謡が地元のグループによって披露されたり、歌手のしらいみちよさんのミニコンサートも行われた。この会議は屋外で行われ、食事や会場演出は、とことん地域の素材を使い手作りで行った。このもてなしのパターンが、これ以降の会議にも踏襲されている。

第1セッション　-放談-

■パネラー：久村真代、天野秀一、望月利和、深沢守（以上早川町）、平沢文康（新潟県高柳町）、セーラ・マリ・カミングス（長野県小布施町）、下西啓資（奈良県川上村）、斉藤征義（北海道穂別町）、桑野和泉（大分県湯布院町）　■コーディネーター：岡崎昌之（福井県立大学）

第2セッション

「歴史未来談義」　十年間封印放談

■パネラー：下河辺淳、中谷健太郎（大分県湯布院町）、市村次夫（長野県小布施町）、岡田文淑（愛媛県内子町）　■コーディネーター：後藤春彦（早稲田大学）

第3セッション

「清談」　地域で生きる未来を展望する

■パネラー：岩本剛（熊本県宮原町）、近藤庸平（長野県浪合村）、鈴木正士（静岡県豊岡村）、隅田節子（熊本県庁）、久木田貞一（岩手県盛岡市）、吉島隆子（三重県経済研究センター）、岩田真亮（長野県高森町）　■コーディネーター：三井啓心（早川町）

第1回日本上流文化圏会議＆第6回霧立越シンポジウム 「日本のブナ帯文化 -再生を目指して-」

■平成9年11月2～3日　■宮崎県五ヶ瀬町

第1部　全国の上流文化圏からの挑戦-

■パネラー：辻一幸（早川町）、近藤庸平（長野県浪合村）、逢坂誠二（北海道ニセコ町）、緒方英雄（大分県大山町）　■コーディネーター：藤井経三郎（東京都・RIVアソシエーツ）

第2部　ブナ帯文化圏からのくにづくり

■パネラー：林のり子（東京都・食研究工房）、尾前善則（宮崎県椎葉村）、田村一郎（秋田県峰浜村）、結城登美雄（仙台市・民俗研究家）、小笠原正七（北海道黒松内町）　■コーディネーター：秋本治（五ヶ瀬町）

第3部　おまちかね総括

上流文化圏は何を伝えられるか　下河辺淳

五ケ瀬町で行われてきた「霧立越シンポジウム」の6回目と、上流文化圏会議が1つになった会議で、霧立越シンポジウム実行委員会が主体となって開催し、全国から約150名の参加者が集まり活発な議論が展開された。

日本のブナ帯の南限にあたる五ケ瀬町で、まずはブナ帯と上流文化圏の接点について話がされた。そして「本物の観光・地域の光は何か」という話から、住民が地域文化を見直し新しい観光を創出している全国の取り組みが紹介された。早川町からも、パネラーとして辻町長が出演した。次に、ブナ帯の暮らしに詳しいパネラーを招き、民族学、食文化などそれぞれの専門的な視点から、今後のブナ帯の方向性が話し合われ、最後に下河辺理事長から、おまちかねの総括があった。

また地域に伝承されてきた神楽や、タイシャ流棒術なども披露された。さらに午前3時過ぎからは「ミッドナイトウォーク」が開催され、夜中まで語り合っていた参加者が、眠い目をこすりながら懐中電灯を片手にブナ林を歩いた。

第2回日本上流文化圏会議
「フロンティアとユーモア
北の大地で語る、次世代の地域哲学と暮らし」

■平成10年7月23～25日 ■北海道ニセコ町

ニセコ町役場と「しりべつリバーネット」が主体となって開催した。今回のテーマは「フロンティアとユーモア」。全国から約160名が訪れた。近代思想による開拓のモデルであった北海道の大地に集結し、心温まる交流を通して豊かさを見直し、ユーモアあふれる発想で未来を創造してみようという試みであった。

第1部では、ユーモアあふれるものづくり・ひとづくりを通して地域づくりに取り組んでいる方々から、その内容について紹介があった。第2部では、全国各地でフロンティア精神をもって先進的な地域づくりを手がけている方々を招き、活動の視点について説明があった。第3部では、下河辺理事長が、これまでの話を踏まえ「交流」と「ネットワーク」をキーワードに総括した。

その他、ニセコ町や尻別川をフィールドに、カヌー、シーカヤックツアー、トレッキング、露天風呂ツアーなども開催され、参加者は初夏の北海道を満喫した。

第1部〈地〉ほのぼの大地・北の一撃

■パネラー：松場登美（島根県大田市）、高橋守（ニセコ町）、角田周（青森県金木町）、佐藤稔（北海道北竜町）、逢坂誠二（ニセコ町） ■コーディネーター：後藤春彦（早稲田大学）

第2部〈人〉21世紀のフロンティア

■パネラー：中村清美（長崎県小佐々町）、梅原真（高知県土佐山田町）、小俣佳子（早川町）、清水武男（札幌市）、中谷信一（富山県利賀村） ■コーディネーター：藤井経三郎（東京都・RIVアソシエーツ）

第3部〈天〉新しい世紀に期待すること

■下河辺淳

第3回日本上流文化圏会議
「1000年の学校 in 南アルプス」

■平成11年7月17～19日 ■静岡県本川根町

本川根町役場と同町観光協会が主体となって開催した。テーマは「1000年の学校」。千年期を前にこれまでの1000年を振り返り、そしてこれからの1000年のためにこれからどう行動すべきかを考えた。

セッション1では、山村での生活の知恵や技について語り合い、ワークショップでは地元の子どもたちがその技や知恵を実際に体験した。そしてセッション2では、地域文化遺伝子論と銘打って、過去の地域文化を如何に未来へ受け継いでいくか、またそのためにどう行動すべきかが議論された。

参加者は200人近くにもなり、温泉の中や夕食の最中、そして夜中3時の駐車場でも熱い議論が繰り広げられた。

セッション1「仙人の秘密」

■パネラー：椎葉クニ子、黒木勝実（以上、宮崎県椎葉村）、中村肇（静岡県相良市）、芹沢強助（本川根町） ■コーディネーター：鈴木正士（静岡県豊岡村）

ワークショップ「仙人になる」

■仙人：水の仙人 西村芳雄（本川根町）、火の仙人 和田利夫（本川根町）、茶の仙人 斉藤安彦（静岡県島田市）、衣の仙人 川出茂市（静岡県掛川市）、食の仙人 椎葉クニ子（前出）、住の仙人 内田文雄（東京都・龍環境設計）

■ファシリテーター：藤井経三郎（東京都・RIVアソシエーツ）、木村精治（静岡県清水市）、吉田順子、影山伸枝（以上、静岡県浜松市）、坂野真帆（静岡市）、鈴木淳也（静岡市）

セッション2 「仙人の愛」

■パネラー：下河辺淳、本間俊太郎（宮城県中新田町）、内田文雄（前出）、内山節（群馬県上野村・哲学者）、望月孝之（本川根町） ■コーディネーター：後藤春彦（早稲田大学）

上流文化圏文庫の紹介

今回の報告では紙面の都合上、各会議のテーマ、パネラーやゲストなど、さわりの部分しか紹介できなかったが、詳しい内容は会議の記録である「上流文化圏文庫」を参考にしていただきたい。

これまでに今回報告しなかったが平成8年4月に早稲田大学で開催された『地域から国を考える』から、平成10年のニセコ会議まで4回の会議の記録が文庫になっている。この記録集は、基本的には議事録という形でまとめているが、全国のまちづくり活動家や下河辺理事長といった、中山間地域や国の行く末を真剣に考える全国の人々の知恵の結晶であるといえるであろう。

平成11年に静岡県本川根町で開催された「1000年の学校 in 南アルプス」の記録集は、この年報ができ上がるころに発刊される予定である。そちらも、お楽しみに。

▲これまでに発刊された4冊の記録集
お求めは研究所まで
(表紙のデザインは常任理事の水野卓史氏)

参加者の声 (上流圏文庫より抜粋させて頂きました。)

奈良田会議の記録から

豊かさを見出す「眼」 岡崎昌之 (福井県立大学)

フォーラムを終えて、奈良田で戴いた昼食は素晴らしかった。地元の産物や昔から伝わる伝統的な郷土色をふんだんに出していただいた。それらが何れもルーラルとか田舎臭い、古臭いといったものではなかった。きれいに晴れた早川の上流の山あいの中で、妙に垢抜けて都会的だったことを今でもくっきりと思い出す。

東京へ帰る途中、由布院の中谷健太郎さんと、奈良田を下って赤沢の望月利和さんのお宅にお邪魔した。赤沢には幾度か立ち寄っているが、望月さんのお宅の近くの仕事場まで立ち寄らせていただいたのは初めてだった。

仕事場を拝見してびっくりした。七面山を望見できる仕事場には、最新鋭のパソコンが数台、所狭しと並んでいた。もちろんインターネットにも接続できる。庭にはちょっとした木工作業ができるように、機械類を並べた作業場もある。家の改装や庭の遊具を作ったりするそうだ。

赤沢の町並みやまちづくりの将来のことを現場で考えながら、望月さんはこれからのパソコンやインターネットを駆使して、東京や甲府とやり取りしながら仕事をしている。また家族との交流や赤沢の自然を楽しみながら、ここに根を下ろして生活している。

赤沢での望月さんの生活や、奈良田での郷土食のことを思い出してみると、過疎地や山村は本来、多様で豊かなのだということをさんざん思い知らされる。しかし重要なのは、その豊かさを見いだす「眼」の確かさなのだろう。

五ケ瀬会議の記録から

「五ケ瀬シンポの感想と補足」 捧富雄 (リージョナルプランニング)

下河辺さんがやたらと"感動"した話をしたことが印象に残っています。相手の人(下河辺さんに話をした人)の実体験に基づいた話を聞いたことが"感動"の素になっていたように思います。それは秋本さんの言う"現場の思想"とも通じていると言えます。

下河辺さんはいざ知らず、自分自身のことを考えると、日常の仕事はいろいろな本や雑誌、新聞、通信手段などを通して得られる"(フィルターをかけられた)知識としての情報"に基づいて、それを頭の中で加工してアウトプットを出しています。その加工の中で、自らの乏しい実体験に基づいた情報を加えるにしても、大部分は他の人の手を経た情報に基づいています。だから、常に「上っ面を引っ掻いている」という思いが抜けません。自ら実体験を積むことができなければ、実体験した人の話をもっと聴いて、少しでも"ナマの情報"に触れることが必要なのではないかと思います。「このシンポジウムはそういう"ナマの情報"を聴ける機会も提供してくれていますが、やはりいろいろなところに行って、いろいろな人と接し、その活動の一端に触れてみたい。」そんなことを改めて考えさせられました。

補足したいことは、「観光」についてです。今回のシンポジウムで「観光」の語源が"国之光"を観るという話も出て、改めて見直した方も多いようですが、それでも「トウモロコシの収穫の真似事をしてキャアキャア喜んでいる"若い女ども"」に対して批判する人が多かったと思います。

しかし、そうした"若い女ども"が地域にもたらす"効果"について考えてもらいたいと思います。それは、観光客としてお金を落としてくれるという経済面での効果だけではない、地域の人に対する"教育効果"もあるのではないかということです。

もちろん、このシンポジウムに参加している方々にとっては、そんな"若い女ども"の"教育効果"は関係ないと思いますが、例えば「トウモロコシをとって喜んでいる。」ということは、"若い女ども"にとっては感動する体験であり、地元の人、特に歳若い人や普通のオジサンにとっては、そんなたわいもないことで喜ぶ姿を見るということは、都会の人がどんなことで喜ぶかを知るきっかけになるのではないでしょうか。さらに、トウモロコシのもぎ方を教えるということで、人に教える喜びを知ることもできるのではないかと思います。

もちろん、こうした"低いレベル"に止まっているだけならば、地元の人の成長もありませんが、「観光」で訪れる人の知識や経験、モラルなどは、一人ずつ違っているように様々なレベルの人々がいるわけですから、その交流によって双方のレベルが高まっていけば、地元の人々にとっても大きな効果があると思います。

今回、秋本さんに霧立越のトレッキングについてお話を伺ったとき、「若い人は、今ではもう私より詳しくなって、トレッキングのガイドというと喜んで出かけて行く。」ということを聞きました。これは、観光客を案内する中で、その人が専門知識に磨きをかけるなど、観光で来た人々と接することが自らの向上にもつながっており、そのことを無意識的に体験しているからではないかと考えられ、まさに「観光」による教育効果と言えるのではないかと思います。

さらにつけ加えれば、"若い女ども"もいつまでも「トウモロコシの収穫の真似事をして喜んでいる」レベルに止まっているわけではありません。会場にも、そうした"若い女ども"が"成上がった人(?)"。つまり経験を積んで人間として成長した人がいたのではないかとも思いますが、そういう人達が再び地域を訪れて、より貴重な効果(例えば専門知識に基づいた高度の情報や生活感覚に基づいた本物の消費者情報など)を地元にもたらせてくれる可能性もあるのではないでしょうか。

これも「頭の中で加工したこと」ですが、観光を研究する者として付け加えさせていただきました。

ニセコ会議の記録から

「自然を融合した人間の営み」 須藤春夫 (法政大学)

これまで聞かれた上流文化圏会議の様子は、記録集を読んで知っていました。しかし、今回の、ニセコ会議に参加して、地域のさまざまな活動を支え発展させようと奮闘されている方々の情熱に触れ、日本でも地域活動の蓄積と層の広がりができつつあることを肌身で感じ取ることができ感激しました。また、なによりも会議のロケーション設定がすばらしい。屋外でのトークは、ニセコの雄大な景色とあいまって、まさに自然と融合した人間の営みの姿を彷彿とさせてくれました。そして交流会ではおいしいビールを飲みながら、沢山の方々と知りあうことができ、うれしくなりました。

会議の設営や運営にあたってくださった、「しりべつリバーネット」やニセコ町役場の皆様のあたたかいもてなしに、あらためて拍手を送ります。ありがとうございました。でも、シーカヤックに乗れなかったのは今でも残念な思いです。

早川町民塾の開催

■早川町民塾は、文字通り、町民が知りたいこと体験してみたいことについて専門家を講師に招き学ぶ場である。町民の声を基に、全国の理事や協力員のネットワークを生かして研究所がコーディネートする。

■１回目は、「上流人のための上流学講座」と題して、1997年９月から10月にかけて４回の講座を行った。地域の資源や課題を明確にし、これからの時代にふさわしい早川ならではの暮らし方を考える、というシリーズで、「上流圏・早川ならではの暮らし方」を、思い切って「上流学」と名付けてみた。

■地域の資源や課題として選んだのは、高齢者、水、山の３つ。上流文化圏構想の策定や研究所の運営にも関わり、日頃から早川の地域づくりをサポートしていただいている山梨学院大学などにご協力いただき、それぞれのテーマに明るい３人の教官を講師に招いた。

■第４回は、「もっと知りたい人のための追加講座」とし、３つの講座を通して参加者がもっと詳しく知りたいと思った事をフォローアップする場とした。また、各回の講義の後には町の伝統食を食べながら、講師や参加者とフランクに意見交換する「夕食交流会」も設けた。

■講座１　平成９年９月６日　交流促進センター
「お年寄りが生き生き暮らす早川をめざして」
講師：中井道夫先生・椎名慎太郎先生

■講座２　平成９年９月13日　町民会館
「水の循環と暮らし」
講師：椎名慎太郎先生

■講座３　平成９年９月27日　奈良田の里
「登山と地域振興」
講師：住谷雄幸先生

■講座４　平成９年10月25日　交流促進センター
「もっと知りたい人のための追加講座」
講師：椎名慎太郎先生

■コーディネート：中嶌いづみ、小俣佳子

（文責　小俣）

■講座１ ［平成９年９月６日　交流促進センター］

「お年寄りが生き生き暮らす早川をめざして」

講師：中井道夫先生・椎名慎太郎先生

各地で高齢者の生活調査をしてきた中井先生が、早川での調査結果を踏まえて内発的発展の方策を提案した。

高齢化率が高い町の中でも、特に早川は世帯規模が小さいという特徴を持つ。つまり老人が多い上に、単身とか夫婦２人で暮らしているケースが多いということ。それでもやっていける理由は、比較的近くに子供や親族がいて時々通ってくるなど、ネットワークの中で生きているから。出るべき人は出てしまって、ここにしか住めない人が残っている、と早川の現状を分析した。

また、人が出ていく要因について、社会施設の面からはマイカー必需の交通状況、高校から別居を強いられるなどの教育上のマイナス面、病院が不便、買い物施設がない、などを挙げた。社会的要因としては、新しい人を排除する、多様性を認めない、女性の社会的地位が低い、高齢家長が居座っていて若い人の出番がない、などを指摘した。

その上で、若い年齢層が住み続けるためには、村の資源を活かして生活できる職場、産業が必要とし、宿泊所と加工産物品のネットワークがない、サービスが考えられていないことなどを具体的に挙げ、また、フィジカルなコミュニケーションのみならず外部との情報コミュニケーションのためにも道路環境の整備が必要と話した。

<夕食交流会～すばく>

メニューは、昭和30年代に入るまで、早川町全域で食べられていた麦飯「すばく」。昔ながらにネギ味噌だけをおかずに食べた。参加者からは「懐かしい」の声。中井先生のゼミ学生たちにも「けっこう、いけます」「くせになるかも」と受け入れられた。

■講座２ ［平成９年９月13日　町民会館］

「水の循環と暮らし」

講師：椎名慎太郎先生

■講師の紹介（肩書きは、塾開催当時のものです。）

椎名 慎太郎　先生

山梨学院大学法学部教授。専攻は行政法、文化財保護法、環境法。　長年、甲府の十郎川を守る活動を行うなど、河川の環境問題に取り組む第一人者。

中井 道夫　先生

山梨学院大学法学部行政学科助教授。専攻は都市社会学、都市政策。平成８年より早川町のお年寄りの調査に取り組まれている。

住谷 雄幸　先生

元山梨英和短期大学教授。山梨県立図書館協議会会長。「図書館と歩む会やまなし」会長。図書館学、江戸時代山岳紀行を専門とし、登山の歴史に深い造詣を持っている。

■講座４［平成９年10月25日　交流促進センター］

「もっと知りたい人のための追加講座」

講師：椎名慎太郎先生

テーマを決めずにおいた４回目のフォローアップ講座は、地方分権と町村合併の議論が高まる中、地方行革の大波を迎えるにあたって、上流文化圏にどのような準備と心構えが必要かを学ぶことになった。役場職員の熱心な聴講が目立った。

講義ではまず、我が国の分権改革がどのように進んできたのか、戦後改革から時代を追って整理し、今回の地方分権推進委員会の中間報告のねらいについて解説を受けた。椎名先生は、中央集権型行政システムの制度疲労や変動する国際社会への対応、東京一極集中のひずみの是正、高齢・少子社会化の中で行政の効率化などや省資源化を進め個性豊かな地域社会を実現する必要から、大きな地方行革は絶対にやってくるとし、「分権化は必ず進み市町村の責任は確実に大きくなる。力を蓄えることが何より大切」と話した。

また、効率論が先行する合併議論には大いに疑問を投げるべきで、早川の暮らしに息づく、統計上には出てこない生活の喜び（例えば自給自足の満足感や豊かさ）などを見落とさないようにしなくてはいならない、と指摘した。そして、「上流文化圏」という哲学を打ち立てた以上、どこかのモデルに頼ることなく、外の動きを視野に入れつつも、早川町独自の発展計画を進めていくことが重要で、そのためには、町民も意識を変えるべきところは変え、外からの人を排除せず、交流人口を増やして力をつけていかねばならない、と力説した。

■椎名先生による４講座の総括

1・高齢化社会でも豊かに暮らすことは可能
　・地域の必要に応じた行政サービスが肝要
　　（そのためには権限と財源が必要）
　・町民も意識改革を
　・再び訪れたくなる雰囲気づくり
　・観光サービスに地元産品の活用を
2・コンクリのダムはいらない、緑のダムを
　・水は地域のものであり、全国民のもの
　・森林を環境の観点で見よう
　・「水清く、緑豊かな早川町」をセールスポイントに
3・眺望の良いハイキングコースがほしい
　・登山と温泉、そば打ち体験、野鳥観察ハイキング、山菜祭りなど、組み合わせで魅力アップ
4・外の動きは視野にいれつつも、あくまで早川独自の発展計画を

■その後の町民塾

２回目の町民塾開催に向け、平成10年11月23日に町民の要望を聞く準備会を開いたところ、32名の参加を得て、多くの企画が持ち寄せられた。企画の一部を紹介すると「早川のビュースポットマップを作りたい」「養蚕資料の保存を」「山村食堂を作りたい」などの観光資源や地域資源の発掘と活用に関するプラン、「水環境の調査」など環境の見直しに関するプラン、「ローカルマネーの導入」など新しい地域システムを考えようという企画などであった。この中から積極的に活動の担い手が出てきた「ビュースポット」「養蚕資料保存」「水環境調査」については、既に地元研究班などを組織してメンバーを集め、活動が始まっている。

今回持ち寄られた企画は、たまたまフィールドワークの色合いが強かったため、講座形式の塾にはならなかったが、研究所では常に、「こんな人のこんな話を聞いてみたい」「こんな学習の機会があれば」という町民の皆様の声をお受けする態勢でいる。是非気軽に要望をお寄せいただき、町民塾を活用していただきたい。

早川町が策定した「上流文化圏構想」は，水を命の源とし、その源である上流域の自然と山村生活の中で培ってきた農山村文化を見直すことから、これからの新しい暮らしをつくり出そうとしている。町民にとって早川の流れは、未来に向かって生き生きと暮らすための血脈といえ、常に美しい早川とともに生きたいと願ってやまない。水の循環や河川の環境に詳しい椎名先生と早川の水を守る運動をしてきた奈良田の深沢守さんとともに、上流文化圏にふさわしい水環境を実現するための第一歩を考えた。

深沢さんは流域の電源開発で減少した早川の流量を復活することを目指し、有志とともに活動してきた。水環境にとっては問題の発電所が、同時に地域の人の雇用の場となりさまざまに地域を支えているという複雑な構造の中でのアクションだ。運動の難しさや戸惑いなどを語った。これに対し椎名先生は、自ら甲府の十郎川を守る活動を続けてきた体験や、全国の河川環境問題に関する多くの情報からアドバイスした。また、水は地域のものであると同時に、流れゆくことによって全国民のものでもあるという受け止め方を示し、すべての人が同じ課題の上に立っていることを力説した。森林を経済の観点でなく，真に環境の観点でとらえることを改めて強調し、コンクリのダムをすてて緑のダムを大切にするよう訴えた。

＜夕食交流会～蕎麦と豆腐＞

地元の大豆で手作りした豆腐とおから料理、手打ちそばを楽しんだ。いずれも水が味を決めると言われるだけに、飲料水の安全性や山の美味しい水の話などにも花が咲いた。

■講座３［平成９年９月27日　奈良田の里］

「登山と地域振興」

講師：住谷雄幸先生

南アルプスへの登山口として、七面山信仰の拠点として、早川町の活性化に山の存在は非常に大きい。登山の歴史に詳しい住谷先生から主に江戸時代の登山の様子を聞き、現在の登山ブームの功罪や登山と地域振興について考えた。

まずは、山岳信仰に始まる登山の歴史をひも解き、聖なる山と人間が強い緊張関係を保っていた時代を振り返る。山への禁制は厳しく、女人が立ち入れなかったり、男性も厳しい精進を行った特別な道者でなければ登拝は許されなかったが、山神の力を

得ることによって飢饉などの苦しみから抜け出たいという民の思いが、次第に厳しい精進潔斎を行わなくても軽精進で登拝を決行する者を出現させ、特別な努力をしなくても山へ分け入れる新しい登拝の時代が幕を開けた。信心二分遊び八分というように，次第に信仰登山の大衆化は進み、以後、物見遊山的な登山の風潮は時代とともに強まっていくことになる。

現在の富士登山者は年間30万人で、一日に最高16,000人が登った記録がある（1997年８月３日）が、これは、江戸時代中期の年間の富士登拝者数にあたるという。「山を恐れるがゆえに、汚したり荒らしたりすることなど考えられなかった信仰登山の伝統を改めて思い返してみる必要がある」と話した。

また、海外の事例などを引きながら、自然との共生や日常からの解放を実現する登山が、どのように地域振興に影響しているかを具体的に説明した。

＜夕食交流会～握り飯＞

登山の弁当として、山仕事へ持っていく食事として，古くから山の民と握り飯は密接な食べ物であった。七面山信徒に長年握り飯を作っている赤沢の杉山美智子さんが、自慢の山椒の佃煮を入れて腕を振るってくださった。その早さと正確さ、絶妙な握り具合が参加者を魅了した。

上流文化圏ライブラリーの整備

⇒早川町関連の書籍・資料

⇒全国市町村の地域情報

⇒地域づくり関連の書籍

■本格的な活動期間：1999年5月～

■本を寄贈して下さった方

川崎和彦、小島裕一、鈴木輝隆、辻一幸、山路恭之介、渡辺美明（敬称略）

■本を貸して下さった方

望月利和、小俣佳子（敬称略）

毎日新聞社が出した“1999年度全国読書世論調査”によると、本を読む人は前年度より増えて52％になった。年代別にみても、10代から60代以上まで平均して50％以上になっている。地域別にみても、都市部、地方とも71％になっている。読書冊数も、1人6.1冊と昨年よりも0.2冊増えている。主に読む本は、趣味、スポーツ（41％)小説、エッセイ、詩、短歌、俳句（40％)暮らし、料理、育児、健康、医療、福祉（31％)ノンフィクション、体験的なもの（25％)という結果がでている。これらの結果からみても、日本人は読書好きだといえる。

早川町に目を転じてみよう。町内3校の学校図書館は、ここ数年の間に充実し、パソコンも入った読書・情報センターとしての機能を果たしている。教師は子どもを読書好きにさせるために学校での読書環境づくり、親子読書など家庭における読書環境づくりの取り組みを一生懸命している。早川町民も、おそらく本が好きだと思う。早川町には図書館がない。だから、町民の多くは、自分で本を求めたり、町外の公共図書館から本を借りているに違いない。早川町に図書館があったらなとつくづく思う。4月に研究所に来たとき、町民から借りたという2、000余冊の本が資料室にあった。

この本をもとにここのライブラリーをもっと充実していきたい、そして、町民が気軽に利用できるライブラリーにしていきたい、活字文化をもっと充実していきたい、これらのことがライブラリーを立ち上げるきっかけとなったのである。

（文責　大倉）

●ライブラリー設置の意義と目的

1 町民は、学ぶ意欲、読書・芸術・創作活動の意欲をもっている。ところが早川町には、それらの要求に応えるための、サポートするための書店・施設がない。町民の知的権利に応えるための施設などが必要である。

2 図書館は、考える町民を育て、次代の町民を育て、世界的視野をもった知性と暖かい人間味ある感性の双方をそなえた町民を育てなければならない。そのためにも、生涯学習を一貫するサービス体制をつくる必要がある。

3 図書館は、町の頭脳となり、町の行政課題解決のヒントとなる資料が集ってくるところである。そして、整備された資料が町当局や町民に自由に提供されなければならない。たくさんの価値ある資料を収集するためには、全国の上流文化圏の自治体とのネットワークをつくる必要がある。

4 ライブラリーは、町の情報センターにならなければならない。そのためにも、町独自の資料収集を発信したり町に関するあらゆる刊行物、行政資料を開示しなければならない。

●今年度の取り組み

1.書籍・資料の収集と整理

ライブラリーには早川町民やネットワーク理事から借りた本、いただいた本、資料等が6、000余点ある。2階の資料室、ホールにはそれらの本がところ狭しと置かれていた。これらをどうにかしなければならない。その前に書架を用意しなければならない。役場にお願いして買っていただくことにした。でも、まだまだ収納できない。そこで、改築される早川北小学校の木製の手づくり書架を取り壊される前にいただくことにした。夏の暑い盛りである。研究所の男性3名と書架の制作者が6メートル余ある書架、3メートルある書架2個、計3個を汗だくになって運んだ。また同じく早川北小学校からいただいた木製の下駄箱を上下2つに切り分け、カンナできれいに削り、やすりをかけ、ニスを塗って手づくりの書架を作った。これで、書架はどうにか揃った。

次は、どう整理するかだ。書籍については、基本的にはNDC〔日本十進分類法〕による分類と、町民が見やすいようにジャンル別による2つのやりかたを取り入れた。ジャンルは、食、水、医学、児童書、マンガ本、文庫本、写真集、県市町村史、地域おこし関連書籍、特用林産物（きのこ　しいたけ）にとりあえず分類した。こうして整理したあとも、町民やネットワーク協力員から書籍の寄贈があった。約1，000冊の本をトラックで甲府で持ちにいったこともあった。5、000冊余の書籍をNDC、ジャンルごとにわけるのは大変な仕事だった。本は意外に重い物。夜、足腰が痛くて眠れないこともあった。企画振興課の2人には、書架づくりから重いものの運搬をお願いし、心から感謝している。さあ、5、000冊＋資料をどう配架するのかが次の仕事だ。

▲みんなで書架づくり

利用者の声

比志　保さん（早川中学校 校長）

「陶芸教室」を上流文化圏研究所で開いた折り，大倉先生の薦めで、同図書室に入った。部屋に入ってびっくり。学校にない高価な本、大人の本がびっしり。書架が不足し廊下にまで溢れている。寄贈本が殆どの由。特に、農林業、食文化、地域づくり等の本が充実している。正直言ってこんなに充実しているとは思わなかった。

世紀末、時代を示すキーワードは「混迷」。失業率はついにアメリカのそれを越え、奇怪な事件が次々と起こる。こうした時こそ、原点に返り来し方行く末を考えねばと、『すべては江戸時代に花咲いた』（農文協）を読んだ。近代化の功罪。環境に優しい意外に豊かな暮らし。江戸時代にこそ、未来を切り開く鍵があると思った。

21世紀は人権と環境の時代。上流文化圏の理想は21世紀の理想でもある。これからも図書室を利用したい。

2.工夫した配架

もともと2階の資料室は、図書室としてつくった部屋ではないので、配架には苦労した。とにかく狭い。書架と書架の間が狭くて自由に動けない。それに、書籍も収納しきれない。そこで、ジャンル別にわけた書籍は、玄関ホール、1階廊下、2階廊下、2階へ上る階段手すりスペースにと分けて置くことにした。

交流センターを訪れる人たちの目につくように、玄関ホールには雑誌、食に関する本、文庫本の一部、特用林産物の本を置いた。このセンターには、飯富病院の診療所がある。そこには、薬袋集落（研究所があるところ）の人たちが月2回受診にみえる。待っている間に読めるだろうと考え、診療室がある廊下に医学、長寿、栄養に関する本を置いた（写真1参照）。

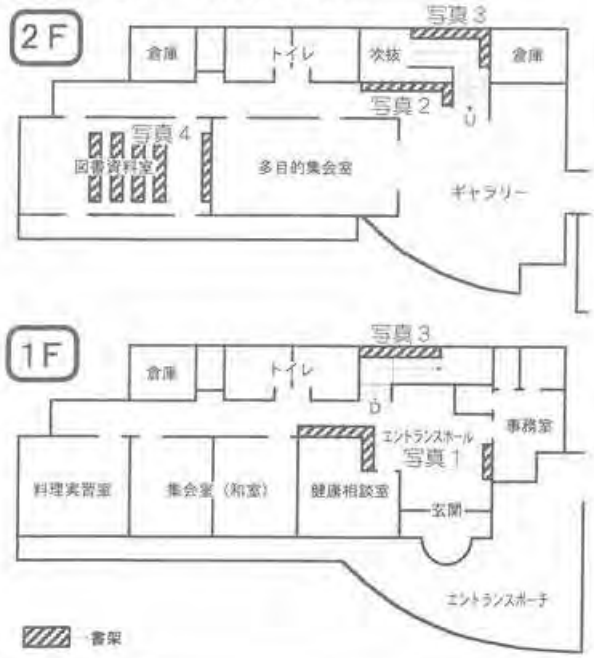
2階廊下には、運ぶのに苦労した長い書架を置き、文学書、言語、芸術に関する本、写真集を置いた（写真2参照）。

子どもたちにも大人たちにも読んでもらいたいマンガ等は、2階に上る階段の手すりコーナーを利用して置いた（写真3参照）。

その他の本、写真集、地域おこし関連書籍、山梨県・早川町関連書籍資料は2階にそれぞれのコーナーをつくって配架した（写真4参照）。

配架作業も大変だった。1階と2階をいったり来たりして本をきめられた書架に入れる仕事が実に3ヶ月以上続いた。こうして、10月1日の貸出しにこぎつけたのである。

■交流センター内の配架の様子



▲写真1　玄関ホール付近の様子

▲写真2　2階廊下の様子

▲写真3　階段付近の様子

▲写真4　2階資料室の様子

3 利用方法と利用状況

こうして平成11年10月1日、蔵書の貸し出しが始まった。開館時間は月曜から金曜までの午前9時から午後6時までとし、土日は休館。貸し出しは1人5冊まで、貸し出し期間は2週間とした。なお開館時間の閲覧については自由とした。

これらのことを"上流圏だより"や"広報はやかわ"を通して町民にお知らせし、また、交流センターを訪れる人たちには、ライブラリーに寄っていくように呼び掛けてPRに努めた。

貸し出し開始以来、文学書、水に関する本、方言に関する本、健康に関する本などを47冊貸し出した。閲覧に関しては、センターへの来客が事務室横にある書架に足を止め、食に関する本、定期的に購入している雑誌、早川町の資料などを手に取り目を通しているという光景がよく見られる。この配架は一応の成功を見た。

●ライブラリー充実に向けた来年度の取り組み

1：新たな資料の収集

・研究所にふさわしい蔵書・資料の収集

新たに早川町にかかわる古文書、古民具、伝承記録、民話、早川町ゆかりの作家、芸術家、学者など関係人材の著作資料を収集する。

・費用をかけない資料収集の工夫

国、県、県内自治体からの資料を入手したり、ネットワーク理事へ資料提供を要請したり、公的シンクタンク、企業等の紀要、研究時報、広報誌、報告書等の送付依頼をしていく。

・公共図書館としての基本的図書館資料の選定と収集

歴史的に定着している基本図書、研究調査のための資料、専門的図書、新しい図書館資料（刊行物-新聞、雑誌）生活実用書、娯楽のための図書を計画的に購入していく。

・古本市の開催

読んでしまって家にある本をライブラリーに寄贈していただいたり、欲しい人に分けてあげるための仕組みとして古本市を開く。

2：町民に向けての図書館サービス

・来館への呼びかけ

ライブラリーニュースの発行や有線放送を利用しての呼び掛け、ホームページの開設、広報はやかわを通して、上流圏ライブラリーへの来館を呼び掛けていく。また、通信によるアクセス、電話、ファックス、Eメールによるリクエストやレファレンスをしていく。

・蔵書情報の提供

平成12年度中にライブラリーにある蔵書を冊子にして町民に配布する。この作業は、本の整理、配架以上に大変になることは目に見えている。今、考えているのは、パソコンに本を入力することである。そうすれば、早川町のホームページにそのまま使えるからである。作業を一緒にして下さる方、大歓迎します。入力作業は、4月から開始します。

・"読書のつどい"の開催

"読書のつどい"を開いて、ライブラリーを町民に知ってもらう。つどいでは、読み聞かせ、読書ゲーム、簡単な手づくり絵本を作って楽しむ。

3：早川町立図書館構築のための準備

前述したように、早川町には図書館がない。しかし、小中3校の学校図書館は充実してきているし、上流圏ライブラリーもだんだん整備されてきつつある。そこで、3校の図書館と上流圏ライブラリーの機能を繋いで1つにすれば、全体の蔵書数も図書館資料も増え、町民みんなで共有できる。つまり、1つの図書館にするというのが、将来の早川町の図書館構想である。構想実現のために、とりあえず3校の学校図書館や上流圏ライブラリーにある本を各図書館ごとにパソコンに入力する作業をしていく。

ある日のできごと

玄関に入ってきた男性のお客さん。事務室に入ってくるかなと思っていたら、ホールの書架の前で立ち読みを。なんと"ワインの話"。事務室の窓越しに私が見ていることも気づかず、熱心に読むこと10分あまり。このお客さん、立ち読みが得意と見える。その上、ワインも好きなようだ。今夜は、赤ワイン？白ワイン？

ちょっとお耳を

上流圏ライブラリーにしかない秘蔵図書を教えます！

調査の結果、山梨県のどの図書館にもない貴重な本が3冊ありました。

・『奈良田の生活と自然とのつながり　焼畑を中心に』（民族文化映像研究所）
・『雨畑の民俗』（都留文科大学民俗学研究会）
・『西山村誌』

こういった早川町に関する本、早川町出身の作家が書いた本などを探していますが、情報が少なくなかなか手に入りません。もし、そういう情報や本をお持ちでしたら、研究所に御一報下さい！

インターネット活用に関する活動

■早川町のホームページ開設：1996年 9月
■研究所のホームページ開設：1996年 9月
■インターネット同好会発足：1998年 2月
■「2000人のH.P.」 制作開始：1998年12月

■時代はインターネット。猫も杓子も情報化・情報化と騒ぎ立てている。情報関連産業の株価はうなぎ登り。地方自治体もホームページを持っているのは当たり前。当然の流れで我が町でもインターネットを導入することになった。しかもサーバーまで立ち上げるというではないか。

■これも当然のことなのかもしれないが、結局研究所で早川町のホームページの制作・更新を担当することになってしまった（だれがやると言いだしたかは謎である）。「研究所の仕事じゃないよ。片手間にできる仕事じゃないよ。」と愚痴りながらも、必死にホームページの作り方を覚えたころが懐かしい。

■最初は週に20件のアクセスしかなかったこのホームページも、今では毎週400件程度のアクセスを数えるほどに成長した（それだけインターネットが一般に普及したとも言えるであろうが）。開設3年で3万アクセスに到達しようとしている。これは全国の他の自治体ホームページと比較しても優秀な数字だと自負している。また面白い企画も始まった。町民全員を紹介する「2000人のホームページ」である。この取り組みはNHKでも取材されたり、今、ちょっとした注目の的である。

■しかし、役場からはなかなか評価されないのである。ホームページによる情報発信の効果なんて計れないということはあるのだが、なにより問題なのは、ほとんどの人がホームページを見ていないということである。当然、ホームページ制作の煩雑さなんてものは分かってもらえるはずもない。ぜひ町内の皆さまに早川町のホームページを見ていただき、あわよくば褒めていただきたいと祈る今日この頃である。

（文責　鞍打）

早川町ホームページの開設

■平成8年9月～

平成8年9月のサーバー立ち上げ以来、研究所で早川町のホームページの制作・更新を手掛けている。当初は役場のホームページで、そこから研究所や学校にリンクを張ってあげているという印象が強かったが、これでは面白くないと判断。平成11年4月に大幅に改良し、トップページは役場と様々な団体が連携して制作している早川町の総合情報ページというイメージに変えた（だれの許可もなく）。トップページは下の表のように分類してある。

ホームページの目に見える評価軸であるアクセス数は平成12年2月14日現在27316回と、観光地として全国的にも有名な市町村のホームページを除けば優秀な成績ではないだろうか。平成11年度だけを見てみると17105回（週平均で約380回）と、これまでのアクセス数の62%以上を占めている。平成11年度になってアクセスが増えたことが分かる。カテゴリー別では、観光情報へのアクセスが半分（週平均で約140回）を占め、次いで早川南小学校、研究所（週平均で約70回）となっている。併せて電子メールによる問い合わせも毎日のように来るといった状況である。ちなみに「2000年の山・行田山」の情報は平成11年12月より発信しているが、毎週約80回のアクセスがあるなど非常に注目度が高い。

↑早川町のホームページ
URL://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/

トップページのカテゴリー

「新着情報」 何でも掲示板 更新リスト 広報早川	「早川町に来てみろし！」 観光案内 イベント情報 交通案内
「役場からのお知らせ」 職員採用について 特別町民について 行田山について	「早川町のまちづくり」 第4次長期総合計画 日本上流文化圏研究所 南アふるさと活性化財団
「早川町民の声、声、声」 インターネット同好会 ２０００人のHP. 町民の制作したHP.	「早川町の子どもたち」 早川南小学校 早川北小学校 早川中学校

研究所ホームページの開設

■平成8年9月～

早川町のホームページと並行して、研究所のホームページの制作・更新も行ってきた。現在、発信している情報は、年度ごとの研究活動、常任理事・ネットワーク協力員・事務局といったメンバーの紹介、そして2000人のホームページである。

しかし、こちらは早川町のホームページのように責任がないのでどうしても後回しになってしまい、当初は相当力を入れて制作していたこのページも最近ではほとんど更新していない。特に100名を越える「メンバー紹介」のページは全く更新しておらず、皆さまの肩書きなどは、平成8年当時のものが未だに掲載されているというお粗末さである。ということで報告もこの程度でお茶を濁したい。

来年度はもう少し充実させるよう努力いたしますので、ほんの少しだけ御期待ください。

←研究所のホームページ
URL://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/JORYU/joryu1.html

早川インターネット同好会

■平成10年2月～

《同好会発足》

平成9年11月に早川南小学校で町のサーバーを利用した全国へのインターネット中継授業が行われた。これを機に，PTAの間でインターネット熱が高まり、町のサーバーを町民が利用できるようにして欲しいという要望が出された。これを受けて、町では町民のサーバー利用を検討し、「インターネット同好会」を設立し、その組織が事務作業も含めプロバイダー的な役割を担うこと。また同好会で会費を集め回線使用料を賄うという条件で、町民のサーバー利用が可能になった。

《同好会の概要》

同好会は早川在住、在勤者を対象にしており、入会金2000円、年間接続料6000円という格安でインターネット環境を手に入れることができる。平成12年3月1日現在、会員数51名にまで膨れ上がった。年齢を見てみると、下は中学生から上は70才台の方まで幅広い年齢層が会員になっている。また職業別に見ると、学校の先生方が1/3程度占めている。

《講習会の開催》

平成10年度は月1回の講習会を、早川南小学校コンピュータールームを借りて開催してきた。講習会では、初心者はパソコンの使い方から、少し慣れている人はホームページで情報収集などを、会員相互で教え合いながら学習していった。

しかし月1回ではなかなか上達できないし、会員間での講習会に対する要望のレベルにも開きがあって、参加する会員は次第に少なくなり、平成11年度はほぼ休止状態である。

《ホームページの開設》

同好会発足と同時に同好会のホームページも開設した。当時は「2000人のホームページ」が企画倒れになりそうだったので、「同好会のメンバーが自分のホームページを作って，そのリンク集を作れば2000人のホームページじゃん。」という都合の良い解釈をして同好会のホームページのタイトルを「2000人のホームページ」にしてしまった。だから本来の「2000人のホームページ」が始まってタイトルがダブるという事態になってしまった。

《情報交換の活発化》

平成11年に、同好会内での情報交換を活発化させる目的と、インターネット同好会なのに講習会のお知らせなどを郵便で送っていたという状況を改善するために、同好会のメーリングリストを作った。これによって、同好会のお知らせは電子メールのみで送られることになった。さらにホームページ上には、会員しか見ることのできないページを設け、メーリングリストでのお知らせ内容を載せるとともに、会員相互の交流を深めるきっかけになればと考え、会員のメールアドレスのリストも載せている。

⬆インターネット同好会のホームページ
URL://www2.town.hayakawa.yamanashi.jp/

しかし、会員相互の情報交換の活発化は、ひいき目に見ても達成されているとは言い難い。事務局以外でこのメーリングリストを利用したメンバーは、ほんの数人しかいないという状況である。

《パソコン講習会へのお手伝い》

平成11年12月には、教育委員会が主催したパソコン講習会で、同好会が講師役を務めることになった。同好会から4名がお手伝いし、10名の参加者に対してパソコンの電源の入れ方から基本的なパソコンの動かし方、そしてホームページの見方などを教えた。

▼パソコン講習会の様子

2000人のホームページの制作

■平成10年12月～

研究所が早川町のホームページの作成・更新を請け負うことになり、いろいろと頭を悩ましている中、まずは早川町と同じような中山間地域の自治体が開設しているホームページを覗いてみることにした。しかし、どのホームページも観光施設、特産品、山、川、海ばかりである。バブル期のリゾートブームが失敗に終わり、新しい観光のあり方や都市農村交流が模索されている現在、これまでのような都市住民のニーズに追随する形ではない新しい観光の構築に向けた取り組みを、観光客を受け入れる側からも積極的に仕掛けていく必要がある。

早川町のホームページにおいても、もちろん観光施設、特産品も情報発信していくが、「日本・上流文化圏構想」の哲学とこの構想を掲げた早川町に相応しい情報発信となるとそれだけでは不十分だ。うわべだけを取り繕った情報ではなく、地域の奥深くに隠れている本当の光を情報発信していかなければならない。こうした考えのもとに企画されたのが、早川町民一人一人がもつ「上流文化」や「上流文化圏」での生き方を掘り下げ、ホームページ上で紹介しようという「2000人のホームページ」である。

⬆2000人のホームページ
URL://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/ORYU/J-2000/2000.html

《ホームページにすることの狙い》

インターネットの画期的なところは、個人の情報と個人のニーズがダイレクトにつながり、何かしらのアクションが生まれていくところである。ここで

「2000人のホームページ」ができるまで

「2000人」とは早川町の人口約2000人のことである。町民全員の紹介を目指しているので「2000人のホームページ」というタイトルなのである。以下に作業の手順を紹介する。

■1．集落への周知

あらかじめ取材に行く集落の区長さんに連絡をとり、放送などで取材に行くことを集落全体にお知らせしてもらい、集落を歩いていても怪しまれないようにする。

■2．各戸へ突撃訪問

取材は早稲田大学後藤研究室の学生7～8人に手伝ってもらい、基本的にアポなしで各戸をまわる。都合が悪い人などがいれば、そこでアポを取り後日再び訪問する。

■3．内容の説明

まずはこの企画の説明。しかし、お年寄りは特にだが、インターネットやホームページといってもよく分からない。それでも、「お話しいただいた内容やあなたの写真が世界中に発信されます」ということはしっかり伝える。

協力者の声

これまでの取材活動に協力してくれた、早稲田大学建築学科後藤春彦研究室の学生たちの御意見・御感想です。

井戸 隆【修士1年】

僕は、いわゆる都会で暮らしてきたので、集落に行ったのは今回がはじめてでした。ドラマや本では想像していましたが、改めて人の温もりにふれた時には、ケツアゴが割れんばかりの衝撃を受けました。

田口 太郎【修士1年】

2000人のホームページを通して多くの方と出会った。大半の人が、親切に色々と教えて下さったが、中には一人で生活を送る老人が居たことも印象に残っている。子供は都会で暮らし、自分は地域に残り暮らしていく。地元の明るい力をどう活かすかを考える一方、そういった孤独な人をどうサポートしていくかを考える必要もあると思う。

山泉 聡【修士1年】

2000人のホームページづくりを通じて皆さんにお話を聞かせていただき、都会育ちでその生活しか知らない僕はいろいろな生き方があるんだということを知ってとても勉強になりました。その反面、僕らにいろいろなお話を聞かせていただいた方にとって、少しでもいいことがあればいいのですが。

例えば、それを見た人からの反響をお話していただいた方の手元に届くようにするとか、もう少し、双方向にできたらなと思います。これからもまたおじゃまをするかもしれませんが、ぜひ、色々なお話を聞かせていただけたらと思います。

もやはり、町民一人ひとりの情報とそれを見た人がコンタクトをとり、それをきっかけに交流が始まり、新しい都市農村交流が町内で同時多発的に発生するように仕掛けているつもりである。

《現在までの活動》

平成8年9月から企画されていた「2000人のホームページ」。しかしその歩みは遅く、2年越しの平成10年11月、町並み保存で有名な赤沢集落からやっとホームページ作りが始まった。

それ以降、平成11年3月に草塩と京ヶ島、同年8月薬袋、同年12月に茂倉と取材を行い、現在およそ120名が紹介されている。取材活動には早稲田大学建築学科後藤研究室の学生に協力してもらっている。

《成果・効果》

残念ながら、このホームページを見た人が町民を訪ねてやってきたなどという話は今のところ耳に入ってこない。しかし週平均で40回程度のアクセスはあるので、今後を期待したい。また前述した目的以外にも、綿密な取材活動の効果はいろいろと出てきている。以下に、それらを報告する。

一つはこの取材を通して多くの人と出会い、町民が持っている知恵や技術、そして様々な思いを事細かに収集できることである。特に、お年寄りの話などは、もう20年もすれば聞くことができない。こういった非常に個人的な歴史をストックしたり、様々な技術や知恵を持った人々を把握しておくことは非常に大切である。

また町民にとって、自分たちが世界中に向けて紹介されることは、非常にうれしいようだ。何人見てくれているかはわからないが、自分の趣味や生き様が、もしかしたら他人の興味を引いたり共感を呼んだりしているかもしれない。こういった思いを抱けば、自分たちのやっていることにやり甲斐もあるし自信も持てる。

このように町民一人ひとりと直接話し合い細かな部分にまで光を当てるという地道な活動を通して、町民と研究所の距離は確実に縮まっている。

《今後の展開》

■新しい交流を生み出す仕組みとして

本来の目的を達成するには、このホームページがさらに注目を浴びるよう、宣伝をしていくことが不可欠だが、これには少々慎重にならざる得ない。ホームページを見ただけでは個人は特定できないように注意は払っているが、悪用されるケースが出てくるかもしれない。ホームページ上のデータが個人を中傷するような形で、悪戯に書き直されたりする

■4．聞き取り調査

お伺いする話の内容は、一人一人の人生史、趣味・特技、町や集落に対する要望・意見などが主である。たまに、趣味の実演などをしていただいたりすることもある。

■5．記念撮影

最後にホームページに使う写真を撮らしてもらう。嫌がる人も結構多いので、そういう場合は「みんなで記念撮影しましょう」と言って納得してもらう。

永井 啓宏 **【修士1年】**

1999年、後藤研究室に入り、初めて中山間と言われる地域の人々に触れたのが、この早川町の2000人ホームページの活動であった。自分自身、たった一度の訪問と活動で早川町の実態を把握できたとはとても思えないが、この経験を一部でもアウトプットとしてでき上がったものをあらためて見られることは、自分にとってもヒアリングを受けた地域の人々にとっても画期的だったと思います。ただ、実際に2000人を対象に活動を続けていくのは大変だなぁと思うとともに、卒業アルバムのように一時的な意識の切り取りに終わってしまう危うさが残ってると感じてます。

沖山 観介 **【修士1年】**

これまでに赤沢、草塩、京ヶ島、薬袋と4つの集落へお邪魔し、まちの人々の生の声を聞かせていただきました。早川の激動の時代を生きた方々の声は、同時に日本全体の激動を表現していました。

東京から来たわれわれを非常に温かく迎えてくれたことに感謝すると共に、今後、2000人のホームページがさらに発展すること願っています。

安斉 真吾 **【学部4年】**

生活において隣人と助け合う必要性が低下し、コミュニティが喪失した現代、さらに情報化は匿名の社会を築いています。2000人のホームページはそのようなコンピュータを利用して、逆にコミュニティを復活、あるいは維持させようとする新たな発想の上に立つ挑戦に思えます。今後この企画がどの程度可能性を秘めているのかに注目したいと思います。

可能性も無きにしもあらずだ。取材させていただいた方々に迷惑がかかるような事態だけは絶対にあってはならない。この件に関してはインターネットのセキュリティー、個人情報の管理の面から慎重に考えて方向性を見つけていきたい。

またインターネットで流す情報は、常に新鮮さが求められる。2000人という大勢の情報をどう管理していくのかも課題として考えなければならない。

■人材を発掘し活かす仕組みとして

若者からお年寄りまで、取材によって知り合うことのできた人々を、町外に向けて情報発信するばかりでなく、町内の人々のために活躍してもらうことも大切である。一人ひとりがまちづくりの重要な人材として、その知恵や技術を活かし活躍できる場を地域の中につくっていきたい。

その仕組みとして、今後は「まちづくり人物台帳」という形で、今まで得られた情報を整理していきたい。

■まちづくりの戦略を導き出す仕組みとして

伺うことのできた地域に対する思いやその人の生き様を束ねて、まちの歴史の全体像を把握していきたい。これは、これまでの国や県の中山間地域に対する施策、あるいは町の地域活性化への取り組みを点検することにもなり、今後のまちづくりの戦略を練る上で重要なデータになるのではないだろうか。

■地域学習の一環として

取材活動は、現在のところ町外から来てもらった学生に協力してもらっているが、将来的には地域の子どもたちが中心になって取材していくような方向性が望ましいと考えている。

というのは、この取材活動を通して、迫力ある生き様、既存の価値観に捕らわれない魅力的な生き方、ある意志を持ってこの町に住み続けてきた人生など、積極的に地域に価値を見い出し選んできた生き方に触れ、「早川町で生きていても、こんなにかっこいい生き方ができるんだ」という認識を持たせることができるのではないだろうか。

また将来的に町外に住むことになっても、彼らの価値観の中には、多様な生き方を認めることができる心が育っているはずである。これこそが、中山間地域で生活することに価値を見出す世の中が生まれるきっかけになるかもしれない。

2000人全員を紹介し終わるには、まだまだ遠い道のりである。このままのペースで行くと、10年近くかかる。完成したころには四捨五入しても2000人にならないかもしれない。しかし、この取り組みには様々な可能性が眠っていると思われる。無理にスピードアップするようなことはせず、地に足をつけて綿密な取材活動をこれからも続けていきたい。

■6.みどころ調査

取材時間が余ると同時に紹介する集落の見どころを調査をする。お客さんが訪れそうな場所はもちろん、民家や田畑など、生活の様子が伺える場所もチェックする。

■7.ホームページ制作

取材が終わると、早速研究所に戻り、聞き取ったお話をまとめたり、撮影した写真を加工したりして、ホームページにしていく。

■8.内容の確認

まとめ終わると世界に向けて発信する前に、出来上がったものを配り、お話いただいた方から内容をチェックしてもらい、訂正があった場合は研究所に連絡してもらう。

丸山 弘敏 **【学部4年】**

今後も少しずつではありますが、2000人の顔や暮らしが蓄積され、早川町の文化を表現するものとして発信されていくでしょう。しかし、町民の方々の日々の暮らしは絶えず変わっていくもので、数人の力では捉えられきれるはずもありません。また僕たちは表現者ではなく、あくまで伝達者にすぎません。現在は約100人のホームページですが、この数が増えていくにしたがって情報発信の主体である町民の皆さまからの動き・働きかけがますます必要になってくると思います。

完成後もどんどん更新され続けていくホームページになることを願います。とりあえずの完成にあと何年かかるかわかりませんが。

中村 隆 **【学部4年】**

12月の茂倉集落へ行った。人の声を生で聞けるという機会は普通に生活していればあまりあることではなく、大きな刺激となった。

しかし、なぜこの調査を後藤研だけでやっているのかは疑問である。自分達にとっては大きな刺激を受けることができ、意義の在ることではあるが、町にとって自分達は部外者であり、町民にはインタビューを受けた人の顔もホームページ上でしか見ることができない。それなら、インタビューをする側も町民であった方が良いのではと思う。町民がインタビューをすることによって、町の中にその人や集落を気にしてくれる味方が一人でもできることは有り難いのではと思う。後藤研は手助け程度で、町民ボランティアなどによって調査を行うことはできないのだろうか。

NHKが取材にやってきた！

平成11年12月10日、2000人のホームページ茂倉集落編の取材の最中に、NHK甲府放送局が取材にやってきた。2000人のホームページの取材風景の取材という分かりにくい取材内容であったため、集落の人たちは学生達が取材に来ていると聞いていたが、その中にはNHKがいる。なんでNHKがいるの？NHKの取材対象者は誰？私たち？という感じであった。そんなふうにみんなが浮き足立っている中で取材は進み、区長さんの家では「ぼんでんの猿」の飾り作りを見せてもらい、よしさんの家では昔ながらの食べ物である「すばく」を食べさせてもらった。NHKの人たちも腹いっぱいになるまで食べていた。

そして夜は研究所へ。研究所では今日の取材内容の打ち込み風景を撮影した（晩ご飯を後回しにして）。なんだか撮影されているというだけで、いつもとはまるっきり違う雰囲気。途中でちょとした演出もあった（番組内では、あまりの演技の下手さのためか、一連のテレビ不祥事を考慮してか、無情にもカットされていたが）。こうして研究所での撮影も終了。

そうして1週間後の12月16日、NHK甲府放送局の夕方6時過ぎから始まる「まるまる山梨」というローカルニュースの中で放送された。番組は非常にわかりやすく2000人のホームページを説明してくれて、しかも「すばらしい取り組みですねえ」というお墨付きまでいただいた。そして、やはり天下のNHK。その影響といったらすごく、ホームページのアクセス数が急激に増えた（ニュースの中で流れたURLは間違っていたにもかかわらず）。何よりも嬉しかったことは、この放送を見た町民の方から「早く自分の集落にも取材に来てくれ」と言われたことである。これは1人だけではなく、何人もの方からいまだに言われる。また、この放送は好評だったようで、翌年の1月8日には関東甲信越版のニュースでも放送された。

唯一心残りだったのが、早川町の今年の目玉「2000mの山、行田山」と一緒に放送されたため、2000人のホームページが2000年とかけたミレニアム企画だと勘違いされかねない取り上げられ方だったこと。そんなに底の浅い活動ではないのに。。。

この一連の番組のビデオはNHKから送られてきて、視察に来たお客様に見てもらうなどで大活躍中である。

■9.いざ発信！

チェック期間の1週間が過ぎると、データをサーバーにアップロードし、いよいよ世界中に発信される！

こういった調子で1回の調査で1日10人程度、1週間かけて1集落を取材をする。これを年に4回、4集落分制作するので、36集落ある早川町全体を取材し終わるのは、9年後！？

石川 宜裕【学部4年】

僕と早川町のきっかけをつくってくれたのがこの「2000人のホームページ」だ。平成11年3月の草塩・京ヶ島取材である家にお邪魔したら今までとは違う声が聞こえたのである。子どもの声だ。それがきっかけで、ぼくは子どもとまちの関係に関心を持ったのである。

僕にとって次回のホームページ作りも新たな気持ちになるきっかけになりそうだ。ホームページ作りが、そして早川町が、いつまでもそのような気持ちを抱かせるようなものであって欲しい。

早稲田大学後藤研究室からの参加者

協力ありがとうございました！

【赤沢】沖山観介・河村康孝・鞍打大輔・田口太郎・永井啓宏・山泉聡【草塩・京ヶ島】石川宜裕・井戸隆・井上千晶・沖山観介・河村康孝・鞍打大輔・田口太郎・多田慎二・永井啓宏・長智連・前島一弥・丸山弘敏・山泉聡【薬袋】沖山観介・山泉聡【茂倉】石川宜裕・多田慎二・前島一弥・丸山弘敏・中村隆・安斎真吾

今後の取り組みについて

継続事業

■早川町のホームページ

地域内にインターネット利用者の少ない中山間地域では、ホームページの内容も町民向けの行政情報というよりは、どうしても町外向けの観光情報をメーンにせざるを得ない。早川町も然り、町民向けのお知らせは全くなく、専ら町外向けの情報を流しているが、これは仕方がないことである。

しばらくは観光情報を中心に町外向け情報の充実を図る方向で制作・更新していくしかないであろう。これまで以上に役場各課、関係諸団体との連携を密にして、正確な情報を逐一提供できるようにしていきたい。

また役場外部の機関が自治体からの情報を流しているという状況は、様々な面で責任の所在がはっきりせず好ましくない。町のホームページは一刻も早く役場にバトンタッチできるように、人材育成を進めて欲しい。

■研究所のホームページ

研究所のホームページで活動内容を逐一紹介していくことにはあまり重要性を感じないし、手間ひまの時間の方が惜しいというのが本音である。それよりも考えていきたいのは、インターネット上での全国の上流域との情報交換の活性化である。このために来年度はまちづくり支援窓口というものを研究所のホームページ上に開設したい。これは全国からまちづくりに関する相談、お知らせなどを自由に書き込める掲示板を制作し、研究所のメンバーが中心となって、相談にのったり議論したりする場を設けるという試みである。

また早川町に根ざす研究機関として、地域をどうアピールしていくかということも課題である。手始めに、上流文化圏ライブラリーの整備とも合わせ、早川についての記述のある書籍、論文などを収集し、公開していくような取り組みも考えている。

■インターネット同好会

インターネット同好会はメンバーの増加に伴い本来の目的から逸脱しはじめ、単なるプロバイダーに成り下がり事務局を肩代わりしている研究所への負担ばかりが増している。さらに講習会の開催も丸1年御無沙汰しているといった状況で、同好会の存在意義が次第になくなりつつある。

来年度は、同好会の目的を再確認し今後の方向性をメンバーで話し合うといった機会を持ちたい。そのなかで研究所としては、同好会のメンバーがホームページを制作し様々な視点から早川町をアピールしていくような方向性を提案し、講習会ではホームページの制作方法について学習していきたい。

またメンバー間での意見交換、お知らせ、宣伝といった情報交換がより活発化するような仕掛けも、引き続き研究所から行っていく予定である。

新規事業

■財団のホームページ

来年度から新規事業として南アルプスふるさと活性化財団のホームページも制作する予定である。財団の商品は生産量が少なく価格も少々高めであるため全国一般の市場というよりは、むしろ生産者と消費者がダイレクトにつながる直販マーケットの開拓が急務である。こういったマーケットでの商品選択は、商品そのものの質はもちろん大切であるが、その背景にある様々な付加価値が決め手になる場合が多い。こういった意味からも、ホームページでは商品の単なる紹介にとどまらず、商品一つ一つの物語、また財団自体や生産に関わる人々をも情報発信することで付加価値を高めていくような仕掛けが必要である。

また財団は単に商品を販売することだけではなく、特産品の開発・販売を通して早川町全体をアピールしていくことも重要な役割である。こういったことも視野に入れ、早川町のイメージアップに貢献できるようなページづくりを目指していきたい。

■その他の展開

まずは役場が率先してインターネットを活用していくことが望まれる。関係諸機関との連絡調整、情報収集など、これまで情報が行き届かなかった地域でこそインターネットによって享受するものは大きい。

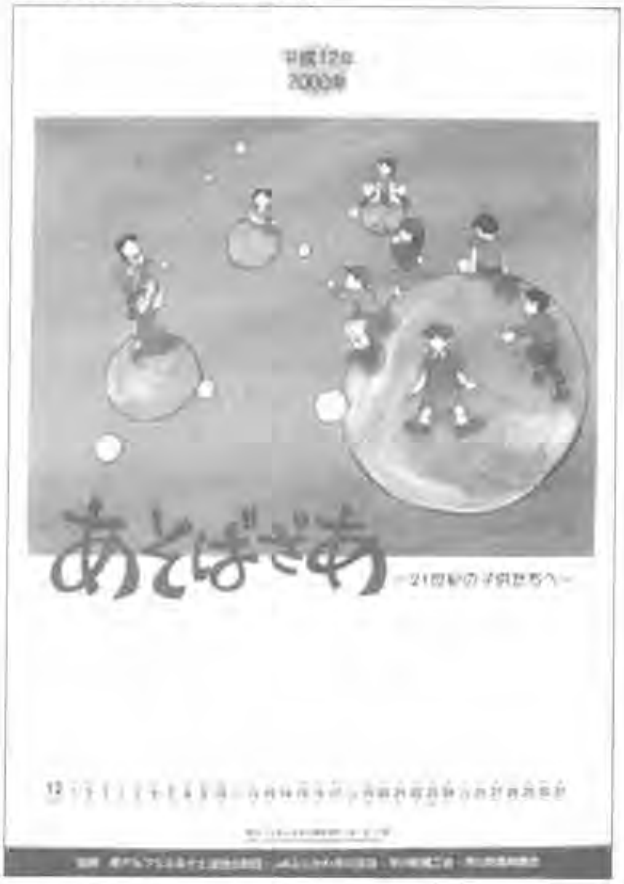
また電子メールとホームページだけでなく、中山間地域においては福祉や教育の分野でも有効な手段としてインターネットを活用するといった取り組みも増えてきた。さらにインターネットの環境さえ整えば場所を選ばないコンピュータ関連産業は、中山間地域における職場確保・産業構築の一つの手段として注目されている。

このようにインターネットを最大限に活用しようとするならば、専門知識のある人材の確保は急務である。こういったことも視野に入れておかなければ、中途半端な取り組みで終わってしまう危惧は拭い去れない。

早川町カレンダーの制作

▼平成11年度の表紙

▼平成12年度の表紙



■平成11年度早川町カレンダー
「はやかわの食べ物と暮らし」
制作：平成10年4月～9月　描き手：鞍打大輔

■平成12年度早川町カレンダー
「あそばざあ　-21世紀の子どもたちへ-」
制作：平成11年4月～9月　描き手：辻　一浩

■平成10年から、早川町が毎年全戸配布するカレンダーの制作を、研究所で請け負うことになった。これまでなかなか町民の理解を得ることができなかった研究所にとって、このカレンダー制作は研究活動の成果をやっと町民に周知することができる活動として期待でき、テーマ設定から、絵のタッチ、細かなデザインまで、最も効果的な表現を探り、相当な時間を費やした。

■平成11年度版は、小俣の専門分野である食をテーマに「はやかわの食べ物と暮らし」を制作。平成12年度版は、大倉が中心となって進めてきた遊び部会の活動成果を、「あそばざあ　-21世紀の子どもたちへ-」というカレンダーに仕上げた。どちらも町民の反応は好評で、また「はやかわの食べ物と暮らし」は山梨県広報コンクールカレンダーの部で「奨励賞」を頂くなど、町内外からある一定の評価を得ることができた。

■それにしても、カレンダーの制作はいつもぎりぎりになってからしか進まない。本来ならカレンダーは季節感を出さなくてはならないので、毎月毎月その時期に取材していくのが理想的な姿ではあるのだが、そのように進むことはまずない。いつも締め切り2～3ヶ月前になってから、大慌てで取材したり資料を集めたりである。

■「次のカレンダーこそ」と思ってもう半年も過ぎてしまい、未だにテーマすら決まっていない平成13年度のカレンダーであるが、請う御期待!!

（文責　鞍打）

平成11年度早川町カレンダー

「はやかわの食べ物と暮らし」

山梨県
広報コンクール
カレンダーの部
奨励賞受賞！
（銅メダル相当）

■コンセプト

この頃は、研究所を町民にどうやったら理解してもらえるかという事が、とにもかくにも最重要課題であった。そんなときに舞い込んできたカレンダー制作の話は非常にありがたかった。無条件に町内全世帯に配付され１年間壁に掛け続けられるカレンダーを通して研究所のアピールをできることは、町内での理解を進めるうえで非常に有効な手段であると感じられたからだ。逆に言うと研究所として、この企画を失敗させるわけにはいかなかったのである。

そのためにコンセプトは慎重に考え決めていった。まずテーマの柱を「食べ物」にするということはすぐに決まった。小俣が食文化研究を専門にしており、かつ研究所のこれまで活動でそれなりの蓄積があり、また季節感も表現しやすかったからだ。

そしてもう一つの柱として、研究所の地域とかかわる姿勢を表現するために、町民一人ひとりの顔が見えるカレンダーにしようと考えた。研究所として、町民一人ひとりの小さな活動に光を当て、大切にしていきたいという姿勢を表現したかったのだ。

おのずと同じ食べ物でも「昔懐かしい」とか「かつてはこんなものが」ではなく、現在の早川町の中でしっかりと生き続けている食べ物、そしてそれらを取り巻く暮らしの風景と、それに携わる人々がテーマになっていった。

1月「熊撃ち」

2月「自家製豆腐」

3月「七面山坊」

4月「山菜採り」

平成12年度早川町カレンダー

「あそばざあ　－21世紀の子供たちへ－」

自然に恵まれた中で生活している子どもたちは、意外と自然の中での、自然のものを使っての遊びを知らない。早川町という地域に、そして、恵まれた自然の中に生きている子どもたちには、地域にいる間に地域の原点・息づかい・魅力を知らせ、人間形成にプラスになるものを学んでほしいという願いは、大人である私たち誰もが持っていることである。子どもたちに伝えたい文化の一つとして遊びを取り上げた遊び部会では、４年間にわたり遊びを収集・再現し、伝承につとめてきた。この成果の一環として今回カレンダーを制作することにした。

■題材選定　制作にあたってまず考えたことは、収集した遊びを季節ごとに割り振ることだった。まず収集した遊びを春、夏、秋、冬の４つのグループにわけてみると、秋のものが多かった。それは、山遊びに重点をおいて収集した結果だと思う。次にしたことは、一つ一つのグループの遊びを月毎に割り振ることだった。早川町の子どもたち（今は大人）が、その時した遊びを中心に考えた。と同時に遊びの素材（草花、竹、板、布、藁、木、実）も、１つに片寄らないようにした。特に考えたことは、早川町ならでの遊びだった。奈良田地区に昔から伝わる「ずんぼごま」「ホタルかご」「川遊び」「竹鉄砲（カッチラ）」は、とりあげることにした。こうして月毎の題材が決まったのである。

■制作開始　絵の描き手は、早川町在住の辻一浩さん。遊びによって貼り絵にしたり、油彩にしたり、アクリル画にしてくださった。それらの絵を通して、

1月「ずんぼごま」

2月「竹ぞり」

3月「お手玉」

4月「レンゲの首かざり」

■題材を選び制作スタート

まずは題材選定に取り組んだ。思いつく限りを書き出し、その中から各地区２つずつ、季節感や今後の取材のことなどを考慮しながら選んでいった。題材が決まると，次は取材である。季節的に直に見て撮影できるものもあれば、話を聞いたり資料を集めるしかないものもあったが、なんとか絵を描けるだけの資料が集まった。

そして、いよいよ絵を描かなくては。しかし描き手は見つからず、結局自分たちで絵も作ることにした。しかも素人の切り絵で。これは全く大冒険であった。ほぼ一ヶ月半、研究所に缶詰め状態で紙を切り続けた。

■完成、そして反響は

表紙をめくるといきなり「熊撃ち」のシーンということもあって、カレンダーを手にした町民の方々の中には、「これはいったいどんなカレンダーなんだろう」と心配された方もいたようだ。しかし、題材にさせていただいた方々からは幾度となく喜びの言葉を頂き、研究所の姿勢もある程度理解されたという実感もあり、やっと町民のためになる仕事ができたという満足感でいっぱいであった。

また後日、山梨県広報コンクールカレンダーの部で奨励賞を受賞することもできた。カレンダーの出来栄えには自信はあったが、自己満足だけではなく外部からも良い評価を得られたことは非常に自信になった。

このカレンダーで取り上げた題材以外にも、早川町にはまだまだ食べ物を取り巻くシーンが内在している。もう一度チャンスがあれば、今回は扱うことのできなかった「はやかわの食べ物と暮らし」に光を当ててみたい。

5月「茶摘み」

6月「渓流釣り」

7月「すばく」

8月「にぎり飯」

毎月遊びの中に入っていけるのは楽しいことの一つである。またこのカレンダーには特色が2つある。私たちの願いが子どもたちに伝わるように，遊びの中で使うおもちゃの作り方をカレンダーの右下にイラストで入れたことだ。この作り方をみて，子どもたちが自分でおもちゃを作ったり，家族に教えてもらったりすれば，子どもの力にもなるし家族の団欒もうまれてくる。

とかくカレンダーはその月が終われば捨てられてしまう運命にある。そこで，表紙を含めて月毎に綴じて一冊の絵本にしてみてはどうだろうか。

■タイトル　タイトルはあれやこれやと悩んだ末に、早川の方言で「あそぼうよ」という意味である“あそばざあ”に決めた。しかし広い早川町のこと、北と南では発音が微妙に違うようで、「あそばだあ」が本当だとか、「ざ」と「だ」の中間だとか、カレンダーが町民の手元に届いた途端、いろんな意見が研究所に舞い込んできて興味深かった。

■終わりに　この遊びのカレンダーを活用することにより，子どもたちや町民が恵まれた早川町の自然に目を向け，自然の中から何かを発見し，そして，創作意欲に結びつけられるような手がかりになればと願っている。そして，わたしたち大人が，21世紀の子どもたちに残してやりたいものの一つとして“遊び”が，子どちたちに受け継がれ，さらに次の代へつながれていってほしいという願いがこのカレンダーには込められている。

■好評発売中　ちなみに、このカレンダーは早川町役場から１部1000円で発売されています。既に３ヶ月過ぎてしまいましたが、購入御希望の方は早川町役場企画振興課公聴広報係(電話0556-45-2511)までお問い合わせ下さい。

5月「タンポポのひっぱりっこ」

6月「ホタルかご」

7月「笹舟」

8月「川あそび」

あのパワーは現実逃避から生まれた！？

切り絵担当　鞍打大輔

このカレンダーの絵を僕が描くなんてことは当初全く頭に無かった。しかし描き手を探してみても、適当な人物は見つからず、締め切りに迫られて自分で描かざるを得ない状況になった。しかし僕は絵を専門的に学んだこともない。人様に見せられるような絵を描く自信もない。

こんな僕をやる気にさせたのは、現実からの逃避であった。当時はまだ学生で論文を書いている途中であったが、毎日コンピューターに向かって数字と格闘する日々に相当ストレスがたまっていた。こんな生活から逃避する正当な理由として、このカレンダー制作が存在したのであった。

僕が思い描いていた完成品は、とにかく早川の人々の暮らしを綿密に描いたものであった。料理に使う道具はもちろん、背景でしかない集落、畑の様子、民家や家の中の家具まで、きっちりと表現したかった。それなら写真にするか？しかし今からでは撮影できないものもある。資料を集めて絵を描くしかないが、絵の具なんて使って上手に描く自信はない。それなら以前やったことがある切り絵はどうか？あれなら少々へたくそでも味があってごまかせるぞ。ということで大胆にも小学校でちょっとやったことのある切り絵で挑戦することにしたのだ。

写真を集めて描いた下絵を黒い紙の上にかぶせ、上からカッターで切る。この作業は単調だが楽しくてしょうがなかった。枚数が進むにつれて、カッターを扱う技術も目に見えて上手くなった。ザルの目や、床の木目、葉脈、おじいちゃんおばあちゃんの顔のしわまで、どんどんどんどん細かくなっていった。そのために遠目には絵が分かりずらかったらしく、それが広報コンクールで大賞を逃した理由になってしまったとは皮肉なものである。まあ、論文も無事書き終わり、こうして卒業できたことが、唯一の救いである。

9月「山ぶどう」

10月「蜂蜜」

11月「そば」

12月「ハムとソーセージ」

仕上がりはイメージどおり

描き手　辻　一浩

できあがったカレンダーを見てまず最初に感じたのは、印刷、製本など製品になったときの完成度の高さでした。イラストを担当させて頂きましたが、それまでにそういった経験も少なく印刷をたのむ業者さんのことも良く知りませんでしたので、どのようなものになるのか不安は大きかったです。しかし、完成したものの色や形の出来具合は自分の想像の一つ上を行くものでした。

また、それと同時にこれだけの色、形がでるのであればもっと進った表現方法があったのではないかという後悔もありました。

これはたとえ半年の時間がいただけても、一年いただけてもそう感じるのかもしれませんが、十三枚描かせていただきましたがとにかく時間がありませんでした。

どういった経緯があってこういった題材が選ばれたのかということがよくわからないまま始めることとになってしまい、主旨から外れたものになっているのではないかという不安もありました。

そのほかには自分の内での問題で言い訳に近いものになってしまいそうで恐いのですが、自分のイメージをストレートに画像にしてしまったときに見た人がどう感じるかわからないというジレンマが大きかったです。こういった半ば公のものであるものの制作ということを意識しすぎて自分として、あたりさわりのないものを選択してしまったように感じて後悔しています。

今年に入り、あちらこちらでカレンダーを見掛け、なんとなく恥ずかしく、なんとなく照れくさいという感じなのは楽しくやらせて頂いてしまったということなのだと思っています。ありがとうございました。

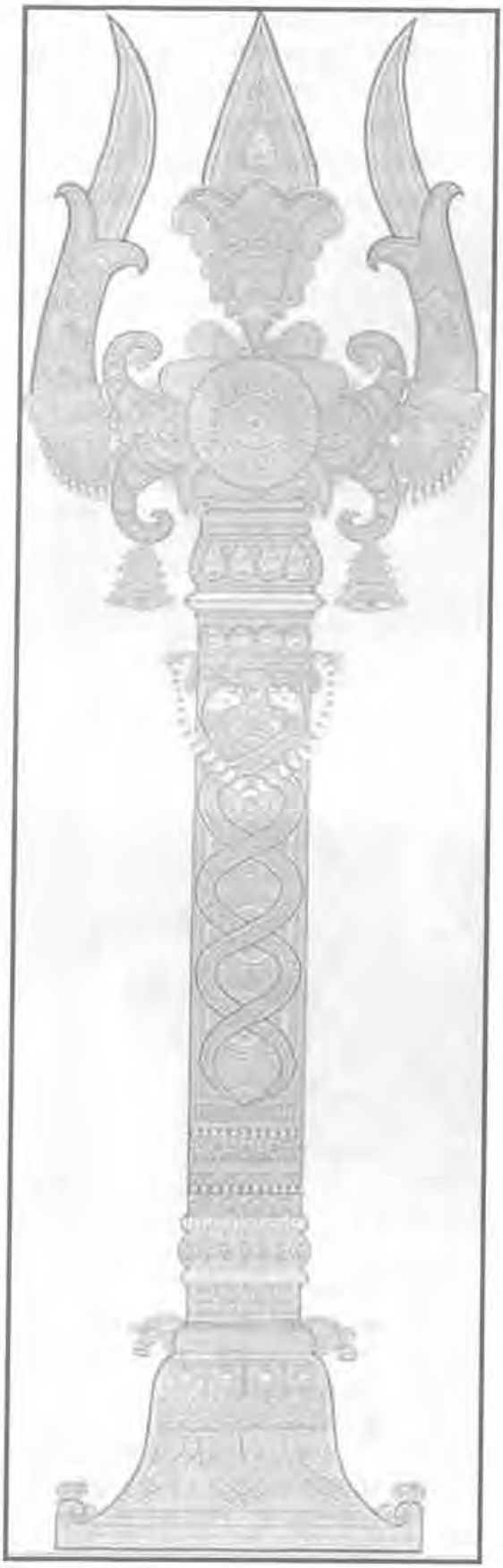
9月「竹馬」

10月「竹とんぼ」

11月「竹鉄砲(カッチラ)」

12月「うぐいす笛」

インド先住民族アート展とミティラー美術展



インド先住民族アート展
1998年5月9日～5月24日
ミティラー美術展
1998年7月11日～8月2日

インドの深遠な文化の根底に息づく先住民族たちの精神文化はこれまであまり知られておらず、公開される機会もほとんどなかった。この催しは、世界の上流域との交流の一環として、インド山岳地域などの先住民族が伝承するアートを通して、彼らが祖先から引き継いできた自然観を知ることを目的に開かれた。

開催には、長年地道な収集と研究を続けてこられた「ミティラー美術館（新潟県十日町市）」の協力を得て、インド先住民族の様々なアート（絵画、テラコッタ、鑞型鋳金など）と代表的なワルリー画、ミティラー画の作家たちを招き、作品や制作の様子を広く公開した。

自然との親密な交流を感じさせる伝承芸術の数々は、大きな共感を呼び、期間中繰り返し会場を訪れる町民も少なくなかった。また、絵画教室や料理教室による作家たちとの交流も好評であった。

この報告は、平成10年5月9日から5月24日までの「インド先住民族アート展」、そして同年7月11日から8月2日まで開催した「ミティラー美術展」の概要と、その間に開かれたいくつかの催しの様子である。

（文責　小俣）

インド先住民族アート展【平成10年5月9日～5月24日】

マハラシュートラ州に居住する農耕民、ワルリー族の壁画を中心にいくつかの先住民族のテラコッタや鐵型鋳金などの伝承手工芸品を展示した。また、ワルリー族からは、壁画の描き手として高名な父子を招き、会場で制作実演を行うとともに、独特なワルリー画の技法を体験する絵画教室やワルリーの家庭料理教室などのワークショップも行われ、期間中に町内外から約500人が訪れた。

そのなかでも、16日間滞在した描き手たちと町内の小学生との交流は特に有意義であった。会場に近い早川南小学校の児童たちは、放課後になると公開制作中の描き手を訪れ、身振り手振りで言葉の壁を越えて語り合う時間を過ごしていた。また早川北小学校では全校児童が会場を訪れ、２人からワルリー画の手ほどきを受けて交流した。

5/9・講演会 「インドの魅力」を語る 講師／清好延（日印調査委員会事務局長）

開幕初日、日印調査委員会事務局長の清好延さんが、「インドの魅力を語る」と題した講演をした。

清さんは、サラリーマン時代に16年間インドに住み、インドの虜になってしまったという。日本語の五十音の発音、能の衣裳の色彩など、われわれが独自と思い込んでいる日本文化に、意外なインドの影響が刻印されていることからお話はスタート。いろいろな科学をお教として残したインド人のすごさ、人々と宗教とのかかわり、地域や家ごとに違うカレーの話などを、持論を交えて楽しく語ってくれた。

16年間インドと付き合っても、未だによく分かりきらないところが、インドの得体の知れない魅力。「ああでもない、こうでもない」「もしかしたら、こうなのかな？」と、いつもインドの事を考えているうちにイマジネーションは広がり、持論の数も増えると語った。

▲講演会の様子（こちらを向いている左の方が清さん）

■描き手紹介

ジヴヤ・ソーマ・マーシェ氏 Jivya Soma Mashe

■1934年、Maharashra州 Tarasari区Sanwa村に生まれる。ワルリー画のアートを子供の頃より学び身につけて、また自分の創造力で結婚式の時などに描いている絵を紙に描き、1967年にプラガティ・マエダン（ニューデリー）で開かれた展示会（手工芸品）に展示した。

■1976年、国家栄誉賞受賞。

■1977年、ドイツに18日間、1979年イギリスに2ヶ月間、1985年アメリカに2ヶ月間招待される。

■1986年、マハラシュトラ・ステート・メリット賞、トゥルシーサマーン賞を受賞。

■1988年ソヴィエトに1週間、1994年日本に6ヶ月、1996年日本に6ヶ月招待される。

5/17・ワルリー画体験教室

家族連れやプリミティブアートに興味のある人など10人が参加した。

まずはミティラー美術館のスタッフの解説でワルリー画の鑑賞の仕方を学んだ。ワルリー画はどれも赤茶色の下地の上に白一色の細密な線で表現されている。一見、レース模様か何かの様に見えるが、それぞれの絵には具体的なテーマがあり、収穫の祭りの様子、神々の物語などが、一枚の絵の中に展開されている。登場する生き物や物の形はどれもシャープで簡素にデザイン化されているので、1度形を覚えると、違う絵の内容もどんどん分かっていく。いよいよ独特な技法を教わりながら、ワルリー画を描いてみた。本来は家の壁や床に描かれるものだが、そんな巨大な作品も竹串によく似た筆1本で描かれる。専用の絵の具は、米の粉を水に溶かし、発酵させたものだ。赤茶色の下地は、現地では赤土を塗り重ねるのだが、この日は似た色の画用紙で代用した。

いざやってみると、竹串の様な筆を操るのは思いのほか難しく、白い線をまっすぐに引くことさえ容易ではない。参加者の多くは、改めて実演する2人の描き手のなめらかな仕事ぶりにくぎ付けになり、あたかも隣人を描くように精霊や野山の動物をかきつける魔法の手元に見入っていた。

5/18・早川北小学校のワルリー画教室

早川北小学校の全校児童と先生方が展示会の見学に訪れ、ワルリー画に挑戦した。

会場に並ぶ巨大なキャンバスや見慣れぬ絵の雰囲気に最初は戸惑い気味で驚きの声を上げていた子どもたちだが、実演しているジヴヤさんとサダシさんの仕事に非常に興味をかき立てられた様子で「早く描いてみたい！」とやる気満々に。早速、竹の筆と米の粉の絵の具と画用紙を手にして、好きな絵の前にそれぞれが座り、ワルリー画の雰囲気を写し取り始めた。

筆遣いに慣れるに従って、新しい画用紙を次々と取り替えては、家で飼ってるペットや学校での出来事、家族との買い物、アニメのキャラクターなど、思い思いの絵を仕上げていく。そして、完成作品を持って競ってジヴヤさんとサダシさんの元へ。

わずか2時間の絵画教室だったが、描き手の2人も非常に楽しかった様子で、「ハッピー！」の言葉を繰り返しては、子どもたちの絵に目を細めていた。

サダシ・ジヴヤ・マーシェ氏 Sadashiv Jivya Mashe

■ 1958年、Maharashra州 Dhanu県 Ganjad村に生まれる。10年生になるまで先住民族アディバシーの学校に通い、ワーラーという町のホステルに住んで勉強。

■ 18歳で結婚。

■ 19歳のときに、父ジヴヤ氏の絵を見て、学びはじめる。インド各地における展示会場を父親と一緒にまわった（チェンディガル、バローダー、ボンベイ等）。

■ 1986年、マハラシュトラ・ステート・アワード受賞。

■ 1994年、日本に6ヶ月間招待される。

■ 1996年、日本に6ヶ月間招待される。

インド・ミティラー美術展【平成10年7月11日～8月2日】

インド・ビハール州のミティラー地方には、自然崇拝や祖霊信仰を基礎としたヒンドゥー教の宇宙観が今なお日常生活や儀礼に受け継がれており、特に女性は、儀礼文化の中心的な担い手である。彼女たちによって家屋の出入り口前の地面や壁などに描かれてきた民俗画がミティラー画である。

主題には太陽、月、自然神、ヒンドゥー教の神々などが好んで描かれ、結婚式などの儀礼の度に新しく描き換えられることによって、母から娘へと伝えられ、およそ3000年の歴史を持つと言われている。

このミティラー画を数多く所有するミティラー美術館の中から選りすぐった作品を展示し、現地から招いた描き手たちによる公開制作とワークショップを行い、ミティラー地方の精神文化を立体的に紹介した。

7/12・ミティラー絵画教室

シャーンティ・デーヴィーさんによる絵画教室は、文化や言葉の壁を越えてなごやかに進んだ。牛を神聖視するヒンドゥー教ならではの考え方から、シャーンティさんのキャンバスには、すべてに牛糞が塗られている。これには「お清め」の意味があり、これから描く神々に敬意を表し、良い絵が描けるようにと祈る静粛な気持ちが込められている。

絵画教室に用意された画用紙にも、もちろんシャンティーさんによって牛糞が塗られていていた。参加者はそれを聞いて、当初はびっくり。でも、だれもが好奇心いっぱいで集まった人々。かすかな香りなどなんのその。

画用紙にほおずりして、シャーンティさんに「O.K.」のパフォーマンスをする参加者も。すっかり上機嫌のシャーンティさんは、大好きな民謡が自然に口元から流れ出し、にこやかに参加者の間を手ほどきして回り始める。晴れやかに歌うこともまた、神を喜ばすことになるという。そこで参加者も、それぞれが得意のカラオケレパートリーをハミング。一言も言葉を交わさなくても、心から打ち解けることができた一時だった。

7/15・北インド家庭料理教室

描き手の一人、ボーワ・デーヴィーさんが、北インドで一般的な家庭料理の作り方を教えてくれた。

メニューは、じゃがいもとナスのカレー、ダールスープ、パコラ、チャパティーの4品。じゃがいもとナスはインドにおいてはカレーの具のゴールデンコンビだ。ダールスープのダールは皮を取り除き2つ割りにした豆類の呼び名で、この日は緑豆を使った。パコラは野菜のてんぷらにあたる。衣に豆の粉を使っている。チャパティーは小麦の全粒粉で作るうす焼きのパンのこと。日本の食卓でいえばさしず

■描き手紹介

ボーワ・デーヴィー女史 Bowa Devi

■12才からミティラー画を始める。
■1986年に国家栄誉賞を受賞する。
■カルカッタ、ニューデリー、パトナ、プーナ等、インド各地で催された展覧会に出品、制作実演。
■1989年フランスの展覧会で実演。
■日本には4度来訪（平成10年8月）。
■「ラーマーヤナ」、「マハーバーラタ」等のインドで古来より語り継がれてきた国民の間に大変人気のある叙事詩や、ミティラー地方に伝わる神話等から題材を得て、大胆な構図と色彩は、彼女独特なものとなっている。

めご飯とみそ汁と肉ジャガとかき揚げといった雰囲気の気取らない料理だ。

ポーワさんは、ベジタリアンであるので料理には、肉や魚などの動物性のタンパク質は全く使っていない。またベジタリアンの多いインドでは、いろんな種類の豆がスープやカレー、お菓子などに利用され、肉や魚がなくても十分に栄養があり満足できるとも話してくれた。台所にたくさん用意されたスパイスが料理の味を組み立てるだけでなく、毎日の体調も整え、傷の手当てなどに役立つこともあると説明し、医食同源ともいうべき主婦の知恵を披露した。

7/18・講演会/ワークショップ

「聞いて納得、作って体感、インドの食」 講師/渡辺玲

「インドの変わったごはん料理」をテーマにワークショップが開かれた。広くて多様な国インドの、普段は日本人があまり知ることのできない食べものの話を聞き、実際に食べてみようということで、日本人には最も身近な「米」「ごはん」が、インドではどんな役割をしているのかをテーマに取り上げた。

講師の渡辺玲(あきら)さんは、ワークショップの開始までに2品の料理を仕込み、まずはこれらを舌で実体験した。

<ワークショップの米料理のメニュー>

1. ラッサムとご飯

「ラッサム」はトマト、にんにく、ブラック・ペパー、クミン・シード、ダル(インドのひき割り豆)、タマリンド(豆科の植物で酸味づけに使う)などをミックスして煮たスープ状のカレー。このラッサムをご飯にかけて食べる。

2. カード・ライス

炊いたご飯にプレーンヨーグルトを混ぜたヨーグルトごはん。生クリームやマスタード・シードも加えている。コングラという葉のピクルスなどを混ぜて食べる。

ラッサムは、ほどよい酸味とピリリとした辛さが刺激となって、どんどんご飯がすすむ。食べ方も雰囲気も、何だか日本のお茶漬けに似ている。本場では、長細くてパラパラとしたインディカ米のご飯に

シャーンティ・デーヴィー女史 Shanti Devi

■シャーンティ・デーヴィーは早くからその才能が認められ、夫の シーワン・バースワンと共に若くして国家栄誉賞を受賞した。

■インド国内の各地で開催される展覧会で実演。

■日本には2回目の来訪となる(平成10年8月現在)。

■彼女の絵の題材として、インド国民の間で語り継がれてきた二大叙事詩のみならず、自身のアイデンティティーを形成するうえで大きな意味を持っているコミュニティーの神様の物語もしばしば登場する。

かけて、右手指で食べるそうだ。ヨーグルトとご飯というのは、いかにも不釣り合いだが、実際口にしてみると、多くの人が気に入っていたようだった。ヨーグルトには熱を取る効果があるといわれ、食後には少し涼しさを感じるとか。暑いインドで好まれる理由がこんなところにもあるのだろう。付け合わせのコングラというピクルスは、練り梅の様な雰囲気で、カード・ライスに少しずつ塗り付けて食べ、やはりどことなく日本の食卓と共通点を感じる。

インドを語るときには南北に大別することができるそうだが、食についてもしかりで、「北のパン（チャパティーやナンなど）」に対し「南の米」という大まかな区分ができるそうだ。日本の食文化との共通項をいろいろ持っているにもかかわらず、さまざまな原因で、未だ日本には、南インドの食文化はほとんど伝わってこない。その意味でも、この日の料理は、本当に珍しくて印象的なメニューであった。

7/21・寄贈式

最後に、今回の２回にわたる展示会の期間中に描き手が仕上げた作品のうち２つを、早川町に寄贈してくれることになった。下の写真がその作品である。世界中にまたとない大変貴重な作品が、交流促進センターに眠っている。

寄贈していただいた作品

バーングラーイ・デーヴィー（穀物の女神）

サダシ・ジヴヤ・マーシェ　Sadashiyv Jivya Mashe 作

この絵には、古い物語が描かれている。

米を収穫し脱穀が終わると、この踊りが踊られる。この踊りは、脱穀の際、さんざん地面に打ち付けられて怒り、村を去ろうとしているバーングラーイ・デーヴィーを喜ばせ引き止める為のものである。

踊りの輪の最後尾にいる人が頭に乗せている像がバーングラーイ・デーヴィーである。彼女は生まれたときから歩くことが出来ないとされ、このように頭にのせられている。またこの輪の中心にいる雄牛と雌牛とは、バーングラーイ・デーヴィーの兄弟姉妹と考えられている。

ラージャ・サレーシュ神

シャーンティ・デーヴィー　Shanti Devi 作

ハリジャン階級の神、ラージャ・サレーシュ神は、ネパールのメーソーターに住み、一年に一度、６月から８月の３ヶ月間だけインドを訪れるといわれている。

ここでは、そのラージャ・サレーシュ神が、自らが祀られている寺院を訪ね、人々から信仰を受け喜び、再びネパールに帰っていくという場面が描かれている。

象に乗っているのがラージャ・サレーシュ神で、その後ろに描かれているのはサレーシュの妻クスマ・マリンである。彼女の姉妹の住むこの地（インド）に、また早く帰ってこれるように祈っているところである。

ミティラー美術館の紹介

新潟県十日町市の濃緑の森にある廃校になった小学校を利用し、長谷川時夫さんが1982年に設立した私立の美術館。ミティラー画をはじめ、インドのコスモロジーあふれる豊かな民族（俗）芸術を収集、常設展示しています。また、来日するインド人の描き手の新たなアートの創造の場となり、その作品群はインド政府より量と質において世界に類がないものと高く評価されています。

この美術館を拠点に全国への「出張展覧会」や、南の国の文化紹介などの文化活動をしています。長谷川さんは、1970年代に活躍した「タージ・マハル旅行団」のボーカルをしていたそうで、歌は信じられないくらいお上手でした。

URL　http://www.bekkoame.or.jp/~mithila/

その他の活動

農書読書会

■平成８年11月１日～　■望月利和・望月敏明・三代貴史・小俣佳子・鞍打大輔

望月利和常任理事の発案で、午前５時から７時の間、交流促進センターで本を読みながら勉強会をしようということになった。

最初のテキストとして選ばれたのは、江戸時代の農業の技術や農民としての心構えが書かれた宮崎安貞の「農業全書」。眠い目をこすりながら、毎回数ページづつ読み、その内容をネタに話し合った。上流圏だよりで、町民へ広く呼びかけもしたが、参加者は朝早いということもあって望月利和常任理事と事務局の面々であった。

数回終わった後「冬の朝は寒くて起きるのがつらい。春まで休止しよう」という話になった。その後、３年経とうとしているが、いまだにお休み中である。

しかし、こういった勉強会は非常に意義があると思うので、形は変わるかもしれないがぜひ再開させたい。

五箇地区「むらづくり計画」策定ワークショップ」

平成９年４月17日　五箇地区ふるさと祭りにて旗揚げアンケート
平成９年10月10日　五箇地区運動会にてポラロイドインタビュー

■吉田道郎・中村結奈・小俣佳子・鞍打大輔・望月敏明・鈴木宏記

日本・上流文化圏構想に書かれている「旧村６地区のむらづくりが早川のくにづくりへつながる」と「町民が自ら考え行動することによる町民自治の再構築」を受けて、旧村単位での地区計画「むらづくり計画」を住民参加で作ろうという取り組みだった。６ヶ村を１年ずつまわり、６年で全町の計画が完成！という予定だったが、最初に取り組み始めた五箇地区ですら途中で断念。こういった取り組みは研究所がいくら仕掛けようとしても、役場がやる気を出さないことには前には進まないことが当たり前だがよく理解できた。

そんな状況の中でも、住民参加の話し合いとまではいかないが、「旗揚げアンケート」と「ポラロイドインタビュー」による２回の意見収集を行った（結果は上流圏だより３、４号を参照）。

今のところこの取り組み再開のめどは立っていないが、旧村を計画単位と見なし一つずつの地区計画を策定していく戦略自体は間違っていないと思うし、平成16年から始まる次の総合計画の柱としても、取り組んでいく価値は十分にあると思う。

ちょうちん展

■平成９年８月19日～31日　■望月敏明・小俣佳子・鈴木宏記

地域資源を再発見するとともに、町内の既存施設を積極的に活用していこうという取り組みの第１弾。

早川町京ヶ島に住み14歳から身延町で修業を始めたという、ちょうちん職人・京島喜市氏の生涯の作品、60年前に親方から譲り受け今でも使っているという型枠・紋帳といった道具類、ちょうちんづくりの工程、さらにはちょうちんを使っていた時代の暮らし方なども振り返り、奈良田にある茅葺き民家の「鍵屋」で展示した。また会期中には氏も「鍵屋」に駆けつけ、ちょうちん制作の実演も行った。

この展示会に向けた事前調査や、展示会の様子は「早川の技１　ちょうちん作り」という冊子にまとめた。「1」というからには、いつかきっと続編が出るはずである。お楽しみに！

▼京島喜市氏

ドキュメンタリー映画上映会

■平成11年６月26．27日　■小俣佳子・鞍打大輔

新潟県長岡市在住の、ドキュメンタリー映画監督兼カメラマンの小林茂さんを招待して開催した映画上映会。

上映内容は新潟県の阿賀野川上流域の暮らしを舞台にした映画「阿賀に生きる」（左写真がパンフレット）や、札幌の学童保育所の子どもたちが主人公の「放課後」、「自転車」。どれも小林さんが撮影、あるいは監督を務めた作品である。

交流促進センターで開催したこの上映会は、薬袋地区を中心に多数の人々が駆けつけ、３時間という長い時間ではあったが、皆さん最後まで熱心に見て下さった。早川と同じような地域に住む人たちの暮らしぶりを見て、自分たちの生活を振り返り共感なさった方も多かったのではないだろうか。

今回は県の地域づくり推進事業でもある「ネットワーク21塾」との共同開催となり、町外からボランティアで手伝って下さった方もいた。この場を借りてお礼申し上げたい。

5 支援活動

五箇地区養蚕資料の保存・活用
全国上流域への支援
町内各種事業への支援

■カタクリ（ユリ科）4～5月
茎高5～10cm。淡紅紫色の美しい花をつける。

五箇地区養蚕資料の保存・活用

活動期間：1999年4月～
メンバー：五箇地区開発協議会
深沢昭三（南巨摩農業改良普及センター）
川崎和彦（建築家　杢和設計）
早川町教育委員会社会教育課
日本上流文化圏研究所
協力　：芦沢定弘（増穂町）
埜村倉雄（中富町）

■地形上、農業に不向きな早川流域では大正・昭和初期頃から、貴重な現金収入として養蚕が行われる様になった。その中でも五箇地区の生産量は群を抜いており、昭和50年代まではほとんどの家庭で養蚕が行われてきた。しかし高度経済成長以降、安価な生糸の輸入、化学繊維の発達、従事者の高齢化といった養蚕を取り巻く社会状況の急速な変化によって、養蚕業は次第に衰退し平成3年を最後に早川町から姿を消すこととなった。

■養蚕が終わると、それに付随していた集落の風景も一変した。畑や山を覆い尽くしていた桑は姿を消し、かわりに杉や檜が植えられた。しかし、残ったものもある。生活よりも養蚕を重視して建てられた民家。仕事の効率を上げるために様々に工夫された道具類。そして長年にわたって養蚕に従事してきた者としての誇りである。

■五箇地区開発協議会は、自分たちがこの地で生きてきた証を残したいと、平成6年頃から養蚕道具の収集を進めてきた。しかし、生きるための手段であった養蚕を、形だけ保存することに意義があるかどうかは疑問であり、有効な活用方法をなかなか見いだせない状況にあった。そこで今年度から、教育委員会と研究所もこの取り組みに協力し、有効な活用方策を探ることになったのである。

■この報告では、今年度取り組んだ「養蚕の再現」、「養蚕農家への聞き取り調査」、「養蚕道具の展示」について報告する。

（文責　鞍打）

養蚕の再現 ■平成11年6月～7月

4月から話し合いを重ね、今年度はこれまでに集めた養蚕道具を仮展示するという話でまとまった。そして、その展示では養蚕道具だけでなく、当時の様子や作業の流れが分かる写真・資料も収集し展示していくことになった。その資料集めもかねて蚕をもう一度飼育してみようという話になり、教育委員会と研究所では、その過程を綿密に記録した。

しかしいざ再現するといっても、今では桑畑もなくなり蚕を育てる環境がしっかりと整わない。特に稚蚕は、病気に大変弱く消毒や温度管理の行き届いた場所でないと無事に育てることが難しい。そこで今回、稚蚕の時期は増穂町で現在でも養蚕を続けていらっしゃる芦沢さん宅で、三齢を過ぎてから早川町内に移動させて育てることにし、また桑の葉は中富町の農家の方に協力していただき、だいたい2日に1度のペースで刈り取らせていただいた。

おおまかな再現の様子は「2000人のホームページ・薬袋集落養蚕編」で公開しているので、そちらを参考にして頂きたい。

http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/JORYU/J-2000/2000.html

▲稚蚕に人工飼料をあげている。大根おろしを作る様な道具で上から削りかける。

▲薬袋の受け入れ準備。ホルマリンでの消毒は目や鼻が痛いので、重装備をしている。

⇒雨の日の桑刈りの様子。昔ながらの背負子で運んでいる。

蚕の世話をする薬袋の人たち

▼出荷の様子

聞き取り調査

■平成11年8月28日～31日

養蚕再現が終わって1か月程過ぎた8月28日から31日までの4日間にわたって、再現に御協力いただいた薬袋のかつての養蚕農家の方々から聞き取り調査をした。伺った内容は、養蚕の話はもちろん、当時の集落の様子や普段の生活の様子、養蚕再現に関わったみなさんの心境など。

聞き取りをおおまかにまとめてみると、早川町の養蚕は基本的に女性の仕事だったことが分かる。男性は別の仕事につき、女性が副業的に養蚕を行っていたようだ。また仕事の中で最も大変だった作業は、毎日の桑刈り。日が昇る前から桑畑に出て、明るくなるのを待って刈り取ったそうだ。刈り取った桑は、昔は背負って運んだそうだが、農道が通ってからは出勤前の男衆が軽トラックで運んだそうだ。

こちらも詳しい結果は、「2000人のホームページ・薬袋集落養蚕編」で公開している（写真右）。

「2000人のホームページ　薬袋集落養蚕編」▲

URL　http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/JORYU/J-2000/2000.html

養蚕道具の展示　■平成12年1月～3月

薬袋の交流促進センター前にプレハブの小屋を建て、これまで収集した養蚕道具をその中に仮展示することにした。

展示作業は少しずつ始まっており、すでに集落の大工さんが展示用のボードなどを設置してくれた。ここに養蚕の作業手順と年代による道具の変化がクロスするような形で展示していく予定である。また道具だけではなく、商品にならない繭を自分たちで紡いで作った絹織物など、養蚕と関わりがあると思われる品々も収集し展示していきたい。

しかし展示してたくさんの人々に見に来てもらうとなれば、プレハブに展示することは最善の策ではなく、将来的には集落にある茅葺き民家を借り受けるなどして、展示していくことが望ましいと思われる。今回は、今までの活動に区切りをつけ、そしてこの作業を通して今後の方向性を導き出したいということもあって、やむをえずプレハブに展示することになったと理解していただきたい。

それから、この活動も展示の先の展開は見えていない。今年度の活動で、保存という目的は一応達したといえるであろうが、今後この資料をどのように活用していくか、これは非常に難しい問題であるが、しっかりと考え答えを出さなくてはならない時期に来ている。何か良い知恵があったら、ぜひ教えて頂きたい。

とにかく、この研究年報が仕上がると、展示用のキャプション作りが待っている。それが終わったとき、一筋の光が見えていればいいのだが…。

全国上流域への支援

「日本列島どまんなかの会」フォーラム会場演出

■静岡県豊岡村　平成8年12月5日～7日　青柳勇子・小俣佳子・鞍打大輔

平成8年12月、静岡県豊岡村在住のネットワーク協力員・鈴木正士さんが中心となって開催した、地域活性化イベント「日本列島どまんなかの会・豊岡村フォーラム」の会場演出に、研究所から青柳勇子（ネットワーク協力員・山梨県市川大門町）、小俣佳子、鞍打大輔の3名が協力した。

同フォーラムは、静岡、愛知で地域活性化に取り組む民間・行政関係者で組織しており、今回は全国から百人が参加し、「活力ある地域をつくる手段」をテーマに講演やパネル討議、地域の特産物の再発見を試みたディナーパーティーが行われることになっていた。

1ヶ月前に、会場となる村の健康管理センターに下見にうかがった。鉄筋づくりの一般的な行政施設で、会場となる部屋も、これまた一般的で殺風景な会議室とホールであった。今回の依頼は、「ここを自然素材で演出し、季節の息吹と温かみが感じられる空間にしてほしい」というものだった。

引き続き、村が自慢とする景観や特産品の生産農家などを回り、地域のイメージを広げた。豊岡村は静岡県西部に位置し、村の西部は天竜川左岸の扇状平野、北部は南アルプスの南端を占める里山に囲まれた温暖な土地で、お茶やみかん、柿、海老芋などが町の特産品であった。

演出の素材には、会場周辺に豊かに生えている竹を使い、たくさんの花器を手作りして空間を取り囲んだ。床に紅葉した柿の葉を散らし、天井の蛍光灯を和紙で目隠しすると、無機質な会議室が一気に雰囲気を変えた。竹の花器には見頃を迎えていたサザンカを活け、陽が落ちてからはロウソクを浮かべて照明にしてみた。パーティーの酒器にも竹が活躍。千両の実や山のつる植物を使った箸置きなども工夫した。参加者の反応はなかなかに良かったと思う。その証拠に、手作りした演出の小道具たちは、多くが所望されて持ち帰られた。

山野の素材探しからイベントが終了するまで、まる2日間。時間と体力との勝負であったが、なじみの薄い土地で、多くの初対面の人々に助けられ、いろいろな冒険をしながら夢のある仕事をさせていただいた。

「生活文化フォーラム」

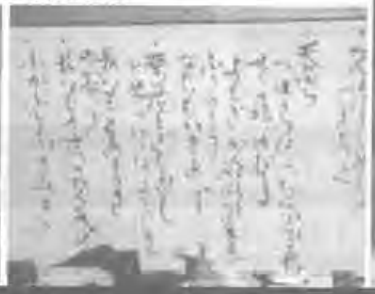
■長野県高森町　平成9年3月20日　青柳勇子・小俣佳子・鈴木輝隆

平成9年3月20日、長野県高森町で「生活文化フォーラム」が行われた。高森町が進めている「婦人ふるさとづくり事業」の一環として企画されたもので、早川町奈良田で開催した上流文化圏会議「フォッサマグナの叫び」に参加して下さった高森町役場の職員らが、その際の演出や食事に共鳴し、フォーラムのコーディネートと地域の素材を活かした生活空間や食卓の演出ワークショップの講師を依頼してきた。

フォーラムは「こころに響く季節のかたちと味覚」をテーマとし、高森町にある身近な山野の素材や特産品を持ち寄り、高森ならではの料理を作るとともに、食卓や空間のコーディネートを楽しみながら女性同士で地域の未来像を考えようという内容。町民70人が参加した。

またフォーラムの目標として、ゴミを極力出さないことを掲げたため、テーブルコーディネートの小道具はすべて再利用が可能なものとし、使い捨てにするものは木や紙を素材に手作りすることとした。

空間演出については、青柳勇子ネットワーク協力員がアドバイス。高森町の特産である水引きや竹製の生活道具を中富町西島や市川大門町の和紙と組み合わせて飾り付け、酒器や箸置きを作って楽しんだ。小俣佳子研究員は食のワークショップを担当し、南アルプスをはさんで位置する高森町と早川町の食文化を比較し、「すばく」や「あずきほうとう」などを参加者と一緒に作った。フォーラム全体のコーディネートは鈴木輝隆常任理事が担当。早川町が進める地域づくりと、その拠点である日本上流文化圏研究所を紹介し、意見交換した。



「地域資源商品化事業」

■新潟県高柳町　平成９年度～10年度　青柳勇子・小俣佳子

「じょんのびの里」をキーワードに、農山村の自然資源を生かした滞在型の交流観光産業の育成を続けている新潟県高柳町が、地域資源を活用した商品の開発と販売を目指し、「ふるさと資源商品化及び販路拡大検討委員会」を設置するのを受け、研究所からは小俣佳子研究員と青柳勇子ネットワーク協力員が専門委員に委嘱された。

高柳には品質の優れた米、和紙、豆腐、山菜、マムシ、木材やヒョウタンなどの地域資源がある。

現地の生産者や加工技術者との意見交換会や、新潟県が東京・表参道にオープンしたアンテナスペース「ネスパス新潟館」での素材展などを通し、新らしい商品づくりや既成商品の改良、素材の斬新な使い途や都市空間での使い方などの提案を行った。

「第２回・SINTOKU/ 空想の森映画祭」

■北海道新得町　平成９年10月30日～11月３日　小俣佳子

北海道新得町の廃校となった小学校で行われるこの映画祭は、平成８年に始まった。記録映画監督の藤本幸久さんがこの町に住み着いたのをきっかけに、地域にドキュメンタリー映画の会が生まれ、町のシンボルともいえるトムラウシ山の四季を記録する映画の制作が地元の人々の手によって始まった。並行して、優れたドキュメンタリー映画を見る機会を地域の中でつくろうという気運が高まり、『空想の森映画祭』が実現した。２回目の今回は、食生活と農業を豊かにすることをテーマに、

上映の合い間に手作り食品のワークショップが行われることになり、小俣佳子研究員がそば打ちワークショップの講師を依頼された。

新得町にはソバの生産農家が多く、特産品として乾麺や蕎麦焼酎が作られている。しかし、そば打ちをする家庭は少なく、ソバ畑に囲まれながらも、手作りならではの蕎麦の醍醐味を地域の人が知らない、ということだった。ワークショップは、「初めての人のエコロジカルなそば打ち」と銘打ち、どこの家庭にもあるボールや菓子箱のふた、ラップフィルムの心棒などを活用し、専用の道具を使わずに気軽なそば打ちを楽しんだ。

「第３回・SINTOKU/空想の森映画祭」

■北海道新得町　平成10年９月７日～15日　小俣佳子・鞍打大輔

前回に引き続き、小俣は食のワークショップに協力。また、今回は上映会場の演出を鞍打大輔学生研究員が請け負った。

近年、多くの遺跡の発掘などによって深い精神性や成熟した文化度が確認されている縄文時代に学び、アイヌなど世界の先住民の文化を体感する、というのが今回のテーマであった。縄文人の環境浄化技術に関する講演、アイヌとアボリジニーのミュージシャンによるコンサートなど、興味深いプログラムがたくさん盛り込まれていた。

食のワークショップは、土鍋を使って雑穀料理をつくるという趣向で行った。縄文土器とまではいかないが、土器により近い調理器具は土鍋ではないか、という発想で、縄文人も食べていたであろう（？）と思われる鮭の燻製や雑穀のハンバーグ、丸麦めしなどを作った。まず調理の火を起こすことから始めたが、大胆にたき火で蒸し焼きにする人あり、石で炉を組む人あり、レンガで簡易オーブンまで作ってしまう人あり。

各人の個性が出る。それぞれに試行錯誤で火力調節をしながら、顔も手もすすだらけにして約２時間格闘、いよいよ野趣あふれる料理の完成となった。

昼間の映画上映が終わると夜のプログラムはコンサートやトークショーになり、仕事を終えた地域の住民がどっと繰り出して来る。ここでは、鞍打が手がけた灯りの演出が陽の落ちた会場の雰囲気をぐっと盛り上げた。一日のイベントが終了し夜のとばりが下りても、ロウソクのほのかなゆらめきが消えるまで、名残惜しそうに会場にただずむ人が多かった。

町内各種事業への支援

「早川南小学校・親子三世代そば打ち教室」

平成9年6月27日　小俣佳子

早川南小学校から親子三世代でそば打ち交流をしたいという相談を受け、そばの知識に明るい小俣が講師役を引き受けた。さまざまな準備をして張り切って乗り込んだが、小俣に出る幕はほとんどなかった。

実はこの日、見事な講師役をつとめたのは、各家庭のおばあちゃんたちだった。さすがに若い頃からほうとうなどを打ち慣れているだけあって、初体験の子どもたちにも手際よく見本を見せ、生き生きと熟練の技を披露していた。

子どもたちはみんな、泥んこ遊びや粘土いじりが好きなものだが、そばをこねるのもそれに通じるところがあるのだろうか。蕎麦粉にさわるのも初めてという子どもたちであったが、喜々として気持ちよさそうに、コネ鉢を練り回しているのが非常に印象的だった。

でき上がったそばはお母さんたちによってゆでられ、打ち立てゆで立てを賞味した。家族で食べる手作りのそばの味は格別だったようだ。

「大豆・雑穀研究会」

平成9年2月26日　浅野信子（静岡県浜松市、ネットワーク協力員）・小俣佳子

質の良い地元の大豆を使い、昔ながらの豆腐を手作りしている五箇地区の有志の希望で、豆や雑穀の調理法の研究会が開かれた。

講師には浜松市で雑穀料理の専門店を営む、ネットワーク協力員の浅野信子さんを招いた。浅野さんは、雑穀と有機無農薬野菜の食生活に行き着いたいきさつや、バラエティー豊かなレパートリーの中から、思いがけないひらめきで誕生したメニューなどを紹介した。もち種の穀物や乾物の「ふ」を利用して、肉に負けないコクとテクスチャーを作り出す裏技など、長年の研究で広がった料理法の一端を教えていただいた。

その他、食文化関係の支援

■平成8年9月：千須和公民館でのそば打ち教室　■平成8年11月29日：そば打ち講習　■平成9年6月22日：身延栄養士会、そば打ち講習　■平成9年8月29日：早教協「早川の食をつくる研修会」　■平成11年8月：品川区役所との交流、そば打ち教室　■平成11年12月：品川冒険クラブでのそば打ち教室　などなど

「早川南小学校スクールギャラリー」

平成10年11月5日～12月8日　大野隆司（千葉県・ネットワーク協力員）
平成11年2月15日～2月16日　水野卓史（東京都・常任理事）

「早川の子供たちに本物の芸術を」という目的で企画された早川南小学校でのスクールギャラリー。研究所が紹介した版画家の大野隆司さんとデザイナーの水野卓史さんの作品が校舎内に展示され、また子供たちに授業も行った。

大野さんの作品は、猫を題材にしたものが多く、子供たちにも分かりやすく好評であった。また、子どもたちと一緒に版画を作った授業（写真下）は、NHKのニュースで中継されたりもした。

会期が終わると大野さんは展示していた作品をすべて寄贈して下さり、その作品は交流センターや山梨中央銀行鰍沢支店のギャラリーで展示をした。

早川町の特産品である水やワイン、ハム・ソーセージのパッケージのデザインを担当している水野卓史さん。彼が資生堂の化粧品のデザインを一手に引き受けて活躍していた頃の作品10点を校舎内に展示した。

水野さんの作品は細い線によって描かれる「線画」が中心。5、6年生を対象にした授業では、簡単に描けるデザイン画を指導して下さった（写真上）。

ちなみに3回目は、早川町雨畑に住む陶芸家の米山久志さん、そして奥さんで染織家でもあるのぶ子さんの作品を展示した。　（文責　鞍打）

「寿さわやか大学」での講演

平成11年10月25日　深沢正晴

深沢正晴が「寿さわやか大学」で30名のお年寄りを前に、研究所の取り組みについて講演した。

講演の後半では、深沢正晴のライフワークでもある早川町の山野草の写真を、スライドで上映した。途中でプロジェクターのランプが切れるというハプニングにも見舞われたが、身近な草花を撮影した芸術性の高い彼の作品は参加者を魅了し「もっと見たい！」という声が相次いだ。

「えほん・ごほんの会」

平成11年度～　大倉はるみ

社会教育の生涯学習の中に幼少年部会がある。会の活動内容について話し合ったなかで、"手づくり絵本"をつくってみようということが決まったのは5年前である。つくりたい人は誰でもということで町内に回覧板をまわして募集した。15人の親子が集まった。それから今日に至るまで、5年間ほとんどメンバーは変わらない。1年目は"手づくり絵本の会"と言う名称だったが、2年目からは"えほん・ごほんの会"という名称に変えサークルとなった。

"世界に一冊しかない自分の絵本を創ろう"という目標をたてた。最初の年は、絵本づくりの順序をていねいに説明した。一番むずかしいのは、絵と文をつくることだ。そこで、慣れるまでは、'他の本をまねしてもよい'　'自分の生い立ちの記'　'○○のつくり方'等でもよいこととした。以後、毎年1冊手づくり絵本をつくっているので、会員は本のつくり方がじょうずになった。昨年は、奈良田に伝わる七不思議の話をミニ絵本にして（秘境　奈良田の七不思議）20冊つくり、小中学校、保育所、旅館、町の施設においてある。このことについては、昨年、山梨放送でもとりあげられた。この会は、1年の終わりに反省もかねて山梨県や隣県にある絵本図書館や美術館を訪ねることにしている。そこでの見聞が、次の創作絵本の源になっている。

これからは自分の手づくり絵本を持って、保健福祉センターや寿さわやか大学を訪問して読み聞かせ等をしてみたい。また県内の手づくり絵本の会の人たちと交流もしたい。

「手軽にできる男の料理教室」

平成12年1月24日　鈴木宏記、鞍打大輔

なんと！鞍打大輔・鈴木宏記の事務局若手コンビで、教育委員会社会教育課で企画された「手軽にできる男の料理教室」の講師役を勤めた。

なぜ、この2人がそんな大役を引き受けることになったかというと、研究所の飲み会で2人が作った手作りピザが原因だった。この飲み会に参加した社会教育課長望月敏明はこのピザのおいしさに感動。1週間もしないうちに、2人のもとへ料理教室講師役への依頼状が届いた。

しかし2人はピザを作ったのは初めて。しかも本を見ながら、それ通りに作っただけ。不安になった2人は、忘年会で再度ピザ作りに挑戦。そしたら、これが前回以上に美味しいではないか!!2人は自信を深めたのであった。

当日は自信満々の2人をよそに、参加者はピザを初めて食べるというお年寄りばかり。こちらも慣れない講師役に要領も悪く、時間はどんどん過ぎていく。生地をこねて発酵させ、具を切って下味をつけ、生地を延ばして具とチーズを乗せてオーブンへ。焼き上がりはこんがり焦げ色が付き、チーズはとろけて美味しそう。しかし試食時間になっていざ口に入れると、具はよく焼けててトマトソースとチーズも美味しいのだが肝心の生地が堅い！原因が分かるほど作り慣れてもないので真偽のほどは分からないが、きっと発酵が上手くいってなかったのだろう。

こうして僕たちのデビュー戦は、ほろ苦い敗戦に終わったのだが、初めてピザを食べる人たちばかりだったので「これがピザです」ということにしておけた。

追伸：帰宅してから余って持ち帰ったピザを電子レンジで温めて食べてみると、生地もふっくらして美味しくなりました。

6 軌跡と展望

研究所の歩み
常任理事の声
事務局の面々
今後の展望

■ヤマユリ（ユリ科）
茎高 1～1.5m くらい。鹿の子模様の入った大きな花をつける。

「研究所の歩み」

平成8年度【1996.4-1997.3】

事務局：小俣佳子（研究員）
望月敏明、三代貴史（役場企画振興課）
鞍打大輔（学生研究員）

□研究所、設立　4月に研究所設立。当初正式な研究員はおらず，ヒューマンルネッサンス研究所の竹原由佳子（現、青木）と早稲田大学後藤研究室の吉田道郎、鞍打大輔が月に数回早川町を訪れ、役場企画振興課の望月敏明、三代貴史とともに研究所の運営にあたった。事務局は五箇地区の交流促進センター内に置かれた。

6月には遊び部会（大倉はるみ担当）、ヤマトイワナの研究（望月三千生担当）、古文書研究（三井啓心担当）の3つが活動として立ち上がった。また研究所の立ち上げをお知らせする「上流圏だより準備号」を発行し、吉田・鞍打が各集落を回り全戸配布した。

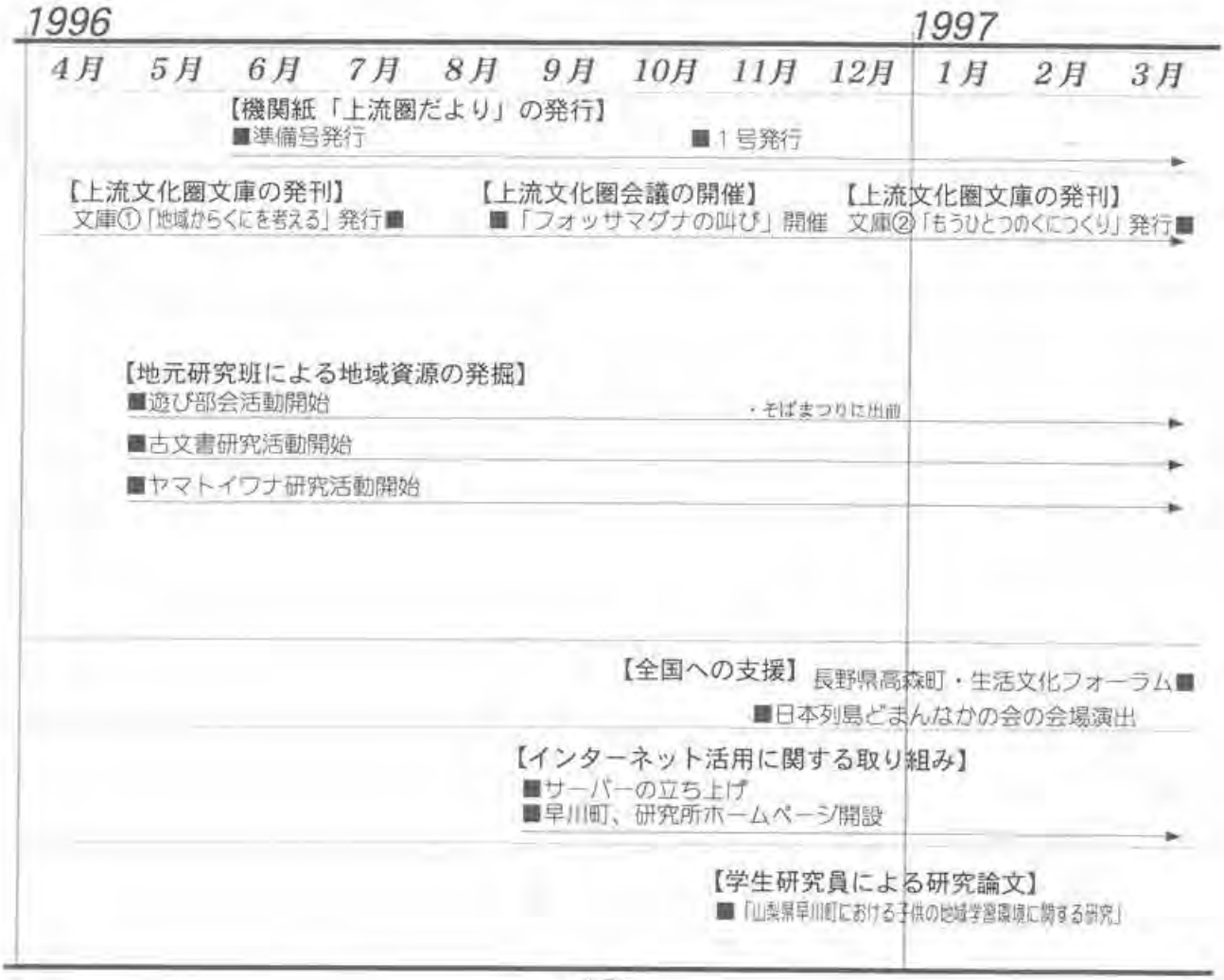
□フォッサマグナの叫び開催　8月に小俣佳子が正式な研究員として、早川町に常駐することになった。このころから8月30、31日の「上流文化圏会議」の開催に向けて、テーマの話し合い、会場・宿泊の手配、会場設営の準備などが始まり、非常に忙しい日々が続いた。

シンポジウム当日には、全国から120名が駆けつけ，下河辺理事長をはじめ全国のまちづくりリーダーが、活発な意見交換を行った。

□研究活動も活発に　9月になって、早川町でインターネットのサーバーを購入することになった。サーバーは交流促進センター内に設置され、研究所でその管理運営を行うことになり早川町のホームページと研究所のホームページの制作が始まった。

10月には上流圏だより1号を発行。11月のそばまつりでは、遊び部会のメンバーが子供たちに遊びを教えるコーナーを出展し盛況であった。

□町外への支援も　8月のシンポジウムをきっかけに交流の始まった静岡県豊岡村、そして長野県高森町で、それぞれ開催された地域づくりフォーラムへの支援なども行った。



「研究所の歩み」

平成９年度【1997.4-1998.3】

事務局：小俣佳子（研究員）
望月敏明、鈴木宏記（役場企画振興課）
鞍打大輔（学生研究員）

□事務局体制強化　三代貴史が役場産業観光課に異動になった。代わって鈴木宏記が企画振興課に配属になり、研究所の事務局に入った。また、企画振興課の望月、鈴木の２名も研究所の事務所に常駐することになり、事務局体制が強化された。

□インターネット同好会の発足　早川南小学校でのインターネットによる公開授業を契機に、町民の間でもインターネットをやってみたいという気運が高まり、町のサーバーを町民向けに開放することになった。同時に発足したインターネット同好会がプロバイダーの役割を果たすことになり、研究所でその事務局を担当することになった。

□早川町民塾の開催　９月から10月にかけて「早川町民塾」を開催した。椎名慎太郎先生（山梨学院大学）、中井道夫先生（山梨学院大学）、住谷雄幸先生（山梨県図書館協議会会長）を招き、４回にわたって講座を開いた。

□試行錯誤の一年　日の目を見なかった活動もある。４月から五箇地区を対象に開催した２回のワークショップは、なかなか軌道に乗らずいつの間にか自然消滅した。もう一つ「春木川じゃぶじゃぶ計画」も、様々な事情で学校との折り合いがつかず頓挫した。

研究所が信頼のない組織であることを、見事なまでに露呈してしまった出来事でもあり、悩み多き一年であった。

□すばく愛好会発足　そんななかでも郷土料理の「すばく」の取材をきっかけに始まった茂倉集落のおばあちゃんたちとの交流は、心温まるものがあった。ある家で「すばく」が焚けると一人暮らしの老人たちを集め、昔話などをしながら昼食を共にする生活ぶりは、まさに上流文化であった。

「研究所の歩み」

平成10年度【1998.4-1999.3】

事務局：小俣佳子（研究員）
深澤正晴、鈴木宏記（役場企画振興課）
鞍打大輔、河村康隆（学生研究員）

□学生研究員増員　事務局メンバーは基本的に昨年度と変らなかったが、河村康隆（当時、早稲田大学後藤研究室）が京ヶ島をフィールドに研究することとなり、学生研究員が鞍打と合わせて２名となった。

□インドとの交流　６月から８月にかけて「インド先住民族アート展」、「インド・ミティラー美術展」を交流促進センターで開催した。会期中にはインドから４人の画家を招待し実演してもらうとともに、小学校での絵画教室、インド料理教室なども開催し好評を得た。

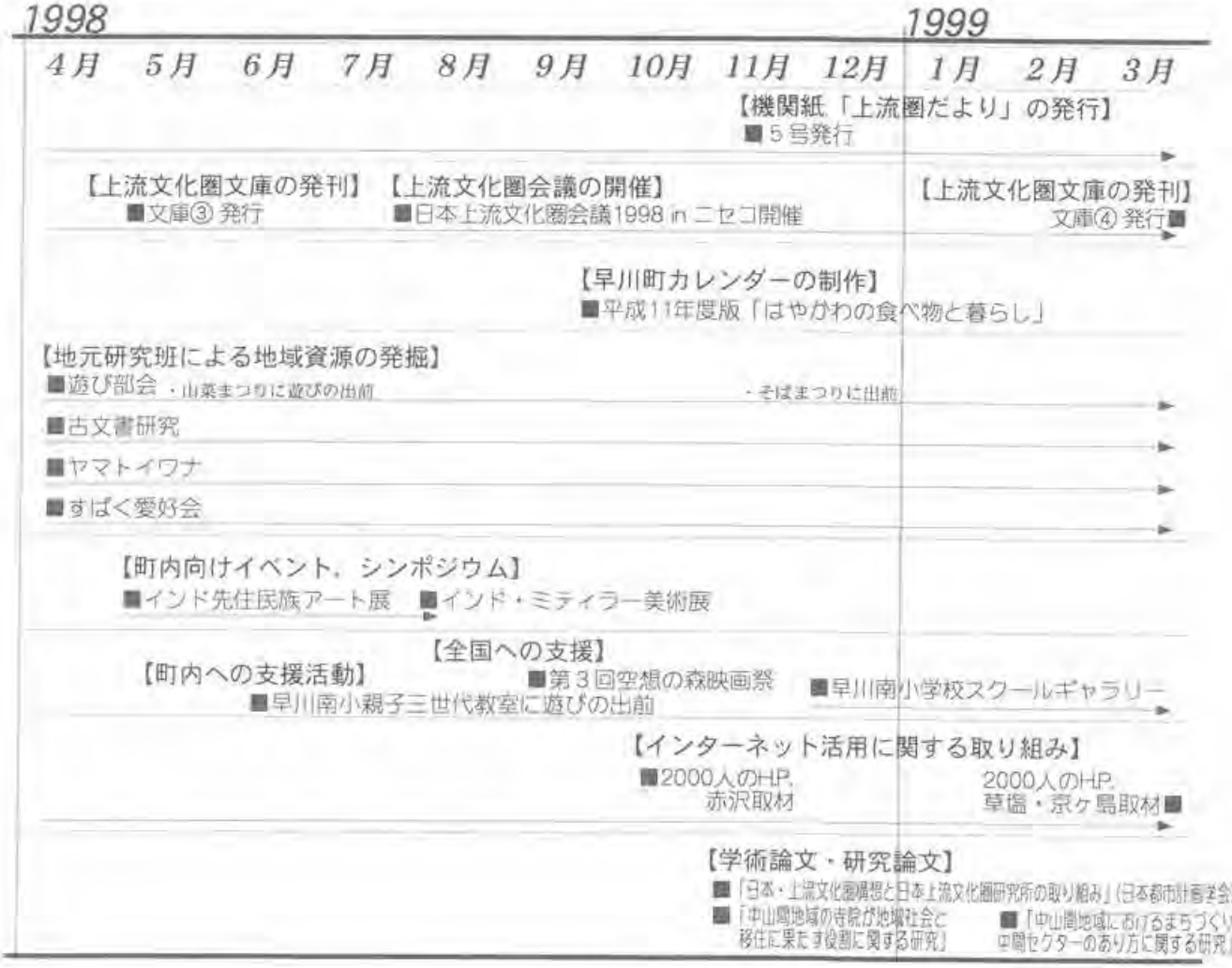
□早川町カレンダーの制作　今年度からの新規事業として、早川町が毎年発行し町内全世帯に配付するカレンダーの制作を研究所が請け負うこととなった。

これまでの食文化調査も踏まえ、テーマを「はやかわの食べ物と暮らし」とし、鞍打が切り絵で制作した。研究所の研究成果を町民に報告するメディアとしての役割も十分に果たしたのではないだろうか。

□2000人のH.P.製作開始　12月には、かねてから計画されていた「2000人のホームページ」の制作がスタートした。早稲田大学の学生にも協力してもらい、赤沢・草塩・京ヶ島の３つの集落で一人一人丹念に取材し、約80名をホームページ上で紹介した。

□研究所への理解進む？　「早川町カレンダー」、「2000人のホームページ」ともに、町民一人一人の顔が見えることを意識した取り組みであり、かなりの反響があった。

徐々にではあるが、町民の理解を得られるようになったことが実感でき、やっと手ごたえを感じ充実した一年であった。



「研究所の歩み」

平成11年度【1999.4-2000.3】

事務局：大倉はるみ（事務局長）、鞍打大輔（研究員）
深澤正晴、鈴木宏記（役場企画振興課）
石川宜裕、多田慎二（学生研究員）

□メンバー　一新！　小俣が研究員を退職することになり、早川南小学校の校長で、研究所の常任理事でもあった大倉はるみが、研究所の事務局長になった。鞍打も大学を卒業し、正式な研究員となった。また新しい学生研究員として石川宜裕、多田慎二（ともに早稲田大学後藤研究室）の２名が加わった。また研究所を役場から独立させていくことも確認され、今年度は予算を独自で運営することになった。

□新・地元研究班発足　これまでの地元研究班に加え、「水環境調査班」、「ビュースポット探索班」が新たに活動を開始した。また五箇地区開発協議会、教育委員会等とのタイアップ事業も始まり、町内での研究所の活躍の場が徐々に広がりはじめた。

□上流圏ライブラリー開設　大倉が研究所に来てから、上流文化圏ライブラリーの整備も急速に進んだ。図書の寄贈が相次ぎ蔵書が約5000冊と膨れ上がり、整理の作業も多忙を極めたが、10月１日にようやく念願の図書室の一般開放が始まった。

□視察が多かったこの一年　それにしても、今年度は視察が非常に多かった。県内はもちろん、静岡県、愛知県、栃木県、滋賀県などから毎月のように視察があり、研究所の宣伝をするとともに互いに交流を深めた。視察の対応が忙しすぎてぼやいたときもあったが、わざわざ早川町まで話を聞きに来てくれて、ありがたいことである。

□「研究年報」発刊　そして年度末には、これまでの４年間の活動を総括した「研究年報」を発刊することにした。皆さんが今読んでいるのが「研究年報Vol.1　鳥の目・虫の目１-４/1000」である。果たして1000分のいくつまで発行されるか、楽しみである。

平成８年度～11年度

常任理事の声

研究所の立ち上げからこれまで、町の内外問わず大変多くの方々から惜しみないご協力をいただいた。そのなかでも、ここに紹介する常任理事の方々には、取り組みに対する的確な助言、情報提供、また実際に調査研究へご参加いただいたりと、それぞれのお仕事でお忙しい傍ら研究活動の充実に甚大なるご協力をいただいた。こういった人々の支えがあって、研究所は何とかここまでやってこられたのである。ここでは、その常任理事の熱いメッセージを集めて紹介する。

今回、突然の原稿依頼だったにも関わらず、快く書いて下さった常任理事の方々には、これまでの研究所への支援に対する感謝の気持ちと合わせてこの場を借りて熱くお礼申し上げたい。また研究所事務局としては、未だに皆さんのお気持ちに恩返しできないでいる。ここで深くお詫び申し上げてはみるものの、まだまだ皆さんの手助けが必要である。研究所のさらなる飛躍のために、今後ともお力添え、よろしくお願いしたい。

1996-1999 常任理事

天野秀一（早川町雨畑・林業）

「上流圏で思うこと」

昨年、上流圏の鞍打（小俣）佳子さんの案内で、北海道網走支所の有志が20名くらい早川町を訪れ、ヴィラ雨畑で懇親会を行いました。その縁で、６月にサロマ湖100kmウルトラマラソンに参加してきました。全国から約2、000名のランナー（19才から77才まで）が集い、初夏のサロマを舞台に１日中汗を流しました。環境もさることながら、応援してくれる地元の人々、大会ボランティア、一緒に走るランナー、本当に素晴らしいものでした。70kmを過ぎての応援の中学生とのハイタッチでは、本当に元気をもらいました。今年も、元気と感動を分かち合いにワクワクする場所に行ってくるつもりでいます。

上流圏の集りに出て感じることは、「化石の町にしたくない」「あたたかい熱い血の流れる町」がいい。その栄養となれる上流研であればいいということです。

1996-1999 常任理事

小野真代（早川町薬袋・陶芸家）

「小さな町の小さな図書館」

「人生は短い。だから、まずお茶を飲みましょう。」数年前にアメリカ、オレゴン州の小さな町を訪れた時のことです。ビュートホールという人口500人の静かなところで、そこに住む一人の女性がこう言ってわたしたちを迎えてくれました。この町では、学校を中心に図書館や公園、それを囲むように商店や住宅と広がっていくように町づくりがすすめられていました。（これは、子どもの安全を考えてのこと）こんな小さな町の小さな学校のそばに独立した図書館があるというのは驚きでした。案内されている間にも何人もの人が出入りをしていて、生活の中に根付いているようでした。このような環境の中から、出迎えてくれた女性の言葉は、生まれてきたのだと納得したものです。

さて、早川町に目を向けてみると、独立した図書館というものはありませんが、上流文化圏研究所の中に様々な図書が整備されつつあります。まだじゅうぶんな数とは言えませんが、よいところは、図書だけでなく、他の施設があることではないでしょうか。調理室、多目的ホール、創作教室、校庭。これらをもっとフルに活用すれば、すてきなカルチャーセンターになると思います。わたしたちの生活は、日々慌ただしいものです。読書をしたり、音楽に耳を傾けたり、　物を創り出したり、料理を楽しんだり…。さもないことが、生活の中に潤いをもたらしてくれるのではないでしょうか。この場所が、わたしたちの生活に豊かさを提供、提案する中心となっていくように願っています。

1996-1999 常任理事

後藤春彦（東京都・早稲田大学）

時間がないので箇条書きでごめんなさい。

-日本上流文化圏研究所がやるべきこと-

1）外部評価と内部評価（2000 年）

2）上流文化圏の理念と取り組みをまとめた本の出版（2000-2001 年）

3）総合計画の 23 世紀版バージョンアップ（2000-2002 年）

1996-1999 常任理事

小林一三（東京都・美研）

日本上流文化圏研究所「研究年報」発刊に際して

『早川・22 世紀計画』が着実に且つ誇り高く実行されておりますこと、まず心からの敬意とエールを捧げます。目をつぶれば、辻町長の笑顔の向こうに〈人や車に出会わない豊かな町〉が僕を呼んでいます。その町と結婚をしてしまった鞍打夫妻の新しい町民？に逢うのも楽しみだから、今年は 3 回以上早川へ行きたいな。ニセンメートル山は、5 月の山菜まつりの頃に僕の公式訪問を待っている筈です。〈水・環境・資源・地域とくらし〉を考える上流文化圏シンポジウムは、僕にとって最大の？豊かなイベント。いつまでも下河辺理事長がお元気で参加されますよう、山の？神に祈ります。併せてプロデューサーの鈴木輝隆氏に多謝。

研究テーマが壮大であればあるほど、小さくても、具体的で分かりやすい成果が大切。そして記録に残しておくことが。まして時間をじっくりかけて取り組むことは、本物をめざす上で、今の時代どんなに贅沢なことでしょう。三井ご住職はじめ研究所の皆さま、早稲田大学後藤研究室の皆さま、これからも 22 世紀タイムカプセルの旅へお供をさせて下さい。もっとこき使われてもいいかなと思いつつ、山葡萄ワインを早く飲みたいな。

1996-1999 常任理事

杉山美智子（早川町赤沢・料理研究主婦）

わたしは、理事に委嘱されたとき、何にもわからないまま理事会に出席しました。話の内容がとてもむずかしくて、何か場違いな所に足を踏み入れてしまったと後悔しました。断ればよかったと思いましたが、枯木も山のにぎわいと何かわたしにもできることがあるかも知れないと半ば開き直って、ただ出席することのみに頑張ってみました。理事さんたちの話をだまって聞いているだけでしたが、早川町の現在の知り得なかった実情を知り、少しずつ楽しくなりました。早川町に 60 年も住んでいながら、山、川、水、魚と聞くもの皆すばらしく、特に遊び部会の話は、子どもの頃に戻ったみたいで、目の前が開けた気持ちになりました。

今では、大勢の方々とお知り合いになれて、わたしの生涯の中で研究所に行く自分に誇りと喜びを感じています。これからもよろしくご指導をお願いします。

1996-1999 常任理事

鈴木輝隆（甲府市・山梨県庁）

不思議な力で人を魅了する辻町長や、山国特有の与信能力に恵まれた町民や役場の職員がいて、柔軟で大胆な思考で地域や自分を発見させてくれる下河辺淳さんが理事長である。町民と外部ファンとの交流により新しいコミュニティが創造され、世界に貢献できる地域モデルが誕生するに違いないと確信している。

平成 7 年 8 月に、実質的な第 1 回目の日本上流文化圏会議が早川町で開かれることになった。研究員がいないのでは研究所の体をなさない。うまい人がいた。山梨日日新聞社の記者を辞めて、熊本県小国町、長野県小布施町、富山県利賀村と食の修行をしてきた小俣佳子さんが甲府の実家に戻ってきていた。町長に研究員になってもらったらと話をした。フットワークの良い町長はすぐに会い、意気投合、初代研究員はこうして生まれた。相手の立場を尊重しながらコミュニティを創る小俣嬢の生き方は、住民に生きる喜びを与え、立派な名前にふさわしい研究所の基礎を作っていった。

その後、理事の早稲田大学の後藤春彦教授と研究室の学生たちが、日常的に町民と交流し、さまざまな地域研究活動を行っている。中でも学生研究員であった鞍打大輔君は小俣嬢と結婚し、子どもの参加も得て、コミュニティ蘇生の実践的研究をしている。事務局長には、発想も感性も子どものような大倉はるみ先生がなり、学ぶ楽しさや自分を生かす喜びそのもの純心パワーによる図書館づくりを行っている。さまざまな密度の高い研究交流から、若い精神によるコミュニティ創造の可能性が見えてきた。新たなコーディネートは必要ないので、私の役割は終わったようである。

1996-1999 常任理事

中嶌いづみ（東京都・公務員職員研修協会）

「初心に立ち戻って関わりを問い直す」

早川町との出会いは1994年秋。研究所設立の意向が示された上流文化圏構想のシンポジウムであった。打ち上げの席で、気さくにお酒を注いで回る町長に「私たち都市に住む人間は、農山村から水と空気をいただいて生きている。それに対して私たちに何ができるのかを問わなくてはならないと感じています」と感想を申し上げ、町長は「本当にそう思ってくれますか」と目を輝かせられた。

その後、参加した5回のシンポジウムではそれぞれに、気持ちの過疎からの脱出、ダム問題、林業・農業の将来、山の文化など様々なテーマについて全国の人たちと学び、考えることができた。また、早川を訪れる度に、地元の方から学び、美味しい食を味わわせていただいている。

上流圏文庫の編集、上流学講座や研究の企画のお手伝いなど、私のできること、やりたいことをやらせてもらうというわがままな形で、上流圏に関わる機会を与えてくださっているのが、上流文化圏研究所である。そして様々な素晴らしい方との出会いも。忙しい最中、早川におじゃますることや様々な仕事をすることがおっくうに感じられるとき、初心に立ち戻らなくてはと自分を戒める。

1996-1999 常任理事

早川正治（早川町早川・農業）

私が理事としてこの研究所に係わりを持つようになってから、すでに4年も過ぎてしまいました。最初は、研究所って一体何を研究するのだろうか。理事としてどのような役割をしたらよいかなど、自分自身不透明な状態からスタートしましたが、理事会等を重ねていくうちに少しずつ理解できるようになりました。そんな中で私自身、長年住み慣れたこの地域に対して不安や諦め等いつのまにかマイナス思考に陥っていることに気がつきました。私の仕事のきのこ栽培も中国産におされて同業者が減っていきます。周りが山ばかりのここでは、つい不便さばかりを口にしたくなりますが、研究所での会合などで地域の将来を考える時、まず最初に今までと180度違った所から視点を変えて見直さなければいけないと思いました。

これからは、上流文化圏宣言にあるように、地域を見つめ、知恵を出し、汗を流しながらこのすばらしい大自然の中、プラス思考で研究所とともにこの地域の理想の姿を追い求めて活動していきたいと思います。

1996-1999 常任理事

早川源（甲府市・山梨総合研究所）

「神は細部に宿る」

2000年を迎え新しい世紀への期待と不安が交錯する世紀末である。我々はこれまでアメリカ型の経済的な豊かさを追い求め、あふれるようなモノの中にこそ真の豊かさがあると信じてきた。確かに、昭和30年から現在までの35年間を振り返ってみると、日本のGDP（国内総生産）は10倍に拡大している。しかし、これからの35年間は、経済戦略会議のメンバーによる日本の潜在成長率2％を基に計算してみても2倍にしかならない。2007年をピークに人口が減少に向かうため、一人当たりの生産性が人口減少率を上回らない限り日本の経済力は相対的に弱まっていくと考えざるをえない。さらに地球環境の有限性、踏み込むべきか否かが問われている遺伝子組み換え問題などが交錯し、幸せな21世紀を構築していくた

めの価値観はなかなか定かにならない。

"神は細部に宿る"という。国をつくり、産業を興し、そして地域コミュニティ・家庭・個人の幸せというこれまでの思考方法ではなく、むしろ、個人・家庭・地域コミュニティの幸せとは何かというミクロの生活の有り様を突きつめ、21世紀の哲学を見いだしていくべきではないだろうか。5年目を迎えるコミュニティ・シンクタンク日本上流文化圏研究所のますますの活躍に期待したい。

1996-1999 常任理事・前所長

藤井経三郎（東京都・RIVアソシエーツ）

凛としたまち「早川」

手紙を書くのに日本ではまず都道府県、市町村、町名、番地という順序で、そして最後に相手なり自分の姓と名を書きます。欧米では全く逆です。まず相手なり自分なりの名を書き、次いでファミリーネーム、地番、街路、市町村、県、最後が国です。人が基本、次に家、家族、地域、地方、そして国という順序です。

これは、いわば一人一人の人間が基本という、欧米型民主主義のあらわれであるように思えます。世界の国々の動向を見定めてから日本の政策を打ち出し、国の動きを見てから自らの地域を考え、おかみの意向を受けてから人びとが動くというのが日本の従来型の行動でした。しかし、この考え方や価値観はいま大きく変貌をはじめています。

「凛々しさ」。すがすがしく、すくっとした、美しさを越えた物事の姿です。理想を高く持ち、くじけず、自分を磨きながら努力を重ねる、そんな言葉が似合うまちも人も少なくなりました。

しかし、早川にその姿を見ることができます。早川はいち早く、あすのまちのかたちを編みだし、地域から発信しました。そして、山村のもつ厳しい現実に対して、不平、不満、不安を国や他の地域に向け、その責任とせず、みずからの地域の歴史と風土、そして固有の資源をもとに、まず、「心の自立」を掲げています。それに共鳴した人々や地域は、少しずつですが確実に日本のすみずみに拡がり、それらの「心」を変えつつあります。

しかし「心」が変っても現実が変わるのには時間がかかります。明治以来の潮流を変えようというのですから、それと同じくらい百年はかかるのです。日本・上流文化圏構想、早川二十二世紀計画は百年の計画です。まだ5年目。

それにしても予想を超え、動きは着実です。地域の人々を中心に、参画した大学や学生の働きもめざましい。それを全国の津々浦々、峰々谷々からあたたかい目が見守り、支えています。

一人一人が地域を変えていく、小さな村やまちから日本を変えていく、個をつつましく主張する伝統的な価値観と感性を秘めながら、静かにじっくりと、確実に動かしていく、早川にはそんな力が育つ歴史と風土と人の心があるように思えます。

1996-1999 常任理事

水野卓史（東京都・デザイナー）

小学校の5年生から中学1年まで、海や山川に囲まれた静かな村ですごしました。父は戦争に行き、母と兄弟だけの疎開生活。同級生からの孤立や慣れない田舎暮らしよりも、四季の自然が見せてくれる魅力に心を奪われる毎日だった。生まれてはじめてのカルチャーショックは価値観を変えて、1つ1つが思い出として体の奥深くに残った。

それから50年。不思議な縁で早川に巡りあい、町の特産品のコンセプトからパッケージやポスターなどのデザインワークまでを担当することになった。疎開先の思い出と重なる山並みや川の姿、風の香り、どこまでも深い星空。もの作りは何であれ、時間が許されるかぎりイメージを温めながら、それがふくらんでくるのを待たなければならない。その貴重な時間を辻町長に見守られて、「白鳳の水」「山葡萄のワイン」「そば焼酎」そしてミレニアムを記念する「新世紀2000メートルの行田山」のポスターなどをまとめ上げた。

ちなみに、この「早川4部作」のポスターのキャッチフレーズには、必ず「峰」という言葉を使用している。南アルプス邑に対する私のこだわりである。たずさわる方一人一人の、こんな想いやこだわりが、日本上流文化圏研究所のこれからの活動にどういかされていくのか、楽しみである。

1996-1999 常任理事

望月三千生（早川町雨畑・大昭建設）

これまで地球元気村を10年間、並行して、アタックカップ（大物つり大会）を5年間お手伝いしてきた。上流文化圏研究所のお話をいただいた時、その知的で難しそうな名称にいささかとまどいを感じた。何しろキャンプとつりしか能がない。しかし会合を重ねるうちに、私のつりでも何かお役にたてそうなテーマのあることが分かり、少々安どした。

「ヤマトイワナ」は一介の釣り人であった私に探求心を植え付けるのには充分の素材であった。足掛け4年以上、まだまだデータ不足の感は否めないが、足腰が弱くなるまで続けていきたい。好きなことをやるには苦痛が伴わない。娘とそのテーマに沿って絵本までつくり、人前で発表したぐらいだから。

うちの町は住む人の絶対数が少ない。それゆえ子供も大人も一人一人の言動が大きく響きもするし、反面、しぼむのも簡単な町でもある。それだけにヤマトイワナのように、いつまでの野太く生きて行く必要がある。子育てにも充分取り入れていきたいスピリットである。決して絶滅してはならない。

1996-1999 常任理事

望月利和（早川町赤沢・株式会社玉屋）

「見えるものと見えないもの」

私は、自分の住んでいる世界の全てが見えていると、つい最近まで思い込んでいた。しかし、実際に私が見ている世界、可視光線の波長は、0.4～0.75ミクロンという狭い領域でしかない。今流行している遠赤外線の波長は、0.76～1000ミクロン（1 mm）である。見えるものよりは見えないものの方が圧倒的に多いことになる。

私の日常の生活でも同じことが言える。見えるものが全てであり、価値の対象となる。当然、見えないものは価値の対象にならない。行政の中でも、箱ものと言われる建築物は評価の対象になる。しかし、数年では結果のでない地域文化とか地域教育は、見えないものの中に入ってしまう。価値の対象にはなりにくいし、悪い評価しかしない。

私は、目先のものを優先してしまう。言葉では、あるいは頭の中では、長期的ものの見方、考え方をとっていると思っていても、実際の行動は違う。つい、目先を追い掛けている。見えるものはわかりやすい。結果もすぐ出る。やり直しもきく。常に評価ができ、安心である。良いことづくめのようであるが、近視眼的過ぎる。

明治の教育は、百年の体系の中で考えられていた。百年という数字は、私にとっては気の遠くなる歳月だ。私は、今年、51歳になる。子どもが幼稚園にお世話になっているせいか、小学生の気分でいることもある。しかし、現実にもどると、あっという間の50年であったことは事実である。50年の歳月の短さを感じる。

上流文化圏研究所を評価するならば、見えないものに入る。時代の先端を行く試みだと思う。その時代の教育や基礎研究が次の時代をつくる。時代は、50年サイクルで変化を繰り返すという。早川の50年後の姿が楽しみである。50年先は長いが、過ぎて見れば一瞬である。50年の継続が全ての鍵を握る。期待感で一杯だ。

1996 常任理事
竹原由佳子（東京都・ヒューマンルネッサンス研究所）
1996-1997 常任理事
根岸　源吉（早川町雨畑・当時、町議会副議長）
1996-1997 常任理事
水野　定夫（早川町薬袋・当時、町議会議長）
1996-1998 常任理事　現事務局長
大倉はるみ（当時、早川南小学校校長）
1996-1999 常任理事
江口清三郎（甲府市・山梨学院大学）
1996-1999 常任理事
江藤　俊昭（甲府市・山梨学院大学）
1996-1999 常任理事
岡崎　昌之（東京都・福井県立大学）
1996-1999 常任理事
中井　道夫（甲府市・山梨学院大学）
1996-1999 常任理事
深沢　　守（早川町奈良田・白根館のおやじ）
1996-1999 常任理事
望月　錦作（早川町雨畑・文化協会会長）
1997-1999 常任理事
浦島　裕子（東京都・ヒューマンルネッサンス研究所）
1998-1999 常任理事
望月　是宏（早川町高住・町議会議長）
1998-1999 常任理事
望月　輝夫（早川町赤沢・町議会副議長）

事務局の面々

大倉はるみ 1996-1998 常任理事→ 1999 事務局長

38年間の教職生活にピリオドを打ち、昨年の4月から研究所に勤務して1年目を迎えようとしている。

研究所の理念、目標とするところは理解していたつもりだったが、いざ実際に関わってみると、思うようにいかないことがたくさんある。したいことがあっても、それをどう行政に提言していったらよいのか、どことどのように連携していったらよいのか先が見えない部分があるのは不安である。そういう中にあって、私が関わってきた地元研究班の"遊び部会"は、一人歩きをし始めた。"遊びの歳時記"をつくる。おもちゃの商品化をめざす。と、目標がはっきりしたからだ。このことは、何よりも強いことだ。

2年目を迎えようとしている今、研究所のめざすところを自分なりに問いなおし、事務局員と相談していくなかで、納得のいくスタートを切りたいと思うこの頃である。

鞍打大輔

1996～1998　学生研究員
→1999　研究員

設立から4年を終えようとしている研究所の、これまでの取り組みをまとめ一区切りをつけるとともに、研究所の考えていることを広く理解してもらおうということで、この研究年報を制作した。この中には研究所のやってきたこと、考えていることがぎっしり詰まっている。まじめに読むに値する年報ができたのではないだろうか。

しかし、中には「がんばってる」や「がんばります」でお茶を濁している部分もある。これは、我々は決して手を抜いているわけではなく、人手が足りなくてやりたいこと全てに手が回らないのである。同時にこれは、皆さんと話し合い、よくよく考えてから行動したいという気持ちの現れでもあるのだ。

この研究年報を見た皆さん。ぜひ一緒に議論し、そして行動しましょう。

1998-1999 役場企画振興課　深沢正晴

上流文化圏に住む人々は、なぜ上流にこだわりを持って生き抜いてきたのだろうか。人は自然の一部として、その自然に守られながら育んできたはずだ。本来、自然とは 神に値するものであり、畏敬の念をもって接すべきものであろう。上流文化圏をこよなく愛してきた先人が培った文化とは、そんな理念によって醸成され、上流に住むものの魂に受け継がれているはずである。自然のサイクルの中で自活できる力は、先人によって既に確立されているのだから。

今こそ問いかけてみよう。上流文化圏に生きてきた自らの魂に。確固たるものなど私にはないが、研究所に携わってみて研究の永遠のテーマの一端を垣間見たような気がしてなぜか今は心地よい。99年度は、研究員に引っ張られながら水環境調査、ビュースポット探索など、上流の本性を調査して大きな成果を上げることができた。今後も、ごく自然体で焦ることなく、自問自答を繰り返しながら調査活動にくわわっていきたい。

鈴木宏記

1997～1999　役場企画振興課

原稿締切り3日前！「研究所のことについて書いてください。文字数は、400字です。」鞍打君からの突然の原稿依頼。さて、困った。何を書いていいのやら。悩んだ挙げ句、私の思っているこれからの研究所への希望を書くことにした。

「上流文化圏研究所って何をしているんだ？」こんな声をよく耳にする。町の人達にとって、研究所は、まだまだメジャーな存在ではないようだ。私の希望は、こんな言葉が町民から出なくなるように、そして、一人でも多くの人が研究所と関わりを持つようにしてほしいということだ。今でも、諸々の研究班の活動や部会が行われ、地元に対する研究が行われている。しかし、もっともっと町民を巻き込んでの活動をしてほしいと思う。それが、早川町民の研究所として認知してもらう近道だと思うから。目指せ地元密着研究所！!頑張れ上流文化圏研究所！!

今後の展望

平成11年度の始まりとともに、研究所事務局、町長、企画振興課を交え、これまでの活動で見えてきた課題も踏まえ、今後、研究所をどうしていくべきかを話し合った。そのなかで役場と研究所を徐々に切り離し、将来的には研究所を自立させていくことで合意した。そして、これまで抱えていた課題を解決すべく「地元研究班の立ち上げと活性化」、「既存まちづくり組織への支援と連携」、「研究所のあり方の研究」という３つの柱を設定し、その目標を達成すべくそれぞれの活動に取り組んできた。

そのようにして始まった今年度を振り返ってみると、新しい地元研究班も動き出し、教育委員会との協力関係もでき、研究所の図書室も町民向けに開放しはじめたりと、目標達成を意図した活動がなされ、そのなかで研究所も少しずつではあるが町民に認知されてきた。しかし一方、研究所が掲げた目標に対して取り組みの甘さも目立ち、また研究所の今後のあり方について当事者間で話し合う機会も少なく、具体的で明確な方向性を導き出せなかったのも実情である。

今後は、「研究所の役割と位置付け」、「研究所の自立へ向けた戦略とシミュレーション」などについて事務局、役場をはじめ、全国の協力者も交え、より具体的な議論をしていく必要がある。

以下には、来年度の基本方針と予定している事業、そしてその概要を示した。町民にとって研究所がより身近な存在となるように、こちらの持っている情報をとことん分かりやすく提供していこうというのが基本的な考え方だ。

○平成 12 年度の基本方針

今年度と同じく、次の３つを大テーマとする。

◆地元研究班の活動の活性化

◆既存まちづくり組織への支援と連携

◆研究所のあり方研究

そして次の５つを小テーマとし取り組んでいく。

- まちづくり人材の把握と活用
- 町内へのまちづくり支援体制の確立
- 全国のネットワークとの連携強化
- 研究成果の施策への還元
- 収益事業の展開

○平成 12 年度の新規事業計画

地元研究班をはじめ、これまで取り組んできた活動はそれぞれ継続していく。それに付け加え、来年度は以下のような事業に取り組んでいく予定である。

◆まちづくり支援窓口の開設

「研究所ができること」を分かりやすく町民に説明し、研究所が町内のさまざまなまちづくり活動に支援できる体制を作る。事務局のメンバーはもちろん、常任理事、ネットワーク協力員が可能な支援内容を、町民向けに分かりやすく説明する冊子を作る。また、これまでの活動で把握できた町内のまちづくり人材が、町内の様々な活動で活躍できるような仕組みも併せて作る。

◆インターネット上での情報交換の活性化

研究所のホームページの中に、まちづくり支援窓口のインターネット版を立ち上げる。まちづくり支援窓口の情報を全国に向けて発信し、その仕組みを町内にとどまらず全国的な規模で活用できるようにする。

また研究所の事務局、常任理事、ネットワーク協力員間のメーリングリストを製作し、日々情報交換が可能となるような仕組みを作る。

◆学生研究員助成制度

早川町を研究のフィールドとする学生への研究助成制度。町内を歩き得たデータを元に、町の現状、課題、将来への提言などをしてもらい、研究所の今後の取り組みに活かす。

また研究所の学生研究員として、研究所の取り組みにも主体的に参加してもらう。

◆調査研究の受託

「収益事業の展開」と「研究成果の施策への還元」を目的に、役場から委託調査研究を受ける。来年度は「空き家の基礎調査とその活用方策に関する調査研究」を受託した。

7 資料

上流圏だより
雑誌
新聞記事

■オオビランジ（ナデシコ科）8～9月
茎高20～30cm。南アルプス特産種のタカネビランジの低山種。淡紅紫色の花をたくさんつける。

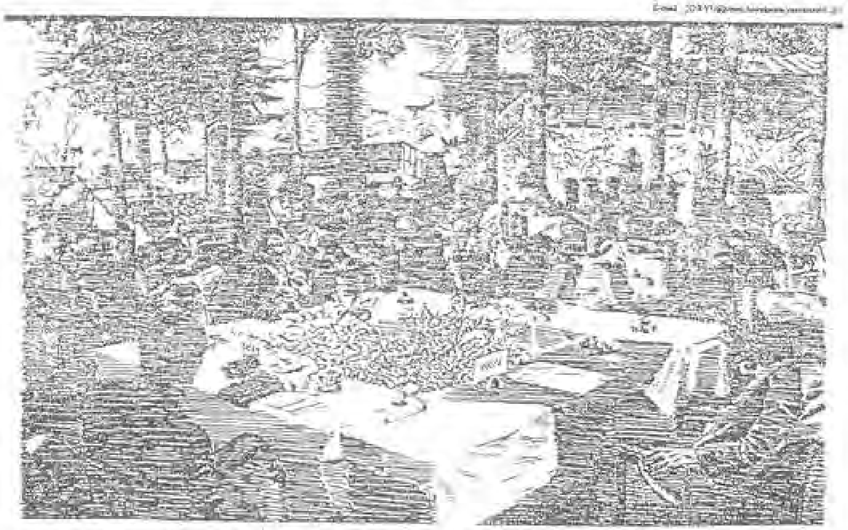
上流圏だより No.1【平成8年10月25日】

No1

上流圏だより

FROM JAPAN UPPER RIVER

日本上流文化圏研究所



奈良王神社の境内で行われた第二セッション「小集団放談」のイメージスケッチ

■上流文化圏研究所始動■

早川町奈良田で、シンポジウム『フォッサマグナの叫び』開催

日本上流文化圏研究所は、平成八年四月、早川町薬袋の交流促進センター内に開設されました。川の上流域の意味と価値、そこで暮らす人々の未来を考える研究機関です。

川の上流は広大な宇宙に最も近く、最も純粋な水を天から受け取るところで、いわばいのちの源といえます。こういった地域で生きることの誇りを高らかと掲げ、豊かな自然とともに生きる上流域の人間から、新たな暮らし、文化を構築しようと、この研究所は生まれました。本来、いのちの源であった上流圏は、産業の進展、都市の発達により、余儀なく山は杉やひのきの人工林となり、川は発電のために水量が細り、水防砂防ダムで固められました。経済の論理が優先し、林業は弱まり、人は山を降り、荒廃と過疎に悩んでいます。この上流圏の現実を未来へ向けて乗り越えようというのが、研究所の意志です。日本のみならず世界の上流文化圏の情報収集・調査研究を推し進め、その成果を早川町や他の上流文化圏で活用していきます。

研究所の発足を記念して八月三十、三十一の両日、早川町奈良田で、シンポジウム「フォッサマグナの叫び」が開かれました。全国各地から百二十人が参加。日本の巨大な断層・フォッサマグナの発する地球のエネルギーを感じながら、まちづくりをテーマに心ゆくまで語り合いました。

早川で創作活動をする作家たちを紹介する「早川技〔わざ〕展」も開かれ、今回は、永山久志さん（陶芸）、永山のぶ子さん（染め物）、入村哲生さん（彫刻）、入村真代さん（陶芸）、佐田修さん（木工芸）、望月正通さん（鎧）、湖上阿生さん（彫刻）、深沢勇さん（曲げもの）の作品が遠来の客を魅了しました。夜のとばりが降りてからは、白簱史朗写真館において「黒山水コンサート」が開かれ、旅した土地や季節の移ろいから得たインスピレーションを歌にしている。しらいみちよさんが弾き語りを行いました。

■鍵やの台所から御礼■

イベント開催中、お客様に3回の食事を提供しました。食事の会場は、奈良田の里にある入り母屋造りの茅葺き民家「鍵や」で、この家の持つ風情と素敵な会場演出に助けられ、[illegible]となりました。

[illegible]

このようにたくさんの方に支えられて生まれた料理の中で、特に話題になったのは、千切り大根を混ぜ込んだ「大根そば」や、麦や豆と炊き込んだ麦飯の「すばく」、きゅうりや青しそをたっぷりと切り込んだ冷たい味噌汁「冷や汁」などでした。どれも早川の風土が育んできた特徴のある料理ですね。早川の皆さんは最近食べていますか？

■研究員自己紹介■

○研究員　小俣佳子（33歳・B型）

8月から研究員になりました。上流圏の食文化に関心があります。特に蕎麦をはじめとする山間地の粉食文化に愛着があって、研究の対象にしています。早川には、土地で作った粉を使ってそばやうどんを手打ちする人が、まだまだ多いですね。それぞれの家庭にそれぞれの打ち方、ダシの取り方、つゆの味、取り合わせる薬味などの多様性があってとても楽しいです。

早川へ来るまでの2年間、利賀村という富山県の雪深い山間地で、そば打ちの勉強をしてきました。そこで学んだ事は、そばは日本人だけの食べ物ではなく、世界中でいろいろな調理法で食べられていること。そして、麺にして食べるのは日本と中国の一部だけなのです。この「そば打ち」という仕事は、とてもシンプルなだけに奥が深く、本当に飽きないということです。そば打ちは、決して難しい技を見せるものではありませんし、[illegible]ものでもありません。だれでも楽しめる上手になれるものです。そば打ち愛好会やそば会などが今後できたら、ぜひ私にも声を掛けてください。皆さんと一緒に早川のそばを打ちたいと思っています。いろいろなそば料理も作りましょう。

では、私の好きなそば料理を一品紹介して、ご挨拶代わりといたします。

火と水を囲み仙人俗人集う

上流の水は今！

第一セッションは、早川町の久村真代さん、天野秀一さん、望月利和さん、深沢守さんの四人の話を起点とし、ダムの問題、水の問題、川の問題、そしてまちづくりの問題について議論が展開した。セッションには平沢文康さん（新潟県高柳町）、セーラ・マリ・カミングスさん（長野県小布施町）、下西停資さん（奈良県川上村）、斉藤征義さん（北海道穂別町）、桑野和泉さん（大分県湯布院町）、そして下河辺理事長が加わり、岡崎邑之さん（東京都）のコーディネートで進められた。

川に水を流さず、山の中のトンネルで水を送っている早川の現状が語られると、下西さんの地元でも、伊勢湾台風を教訓として計画された大渡ダムが37年経ってもまだ完成していないこと、ダムはできていないのに過疎は進み、人口8千人が3千人になったこと、都会の人は川上村が汚れたから水を飲めるとは思っていないということが報告された。しかし同時に、ダムから地元にお金が落ちていることも指摘された。

早川町の望月助役からは、過疎の原因は発電所の合理化にあること、人口の割に潤沢な予算が組めるのは、ダムがあるためであること、しかし、固定資産税も減価償却段階に入り、それほど潤わなくなってきていることが説明され、早川の辿ってきた道筋が見えてきた。一口は、ダムで潤い、人口も増えていた町が、ダムが合理化、ダムの寿命という現実を前に、過疎、水の流れない川、基幹産業の未確立、税収の減少という問題を抱えてしまっていることが示されたのである。

下河辺理事長は、百年来人間の便宜のためにダムを造ってきたが、建設省の河川局も、これでは誇かしいのではないかと気づき始めた、とコメント。しかし、どんな地点をめざせばよいのかという答えは、東京からは絶対に出てこないのであって、本日の議論や署名活動のような運動から、さらに一歩発展させて考え続けて欲しいと語った。ダムの寿命は短く、21世紀には埋まったきり顧り返されることもなく、いらなくなった発電所が点在するようになるのではないか、水を送るトンネルは石見銀山の水路のような文化財になり、観光地化されているかもしれない、などの指摘もされた。

十年の時間を超えて、未来を夢みる

第二セッションの歴史未来談義「千年封印放談」は、放談の内容を十年間封印し、封印を解く十年後に再び早川の地に集い、歴史を省みるとともに未来への知恵を出し合おうという企画であった。下河辺理事長、中谷健太郎さん（大分県湯布院町）、市村次夫さん（長野県小布施町）、岡田文淑さん（愛媛県西子町）の四人のメンバーが、「これまでのまちづくり、くにづくり、そしてこれからのまちづくり、くにづくり」をテーマに語り合った。

この内容を納めたデジタルテープは、奈良三神社の見守る中で厳かに封印され、坂田誠山氏の奏でる尺八の音とともに、時の流れに託された。

全国の上流から、下流から

第三セッションは、三井啓心さん（早川町）をコーディネーターに、全国の若手参加者がテーブルにつき、楽しいムードで語り合った。メンバーは岩本剛さん（熊本県宮原町）、近藤廣平さん（長野県浪合村）、鈴木正士さん（静岡県豊根村）、隅田節子さん（熊本県）、久木田猛一さん（岩手県盛岡市）、吉岳隆子さん（三重県）、岩田真亮さん（長野県高森町）、下河辺理事長であった。

行政の広報そして行政と住民とのつながりに関する議論を取り掛かりに始まり、下河辺理事長からは、「行政の内部で情報の共有化がされていない、全体を語れる人がいない」という問題が指摘された。また、かつての住職はコミュニケーションの要の役割を担っていたという指摘から、住職である岩田さんから、「かつては、檀家制度で住民票から娯楽の会の開催まで、情報は寺に集まっていた。今、生きている情報は役行政に渡し、残ったのは過去帳だけ」との意見がだされた。下河辺理事長からはさらに、「昔の僧は洪水で壊れた堤防の修復を指揮するなどの活躍をしていた。今、宗教については複雑な時代ではあるが、仏教文化の見直しが上流文化をつくる可能性もある」との示唆があった。

文化や林業もテーマになった。近藤さんは、危険な体験をしながらも、自ら木を切り倒し山を開拓している経験から、「山の中に自信を持って住んでいたい、自分の力で生きていることに魅力を感じられるようにしたい」と語り、町の人達に1本1万5千円で木を切り倒す楽しみを味わってもらっていることなどを語った。

鈴木さんは、「山の作業はあまりにも大変なので、趣味として子供たちと犬を連れてやるようにしている」などの工夫を語った。

隅田さんは、じいちゃん、ばあちゃんが持っている知識の素晴らしさを受け継ぎ子供たちに伝えたいということ、また、岩本さんは、子供の情報力はすごいので、「子供から親へ」というベクトルで、地元学やまちづくりの英才教育をやっていきたいという抱負を語った。

「千年の時」と「宇宙」を思う

最後に、下河辺理事長に、今回イベントに関する総括的なお話をしていただいた。

今回の参加者の発言に共通していたのは、20世紀文明の否定ではないだろうか。今、早川の人口は8千人から2千人になっているが、縄文時代には何人いたのだろうか。千年の歴史を思えば2千人でも異常なほどなのではないか。20世紀に日本の人口は4千万から1億人以上に増えたが、21世紀には7千万人まで下がると予想される。その中で、早川をどう見るかということである。

文化ということでいえば、地域にもともと文化があったというよりも、人がやってきたら良いところだったので住みつく、そうして伝えられたものが伝統になっていくということがある。だから、これからの上流圏にどんな人がやってくるのかが重要になる。今回開かれた「早川の技展」では、たまたま早川に住みついた人が陶画師であったり、陶芸家であったりして、早川の文化を生み出す可能性が示されている。

20世紀は都市に難民を作り出した。これから難民が世界をうろうろして、定住先を探す時代。みなさんには、難民をやさしく受け入れて欲しい。

また、20世紀文明を否定しながら、21世紀を考えることが必要である。こつをドッキングさせて、美しい光を放つようにしていこう。音楽・スポーツ・美術、それまで縦々とアウトドアでやってきたのに、20世紀はインドア化の時代。農地に彫刻をおいたら素晴らしかったという話もある。上流では箱モノは最小限にして、文化を考えることではないか。

ハードということでいえば、上流では下水道を否定することを考えて欲しい。20世紀の陳腐な下水道では問題は片づかない。下水道ができても、琵琶湖は汚れ続けている。下水のいらない技術がこれからは必要ではないか。

人間が山にいて千年と宇宙を夢見ることができるといいなと思う。自分という人間の中に、千年と宇宙がどれだけ感じられるか。日本の文化は本来それをやっていたのに、それを失ってしまった。これからは、5年、10年という単位でなく、千年や宇宙を自分の中に見つけて欲しい。

バンブーな日々

こんにちは。今回のイベントで、空間演出を担当した学生研究員の静打です。今回のイベントは、奈良県という特殊な場所で開催されたために、単にシンポジウムを行うのではなく、その土地の持った風土やエネルギーを参加者に伝えるのも大切な目的でした。そのために会場作りから風呂場の小物作りまで、様々な空間の演出を考えました。その中でも最も大変だったのは99個の竹提灯づくりでした。竹提灯は、夜の会場の照明のために考えられました。しかし単に夜の真っ暗な荒れ田を明るくするだけではなく、会場の雰囲気も作り出さなくてはならなかったので、竹や和紙、ロウソクといった天然、あるいは昔からの素材を利用しました。

工程としては竹林から竹を切り出す事から始まって、竹ひごを使った骨組み作り、竹にかぶせる和紙の張り作りと、どれも大変手間のかかるものでした。しかし、役場の企画課の皆さんにも休日返上で手伝っていただき、何とか作り上げる事ができました。当日はロウソクに火をつけたと思ったら、突然の雨に見舞われ竹提灯が100パーセントの活躍はできませんでした。それでも参加者や関係者の皆様にも大変好評で、個人的には大変満足しました。

この提灯作りを手伝ってくださった方はもとより、道具を貸してくださった方々や、アドバイス下さった方々にも、大変感謝しております。ありがとうございました。

研究所よりお知らせ

■『早川農業百科』作らんけ！

農業の体験や、そこから生まれる知恵は、これまで特別に記録されなくても親から子へ、また次の世代へと自然に伝えられてきました。しかし今、その絆があちこちでとぎれ、大切な記憶が永遠に無くなろうとしています。そして危機感をもつ人々から、「たとえささやかであっても、私たちの命を支え、暮らしの糧を創んできた自分たちの農業を記録し、これからも土仕事をやっていく人たちに伝えたい」という声が出ており、町民のやってきた農業について、面白かったこと、大変だったこと、驚いた経験、笑ってしまった出来事、技術的に悩んだこと悩んでいる事、これからやってみたいことなど一つ一つを集め、町民の手で早川の農業の「百科事典」を残そう、という動きになっています。

まずは、古い出しっぺの菜袋集落で、今月24日、昨年の収穫物の出来栄えや鳥獣害について語り合う会を行ないます。どんな作物をどのくらい作ったか、出来はどうだったか、猿や猪、カラスなどの被害はどのくらいあったのか、どんな対策をしたか、などを出し合うことにしています。

この活動について、ぜひ皆様の声をお寄せ下さい。「自分の集落でもやりたい」という方には、研究所が協力いたします。自分の農事記録を付けている方などは、参考にさせてください。同じような調査をやりたいと考えていた方、研究班を作って活動しませんか。どんなご意見でも結構です。研究所か役場企画振興課あてにお寄せ下さい。

日本上流文化圏研究所
電話・ファックス　0556・45・2160
役場企画振興課
電話　0556・45・2511
ファックス　0556・20・5000

■「上流圏文庫」の充実に ご協力を

研究所では、上流文化圏の未来を展望するために必要な書籍や資料、地元早川の歴史や民俗、自然、環境、教育、生活文化などの記録、町民の皆様が自費出版した本などを集め、「上流圏文庫」を充実させ、町民の皆様のさまざまな学習活動に寄与したいと考えております。しかし、文庫の充実は短期間では難しいため、寄贈いただける書籍、資料を募っております。また、個人的にお持ちの蔵書や専門書で、寄贈はできないが、必要なときだけ一時的に貸し出してもかまわないという書物、資料も募っております。ぜひ、ご協力ください。

また、早川町内3校の学校図書館司書を務める河上晩代さんが、全国から研究所に集まってきた資料、書籍の整理分類にご協力くださっております。河上さんと関係の皆様に、厚く感謝申し上げます。

■研究所への視察・来訪者

「フォッサマグナの叫び」ご参加の全国の皆様
安里全勝様（山梨学院大教授）
飯塚八朗様（東京芸術専門学校教務部長）
市野泰通様（東京芸術専門学校講師）
瀬尾克美様（山梨県土木部長）
根岸秀之様（身延土木事務所次長）
北条長様（身延土木事務所河川砂防課長）
勝沼町・江口清三郎ゼミご一行様
高橋幸子様（東京家政大博物館）
高丸廣子様（金沢市）
市川雅子様
隠棲落学習グループ
藤本幸久様（北海道新得町・森の映画社）
和田美加代様（札幌市）
山梨学院大の学生の皆様
ありがとうございました。
また、様子を見に来てください。

No 2

上流圏だより

FROM JAPAN UPPER RIVER

日本上流文化圏研究所
〒409-27 山梨県南巨摩郡早川町茂倉新田
Tel.& Fax.0556-45-2160
ホームページ http://www.samoshi-yba.co.jp/HAYAKAWA/

楽しいよ、みんな集まれし！

山で川で集落で、研究活動すすむ

■ 遊びの歳時記

今の周りの自然や素材が遊び道具だったころの体験を記録に残し子どもたちに伝えようと、遊びの歳時記づくり研究班が誕生しました。早川南小の大倉はるみ校長を中心に望月真一（赤沢）、水野定夫、佐野弘（菜袋）、尾崎博長（原村）、谷沢文正（保）、深沢孔子（茂倉）、深沢竹一（奈良田）の皆さんがメンバーとなっています。

昨年十二月二日には、菜袋の交流促進センターに集まり、竹を使った遊具を再現しながら、かつて親しんだ遊びを振り返りました。

この日の話し合いでは、「山野を歩きながら生み出した山遊びのバラエティーをきちんと収集整理し伝承したい」という意見が相次いだため、これを研究の柱としていくことが決まりました。メンバーは今後、木の実、笛、竹、花びらなど、遊具の素材に着目しながら、忘れられている山遊びを収集していきます。学校帰りに木の実や葉っぱを見つけ、山の中に作った秘密基地でいつまでも飽きずに遊んでいた思い出などが次々と蘇っています。

■ 早川の食文化再認識

成ヶ島・常福院の三井彰心住職が発起人となり、早川町に育まれてきた食文化を調査する活動が始まっています。

どこにいても、スーパーの商品や沢山の輸入品が知らないうちに胃袋に収まる時代になりましたが、わずか何十年か前には、それぞれの山村漁村にその土地なりの食材と料理法や保存法があり、人々の食事を地域個性豊かなものにしていました。では、早川町ではどうだったのか自分たちの手で確認したい、というのがこの活動です。手始めとして昨年秋の寿大学の際、教育委員の皆さんが主体となり、昔の食事情の調査を行ない非公開。

三井住職は、「食に興味関心のある町民で研究チームを作るなどして、多くの人の知恵を盛り込みながら有効で広がりのある調査研究してしていきたい」

と、賛同者の参加も呼びかけです。そのような書籍をネットワークしてリストにまとめております。ぜひ、ご協力下さい。

■ 書籍・資料の充実

研究所では、山林、河川、都市と山村の関係性、歴史、教育、民俗、生活文化など、上流圏の文化圏の未来を展望するために必要な書籍や資料を充実し、町民の皆様のさまざまな調査研究活動に使えるよう「上流圏文庫」の整備を進めています。この活動には、赤沢の望月利和さんが精力的にお力添えドさっています。文庫の整備の核になっていただいているほか、ライフワークとして収集なさっている秩父山の書籍・資料の中から選上げ、上流圏に関する本と資料もお貸しいただきました。

文庫の充実は短期間ではなかなか難しいため、研究所では、個人的にお持ちの蔵書や専門書の中で、共同で使わせていただけるものを広く募っております。

■ ヤマトイワナを追え

清冽な水を象徴する魚イワナは、分類一つにしてもまだ解明されていない部分の多い神秘の魚です。研究途上であるのに、生息地の環境が悪化したり、部落の放流によって種類による棲み分けが崩壊したりして、本来の姿がどんどん分かり難くなっています。

そんな中で、雨畑の望月一手さんとその仲間が、ヤマトイワナの保存に向け研究を始めています。ヤマトイワナは中部山岳地帯の太平洋側に注ぐ渓流だけに比較的まとまった分布域をもっており、隠れの歴史が非常に古いといわれています。体調下に手づくりできるよう、地域の腕自慢から協力を引き出し、引き出しして、にぎやかに運営しました。

望月さんは、見つけた個体を手帳に地図に落とす作業を続けており、いずれ、この生息マップを保護のための活動に役立てたいと話しています。

■ 自慢の大豆生かそう

うまい大豆が栽培できる場所として町内でも有数の五百地区では、手作りの豆腐と、人はやる豆腐の商品開発を継続して行なっています。

昨年十二月十八日、交流・交流促進センターで行なわれた「豆腐とそばの手作り講習会」には、受講者三十人、男女十人が参加。峠を開きつけた中富町の女性グループも交じり、講習は熱気に溢れました。家庭で上の味噌作りの技術の向上の模様もはっきりしていないが特徴です。

各地の地域活性化にも協力

「日本どまんなかの会フォーラム」の演出手掛ける

静岡県・豊岡村にて

昨年十二月、静岡県豊岡村で行なわれた地域活性化イベント「日本どまんなかの会 豊岡村フォーラム」の会場演出を、日本上流文化圏研究所が全面的に引き受けました。

静岡県の西部に位置する豊岡村は、北部の星山がちょうど南アルプスの南端にあたります。柿や白ネギ、お茶、湯老芋、マスクメロンなどの産地として知られています。初冬とはいえ、穏かな日差しに豊かな竹林が輝き、舞りかけの紅葉と茶畑の白い花が印象的でした。このような土の香りをシンポジウムやコンサートの会場に取り込み、季節の息吹が通り抜ける一瞬をつくりたい！

赤ワインのように色づいた柿の葉を床や廊下にたくさん敷らし、天井は白和紙のドレープで飾る。和紙にはライティングでモミジやイチョウの葉のシルエットを映し出し、村に豊かに流る竹は、花器や照明装置にふんだんに使いました。

スライド・映写のスクリーンには障子を利用

夕食のテーブルにも和紙

竹の花器にサザンカを挿る

竹と和紙のちょうちん

スタッフあいさつ

紅葉の枝に埋もれる会場

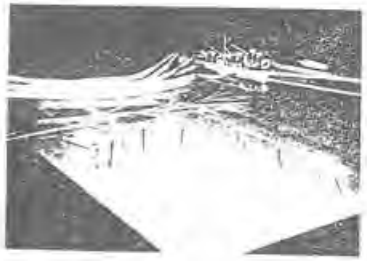
No3

上流圏だより

FROM JAPAN UPPER RIVER

日本上流文化圏研究所
〒409-27 山梨県南巨摩郡早川町茂倉41号番地
Tel & Fax.0556-45-2166
ホームページ http://www.[illegible]
E-mail JOEYU@[illegible]

昔の遊びを「山菜まつり」に出前します



◇素材を囲んで打ち合わせ（上左）

◇竹、木、紙を使った
遊び道具の数々（上右）

◇ただ今、長い竹と格闘中（下）

五月三日に開催される「第二回南アルプス山菜まつり」の一前に、上流文化圏研究所では遊び部会を中心に、「昔の遊びコーナー」を設けます。遊び部会ではこれまで、竹や木の実、葉っぱなどの身近な植物を利用した昔ながらの遊びを収集し、「遊びの露時記」を作る計画を進めてきました。そこで今回の山菜まつりを機に、これまでの活動を報告するとともに、子供達に自然の素材を使った遊びを体験したり、実際に作ってもらいたいと考えています。

今回の内容としては、これまで収集し製作した様々な遊びの中から、竹とんぼ・水笛・竹馬・ずんぼう（糸巻田に伝わる独楽）などを展示し子供達に遊んでもらいます。その他にも、大人が楽しめるような企画もありますので、山菜まつりに来られた際にはぜひお立ち寄りください。

五箇地区旗上げアンケート全結果

1 子供の頃の遊びで最も楽しかったのは何？	回答数
1 川や沢での魚取りなど	21
2 山での山菜採りなど	10
3 家の周りでの鬼ごっこ	17
4 家の中での、マンガ読みなど	0
5 その他	0

2 今の子供にして欲しい遊びは何？	回答数
1 自然の中での、魚取りなど	8
2 野球やサッカーなど、スポーツを	19
3 引きこもりにならないように、コンピューターを	3
4 遊びもいいけど勉強しなさい！	0
5 その他	0

3 早川の子供に最も必要な環境は何？	回答数
1 動物や自然と触れ合える、自然環境	7
2 温泉歴史文化のための、教育環境	9
3 町を知ってもらうための、地域学習環境	38
4 快適な暮らしのための、生活環境	13
5 その他	0

4 町を離れて行く子供に残したい財産は何？	回答数
1 今すぐ早川に帰って来てくれ	9
2 自分の住みたいところに住めばいい	7
3 いつかは早川に帰って来てくれ	33
4 早川には帰って来ないかもしれない	4
5 その他	0

5 町を出る時に持っていくものは何？	回答数
1 身内や親戚など、近くに	0
2 甲府など、県内の中心地へ	7
3 東京など、大都市へ	0
4 町から出るつもりはない	41
5 その他	0

6 五箇に取り戻したいものは何？	回答数
1 魚や山菜など、山や川の幸	1
2 川や沢の水	6
3 学校	0
4 とにもかくにも人	13
5 その他	0

7 仕事で疲れた心を癒すのは、何処がいい？	回答数
1 五箇から近い、幸福温泉	35
2 遠いけど、奈良田温泉	3
3 湯舟が広い、南部温泉	0
4 遠くて、温泉には行ったことがない	4
5 その他	0

8 五箇で自慢できるものは何？	回答数
1 満天の星空	4
2 先祖の苦労がうかがえる、昔ながらの民家	23
3 秋の紅葉など、山の景色	16
4 交流センターなど、近代的な建物	3
5 その他	1

9 若者が町に残るに必要な物は何？	回答数
1 どりみえず高校	1
2 若者が楽しめる娯楽施設	2
3 安定した職場	54
4 親と別居できる住宅	0
5 その他	0

10 最も憎たらしい動物は何？	回答数
1 畑で暴れるイノシシ	18
2 収穫の前日に作物を食べるサル	30
3 熟した畑からダネを食べるトリ	4
4 それをどうにもできない人間	3
5 その他	0

11 毎日の食料品の買い物は何処へ？	回答数
1 マツマキや増田屋など、近所のスーパーへ	9
2 コマやオザノなど、ショッピングセンターへ	6
3 農協の移動スーパーで十分	33
4 買い物はほとんど行かない	4
5 その他	0

12 町にやって来た観光客に見て欲しいものは何？	回答数
1 山や川など豊かな自然	13
2 そばや大豆など、早川の食	14
3 交流センターなど、近代的な建物	0
4 山での生活の大変さ	10
5 その他	0

13 今の生活から無くなっては困るものは何？	回答数
1 農業	21
2 電話	25
3 テレビ	5
4 車	5
5 その他	0

14 五箇地区に望ましいまちづくりは何？	回答数
1 多くの人に地区を知ってもらうために、観光開発	1
2 住民が快適に暮らせるように、生活環境の整備	24
3 町外や県外の人との交流活動	2
4 老後も安心して暮らせるような福祉の充実	26
5 その他	0

15 五箇地区内で引っ越すなら何処？	回答数
1 役場も近いし日当たりもいい、乗越	14
2 美味しい大豆が取れる、塩ざと	9
3 隣町に一番近い、樽坪	4
4 今の所が一番、引っ越さない	25
5 その他	0

16 日本上流文化圏研究所を知っていますか	回答数
1 名前、場所はもちろん、何をやっているかも知っている	8
2 名前と場所は知っている	9
3 名前は聞いたことがある	19
4 今日初めて知った	2
5 その他	0

五箇地区旗上げアンケート

■魚や山菜を取った子供時代

■今の子に地域学習環境を！

■いつかは戻っておいでよ～

■山の暮らしって、大変だよ

四月十七日、五箇地区の第一三回「ふるさとまつり」が、旧早川町役場・五箇小・中学校跡地にて、開かれました。五箇地区の椎谷・筏走・塩之上・千頭和・麦袋・古屋の六つの集落から五十人を超える人々が集まり、集落間の交流や親睦を深めました。

日本上流文化圏研究所では、多くの人が一度に集まるこの機会に、おまつりに来られた皆さんの早川町や五箇地区への様々な思いをお聞きしたり、皆さんにも他の人の意見を聞いて参考にして頂きたいと考え、貴重な時間の一部をお借りして簡単なアンケートを行ないました。

内容は子供の頃の事、日頃の生活の事、五箇のまちづくりの事など、身近な問題と選択肢を用意し、一問一答ごとに参加者の皆さんに番号の付いた札を上げてもらい、その場で集計するというものでした。参加者の皆さんも自分達が日頃考えているような質問だったために、自分の上げた番号と他の人が上げた番号を見比べて、一問一答ごとに大騒ぎでした。

研究所では、今後も住民のみなさんが主体となり、まちづくりを進めていかなければならないと考えています。そこで研究所の一員でもある早稲田大学建築学科後藤研究室が中心となり、お年寄りや女性、子供など様々な立場のみなさんに参加していただいて、地域の将来像を描くワークショップを開催していくことになりました。今年度は六つの旧村から五箇地区を対象として「村の計画づくり」を行なっていく予定です。今回のアンケートはその一環として行なわれました。

旧村六地区のむらづくりが、早川のまちづくりにつながっていくという、「日本・上流文化圏構想」をベースに、町民のみなさんが自ら考え行動することによる町民自治の再構築をはかります。

今回のアンケートの結果、いくつかの興味深い結果が出ました。まず子供に関する問題です。「何は最も楽しかった遊びとして「川や沢で魚取り」と「山で山菜取り」が多く見られました。しかし、現在の子供に対しては「野球やサッカーなどのスポーツ」で遊んでほしいという意見が最も多く出ました。また、「遊んでばかりいないで勉強しなさい！」という意見も見受けられました。一方、「早川の子供たちに必要な環境」の問いには、「町を知ってもらうための地域学習環境」に過半数を超える人が票を挙げました。子供たちには「自然の中で遊ぶ」よりもスポーツをしてほしい」と思いながらも、「地域をもっと学習してほしい」という住民のみなさんの気持ちに少ッ多屑

にしています。その理由は今後の分析にゆだねるとして、住民の皆さんの気持ちと同様に、上流文化圏研究所でも地域学習の必要性を感じ、子供達が地域のことをより理解できるような早川町独自の地域学習教材の開発に着手しています。これに関しては皆様の意見をどんどん取り入れたいと考えていますので、御協力お願いいたします。

次に、人の問題があげられます。「町を離れている子供（孫）に対して言いたい言葉」という質問では、ほとんどの人が「いつかは戻ってきてほしい」と思っています。また、「五箇地区に取り戻したいもの」では「とにもかくにも人」と答えた人が圧倒的多数で、人口減少を町の重要な問題として捉えている人が多いようです。

また、「若者が町に残るには何が必要か」という質問では、「安定した職場」という選択肢を選んだ人が大多数で、皆さんの考えとして安定した職場の確保が人口減少の解決策となるということがうかがされています。

「観光客に何を見てほしいか」という質問では、早川町の豊かな自然よりも、「山での生活の大変さ」を知ってほしいという回答が多数近くにのぼり、「五箇で自慢できるものは」では「先祖の苦労がうかがえる昔ながらの民家」という意見が多く見られました。これからの観光は単に自然環境を楽しむといった表面的なものではなく、住民の暮らしを体感できるようなものが必要なのかもしれません。

今回のワークショップには七〇代の方が最も多く参加され、次いで八〇代の方が参加してくださいました。平日であったため年齢層が偏ってしまい、これが住民皆さんの共通の意見とはいえもせんが、今回のアンケートの結果も参考にしてみて下さい。

No4
上流圏だより
FROM JAPAN UPPER RIVER
日本上流文化圏研究所

「食べ物の図書展」を開きます

2月16日～3月20日 薬袋・交流促進センター

日本上流文化圏研究所が薬袋・交流促進センター内に整備を進めている「上流文化圏ライブラリー」に、赤沢の望月利和さんが、たくさんの蔵書を貸してくれました。歴史、民俗、環境、食文化、地域づくり、農業、経営哲学など幅広い興味関心によって集められた本は、約2千冊にのぼります。町民の方はいつでも閲覧できますので、気軽にお立ち寄りください。

これらの中から食関連の書籍を選び、研究所の蔵書、資料、ビデオなどと合わせて「食べ物の図書展」を開催いたします。期間は平成10年2月16日（月）から3月20日（金）までの平日です。期間中は本の貸し出しもいたします。世界各国の料理とその作り方、日本各地の食文化、食と医療・健康などに関する書籍が並びます。新しい料理に挑戦したい方、日ごろの食生活が気になっている方、食べることに目のない方・・。まずは、このおいしい機会をお見逃しなく。

主な展示図書・資料

- ■聞書き・日本の食生活全集（都道府県別、農山漁村 文化協会）
- ■健康食シリーズ（食材別全20巻、農山漁村文化協会）
- ■世界の料理（国別全10巻、タイムライフ社）
- ■人間は何を食べてきたか―「食」のルーツ5万キロの旅（ビデオあり、日本放送出版協会）

みんなで築う交流促進センター ポラロイドインタビュー開催

交流促進センターでこんなことしてみたい!!

10月10日、上流文化圏研究所では、五箇地区運動会の一角をお借りして。住民の皆さんの意見をポラロイドインタビューによって収集しました。

運動会参加者の半分近くの56人の方から、今後の交流促進センターについての使い方について、様々な意見が出されました。

今後、研究所では皆さんの意見を参考に、活動計画を立てていくつもりです。

みんなで築う交流促進センター
お名前
部落名

みんなで築う交流促進センター
お名前
部落名

△▼△▼△▼△▼△▼皆さんから集まった意見をまとめてみました。▼△▼△▼△▼△▼△

文化・芸術

- コンピューター
- 音楽、コンサート
- 前の広場で映画鑑賞会
- お茶、英会話教室
- 創作活動（陶芸、木工等）
- 料理講習
- 市場

遊び

- 自転車
- ブランコ
- ままごと

福祉

- 健康診断
- 医療関係

子供

- 子供が遊べる場所
- 子供と遊べる場所

スポーツ

- 野球
- フットサル（サッカー）
- バスケットボール

交流、ふれあい

- みんな集まって話せる場所
- 夏祭り
- コンパ

当日は地区の運動会とあって、子どもからお父さん、お母さん、そしておじいちゃん、おばあちゃんと様々な世代の人から意見を伺うことができました。そのため集められた意見は、どれも非常に重要で面白いものばかりでした。

なお、インタビューの結果は交流促進センター内に掲示してありますので、センターにお立ち寄りの際には、是非ご覧下さい。

最後になりましたが、インタビューにご協力頂いた皆様、本当にありがとうございました。（学生研究員 榎打）

昔、食ったもんだ～ 早川の麦めし『すばく』 今、食べても なかなかいけるぞ

■なつかしの麦飯、復活

早川町で「すばく」が食べられていたのは、昭和30年代までだったそうです。それがどうしたことでしょう。昨年、約40年の時を経て、話題の中心になりました。

「すばく」は、2時間ほどかけてダツダツと煮た大麦に、少量の米とうずら豆や小豆を入れて炊き上げた麦飯のことです。かつては町内全域で食べられていましたが、現在では町民の食卓にのることは全く無くなりました。唯一、茂倉集落では、病に自信があって、自分も「すばく」が大好きという深沢よ志さん(88)らが伝統の火を守って作り続けています。数年前、山村調査に来た大学生に「珍しい昔の料理が食べたい」と要望され、何十年ぶりに作ってみたら学生達に喜ばれたということで、また作るようになったのです。茂倉では以来、自然と「すばく」は復活し、仲間が寄り合って食べる懐かしのメニューとなりました。

よ志さんらは、昔からのクドを使って薪で火を起こし、大きな釜で炊きます。そのときは近所の人達にも声を掛け、よ志さんの家で味見の昼食となります。「すばく」に添えるのは『ねぎ味噌』と決まっていて、これが、抜群の相性なのです。味噌は手前味噌だし、ねぎは畑から取りたてで、とっても美味しい。これでご飯が何杯でもお代わりできます。冷たい味噌汁「ひやじる」が、もう1つの付け合わせです。味噌を冷たい水で溶いて、そこへ刻んだキュウリと青シソの葉を入れます。軽く炒って擦りおろしたゴマも入れると絶品です。「ひやじる」は、「すばく」に掛けて食べます。このとき「すばく」の方を熱々にしておきます。けして実的な食べ物ではありませんが、結構手間がかかって、炊飯器に頼り切ってる世代には、なかなか難しい料理です。

「ぜひ、食べたい」と訪ねてくる人も増えたため、茂倉のおばあちゃんたちは昨年夏に愛好会を結成しました。

「すばく」の1年を振り返ってみます。

- ●3月　町のイベント「山菜まつり」で「郷土食・すばく」をPR
- ●6月　茂倉集落のおばあちゃんたちが「すばく愛好会」を結成
- ●7月　愛好会が山梨日日新聞に紹介される
- ●8月　早川町内の教職員が、「すばく」の研修を行なう
- ●9月　第1回町民塾開講。夕食交流会のメニューは「すばく」
- ●11月　山梨放送が「すばく」復活を番組に

1997年7月11日　山梨日日新聞

長生き郷土食「すばく」後世に

ばあちゃん手作りで復活

早川　女性愛好会が発足、紹介

早川町新倉の茂倉集落で地元の女性が中心となって「すばく愛好会」を結成した。早川町の郷土料理である麦飯の「すばく」を定期的に食べるとともに、早川の「食の文化」を後世に伝えていく。日本民族文化研究所も町の食文化として研究し、町内外に紹介する。

峡南

「すばく」は、約2時間ほどかけてダツダツと煮た大麦に、少量の米とうずら豆や小豆を入れて炊き上げた麦飯のことです。かつては町内全域で食べられていましたが、現在では町民の食卓にのることは全く無くなりました。唯一、茂倉集落では、病に自信があって、自分も「すばく」が大好きという深沢よ志さん(88)らが伝統の火を守って作り続けています。数年前、山村調査に来た大学生に「珍しい昔の料理が食べたい」と要望され、何十年ぶりに作ってみたら学生達に喜ばれたということで、また作るようになったのです。茂倉では以来、自然と「すばく」は復活し、仲間が寄り合って食べる懐かしのメニューとなりました。

よ志さんらは、昔からのクドを使って薪で火を起こし、大きな釜で炊きます。そのときは近所の人達にも声を掛け、よ志さんの家で味見の昼食となります。「すばく」に添えるのは『ねぎ味噌』と決まっていて、これが、抜群の相性なのです。味噌は手前味噌だし、ねぎは畑から取りたてで、とっても美味しい。これでご飯が何杯でもお代わりできます。冷たい味噌汁「ひやじる」が、もう1つの付け合わせです。味噌を冷たい水で溶いて、そこへ刻んだキュウリと青シソの葉を入れます。軽く炒って擦りおろしたゴマも入れると絶品です。「ひやじる」は、「すばく」に掛けて食べます。このとき「すばく」の方を熱々にしておきます。けして実的な食べ物ではありませんが、結構手間がかかって、炊飯器に頼り切ってる世代には、なかなか難しい料理です。

「ぜひ、食べたい」と訪ねてくる人も増えたため、茂倉のおばあちゃんたちは昨年夏に愛好会を結成しました。

「すばく」の1年を振り返ってみます。

●3月　町のイベント「山菜まつり」で「郷土食・すばく」をPR
●6月　茂倉集落のおばあちゃんたちが「すばく愛好会」を結成
●7月　愛好会が山梨日日新聞に紹介される
●8月　早川町内の教職員が、「すばく」の研修を行なう
●9月　第1回町民塾開講。夕食交流会のメニューは「すばく」
●11月　山梨放送が「すばく」復活を番組に

郷土料理の「すばく」を用意する茂倉のメンバー

「すばく」は、約2時間ほどかけてダツダツと煮た大麦に、少量の米とうずら豆や小豆を入れて炊き上げた麦飯のことです。かつては町内全域で食べられていましたが、現在では町民の食卓にのることは全く無くなりました。唯一、茂倉集落では、病に自信があって、自分も「すばく」が大好きという深沢よ志さん(88)らが伝統の火を守って作り続けています。数年前、山村調査に来た大学生に「珍しい昔の料理が食べたい」と要望され、何十年ぶりに作ってみたら学生達に喜ばれたということで、また作るようになったのです。茂倉では以来、自然と「すばく」は復活し、仲間が寄り合って食べる懐かしのメニューとなりました。

よ志さんらは、昔からのクドを使って薪で火を起こし、大きな釜で炊きます。そのときは近所の人達にも声を掛け、よ志さんの家で味見の昼食となります。「すばく」に添えるのは『ねぎ味噌』と決まっていて、これが、抜群の相性なのです。味噌は手前味噌だし、ねぎは畑から取りたてで、とっても美味しい。これでご飯が何杯でもお代わりできます。冷たい味噌汁「ひやじる」が、もう1つの付け合わせです。味噌を冷たい水で溶いて、そこへ刻んだキュウリと青シソの葉を入れます。軽く炒って擦りおろしたゴマも入れると絶品です。「ひやじる」は、「すばく」に掛けて食べます。このとき「すばく」の方を熱々にしておきます。けして実的な食べ物ではありませんが、結構手間がかかって、炊飯器に頼り切ってる世代には、なかなか難しい料理です。

「ぜひ、食べたい」と訪ねてくる人も増えたため、茂倉のおばあちゃんたちは昨年夏に愛好会を結成しました。

「すばく」の1年を振り返ってみます。

●3月　町のイベント「山菜まつり」で「郷土食・すばく」をPR
●6月　茂倉集落のおばあちゃんたちが「すばく愛好会」を結成
●7月　愛好会が山梨日日新聞に紹介される
●8月　早川町内の教職員が、「すばく」の研修を行なう
●9月　第1回町民塾開講。夕食交流会のメニューは「すばく」
●11月　山梨放送が「すばく」復活を番組に

作り、郷土料理試食会に「ぜ」の開催。「茂倉の」の伝統料理である麦飯や、エゴマを使用する「ひじ」「すばく」を中心に。

茂倉は深沢よ志さんの家で、「すばく」を食べる。

「この郷土料理が始まった時期は、はっきりしないが、明治中期に茂倉に住んでいた、茂倉の人たちが、ハレの日に食べていた。米がとれないこの地域で、麦飯は、ごちそうだったのだ。」と、郷土料理研究家の、早川町内の教職員、深沢よ志さん(88)。

茂倉は、深沢さんの他、多くの人が、「すばく」を食べたことがあるという。

「すばく」は、約2時間ほどかけてダツダツと煮た大麦に、少量の米とうずら豆や小豆を入れて炊き上げた麦飯のことです。かつては町内全域で食べられていましたが、現在では町民の食卓にのることは全く無くなりました。唯一、茂倉集落では、病に自信があって、自分も「すばく」が大好きという深沢よ志さん(88)らが伝統の火を守って作り続けています。数年前、山村調査に来た大学生に「珍しい昔の料理が食べたい」と要望され、何十年ぶりに作ってみたら学生達に喜ばれたということで、また作るようになったのです。茂倉では以来、自然と「すばく」は復活し、仲間が寄り合って食べる懐かしのメニューとなりました。

よ志さんらは、昔からのクドを使って薪で火を起こし、大きな釜で炊きます。そのときは近所の人達にも声を掛け、よ志さんの家で味見の昼食となります。「すばく」に添えるのは『ねぎ味噌』と決まっていて、これが、抜群の相性なのです。味噌は手前味噌だし、ねぎは畑から取りたてで、とっても美味しい。これでご飯が何杯でもお代わりできます。冷たい味噌汁「ひやじる」が、もう1つの付け合わせです。味噌を冷たい水で溶いて、そこへ刻んだキュウリと青シソの葉を入れます。軽く炒って擦りおろしたゴマも入れると絶品です。「ひやじる」は、「すばく」に掛けて食べます。このとき「すばく」の方を熱々にしておきます。けして実的な食べ物ではありませんが、結構手間がかかって、炊飯器に頼り切ってる世代には、なかなか難しい料理です。

「ぜひ、食べたい」と訪ねてくる人も増えたため、茂倉のおばあちゃんたちは昨年夏に愛好会を結成しました。

「すばく」の1年を振り返ってみます。

●3月　町のイベント「山菜まつり」で「郷土食・すばく」をPR
●6月　茂倉集落のおばあちゃんたちが「すばく愛好会」を結成
●7月　愛好会が山梨日日新聞に紹介される
●8月　早川町内の教職員が、「すばく」の研修を行なう
●9月　第1回町民塾開講。夕食交流会のメニューは「すばく」
●11月　山梨放送が「すばく」復活を番組に

No 5
1998年11月16日発行

上流圏だより

FROM JAPAN UPPER RIVER

日本上流文化圏研究所
〒409-27 山梨県南巨摩郡早川町奈良田430番地
Tel.& Fax. 0556-45-2160
ホームページ http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/
E-mail JURYU@mx.hayakawa.yamanashi.jp

「第２回早川町民塾をぶんだす会」の日程決定！！
３連休の最後の夜は、交流促進センターへ

早川町民塾のシーズンがやってきました。「塾」と聞くと堅苦しいですね。もう、この先を読むのをやめようと思っていませんか?。でもでも、ちょっと待ってください。この塾は、早川町での暮らしをもっと楽しくするためにいろいろな事ができる「遊び場」です。非常に前向きな「遊び場」・・・。

早川の宝探しをしながら、町内外のいろいろな人と知り合い、毎日を豊かにするいろいろな情報を得られます。

実は、今年はまだ、テーマや塾のやり方などをまったく決めていません。興味関心のある町民の皆さんとあれこれ話しながら、テーマ探しから始めようと思います。そこで、11月23日（月）、勤労感謝の日の夜に、初回の会合を開きます。「こういう事を調べてみたい」とかねてから思っていた方、「仲間がいれば一緒にやってみたい事がある」という方、「毎日に刺激がほしい」という方、この機会に町民塾で、何かをやってみませんか？あなたが持っているアイデアで、今年の町民塾が芽を出します。

ということで、３連休は町民塾をぶんだす会への余力を残してお過ごしください。なお、夕食がつきますので、「参加するよ」という方は、連絡ください。

第２回早川町民塾ぶんだす会

日　　時	平成10年11月23日（月） 午後５時～
場　　所	薬袋・交流促進センター
参加の連絡先	日本上流文化圏研究所（薬袋・交流促進センター内） TEL／FAX　0556－45－2160

◆◆◆「第２回日本上流文化圏会議」開催◆◆◆

早川から北海道へ　北の大地で語る　次世代の地域哲学と暮らし

「第２回日本上流文化圏会議inニセコ」が７月23日から25日まで，北海道ニセコ町で開かれました。日本上流文化圏研究所の設立とともに早川町で生まれた地域づくりを語り合う会議です。宮崎県五ヶ瀬町のブナの森の中で行われた昨年の会議を経て，今年は北海道の大地で行われました。

北海道は，近代日本のフロンティアでした。人々は厳しい自然と闘いながら人跡未踏の大地を切り開き，近代都市をつくりましたが，それは欧米の開発思想の導入のモデルだったといえます。その歴史は，おおらかさとお互いの助け合い，人間愛の強さなども育み，今なお，創性的な光を放っています。しかし，光もあれば影もあり，欧米の近代化思想は，ともすれば自然との共生を忘れた開発手法に陥ることもありましたし，経済的合理性の追求は，広大な大地に均質化した開発の跡を残し，先住の人々の古き良き暮らしの知恵を忘れ去った部分があるようにも見えます。こういった北海道の未来に，どのようなシナリオが待っているのか，全国の仲間が集って話し合いました。

この会議の記録集は，現在，日本上流文化圏研究所で編集中です。ご期待ください。

資料　「上流圏だより」

ニセコ会議に参加して

三井啓心

機会を得て、北海道ニセコ町で行われた会議に出席することができました。早川町奈良田で旅立ばされたこの組織ですが、年々討議の内容が濃くなっていきます。

山の中だから、海岸の村だから、と不自由さだけを嘆いて暮らすよりは、その意識に浴することを楽んで、お互いの知恵を出し合い、逆にそれを生かすというのが、この会議のねらいです。

会議といっても、机を囲んで講師の話を聞くという形ではなく、今回の会場は、新しい村づくりの先駆者、有島武郎記念館の庭でバネラーを囲んだり、スキー場の斜面を利用するなど、地元主催が工夫を凝らしたものでした。

話し合いの中で印象に残ったのは、島根の女性が石見銀山というマイナスイメージをさかてにとって、さまざまな商品造りを手がけ、成功した例や、四国の海岸で、砂浜を使って美術館を作ろうとする企画など、通常思いつかないアイデアに富んだ実践活動を聞くことができました。

いずれも逆境に負けない心意気が見られます。こうしたことは、必ずしも大掛かりな事でなくても、例えば早川町でも有志の方々が手がけ、本年初出荷ができた山ぶどうのワインづくりや、方向は異なりますが、隣小学校の学校開放、空間を利用した版画展の開催など、生産活動や文化活動に発想を変えてみることが、発展につながるような気がします。

極端な言い方をすれば、日本の国土の７割は過疎につながり、３割は過密だと聞いています。

この過疎のなかで、不満や批判だけでの暮らしもつまりません。

上流文化圏研究所も今後さらに、実になる企画が考えられています。情報を通して関心をもっていただければ幸いです。

ニセコの宿の庭へ、キタキツネが数ひき現れて、少し遊んで姿を消しました。余裕のないスケジュールでしたから、この姿に慰められました。

（日本上流文化圏研究所副理事長）

上流圏だより

1999/4/30
No.6
発行元：日本上流文化圏研究所　〒409-2727 山梨県南巨摩郡早川町[illegible]30　tel/fax 0556-45-2160
E-mail IORYU@t3w.fthayakawa.yamanashi.jp　URL http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/IORYU/iory[illegible].html

研究所が変わりました。

研究所の立ち上げ当初からこれまで研究所の運営を支えてきた小俣佳子研究員が、3月いっぱいで退職しました。今年度は新しく2人の研究員を迎え入れ、役場企画振興課の2名と計4名で研究所を運営していきます。また役場との話し合いの結果、今後、研究所は独立を視野に入れて活動を進めていくことになりました。ちなみに退職した小俣研究員は早川町でそば屋を開店するための準備中です。がんばってください！

今年度のメンバーです！よろしくお願いします。

大倉はるみ［おおくら はるみ］

4月から、研究員の1人として研究所に勤めています。研究所の日ざすところは、早川町の活性化のために町民サイドで事業を企画することと、早川町と同じような山村地域の活性化のために協力することだと捉えています。

私は読書活動や図書館活動に長く関わってきたので、研究所の活動にも、そのことが活かせていければと思っています。どうぞ、研究所のある薬袋の交流促進センターに気軽にお出かけください。

［すずき ひろき］鈴木宏記

役場企画振興課の鈴木です。日本上流文化圏研究所の担当として、薬袋の交流促進センターに勤めるようになって、3回目の春を迎えました。

まだまだ町民の皆様にはなじみの薄い（御存じない？）研究所ですが、地域に根差した研究所を目指し、町民の皆様と研究所のパイプ役となれるよう頑張ります。

石川宜裕［いしかわ よしひろ］

今年から研究所の学生研究員になりました。早稲田大学でまちづくりを学んでいます。早川での研究テーマは『子ども』です。将来の主人公である子どもたちが、色々な経験を通して地域との関わりを考え、愛着を深め、誇りをもってくれればと考えています。

これからは研究テーマ以外でも、色々と早川町と関わっていきたいと考えています。見かけたらぜひ声を掛けてください。

［ふかさわ まさはる］深沢正晴

企画振興課で研究所と関わって2年目になります。趣味は写真で、特に南アルプス岳の自然にこだわっています。私は常々、自然に対して畏敬の念をもって生きていたいと思っています。自然を保護してやるというおごりを捨て、私たちは自然に護られ生かされているのだという感謝の気持ちをいつも忘れないようにしたいと思っています。自然を記録することも、研究所の活動に役立つものだと自負しています。自然を好きな方は声を掛けてください。

鞍打 大輔［くらうち だいすけ］

今年の3月に早稲田大学の大学院（都市計画）を卒業し、研究員となりました。実は在学中から論文を書くために、早川町と研究所には大変お世話になってきました。大学を無事卒業できたのも、早川町の皆さんのおかげです。早川町の地域づくりに少しでも貢献できるよう、今まで以上に頑張りますので、よろしくお願いします。

［ただ しんじ］多田慎二

早稲田大学建築学科4年の多田慎二です。私は、ここ早川で風土や伝統などから生まれる『かたち』というものについて研究したいと思っています。早川には、すばらしい自然と伝統があります。私もその中で、いろいろな人と交流しながら、西洋文化の流入により、失われていった日本古来のかたちの必要性をもう一度考えてみて、そこから生まれる新しいかたちを見つけることができたらと思っています。

早川インターネット同好会、メンバー募集中！

昨年2月に結成された早川町インターネット同好会（ネット同好会）。下は中学生から上は？才（秘密です）を超えるお年寄りまで計34名が、町のインターネットを利用して、世界中に情報交流の輪を広げています。また月に1度は講習会を開催し、パソコンの扱い方からホームページの制作方法まで、みんなで勉強しています。

さて、ネット同好会への入会条件は「早川町在住、あるいは在勤の方」です。その条件さえ満たしていただければ入会金2000円、またインターネットに接続される方はさらに回線料年間6000円という破格にて、インターネットを始められます。

みなさんもネット同好会に入会して、世界との交信の輪を広げてはいかがですか？入会御希望の方や詳細を知りたい方は研究所までご連絡ください。

早川ウインドアンサンブル、応援よろしく！

早川中学校3年　望月陽子

早川ウインドアンサンブルは、平成9年の春、早川南小学校のOBバンドとして設立されました。

毎月2回、南小の泉ホールをお借りして、楽しく楽器を演奏しています。そしていろいろな方々の暖かいご支援のおかげで、成人式、山菜まつり、千灯祭、炎の祭典などに出演させて頂くことができました。また12月には南小の泉ホールにて、クリスマスコンサートを開催することができました。

今後とも演奏活動を通して、皆さんに楽しんでいただける活動をしていきたいと思っていますので、応援よろしくお願いいたします。

"子どもたちに本物の芸術を"
早川南小学校でスクールギャラリー開催！

「子どもたちに本物の芸術を」という主旨から始まった早川南小のスクールギャラリーは、好評のうちに3回の開催が終了しました。実は研究所が紹介した芸術家の方もいらっしゃったんですよ。ということでこれまでの開催を振り返ってみました。

今号の目次

P1	・早川南小学校にてスクールギャラリー開催
P2	・毎年恒例！遊び隊会、山菜まつりに出店
	・上流人リレー　その1
P3	・2000人のホームページが始まっています
P4	・研究所が変わりました。新体制報告
	・早川町ネット同好会、メンバー募集中
	・早川ウインドアンサンブル、応援よろしく
P5～8	・地元研究部にみんな集まれ。メンバー大募集

■2回目　大野 隆司さんの版画展（平成10年11月5日～12月8日）

大野さんの作品は、ねこをテーマにしたものが多く、子どもたちにもわかりやすく好評でした。子どもたちに人気のあった作品は"ねこぐも"。おとうさんが家族を両腕にしっかりと抱え、守っている版画です。なお、大野さんの子どもたちへの授業は、NHKテレビで中継されました。その後、大野さんは全作品を早川町に寄贈してくださり、その1部は交流促進センターに展示してあります。

▲大野隆司さんに版画を教わる子どもたち（11月11日）

■2回目　水野 卓史さんのイラスト作品展（平成11年2月15日～2月26日）

資生堂の化粧品のデザインを一手に引き受けて活躍してきた水野さんの作品10点を校舎内に展示しました。

水野さんの作品は細い線によって描かれる線画が中心。5、6年生の子どもたちに簡単に描けるデザイン画を指導してくださいました。なお、早川町が発売しているナチュラルミネラルウォーター「白鳳の水」や山ぶどうワイン「恋紫」のラベルも、水野さんのデザインです。

■3回目　米山 久志・のぶ子夫妻の陶芸、染色展（平成11年3月9日～4月23日）

地元両畑で岳麓陶をもって活躍していらっしゃる米山夫妻の作品を展示しました。米山さんは、実際に作品に触ってみなければ本当の良さはわからないとおっしゃって、子ども達に自由に作品に触れさせて下さいました。

お2人とも普段の授業でも5、6年生に陶芸を教えてくださったり、クラブ活動で草木染めを教えてくださったりしています。

早川の遊びだよ 遊んでいかんけ!!

遊び部会、毎年恒例!! 山菜まつりに出店!!

遊び部会が、早川町の一大イベント「山菜まつり」に出店するようになってはや3年。この企画には、早川町の豊かな自然環境の中で行われてきた「**昔の遊びを子どもたちに伝えたい**」という願いが込められています。これまで地域のおじいちゃん、おばあちゃんの子どもの頃の遊び道具であった**竹馬　板馬　竹鉄砲　竹とんぼ　飛ばない竹とんぼ　杉鉄砲　お手玉　ぴゅんぴゅんごま　ずんぼごま　輪ころがし　水笛　うぐいす笛**などを体験コーナーというかたちで出店してきました。このコーナーは、子どもたちばかりでなく大人達にも人気があり、毎年子ども連れで立ち寄って、子どもに遊びかたを伝授するおとうさんもいらっしゃいます。

▼これまでの出店の様子

これらの遊び道具は、みんな地域のおじいちゃん、おばあちゃんたちの手づくりです。まつりが近づくと、おじいちゃん、おばあちゃんが夜な夜な集まって、子どもの頃を思い出しながら遊び道具を作ってくれます。

今年は、これまで出してきた手づくりの遊び道具に加えてヨーヨーを置くことになっています。山菜まつりへお越しの際は、ぜひお立ち寄りください。

上流人リレー　その1

私の生き方

早川町京ケ島　京島 豊子

白風渓谷に山吹の花が咲きみだれ、野山も日一日と色鮮やかになってまいりました。

山菜祭りを目前にして町内全体が活気づいてまいりました。このころになると、町内の農業をしている家庭では、蒔き物や稲の苗間の支度、田おこしなど忙しくなってまいります。我が家でも、今日は日曜日、私は、田おこしをしました。久し振りに心地よい汗をながしました。夕方、近くの畑からやわらかそうなふきを採りました。その近くで、みょうがだけがニョキニョキと顔を出していました。さっそく、夜、主人の酒のつまみです。家のすぐ裏にも、これからは、なす、トマト、ピーマン、なんばん、きゅうり、モロッコ豆、オクラと七色も十色ものようにいろいろ作付けます。いっぱい作って親戚、知人、友人にせっせと宅急便を出すのがとっても楽しみです。我が家は今、主人と2人暮しです。3人の子どもたちは、成人して家を離れて生活しています。主人は、土建会社へ勤務。私は、社会福祉協議会へホームヘルパーとして勤務しています。ホームヘルパーは、51才の時、主人の親を看取った後、早川社協に就職、資格取得、52才で運転免許取得、57才で介護福祉士資格を取得できました。この資格は、3年がかりとなりました。1つのことを覚えるのにもなかなか大変。あれやこれや頭を悩ますことも多かったですが、人生の様々な苦しみに比べたら何と楽しい苦しみでしょう。この年令で学べることの幸せをしみじみ味わいました。そして、ある識者の言った「1つのことを志ざしたら10年がんばってごらん。きっと叶うよ」といったありがたい教訓を胸に秘め、家族、友人、お年寄りの方々の大きな愛に支えられ、合格証書をいただくことができました。このありがたい気持ちを忘れず、社会へ役立つ人材へ成長してまいりたいと思います。私は、いつも年令はあまり気にせずこれから始まるとの思いで事にあたります。これからも、「桜桃桃季で自分らしく」毎日を丁寧に生きてゆきたいと思います。そして、最終章を迎えた時、自分と関わった人々に「ありがとう」って言えたら最高です。

2000人のホームページ が始まっています！

2000人のホームページとは、早川町居住2000人、1人1人の山村で培われた生活の知恵や様々な技術を掘り起こし紹介するとともに、山村で生きる町民の皆様の様々な思いを早川町から全国に発信していこうというものです。これまで研究所と早稲田大学後藤研究室で都市計画を学ぶ学生数名が、集落を母体に歩きまわり1人1人からお話を伺いホームページを制作してきました。昨年11月下旬の赤沢集落からはじまり、草塩、京ヶ島集落と取材させていただき、すでに全国に向かって発信しております。赤沢、草塩、京ヶ島、各集落の皆様、ご協力大変ありがとうございました。皆様のご協力のおかげで取材活動、そしてホームページ制作も、楽しく進めることができました。

■たくさんの人が見てくださってます。

このホームページを開設して4ヶ月が過ぎようとしていますが、これまでに全国各地から計600回程のアクセスを数えています。これはいくつもある自治体が作っているホームページの中でも、たくさんの方々に見られているページだといえると思います。さらに1月27日には朝日新聞の県内のホームページを紹介するコーナーに掲載され、さらに注目を集めています。インターネットを見ることのできる方は、ぜひ一度ご覧になってください。

▼こんなふうに紹介しています。

▲1月27日の朝日新聞です。

■さて話は今年度に移りますが…

今年度も早稲田大学後藤研究室の協力のもと、年4回程度の取材を予定しております。お邪魔させていただく集落は今のところまだ決まってはいませんが、皆さんの集落を取材させていただくことになりましたら、その際はご協力よろしくお願いいたします。

また「わたしは全国にこう訴えたいんだ！」という方や、「うちの近くに、こんなに面白い人がいるよ。取材してみれば？」という方がありましたら、研究所にご一報ください。早速取材に伺わせていただきます。ということで、まだ始まったばかりの2000人のホームページですが、地道な取材活動を続け、できるだけ早い完成を目指してがんばりますので応援よろしくお願いいたします。

ビュースポット探索班

■リーダー　皆で決めます■

この班は文字どおり、早川の良い眺めを探そうという班です。眺めといっても、人それぞれに忘れられない眺めというものがあると思います。山の上から見た風景、集落から見た風景、街道沿いから見た風景、といった眺める場所、また眺める対象も南アルプスの山々を、集落の風景を、可憐な草花や精悍な木々を、また日の出、日の入りの風景など。考え出すと切りがありません。またその眺めを写真に撮ったり、スケッチしたり、脳裏に焼きつけたりと、人それぞれに楽しみ方も違うでしょう。

このように眺めを切り口にして地域を掘り下げていくと、よりいっそう早川の素晴らしさが見えてくるのではないでしょうか。みんなで楽しみながら地域を歩き回り、ふるさとの眺めを再発見しましょう！

参加ご希望の方は、
5月20日午後7時ジャストに
薬袋の交流促進センターに集合
して下さい。そのときにみなさんが既にご存じの素晴らしい眺めの情報をご持参ください。写真でもスケッチでも、皆さんの頭の中の記憶でも、なんでも結構です。誰かに聞いた話でも構いません。大きな地図を用意しておきますので、その地図にみなさんの持ち寄った情報をまとめましょう。また、その時に今後の方針も話し合い決めていきたいと思います。

遊びの歳時記づくり班

■リーダー　大倉はるみ■

草や木などを使った遊び（山遊び）を楽しむ機会は、近年、都市のこどもたちの間でも減ってきているのが現状でしょう。しかし、山遊びは子どもたちが自然とのふれあいを通して、さまざまなことを遊びとる機会として評価できるものであり、次代へ継承しなければならない文化であると考えられます。

そこで、その遊びを子どもたちにも親しみやすい形に整理し、子どもたちが山遊びの楽しさを知る「きっかけ」づくりをしようと、3年前に遊び部会が発足しました。これまでに草木を使った遊びを収集し、山菜まつりやそばまつりで体験コーナーを開催してきました。そして、遊びの収集に一段落ついた今年度から、歳時記というかたちにまとめていこうということになりました。

平成12年度の終わりまでの完成を目指して、今年度はまず、新たにメンバーを募集し、これまで収集した遊びのデータを言葉や絵に してまとめていきます。早川町の昔の遊びに関心のある方、絵を描くことが好きな方、いっしょに歳時記をつくりませんか。

今までにこんな遊びが集まりました

■木を使った遊び
卵の花笛　杉玉鉄砲　桑の枝を使った刀　うぐいす笛　茶　木の葉のコップ　笑鉄砲　どんぐりごま　ぜんぼごま　パチンコ　スキー　首かざり　木馬　おびなさま

■竹を使った遊び
竹とんぼ　笹舟　竹馬　とばない竹とんぼ　水笛　笹菓子　ぶんぶんごま　竹の輪まわし　竹飛行機　弓　竹鉄砲

■草を使った遊び
カヤの実遊び　ひっぱりっこ　風車（つばきの実）　草かご

■花を使って
花びらの首かざり

参加ご希望の方は
研究所までご連絡下さい。
電話番号 0556-45-2160

養蚕資料保存活用班

■リーダー　小俣佳子■

五圃地区で取り組んでいる養蚕資料の保存活動を手助けし、かつては早川町の大切な生業だった養蚕について、民俗的な記録を残そうという研究班です。

五圃地区は、町の中では遅くまで養蚕を熱心にやっていた地区です。養蚕をやりやすいように造られた民家が今もたくさん残っています。しかし、使われなくなった道具はどんどん壊れて処分されていくので、地域の皆さんと教育委員会などが協力し、数年前から保存を始めました。機織機の修復なども少しずつやっています。そして今年度は、メンバーの有志がもう1度蚕を飼います。蚕の成長に伴ってどんな仕事をどんなやり方で行っていたのか再現してみる事になりました。これによって映像的な資料も充実し、いろいろな事が確認できることでしょう。そこで、この活動をサポートする研究班を結成する事になりました。

養蚕の知識は無くても構いません。このまたとないチャンスを一緒に体験したい方、イラストや写真が趣味で記録活動に協力できる方、衣服や織物などに興味がある方など、いろいろな人が参加してくれると助かります。久しぶりに早川で成長する「おぼこさん」をみんなで見守ってみませんか。

参加ご希望の方は、研究所の方へご一報ください。
もちろん老若男女問いません。

参加ご希望の方は
研究所までご連絡下さい。
電話番号 0556-45-2160

昨年11月に行った町民塾
んのご意見を伺ったところ、
を作って研究を進めていこう
今回は町民塾で出された研究テーマの中から、
募集します。みなさん、興味のある研究にはぜ

の際に、参加者の皆さ
来年はいくつかの研究班
ということになりました。
実現にこぎつけたテーマを紹介し参加者を
ひ参加して、研究を盛り上げましょう！

みんな集まれし!!

地元研究班 メンバー大募集!!

ご質問、その他はお気軽に研究所まで！

日本上流文化圏研究所
〒409-2727 山梨県南巨摩郡早川町薬袋430
電話番号＆ファクシミリ 0556-45-2160
JORYU@town.hayakawa.yamanashi.jp

交流促進センターに図書室があるのをご存知ですか？

実は、望月利和さんと小俣佳子さんからお借りした本や、全国各地の上流圏地域の市町村情報、また早川町をテーマにした書籍、資料などが、合わせて2，000冊以上2階の資料室にあります。司書の河上琅代さんにご協力いただき、ずいぶんと整理は進んでいるのですが、まだまだ一般に貸し出しできるような状況ではありません。今後この図書室は一般の貸し出しはもとより、町内の他の図書室とネットワークを結んだり、自宅からインターネットで蔵書検索や貸し出し状況のチェックなどが可能になるような仕組みをつくりたと考えています。

そのためには皆さんのおかがぜひ必要なのです。ご協力をお願いいたします。

今のところ考えている活動内容

●まず5月10日頃から7月31日までを目標に、蔵書の分類、整理をします。

●そして8月からは、蔵書のタイトル著者などの情報をコンピューターの中に打ち込んで、貸し出しシステムと蔵書検索のシステムづくりをしたいと思います。

特ににコンピューターの打ち込み作業は、大勢の方の協力が必要です。みなさん、ぜひご協力ください。参加方法は右をご覧ください－

参加方法、連絡先

参加していただける方は、研究所の方にご一報ください。電話番号は0556-45-2160です。まずは5月10日までにご連絡下さい。また、協力していただける方は、いつからでも大歓迎です。気が向いたときにご連絡下さい。

■リーダー　望月利和　大倉はるみ■

上流文化圏ライブラリー整備班

水なくして上流文化圏の未来はありませんぜ！ということで、いよいよ早川町の水環境を考える研究班が発足します。水に関する問題意識を温めてこられた町民の皆さま、オ・マ・タ・セいたしました。

水の事を語り始めると早川の人々にはなかなかに熱いものがありますね。「昔は川で泳いだなあ」、「魚よ戻ってこい」、「雨畑湖を浄化したい」、「登山客のトイレ問題を真剣に考えないと」、などなど、皆さんが日頃から気にかけている事は盛りだくさんの様です。そこで、この研究班では、メンバー皆で町全体の水環境を基幹調査するとともに、各人がやりたい「マイテーマ」とかグループや実践単位で取り組みたい「おらんとうのテーマ」も大事にしていきます。

東京のネットワーク研究員の小島裕一さんいわく「早川町の36集落は、それぞれに水源を持っていて、簡易水道によって裏山などからわずかな経路で新鮮な山水が飲めます。東京では100キロも200キロも遠くから汚れた水を引き、お金をかけて浄化した水道水を飲んでいるんですよ。やっぱり水こそ早川のお宝でしょう」。町外の仲間からもいろいろヒントがもらえそうです。みなさんが行ってみたい「水の魅力的な町」などを視察したり、流域交流などもやってみましょうか。

とにかく水が気になっている方、千客万来！

水源や水場について詳しい方、地形に詳しい方、理科の先生、社会科の先生、生活科の先生、鉄砲撃ちのみなさん、山歩きなら朝飯前という方、環境問題を掘り下げたい方、どうぞ仲間になってください。

参加ご希望の方は、まずは研究所までご連絡下さい。そして第1回目の会合は5月29日頃を予定しております。研究所にご連絡いただいた方には、追って詳細をご連絡いたします。ふるってご参加下さい。

■リーダー　皆で決めます■

水環境調査班

退職の挨拶　小俣佳子

町民の皆さま、そして研究所を応援し励ましてくださった全国の皆さま、大変お世話になりました。最近は「上流研の小俣さん」と気軽に声を掛けていただけるようになり、3年の歳月の重さと、皆さまと試行錯誤してきた1つ1つの積み重ねがジンときます。研究所を退職する選択をいたしましたが、私にとっては「卒業」という感触です。今後は、研究所で考えてきた事を、1人の早川町民として自分の暮らしの中で形にしていきたいと思います。これまで同様、お力添えください。そして、多くの皆さまが今まで以上に、研究所に親しみと関心をもって大いに活用してくださいますよう、お願い申し上げます。

編集後記

今年の4月で研究所がオープンして4年目を迎えました。これまでの3年間、研究所なりに努力はしてきたつもりですが、まだまだ町民の皆様にご理解いただいていないというのが現況だと認識しています。しかし、今年の早川町のカレンダー（今年のカレンダーは研究所で制作させていただきました）に選んだ題材からも分かりますように、研究所は常に早川町の歴史と文化を大切にし、それらを基盤にした早川町の活性化と将来像を創造することを目標にしています。これからも、研究所が町民の皆様のものである様に努力してまいります。また活動を進めていく上で皆様にご協力お願いすることが多々あると思いますが、ぜひ力を合わせすばらしい早川町を創っていこうではありませんか。今後とも研究所に御注目下さい。

上流圏だより

1999.8.25
No.7

発行元　日本上流文化圏研究所　〒409-2727 山梨県南巨摩郡早川町茅袋430　TEL&FAX 0556-45-2160
電子メール JORYU@town.hayakawa.yamanashi.jp　ホームページ http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/JORYU/joryu1.html

茅袋で10年ぶりに、養蚕が行われました。
おぼこさんが、やってきた！

五圏地区開発協議会と教育委員会、そして上流文化圏研究所が協力し進めている、五圏地区の養蚕資料の保存活用計画。その一環として、茅袋にお住まいの水野定夫さんの発案で、6月下旬から7月下旬にかけて養蚕の再現が行われました。今回はその再現の様子を報告します。

今回の養蚕再現はお蚕さんが幼いときは増穂町で、ある程度大きくなったら早川町に引っ越しをして行われました。それは生まれたてのお蚕さんは、病気に大変弱く消毒や温度管理の行き届いた場所でないと無事に育てることが難しいからです。そこで増穂町で今でも養蚕を続けていらっしゃる方にご協力頂いて、最初の2週間はそこで育てることになりました。少し前まで養蚕の盛んだった早川町でも、すべての行程を再現することは難しくなってしまったのです。それはお蚕さんの餌になる桑の葉の調達も同じで、町内では大量に手に入らないため中富町に2～3日に1回のペースで取りに行かなければなりませんでした。

▲蔟の「ケイズとり」をしている様子

最初の2週間が過ぎた7月5日、茅袋にお蚕さんがやって来ました。昔、蠶の集荷場だったところで育てることになりました。それからは、茅袋のかつての養蚕名人たちの手によって、成長の段階にあわせた給餌や世話が行われ大切に大切に育てられました。その後、お蚕さんは7月15日過ぎに蠶になり始め、そしてとうとう7月28日、1万個近くの蠶が袋詰めにされました。

あっという間の1ヶ月でしたが、この間に再現に携わるかつての養蚕名人の姿を見て、様々なことを考えさせられました。おそらく昔は養蚕をやっていたことによって、苦労や残酷が数多かったと思います。どちらかといえば当時は養蚕をやめたい気持ちの方が大きかったかもしれません。しかし今回の再現では久しぶりのお蚕さんを懐かしむようなそして愛おしむような気持ちで作業にあたっていたように感じました。そこには単純に好きとか嫌いとかで割り切れないかつての生活への思いや、養蚕に携わってきたものとしての誇りを強く感じずにはいられませんでした。

現代の我々の豊かな生活をもたらした高度経済成長。その足掛かりとなった近代化を支えた養蚕業と、それに携わった人々の様々な思いが早川町のあちこちにあり、それがなくては我々の生活もあり得ないという事実を忘れてはいけないと思いました。　（文責　鞍打）

◆もくじ◆

1ページ　・おぼこさんが、やってきた！
2ページ　・遊び部会大活躍！ 田部の自然体験クラブ支援
・新しい研究班、活動報告
「ビュースポット探索班」と「水環境調査班」
3ページ　・上流人リレー　その2
4ページ　・第3回上流文化圏会議の報告
・その他の活動、進捗状況
・編集後記

静岡県本川根町にて「1000年の学校 in 南アルプス」を開催

第3回上流文化圏会議の報告

7月17日から3日間、早川町と南アルプスを挟んでちょうど反対側の静岡県本川根町にて、第3回上流文化圏会議を開催しました。これまで宮崎県五ヶ瀬町、北海道二セコ町と、早川町が掲げる上流文化圏構想に共感して下さった地域で開催してきたこの会議。今年は本川根町と本川根町観光協会の協力により開催にこぎつけました。

今回の「1000年の学校」というテーマは「21世紀を考えるとき、地域と過去から学ぶことは沢山ある。過去1000年の知恵を、これからの1000年に繋げていこう。」という考えからきまれたものでした。

期間中に「仙人の秘密」、「仙人になる」、「仙人の愛」という3つのセッションを行いました。ここでいう「仙人」とは日曜で雲に乗ってというイメージではなく、山村で生活してきた祖先の様々な努力に思いを馳せることのできる人のことです。

▲会議の風景（会場演出は鞍打が手掛けました）

まず「仙人の秘密」では、宮崎県椎葉村で今なお焼畑を続ける椎葉クニ子さんを中心に、彼女たち仙人が生活のよりどころとしている言い伝えを教えてくれました。そして、その中に隠されている様々な知恵や技術の一端も聞くことができました。

「仙人になる」では、「水」「火」「衣」「食」「住」といったテーマで、地元の小学生約70名と仙人が一緒に過去の知恵や技術を体験するワークショップを開催しました。

最後に「仙人の愛」では、上流文化圏研究所の下河辺淳理事長、群馬県上野村に住む哲学者の内山節（たかし）さん、前宮城県知事の本間俊太郎さん、建築家の内田文雄さん、またこの会議の実行委員長でもある地元の望月孝之さんといった多彩な顔ぶれによって、「これまでの1000年とこれからの1000年に思いを馳せ、今私たちが何をすればよいのか考えよう」というテーマのもと熱い議論が行われました。

今回の会議で最も印象に残ったお話は、内山節さんの「**未来は何のヒントも与えてくれません。未来は存在しないのです。未来から今何をすればいいかを問うのは人間には無理です。ヒントは過去にしかありません。過去は現実にあったことだから、そこからいい物や、使い直せることはないかを探る。過去に戻ることはできないから、過去から見つけ出して組み立てなおすことしかできないのです。**」というものでした。これはまさに上流文化圏構想の哲学ではないでしょうか。このお話を聞いて、私達も上流文化圏研究所の役割と進むべき方向を再確認することができました。

この会議の詳しい内容は、記録集として発刊する予定です。しばらく時間がかかりますが、完成次第お知らせいたします。また次回、第4回の会議は、来年5月に高知県大方町にて開催される予定です。そちらのほうもお楽しみに。（文責　鞍打）

その他の活動、進捗状況

■上流文化圏ライブラリーの整備

予定より、整備が大幅に遅れています。今までに、3,888冊の本を大まかに分類しましたが、本棚が足りないので作業が中断しています。町民のみなさんに早く貸し出しできるよう、本棚に積まなくても済む方法を考えているところです。よい知恵がありましたら、どうか教えて下さい！

■平成12年度カレンダーの製作

今年の早川町カレンダー「はやかわの食べ物と暮らし」に引き続き、来年のカレンダーも研究所で制作中です。テーマは「子どもたちに伝えたい遊び」。お楽しみに！

ちなみに昨年のカレンダーは、山梨県広報コンクールカレンダーの部で奨励賞に選ばれました。

編集後記

皆さん、家庭で出るゴミをどうやって処分していますか？早朝と夕方には早川町のあちこちで、ゴミが燃され煙が立ち上っています。自分の出したゴミを自分で処理するという姿勢は大変素晴らしいことではありますが、なんでもかんでも燃してしまうのはいかがなものでしょう。

燃してはいけないゴミもあるということは、こちらが言うまでもなく皆さん御存じのことと思いますが、プラスチックを始めとする科学物質を、たき火や焼却炉など低い温度で燃すと有毒な煙が発生します。最近では新聞のインクや木材に塗られた塗料からも有毒ガスが発生することが分かっているので、紙や木だからといって安心して燃すことはできません。この煙を人間が吸収し体内に蓄積すると、ガンになったり奇形児が生まれたりという危険性が高まると言われています。

すでに全国の小中学校では焼却炉の使用が禁止されました。研究所のある交流促進センターにも焼却炉はありますが、今後は使用せずにゴミ回収の日に出すことにしました。町民一人一人がゴミを燃さないようにすることは、簡単なようでとっても むずかしいことです。しかし一人一人の心がけからしか変わっていかないのも事実です。

美しい早川町の自然を形だけのものにしないためにも、みんなでまるかって行動していきましょう。　（文責　大倉）

遊び部会大活躍!!

遊び部会の出前人，田富町自然体験クラブを支援!!

7月11日の日曜日，田富町の自然体験クラブの中学1年生180人，引率教諭，そして父母が緑の一段と濃くなった早川町の野鳥公園にやってきました。"子どもたちに自然とふれあう機会を与えたい"というねらいで発足した自然体験クラブの第1回目の活動です。早川町の子どもたちと交流しながら昔の遊びを体験したいということで，遊び部会の出前人13人も支援することになったのです。

午前中は，昼食を食べるためのあぎやお椀を竹でつくりました。はじめは小刀の使い方が危なげだった子どもたちも，出前人たちの指導のもとだんだん上手になってきました。

午後からは，いくつかのグループに分かれて，竹とんぼ，飛ばない竹とんぼ，弓矢，鉄砲，うぐいす笛の作り方を教えたり，山道を散歩しながら草花遊びを教えたりしました。子どもたちと出前人たちは汗びっしょりになりながらも，楽しんでいました。

遊び部会にとって，町外の大勢の人たちに教えるのは初めてのことだったので，とても良い経験ができたと話していました。

今後も，機会があったらどこへでも出前にいきます。また遊び部会でいっしょに遊びをひげていきたい方，どうぞ仲間にお入りください。参加ご希望の方は，研究所までご連絡ください。（文責　大倉）

▲草花遊びを教える遊びの出前人

上流人リレー　その2

「早川南小学校　一学期の主な実践」

早川南小学校校長　望月和男

(1)環境教育　-CDつくって地球守ろう-

一人のミュージシャンの呼びかけによって，地球環境と人権を守ろうと立ち上がったミュージシャンたちと本校の児童が一緒になってCDをつくりました。5月から練習を開始し，6月1日に長ホールで録音を終え，7月7日に完成しました。

ボランティアとして，この活動に参加し，全員の写真と名前の載っている完成したCDを聞いてみんなが感激しました。このCDは，全国の書店で7月27日から販売され，収益金はボランティア団体に還元されます。

(2)情報教育

-自分たちの手で個性あるホームページづくりに挑戦-

平成10年度から3か年にわたり，「へき地学校高度情報通信環境（マルチメディア）活用方法研究開発事業」実践校の指定を受け，子どもたちの興味・関心・意欲からわき起こる"発想"を中心に据え，来るべき高度情報通信社会に対応する児童の育成と主体的に取り組む児童像を追求して研究を進めています。

本年度は，テレビ会議システムを活用した授業実践と各学年「自分たちの手で個性あるホームページをつくろう。」と，8月の完成を目指して頑張っています。本校のホームページへのアクセスは7855件に達し，地域，年齢，性別，国籍などを越え多種多様な人々から，電子メールを通して反応が返ってきます。このようなコンピューターネットワークによる情報や意見の交流が，多様な人々の多様な考えに触れる機会となり，自分の考えをより客観化し深めるためのひとつの手段となっています。このような学習の機会が増えることで，へき地の課題のひとつである「少人数による緊密，知識や技能の単一化」の解消が可能になると思われます。またホームページの検索や電子メール，テレビ会議システムを使って，授業のための資料や材料を入手したり，共同研究を行ったりすることで，教師の教材研究のための情報入手方法や情報の量や選択の幅が大きく変化しています。

これからの高度情報化社会をたくましく生き抜くためには，膨大な情報の中から必要な情報を見極め，その情報を入手するための手段と自らの力でその情報を獲得していくことが大切になります。これは児童だけに求められている能力ではなく，教師自らに今求められている能力でもあります。今，教育界においてもパソコンやコンピューターネットワークの活用など教育の質的な改善が急務となっています。コンピューターがもたらす効果や価値について十分に理解し，教育活動の中で有効かつ快適にコンピューターを活用できる環境の整備が大切であると考えています。

新しい地元研究班が南アルプスの尾根と谷を歩いてきました。

ビュースポット探索班

ビュースポット探索班では現在，早川町の眺め情報の収集と，その情報をもとに現地を訪れ情報を確認する作業を行っています。

■5/20　第1回会合

この日は，ビュースポット探索班の立ち上げの日で6人の方がメンバーになってくれました。まずは早川町の地図の上に，メンバーがお気に入りの眺めの情報を書き込んでいきました。山からの眺め，集落の眺めなど，たくさんの情報が集まりました。この地図は交流センター1階のロビーに貼り出して，訪れた人も自由に書き込むことができるようになっています。

また最後に，今後の方針についても話し合い，「とにかく現場に行って，ひとつひとつの情報を確認しよう。」「よい眺めだけではなく，ゴミが捨ててある場所など，悪い眺めをどうしたら良いかも考えたい。」といった前向きな意見が出されました。

■7/1　御殿山，富士見山見学

この日は十谷峠から御殿山，富士見山を通って五箇峠に降りるというコースで，現地調査を行いました。このコースは十谷峠から富士見山までは起伏も少なく楽に歩くことができました。道中は木々に覆われていて遠くの山々を見ることはできませんでしたが，御殿山と富士見山からは雲の切れ目に美しい富士山が見えました。

富士見山から五箇峠までの道は，今はほとんど使われていないようで，どこを歩けば良いのかよく分かりませんでした。しかしそこはメンバーの長年の経験と地図を頼りになんとか五箇峠にたどり着くことができました。

今後もいくつか現地調査を計画しています。興味のある方は，研究所まで御連絡下さい。（文責　鍬打）

▲富士見山調査の様子

水環境調査班

水調査研究班では現在，集落ごとの水源を見学し実態を調べる水源探索と，早川の水環境を考えるための基礎資料集めをやっています。

■5/29　第1回水源探索の様子

去る5月29日に第1回水源探索を行いました。この日は交流促進センターでメンバーの顔合わせ会を行った後，角瀬や赤沢などいくつかの水源を訪れました。

角瀬では春木川の堰堤でせき止めた小春木川の伏流水を取水している様子を見学。赤沢では，簡易水道水源のほかに，組ごとの水源を視察しました。赤沢の暮らしの中では簡易水道は「洗い水」などに，カルキの入っていない山の湧き水は飲料水に，という利用がされていて山の水も非常に大切にされている事が実感できました。

昼食時には，汲み立ての山水でお茶やコーヒーを沸かし，飲んでみたりもしました。参加者からは，午前中の探索で感じたことや研究班に参加した動機，日ごろ地域の水環境について感じている事などが色々と語られました。例えば「早川に水量を取り戻す活動を盛り上げたいものだが，他地域に参考になる事例はあるか？」「便利に使えて人が集まれるような水場がもっとほしい」「水道にカルキを入れることには反対。本当に必要なのか？」など。今後の活動の方向性を考える上で，非常に参考になりました。

「他集落の水の実態を見るのは初めてだったが，非常に有意義だ」という声が多かった事から，今後もいくつかの集落の水源を地元の人の案内で実際に歩こうと計画しています。早川町の水環境の行く末に興味のある方，次の水源ピクニックには是非参加してみて，あなたのご意見をお聞かせください。そして，水の語れる早川町をつくりましょう。（文責　小笠）

▲水源探索後の話し合いの様子

スコットランド視察記

10月19日から11月3日にかけて、イギリスのスコットランドに行ってきました。社会的に成熟したといわれているイギリスのなかにも日本と同じように過疎化や高齢化で悩む農山漁村があり、サッチャー政権以降急速に進んだ分権化と民営化の中での条件不利地域対策の現状を視察するのが今回の目的でした。

スコットランドはイギリスの中でも北部に位置し、北海道よりもサハリンよりも北に位置します。人口は約510万人、面積は7.9平方km（北海道より少し小さめ）。都市部は全面積の約2%しかなく、ほとんどが牧草地、山林、平原という広大な自然に囲まれた地域です。そのなかで今回訪れたのはさらに条件の厳しい、スコットランド北部の山々と島々からなるハイランド地方です。

ハイランド地方は、農業、漁業、ツィード（毛織り物）産業などが主要な産業でしたが、これらによる生活はしだいに困難となり急激な人口減少が1975年まで続きました。イギリス政府は1965年に「ハイランド・アイランド開発委員会」を設立し、山と島に住む人々の経済や社会的状況の改善に取り組みはじめました。北海油田の開発、新規産業や企業育成、農業漁業従事者への資金援助、観光開発など大小様々な事業が行われ、人口減少に歯止めをかけることが出来ました。1991年にこの委員会は「ハイランド・アイランドエンタープライズ（HIE）」と名前を変え、ハイランド地方の地域経済と社会開発に携わる民間の会社として生まれ変わり活動を続けています。

今回の視察でもこのHIEを訪ね、これからの早川町や上流文化圏研究所の参考になる話をたくさん聞くことが出来ました。今回のたよりでは、その話の中からいくつかを報告します。

まずHIEの組織を説明します。HIEはハイランド地方をさらに10の地域にわけて、その地域ごとに事務所をもっています。その10の事務所は、割り当てられた地域の現状に即した事業展開をしています。HIEは最終目標を「ハイランド地方に住む人々が、自分自身や自分の住む地域に自信や可能性を感じられるようになること」としたうえで、「産業育成」、「人材育成」、「コミュニティー強化」の3つを事業の核として活動しています。「産業育成」では、既存の企業や新規起業家への経済的サポート、技術支援、また経営コンサルタントやマーケティングリサーチも行っています。「人材育成」では、職業訓練、生涯学習、育児サポートなど。「コミュニティー強化」では文化、芸術活動への支援やボランティア育成、住民主体のまちづくりをテーマにした事業が行われています。事務所には事業ごとのパンフレットが置いてあり、これを見て地域住民が様々な組織に訪れるという格好でした。

ここで感じたのはトータルがもつ強みでした。早川町でいえば、特産品開発は南アルプスふるさと活性化財団、企業への資金援助は商工会、生涯学習は教育委員会、地域文化研究は上流文化圏研究所というように細かく分かれていますが、HIEではそれをトータルに取り組んでいます。トータルに取り組むことで、それぞれの事業が同じ方向性の中で互いに影響をおよぼし相乗効果がうまれているのだと思います。早川町の場合、すべてを一つの組織でやるというわけにもいかないと思いますが、町内の様々な組織がより緊密に情報交換や意見交換をしネットワークを結ぶことで、早川町が進むべき方向性を共有しより効率的で効果的なまちづくりや公共サービスが展開できるのではないかと感じました。

もうひとつ、大変興味深い取り組みがありました。これはHIE全体で取り組んでいる事業ですが「ハイランド・アイランド大学」の設立、運営です。この大学は卒業すると学士をもらえる本当の大学なのですが、なんと核となるキャンパスがありません。ハイランド地方のあちこちにある小さな教室や地域の公共施設を借りたりして講義を行っています。講義はテレビ中継で行われたり、先生がハイランド中をまわって講義を行っています。コースは大きく5つに分かれていて、ハイランド地方の芸術・文化分野、観光ビジネス分野、情報通信分野、環境分野、健康分野など、ハイランド地方にとってどれも大切であることはもちろん今後の可能性を大いに秘めたテーマ設定になっていました。これらを都市部の大学に行くことのできないハイランド地方の若者が学び、卒業後は地域に住み続け学んだことを仕事で活かすことができるというシステムができているのです。

こう考えると、早川町にも今後の可能性を秘めたテーマがいくつも眠っていると思います。例えば、高齢者に対する医療、福祉というテーマは、今後高齢化社会が進む日本全体で考えていかなければならないテーマです。また山村にのこる伝統的な食事は、健康的であるとして日本だけではなく世界中からも注目されています。このようなことを学べる学校が早川町にあれば、進学や就職で町外に出ていかざるを得ない早川町の子供たちが町内で最新の技術を学び町内で活躍するという将来像を描いていけるのになあと思いました。

最後に根本的な日本とイギリスの見識の差を感じたことを一つだけ、実はHIEにはイギリス政府だけではなく国からも150億円という補助金が出ています。この額だけでも、非常に大きな規模で取り組んでいるんだなあということが分かりますが、しかしこれが公共施設などのハード整備にまわされソフト的な事業には補助金が出にくい日本と違い、優秀な人材と豊富な地域社会があってはじめて経済的にも豊かな地域ができるという考えのもと多種多様なソフト事業に補助金を使うことができているのです。ここが日本とイギリスの決定的な違いだと感じました。

そんな日本の中でも、我が上流文化圏研究所はHIEと比べると規模も予算も小さいながら、その活動の原点としている考えはあい通じるものがあります。頑張らなくてはと励まされた今回の視察でした。

（文責　鈴打）

編集後記　この頃うれしくなることがあります。交流促進センターへの行き帰りに役場のそばにあるごみ収集所を見ると、収集日の前日や当日、袋の数が多くなっているのに気づきます。各地の収集所でも同じようなことが見られるようになったと聞きます。町民のみなさんが意識してごみを燃してないということが伝わってきます。

地球をとりまく環境問題は、数多くあります。地球温暖化、オゾン層の破壊等々。これらは、みんなわたしたち人間がもたらしたものです。ごみ問題もそうです。前号でも書きましたが、ごみを燃すことによって出る有害物質は、生物全体に悪影響を与えます。恐いことには、私たちの孫の代まで影響を及ぼすと聞いています。

美しい地球を子どもたちに残すためにも、町民一人ひとりが行動する勇気をもって身近なことから実行していきましょう。

考えることは地球規模で、実践は足元から

（文責　大泰）

「上流圏だより」は再生紙を使用しています。

上流圏だより

1999.11.30
No.8

発行元　日本上流文化圏研究所　〒409-2727 山梨県南巨摩郡早川町茂倉430 ■TEL & FAX 0556-45-2160
■電子メール joryu@town.hayakawa.yamanashi.jp ■ホームページ http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/JORYU/joryuTJ.html

御殿山で日の出を見た!!

ピュースポット探索班

▲こんな光景が見られました

■11月7日早朝、十谷峠に集まる

11月7日午前5時、ピュースポット探索班のメンバー4人と役員集落の有志5人が十谷峠に集まりました。今日はピュースポット探索班の2回目の現地調査で、富士山の山頂から日が昇る光景を御殿山から見るのです。しかし不安材料はたくさんありました。まずコンピューターによるシミュレーションで、この日にこの光景が見られるということは予想できましたが、この予想が一日でもずれていたら太陽が昇る位置は毎日刻々と変化しているため期待していた光景が見られません。さらに前日の天気予報では「明日は雨」になっているではありませんか。行っても何も見れなかったら…と考えると不安は増すばかり。しかし起きてみると星がキラキラしていて、まずは一安心。

■御殿山の頂上で、富士山とご対面

5時過ぎから山を登りはじめましたが、道中は木々に覆われていて、また日の出前ということもあって薄暗く、富士山の様子は分からず不安は解消されません。しかし6時に山頂に到着し富士山の姿がはっきり見えたときは、なにか凄い人にでも会ったかのような気分で。ただし、富士山の向こう側には、怪しい気な黒い雲が…。

日の出予想時刻は6時40分前後。それまでの間、メンバーは急いでカメラやビデオのセッティングをし日の出に備えました。しばらくすると、富士山の稜線当たりから赤い光が輝いはじめ、次第に空が明るくなりました。富士山はうしろから照らされて黄っ黒な美しいシルエットに。空の様子は刻々と変化しどの光景も美しく、メンバーはその光景を逃すまいとシャッターを切り続けました。「絶対に美しい日の出が見られるに違いない！」と、不安が自信へと変わりました。

■日の出の時刻が近付いて…

そして、日の出の時刻が近付いてきました。

しかし、富士山の向こう側にある黒い雲はどきません！どんなに祈ってもどきません。そうしている間にも太陽はどんどん昇って、周りは明るくなるばかり。メンバーも次第に不安顔になっていきます。そしてとうとう日の出予定時刻は過ぎてしまい、期待していた光景は見ることができませんでした。「あの雲さえなかったら…」と神奈川県を恨みつつ、「自然相手のことだからそう簡単に見られるものではない」となぐさめあいました。そうこうしているうちに、雲の上に昇った太陽が富士山の真上より少し右から顔を出しました。太陽の昇る角度も考えると、絶対に富士山山頂から昇っていたはずです。自信が確信に変わった瞬間でした。

■残念無念、また来年

今回は、この日にこの光景が御殿山から見られることを確認するという目的は達成できました。しかしその光景を見て記録することはできずに終わってしまいました。しかしメンバーは前向きで「この目で見届けるまで挑戦しよう」と誓いあいました。その後、待ち寄った朝食を山頂で食べ、「また来年！」という言葉を最後にそれぞれの家路につきました。

ということで、懲りずにまた来年も御殿山に登ります。そして他の山からも見に行きます。興味のある方は御一緒にどうぞ。

（文責　鈴打）

◆もくじ◆

1ページ・ピュースポット探索班、御殿山で日の出を見た!!
2ページ・上流文化圏ライブラリーで本との出合いを
・研究員が紹介する「お勧めの本」
3ページ・上流人リレー　その3
・早川ウインドアンサンブルからのお知らせ
・その他の活動、進捗状況
4ページ・スコットランド視察記
・編集後記

「上流圏ライブラリー」で本との出会いを

▲蔵書の整理が終わったライブラリーの様子

今、茅野の交流促進センターの中にある上流圏ライブラリー（仮称）には、町内外の人から寄贈していただいたり、お貸ししていただいている本が5,193冊あります。その中には、すでに絶版となっている夏目漱石全集（1～28巻）や山梨県内の公共図書館にもないといった貴重な本もあります。また、地域おこし、まちづくりに関する本、水や環境問題に関する本、全国の市町村からもらった地域情報・観光案内なども揃っています。

10月の『広報はやかわ』でお知らせしたように、蔵書の整理も終わり、いつでも貸し出しできる状態になっています。きっと皆さんの読みたい本もあると思います。どうぞお気軽にライブラリーにおよりください。そして、本との出会いをしてください。本と出会うことは、新しいなにかとの出会いと同じことだと思います。

今、全国的に子どもの読書ばなれ、活字ばなれが危惧されていますが、各学校で取り組んでいる読書活動、読書指導がよい結果を生み、だんだん読書量が増えているようです。ちなみに、今年の5月の調査によると、1か月の読書量は、小学生7.6冊、中学生1.3冊となっています。子どもの頃本に接する機会が多く、読書の楽しさを知った子どもほど、いっときは本から離れても必ず本にかえると言われています。そんな子どもたちを育てるためにも、学校ばかりでなく、家庭における読書環境づくりが大事です。家庭の中に、10分間でもテレビをとめて、みんなで読書をする時間をつくってほしいのです。そのためのお手伝いを上流圏ライブラリーができたらうれしいと考えています。（文責　大倉）

利用方法はこちら!!

- 利用時間は午前9時から午後6時、土、日、祝日は、休みとさせていただきます。本は、1階ロビーと2階の図書資料室にあります。
- 貸し出しは、一人5冊まで。貸し出し期間は2週間です。禁帯出のシールがはってある本は貸し出すことはできません。閲覧は自由です。
- 貸し出し希望の際は、1階の事務室まで本をご持参ください。そこで、貸し出しノートに必要事項を記入していただきます。事務室不在の場合は、貸し出しできませんのでご了承下さい。
- 返却の際は、本を事務室までご持参ください。そこで、返却手続きをいたします。

研究員が紹介する「お勧めの本」

『ファーブル昆虫記　全8巻』奥本大三郎訳

「昆虫記なら若頃読んだことがあるよ」という人が何人もいると思います。1900年頃に書かれたこの本は、世界中の多くの人に読まれてきました。今回紹介する全集は、写真や挿絵が多く、漢字にはルビがついていて子どもから大人まで楽しめる本です。初めて読む人も、昔読んだことのある人も、昆虫の世界に浸ってみてはいかがでしょうか。【鈴木宏記】

『吾輩は猫である』　夏目漱石全集より

「吾輩は猫である。名前はまだ無い。」で始まる漱石の小説はあまりにも有名である。今も読まれているということを考えると根強い人気にびっくりする。およそ100年前に「未来は個性の時代だ。個性が最大の課題である」と言っていた漱石。今、その時代であることを考えると、改めて漱石のすごさに驚かされる。【大倉はるみ】

『原田泰治自薦画集』

この画集は現代人の心を癒してくれそうです。彼の描く絵は失われつつある原風景とそこに住む人々の暮らしが殆どであり、人物には目や口が描かれていません。ところが良く見ると、なぜか表情が見えてくるから不思議です。

ちゃめなタッチでありながら明るく優しさ溢れる彼の絵は、懐古のみに執着したものではなく現代社会への警鐘であり、私たちの幼い日々の原風景を後生に残すことの大切さを語りかけてくるような気がします。【深沢正晴】

『わら一本の革命』　福岡正信著

耕さず、草を取らず、農薬・肥料を使わず、人の手をできるかぎり加えず自然の営みだけを活用する「自然農法」。戦後直後にこの農法を提唱し、50年来実践し続ける福岡正信さんの本。「こんな農業があるんだ！」と驚き、「こんな生き方ができればなあ」とうらやみ。これまでの価値観がくつがえります。【桜打大輔】

上流人リレー　その3

「アルプス林業研究グループ」の活動

面畑　望月伊勢子さん

山に生きるものが植林し育林することによって森を創る。山は国土を守り大地に潤いを与えてくれます。早川は豊かな水と緑の源の地です。その山に生きる私自身の生活は豊かでなくても、自然を相手に生きていられることに最高の生き甲斐を感じております。

平成七年の二月でした。県の林務、林業改良指導員の人達と色々な話をしている中で"生涯生き甲斐のある人生!!"を送れたらどんなに楽しいかと思い、都会から来て早川の山に生きる人、物を作ることの好きな人など八名の会員で「アルプス林業研究グループ」をつくって活動を始めました。会員相互の親睦を図り、地域での林業産物等の研究改善を行いながら、その発展に貢献していくことを目的として、達成するために色々な所で進んで研修、講習を受け大勢の人達とふれあい交流を深めながら、成果の普及、啓発をしていきたいと思っております。

会員の皆さんと山に入りアケビ蔓でカゴ作りをしています。自然の蔓でつくるカゴは同じものが二つと作れないので、「世界で一つしかない私だけの作品が出来上がる」と皆で大喜びです。

また、昨年七月に森林組合から技術指導を受けまいたけを栽培しています。最初の年の作業は大変でした。完熟したホダ木を畑に伏せ込み、まいたけの採れる秋を楽しみにしていました。そうして、まるでサンゴの様な、広がった花びらの様な、すばらしいまいたけが採れました。みごとな初収穫でした。今年は倍のホダ木を伏せ込み収穫できました。そして「来夏はもっと数を増やそうよ」とグループの皆さんと話がまとまりました。

これからもっともっと栽培して"秋の早川のまいたけ"を特産にしたいと思っております。

▲まいたけを前にニッコリのメンバー

早川ウインドアンサンブル、今年もクリスマスパーティーを開催します!!

こんにちは、早川ウインドアンサンブルです。私たちは早川中1年の佐野見介君、望月あゆみさんから、中富町下田原在住、県庁職員の松下浩一さんまで、20人ほどで構成している音楽合奏団です。

私たちは、月に2回ほど早川南小泉ホールに集まって、楽しいひとときをすごしています。夏には交流促進センターでミュージックチャンプを行ったり、赤沢集落の千灯祭にも出演させていただき、音楽を通してたくさんの人々と交流することができました。さて来月、

12月25日夜7時から
早川南小学校泉ホールにて
クリスマスパーティーを開催します。

当日は、個人が練習してきた独奏の発表を行ったり、楽しいクリスマスソングを演奏したりして音楽を楽しみたいと思います。皆様お誘い合わせの上、ぜひいらしてください。クリスマスの夜、私たちと一緒に、豊かな時間をすごしましょう！

（文責　茅沢啓太郎）

―その他の活動、進捗状況―

■遊び部会、そば祭りに出展　11月14日の「紅葉とそばまつり」に研究所の「遊び部会」が今年も参加しました。15人の遊びの出前人が分担して作った手作りおもちゃを出展しました。

そばまつりに毎年来るという六郷の人は「ここへ来ると子ども時代に戻ることができる。」と言い、またある人は「今の時代は何でも手に入る。子どもたちに作らせたい。」とおっしゃっていました。来年は、子どもたちと作って遊ぶことも考えたいと思っています。

■2000年カレンダー「あそばざあ」完成　子どもたちに伝えたい遊びがあります。子どもたちに伝えたい手づくりおもちゃがあります。そんな「遊び部会」のメッセージを近一浩さんの絵にのせてカレンダーにしました。例年通り全世帯に配付されます。お楽しみに！

■水環境調査班、茂倉集落調査　9月20日に茂倉集落に伺い、茅沢厚寿区長さんに案内していただき、水源周辺の環境、水車小屋跡などを調査しました。昔話などもお伺いして、水の確保は今も昔も大変な問題であることが良く分かりました。

次回調査は12月1日に行う予定です。調査場所は未定ですが、興味のある方は研究所に即一報下さい。

「上流圏だより」は再生紙を使用しています。

地方自治職員研修 411号 P16【平成9年8月15日】

「食」と地域づくり④〈山梨県早川町〉

飽食の時代のノスタルジー

小俣佳子

日本上流文化圏研究所・研究員。
山梨日日新聞記者の後、全国各地を歩き、食文化等を研究。

ひと抱えもある鉄釜から、大きなしゃもじで、ガバっとどんぶりに盛り分けられる麦飯。飯の表面に、ねぎを刻み込んだ味噌を「ちょちょい」と塗り付けて頬張る。ツーンと鼻に抜けるねぎ香と味噌のまろやかな塩味が、淡白な麦飯にぴったりだ。「うまい！」。只々ねぎ味噌だけをおかずにして、どんぶりの中の飯が見る間に減っていく。土地の人が、つい三〇～四〇年ほど前までは毎日のように食べていた「すばく」である。

姿を消したかに見えたすばくだが、茂倉（もぐら）という峠近くの集落で今も食べていると聞いた。ときどき、どこかの家のおばあちゃんが作り、近所を誘い合ってお昼にするという。その幸運をとらえて尋ねた。「おーい、もっと、こっちのし（こちらの人）に、たくさん盛ってやってくりょう（盛ってやっておくれ）」「麦飯はすぐ腹が減るだから、もっと食える、食・える」と、おばあちゃんたちは威勢がいい。

ねぎ味噌と冷汁で二杯、三杯と

すばくには、わずかの米とうずら豆が混ぜて炊いてある。豆は蛋白質を補い、味のアクセントにもなる。染み出した皮の色素で、赤飯のように炊き上がる効果もあるという。米の粘りが麦飯全体をまとめている。蒸してから圧扁した押麦でなく、丸麦を使っているところも昔と変わらない。すばくは「素麦」と書く、と土地の人々が言うので、米も豆も入れず、麦だけで作ったこともあるのかもしれない。

すばくの伴（とも）には、ねぎ味噌のほかに冷汁（ひやじる）が欠かせない。冷水に味噌を溶かし、きゅうりと青じそをたっぷり切り込み、軽く炒ったエゴマをすり込んだ冷たい味噌汁である。汁を掛けると麦飯の喉ゴシがはるかに良くなるので、飯と汁を一緒に「ズズーッ」と吸い込む。青じその涼感にエゴマの香りも手伝って、一気に胃袋まで入っていく。食べるというよりは、流し込むといった感じ。すばくは、意外な量が腹に入るのである。

一方、すばくに苦い思いを抱いている人も多い。「嫌いだったから噛まずに飲んだもんだよ」「米の飯になって、どんなにホッとしたことか」「もう、二度と食べたくない」。子供の頃、「それしか食べるものがなかったので、仕方なく食べた」という記憶の持ち主たち。すばくの一言で休んでいた胃袋がぜん動し始めたかのように、次々と忘れかけた味が思い出される。

「山へ行くときは弁当箱にぴっしり麦飯を詰めてな、おかずは、ねぎ味噌だけよ。よく、食ったなあ、あんなもん。腹が減ってるから、夢中で食べた」

「暑い時なんか川の水で味噌を溶いて、麦（ばく）にぶっ掛けて食ったじゃん。ろくな（大した）おかずは無かったけど、冷たくてうまかったなあ」

嫌いだった人にも好きだった人にも、ひときわノスタルジーを感じさせる食べ物のようだ。

「いらない」でも「食べるとうまい」

今年の五月三日、町のイベント「山菜祭り」の会場に、遊び心ですばくの試食コーナーを出店した。茂倉のおばあちゃんの手ほどきを思い出しながら、普段は炊飯器に頼り切っている腕で、おっかなびっくり二釜を炊いて用意。アンケート調査に協力してくれたお礼に、懐かしのすばくを振る舞うということにした。

麦飯体験のある五〇歳代以降の反応が、やはり面白かった。「どうぞ」と勧めても「絶対いらない」と断る。それなのに、「久しぶりに食べてみるかな」と、また戻ってくる。こんな人が少なくなかった。

「子供のとき釜をのぞいてさあ、ああ、また麦飯かと思うと、がっかりしたもんよ。いやー、でも今食べると結構うまいなあー。これ、昔のと違うんじゃない」。

そう、長年の飽食に慣れた舌には、まったく違うものなのである。そして先月、町に「すばく愛好会」が発足した。

早川22世紀計画

― 日本・上流文化圏構想 ―

辻 一幸
山梨県早川町長

新しい上流圏の生き方の確立を目指して

山梨県早川町は，平成7年度から第4次長期総合計画，日本・上流文化圏構想が向こう10カ年の町づくりの指針として進行中です。

早川22世紀計画？　この副題を見て，人は即座に21世紀の間違いではないかと指摘をされます。そして，主題にしても少々大袈裟で，他所から見ると気負っていると見られるかも知れませんが，私たちはこれからの町づくりを，長い時間をかけ真面目に考え，主題そのものを町づくりの目標とし，地道に一歩一歩地域づくりと，地域を考えていこうとしているものです。

早川町は，南アルプスの真只中にある，人口わずか2,000人の一寒村です。地域はアルプスの急峻な山と深い谷から成り，集落はアルプスの水を集めて深い谷を流れる早川の流域を中心として点在し，住民はそこで長い時を刻んできました。

大自然の中で，かつては時の流れも忘れるかのような人々の暮らしがあったと思えるのですが，時代の変化は，この地にも人口の流出と高齢化を招き，今この地は，過疎の厳しい状況に迫いやられています。

今，私たちが挑戦している地域づくりは，再び山と川からなる上流域の地域に，人々が真に豊かに生きていける地域を甦えらせることが出来るかどうかという試みと同時に，全国の上流域が今こうした状況を呈している中で，私たちの地域の状況や試みを情報発信しながら，多くの人や地域と交流を重ね，知恵や知識を得る中から，新しい上流圏の生き方を確立して，本当に人々が豊かに暮らしていける新しい環境と地域文化の創造を目指したいと考えるものです。

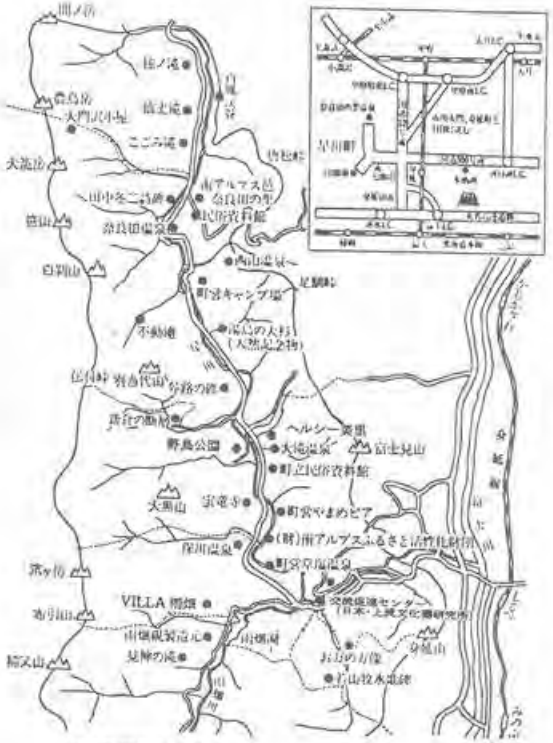
南アルプス白鳳史朗記念館〔山岳写真〕

早川町の概況

私たちが住む早川町は，日本の屋根南アルプスの真只中で，その位置は，本州の中心を縦断している静岡－糸魚川地質構造線（フォッサマグナ）上にあります。静岡県と県境をなす南アルプスの主峰北岳（日本第二の山。3,192m）から南に連なる連山と，南アルプスの前衛で，甲府盆地と境をなす櫛形，富士見山系に挟まれた峡谷の山村で，県都甲府盆地の南西にあります。370㎢の町の面積は，県下一の広さですが，その大部分が急峻な山と谷の地形で，面積の96％が森林です。

南アルプスを源とし，山々から流れ出る清流は，年平均毎秒30ｔ～40ｔにも及び，かつては町の中心を縦断して深い峡谷をつくり，日本三大急流の一つ富士川に注ぎ込んでいました。

早川町は，昭和31年，この峡谷にあった6カ村が合併し，母なる川“早川”の名を町名としスタートいたしました。



早川町観光マップ

国選定
早川町赤沢重要伝統的建造物群保存地区

早川は，大正時代半ば過ぎまでは，引き舟が富士川から上流域まで往来し，物資の輸送に，あるいは木材の流送にと人々との生活と大きくかかわり，暮らしをも支え，その上，豊富な清流とその恵み，山女（やまめ），いわな，かじか，うなぎ等は，川の幸として人々を豊かにしてくれてきたことは言うまでもありません。地域にとって早川は，正しく生命の川であったわけです。

しかし，大正の末頃から始まった発電事業は，豊富な早川の水を取り続け，今では早川の川に昔の姿を見ることが出来なくなってしまいました。

大正時代から始まった早川の電解開発は昭

和40年代の初めまで続き、現在早川流域には14の水力発電所が稼働していて、川の水は陽の目も見ることもなく、山を切り抜いた送水管から送水管へと送られ、富士川にあるいは太平洋に注がれるという姿になってしまったのです。

一方、開発は地域の期待とは裏腹に、事業終了と同時に地域に人口流出を呼び起こし、加速させてきました。

町の人口は、戦後の電源開発時、昭和35年の国勢調査をピークとして減り続けています。開発で沸いた時期1万人の人口は、40年たった今2,000人にまで落ち込み、低迷している状況です。

過疎化の原因は、国の高度経済政策による負の部分を、私たちが背負わされた山村の宿命だと言う他はないのですが、私たちの地域がこれにつけ加える理由があるとしたら、戦前戦後を通じて、開発事業による人口流入と、その終了による人口の撤退は、地元住民をも巻き込んで流出につながっていったこと、14の発電所の自動化、無人化は、そこでの地元住民の就労の場をも閉ざしたことが挙げられます。

第四次長期計画策定までの経過

電源開発の終了と第1次産業の衰退は、地元にこれに代わる産業や活性化策を見い出せないままに、人口流出を加速させてきました。

町は、昭和45年第1次長期計画を策定、第2次長期計画を昭和55年にスタートさせました。

戦後の復興期に豊富な森林を伐採してきたつけは、風水害の災害をもしばしば地域にもたらしました。昭和28年災、34年災、40年災、57年災、58年災と記憶だけでもこの位の数にのぼります。

地域を襲った台風は、急峻で脆弱な地形と保水能力を回復しない山々の土を削り、土石流となり、早川の峡谷になだれ込み、生活道の決壊をはじめ、時には人命までも奪い、その都度多大の被害を地域にもたらしました。

特に、57年災の台風10号の襲来は、これまでの町の災害史上にない100億以上という莫大な被害を町にもたらしました。復旧には5年近くを費やしました。被害規模が想像いただけると思います。

その後、今日まで台風の接近はあるものの大きな被害は受けていませんが、町では災害に強い町を目指し、国、県の砂防、治山、治水事業を積極的に導入する一方、毎年町の多くの予算をもって基盤整備に力を入れてきました。

災害もなく安全で、安心して暮らしていける地域でないと。人々の流出に拍車がかかります。

町はこの災害復旧の中で、過疎に立ち向かう第3次の長期計画づくりを精力的に行いました。各集落を回り、復旧状況の聞き取りや状況視察と共に、町づくりの話し合いを重ねていきました。

そして、昭和59年、第2次計画が中途でしたが、第3次長期計画"潤いと活力のある町づくり"をスタートし、この10年の間に今日の町の基礎を町民一丸となって築いてきました。

第4次計画・上流文化圏構想をスタートさせるに当たり、相当の時間を費やしました。町づくりには長い時間と貴重な町予算を投入していかなくてはなりません。一番大事なことは計画を実行していく上で、町民の理解と協力がなかったら、その計画が生きてこないことです。

これからの私たちの町は、どういう町づくりを進めるべきか、私たちの暮らしや、生き方はこれからどうあるべきか、策定作業に当たって町民の参画はもとよりですが、これまで早川町の町づくりを支援してきてくれた人、また、山村や過疎問題に関心を寄せている人たちの参画を得て、議論をくり返しながら計画を積み上げてきました。

早川町を中心としてではありますが、私たちはこれからの地域づくりを、こうした考えにのっとって進めていきたい、自らがもう一度、自分たちの地域を見直し、しっかりした考えのもと、時代の転換期に確かな町づくりを目指そうという結論を得たわけです。

日本・上流文化圏構想

ふり返ってみると、私たちが住んでいる地域の昔は、決して豊かだったとは言えませんが、そうかと言って、決して貧しいばかりのものでもなかったように思えます。

厳しい地形と生活環境ですが、山と森や林とかかわりながら、それを生活の糧とし、焼き畑農業を柱に、わずかな耕地を開墾し貴重な米をも作り、豊かな川の流れに沿って人々が集みつき集落や村を形成し、地域を守り、そこに固有の文化を創り生き続けてきました。苦しい時も、楽しいこともお互いに分かち合いながら固い互助互恵の絆で、心豊かな営みがあったと思えます。

シンボル施策の構成

日本・上流文化圏宣言

早川の清流のごとく

時代の日も雨の日も早川は流れ続けます。私たちは、この上流圏に生き努力を重ねながら、下流の文明を支え続けた先人を誇りとし、その歴史と遺産を継承していきます。

そして、早川の水の姿に学びながら、地域をみつめ、力を出し、汗を流しながら、きょうをあすに伝えていきます。

―――――― 絶えず　進まず　捉生ず

南アルプスの峰々のごとく

高い峰々は明日に続き夕日に輝きます。厳しい山村にくらしながらも、その美しさに私たちは自然への感動と生きる喜びを新たにします。私たちはこの南アルプスの麓深々郷に、力強く清純な地域に生きる雅理を見出し、あすの地域の理想のすがたと、その地域に生きる人とくらしのあり方を追い求めます。

―――――― 清らかな思想を高くかかげ

蒼空にまたたく星のごとく

澄みきった大気のなかでは、真昼でも大空に星がまたたきます。山あいの小さな村であるこの早川には、固有の哲学が光り、美しい風景が光り、やさしい人の心が光ります。問題をかけて磨きぬき、自らきらめくような、そんな地域の姿をめざして、私たちはいま行動をはじめます。ゆっくりとしかし確実に、私たちのふるさと早川を創り続けます。

―――――― 地域を光りきらめかせ心

人たくましく　山美しく　水清く
南アルプス色　早川町

水五訓

一、自ら活動して他を動かしむるは水なり
二、常に己の道路を求めて止まざるは水なり
三、障害に逢ひて激して勢力を倍加するは水なり
四、自ら潔くして他の汚濁を洗ひ清濁合せ入るる度あるは水なり
五、平々として大海を充たし発しては蒸気となり雲と変じ霰と化し雪しては玲瓏たる露となり而かも其性を失はざるは水なり

大正時代からの電源開発の波は、この流域にとっては、長いゆるやかな時代を打ち砕く一大変革でありました。静かな山峡の生活を一変させた開発の波は、戦後の開発で決定的となりました。戦前、戦後を通じて、私たちの地域は、否応なしに国策の中に組み込まれてきました。もはや早川流域には、その精神にしても暮らしにしても、山の中にあって純粋な山村の姿を遠に失って久しいものがあります。

上流文化圏構想の前文には、地域の決意を示しました。

「私たちは、山と水を守り続けた先人に学び、自然と共に生き、資源を大切にし、真に人間らしく暮らすことができる地域の創造へいち早く出発しようと思います。

私たちの目標は、中流、下流の都市と役割を分担しながら、将来にわたって人間が生き続けるための、自然と共生できる新しい文化を構築し、そして上流としての文化を創出することです。

私たちは、自然や社会のさまざまな領域にわたり、上流という地域が持つべき姿を学び始めるとともに、その実現に向けて行動をはじめます。多くの上流圏と交流を深めながら、地域を、そして日本を動かしていきたいと考えます。

ゆっくりと、しかし確実に。100年位たっぷりと時間をかけて私たちは進みます」

そして、"人たくましく""山美しく""水清く"のスローガンを掲げ、次の三つの施策をシンボル施策として取り組みが始まりました。

1）日本・上流文化圏研究所の開設。

ここでは、自然環境の保全や育成、エネルギーの課題や資源利用、人々の暮らしやあり方や様式等、地域環境を守る時代の先進的な人間の生活と文化をテーマに研究と実践を重ね、その成果を他所へ発信していこうとしています。

既に、職員の配置や在外研究員にも委嘱し、多様な領域の専門家の皆さんにも参画していただいています。

インターネットの開設、町の既存資料の整理、食文化調査と食による地域づくり、地域学習教材の開発、農書読書会、大和イワナの生態調査、地元活性化事業や関係町村活性化事業への支援等をはじめ、昨年夏は、町の最上流の地、秘境・奈良田において、当研究所の理事長を引き受けていただいた下河辺淳氏を囲んで、全国の支援者の参集を得て、発会式と上流圏シンポジウム"もうひとつのくにづくり談義"を開催いたしました。本年は、この催しを宮崎県の五カ瀬町で計画中です。

また、今年から「上流人のための上流学講座」を地元の山梨学院大学の協力を得て、4回にわたって開講いたします。研究所は、既に、山梨学院大学、早稲田大学と提携し、大学生の参加による研究活動も始まっています。

2）上流文化圏の核となる第7のむらづくりを進めます。

南アルプスの邑(むら)早川町を象徴する理想郷づくりを目指そうというものです。

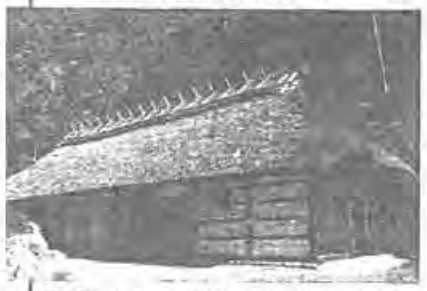
町では、これまで地域づくりの柱として"自然の恵み、人のふれあい南アルプス邑早川"をキャッチフレーズに、旧村1拠点（旧6カ村6拠点）づくりを合言葉に、地域住民の参加のもと、その地域の活性化の拠点づくりのために力を注いできました。

①秘境・奈良田の里　②町営宿泊施設ヘルシー美里と南アの野鳥公園　③南アルプスふるさと活性化財団　④町営宿泊施設ヴィラ雨畑　⑤信仰とやすらぎの里赤沢宿　⑥交流促進センター（上流文化圏研究所）等とそれぞれの地域の個性と可能性を考えながら、その地域ごとの整備を進めてきました。

広い町ゆえ、当面の町づくりとその原点は旧村にあり、旧村ごとの立ち上がりこそ早川町の活性化の原点であるという考えからです。

おかげで地区住民を勇気づけ、コミュニティや生きがいづくりの拠点にもなり、それぞれ

日本・上流文化圏研究所のある交流促進センター――美袋



研究所　フィールド活動の拠点　藤や――奈良田

早川町では、上流文化圏研究所の設立にともないインターネットホームページ「早川町電子ミュージアム」を開設しました。上流文化圏研究所の進展にともない、観光案内情報をはじめ、町民一人ひとりの顔が見える2,000人（800世帯）のホームページの開設や研究所の活動報告、世界各地の上流圏との情報や意見交換など、内容の充実を図っていきます。上流文化圏構想について町内外に、そして世界に向けた情報交換のステージとなります。

◀「早川町電子ミュージアム」ホームページアドレスは、http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/

フォッサマグナの母び
――セッションと食事風景

暮らしの背景――

●西山の自然

南アルプスのふもと、早川最上流域の西山地区には、大自然にはぐくまれた厳しくも豊かな先人たちの暮らしぶりが伝えられてきました。別南部の多雨地域であるながら、急峻な地形のため気温も低く米作不適地といわれ、雑穀栽培型の焼畑に依存する生活が古くから見られました。早川町では長らく焼畑文化の保存に努め、平成元年には、六九八点にものぼる資料が重要有形民俗文化財として国から指定を受けました。焼畑農耕では植生が復元されるまでの時間が必要です。休耕期間を短くするため、やせた土地でもよく育ち落ち葉が肥料にもなるハンノキを移植し、短時間で地力を回復させる工夫も考えられてきました。自然と深く結び付いた暮らしの知恵は、現代人への貴重なメッセージでもあります。

焼畑の前にしなければならないのが、木を伐採し火入れを行うための地ごしらえの作業です。トビナタやコシノヒで順に上方に切り倒していきます。

山菜や川魚の保存加工、タホや生活の小道具はすべて手作り。生きるためにはさまざまに技能を身に着けねばなりません。下駄や畳物などの木加工も、小規模ながら貴重な現金収入になりました。

焼畑をめぐる――

●山の生活

新地の少ないこの地方では、山の斜面を利用した焼畑が昭和30年代まで続けられていました。春焼きでは、一年目はアワ、二年目は小豆や大豆、三年目にはまたアワが作付され、夏焼きでは、短期間で収穫できるソバがよく作付されました。やがて地力を回復させるため休耕し、いずれもほぼ15年で一周期をくり返します。春彼岸、梅雨明けと共に木の伐採が始まり、火入れしやすいよう地ごしらえをして、ヤブ焼きが行われ、よく灰がならされた後に種がまかれます。十月中旬の秋の収穫を迎えるまでには、草取りやイノシシ駆除など、里から遠く離れて、「アラク小屋」に泊まり込みの作業が続けられます。

自然の恵みを生かして――

●里の生活

自給自足の生活が山里の暮らしのベース、「山でできるものはマンノウガン（何でもできる）でないとだめだ」と、多彩な暮らしぶりが伝えられています。農作業はもちろん、男たちは、狩りや漁にも出、下駄や曲物作りも大切な仕事とされました。女たちは、漬物、豚噌、醤油、納豆など山の幸を使った保存食を作り、糸紡ぎや機織りもこなしました。つぶの繊維で織ったタホ（太布）は木綿より丈夫で仕事着には欠かせないものでした。残された道具のひとつひとつが、昔の暮らしぶりを身近に感じさせてくれます。

山の生活には、衣食住すべてに関わるさまざまな道具が必要でした。飛騨ましのでラノや運搬器具、ヒョウタンや竹筒の水筒、また、手作りの農業用具など、今では貴重なものとなりました。

焼畑の春に期には、家族全員が泊まり込むアラク小屋が作られます。わずかばかりの平地に周囲の水を引き込み、土間はカヤにムシロを敷いただけの簡素なもの。寝床で寝るのがやっとの広さでした。

の施設の運営，管理にも地区住民が加わり，地域を守っていく努力が重ねられています。

今回の第７のむらづくりの呼びかけは，こうしたことの延長線上にあり，大自然の早川のキャンバスに，それぞれの人たちが可能性を追求しながら理想郷を描き，その上実現に向かって努力をしていこうというものです。

第７のむらが，既存の集落や村の中にあるのか，またそれ以外の所にあるのか，いずれにせよ自然や環境を生かしながら，先端の技術と感性を生かした手法で，将来の早川の大きな誇りをつくりだすプロジェクトにしていきたいと思います。もちろん提案者は町民と早川の町づくりを支援してくれる人たちです。

3）上流文化圏にふさわしい
環境とくらしと文化をつくり出します。

上流文化圏の理念の具体化として，身近で目に見え，みんなで確かめられ，また訪れる人にも訴えていける日々の努力が必要です。

上流圏の環境づくりの大きな課題となっている，電源開発で失った清流をどんな形で再び早川に甦らせることが出来るかということに始まり，自ら水を汚さないということや，美しい集落の景観づくり，街道修景，歴史的街並づくり，空缶やゴミのない環境づくりに率先して取り組みます。

くらしの実践では，エルネギーの節約，紙や水の節約，ゴミの減量化や肥料化等，地球にやさしく，くらしに厳しい生活スタイルをつくり上げていくことに努め，そのことを上流圏に生きる誇りとしていく生活をつくり上げていきます。

自然と共生する暮らしの知恵，生活の中のものづくりの技など，先人の築いてくれた文化，風俗，歴史など，既に消えたもの，今消えんとしているものもあります。生活文化の創造として，早川の文化の再発掘にも努め，さらに磨きをかけ，新たな風を吹き込み，上流圏としての新たな生活，文化をつくり上げていくことに努力いたします。

山村から新たな文化の創出にかける

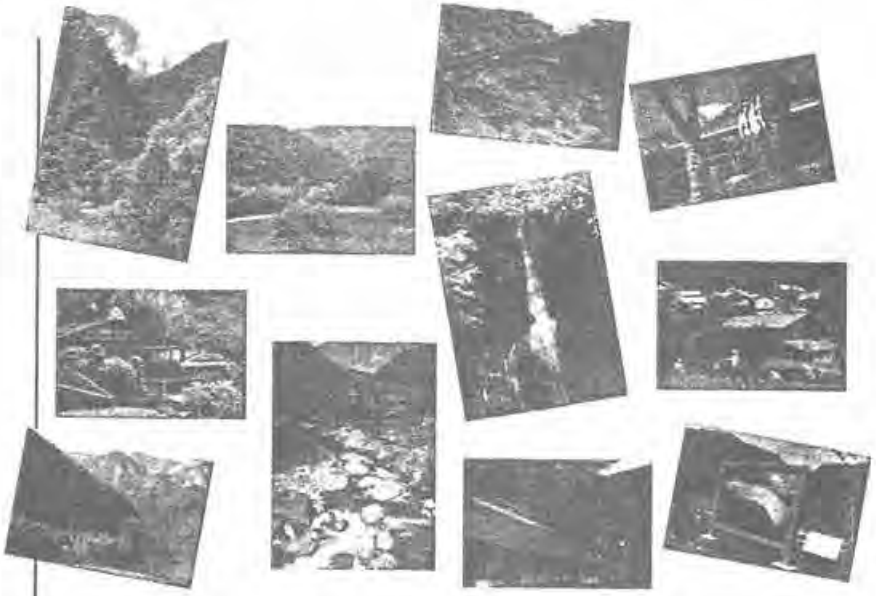
この構想をつくり上げてきた背景として，私たちは，現在の時代認識と，将来にわたっての地域づくりを考察し，次の三点の意志を確認いたしました。

① 時代は転換しはじめました。価値観の地殻変動も起きています。上流圏の山村が誇りを持って新しい文化を生み出すときです。

② 限りある地球環境からの恵みの中で，自然と人間が共生するために，私たちは率先して新しいくらしをつくりだします。

③ 瞬間人ではなく時間人，時代人の目と感性を持ち続けながら，じっくりと地域づくりへの行動をすすめていきます。

あすの三重 第107号 P30～38【平成9年10月1日】



そして、これからの行政は、ただ物づくりだけの行き方であったなら駄目で、しっかりした考えや、確かな意思のもとにそこに住み続けるのでなくては山村の将来はない、という結論の中で文化圏構想を仕上げました。

地方の過疎化はこれからも止まらないと思います。地方の人口減少は進み、これまでより過疎町村が拡大していることも明らかです。そして、それにも増してこれからの国全体の人口予測を見ると、21世紀初頭をピークとして、その後は急激な減少に向かっていくと予想されています。いわば近い将来は国全体が過疎化現象を覚悟して、新しい秩序を確立していかなくてはならないということになります。

都市も地方も、これからの均衡ある国の発展や国土づくりを考えていく上で、人口減少と都市と地方のあるべき姿を、真剣に国中で考えていかなくてはならない問題であると考えます。こうした中で地方においては、都市にばかり目を向けて生きていくことや、中央依存の体質から脱却していく努力と、地域の個性を育て、自主・自立の方向をそれぞれが見い出していく決意と行動こそ大切なことと痛感いたします。

早川町は、厳しい環境ではありますが、住民みんなで新たな上流文化圏を創り上げていく決意です。

●問合先
■早川町役場企画振興課
〒409-27山梨県南巨摩郡早川町高住758
☎ 0556（45）2511㈹
FAX 0556（20）5000
e-mail：webmaster@town.hayakawa.yamanashi.jp
■日本・上流文化圏研究所
〒409-27山梨県南巨摩郡早川町奥住430
☎&FAX 0556（45）2160
e-mail：JOURYU@town.hayakawa.yamanashi.jp

■特集・中山間地域の活性化

「現役で暮らし続ける工夫」から夢を広げる

小俣　佳子
日本上流文化圏研究所研究員

南アルプスの麓にある山梨の一山村・早川町は、「上流文化圏」という新しい地域の哲学を提唱し、共感を集め始めている。「上流」とは、水の源である川の上流を指し、水を核とした新しい文化圏の構想を呼びかけたものだ。早川町は92%を占める山林に、南アルプスから発する澄んだ水や貴重な自然の資源を内包している。自らを水文化や森文化を考えるのに格好の場と位置づけ、上流の山村が連帯し、中流の農村や下流の都市とともに対等にその役割を担いながら、新しい環境と文化を創り出すことをうたっている。

この哲学を土台に町の総合計画が練られ、中核となる日本上流文化圏研究所もできた。研究所はこの4月にちょうど1年を迎えた。私はこの研究員として、「食」を通して地域づくりに取り組んでいる。

町は今、美しい春を迎えている。家々の庭先とそれに続く小さな畑の手入れされた草花、木々は満開で、深い桃色の八重桜などが鮮烈に目を奪う。一方、若芽のベールに包まれた、はるかに連なる山々も実に魅力的だ。生まれたての初々しい色彩を身にまとった山塊を遠景にして、身近な集落の春爛漫の風景がこのうえなく映えわたって見える。

こんな山里の景色を眺めていると、地域の未来を考えるのにも、これと同じ構図があるのではないかと思える。手に触れて進んでいる現実的な方策があるとともに、大きな夢やビジョンがその背後に「遠景」として育まれ、「近景」ともいえる具体的な行動を照らし出し勇気づけるという構図である。自分の暮らしや地域づくりの行動も、こんな構図で進めていくことができれば、と考える春である。

■10年後にも現役でそばを打つ工夫

昨夏、研究所の発足を記念し、町の最上流の集落でシンポジウムを開いた。その一幕として、「歴史未来談義」と銘打った放談が行われた。オフィシャルに設置した1台のビデオカメラを除いて参加者には一切のメモや録音を控えてもらい、各人の目や耳を鋭敏にして、話の内容を体の中に蓄積してもらうという趣向で行った。この記録は、10年間封印されることになっている。参加者全員でこのときの出来事を昇華する10年という時間を共有し、10年後、再び集結して封印を解き、もう一度確認作業を行おうというものであった。

私は、この10年後に、自分の活動の「近景」としての目標を設定してみたいと思う。そして、今と同様に、周囲の人々と山村の食べ物づくりを楽しんでいる10年後、というのを思い描いている。私の集落の隣人たちははとんどが60歳以上。一緒にそば打ちをしたり豆腐を作ったり、味噌づくりをする仲間は、おおむね70歳くらいまでなので、今70歳の人が80歳になっても、現役でそばを打ったり、味噌を炊いたりしているという10年後を夢みたいのである。

町には、春の山菜祭り、秋のそば祭りの2大イベントがあるが、そこで客に提供される食品づくりは、高齢者の力に負っているところが非常に大きい。山菜の加工、漬け物やこんにゃくづくりなどの技は、長年の体験がものをいう。特に紅葉を愛でながら地元の人々の手打ちそばが100パーセント味わえるそば祭りは、60歳以上のご婦人が大活躍である。逆に、打ち手が高齢化していることが、今後の祭りの不安の種でもあるが、「来年はもう打てないよ」と、一抹の寂しさを含んだ冗談を交わしながらも、多くの打ち手は仕方なく続けているというわけではなく、体が達者なうちは「生涯現役」で打ち続けたいと思っているのである。

一方、どんな時にそば打ちを苦痛と思うか尋ねてみると、長年の農作業で使った腰や足が痛んだり、腰が曲がって体型が崩れたりして、延し板の前に座る姿勢が苦痛だという声が多かった。確かに作業の途中、床に置いた延し板の前で、ときどき足を投げ出したり、横座りになって休んだりしている姿を見かける。正座が苦痛な人には、床に置いた延し板を前にして作業するのは非常に苦痛だ。しかし同時に、このような不都合は、延し板に足を付けてテーブル状にしたり、しっかりした机の上に固定することで解決する場合もあり、体の負担を軽くする工夫の余地は、かなりあるのではないかと思えた。体に合った道具と技術があれば、あと10年がんばれる人もいるはずだ。普遍性に甘んずることなく、地域独自の暮らしの工夫を講じていくことが大切なのではないのか、とひらめいた。

■道具の快適化に挑戦

そこで、わが隣人達が使いやすいそば打ち道具を一緒に工夫してみることにした。まずは、膝を曲げるのが苦痛な人のため、延し台に足を付けてみた。生地をこねたり延したりするのはかなり激しい作業なので、動いたり揺れたりしないような安定性、耐久性が必要である。しかし、角材の足を付けて蕎麦屋の打ち台みたいにしてしまっては、設置した場所から動かすこともできず不便である、と言う。また、餅を切ったり、うどん生地を踏むときのため、延し板が足と別々になればなお良い、ということであった。あとは製作を依頼した地元の木工屋さんにも知恵を貸してもらい、足の部分は折り畳んで持ち運びやすいようにして、試作第1号が出来上がった（図）。

反響は一番に、木工屋さんの周辺で起こった。たまたま製作途中のそば打ち台を見掛けたご婦人が大いに興味を持ち、近所の仲間と度々のぞいていたらしいが、完成品に惚れ込んで、同じものを注文していった。しかも「夫婦2人分だから、延し板部分はもっと小さくて軽い方がいい」と、しっかり自分仕様の注文をしていったという。

図 試作第1号出来上がり！

これを聞いて私は、非常に意を強くした。ちょっとしたきっかけさえあれば、さまざまなものづくりの経験をしている熟年世代なら、道具の工夫についていろいろなアイデアを出してくる、と思ったからだ。

早速、生活改善グループがそば打ち研究会をすると聞いて、試作した延し台を持ち込み、使い心地を試してもらった。この時は、それぞれの家庭にある道具の善し悪しや、自分で改良した部分などについてさまざまな話が出てきて、大きな収穫であった。話をまとめてみると、長年使っているうちにすり減ったり、ゆがんだりして使いにくくなっている延し板や延し棒があること、こね鉢にも開口部分の広さなどによって、使いやすいものと使いにくいものがあることなどが分かった（表）。そば打ちのやり方そのものも、体の変化に応じて工夫していくことが、本来の台所の知恵であるのかもしれないと感じた。

表 生活改善グループに聞き取りした手持ちの道具の使い心地

	使い良い	使いにくい
延し棒	年代の木工品などの重厚 スムーズのものは、変形なくて使い良い	長の枠は狭くそのまま使ったかなり重い 使ってるのは薄い方が多いもっと太い方が延しやすい
延し板	コマーツで買った端の板は軽くて長延し棒も付いている 春民の板屋さんに作ってもらった小人数用の小さいのは便利	頼んで作り直った板は、削ってみた付れど平均に延せない 家人中が取り延った後も、平均に延せない
鉢こね	口が広い鉢は、ふきわしがとても用 樹脂のこんぱちは、軽くて使らない	こんぱちは開口部が狭いから粉が飛ってくる

■おばあちゃんの技、孫へ

熟年世代や高齢者が、それぞれの体に合った道具や技術をもって現役でがんばることは、食べ物づくりの技を次の世代に伝えるためにも有効ではないだろうか。

3月、町にあるたったひとつの中学校で、卒業生6人の送別会が行われ、全校生徒がそば打ちとヨモギ餅づくりを体験したことがあった。私はその企画をお手伝いしたが、そのとき、一人だけ慣れた手つきでそば粉をこねている2年生の女子生徒がいて驚いた。聞いてみると、「お客さんが来るとおばあちゃんがそばを打つので、一緒に手伝っているうちに覚えた」と言う。お母さんはおばあちゃんに任せきりで全く打たないそうで、「自分がいなくなったら、家にそばを打つ人がなくなる」と、おばあちゃんに覚えるよう勧められたそうだ。この女生徒は、友達の注目を一身に集め、皆に取り囲まれて「すごいねー」「温いねー」「今の所、もう一度やって」などと盛んに声を掛けられていた。女生徒は慢することもなく「そば屋になれって言われるけど、花屋とかフラワーアレンジをやりたいからなー」と答えていた。どんな人生を選ぼうとも、若い体で覚えたそば打ちを、きっと忘れないのではないかと思う。

■生涯現役の高齢者から希望が見える

新しい価値観が共感を呼び、政治や経済に反映され、私たちの日常に定着するには長い時間がかかる。上流の暮らしが100年かけてバランスを失っていったとすれば、その仕組みを組み換えるには、少なくとも100年がかかると思われる。じっくりと腰を据えてビジョンを鮮明にし、計画を磨き、たっぷりとした理想と時間を注ぐ必要がある。地域づくりのものさしを皆で選び直し、瞬間人でなく時間人、時代人の感性を持ち続けることが不可欠なのではないか。ご紹介したように、できるところから「暮らし続ける工夫」を試みつつ、私もその先の「遠景」を、じっくりと描いていきたい。

先ほど、高齢者の体に合った技術や道具の工夫が、例えば山村の手作りの技を若い世代へ送り届けることにつながる、と論じたが、生涯現役で自分の暮らしを続ける活力ある高齢者がいる地域なら、定年退職後のUターン者にも、大きな励みになるのではないかと考える。

全国的には、60歳から64歳に新規就農の大きな波が現われ、平成2年から7年の5年間で30％増になっているそうだ。40年の勤めを終えて、農山村を第2の人生に選択する波が始まったのであろうか。

そうはいっても、この時点で初めての農業に挑戦するというような場合、働き盛りを過ぎた世代が容易に農業を楽しめるかどうかは分らない。そのような時、農業の技術を含めたさまざまな山村の生活の技が、住み続けてきた熟年者、高齢者によって加齢とともに体に合ったものに工夫されているとすれば、Uターン者も心強く新しい人生のスタートが切れるだろう。40年の仕事の中で培ったさまざまな技能や人脈が、さらに地域に活かされ、活気をもたらすことが大いに期待できる。

いったんは都市部に暮らす息子家族の元へ出ていったものの、周囲に知り合いも精出す畑も無く、所在無い毎日に嫌気がさして、一人暮らしの早川の家へ舞い戻ってきたという町民のうわさも耳にする。私の周囲にいる「生涯現役」の気概を持つ高齢者たちなら、都会の息子に引き取られるのでなく、山村の暮らしの技を堂々と身にまとい、やがて都会の子供たちを迎え入れることもできるのでないかと思っている。

「遠景」は、まだまだおぼろげだが、やがて鮮明な現実となってくるよう、この夢をじっくり育ててみたい気がする。

（おまた・けいこ）

山梨県早川町

過疎の山村から日本中の上流の村々へ

22世紀に向かって歩み始めた渓谷の村の壮大な構想

鞍打大輔
日本上流文化圏研究所学生研究員

山に挟まれた狭隘な平地しか持たない山村は、それゆえに平野とは違う独特な文化や歴史を育んできた。しかし、その厳しい自然環境によって人々は山を去り、独自の文化を失いつつある。そればかりか、地域自体の存続も危うくなっている。そうした上流域の村々の暮らしと文化の100年後の再生をめざして、歩み始めた町がある。

後手3世代交流創作教室。機織を教えるのは遊び部会のメンバー。

自然のなかで開かれた上流文化圏会議。

いろりを囲んでの町民塾。

急峻な森林が96%を占める町から

人口の流出と高齢化の進展などで、里山問題の問題はいよいよ深刻になってきた。なかでも河川のもっとも上流部に位置する山村では、地域社会そのものの崩壊が顕著なケースも少なくない。

そのような山村のひとつである早川町は、山梨県南西部に位置し、南アルプスを挟み静岡県と接している。総面積369.86kmは県内でもっとも広いが、そのうち96%を急峻な地形の森林が占めている。山々の谷間を富士川の支流である早川とブトッサマダナが南北に走り、36の集落が谷間に散在する。

早川町では、縄文の生活遺構からうかがい知れる太古の人々の営みに始まり、金・材木産出で栄えた近世までの歴史を背景に、独自の森山村文化が培われてきた。大正時代になると水力発電所の開発が相次ぎ、建設作業者を主とする人々が流入。昭和35年には人口10,679人のピークを迎えた。しかし、その後は急速に過疎化が進行し、平成7年度には1,977人となっている。高齢化率は41%と県内で2番目に高く、温泉などを活かした観光業と建設業が町の基幹産業である。

平成6年度、早川町は「日本一上流文化圏構想」(以下「上流圏構想」)を策定し、水を核とした環境保全を地域の大きな役割として、川の上流域でおこなわれた地域文化に根ざした町の将来像を描き出している。さらに8年度には「日本上流文化圏研究所」(以下「研究所」)を設立し、構想実現へ向けて歩み始めた。

「上流圏構想」では、急激な近代化の進行こそが自然の営みと人々の暮らしを支えてきた上流域に、さまざまな問題をもたらしたと位置づけ、水を命の源とし、その源である上流域の自然環境と山村生活のなかで先人が培ってきた森山村文化を見直すことから、地域づくりを仕切り直すことを基本的な考えとしている。そして、それをベースに新しい文化や暮らしをつくりだし、長期的な視点から地域づくりを展開することで解決の糸口を探り、それらを実践して生まれる新しい地域のすがた・哲学・行動を、全国に向けて発信していこうというのである。

全国の地域づくりとつながる上流文化圏研究所

「研究所」の設立は、「上流圏構想」の重点施策のなかに明記され、地域づくりの中心的な役割を担う研究機関とされている。「地域資源の発掘・活用」「新しい森山村文化と暮らしの創造」「住民参加によるネットワークの構築」「それらの成果の全国への情報発信」といった、さまざまな地域づくり活動や地域文化の研究を町民とともに進め、「上流圏構想」が描く地域の未来像、すなわち「山と水を守り育てた先人に学び、環境を保全しながら、豊に人間らしく暮らす」「中流、下流の都市と対等に役割を分担しつつ、将来にわたって自然と共生できる新しい暮らし方を創造する」「多くの上流圏と交流を深めながら、山村の新たな存在感と位置づけを確立し、経済最優先の時代には影を背負った山村の価値観を転換する」などの実現をめざすのが、その役割である。

組織(図1)の特徴は、全国の地域づくり活動家をネットワーク理事・研究協力員と位置づけ、人材のネットワーク化を図るといった町外の活力を積極的に取り入れている点にあるだろう。

また、研究活動は地域の潜在的な資源を掘り下げる虫の目の視点と、地球的な規模で地域づくりの戦略を眺めわたす鳥の目の視点から、そして、上流域である中山間地域からの発想をクロスオーバーさせた7つの調査研究と2つの実践活動を、当面のガイドラインとしている(図2)。具体的な研究活動の一部を紹介しよう。

◆「遊びの歳時記」づくり

小学校の校長を中心とする「遊び部会」では、お年寄りへの聞き取りなどをとおして森山村で行われていた草木を使った遊びを集め、竹馬や竹とんぼなどの一般的なものから、「すんぼう独楽」など地域独特のものまで、数々の遊具を復元している。

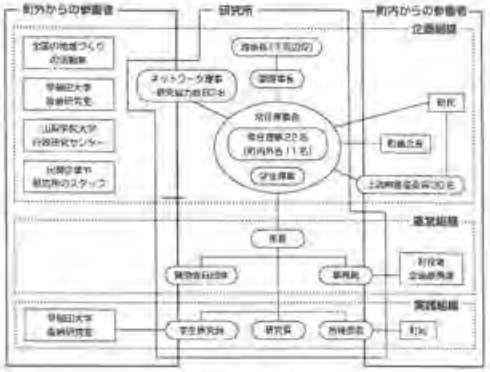


図1：研究所の組織

図2：研究活動の位置づけ

◆早川の食文化調査

古文書に見られる食文化の記録の研究や、昔から地域で食べられてきた大豆、そばなどに関する料理開発を続けている。そうした成果のひとつとして、早川の伝統的な麦飯「すばく」に着目した「すばく愛好会」が、地域のお年寄りによって発足している。

◆「上流文化圏会議」の開催

「上流圏構想」の思想を全国に呼びかけるために「上流文化圏会議」を開催している。これは、「上流圏構想」に共感した全国の地域づくりの活動家が持ち回りで主催し、これからの地域づくりや国土計画について現場の視点から議論や意見交換をしようとする試みである。平成8年3月の早稲田大学でのプレ会議を皮切りに、同年8月には早川町で、翌年11月には宮崎県五ヶ瀬町、平成10年7月には北海道ニセコ町で開催した。

会議には毎回、理事長である下河辺淳氏をはじめ全国から賛同者が無償で多数参加し、忌憚のない意見交換や活発な議論が繰り広げられる。ネットワークと知恵の集積である会議の記録は『日本上流文化圏文庫』として発刊している。

◆「早川町民塾」の開催

平成9年度、山梨学院大学の教員を講師として招き「高齢者が多い地域の内発的発展」「水の循環と暮らし」「登山と地域振興」の3テーマとフォローアップ学習会の4回にわたって町民を対象とした講座を開催した。地域の食文化を味わいながらの井戸端会議的雰囲気が効を奏し、毎回定員を超える町民が参加して活発な意見交換がなされた。今年度からはテーマや講師の選定にも町民を巻き込んで進めている。

◆インターネット環境の整備

平成8年9月にサーバーを立ち上げ、ホームページによる情報発信とともに、町内の公的機関や教育機関などとの情報ネットワークの強化を図っている。ホームページの更新は「研究所」が全面的に手がけ、開設2年で1万5千人のアクセスを集めるまでになった。また、全町民を紹介する「2,000人のホームページ」の制作も始まっている。これまでは町民によるインターネット

同対会も発足し、町のサーバーを利用した町民の電子メールのやりとりやホームページの開設・閲覧などが可能となっている。

22世紀への山村再生へ

『上流型構想』の提唱から5年、「研究所」の設立から3年がたった。「研究所」の研究活動は現在のところソフト的な部分が多く、その成果が目には見えにくいという指摘もあるが、「遊び部会」や「すばく愛好会」などの研究班やグループが自主的に立ち上がったりと、町民が主体となって研究活動を進めるようになったと感じている。また、インターネット環境の整備や「上流文化圏企画」「早川町民塾」をとおして、町民が直に全国の人々と交流する機会も得られ、地域づくりへの参加意欲を向上させるようにもなっている。

また、それらを支える「研究所」が設立されたこと自体が恒久的な地域づくり活動への意志表明であり、住民参加による日常的な地域づくり活動の展開が可能になったと思う。

今後は、多数の町民を主体的に巻き込んでいくプログラムづくり、継続的でわかりやすい情報提供、そして、地域づくりの中核となる「研究所」自体の体制整備も欠かせないだろう。

「上流型構想」は、「早川22世紀計画」と位置づけられている。過疎と荒廃が進んだ山村から、新しい価値観と生活文化の創造をめざすのは並大抵のことではないが、100年の時間をかけて一歩ずつ着実に前進しようというメッセージである。「山村の環境と暮らしと文化の再生」をめざした壮大な実験は、まだ、始まったばかりだ。

模索し始めた新しい山村の暮らし方

小俣佳子
（日本上流文化圏研究所早川町事務局）

日本上流文化圏研究所のある交流交流センター。

町内各地の食の風景を切り絵で綴った早川町カレンダー。

「こんな山人中の暮らしが上流文化だなんて……」。日本上流文化圏構想ができ研究所が設立された当初は、主人公であるはずの町民からこんな言葉をよく聞いたものだ。「石の上にも……」の諺があるが、季節を3回巡ってみて、ようやく町の人々にも構想や研究所の存在が認知され始めた感がある。

早川町では毎年、町のカレンダーがつくられる。平成11年分は研究所が制作を請け負い、縄文時代からのそばづくり、木の祈願、検証な農地を活かそうと始まった山菜栽培など、町内各地の食の風景を切り絵で紹介した。年末、各戸に配られると、「すばくき町民から『いいカレンダーだ』という声がたくさん届いた。これまでの研究所の仕事で、これほど幅広い町民の反響があったのは初めてだった。ある男性はいった。「難しい名前の研究所で近づきにくかったが、こういう郷土のことも取り上げてくれるだな。わしらの山の暮らしをPRするのが仕事だったのけ？」。

ほとんどの町民が「上流文化圏」の言葉を見聞きし、知るようになってきている。そして、研究所が何をやっているのは詳しくは知らなくても、「わしらの暮らしに近い」という感覚は広がり始めた。

研究所が昨年（98年）11月、「早川町民塾」に向けて、テーマや企画を募ったところ、次のような町民からの提案が出すた。①隠れたビュースポットや登山道、貴重な動植物の生息地などを調査して、町の財産となる自然景観を総合的にまとめる。②川やダム湖などの水質調査、浄化方法の勉強をして、上流圏にふさわしい水環境をつくる。③人口減少で負担が大きくなってきている地域活動を整理統合したり、地域内貨幣の可能性などを研究して、一人一人の能力と時間が活かせる新しいシステムを考える。など。これらを見ると、研究所を積極的に活用し、新しい山村の暮らし方を模索しようという動きが表れ始めたと思える。今後は各テーマについて公募でメンバーを募り、提案者を中心に研究グループを組織し活動を始める計画だ。

そういえば、一昨年度に誕生した町民グループ『すばく愛好会』は、昨年3本のテレビに出演し、いくつもの雑誌の取材を受けるなど、大活躍であった。

「すばく」は町内で昭和30年ごろまで食べられていた雑穀のこと。これをいまも伝承する集落のおばあちゃんたちが、愛好会を立ち上げたのだ。66歳のまとめ役を筆頭にメンバーはいずれも70歳以上。ほとんどのおばあちゃんが、若くして地域にある石英斑石の鉱山で働いていた夫を事故や塵肺による病気で亡くしており、「すばく」は連れ合いのいない女性たちが日常的に助け合う特殊なコミュニティの中で守られてきた。

愛好会は、観光客などに食べさせる商売はしていないが、技術を伝承したいという希望があれば、愛好会と研究所が協力して炊き方を伝授している。

「こんなことが喜ばれるんだから、長生きはするもんだ」と、おばあちゃんたちはいまだに張れくさそうである。

彼女たちが聞かせてくれる80年間の思い出話には、山の暮らしの厳しい実話が盛りだくさんで、まだまだ聞きることがない。

座談会

若者に魅力ある水源地域に向けて

――上下流井戸端会議――

出席者（敬称略・五十音順）

日本上流文化圏研究所研究員
小俣　佳子

岐阜県串原村「森の交流大使」
肥後ひろみ

大分県大山町総務課
福井龍太郎

㈱玄代表取締役
政所　利子

（司会）国土庁長官官房水資源部水源地域対策課計画係長
林　愼一郎

林　本日は、お忙しい中、「人と国土」七月号の水資源特集の座談会に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

今回の座談会では、日頃、水の源である水源地域に関連して御活躍いただいております皆様方と、「若者に魅力ある水源地域に向けて――上下流井戸端会議」をテーマとして、今後の水源地域のあり方についていろいろお話をお聞かせいただければと考えております。

ミネラルウォーターの売れ行きとともに飲み水に対する関心は高くなっているように感じます。

また、その源泉ともなっている水源地域における水は、とてもおいしいと思います。それは、上流の森林による自然浄化作用、水源涵養機能等により、おいしい水が豊富であるからだと思っております。

しかしながら、上流地域における開発や過疎化の進行、人々の上流地域に関する無関心等により、上流の山々が荒れてしまい、それらの森林の機能が低下しているのではないかと懸念されています。また、森林の荒廃により、下流にそのまま雨水が注がれ、洪水が多発するのではないかということも懸念されています。

そこで水源地域の保全というか、むしろこれからは水源地域の介護というか、これからの社会を支えていく若者が率先して水源地域を大事にしていかなければと思っています。そのためには水源地域に意識を持っていただかなければなりません。当然、水源地域に意識を持っていただくためには、魅力というか、何か人を引きつけるものがなければならないのではないかと思います。本日は、「水源地域の魅力とは」ということを中心に、我々が今後、水源地域に対してどのようなことができるのかについて御意見をお聞かせいただきながら話を進めさせていただきたいと思っております。

まず、政所さんから順番に、自己紹介を兼ねていただきまして、これまでの水源地域に係る取り組みや考え方について御発言いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

政所　私は、地域特有の個性、資源を生かしてどのように活性化していくかという、地域の産業の応援団長、いわゆる地域産業の活性化のコンサルタントの仕事をしております。

水源地域に行ってみて痛切に感じることは、水源地域としての環境を守らなければいけないという重要な責任を担いながら、それを純粋に追求していくとますます生活環境が悪くなるという矛盾に各地域が非常に悩みを深めているということです。

しかし、少しずつ流れが変わってきたと思いますね。出ていく人は出ていって、地域を愛する人や理解する人が、戻ってくる、移住してくる等、仮に住み始めてきているという現象が確実に起こり始めているというように感じています。

とは言っても、水源地域の問題に対する理解者が増えてきてはいますが、まだまだ若い方には無関心層が多いと感じます。

本日は、皆さんからも現状を是非伺いたいと思っております。

林　ありがとうございます。小俣さん、よろしくお願いします。

小俣　私は、山梨県の早川町から来ました。早川町は、富士川の上流の早川に沿った町で、南アルプスのまさに懐にあります。

町が四年前に日本上流文化圏研究所という研究所を作りまして、そこの研究員をしております。地域の食文化を切り口に活性化を考える仕事をしています。

日本上流文化圏研究所というのは名前のとおり、今、全体的に元気がなくなっている上流域の暮らしを、未来に向けて、中流域や下流の都市の人とも一緒になって作り直し、新しい時代の暮らし方をみんなで見出していこうという目的で作られました。もちろん早川町がどうしたら元気になるかということが大きなテーマなのですが、同じような課題を抱えた上流の地域とネットワークをし、似た課題を一緒に解決して行こうという事業も展開しています。

林　ありがとうございます。肥後さん、よろしくお願いします。

肥後　私は、岐阜県の東南端に位置しています串原村から参りました。愛知県との県境で、岡崎や豊田市というところの上流部に当たりまして、そこの水がめとして機能している奥矢作ダムを抱えている町村の一つです。

私は、三年前まで、愛知県の一宮に住んでいましたが、岐阜県の事業で「森の交流大使」というものがありまして、街

人と国土 第百五十号 P8～20【平成11年7月1日】

に住む若い独身女性を対象に、上流に移り住み、暮らしながら下流の街の人の感性で村の活性化に役立ててほしいという内容の応募があり、応募しました。今年で串原村に赴任して三年目を迎えたところです。

今、私は、特産品開発ということで、村にある農産物を生かし、ナスやキュウリの漬け物を研究・開発したり、おいしいお豆腐づくりをお母さん方と一緒にやっております。

串原村では単独でホームページを作るということになりましたので、村の紹介を兼ねて情報発信を推進し、新たな特産品の販路の開拓にもなるのではないかと思っています。

また、昨年、二回ほど、上下流の交流をやらせていただきました。下流からの声がきっかけで始まったこの交流は上流に新たな波紋を投げかけてくれました。

これからも、どんどんやっていくべきだと感じているところです。

林　ありがとうございます。福井さん、よろしくお願いします。

福井　こんにちは。はじめまして。私は、九州のチベットと言われている大分県の大山町というところからやってきました。

大山町は、九州でもっとも大きな河川、筑後川の上流で、人口が四、二〇〇人くらいの小さな農村です。

水源地域、上流、しかも過疎、農村といろんな問題を抱えているんですけれども、水源地域として意識しているのは、上流に対しての下流、過疎に対しての過密、農村に対して都市という構図です。大山町は、大分県なのですが、筑後川同様経済圏、文化圏といったものの結びつきは、福岡県の方が深いので、自然に下流、都市といったものは福岡を意識しています。

今後、福岡都市圏へ水を供給する目的でダム建設の計画がされています。水は、もちろん上から下にしか流れないのですけれども、下流からも何か得ようではないかということになりました。そこで、上下流の交流を積極的に上流側から仕掛ける意味で昨年、福岡市の新興住宅街に「おおやま生活領事館」というのを開設し、「ムラはマチの恋人」というキャッチフレーズで現在悪戦苦闘しながら取り組んでいるところです。

林　ありがとうございました。自己紹介でもありましたが、今回御出席いただいている政所さんは、地域振興関連の仕事をなさっておられます。そこで、水源地域が魅力を発揮する際の問題点等について、肌で感じたことを御紹介いただきまして、それから幾つかの論点に絞って議論を進めさせていただきたいと思います。政所さん、よろしくお願いします。

政所　今、お三人のお話を伺っていても、仕事でも痛切に感じるのは、地域の魅力はやっぱり「人」だと思うのです。

東京都の台東区谷中に事務所がございます。都会の真ん中というのはたくさん人がいて、仕事場もいっぱいあって、物もあふれていて、楽しそうだなと思われがちなのですが、全国の市街地は空洞化ということがよく言われています。過疎地域で起きていることと都会で起きていることが、実は非常に似ている部分というのがあるのです。それは、人がいっぱいいるのに、友達がいないとか、コミュニケーションがとれないとか、嫁のきてがないと商店街でよく聞かれます。過疎地域で悩んでいるようなことが都会でも実は起こっているのです。

だから、魅力的な人や元気な人がいれば、それが一番幸せなことだと痛切に感じることが多いのです。お三人のお話を伺っていても、積極的に色々なことを仕掛けてますよね。

水源地域は、数量的に例えば人口が少ないといっても、問題は質であり、そういうきっかけづくりのできる人がいるかいないかでしょう。また、いなければ、どこからかヘッドハンティングしてくるとか、そういう仕掛けによって大きく地域が変わる時代ではないかなと思うんです。

お三人とも非常に積極的で、「自分の地域はこのままではいけないのでは」と考えていますが、都会人はそのようなことは考えにくい。

積極的な仕掛けがあるところこそ光が射している。やはり仕掛け方がポイントだと思うんです。地域は人に始まり、人に尽きるんじゃないかなと思います。

福井　生活領事館を建てたところは、福岡市の新興住宅街なのです。大山町の地域づくりの団体と地元の方が集まって交流会を行いました。いろいろな意見がでましたが、こういった積極的な人たちを相互に活用することは必要だと思います。

政所　飲み水への関心というのは高くなってきていると思うんですけれども、水源地域に対する関心というとまだまだだと感じます。水をたどっていくと森につながっているというのを実感を持てるきっかけがある人とない人では、関心度はだいぶ違うのだなと思うのです。

林　実は、お恥ずかしい話なんですが、この職場に来るまで、水源地域という言葉すら知りませんでした。水道の蛇口をひねれば水が何の苦労もなく出てくるからでしょうか。これまで水に対して何の疑問を感じたことがありませんでした。

思うに最近の若い人というのは、普段飲んでいる水の源である「水源地域」という言葉を知っているんですかね。言い換えれば、以前の私みたいに水源地域に無関心な者がいるのではないかと思うんですが、本当に関心がないのでしょうか。もしないのなら、なぜなのでしょうかということについて御意見をお聞かせ願えればと思います。では、小俣さんからお願いいたします。

小俣　必ずしも若い人に限って興味がないということではないと思います。水源の近くに住んでいるからといって、本当に水源の地域の未来像を真剣に考えているかというと、そうとも言えないでしょう。

うちの研究所には学生研究員というのもいまして、都市でも農村でも、上流地域に興味がある人の研究のステージにしてもらおうと学生たちを広く受け入れる用意があり、若い人たちの考える場になっています。

上流地域に実際に暮らすまではいかなくても、何か惹かれるものがあって、地域にやってくる若者というのはすごく多いのです。そういうことを考えると、若者が一概に意識が低いというようなことは言えないと思うのですね。

早川町では、四〇代、五〇代でも若者なのです。例えば旅館の後継者達がその年代に差し掛かっています。最近のお客様の意識が高まっていることもあって、上流とはいえ、本当に地域の水質とか、水と親しむ環境が良いのかどうか、イメージだけではない本物を求め始めています。次を担っていく世代の水に対する関心は大きいと思います。

林　肥後さんよろしくお願いします。

小俣佳子氏

肥後　どの世代が関心を持っているかというよりも、持っている人は持っていると思いますし、逆に、いくら森に囲まれているからといって、山村の若い人がそういうことに関心があるのかというと、これも何とも言えないですよね。あまりに恵まれ過ぎちゃって関心を持っていない人のほうが多いくらいであって、自分の山がどこの山かということも知らない人もほとんどです。

串原村では中学生全員が「山林学習」として山仕事の大切さ、山林の果たす役割というような学習をしながら実際に山仕事を体験します。これは、とても有意義なことだと思います。また、矢作川流域では、子供たちが交流をするための基金を下流の人たちが作っており、そういう基金を使って、毎年、上流の子を下流へ招いてくれるんです。そこでは、潮干狩りとか、岡崎城の見学とかを企画してくれます。そういうことも良いことだと思うのですが、もっと本質的な内容でも良いのではないかと思います。それは、山でできた水が流れてきてこの水はきれいになっているんだよとか、川を見ながら、こういう生物が住んでいる川は○○なんだよとか、上流の子を連れて下流の川を見て歩くということも大切で、逆に上流の子が下流の子を招いて、一緒に山を見てもらったり、山だけに関わらず、畑を耕すにしても、なるべく化学肥料を使わず、農薬を控えて堆肥を作ったり、なるだけ自然のものをつかって、化学肥料等を川に流さないようにしているということも見せたりした方が良いのかと思います。

こういったことを下流の子供達も一緒に中学生や小学生の時に体験するということは、将来何らかの形でプラスの効果がでてくるのではないかと思います。

林　福井さんよろしくお願いします。

福井　当町の場合、下流域と言えば福岡の都市圏ですが、市民の節水意識がなければ二年に一回は渇水状況を招くといわれるくらいなので、水に関してはかなり意識が高いのではないかと思いますね。

しかしながら、先日、福岡市で開催された水源地の物産展に大山町も参加したのですが、下流の方々に大山町がどこなのかとか、水源地域としてはあまり意識されていないのではないかと実感しました。

昨年から、大山町に林野庁から職員が出向してきておりまして、彼が森林教室を地元の小学校でやっているんですよ。森林の模型を使って、わかりやすく見せるわけです。非常にこれが好評で、隣町とか福岡市の方からも是非やってくれというような話まであるんです。

肥後さんもおっしゃっていましたけれども、そういった教育、地道な活動というものが非常に大切なのではないかという気がしています。

林　政所さんよろしくお願いします。

政所　非常に気にかかっていることは、水源地域の子供達が、意外と山とか森で遊んでいないということが結構多いことです。これからは、実体験を持つことが非常に大切なことだと思うのです。知識偏重主義で、これがこういう草の名前だとか、虫の名前だとかを覚えるのではなくて、地元で遊んでいる子供達ならではの遊びがあったり、多少乱暴なことや危険なことを通して子ども同士の会話が育まれれば、真のネットワークが広がると思うのです。

関心がない人に関心を呼ぶ起こすというのは、他の分野でも難しいことなのです。ですから、非常に積極的に関心を持っている人に対して、できる限り効率よく情報発信を重ねて味方になってもらうことが大切だと思います。全ての人に地域に来てもらうというのは無理でも、まず関心を持ってもらうというのが第一段階だとしたら、ときどきは手紙をくれるというのが第二段階で、第三段階は、ときどきはビデオレターをくれる。その先は、様々な活動に参加してもらう、少しでも関心があれば、触れられるようなプログラムをたくさん用意することが重要だと思います。

私は、今、串原村の串原亭のレストランの案内パンフレットを感心して見ていたんです。いろいろとやってらっしゃる。「胃袋に記憶させる」、この情報の発信の仕方というのは非常にダイレクトで効果があるのではないかなと思うんです。脳で記憶すると、だいたいすぐ忘れちゃうんものなのです。これは、関心がある者を根強いリピーターにさせていくというきっかけになるのではないですかね。

肥後　交流をしているときでも、お昼を挟んだりとかしますと、そういう時に、村の豆腐とかコンニャクとかを食べていただいたり、実際に体験して作ってもらったりすると、頭でも覚え、体でも覚えてもらっているようなので、とてもいいことかなと思います。

林　ところで、広島のダム所在町村に出張に行った時に、環境学習をやっている小学校がありまして、そこで小学生と懇談をさせていただいたのですが、地元についてよく知っていると感心させられました。子供達への環境学習以外に水源地域に対する認識を高める方策など、何かあればお聞かせ願いたいんですが。小俣さん何かございますか。

小俣　早川町は、南北に四〇kmぐらいあって、町の中にも川の上流、下流があります。もちろん、その下にはまだ富士川があって、駿河湾に行くまでに、きっとたくさんの人々と上流、下流のいろんな関係を築いていると思うんです。

そういう、自分達と水の赤い糸を探ろうと、研究所の中に地元住民の水環境調査班ができました。地域の人の水に関する話題は豊富で、昔、川と親しんだ世代からは、その頃の環境への哀愁が吹き出してきますし、昔はどではなくても、自分達の水はまだ美味しいという自負もあります。若いお父さん、お母さん達の中には、今の子供達にも川遊びの体験をさせてあげたいという思いもあります。そこでこの際、水に対していろんな問題意識を温めている町民みんなで水の研究をしようということになったのです。

この前、第一回の水源ピクニックをしたのですが、いざ歩き始めてみたら、簡易水道の水源よりも、もっと小さい戸数単位で山の水を引いていました。そこでは、カルキの入っていない水源の方が集落の人達の利用度がずっと高くて、みんなそちらの方を台所で使っていまして、地域を歩くと頭の中で考えていたこととは違う現実が見えてきました。地域の中でも、みんなで、知ったかぶりをせずに実際に歩いてみることは大切なことです。町の中でも上流と下流の交流というのは日常の事ではありませんから、自分の集落と違う水環境を見るのもすごく楽しかったようです。

林　肥後さん、何かございますか。

肥後　私も地元の子が、地元の川を知る機会がないのではないかと感じております。また、水に関しても、水道が完備されたわけなんですけれども、飲み水に

肥後ひろみ氏

人と国土 第百五十号 P8～20【平成11年7月1日】

福井龍太郎 氏

関しては、今でも井戸水とか沢の水というのを使っていますので、「何で水道が引かれたのかな」なんて思うこともあります。

村の人達も、一軒一軒に合併処理槽という処理槽を作って、きれいな水を流すことには気を使っています。また、森林整備の不行き届きで井戸の水や沢の水が枯れたという話も耳にします。水に関することを改めて勉強する機会を設け、下流の方々に呼びかけて一緒に学習すると良いのではないかと思います。　また、インターネットでそういう情報を発信したり、交換することも良いことではないかと思います。

政所　私、お豆腐が好きなんですけれども、デパート等で全国のおいしいお豆腐は確かに手に入るのですよ。ところが、東京のようにお美味しくない水のプールの中に入れた途端に、美味しさが半減するんです。それこそお豆腐って八〇%水ですよね。産地で食べたら美味しかったのにという経験がありませんか。やっぱり美味しい水なのです。水の美味しいところで、吟味された材料でいただく、「だから、いらっしゃいよ」と積極的にPRして、皆さんが納得される時代だと思うのです。水が美味しいということは、かなりインパクトがあると思います。

林　福井さん、何かございますか。

福井　昔は泳いだり、魚を捕ったりと本当にきれいな水だったのです。最近は、地元の人が見ても「ちょっと汚いな」という感じがするぐらいですから、下流の人はなおのこと。まず水がきれいじゃないと関心も持ってくれないでしょう。あそこに行けばホタルが毎年いるとか、アユが釣れるとか、そういう環境をつくらなければ、意識を持ってもらおうにも、持ってもらいづらいんじゃないかなという感じがしますね。

林　政所さん、何かございますか。

政所　先ほど、胃袋に記憶という表現をしたのですけれど、水が美味しいと幸せだという体験を、たくさん持ってもらうということもとても大切だと思うんですね。

何も皆が皆定住してもらわなくても、もっと参加者を増やす方法ってないでしょうかね。気軽に一か月ぐらいそこに住めるということとかの仕掛けというのができないかなと思ったり、一年間ぐらい強制的に水源地に行って水源を守る義務教育の義務みたいに、そういう活動に参加しないと卒業させないとか、多くの人が水源地での思い出を必ず持っているというようなプログラムができればと常々切に思っているんです。例えば山村留学とか皆さんのところでやっていらっしゃる例はありますか。

小俣　早川町では、東京の品川区と交流をしているので、そこの子供達が山村体験に来るなど限られた受け入れはやっています。

やはり水源に親しんでもらうためには、山の魅力と、山の環境の中で育まれた農山村文化というか、脈々と受け継いできた地域の特質や技術とか、そういうものを様々組み合わせて魅力の発信をしていくということが大切なのだろうと思います。

政所　その組み合わせが大切だと私も思うのですね。切り取ったように、ゴールデンウィークのあるコンディションのいい時期だけとか、好ましくコントロールされ、切り取った自然だけを味わって、「ありがとう」と言ってごみを置いていくのではなくて、朝から晩に様々な暮らしがあるように、四季折々に様々な特質があるわけです。だから、ある一定期間、暮らしの文化を伝えられるというやり方があったら良いと常々思っているのです。

福井　福岡市の小学生やPTAの方が一緒に、約二〇〇人ぐらいで毎年夏休みに水ウォッチングというイベントに参加しています。かなり広いプールを川の中に石積みして作って、泳いだり、その中の一区画にシートを張って、そこにコイだとかウナギだとかをいっぱい入れて、掴み取りをしたりしています。

二、三泊でも、そこでテントを張っていろいろなプログラムを組み合わせれば、きっといい思い出になるのだと思うのですが、時間や人数の制限がでてしまうのが残念なところです。

小俣　何度もリピートしてもらって、達成感や体験を深める中で更に楽しくなるというような、そういうプログラムにしたいといつも思うのですが、まだまだ工夫が足りないと思います。

政所　水を守るとかというと、水質を化学式で美しくするというのではなくて、森が魚を育てている、生命を育んでいるという、つながっている鎖の構造がなかなか見えにくいですよね。プログラムづくりをそれぞれの地域が工夫して、個性的に地域間競争をしないといけないですね。

林　話は変わりますが都市近郊型を目指している上流って結構あるようには聞いているんですが、私は上流の魅力というのは上流自身にあると思っているのですが、みなさんの「上流の魅力」というのは、何であるのかということと、先程もお話がでていたのですが、私も情報というものは非常に大切なものだと思っています。それぞれの水源地域の方々が考えることなのでしょうが、どのような情報システムの構築をすれば良いのか、この辺をお聞かせ願えればと思います。小俣さんからよろしくお願いいたします。

小俣　命を育む水の源、非常に哲学的なのですけれども、地球上すべての生物を支えている場所に住んでいるということ自体が誇りと思えるような、価値観、これを喜びとして生きることができれば、水源地域・上流に暮らしていくことってすごく楽しいと思うのです。

私は、三年間早川町に暮らして、私にとって地域の宝は、やはり高齢者だと思っています。様々な物づくりの技とか暮らしの知恵を綿々と受け継ぎ暮らしてきたことは、すばらしいと思いますし、その生き方の中からたくさんのヒントが見つかると思うのです。これらが上流の魅力だと思うのです。

ただ懐かしいだけではなくて、その知恵を未来にどのように最先端で生かしていけるかが、これからの上流が一番に取り組んでいくことだと思うのですね。若い人たちも終んできて最先端の研究ができて、そこで自分の力が発揮できるとか、ただ懐かしむだけではない未来を拓く田舎ができてきたら面白いのではないでしょうか。

早川町と研究所ではホームページを作っています。早川町民は二、〇〇〇人なので二、〇〇〇人のホームページといいます。町民それぞれの思いとか技などをできるだけ発信していこうということで、最終的には二、〇〇〇人全員を紹介するのが目標です。十年計画で全部の集落を回って取材しています。

町民の生の情報が新しいツーリズムに結びついていくのではないかと思っています。

政所利子氏

林　上下流交流の効果についてはどう思われますか。

小俣　上流文化圏研究所では、日本上流文化圏会議というのをやっています。研究所ができた時に、早川町の一番上流の集落で記念シンポジュームで行ったのですが、この時各地から参加して、早川町の考え方とか上流文化圏構想に賛同してくれた人々が、その後、各地で開いてくれています。

この会議には、上流、下流、都市、山村から、毎回、一〇〇人から二〇〇人が集まってくれて、会場地に即したテーマを設定して、意見を交わし、お互いに知恵を出し合い、また、各々の地域に情報を持ち帰る場になっているのです。

この中からだんだん様々な地域との直接の交流が広がっているという感じです。

肥後　串原村の場合、八割から九割ぐらいが森林なんです。私は、緑の山の持つ力というのが魅力だと思うんです。来村者は山や緑を見て、自然を見て、ホッとし、リラクゼーションを感じられている人が多いのではないでしょうか。

それから、高齢者の方が元気で、とても魅力的です。今は本当に本なんてお金にならないもので放ったらかしにしている人が多いのに、それではいけないということで本を切って、お金にならないけれども整備をしている人もいるのだというそういった心情が、山村の魅力のひとつになっているのではないでしょうか。

また、上流地域という水源地に対する認識が薄い自治体が上下流を問わず、全国的にまだまだたくさんあるのではないかと感じます。特にダム関係ですと、上流、下流の町村ごとが固まって組織を作っているわけですが、その中ですらうまく機能していない面があります。個々で活動している市民団体も下流にあるようなので、そのような機構を基盤としたネットワークづくりというのが、これからもっと大切になってくるように思います。

縦のつながりももちろんですけれども、横のつながりも大事なのかなと。下流は下流同士で、上流は上流同士でというのは必要になると思います。

福井　去年の三月でしたか、同じ悩みを持つ周辺の市町村の若い人、五〇人ぐらいを集めて、過疎地域フォーラムというものをやりました。このフォーラムの中で「若者にとってふるさとは生きるに値する場所か」という題で、ふるさとに「残る派」と「残らない派」に分かれて事前に行っておいた一般と高校生のアンケートの結果をもとにディベートを行いました。

その時のアンケートの結果なんですけれども、三〇代以上の方にアンケートをとった結果で、魅力は何ですかという質問に、やっぱり「自然が多い」というのが四〇%ぐらいで多いのです。しかし、高校三年生への結果見てみると、「自然が多い」という回答は、約半分の二〇%ぐらいになってしまいました。彼らが求めているものというのは、利便性だとか、遊び場だとか、レジャーだとかに重点が置かれているわけです。魅力の価値観というのが違うわけなのでしょう。

また、ディベートの方では「出ていく派」の主張というのは、かなり数値というかデータ的にきちんとでるのです。この町には何がないとか、こっちには何があるとか。ところが、「残る派」の主張というのは、水がきれいだとか、人情が厚いとか、情緒的な部分でしか訴えることができなくて説得力に欠けるのですね。「残る派」の意見から考えると魅力とは個人の情緒がベースになっており、これが地域の魅力だということが難しいように思いました。

林　ところで大山町は下流の福岡県と、梅もぎとか花見とか上下流交流をやっていますけれども、上下流交流の意義といいますか何かこれによって、「良いな」と思ったことはありますか。

福井　例えば、さっきのお豆腐でもコンニャクでも、おじいちゃん、おばあちゃん達が持っている知恵とか、そういうものはそこに住んでいる人にとっては当たり前のことなのですけれども、外部の方から見れば非常に新鮮に映ったりだとか、それを見た都市の方は、上流文化の再発見というか、改めて認識するというか、そういう意味では非常に効果があると思うのですね。逆の場合もまた言えるわけですが。

林　地元の意識向上に、上下流交流はある程度役立っていると。

福井　一般に上流と下流が会う場所という、接点というのがなかなかないのが、現状ですが、生活領事館のおかげでこれからいろいろな可能性が広がりますから、意識の向上には役に立ってくると思います。

林　政所さん、いろいろ地方を回られて、上流の魅力というのはどうお感じになられていますか。

政所　一言でいうならば、例えば「心の疲れは山へ、体の疲れは海へ」というような言葉があるのですね。安全な水を求め、空気のいいところで、いい環境で自分は生活したいという意思を持っている人とか、子供がアトピーとか喘息というので、どうしても転地療養をしなくてはいけないとか、実際に転地希望者数が増えているわけです。

それらの原因というのは、経済至上主義とか効率主義とか、過密ですよね。過疎に対して過密という。明らかにデジタル化、数値化されてつかみ始めてきていると思うのですね。PPMほどではないですが、ある一定の量を超えると人体に何か弊害が出てくる。心に病んだ症状が出てくるというのは一番嘆くべきことだと思うのです。

上流の魅力というのは、確かに情緒的に潤う部分もあるし、今後は、極めて説得材料を持った新しい価値観を認識させてくれると思うのですね。「何でこんなところに住んでいるのですか、本当に良いのですか」と聞きたくなるような不便なところでも、ここにいるからこそ自分のやりがいがあるとかの夢や誇りをことらも感じとれるくらいの勢いを持っていると思います。

これからは、効率至上主義から環境効率至上主義になることだと思うのです。現にドイツは、環境産業で外貨を稼いでいるわけです。新産業の種を探しに中国で炭の研究をしていたりとか、東洋でいろいろな、薬膳の勉強をしていたり、産業の苗床として山間地にはいっぱい種があるんだと思うのですよ。上流にこそ新産業の芽があると感じているのです。

上流の魅力とは、産業の創設地として魅力ととらえています。

林　先程政所さんの話にもあったように、やはり「人」というのが一番のキーポイントだと、私も思っております。

そこで、人材育成をどのようにやっていくべきかを教えていただくとともに、一〇〇人いたら一〇〇人を教育できるわけがないので、その中で皆さんのようなやる気がある方の仲間を、地道に増やしていくことが重要だと思います。そういう仲間を増やしていくにはどうしたらよろしいと思いますか。この二点についてお聞かせ願いたいのですが。小俣さんからよろしくお願いします。

小俣　早川町の場合は、中学校を卒業すると高校へ進学する子はだいたい町外に出てしまうので、子供達が一五歳になるまでの間に、どういう地域の魅力が伝えられるかということが、ひとつの大きなテーマです。

そして今、町を支えている高齢者が、どこまで現役で頑張ってくれるかがひとつのポイントのような気が私はするのです。

子供達に地域のことを教える学習教材をどう工夫していくかは、地域全体で考えていくことが大切だと思います。

高齢者については、今、六〇歳で定年すると、その後帰農して、第二の人生を田舎で始めるとかいう人がすごく増えていると聞いています。自分や子供や孫の食べる分を自分で作って暮らしたいという人達は、きっとこれから帰ってくると思います。

そういうときに、今いる高齢者、七〇代とか八〇代の人達がバリバリ現役で頑張っているというのは、すごい励みになると思います。

地域の良さを十分に発揮させて子供達を育て、一緒に暮らしている高齢者の現役度を上げるという事ができれば、地域の人の力というのはすごく大きくなっていくのではないでしょうか。

肥後　串原村は、高校生になると下宿する場合が大半なので、そのまま街に出て、街の魅力に味をしめてしまって、なかなか帰ってきてくれないというのが実状です。

だけど逆に、街の人の中で街の中にあるものよりも山村にあるものに魅力を感じる人もいます。

村の人で賄いきれないところをやる気のある街の人たちに来てもらい埋めて貰う。その受け入れる生活基盤を整えるということが、私は大切なんじゃないかなと感じています。

福井　例えば福岡都市圏は何十万とか何百万人いるわけですから、その辺の人を連れてきたりだとか、知恵を借りたり、ネットワークを広げるということしかできないのではないかという実感を持っています。そういった外部の人たちを利用するというか、期待したいと思っております。

政所　今おっしゃられたように、ピカッと光る人に恵まれているところもありますが、多くは、限られた人材と限られた資金、財政力で何とか立て直さなきゃいけないというところが現実的に多いですよね。

まずは、今あるシステムの改良をしたり改善をする。例えば、現況居住者の眠っている力を呼び覚ますことが大切だと思います。調査をすると、何かしてもらいたいという高齢者ばかりでは、どうもないのですよ。自分が社会に認めてもらったり、誰かの役に立つことこそが元気の素となっている高齢者を元気にさせるには、自分が何かの役に立つということがとても大事だということが、調査の中でも出てくるんです。私自身も、やっぱりそうでありたいなと思います。

若者を何とか食い止めるとか、若者に来てもらうとかいう方向にどうしても行きたいですが、それもなかなか、現実的には難しい。農業に限らず都市でリタイアした方に、どんどん活躍してもらう場を設定するなどというようにして工夫すればもっと積極的に方法を生みだせる気がしますね。

人材教育というと非常に大がかりなことのように思うのですが、繰り返しになりますが、今ある人材をもっともっと生かしていく方法から始めるということがあるように思います。特に高齢者というのは、知恵の塊ですからね。

林　どうもありがとうございました。

最後に、今回のテーマを目指した取り組みを展開するために、今後、何をして行きたいか教えてください。小俣さんからお願いいたします。

小俣　具体的に欠ける回答ですが、山に住む人間として、飛びきり格好よく生きるといいますか、そこの宝物を味わい尽くして楽しんで生きるというか、そこでなければできない格好良い生活というか、そういう生活をしていきたいなと思っています。

これからの山の暮らしは、下りていく人もいるけれども、多分確実に入ってくる人がいて、その新しい人達と残って生きていくのを選ぶ人達で、また新しく作り直して未来がやってくると思うのです。その時に、まず住み始めた人から、真に豊かだと羨ましがられる暮らしをしていきたいです。それが若者を引きつける一番の魅力だというように思います。

肥後　本日、いろんな話を伺って、上下流の交流は必要なんだと改めて感じました。地元にはダム関係の機構があるので、そこに働きかけ、川をウォッチングしたり、山に来てもらって、山の様子を見たり、おばあちゃんたちといっしょに農村の文化というのに触れていただいたり、話を聞いたり、体験していただくというものに持っていきたいなと思っております。

これからも今までの活動をより深めて、交流の枠を広げ、さらに濃いものにするためにも、上流と下流でうまく連携をとっていきたいと思います。

福井　交流という意味では、生活領事館の活動で若干足掛かりができた部分もありますので、地道な小さな事業、ずっとやってきた事業を積み重ねて、展開していきたいと思っております。

例えば、今ちょっと考えているのは、PKOといって、ピース・キーピングのほうじゃなくて、プラム・キーピング・オペレーションのことで、梅を守っていく活動ができないかと考えています。今は梅の収穫時期なのですけれども、農家も高齢化や人手不足などで、作業が本当に大変なのですよ。今は実験的に、ウメ科ということで何十人かでちぎってもらって持って帰って、梅干しの漬け方を指導するということをやっています。これを下流の方が、その時期になったらワーッと来て、その畑を、おじいちゃん、おばあちゃんの代わりにちぎってあげる。その代わりに、おじいちゃん、おばあちゃんはおいしい梅干しの漬け方を教えるといったことができれば非常に面白いと思っています。

そういった、都市と農村、上流と下流、どちらの文化も享受したいと思うので

林　愼一郎 氏

人と国土 第百五十号 P8～20【平成11年7月1日】

す。そこからの支援を期待し合える都市と農村のパートナーシップがみえたらが、そういう人を集めるネットワークができれば非常に楽しみだなと思ってございます。

そのためにはどうしたらいいのかというのは、きょうの皆さんのお話を、参考に、また勉強していきたいと思います。ありがとうございました。

林　政府さん、きょう、水源地域の方々のお話をいろいろ聞かせていただいたのですが、水源地域以外に住んでいる者は、私と政府さんしかいないのですが、今回のテーマを目指した取り組みを展開するために、我々はどんなサポートができるんでしょうかね。

政府　きょう改めて学ばしていただいたのは、水源地域というのは、川や森林を育んでいるというだけでなくて同時に、未来のいろいろな価値観の源として、人材教育の一番の実験場、理想的な実験場でもあり、子供達の思いをつなぐ場でもあるというふうに、きょうは新しいいろいろな出来事というか、事を起こしていく活性化をいただいたようなことを、改めてまた確信を持っただけです。

そのためには、人材が不足しているというのは、いろいろ、えっとやっぱりアンケートしたらいろいろ出てきますけれども、それは、情報発信をして、質の高い、志のある人がどんどん来てもらえるようにしていくことでいろいろ。それも一朝一夕にはできないから、NPOの活動というものは重要だと思います。これも社会的実験として始めてきます。また、皆さんのようにいろいろな参加していらっしゃるかたがいっぱい大事だと思います。目的は様々であって良いと思うのですね。いろんな形のたくさん対応策に生み出せるきっかけをいろいろ、ずっと都市にいるきっかけをいろいろ、一定の所に留まらず、いろいろ、ぐるぐるいろいろ行ったり来たりして、そういろいろ流れる人がどんどん増えるというようなことが、大事だと思います。

生活環境農業とおっしゃったのですけれども、受け入れ体制というのも、物はかりではなくて、ほんとうの人を受け止めてくれるようなのキャパシティーがなければならないと思います。これも、ひと言は、図解的だとか、社会とおっしゃっていらっしゃいましたけれども、今はそんな時代ではないわけです。経験するのは経験をして、それを受け入れていく、ほんとうにいろいろ、ほんとうに流れ動き、留まる所がないというような流れをつくることが魅力になるのではないかと非常に強く感じました。

そんなようで、支援者というかボーターというか、ファンターをどうやったらかけますか、いろんな層、価値観の人を多様に巻きこむというようなことが重要だと思うのですね。あまり難しく固まるというのは、そこら辺原因があると思うのです。ですから、そんな上手な交流を、自由奇抜な精神的に、やはり現場に触れて交流していくことだと思いますので、ぜひそういうお願いします。

林　どうもありがとうございました。今回の皆様方からの現場サイドのお話を参考にしながら、我々としても、水源地域対策の展開と発揚に今後とも努力してまいりたいと思っております。

今後とも現場の声を我々にお聞かせいただくようにも、長井、藤田両幹事とご相談していただければと思っております。

本日は、お忙しい中、どうもありがとうございました。

地方自治職員研修 441号 P60【平成11年8月15日】

という島のページの方が目立ちますね」

Yaji「なっ、行ってみたくなるだろう。バーチャル島民も募集しているし」

Kita「一地域の情報発信が、これだけ元気良く市のホームページの中でやるというのは珍しいですね」

Yaji「笠岡市の方にも、住宅情報掲示板っていうのがあるんだ」

Kita「『住めば都・住宅情報』かぁ。定住、人口増加策っていうことですかね」

Yaji「市内の不動産業者と協力して、住宅情報の提供や市民の住まい探しの支援だな」

Kita「それにしても、ここのホームページにはあちこちに掲示板がありますね」

Yaji「市民が自由に意見表明できるんだな」

Kita「電子掲示板は、自由に書けるのは良いのですが、誹謗中傷とか不適切な発言が載ってしまう心配があるんですよ」

Yaji「プライバシー侵害事件が時々新聞で報道されているよな」

Kita「そういう時に適切に対処できる利用約款が必要ですね」

Yaji「発言を削除するとか？」

Kita「意見表明の権利を阻害しない程度の制約は必要ですよね」

Yaji「しかし、なかなか良い発言もあるぞ」

Kita「悪い方ばかり考えずに、市民の自発性に期待したいですね」

2,000人のホームページ 山梨県早川町

Yaji「山では、南アルプスが良かったなぁ」

Kita「先輩もネットサーフィンが上手になったようですね」

Yaji「森林と温泉で探してたんだけれど、おもしろいホームページを見つけたんだ」

Kita「観光情報ですか？」

Yaji「いやいや、人口2,000人の早川町のホ

http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/JORYU/J-2000

ームページだよ。ほら」

Kita「さわやかなトップページですね」

Yaji「まだ工事中のページが多くて、発展途上っていうところだな」

Kita「一般的な町民向け施策や施設情報のページが無いようですね」

Yaji「うん、だけど『2,000人のホームページ』っていうほのぼのしたページがあるんだ」

Kita「これですね。へえ、町民の紹介を顔写真付きでしているんですね」

Yaji「まだ達成率2,000分の80だそうだけど」

Kita「ということは、全町民のプロフィールを紹介しようということですね。プライバシーの問題には気を付けないといけないですね」

Yaji「了解をとった上でやれば問題ないんじゃないかな」

Kita「ホームページの趣旨を理解してもらわなければなりませんね。それにしてもなかなかユニークな人がいますね」

Yaji「人材は、地域の資源だっていうことが伝わってくるな」

谷地さん北さん、夏休みの話から、またまた地域の話になってきたようだ。

21世紀の豊かさを農山居から考える

鈴木　輝隆
日本上流文化圏研究所常任理事

新しいコミュニティのきざし

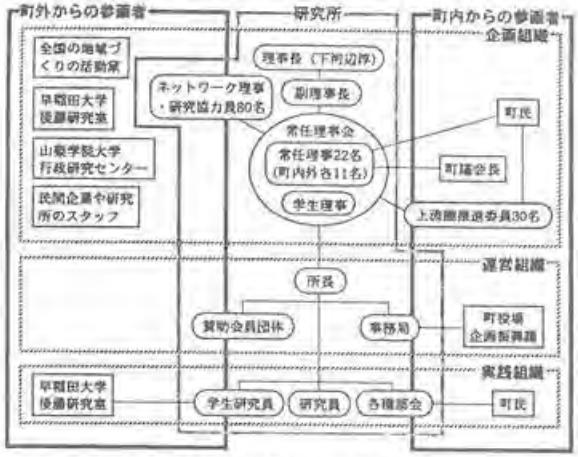
この8月に、山梨県早川町で爽やかな結婚式が行われました。

早川町は96%が森林であり、3,000メートル級の南アルプスを背景にもつ美しい山村です。平成7年、21世紀の100年間をかけて22世紀の山村のあり方を考えようと日本上流文化圏研究所を設立しました。現代社会にあっては、人々は巨大都市を志向し、山村は見捨てられて過疎となり、生き残ることさえ難しい時代です。研究所は、山村に暮らす意味や意志を明確にし、上流域の暮らしや個人の物語を創造していくことをコンセプトとしてスタートしました。

「地域（上流域）から国を考える」をテーマにして、足下の地域研究や全国規模のネットワークによる会議を開催しています。下河辺淳理事長（東京海上研究所理事長／元国土事務次官）とともに、行き詰まった経済至上主義の現代社会から、人間がより良く生きていくために、社会を地域住民自ら研究し始めたのです。気の遠くなるようなタフな100年計画「日本上流文化圏構想」を掲げ、新しい山村社会の実現に向けての挑戦です。夢物語は少しずつですが、多くの友情の中から作られつつあります。

> ＊　日本上流文化圏研究所（同研究所ホームページより）
>
> ●いのちの水から、風土とくらしを学び、地域と国を考え、実践する研究機関
>
> 山から森へ、野へ、そして海へ、再び雲となって山へ。この水の循環を基盤として人間の生活圏を考え、なによりも大切だと考えるのが水系主義だといわれています。世界のどの国でもどの地域でも、この水系を基本として成り立ってきました。日本も例外ではありません。近代以降の経済至上、効率至上の考え方はこの水系を切断し、本来生き物のすべてがよって立つ環境をこわし続けてきました。
>
> 時代は大きく回転をはじめています。この失われた水系への視点を甦らせ、その源である上流圏に光を当て、歩き、汗を流し、人々と語り合い、共感を得ること、そして新たに本質的な価値、普遍的な価値を創造していくこと、これが私たちの研究所の理念であり目標です。
>
> この研究所のささやかな活動の成果が、ひろく全国の上流圏に生き続ける人びとの共鳴をよび、地域を超えて連帯を促すこと、さらに20世紀の最後の遺産として、新しい世紀を切りひらく思想と行動のひとつの模範になることを願っています。

日本上流文化圏研究所の組織



研究所の組織は、常任理事会を中心に構成され、全国の地域づくり活動家を「ネットワーク理事・研究協力員」と位置づけ、人材のネットワーク化を図っている。

小俣さんは、6年前、地元の新聞社を退職した後、熊本県小国町、長野県小谷村、富山県利賀村での修行を経て、食を中心とした研究をするために、5年前、人口2,000人足らずの早川町に移住した酔狂な女性です。峰打さんは学生研究員となり、早川町から東京の早稲田大学に通い、今春、大学院を卒業した田舎を知らない無謀な若者です。2人とも早川町とは縁もゆかりもありませんが、早川町に「愛情」と「希望」をもって移住した人です。

式に参加した彼の大学の同期、先輩・後輩は『彼の生き方は格好良すぎますよ』と話します。彼らの中にも、将来、田舎に住みたいと話す人は少なくありませんでした。

式で小俣さんは山村生活への期待とともに、「伴侶を得た今、これからは周りの人たちが幸せになれるように少しでもお手伝いしたいと思います」とあいさつしたのです。高齢化率が45%を超える過疎の山里の住民の顔が輝きました。

パーティの料理は、地域の人たち12人で準備委員会を作り、心を込めて準備してきました。そば、混ぜご飯、焼いたヤマメ、イノシシ鍋、じゃがいもの煮っ転がし、こんにゃくなど、食器も竹を使った手作りのものです。新婦の髪飾りは地元で育てた麻から主婦が作り上げたものでした。地元の人のあいさつは、新しい地域を作り上げていこうとする二人への感動と、心からの期待感と心配が入り交じった愛情のあふれるものでした。地域全体が親子のようで、地味でありながら光り輝いた山村でも画期的な式となりました。

参加者は地元の住民がほとんど、彼らの先輩である都会から移ってきた陶芸家や能面作家、そして、かつて町の暮らしを支え、今ではすっかり消えてしまった養蚕の復活に取り組んでいる地元研究員である早川町の元議長の姿もありました。

研究所では早川町を創っていく町民の顔が見える地域づくりを目指して、山村生活で鍛えた技や生活の知恵や、町や地域に対する思いでいっぱいにしたいと、「2,000人のホームページ」に10年がかりで取り組んでいます。

現在約100人のホームページが作られています（http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/JORYU/joryu1.html）。小学校でのインターネットを使っての授業や、住民自らが運営する早川インターネット同好会もあります。今回のパーティのプロデューサーは研究所の事務局長で、今春まで地元小学校校長先生をしていた女性です。

研究所が中心となって、年寄りたちのパソコン教室が「義務教育」で行われるようになることを想像しますと、楽しくなります。新しい時代のコミュニティが山里から生まれそうな気がしました。「躍動感あふれる未来は山村にある」と、そんな予感がしました。

戦後価値観の崩壊と農山村コミュニティの可能性

戦後社会の価値がぼろぼろになり、新しい社会の到来を期待しながら待っている時代です。近代化＝都市化の崩壊が始まったのです。

かつて産業は生活から離れた場所に、工業、工場地域を作り出しました。最近の仕事場はごく普通の生活から生まれてきています。ネットワークと情報通信の革新によって、産業は地域の条件を越える時代となりました。早川町の辺鄙な山里の暮らしの中に、コンピューターのソフト会社ができ、頑張っています。

南アルプスの山々に囲まれた山梨県早川町

研究所のフィールド活動の拠点 鍵や一京自田

雇用形態も変化してきています。これからの日本社会はサラリーマンが減る傾向にあります。女性が専門性を活かした小さな起業家となったり、年寄りの中から自分たちサイズの収入と労働を考えての起業家も出てきています。地理的なハンディキャップも越えて規模は小さなものですが、ごく普通に見かけるようになりました。

そして、何よりも若者が終身雇用制度に疑問を抱き始めました。学校を出たらすぐに、最初で最後のチャンスとしての新規卒業生の就職、社会経験もないのに最初の就職で一生を決めねばならないことへの不安といらだちです。人生がなんたるか、自分の適性も良く分からない若い時期に、未来への可能性をたった一度のチャンスで決めねばならない。こんな理不尽なことはないというのです。後ほど紹介しますMIT（マサチューセッツ工科大学）の学生たちは、こうした就職に対して「日本の学生は勇気がある」と言います。これを裏付けるように、彼らの8割は大学院に入る前に社会に出て回り道をしているのです。

戦後社会の雇用制度はほころび始め、既存の組織も大きな組織から小さな組織のネットワークへと、自由と自立を求めて動き始めました。

小さいことは悪いことと市町村合併論は言います。合併で自治体が大きくなると事務処理の合理化が進み、政策能力が付き、コストも下がるといいます。近代はスケール信仰から、効率を追求して個性を失ってきました。効率と経済至上主義による急速な世界の均質化は、地域固有の文化を消失させ、個人ではなく国家や世界の物語だけを作り出してきました。しかし、クオリティよりスケールを追求する論理で、農山村の規模が大きくなれば住民は幸せになれるのでしょうか。

農山村の住民は小さくてもいい、一人ひとりを大切にしてくれる社会の存在を願っています。大きくて動きの取れない組織よりも、むしろ弾力性があって、お互いに助け合える社会こそが大切だと気づき始めたのです。

企業は銀行に見られる再編による巨大化を賛美します。しかし、頑張っても努力が報われない顔の見えない社会よりも小さな成功がお互いに見える、楽しみのある社会を求める人が増えてきました。孤独な大都会社会より小さな農山村コミュニティの方が可能性が大きいのです。

居心地の良い地域は起業家が多いと言います。魅力的な町にはビジネスチャンスが多様に生まれているのです。積極的に生きようとする人にとっては地域の個性のある風土が自分を励まし、存在を確認させる大事な素材があるからです。三重県阿山町の伊賀の里・モクモク手づくりファームの製品のふるさとは「農業」と原料にこだわっています。製品に農業が見えることが当たり前と言います。

石見銀山のふもと島根県大田市大森は人口350人の山村の集落です。年商10億円を超えるファッション製品を製造販売している松場登美さんが暮らしています。その製品は石見銀山の個性や松場さん夫婦の生き方そのものであり、山村の生活を活かした暮らしの提案作品です。今年で起業11年目の松場さん夫婦（プラハウス＆石見銀山生活文化研究所）は、実に多くの農山村に暮らす人を勇気づけ続けています。ビジネスといっても、日本経済の大きさから見れば大したことはないのかもしれませんが、一人ひとりの個性が仕事になり、そのことが地域の生活文化を高め、人間性を高めていくという好循環の仕組みが素晴らしいと思います。

新潟県高柳町

戦後の価値観では、都市が農村の生活をリードし、都市側が一方的に生活様式を配給してきたと思います。松場さんのように、都市側が圧倒的だった衣（ファッション製品）を山村側から提案し、都市に供給するビジネスを成り立たせたことは時代の大きな変化を感じさせます。農山村に暮らす人間の評価も高まり、未来に向かって農山村で暮らす者に自信と誇りを持たせました。20世紀に日本社会が失った地域固有の生活文化の価値観があります。戦後の都市の豊かな価値観が農山村に劣等感を持たせてきた常識が壊れ始めたのです。

「資産」の活用

高柳町は新潟県の豪雪地帯にある美しい山里です。かつては県下一の過疎地域でしたが、過疎化は止まり始めています。10年前から取り組み始めた「じょんのびのまちづくり」の成果が現れてきたからです。

「じょんのび」とは上流文化圏、高柳町では今も大切に使われている言葉です。この地方の方言で、心身ともにのびやかで気持ちの良いことです。例えば、ぽかぽかと気持ちの良い日に、『じょんのびな日やねー』とあいさつします。温泉に浸かって、両手を伸び伸びと上げて「ああ、じょんのびだねー」と、こうした使われ方をしています。

「じょんのび」というまちづくりのコンセプトが地域の個性と目標を明快にさせ、地域資源の活用が始まったからだと思います。地域に暮らす意志がはっきりすれば、資源価値の再認識と運用の方法が地域戦略となります。先に述べました松場さんの実践も同様だと思います。

高柳町は日本では唯一、茅葺(かやぶ)きの家による環状集落が残っています。荻の島地域の茅葺き集落は美しくて懐かしい風景で、国内の人のみならず世界の人を魅了します。今年の7月末に、前述しましたMIT（マサチューセッツ工科大学）建築学科の学生が9人、早稲田大学の学生との合同ワークショップに来日しました。東京経由で彼らは来ましたが、荻の島に来るまでは全く感動しなかった学生の目が、牧歌的な風景を一目見て輝きだしたのです。

じょんのびのまちづくりが始まってから時間も経っていますが、茅葺きは歴史的な資産にも関わらず、地元の人の中には茅葺きの家を古くて汚くて恥をさらすようなものだと未だに思っている人がいます。茅葺きの家に資産価値はない、しかも手間やお金がかかって嫌だと思っている人が多いので、現在も茅葺きの空き家は増加し、崩壊寸前という家も複数あります。

現在、日本の金融資産は約1,230兆円（平成9年日本銀行調べ）で、50歳以上の人がその金融資産の内の58％（平成10年国民生活白書）を持っています。土地資産についても同様で60歳以上の人が6割近くを保有し、しかも金融資産と同等の金額（平成11年経済白書）にもなるそうです。

日本の戦後社会は資産を増やすことにすべてを賭けてきたとも言えます。老後一生かかっても使うことができないほどの資産を、これ以上増やしても仕方ないのですが、将来が不安とただただ溜め込んでいます。一方では、60歳以上の人の自殺は全体の36％（人口動態統計平成9年）を占めて、孤独で淋しい生活をしているのも現実です。

作家の井伏鱒二さんは戦後を振り返って、「日本人は豊かになったが幸せになれなかった」と、語ったと聞きます。資産を貯めるばかりでなく、活かして豊かで幸せな生活をする時代が到来したのです。一度、自分たちの歴史や生活を振り返ってみて資産運用を考えてみることが必要だと思います。個人資産といえども地域資産であり、地域の活性化に大きな影響があります。

高柳町では地域資産を上手に使って地域経営する仕組みがあります。新築した茅葺きの宿泊施設で旅人を迎え、その利益の一部を使って、集落全体の茅葺き屋根の葺き替えのための基金としています。

こうしたサテライト施設だけでなく、コア施設として宿泊施設や温泉施設、レストラン、売店などで構成された「じょんのび村」があります。これらの地域資産の活用によって、年間25万人が訪れ、経済効果は年間10億円にもなっています。農山村での自由度のある発想が、人を活性化させ、しかも地域経済にも潤いを持たせている好例です。

最近では、都会に出た若者が帰るだけでなくIターン者も100人近くあり、その中から美味しいパン屋『麦麦』などの起業家も出るなど、新しいコミュニティも生まれつつあります。

現在、「じょんのび」の精神を深め、さらに世界に広めていこうと「じょんのび研究所」の設立準備がなされています。魅力的な町に人は集まり、地域資産が多くの人に開放され、多様な活用が期待できます。今の日本には、資産を活用する雰囲気やノウハウが少ないのは残念ですが、こうした例も生まれてきています。

そして、資産の活用に当たっては地域住民の声に耳を貸し、住民の思いに応えていくことが一番大切だと思います。早川町の『2,000人のホームページ』や高柳町の『地域リーダーヒアリング』と『全町民アンケート』など、読めば読むほど山村住民の人情と助け合いのすばらしさが実感できます。未来社会の豊かさとは、地域中が親戚のようであり親友のように人情豊かなことであると、私は思うようになってきました。

日本上流文化圏会議

「今の日本の農山村で何が起こっているか」を知りたいと考えるなら、日本上流文化圏会議に参加してみるのもよいと思います。新しい時代の空気や精神を肌で感じとることができます。

未知への挑戦には危険はつきものですが、その代わり新鮮で楽しく、しかも自分をより成長させてくれます。

現在では、都会より農山村の方が創造力を発揮する場としてはよいと思います。大都会で生活は労働や競争の疲れで、新しい挑戦が少なくなっています。都市側が金と自分の生き方に対する自信がなくなり、リストラが正義などと褒め称えられ、働く勇気もなくなっている時代です。多彩な思考の可能性をなくし、いわばフロンティアがない時代です。

新しい発想や行動は仮説から始まります。クリエイティブなことは、全くの偶然からではなく仮説から生まれます。仮説は『カン』が基になります。科学技術の新発見でさえも『カン』による閃きが大きな働きをします。野生の思考のような『カン』が養われない都会生活は仮説が立てられない人間を産み出しました。『カン』は知識だけでなく体験の貴重なエキスから成り立っているからです。新しい体験は少々危険があるがゆえに、100％自分の能力を出し切らなければできないのです。知らない世界、不思議な世界に対しては全力で臨まねばなりません。山で生きるにはマンノウガンが必要で、動物的な『カン』が必要な世界であります。マンノウガンとは、早川町の方言で万能力＝自分で何でもでき、何でも作れることです。冒頭で紹介した小俣さんらが計画している『食』の店の名前の候補でもあります。

周辺環境の少しの変化でも見逃すと山や海、川から何も得られません。人の後をついて行くのでは何も残ってはおらず何も採れません。天変地異に気がつかずに危険な目に遭うこともあります。しかし、『カン』が冴えれば得るものは多く、発見もあり、自信とともに楽しい生活があります。

日本上流文化圏会議は、自由意志での参加の下、地域で活躍する人からお互いが学ぶ会です。山中に200人以上の人が集まって熱心に討議する姿に驚き、そのエネルギーに感動する人も多く、毎回、口コミで参加者の輪は広がっていきます。

都会の若者（大学生）が地域の人と一緒になってあっと驚くような天然に溢れた会場を作り、農山村の魅力と可能性を引き出す舞台となっています。若者の価値観と農山村住民の価値観が融合する時に、新しい時代の不思議なコミュニティの可能性が生まれることもあります。

参加は個人の自由意志で全国各地から集まりますから、さまざまな交流から時間が濃密になってきます。時間というものは、使い方によって、使う人によってこれほどまで違うのかと驚きます。

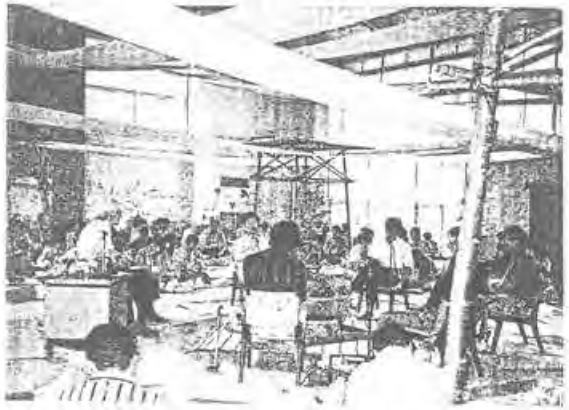
話の内容は、概ね大局観と小さな差異『個性』『地域性』の二つがあります。バランス感覚とはこうした相矛盾することを同時に議論することだと思います。動きがあれば、必ず

反動があります。その反動を無理に押さえようとすれば、必ずどこかに歪みが生じます。大都市の時代には、反動は小さな農山村に現れます。大都市苦戦の時代に、「勢い」は農山漁村に出ることがあります。若者の中にはいち早くこれを見抜いて、生きがいや感動を求めて上流に遡ってきています。

今年の日本上流文化圏会議は静岡県本川根町において、「1000年の学校」をテーマに開催しました。過去1000年以上の地域文化遺伝子を活かして、未来に向けての1000年を考えるという壮大なテーマの会議でした。日本で唯一、今でも焼き畑農業を続けている宮崎県椎葉村の椎葉タニ子さんなどを迎えて「仙人の秘密」の話、地域の小学生が中心になって行われた、文明から離れて山に生きるさまざまな技を体験するワークショップ「仙人になる」。地域の子どもの未来は小中学校時代が大切で、15歳までに地域の魅力を体感しないと地域への愛着心は生まれないのです。地域で生きる体験は大切にもかかわらず、都市にあこがれる知識偏重の教育が山の中でもなされ、なけなしの金をはたいて子どもを都会の大学に出して、やがてはふるさとに帰ってこなくなるのがこれまででした。

「豊」という字は「農」に似ているという研究会が高知県にできましたが、豊かさを感じさせるキーワードは農山漁村、いわゆる上流圏にあります。おもしろい視点です。

働くことの意味もふまえ、未来に向けて農山村の哲学的な構築が求められ、具体的で力強い生活文化の創出も考えねばなりません。人間存在にも論究する会議は後藤春彦さん（早稲田大学工学部教授）のコーディネートによって「仙人の愛」として進められました。奥深い山村、茶畑に囲まれた小学校で、下河辺淳さんや内山節さん（哲学者）らによる論議は緊張感が最後まで続きました。自由であり自立した会の存在はこれから先行き不明ですが、いかにして本質に近づく論議がなされるか、それがこれからの豊かな会の条件だと思います。



「1000年の学校」in南アルプス
第3回日本上流文化圏会議

次回の日本上流文化圏会議は、2000年5月に、砂浜美術館としてユニークな発想で全国を驚愕させた高知県大方町で、初めて海側から上流文化圏と海洋文化圏を論じる予定です。興味のある方はおいでください。

U・Iターンの定着化

全国を歩くと不思議な人物に出会う時代になりました。各地に人物ありです。一昔前までは農山村は田舎と言われる閉鎖的社会で、人物がいても出会うことはありませんでした。よそ者排除の空気が色濃く感じられたものでした。

最近では、地理的条件が悪い辺鄙な場所に出かけても、必ずと言っていいほど凄い人物に会うことが多くなりました。心を開くことによる人生の楽しみが感じられ、豊かな気持ちになり知恵も付きます。内外に驚くような広範囲なネットワークをもつ交流上手な人がいて、地域を散歩する楽しみが増しました。職場やビジネスだけで生きてきた人から見ますと、人間関係のあり方や質が大きく変わってきています。

かつてなら大都市でしか会うことができなかった先端技術を持った人も移住してきています。そして、畑を耕したりしながら、素朴な生き方をしているのです。おかしいことはおかしいと中央に対して距離感を持つことで感じられることもあります。思考の自由性をもてることは楽しみのようです。

大量生産・大量消費型、経済至上主義の世界の厳しさから、日常を丹念に積み重ねる豊かさを求めて住み着いた人もいます。アナログな思考は無限大であり、自分のイメージを主体に考える生き方には魅力を感じます。雑音の少ない山村では深い思考や緊張感が持続できるのです。大都会は落ち着きがなくなり、流行も子どもっぽくなり、大人が集中した仕事をするには向かなくなってきたのかもしれません。現代の大人が求める世界と微妙なずれが生じてきていることもあるのでしょうか。じっくりと人生を見つめたい人、思考の深度や着想の豊かさを求める人も多くなってきています。これだけ大量生産・大量消費的な生活が進むと危険信号を感じて、人真似をしない自分の人生を送りたいと願うことはごく自然なことでもあります。

また、都会的便利さやセンスはコンビニなどを通じて、農山村でも受けられるようになってきました。近くにコンビニがあることを地方に移住することの条件の上位に挙げる人も多くなってきました。巨大なスーパーマーケットも地方の拠点に作られるようになり、車社会ではそれほどの不便はありません。いいことかどうかは分かりませんが農山村も大きく変貌しようとしています。

自分が生まれた土地に住むことが絶対条件の時代ではありません。それは東京圏（東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県）生まれの東京圏育ちという人が4人に1人、また、10代後半から20代前半の若者の3分の1は東京圏に集中しています。ふるさとが東京という人も多くなってきて、人間本来の潜在的な遺伝子が農山村地域を求めるのかもしれません。

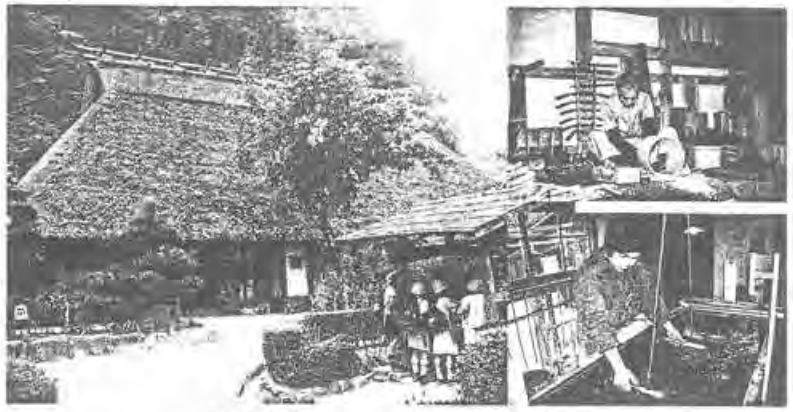
人と違うことが不安だという人もいる一方、人と同じことを求めるのではなく自分を深めたいと思う人も増えてきました。自己実現とは自分を深めることです。そのために緊張感と開放感を求める都会と農山村往来型の人生をおくる人も多くなってきました。少子化や共働きの家庭も多くなり、1つの家庭で家2軒もそれほど珍しいことではなくなってきました。都会と田舎の生活を同時並行にすることも可能な交通環境になってきました。人口が減ってくれば交通渋滞も減ることでしょう。

農山村には特に自分を表現することに妥協したくないアトリエ空間を求めて芸術家が多く移住してきています。山梨県中央沿線には2,000人以上のアート関係者が移住しているとのデータもあります。これからの時代、環境や生き方に危機感を持っている芸術家や若者、リストラで再出発と新たな挑戦の新天地を求めてきた人などさまざまな職業の人が移住してきています。多様性は農山村にも現れ始めています。時代は確実に変わってきています。

地域の編集と創造的な仕事、そして懐かしい未来

次から次へとチャレンジし続ける農山村があります。生涯現役を地域戦略にしてきた先見性のある愛知県足助町がそうです。人間は満足すると成長が止まります。20年前に、手仕事の村を作り新しい観光のあり方を発見させてくれた「三州足助屋敷」。その手法はベトナムからも求められ、今や世界の地域づくりにも貢献しています。

老人たちが中心になってのハムやソーセー



三州足助屋敷

ZIZI工房

ンの製造で年間約1億6,000万円の売り上げがある「ZIZI工房」，パンの製造販売で年間約7,000万円の「バーバラはうす」，それらを使ってのレストランや宿泊施設，その横の別屋で寝たきり老人のデイケアをしている「百年草」は，私にとっては「地域編集」のあり方として発見につぐ発見でした。老人の地域社会での役割を，「編集」し直したのです。

地域の文脈や時代を読みとり，編集し，地域社会に方向付けを行う地域リーダーやそれを陰で支える大勢の人たち。この関係がただ者ではないのです。創造的な仕事が地域から消えていく中にあって，創造的な交流と自分のことを主体的に考え，行動する「太い」生き方が足助町にはあります。地域リーダーが新しい価値を生み出し，新しい人材が生まれ，その仕事を新しい交流の中で育てていきます。新しいリーダーはかつてのリーダーを否定し，挑戦します。そして，前のリーダーは破れても，また，新しいことに挑戦します。こちらははらはらしますが，異なるエネルギーはマンネリ化することなく地域を輝かせます。

リーダーによって地域住民がエネルギーをひとつの方向に結集されますと，さまざまな発見と創造への希望が満ち溢れます。未知の世界への挑戦は楽しさと自分の成長があります。自分の力を出し切る時がなくては成長しないのです。出し切った後にマンネリが来ます。

足助町では，夢想の豊かさと日常を丹念に積み重ねていく努力が常に新しい発見をさせています。その根底には，地域に対する愛情と時代の精神を見抜く長い住民の歴史があります。生活空間から自分たちの記憶にあるものが維持され，創造され続ける精神があります。こうして日々作られ続ける地域は，個人個人が記憶喪失になってきた日本の地域の中でひときわ輝いています。

足助町が近代という巨大な文明の画一性の呪縛から逃れることができたのは，関ヶ原の戦いから帰ってきた武士が脱俗し，寺を中心に紅葉を植え続けた精神が，今もって維持されていることに起因していると思います。

常山県利賀村においても，役場のトラブルなど経済至上主義の社会に支配されつつあるように見えましたが，新しい思想や表現を求めつつ，一方では瞑想空間の中で永遠の歴史や未来のことを考え続ける精神があります。自分たちがしてきたことについて，きちんとした記録を残し後世に伝えようとするなど，生活の中で自分の足下を振り返りながら，悩み，自分と対話している地域リーダーたちの知恵と勇気，重圧がかかる判断力，努力には本当に感動します。

時代という旅の中で，考え，成長してきた山村は，地域が近代化されなかったことを貧しさとはとらえなかったのです。そのことが地域に対する揺るぎない自信と誇り，深い愛情となり，激しく行動してきたのだと私は考えます。

農山村の人たちとつき合えばつき合うほど，実用的なものを自分たち自らの手から作り出すとともに，永遠にあるもの，詩的なもの，美的なものに対して限りなく近づこうとしているように思えてなりません。目標を失って，明日を信じることができなくなったと言われる日本人の中にあって，農山村での挑戦は21世紀の日本の大きな財産となり，「懐かしい未来」としての豊かさを作り出すに違いないと信じています。

利賀村　瞑想の塔「瞑想の館」

※　事務局注

鈴木さんの本業は山梨県職員で，現在，東京事務所の行政課長です。

国土庁地方振興アドバイザーや総合研究開発機構（ＮＩＲＡ）にも出向されるなど，ここ二十年来，全国各地の地域づくりにかかわってこられました。日本イベント大賞グランプリや地域づくり表彰国土庁長官賞を受賞した八ヶ岳南麓「ポール・ラッシュ祭」をプロデュースした手腕は，多くの人が認めるところです。

長年の間に培った人脈，ネットワークが日本上流文化圏研究所に活かされていることは言うまでもありません。

■照会先
山梨県東京事務所
〒102-0093 東京都千代田区平河町2-6-3
都道府県会館13階
TEL 03(5212)9033
Fax 03(5212)9034

日本上流文化圏研究所
〒409-2727 山梨県南巨摩郡早川町茶袋430
TEL&Fax 0556(45)2160
e-mail:joryu@town.hayakawa.yamanashi.jp

週刊文春 第42巻 第7号 P102【平成12年2月24日】

非常識私論

飛耳長目の下河辺淳が語る

一九二三年、満鮮児で生まれ虚弱児童期を経て、旧制中学三年からもっぱら体力増強に重きを置いたため大学卒業まで常に及第点スレスレ。卒業後は公共政策に関わり四十四年、九二年から「企業がよくならなければ世の中はよくならない」と企業研究所に。昨年ようやく全公職を退任し、「時間の収穫にならない」準備を整えて二〇〇〇年を迎えた。

連載　第54回

今週のテーマ「上流文化圏」

――現在、日本の人口の七〇%以上が沿海地域に住みつき、上流地域は若者の流出、過疎、高齢化が進み、経済国家日本の「衰退地域」と位置づけられていますね。

日本の国土は水系によって地域の特性を表しています。大きな川、小さな川がたくさんありますね。現在でこそ交通体系によって国土を管理しているけれど、日本の国土は川の「流域」として見ることが常識でした。

戦後、戦地から帰った人が大勢、全国の川の上流地域に入植しました。悪戦苦闘して生活したけれど、そこに将来性を見つけることができずに大半の入植者は途中で都会へ出ていった。子供たちは進学のために中流、下流に移転していった。こうして上流の過疎化、高齢化が進んできたんです。

上流圏における林業も農業も従事する人たちが高齢化し、労働力が減少すると同時に力が弱くなっています。

だから、流域の上流圏は過疎、高齢化が進み、将来がないという暗いイメージで語られがちで、公共政策はそれをいかに救済するかを話題にします。

しかし歴史的に見ると、上流圏には、縄文時代に人々が村をつくって住んでいたところが多い。時代は変わり平家の落ち武者が住みついた村もある。その後も、社会から逃避して上流の渓谷地帯に住みついた人もいた。縄文時代にしても、落ち武者たちが住みついた時代にしても、上流圏に暮らす人たちの文化レベルはとても高かったんです。

ですから、上流地域の将来を悲観するのではなく、地域の文化的な再発見をしたいと思うんです。

早稲田大学に若者たちが集い、上流圏に本来どんな文化が存在していたのか、これから二十一世紀に向けてどんな文化的価値を再発見することができるかという討論をしたことがあります。このとき山梨県早川町の町長も参加していて、上流圏文化研究所を町につくり、若者を集めて研究会を始めるということに展開していきました。

その早川町で二回目のフォーラムを開き、その後、九州の高千穂町、五ヶ瀬町、北海道のニセコ、静岡の本川根……と上流圏で続いて開催されています。

議論すればするほど、昔は日本人は上流地域に一つの考え方を持っていたということがわかります。そこには文学、思想、宗教もあれば生活の知恵もある。我々が上流圏文化に学ぶことが非常に大きいんです。

日本列島は小さい島国であるだけに、上流文化圏が海と非常に深い関係を持っていた。もともと海に近いところは洪水も多いし、津波や高潮で大変だから定住できない。だから、縄文人は上流に居住していました。だけど海とのつながりは必要だった。塩が必要であるとか、海の魚を食べるとか、新しい文化を輸入しようというようなことから海との関係は大切だったんです。

そのために水系を最大限に利用し、何とか舟が上流まで行くよう努力した。どうやっていたかというと、上流から下るときは川の勢いで行ったが、下流から上るときには陸上から綱で舟を引っ張っていった。帆をかけて走る海の船と違って河川の舟というのは難しかったことでしょう。

日本は中国や朝鮮から伝来した文化に大きな影響を受けましたが、その中国や朝鮮の文化は山岳信仰であって海との関係がないんです。日本では河川の上流、中流、下流が一体となって海の文化と山の文化とを結合した文化を築いた。

十五～十六世紀、世界は大航海時代でした。それ以来、日本列島津々浦々の港が船をベースに活躍したから、経済大国日本が完成していきました。その奥座敷に上流文化圏が活きていて、海洋文化と上流文化が結合するというところに日本のアイデンティティがあったんです。

どんな小さな河川でもみんな上流を持っているわけだから、"上流文化圏"は日本中いたるところにあるんです。最近は、都市から上流文化圏に移住する文化人が現れた。自分のやりたい文化的創造のための環境を自然の豊かな上流文化圏に求めているのです。

本来日本に築かれていた上流圏文化に目を向けて、これから上流圏で生きていこうという若者が増えるような気がしています。

聞き手　小嶺敦子

イラストレーション　紺野早苗

平成８年３月１７日　山梨日日新聞

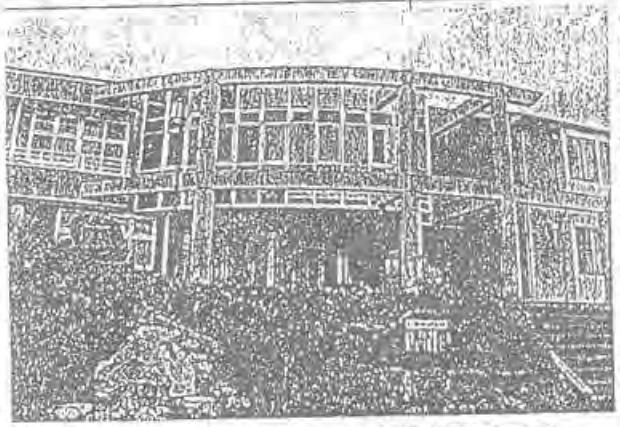
新聞　山梨日日新聞　１９９６年（平成８年）３月１７日　日曜日

上流文化研究所を開設

早川町　来月、国内で初めて

過疎や高齢化対策探る

早川町は四月一日、山間地域の活性化を研究していく「日本上流文化圏研究所」を、交流促進センター内に日本で初めて開設する。山間地域（上流圏）が抱える過疎化、高齢化、農林業衰退などの課題を学術的に取り上げて、問題解決を目指す。六月までに組織づくりを終え、来年度中に基本計画を策定する。公開シンポジウムなどの形式も検討、インターネットを通じて情報を発信していく。



日本上流文化圏研究所が置かれる交流促進センター＝早川町茶臼

町は新総合計画（一九九四年―二〇〇四年）を「早川・22世紀計画　日本・上流文化圏構想」と名付け、研究所開設を目指していた。研究所は、全国の上流圏の情報拠点として地域活性化策を探っていく。

一百年単位で山間地域の将来を考え、地域活性化を探っていく。

研究所のメンバーは山梨学院大行政研究センターの研究者、過疎問題に詳しい専門家を客員研究員に招き、潤いと活力ある町造りの計画策定委員や町職員らと討論して基本構想を策定する。早稲田大地域づくり研究会の学生も参加する。

研究内容は高齢者福祉、へき地医療、過疎、自然環境、自治の効率化、町並み保存などを計画している。

来年度は早川町の観光資源などの調査や、ほかの上流圏の調査や交流を行う。また情報ネットで発信する。

これに先駆けて、町は十六日、観光情報を伝えるホームページを開いた。町内の美しい渓谷や田中冬二の詩碑などをカラー写真と文章で紹介する。

町が昨年八月、試験的に開設した白鳳丸朗山塔写真館所蔵の写真十枚を掲載したホームページには、約二万九千件のアクセスが寄せられている。

辻一幸町長は「新しい時代の上流文化圏の確立を目指して研究所の設置に踏み切った。町民が参加する機会も多く、住民の意識改革につながる」と話している。

交換する上流文化圏等の関係や、全国の上流圏在住者を招いて、公開シンポジウムを開

町のホームページのアクセス番号は次の通り。

http://www.sanichi-ybs.co.jp/HAYAKAWA/

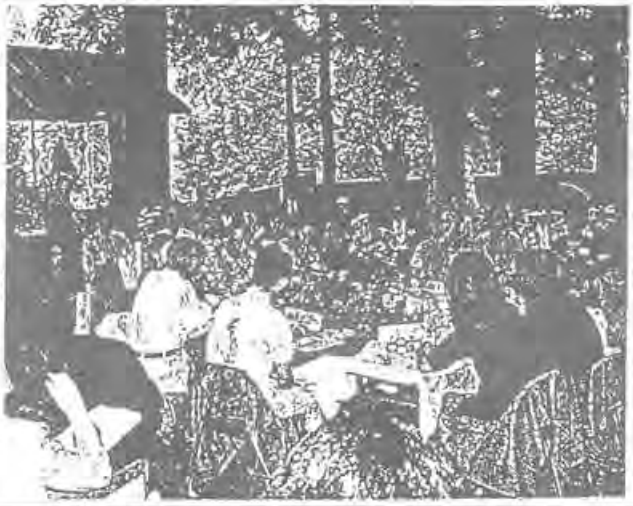
平成8年8月31日　山梨日日新聞

山梨日日新聞

まちづくりを論議

早川　全国から100人が集合

早川町の「日本上流文化圏研究所」（下河辺淳理事長）は三十、三十一の両日、同町奈良田の奈良田の里で、「フォッサマグナの叫び―もうひとつのくにづくり談義」と題したシンポジウムを開いている。



早川町民からの提言を基に話し合ったシンポジウム＝早川町奈良田の奈良田の里

全国各地の河川上流地域の自治体、住民との文化交流の拠点を目指して四月に設立した同研究所の初事業。北海道から九州までの各地で、まちづくりなどに活躍している人たち約百人が集まった。

初日は屋外で、町民四人がそれぞれの目から見た早川について提言。「富士川の支流である早川には十三の発電所がある。そのため川にはほとんど水がなく、砂利がたい積し、山の中のトンネルを水が流れている」との現状が報告された。

参加者の代表らから「ダムのきれいな水を活用できないか」「広い河原があるが活用されず、もったいない」「多くの発電所があるが、町の財政は潤っているのか」などの意見が出された。

下河辺理事長は「人間の生活を便利にするため国は百年来ダムを建設してきたが、国も最近これまでの考え方に疑問を持っている。国に対して意見を出せる良い機会であり、積極的に住民の声を出していくべきだ」と話した。

続いて「歴史未来談義」と題して、これまで国内で展開されてきたくにづくり、まちづくりについて話した。談義の内容については封印して十年後に公開する。

夜はコンサートなどを行い、参加者が交流を深めた。

二日目は、初日の内容についてさらに論議を重ねる。最後に、下河辺理事長が二日間の内容について総括する。

平成８年９月７日　山梨日日新聞

(25) 地域 2版　（第三種郵便物認可）

ズームアップ

研究通じ地域と交流

早稲田大建築学科四年の鞍打大輔さん(二三)＝写真＝は、早川町が四月に設立した日本上流文化圏研究所の研究員として町内に長期滞在し、地域に溶け込みながら、同研究所が全国に向けて発信していくための情報の収集や整理をしている。

全国から送られてくる地域づくりの資料などを分類するとともに、研究所の活動状況などをまとめたニュースレターの発行が主な仕事。町内各地を歩き、早川の情報収集も積極的に進めている。

また、インターネットで町民の特技などの情報を世界に発信するホームページ作りの準備も行っている。

鞍打さんは、早川町の長期総合計画づくりにかかわってきた同大の後藤春彦助教授（都市計画）の研究室に所属。「田舎に常駐できる」との理由から、卒業論文のテーマ「山や川とのふれあいによる創造的な遊びが、都市化が各地に進む中で残っているか」の研究を選択し、同町を訪れた。

卒業論文は、全校児童四十九人の早川南小で、学校や父母の協力を得ながら進めている。子供たちに日ごろの遊びについてアンケートしたところ、意外にも「家でテレビゲームをする」といった回答が多かった。

「早川のような自然に囲まれた場所なので、都市とは異なり、自然の中で遊ぶことが多いと思っていたが、都市部とほとんど変わりがない。少し残念だ」と話す。

早川で生活する子供たちにとっての山や川は、都市で生活する人のイメージとは異なり、あまりにも身近すぎるのかもしれないという。

年内いっぱいは早川町に滞在し、研究を続ける。「早川の本当のよさを知らないまま、都会の便利さだけにあこがれて町の外へ出て行ってしまうのはとても残念。都市と田舎を単純に比較することはできないが、先入観だけで判断しないでほしい。できれば、今の子供たちの考えが、大人になるに従って、どのように変化していくのかを追い続けたい」と話す。

平成８年11月10日　峡南新聞

早川

打ちたてのそばを味比べする

第2回南アルプスの紅葉とそばまつりが

～最盛期の紅葉と特産のそばを満喫して～と、早川町は十日、第二回南アルプスの紅葉とそばまつり（同実行委主催）を同町保の旧都川小跡地で開き、会場には打ちたての手打ちそばが楽しめる食べ歩き広場や町の特産品を販売するふるさとの味コーナーが設けられ、特設ステージではそば教室のほかものまねショー、そばの早食い大会、子供キャラクターショーなどのイベントが行われ多くの来場者でにぎわった。

同町では各地区で昔からそばの栽培が盛んで、作付面積と収穫量は峡南地区トップ。こうしたことからそばを特産として位置付け、四年前に発足した全国麺類文化地域間交流推進協議会に加盟し、毎年開かれている全国そばまつりに参加して山梨早川のそばをPRしている。同町では、二～三年後には全国そばまつりを誘致しようと昨年第一回の紅葉とそばまつりを開催。町内五地区から約二千食のそばを用意したが多くの人々が訪れ、昼過ぎには完売となるほどの盛況だった。

今年の食べ歩き広場には、前回出店した早川集落でそば処アルプスを営業している「御殿そば」、茂倉の「峠そば」、西山の「白鳳そば」、雨畑の「あめはたそば」、赤沢の「赤沢宿そば」のほかに、雨畑の「山伏そば」、五箇地区の「長寿そば」、今年四月に粟袋の町交流促進センター内に開設された日本上流文化圏研究所が出店した「上流そば」が新たに加わり、合わせて八つのテントが設けられ、それぞれ地元のそば粉を使った打ちたての手打ちそば約三千食を販売した。

どのそばも練り加減やゆで方、ダシの取り方、つゆの味付けなど昔からその地区に伝わる独特の味があり、訪れた人々が何カ所も回って味比べをしていた。

ステージで行われたそば教室では上流研の研究員小俣佳子さん（三）が講師となってそばの歴史や日本、世界のそばについて解説。「そばを麺にして食べるのは日本と中国の一部だけ。日本では江戸時代から今の様に麺に切って食べ始めたと言われている」などとそばの起源について話した。

辻一幸町長は「春の山菜まつりに次ぐふるさとのまつりとして、秋の紅葉とそばまつりを年々大きくしていきながら定着させ、活気の出る町づくりを目指したい。そのためにも全国そばまつりを出来るだけ早く本町で開きたい」と意欲を燃やしている。

町内各地区のそばを食べ比べる来場者（写真上）ステージでは上流研の小俣さんがそば教室を開いた（下）＝早川町保

信州日報　1997年（平成9年）3月22日（土曜日）

土地に合った食生活を

高森町で生活文化フォーラム

山野草料理、五平餅などに挑戦

高森町にある身近な素材や廃棄物を生かし、自然と共生するライフスタイルを見い出していこうと、二十日町民研修センター「緑の窓」で町民約七十人が参加し「婦人ふるさとづくり推進高森生活文化フォーラム」が開かれた。参加者は①山野草料理②そば・うどんづくり③五平餅づくり④会場演出に挑戦⑤中州の郷土料理に挑戦の五つのグループに分かれ活動、全体で交流会を行った。

水引袋を使ってはし入れを作る参加者たち

山野草料理では参加者が竜口と寺沢川周辺でカンゾウ、ノビル、ナズナなどを採取し料理。そばうちでは高森町内で獲れたソバ粉を使った。

会場の飾り付けでは竹と稲の藁木を使い、和紙と水引袋ではし入れを作った。山梨県早川町の日本上流文化圏研究所の客員研究員青柳勇士さんはいっしょに作業をしながら「高森町の人たちはほんでいる所に誇りを持っている。風土を見直せば素晴らしい人情がある」と感動。

「同じく研究員の小俣佳子さんは早川町の家庭料理を紹介し「同じ中山間地でも地域の豊さは一人ひとりが出くこと だ」と出会いの場で参加者それぞれが勇気づけられる感動を強調していた。

ているものがある。高森の食にも早川と同じ素材が取り入れられてもいい。その土地の文化・風土の在り方を料理で比べると自分の地域を知ることにもなる」と新しい発見に期待する。

同研究理事、東京都渋谷区にある総合研究開発機構の主任研究員を務める鈴木輝隆さんは「今までの町づくりは画一的、行政主導であった。工業化社会の中で日本中が大量生産された同じ家、同じ服装になり地域の形がわからない。これからはその土地に合ったライフスタイルを自分たちで作り上げる必要がある。住民自治に住民一人ひとりの意識が反映されなければならない。現在は住民が期待するものと行政の思い込みにすれが生じている。住民が主役になれる場面が必要。こういう場があれば誰でも始められる。生活文化は一人ひとりの多様性に富む。地

資料　新聞記事

1997年(平成９年) 3月25日(火曜日)　新聞定価 1ヵ月 1,400円 1部 60円 (日刊 但し 月曜日付 休刊)

信州日報

発行所
信州日報社
飯田市松尾町3-33　〒395
電話(編集)(0265)22156
(営業)(0265)22361
FAX (0265)26755
郵便振替口座 00560-2-7875

視点

文化は上流から

山梨県早川町が昨年設立した日本上流文化圏研究所の研究員小俣佳子さんは、高森町を訪れ早川町の家庭料理を紹介、「料理を比べることでお互いが地域を知ることができる」と食を通じた交流が活性化につながることを強調。地元紙の記者から研究所へ転身した小俣さんは「日本全国の河川の上流は全て過疎地、そこの暮しが活き活きしてこないと」と話し、農山村の仕組みの改革に取り組む。理事の鈴木輝隆さんは「下流の文明に対し上流の文化がおどしをかけている。地方の都市化の流れの中で、考え方まで都市に合わせる時代ではない。都会の人々も大地に根ざした欲求を持つ時代」と上流に焦点を当てる。行政主導の画一的な地域興しを批判「その土地で生きていくため人々は交流の中で知恵を得てきた。知恵を出し合い居心地のいい環境を作りその中で考える。住民の歴史を作るために一人ひとりの意識が住民自治に反映されなければならない。今までは行政が自治を行い、住民の歴史が入っていなかった」と住民参加で歴史を作る必要性を訴える。

中山間地域の現状を「創造力がないと生きていけない」と異文化との交流を提案。「生活文化は一人ひとりの多様性によるところが大きく、それが地域の豊かさになる。出会いがバネになれば」と一人ひとりの結び付きに期待する。これからの地域づくりの課題に「お互いの人生を尊重、気持ちのいいものでなければならない。データよりテイストが必要。スケールよりもローカルメリットを狙え」を掲げネットワーク作りを進める。　(Z)

平成９年７月11日　山梨日日新聞

長生き郷土食「すばく」後世に

ばあちゃん手作りで復活

早川 女性愛好会が発足、紹介

峡南

早川町新倉の茂倉集落で地元の女性が中心となって「すばく愛好会」を結成した。早川町の郷土料理である麦飯の「すばく」を定期的に食べるとともに、早川の「食の文化」を後世に伝えていく。日本上流文化圏研究所も町の食文化として研究し、町内外に紹介する。

郷土料理の「すばく」を味わう愛好会のメンバー　＝早川町新倉

「すばく」は、約二時間かけて煮た大麦にうずら豆と米を入れて炊き上げ、みそ、エゴマ、キュウリ、青シソの入った冷や汁（冷たいみそ汁）とネギみそを入れて食べる料理。地元で採れる素材だけで作る。

コメの収穫量が少なかった昭和三十年代ごろまでは、町内全域で頻繁に食べていた。手間がかかることもあって今ではほとんど作らない。米が不作だった年や戦争中の食料不足の時に食べた貧しいイメージがつきまとうためか、敬遠する人も多いという。

唯一、茂倉集落では、おばあちゃんたちが作る。大なべで煮ては近所の人たちに声を掛け合い、作った家で味見をしている。

愛好会は茂倉の女性を中心に、日本上流文化圏研究所の研究員らを交え十人余りで六月中旬に発足。早速、深沢よ志さん（八七）方で、まきを使ってかまどで麦を煮るなど、昔ながらの手法で「すばく」を作り、参加者が試食した。今後も、「茂倉うり」の収穫期である九月や、エゴマを採取する十一月に「すばく」を作り試食する。

深沢さんは「長年食べてきた集落の人たちは元気だから体にはいいんだろう。若い人や外の人にはこんなものが珍しいのかねえ」と話す。

一方、上流文化圏研究所は、町民などを対象とした講座などで参加者や講師に試食してもらう。また、伝統食のよさなどについても研究していく。

研究員の小俣佳子さんは「健康面への配慮などから、最近麦飯が見直されている。食べてもらって郷土食のよさを再発見してもらうとともに、現代風に改良も重ねていく。地域に伝わる郷土食を途絶えることなく後世に伝えたい」と話している。

平成９年８月24日　山梨日日新聞

1997年（平成9年）　8月24日　日曜日

来月、早川町が地域活性講座

『上流圏』の暮らし探る

進む過疎、高齢化に対応

伝統食で味わい論議も

早川町と日本上流文化圏研究所は９月６日から４回にわたって、町内で早川町民塾「上流人のための上流学講座」を開講する。高齢者が住みやすい町づくりや清流の保護、登山と地域振興など、町にかかわるテーマを取り上げる。各回とも、麦飯「すばく」や手打ちそばなどテーマに沿った食事を食べながら、講師とのディスカッションを通して今後の「上流圏」の生活を考える。

上流学講座は、初めての開催。南アルプスの山々など豊かな自然を抱えながらも過疎化や高齢化が進行し、活性化が長年の課題となっている「上流圏・早川」の今後の在り方を考えるために計画した。

全四回の講座のうち、三回はテーマを設定。一回目は「お年寄りが生き生き暮らす早川をめざして」と題し、町内の高齢化調査をしている椎名慎太郎山梨学院大教授らが、高齢化社会の特徴を町づくりに生かす方策について考える。

二回目は「水の循環と暮らし」で講師は早川の水を守る運動をしている深沢守さんら。三回目は「登山と地域振興」。県立図書館協議会長の住谷雄幸さんが講師。四回目は「もっと知りたい人のための追加講座」と題して、三回の講座を踏まえさらに突っ込んだディスカッションをする。

また一―三回目の講座の後、夕食を食べながら講師と参加者が交流を深めるのも特徴。一回目は町に伝わる麦飯「すばく」、二回目は手作り豆腐やそば、三回目は七面山に参る信者などが持参する握り飯を予定。それぞれの講座のテーマに沿った食事を味わいながら、食についても考える。

受講は無料。定員は各回三十人。町外からの参加も可。問い合わせ、申し込みは日本上流文化圏研究所、電話0556・45・2160。各回の日時、会場は次の通り。

▽9月6日午後5時から、同町薬袋の交流促進センター▽同13日午後5時から、町民会館▽同27日午後5時から、奈良田の里▽10月25日午後7時から、交流促進センター。

平成９年９月１日　峡南新聞

平成９年９月１日　（月曜日）　峡南新聞

早教協

早川の食文化に触れ地域を知る

町内の教職員がそばや豆腐、素麦作りを

早川町教育研究協議会（比宗保会長）は八月二十九日、〝知ろう・作ろう・味わおう早川の食文化〟と題してそばや豆腐、素麦（すばく）作りを体験する研修を町交流促進センターで行った。

同協議会の会員は町内の早川中、南小、北小の三校の教職員三十二人で、このうち今年度の町内出身者は一人だけ。こうしたことから、早川の食文化に触れることで地域をもっと知り、資質の向上を目指そうと企画したもので、そばと素麦作りは交流促進センター内の日本上流文化圏研究所の小俣佳子さんが、また、豆腐作りは、子供の頃から豆腐作りにいそしんでいたという水野定夫さんが講師となって行われた。

開会式に続いて小俣さんがそばや素麦について説明し、「そばを麺にして食べるのは日本と中国やブータンの一部だけ」などと、そばの起源や世界各地の食べ方を紹介するなどした。素麦については「町内の茂倉集落で郷土食として食べ継がれている」と話した。

このあと三班に分かれてそれぞれそば、豆腐、素麦作りに挑戦。素麦は二時間ほど煮た丸麦にうずら豆と米を入れて炊き上げたもので、調理に時間がかかることから、当日は茂倉集落のおばあさん達が前日から準備して作ってくれた素麦を用意し、一つの班は、これに入れて食べる軽く炒ったエゴマと青じそ、味噌などが入った冷や汁とネギ味噌を作った。

そば作りでは、早川産のそば粉八、小麦粉二の割合で混ぜた二・八そばの打ち方を小俣さんが指導。そば打ちで最も重要な、そばを練り合わせるまでの〝水回し〟や、〝こね、のし、切り、ゆで〟といった一連の手順を実技を交えて説明した。参加者は注意深くそばをこねたり、延し棒を使ってそば生地を好みの薄さに広げていた。

水野さんが指導した豆腐作りは、水に浸して適当にふやけた大豆をミキサーにかけたあと、鍋に移して沸騰するまで火にかけ、網でこしてから凝固材の〝にがり〟を入れて型に流すのが手順。隣接する中富町の曽根集落などで採れる大豆が昔から良質なものとして知られており、これらが含まれた大豆を使用した。豆腐十丁作るのに約六〇〇の大豆を必要とし、にがりは二百ccほど入れる。にがりの成分は塩化マグネシウムで、水野さんは「最近は多くが硫酸カルシウムを使っているが、昔の塩に含まれていた塩化マグネシウムの方がより風味が出せる」と話していた。

調理したあとは早速試食し、ほかにはない風味あるそばや豆腐、早川に伝わる郷土食の素麦を、自分たちが初めて腕をふるって作った成果を確かめながら味わった。

慣れない手つきで延し棒を操ってそば生地を広げたり（写真上）出来上がった豆腐に満足顔の参加者（下）
＝早川町薬袋の町交流促進センター

平成９年９月10日　峡南新聞

山梨学院大の椎名法学部長や中井助教授が講師を務めた＝早川町奥袋の交流促進センター

第１回早川町民塾を開講

上流人のための上流学講座

上流圏・早川ならではの暮らし方考える

"日頃から早川町の地域づくりに協力している山梨学院大の先生とともに、これからの時代にふさわしい上流圏・早川ならではの暮らし方を考えてみませんか"－と、第一回早川町民塾「上流人のための上流学講座」が六日、奥袋の町交流促進センターで開かれた。

この講座は、①お年寄りが生き生き暮らす早川をめざしての水の循環と暮らし③登山と地域振興④三講座を踏まえた総括－のテーマに分け四回開き、町の長期総合計画の策定や上流文化圏研究所の運営にも関わっている山梨学院大の教授らを講師に、これから進むべき道を模索していこうというもので、六日に開かれた初回の講座では「お年寄りが生き生き暮らす早川をめざして」をテーマに、山梨学院大の椎名儀太郎法学部長、同法学部の中井道夫助教授が講師を務めた。

椎名さんは環境法などが専門分野で、河川の環境問題では第一人者。また、中井さんは都市社会学などが専門で、昨年から早川町のお年寄りに関しての調査に取り組んでいる。

開講式で辻一幸町長は、「町は二十一世紀に向けて三年前から日本上流文化圏構想を基に町づくりを進めており、この交流促進センター内に研究所をつくり、山梨学院大と手を携えて考えていく術を見出そうとしている。この講座をはじめ、高齢化や過疎対策などについて考え、国や全国の同じ様な過疎の町に情報発信していきたい」と呼びかけた。

講義は、はじめに中井さんが昨年からの調査を踏まえ、「早川ではピークの一万六百人から二千人にまで人口が減少し、高齢化率も芦川村、丹波山村などと同じ四〇％以上となっている」としたうえで、「公共交通がうとく、学校や病院、購買など社会施設が不足していることが若者の離れていく原因」とし、社会的要因については、「新しい人が住み着くことを排除する閉鎖性や、多様性を認めない文化、いまだに女性の社会的地位が低いこと－などが挙げられる」と話し、「高齢者にとっては住みやすい環境」と分析した。

中井さんは活性化に向けて「道路交通面の整備や、町の自然を利用した産業の振興など内発的な発展の模索などを挙げ、町内の福祉施設で消費する食料や介助要員を地域で供給することで、一つの地域の産業になりうる可能性もあるのでは－と助言した。

次回は十三日に保の町民会館、三回目は奈良田の里で、四回目は十月二十五日に交流促進センターで開く

平成９年11月20日　峡南新聞

峡南新聞　（昭和48年7月10日 第3種郵便物認可）　第1018号

峡南新聞

峡南新聞社
静岡市丸尾477－3
☎(0556)72－2165
発行人／内野恭彦
発行／毎刊（月3回）
1日、10日、20日
購読料／1部加5,000円

あなたの街の便利なお店（年中無休）
※お祝い、お中元、サンドイッチ予約など承ります
㈲シェル・ダジュール
ヤマザキディリーストアー富沢店
代表　望月多恵子
電話二四五九八一　ファクス二三四七

学校図書館の活用を研究

授業や研究会の様子はインターネットで発信する

早川南小で公開実践発表会が

早川町教育委員会の研究推進指定校と早川町教育研究協議会の研究推進センター校として平成七、八、九年度指定された早川南小（大倉はるみ校長）で二十一日、学校図書館活用研究の公開実践発表会が「自ら取り組み、生き生きと活動する児童の育成～おもしろくなった上図書館 楽しくなったねコンピューター」をテーマに開かれ、県内をはじめ関東各県や遠くは奈良県から教育関係者ら約二百人が集まって、コンピュータを活用した授業を見学したり全体研究会で協議するなどした。

国際化や情報化、科学技術の急速な発展、環境問題の深刻化など著しく社会情勢が変化している中で、主体的に対応できる能力が必要とされており、同校では校舎新築にともなって今年度からパソコン室を図書館の中に組み入れて総合図書館としての機能を整備。インターネットでの情報の発受信や、ホームページを開設して児童が自由に使えるようにしている。

発表会では始めに一、二、五年の授業を公開。一年は「あきとあそぼう」として、図書館を会場に山道や森などで見つけた種類や名前を調べた。三年は「自分たちの学級文庫をつくろう」を題材に、歴史や理科、芸術、言葉、文学などの項目に分けて集めた本の情報をまとめ、学級文庫に入れたい図書を選んだ。

五年は「物語と音楽」をテーマに、これまでの授業で作曲した曲をコンピュータに入力し、さまざまな音楽ソフトウエアーを使って演奏を披露した。ここでは曲調に合った音源を探すなど、物語の雰囲気や印象を考えながらイメージをふくらませていった。

授業に続き、パソコン室でコンピュータ操作について専任講師の指導がされ、児童らが各種ソフトを操作したり、児童が入力した四千曲の楽譜データを呼び出すなどした。この様子は各教室のモニターに映し出され、参加者が画面を熱心に見入っていた。

引き続き体育館では、全校児童四十五人で取り組んでいる吹奏楽を交えた民話劇を披露。同町千束和集落に伝わる「人に化かされたきつね」を題材に音楽劇に仕立てたもので、児童の熱演に会場から大きなの拍手が送られていた。

研究発表は同小の勝俣孝光教諭が行い、研究の成果ついて－学校図書館での授業実践の中で－と題し、懸命に図書資料を探す子供達の姿が、また、子供達が喜んで図書館で学習し、わからないことをわかろうとして努力している姿が数多く見られるようになってきた。そして、自分で見つけた学習課題を解決し自分自身が納得できた時のうれしそうな表情で、研究のテーマが充分に達成できたと考えられる－と話し、このほか、学校図書館を活用した学習について－、図書資料やコンピュータ資料などの図書館資料の充実について－、読書意欲を高める日常活動について－など、さまざまな取り組みの中で得られた成果も発表された。

この日の授業や研究発表の様子はハンディーカメラで映され、県内では初めてインターネットを通じてリアルタイムで発信した。

子供達が楽しみながらコンピュータを操作する様子を見学する県内外の教育関係者＝早川町高住の早川南小

平成10年1月1日　山梨日日新聞

日日新聞　1998年（平成10年）1月1日　木曜日

活性化めざし〝草の根〟ネット

2000人ホームページ構想

全町民から情報収集

山村の「技」世界へPR

早川の上流文化圏研

南巨摩郡早川町の日本上流文化圏研究所（下河辺淳理事長）が、町民それぞれがホームページを持って、山村生活で鍛えた技や生活の知恵などをインターネット上で紹介する「二千人のホームページ」作りを始める。かつて一万人を数えた町民が二千人を切るまでに減少し、過疎、高齢化が深刻になる中で、先端の情報通信技術を活用して「早川」を世界に向けて発信、地域活性化に役立てていく試みだ。同研究所は、インターネットに関心を持っている人が集まって互いに勉強する「町ネット同好会」を一月中に発足させ、町民へのホームページの作り方指導にも乗り出す計画で、「町民それぞれの立場から、それぞれの視点で町の素晴らしさを紹介してもらいたい」と成果に期待している。

同研究所は、全国各地の河川上流地域の自治体、住民との文化交流の拠点にと早川町が九六年四月に開設した。計画によると、二千人のホームページ」は早川町を紹介するホームページに連結した形で開設する。町全体の地図からスタートし、旧村単位の六地区、さらに集落の紹介へと進む。観光名所だけでなく、各集落の特色や風景なども掲載。ここから町民それぞれのホームページに移動できるようにする。

町民のホームページは、伝統工芸や地域に伝わる食など、さまざまな角度から町民が自分の特技や技術、町の素晴らしい点などを紹介していく。できるだけ独力で作ってもらい、高齢者などには研究所の研究員が取材して制作する。

一月中にはホームページづくりに取りかかり、町ネット同好会の会員の協力を得ながら、一年くらいの間に全町民の半分にあたる千人分の開設を実現したいという。

同研究所は「一人でも多くの人にホームページを持ってもらい、町の魅力、地域に伝わる伝統や技術などを町民の側から紹介してほしい。時間はかかると思うが、地道に数を増やし、最終的には全町民が自らのホームページを持ってほしい」と話している。

同町はインターネットなどの活用に積極的で一九九六年十月、専用のサーバーを同研究所内に設置。研究所が全国の会員との情報交換などに活用している。また、町内小中学校のコンピューターと結んでいる。

早川南小では「コンピュータークラブ」の児童が学校紹介のホームページを自分たちで作った。父母や教師にも「インターネットを楽しみたい」という声は高い。一方で、「専門的な知識がないので、高価なコンピューターを購入しても使いこなせるだろうか」と二の足を踏む人も多いため、同好会を結成することになった。

同好会は、研究所に事務局を置き、サーバーの利用空き時間帯を活用して会員がインターネットに接続する。会員がそれぞれの情報収集などに利用していくとともに、定期的に講習会を開き、技術的なサポートや、より効果的な活用方法の勉強をしていく。

小俣佳子研究員は「早川町のように広い面積に集落が点在しているところほど、インターネットのような情報網は有効だと思う。今後どのような活用ができるのか、同好会で研究していきたい」と話す。

また、山深い過疎地から住民が世界に向けて、町の素晴らしさを訴えていく試みについても「これから町をどうしていくべきなのかを、町民一人一人が真剣に考える きっかけにもなるのでは」と期待している。

平成10年5月3日　山梨日日新聞

9日からインド先住民族展
ワルリー壁画体験も

早川の上流文化研

早川町茂袋の日本上流文化圏研究所は九日から、同町交流促進センターで「インド先住民族アート展」を開く。インド先住民族の芸術家たちが製作した壁画、置物を展示する。期間中、ワルリー壁画の第一人者が滞在し、製作ぶりを披露する。七月には女性たちの手による傑作・ミティラー壁画の企画展も開催する。

一九九六年の開設以来、同研究所の企画展は初めて。地理的な〝上流〟のほか時間、空間的な意味で〝上流文化〟となるインドの古代文明から続く民族文化に注目。インドの伝統文化を知り、自然観を感じていこうと企画した。

「アート展」は二部構成で、九日から二十四日までまずインド先住民族展を開く。竹の先端を使用し、民家の壁に日常の様子を描いていくインド中西部のワルリー族の壁画、粘土製の置物テラコッタなど絵や置物約八十点を紹介する。世界的に評価の高いワルリー画の第一人者ジブヤ・ソーマ・マーシェさんが講師となり、ワルリー画体験教室も予定している。

七月十一日から八月二日まではミティラー民俗画展を開く。インドと北東部ネパール国境地域のミティラー地方に住む女性たちが代々、壁画や床画として伝承。日常の出来事を女性独特のおおらかなタッチで表現している。会場では数十点を展示。期間中は親子の芸術家ポーワ・ディーヴィー、シャンティ・デーヴィーさんが滞在し、製作活動を行う。

問い合わせは交流促進センター、電話0556・45・2160。

平成10年5月9日　讀賣新聞

1998年(平成10年)5月9日(土曜日)　讀賣新聞　東京版

河川上流圏の世界学ぶ

インドのアート展示

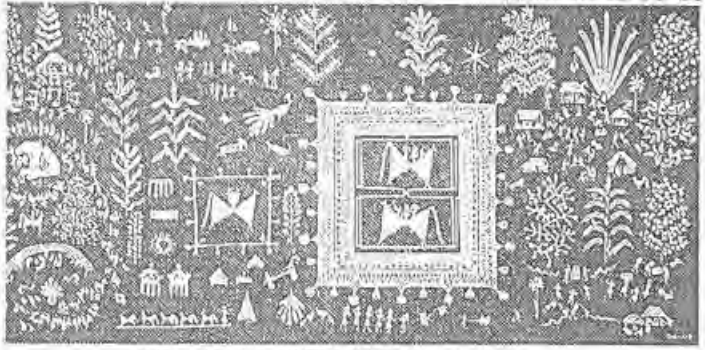
早川きょうから

皇川町と、同町内に九六年にできた日本上流文化圏研究所が主催する「自然と共生の芸術世界　インド先住民族アート展」（読売新聞甲府支局など後援）がきょう九日から、同町交流促進センターで開かれる。

同研究所は、河川上流圏を、「最も純粋な水を天から受け取る生命の源」とし、日本や世界の上流圏の情報収集・調査をしている。

アート展は、世界の河川上流圏との交流活動の一環として、インド山岳地域などの先住民族のアートを通じ、この地域の現状や、自然観を学ぶのが目的。ワルリー画など、約七十点を展示する。農耕民であるインド・マハラーシュトラ州のワルリー族が、赤土の粉などに、米をすりつぶして作った白一色絵の具を使い、精霊、祖先などを描いたもの。竹筆による素朴で細密な描写が特徴だ。

会期中は、インド国民楽器を受講したジヴァ・ソーマ・マーシェ氏父子が、実演をする。十七日には、ワルリー画体験教室も開かれる。また、九日午後二時から、青好延・日印調査委員会事務局長の講演会「インドの魅力を語る」がある。問い合わせは、同研究所（☎0555・45・2160）まで。



素朴で細密な描写が特徴的なワルリー画

平成10年5月10日　山梨日日新聞

1998年（平成10年）　5月10日　日曜日

ワルリー族の壁画や置物も

早川でインド先住民展

早川町薬袋の日本上流文化圏研究所は九日から、同町交流促進センターでインド先住民族アート展を開いている。

インド先住民族の現役芸術家たちが制作した壁画、置物など約五十点を展示。壁画はワルリー族が竹の先端を使用して描き、民族の慣習や生活様式を細やかなタッチで表現している。期間中は壁画の制作者が滞在して制作活動も行う。入場無料。二十四日まで。

九日午後二時からは、日印調査委員会事務局長の清好延さんが「インドの魅力を語る」と題して講演。十七日午後一時半からは、ワルリー画体験教室を開催する。参加料は五百円、中学生以下は無料。

ワルリー壁画などを展示している企画展
＝早川町交流促進センター

平成10年5月16日　山梨新報

インド先住民族アート展

早川町

早川町奥袋地区の町交流促進センターで「インド先住民族アート展」が二十四日まで開かれている。主催は日本上流文化圏研究所と町。インドの先住民族が描いた絵画や馬や象などを題材にした素焼きの粘土像、蝋（ろう）の鋳型で作った鋳像など約七十点を展示している。

早川町で開かれている「インド先住民族アート展」と「ワルリー画」の実演

作品の『目玉』はインドの先住民族・ワルリー族が農耕生活などをテーマに赤土のキャンバスに米をすり潰した絵の具を使い、竹の筆を使って描いた「ワルリー画」。十七日にはワルリー族出身の作家で、インド政府から国民栄誉賞を受けたジバヤ・ソーマ・マーシェ氏らが町に寄贈する絵画の製作実演をするほか、体験教室も開かれる。

同研究所は「川の上流域」にある自治体との交流や山間過疎地の抱える課題などを調査研究する機関で、町が全額出資して平成八年に設立された。今回の展示会は世界の河川上流域との交流活動の一環として企画された。入場無料。

山梨日日新聞　1998年（平成10年）7月12日　日曜日

インド伝承の民俗画を展示

早川・上流文化研究所

早川町薬袋の日本上流文化圏研究所は十一日から、町交流促進センターでインドに伝わる「ミティラー民俗画」の展示会を開いている。

インド北東部とネパール国境地域のミティラー地方に住む女性たちが三千年以上も代々、壁画や床画として伝承してきたのがミティラー画。竹の先端を使い、日常や神話、信仰の世界を描いている。

今回展示しているのは九人の作家が描いた約三十点。月の神、太陽の神にまつわる伝説や地域の暮らしを表現している。身分制度が根強く残るインドではミティラー画でも階級によって図案や描き方が異なることが分かる。八月二日まで。入場無料。

期間中、インド国家名誉賞を受賞した第一人者ポーワ・デーヴィーさん(五四)ら現役作家が町内に滞在。絵画の製作も行う。またデーヴィーさんらが講師となりセンターでミティラー画とインド料理教室を開く。ミティラー画は十二日午後一時から。料理教室は十五日午後六時から。問い合わせは日本上流文化圏研究所、電話0556・45・2160。

信仰の世界や日常生活を描いたミティラー画の展示会＝早川町交流促進センター

讀売新聞（1998.7.23）

きょうから「日本上流文化圏会議」

ユーモア上林まちおこし

＊ニセコ

心の豊かさに軸足を置いた活気ある地域づくりを目指す「第2回日本上流文化圏会議」がきょう23日から25日まで、ニセコ町有島記念公園などを会場に開かれる。

主催は、山村ならではの生活文化を見直し、地域活性化を目的に全国の自治体関係者や企業有志、学識経験者などでつくる日本上流文化圏研究所（本部・山梨県早川町）と、尻別川の河川環境や流域地域を考える非営利民間組織「しりべつリバーネット」。来賓、長野、山梨、岩手などから、地域おこしに関心の深い約百四十人が参加する。

会議の狙いは、厳しい時代を乗ることができるのは、ユーモラスな発想ととらえ、各地でおもしろかな発想で農業や地域活動を発展している人たちから新しいフロンティアスピリットを発見すること。

二十三日夕、ニセコいこいの村での前夜祭で、山口甲・北海学園大工学部長の「これからの地域開発とくらし」のスピーチなどで幕を開け、二十四日午前には、尻別川をカヌーでトラックの、シーカヤックで船内の海を巡ったりする。

二十四日午後には、有島記念公園で、「北海道から食と農を考える」、「ネットワークと共生から地域開発を考える」、それぞれのパネルディスカッション。「食と農」には、倉島農グリーンアース、北海道町の小姉結ばん会、明日のニセコ町農業を考える会などのほか、石見地域デザイン研究会、津軽地吹奏会などの代表がパネリストとして参加する。「地域開発」では、山梨県利賀村、高知県の梼原芸術館、山梨県甲斐町などの地域代表が参加する。

最終日の二十五日午前はいこいの村で、下河辺淳・上流文化圏研究所理事長を参加者全員が囲んで、明日のくにづくりを語り合う。

平成10年7月25日　北海道新聞

（29）第3社会 14版　　北海道新聞（1998.7.25）

「上流域」の農家 経営感覚も必要

ニセコで全国会議

【ニセコ】過疎化の進む上流域のまちおこしを考える「日本上流文化圏会議」のパネルディスカッションが二十四日、二百人余りが参加し後志管内ニセコ町で開かれた。全国の自治体職員や学者らでつくる日本上流文化圏研究所（本部・山梨県早川町）と尻別川流域の環境を考える「しりべつリバーネット」（倶知安町代表）の共催で、道内では初開催。

新しい食と農業をテーマに、同研究所理事長で国土審議会会長の下河辺淳さんら六人のパネリストが意見交換。下河辺さんは「農家には、付加価値のある作物を少量生産するだけで生計が成り立つ工夫をしてほしい」と提言した。

ニセコ町の逢坂誠二町長は「これからの農家は労働者、研究者、そして経営者としての顔が必要だ」と強調。ヒマワリでまちおこしをした夕張市内北竜町の農家佐藤稔さんは「生産から加工販売まで手掛ければ、消費者のニーズがつかめ、新たな雇用も生まれる」と述べた。最終日の二十五日は「明日のくにづくり」を話し合う。

公園の芝生の上で食と農業を語るパネリストたち

平成 10 年 7 月 25 日　北海タイムス

北海タイムス（1998.7.25）

芝生の上や温泉で談議

日本上流文化圏会議始まる

ニセコ

【ニセコ】「フロンティアとユーモア」をメーンテーマに「第二回日本上流文化圏会議1998IN二セコ」（同文化圏研究所、しりべしリバーネット主催）が二十四日開幕した。芝生の上やカヌー、温泉など、二十五日までさまざまな会場を設定、上流地域からの新たな文化創造について議論を深める。

日本上流文化圏振興は地球規模の観点から、生命をはぐくむ水の役割を再評価し、河川の源である上流地域が過疎して新たな環境・文化を創造しようというもので、南アルプスのふもと、山梨県韮川町で提唱された。第一回会議は宮崎県五ケ瀬町で開かれた。

会議は主会場の有島記念公園で「ほのぼの大地・北の一隅」と題し、これからの食と農業を考えるパネルディスカッションから開幕した。パネリストは下河辺伊国屋会長や後藤謙二二セコ町長、農業関係者ら六人。

昨日のニセコ町興振を考えるパネルでは、下河辺さんは「コスト低減、大量生産という地域性偏重の農業からの転換を強調」「消費者に目を向ける時代が来ていること」などを強調した。

また、上川郡美瑛町の四季彩の丘会長は「美瑛を訪れる観光客の多くは、美しい農村景観を求めている」と、農業振興策について「求める人は多いが、労力や技術面、採算性でまだまだ課題があり、ジレンマを感じている」と現状の厳しさを指摘。

下河辺興平長は「こうしたやりとりを受け、『価格が二、三倍になっても食べたいという市場をつくる方が意味がある』ないと、東京都内で限定的に販売される唐手県の牛乳の好評さを例にアドバイスした。

会議は閉会に先立って、厚別川のカヌー下りや「夕涼みなる談議」などが行われたほか、二十五日は「北から発信、語らう明日のくにづくり」をテーマとしたトークショーで始めくる。

芝生上で行われたパネルディスカッション＝有島記念公園

平成10年10月17日　産経新聞夕刊

過疎に悩む町に研究所／「水と暮らし」世界に提言／今は滴…やがて大河に

「上流文化圏」構想

日本上流文化圏研究所。日本でも唯一で、あまり聞き慣れない名前のこの研究所は、国内第二位の高峰、北岳や間ノ岳など標高三、〇〇〇㍍以上の山々が連なる南アルプスの山ろくに位置する峡谷の町、山梨県早川町内に平成八年四月、町によって設立された。

長野、静岡両県と接する早川町は、面積が約三百七十平方㌔㍍と県内一ながら面積の九六％が山林で人口も二千人に満たない、町とは名ばかりの〝山村〟である。日本三大急流の一つである富士川に注ぐ早川は、大正時代末から始まった水力発電事業のため流れる水は少なくなり、昔の面影はない。電源開発時のピーク、昭和三十五年約一万人を記録した人口は、開発事業の終了とともに減り続け、一千九百四十八人（十月一日現在）となった。

神奈路通信

日本のどこにでもありそうな過疎化に悩む〝山村〟だが、町では「山と水とを守り続けた先人に学び、自然と共生できる新しい文明を構築し、上流としての文化を創出する」ことを目的に、平成六年から日本・上流文化圏構想をかかげた。上流区域だけでなく環境破壊が叫ばれている都市の文化をも含め、水を核とした人間が暮らしやすい新しい文化づくりが目的だ。

◇

辻一幸町長（五八）は「新しい視点に立って全国の地域と連帯したり、情報交換しながら、自分たちの暮らしや生き方を確立していく決意と行動こそが大切」と語る。

研究所の理事長には、町長の強い願いで、日本の国土政策の立案と実施に関し、中心的役割を担ってきた現東京海上研究所理事長の下河辺淳氏が就任。全国に約二百人いるネットワーク理事・研究協力員が支えている。これまで、町民を対象にした「お年寄りが生き生き暮らす早川を目指して」「水の循環と暮らし」などの町民塾や全国各地の上流域で町おこしなどを手掛けている人たちを対象にしたシンポジウム、「上流文化圏会議」を開催した。

「上流」には、単に川の上流という意味だけでなく、過疎化に悩む島や漁村など山村と同じような構造を持つ地域も含まれている。「上流文化圏会議」は昨年は宮崎県五ケ瀬町、今年は北海道のニセコ町で開かれ、来年は高知県大方町で行われる見込みだ。

◇

今年初めて開催されたのが、インドの上流地域で現在も息づいている文化を紹介する「インド先住民族アート展」「インドのミティラー美術展」。世界の河川流域文化との交流の一環として行われ、実際にインドから描き手が町内に訪れ、宿泊しながら絵を制作した。学校帰りの小学生たちが作業の様子を見学し、図工の時間でも学んだ。

小俣佳子研究員（三五）は、「子供たちは興味津々でしたね。異文化と早川の文化をぶつけることによって、早川の住民が自分たちのもっている地域資源に気付き、見つめ直す」ことができれば。インドとの交流は続けていきたい」と語る。

◇

現在、同研究所が進めている事業が、「二千人のホームページ作り」。ちょうちんやすずり作りなどの伝統工芸の技、生活の知恵、地域に伝わる食などを町民全員がそれぞれホームページを持ち、インターネットで紹介していこうというもの。研究所がプロバイダー的な役割を担い、町民が日本全国や世界に向けて伝えたい情報をバックアップしていく考えだ。

児童数四十四人の早川南小には十四台のコンピューターが設置されている。

大倉はるみ校長は「米国などの日本人学校や全国の県外の学校とメールの交換をしています。親たちも『インターネット同好会』をつくるなど刺激を受けていますね」と話す。

◇

辻町長は「早川二十一世紀計画」を唱える。「よく『二十一世紀計画の間違いでは？』と聞かれますよ。国全体の人口が二十一世紀初頭をピークにして、その後、急激な減少に向かっていくと考えられています。いわば、国全体が過疎化現象となります。百年後の日本の姿を先取りしながら、地域づくりを進めていくつもりです」と語る。

大河の流れも山に降った雨のひとしずくから始まる。財政問題など課題も多いが、町民の意識は確実に変化している。南アルプス山ろくの上流地域から世界に向けて発信される文化づくりの提言は、ゆっくりながらも着実に流れている。

（甲府支局次長　福田光洋）

資料　新聞記事

朝日小学生新聞

アサヒ・コムの特集ページ
http://www.asahi.com/
〒104-8011　東京都中央区築地5-3-2
朝日学生新聞社
03-5541-8271（編集）
電話(代表)　03-3545-0131（販売）
03-3545-8222（編集）
03-3542-7222（広告）
大阪支局
〒530-0003　大阪市北区中之島3-3-9
朝日ビル　電話　06(6202-8001)
大阪日刊学生新聞社　(06)
こちらの番号は、ナビダイヤルです。
お近くのASA（朝日新聞販売所）、または
フリーダイヤル0120-415843
(13:00～17:00、日・祝日を除く)
フリーFAX 0120-415553

はしたりは？

チーズの話ではなく、いい話がある。小学生アラビアの遊牧民の人たちが新しい子のいる家で作った水入れにヤギの乳を入れて家族を祝福するお話に出かけた。ある日のこと、乳を飲もうとして水入れを開けたら中になにかよくよくのいかたまりがつまっていました。食べたら、すばらしい味がした。中元で始められた

学校が美術館になった

ろうかにプロの作品展示

山梨県南巨摩郡早川町の早川殿小学校（児童数四十四人）で、学校のろうかにプロの芸術家の作品を展示する「スクールギャラリー」がスタートしました。早川町は過疎化が進み、美術館なども遠いため、本物の芸術作品にふれる機会をふやそうというのがねらいです。学校が「美術館」になったことで、お友だちも芸術に関心を持つようになったようです。（今野公美子）

ろうかに展示された大野隆司さんの版画をみるお友だちーともに山梨県南巨摩郡早川町の早川殿小で

スクールギャラリーの一回目は今月九日から始まりました。版画家の大野隆司さんの作品が展示されています。早川殿小校長の大倉はるみ先生が大野さんの作品のファンだったことなどが縁で実現しました。二十二点の作品が来月八日までかざられています。

大野さんは作品を雑誌や新聞に発表したり、個展を開いたりして活躍しています。あたたかくてやさしい作風で、ネコをテーマにした作品を多くつくっています。

早川殿小のおともだちは、みんな大野さんの作品が好きに入っています。どの作品が好きかと聞くと、みんなすぐに答えられるほど、よく見ています。「このネコ、顔がおもしろいね」「こっちのネコは、かっこいいよ」――。友だち同士で、絵の感想をいい合ったりもします。

リンダクローズがミサイルを手に持っている作品を見せてもらうと、みんなが「平和を願うリンダクローズ」というタイトルだよ、と教えてくれました。

早川町は長野県との県境の、南アルプスのふもとに位置しています。ゆたかな自然にめぐまれていますが、文化や芸術に触れる機会は都会ほど多くありません。スクールギャラリーには、地域の人たちも来てよいことになっています。これからも、絵画や彫刻などの展示を開いていく予定です。

「本物にふれて」作者との交流も

大野隆司さんを学校に招き、版画教室が開かれました

ニュースあれこれ

わかる授業めざします

文部省、学習指導要領案を発表

文部省は18日、小学校の新しい学習指導要領案を発表しました。どの学年で、どんな内容を、どのように子どもたちに教えるかが書かれた国としての基準で、1989年以来の改訂です。2002年度に始まる完全週5日制にあわせ、教える内容を大ばばにへらし、ひとりひとりに応じた「わかる授業」をめざします。小学校45分、中学校50分と決まっていた1時間の長さを、学校ごと、教科ごとに工夫して決められるようになります。教科のわくをこえて「国際」テーマをえらび、学び方、考える力を身につける「総合的な学習の時間」を、小学3年から週2時間以上、新しくもうけることになります。小学校では2年生に、英語（英会話）に親しむ活動も入ります。

観星祭のピークは半日前

秋州、太西洋、米国で大出現

しし座流星群は、予想されていた日本ではなく、ヨーロッパから大西洋、アメリカにかけての地域で大出現したことが、「流星文学総合」などにとどけられた報告で18日、わかりました。ピークの時間帯も予想よりはやく14時間前の17日昼で、大西洋のカナリア諸島では1時間に約2000個という流れ星のシャワーが観測されました。

消費税還元セールで好感触

ヨーカ堂12店では売上高落ちず

イトーヨーカ堂やダイエー、ジャスコなどが行った「消費税還元」のバーゲンセールで、大スーパーの売上高がふだんの3～6倍ものびました。年末商戦に先がけセールをしたイトーヨーカ堂の北海道12店舗では、セール終了後も売り上げが去年を上回っています。

平成10年12月9日　山梨日日新聞

峡南

早川町が切り絵カレンダー

暮らしの息遣い温かく

日本上流研職員が製作　地域の食文化紹介

早川町は、「はやかわの食べ物と暮らし」と題した一九九九年版のカレンダーを製作した。山菜採り、渓流釣り、ヤマブドウの栽培…。古くから地域に伝わり生活に根付いた食文化から新しい特産品の開発に向けた取り組みまで、さまざまな「食」と「暮らし」の表情を季節の移り変わりに沿って紹介している。また表現方法も写真や絵ではなく、日本上流文化圏研究所の職員による切り絵で"ふるさとの息遣い"を伝え、温かみのある作品に仕上がった。

同町は七八年版からカレンダー作りを始め、九九年版で二十二作目となる。これまでは町内の風景や生息する野鳥などをテーマにし、写真や絵で紹介してきた。今回は担当の企画振興課が、町の関係機関である日本上流文化圏研究所に具体的な製作を依頼。研究所は普段の研究テーマである「食と暮らし」を題材にし、「より温かみを感じるし、目を引く」と切り絵で紹介していくことにした。

「はやかわの食べ物と暮らし」をテーマに製作した1999年版カレンダー＝早川町役場

同研究所職員二人が一年前から準備をスタート。時期に合わせ、現場に出向いて写真を撮影。多くの候補の中から月数の十二に合わせて写真を選び出し、デッサン。これまでの切り絵の経験を生かし、じっくりと時間を掛けて仕上げた。

出来上がった作品は、人間や動物などの表情も細やか。ポスターの上半分を切り絵、その下に説明、日付を付け加えた。一月は今では禁止されているクマの狩猟、二月は自家製豆腐を作る様子、七月は大麦や小豆を煮て作る郷土料理「すばく」を取り上げた。九月は町がワイン醸造のため九六年度から取り組むヤマブドウの栽培風景。古くからの風景を伝える一方で、新たな表情も紹介している。

町の担当者は「和紙風の手触りの紙を使った。切り絵というこれまでにない手作りの感じが味わえる作品に仕上がった」と話している。

カレンダーは縦六十㌢、横三十八㌢で、二千百部製作した。今月中に町内全戸と関係者に配布する。希望者には一部千円で販売する。問い合わせは早川町役場企画振興課、電話0556・45・2511。

平成11年1月1日　讀賣新聞

読売　1999年(平成11年)1月1日(金曜日)　(第三種郵便物認可)

山梨で生きる

早川へ移住決意
都内の大学院生

まさか。いや、本気だった。東京都田無市に住む大学院生が早川町への移住を決めた。町から全国へ情報発信するためだ。

全町民を紹介するホームページの制作にとりかかった鍛打さん。町に住むことを決めている

全国へ発信 町の文化

南アルプスのふもと・早川町が、約二千人の全町民をインターネットのホームページで紹介しようともくろんでいる。「山の中だからとひきこもっていてはだめ。常に情報を発信し、よそから意見を求め、街作りに生かしたい」（辻一幸町長）。

その中心が、日本上流文化圏研究所（同町長瀬）。河川上流地域で、特有の自然を生かす豊かな生活の実現を目指す「上流文化圏構想」を九五年度から進めてきた。研究員の鍛打人幡さん(24)は「そこに住む人の顔が見えるようなものを作りたい」と話す。

第一弾は、日蓮宗総本山の「身延山」と、修験の霊山七面山を結ぶ途中の、参拝客の宿場で栄えた赤沢地区の十六軒分。

「いつも笑顔の大阪屋さん」「おにぎりを作らせたら江戸屋さん」「旅行大好きお母さん」――。タイトルの下に、紹介文や写真を添えた。参拝客への大量の特大おにぎり作りや、町並みにも費の往還を整備した。

「赤沢青年同志会」の活動、農作業などの知恵、住民たちの実体験を、日常用語で紹介した。

早大大学院生。九六年に研究員になった。昨年十一月下旬の約一週間、街作りを研究する後輩と、取材を兼ねた。

六〇年（昭和三十五）に一万人を超えていた町人口は、過疎化で五分の一以下。独居老人が多かったが、行く先々で歓待された。長ばはずみ、ユズやカキなどをもらうなどした。これからも、同研究所への就職を決め、同町内に住むつもりだ。「最初はすごい田舎だと思ったけど、自然は豊かで、人の心もあたたかい。ここに住む人たちが守り続ける歴史、文化を外に伝えていきたい」と語る。アドレスは、http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp

取材・掲載をしていく考え。「三十六集落の過疎には十年はかかる。四捨五入しても二十人にならないかも」と苦笑する。

（上條　太）

別荘で、縁側で、富士山のふもとで……。山梨を選んで良かった。そう思いたい

イラスト・北上昭男さん

平成11年1月1日　山梨日日新聞

(51)　（第三種郵便物認可）　山梨日

早川町「日本・上流文化圏構想」

埋もれた"財産"発掘
山間の暮らしを見直す

早川町が進める「日本・上流文化圏構想」は、山間地域山の暮らしや生き方を考え、新しい文化づくりを目指そうと町づくりを進めている。

一九九六年三月に設立した日本上流文化圏研究所が構想を進める拠点となっている。山間地域（上流圏）が抱える過疎化や高齢化、農林業衰退などの課題を取り上げて打開策を探る。全国の山間地域との情報交換、町内外の有志を集め地域の課題について学ぶ「町民塾」の開催、全国の上流域関係者を募っての「上流文化圏会議」の開催などの事業を展開してきた。

早川町は旧六村が合併してできた町。しかし連続した商店街があるわけでなく、町外から「町らしくない」との声が出ることがある。そこで町が考えたのが「旧村一拠点づくり」。眠っていた資源を生かした施設づくりに努めた。奈良田地区では、地区の町並みを生かしながら歴史民俗資料館、硯島地区では廃校を利用した温泉施設の整備など、大きな費用をかけないで特色を出した。観光、福祉施設として活用している。

「地球元気村」の開校、山菜まつりの開催など、自然を生かしたイベントも開く。山菜まつりは例年二万人が訪れる。「南アルプス活性化財団」は手作りハム、みその生産販売、観光案内や特産品の販売などを目的とした「南アルプスプラザ」の運営などを行っている。

都市との交流も積極的で、一九九〇年には東京都品川区と「ふるさと交流協定」を締結した。

今は時代の転換期

辻一幸町長の話　「昔から早川の紅葉はこんなにきれいだったかい」。昨年の秋、町内のおばあさんが話していた。実際の紅葉は昔の方が素晴らしかったに違いないが、おばあさんに心の余裕ができたからこそ感じられたと思う。かつて早川は紅葉の素晴らしさに気が付かないほど生活に余裕はなかった。今は違う。時代の転換期である。都市の後退と山村の見直しが始まると信じている。

山間地域のあり方などについて積極的な意見が飛び出す「町民塾」＝南巨摩郡早川町の交流促進センター

河口湖町「五感文化構想」

体感できる観光地形成
住民も積極的に参加

花、蛍、花火、温泉―。南都留郡河口湖町は、年間約七百万人の観光客が訪れる国際的観光地。町の行政施策も観光振興が中心だ。住民参加による花づくり運動を柱に、新企画のイベントを次々開催。温泉掘削の成功で、冬季観光にも光を見いだした。訪れる人が見て、かいで、聴いて、触って、食べることで町を知る「五感文化構想」を展開する。

ハーブフェスティバルのメーン会場、八木崎公園で草とりをする小学生＝南都留郡河口湖町小立

各地区の住民ボランティアによる花のまちづくり「湖畔を花で飾ろう」を合言葉に三十年間続いている。ハーブ栽培が流行にも乗って大と取り組む。アジサイやブジザクラなどが町のあちこちで咲く。個人の花飾りも支援する補助制度も設けている。

ハーブ館、美術館、ステラシアター、ミューズ館、自然生活館など五感を刺激する観光施設が次々と建設される一方で、町観光課に自然共生研究室を設け、蛍やチョウ、トンボなどが飛び交う里づくりにも挑戦。河口湖フィールドセンターが主体となって観察会などを通じた自然との触れ合いの場も提供している。

温泉は、源泉から湖畔のホテルや旅館に配湯する方法で「河口湖温泉郷」が誕生した。わずか一年余りで、県内では石和温泉郷に次ぐ入湯税をはじき出した。冬の花火大会やイノシシレースなどで、温泉に付加価値をつくる戦略で客足を伸ばしている。

環境保全に重点

小佐野常夫町長の話　まちづくりは、行政主体ではなく「住民の知恵と力を借りながら」が基本姿勢。自然に恵まれた地域特性を生かした観光施設の整備、温泉や花火大会などの新施策が定着しつつある。今後は、町内の看板統一を図る「サイン計画」、ポイ捨て禁止条例の制定、リサイクル推進など環境保全に重点を置いたまちづくりを進めたい。

日新聞　1999年（平成11年）1月1日　金曜日

〝元気印〟の市町村

アイデアに富んだ町づくり評価

山梨日日新聞社は県内の市町村長にアンケートを行い、「町づくりが活発だと感じている市町村」を一つだけ挙げてもらった。推す市町村長が最も多かったのが早川町で、次が河口湖町。両町は過疎、高齢化が進む山間地と富士山を抱える全国的な観光地という対照的なカラーを持っているが、ともに地域の特性を生かし、アイデアに富んだ町づくりを進めている点が評価された。勝沼町、南部町、櫛形町、明野村、高根町が続いて多かった。上位七町村には南巨摩と北巨摩から二町ずつが入っている。

アンケートでは市町村長に「まちづくりが活発である」と感じている市町村（自らの市町村は除く）を一つだけ選んでもらい、その理由も聞いた。その結果、三十二人から回答を得た。

早川を選んだのは八人。「自然を生かした町の活性化に特徴がある」「置かれた諸条件の中でさまざまな行政手法を駆使して町づくりに努力し、ユニークな事業を展開している」「過疎が急激に進んでいるが、地域の特性を利用した施設づくりやソフト事業を展開している」などの推薦の声があった。

河口湖は六人の推薦があった。「地域の特性を生かした花いっぱい運動、特にハーブづくりなどで町の活性化を図るなど、特色ある町づくりが行われている」「町全体に一体感がある」「滞在型観光客誘致のための温泉掘削や、冬花火などのイベント開催、花いっぱい町づくり、充実した施設建設が行われている」などの評価があった。

勝沼を挙げたのは五人で「ブドウとワインを産業と文化の両面で推進しており、さん新なアイデアも多い」「ブドウなど農業振興を柱とした町づくりが進んでいる」「ブドウなどの農産物を観光に結びつけている」などの理由があった。

南部、櫛形はそれぞれ三人。南部については「アルカディア計画に沿った事業を、無理せず着々と将来像を明確にして段階的に進めている」など、櫛形には「運動公園、河川公園をはじめ文化都市機能を持った調和のとれた町づくりが行われている」などの評価があった。

明野、高根を選んだのはそれぞれ二人。明野の理由は「地域の特性を中心に据えて観光客の入り込み、施設の充実、イメージアップに努力している」など、高根は「商業、生活基盤の整備、住民福祉などの町づくりに積極的な事業展開がなされている」などだった。

アンケートは昨年十一月から十二月にかけて行った。

市町村長が選んだ元気印市町村
（カッコ内は推薦した市町村長数）

横綱

早川町（8人）

過疎化が進むが、活性化のキーワードは「日本・上流文化圏構想」。上流域の文化の確立を目指し全国でもユニークな日本上流文化圏研究所を設立した。旧村1拠点づくり、自然や文化施設を生かした活動も。都市との交流、ヤマブドウワインやハムなど特産品の開発もしている。

大関

河口湖町（6人）

観光を柱に、町全体をまるごと博物館にしようという「フィールドミュージアム事業」を展開。ハーブ、アジサイなどの花の植栽、散策路の整備、蚕の里づくり研究のほか、美術館などの観光施設も充実。温泉郷PRに合わせ冬の花火大会も打ち出し、通年型観光地を目指している。

関脇

勝沼町（5人）

「ぶどうの丘」や「ぶどうの国文化館」などの施設整備、「ぶどうまつり」の開催など、特産品のブドウを農業だけでなく観光、文化にも生かした事業を展開する。

小結

南部町（3人）

アルカディア南部整備事業に沿ってスポーツセンターや美術館などを備えた文化館を整備したほか、温泉施設に着手。「南部サミット」の開催にも取り組んでいる。

櫛形町（3人）

アヤメをシンボルにした町づくりとして、アヤメフェアやアヤメ祭りをはじめとしたソフト事業を多数展開。運動公園や河川公園、新興住宅地の整備も進む。

前頭

明野村（2人）

「日照時間日本一」を掲げ「観光型農業」を目指した事業を展開。観光農園や滞在型温泉施設「ふるさと太陽館」、ヒマワリ畑などを整備し都市と農村の交流を進めている。

高根町（2人）

通年型観光と都市との交流を目指して「ピュアワールド」などのイベントや「たかねの湯」、市民農園「高根クラインガルテン」などの施設を整備。蚕の養殖も進める。

特集 自治行

地方自治 21世紀へ

平成 11 年 1 月 27 日　朝日新聞

http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/

早川町民の顔が見える情報を

約2000人の早川町民の顔が見えるようなホームページを目指している。今のところ完成しているのは、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている赤沢集落だけだが、「おじいちゃんの教え」、「おにぎりを握らせたら江戸屋さん」など、実際に会ってみたくなるような地元の人々が登場している。

制作者は、早稲田大大学院生の鞍打大輔さん（24）。町民一人ひとりの技や生活の知恵でホームページをいっぱいにしたいという。町の観光ＰＲにもなるだろうと期待している。

完成予定は10年後。鞍打さんは同町の日本上流文化圏研究所の学生研究員。活動の一環として1996年秋にホームページを立ち上げた。赤沢では、同じ研究室の大学生５人と一緒に取材した。集落のどこかにある「あさがお」「大黒様」など、目にした面白いものも載せている。

そのほか、町の伝統行事や広報などのコーナーもある。関連したページとして、早川インターネット同好会や早川南小学校にもつながっている。同好会の会員第１号は、持ち寄りで漬物や野菜を売る「おばあちゃんたちの店」を紹介している。

情報を朝日新聞甲府支局(koufu-shikyoku@ed.asahi.com)へお寄せ下さい
掲載したホームページ画面等は朝日新聞社の電子メディアに使うことがあります

平成11年5月14日　山梨日日新聞

養蚕隆盛のあかし後世に

峡南

かつて五箇地区で盛んだった養蚕業に使用した機具
＝早川町交流促進センター

早川町五箇地域

機具展示や復元計画

秋には生糸づくりも

地域の伝統を伝えよう。早川町の五箇（ごか）地域の有志が、かつて盛んだった養蚕業のあかしを残そうと、資料館の建設、作業の復元ビデオの製作などを計画している。各戸に残る機具を集めて展示、実際に作業を行うため機具を復元する。秋には生糸づくりを行う予定だ。

五箇地域は薬袋、千須和、椚坪（くれつぼ）、笹走、塩之上の五地区。大正時代から養蚕業が始まり、太平洋戦争後から昭和三十年代にかけピークを迎え、約二百戸のうち百五十戸以上が養蚕業を営んでいた。生糸価格の暴落などから昭和五十年代に入り、戸数は減少。現在は桑畑もなくなり、当時の面影はなくなっている。

各家庭にはかつて養蚕で使用した機具が残っており、有志でつくる地域おこしグループ・五箇地域開発協議会のメンバーから「機具を展示し、養蚕業について紹介するスペースを設けたい」という機運が高まった。昨年秋、薬袋地区の町交流促進センターのグラウンドに平屋プレハブ小屋（広さ約四十平方㍍）を建設。機具の残る家に呼びかけ、五十種類百点を集めた。

桑の葉を切る座桑機、わらで作った幼虫を乗せて育てる「糸こも」などがある。桑を食べなくなった蚕を育てる「まぶし」は普通、わらや段ボール製だが、集めた物は地域でよく生えているフジのつるくさを使用、地域の特色が出ている。

小屋には機具だけでなく、幼虫から繭に成長していく段階や糸を紡ぐまでを紹介する予定。増穂町の生産農家から蚕の幼虫を買い取り、育てる。今秋には、集めた物を基に機具を復元し、糸を紡ぐ作業を地域の小学生などにも見学してもらう予定だ。作業の様子はビデオに収録。資料として保存する。

同会は「この地域で養蚕業が盛んだったことを次の世代に伝えていきたい。地域を知る財産にもなる」としている。

平成11年6月6日　産経新聞

早川町の薬袋地区

伝統の養蚕技術 資料館で保存

かつての産業知らぬ子に生きた勉強

10年ぶり飼育に、「経験者」張り切り

早川町の薬袋地区は、かつては地区の八〇%にあたる二十六戸が養蚕農家だったが、いまではゼロ。不用になった蚕具を燃やして処分してしまったら、地区の養蚕の歴史までが消えてしまうと資料館建設計画が浮上した。昨年からは町民が展示用蚕具の収集活動を始め、間もなく「早川町養蚕資料館」がオープンするという。消えゆく養蚕技術が保存される。

蚕具は稚蚕用から壮蚕用まで一式がそろい、約百点が集められた。

資料館建設計画の話を聞いた県南巨摩農業改良普及センターの深沢昭三主任改良普及員の紹介で、増穂町の養蚕家からは壮蚕一万頭を譲るとの申し出があり、実際に養蚕ができることにもなった。

同町企画課は「地区の主産業だった養蚕を知らない子どもたちにとっては生きた勉強となり、興味を持ってもらえる」と話す。

二十三日からは増穂町の養蚕家、芦沢定弘さん(四五)の協力で、同資料館隣でかつて養蚕取引をした養蚕飼育所で夏蚕（壮蚕）飼育が行われる。地区民にとって養蚕は十年ぶりだという。

養蚕飼育の指導に当たる同地区の水野定夫さん(七三)は「当初は資料館だけだったが、関係者の協力で十年ぶりに養蚕もできることになり、経験者のお年寄りが張り切っている。子どもたちにも給桑に手伝ってもらい、繭ができたら繭フラワーを作るつもりだ」と話している。

平成11年6月16日　朝日イブニングニュース

LEMENT WEDNESDAY, JUNE 16, 1999　☆☆

NAGANO/ YAMANASHI

JAPAN UPPER RIVER CULTURE INSTITUTE

Children learn to make the Japanese noodles in a *soba* workshop held by the Japan Upper River Culture Institute in June 1997 in Hayakawa Town.

Valleys thrive on rich traditions

Far from being at a disadvantage living outside the mainstream, mountain villagers are drawing strength from their rich traditions.

By YUKA ARIYOSHI
Asahi Shimbun

Life is not easy in a depopulated hamlet nestling in some remote valley from which the young people have departed for the bright lights. An experiment is now underway aimed at erasing this negative image by drawing attention to the community spirit endemic to mountain Japan.

It would be no mistake to describe Hayakawa Town, which sits in the foothills of the Southern Alps in Yamanashi Prefecture, as one such depopulated mountain village.

The village area is 96 percent forest, with communities scattered along the banks of the Hayakawa river, which runs north to south between mountain peaks towering on either side. Hayakawa Town's population is now smaller than before—having dropped below 2,000—and older, with 40 percent more of its inhabitants being elderly.

The Japan Upper River Culture Institute was founded in Hayakawa Town three years ago. By establishing the institute in this village near the source of the Hayakawa, the founders were basing their experimental vision on the experience of villagers long gone, who preserved and protected the mountain and river country. The institute was founded with a view to reconsidering what it truly means to be well off, while focusing on what people 100 years from now might regard as the good things of life.

The town is shouldering the institute's annual operating expenses of some 10 million yen. The institute secretariat is located in a corner of the town's community center. It has just two research workers who, alongside two employees from the town office, make up the entire staffing complement.

On the other hand, the culture institute has a network that spans the nation. More than 100 people from universities and private research institutes with a common interest in regional development have been designated research collaborators for the duration of the experiment. Engaged in the research are professors and students from the administration research center at Yamanashi Gakuin University and a laboratory at Waseda University.

According to Hayakawa Town's regional philosophy, Japan's sparsely populated mountain villages are not dead-end settlements whose existence should be derided but places that have something to say to forward-looking thinkers on matters of population and lifestyle.

This year the annual conference of the Japan Upper River Culture Institute is scheduled for next month in Honkawane Town, Shizuoka Prefecture.

The culture institute began its experiment aimed at imbuing some of Japan's backwaters with a spirit of dynamism by sponsoring the distinctive regional food culture and reviving ancient games.

Subaku, the boiled barley eaten in Hayakawa Town until the early 1960s, made its reappearance. The barley is boiled for two hours and then cooked with a small amount of rice and mottled kidney beans. Cold miso soup, with chopped cucumber and shred green *shiso* leaves added, is poured over it before it is eaten.

Because students who came to the region to pursue their research asked without fail for *subaku*, local grandmothers formed a *subaku* fan club, and the recipe of yesteryear was revived.

Last year the culture institute initiated a cultural exchange in which it invited the painters, Warli aborigines and Mithila people from India, to demonstrate their art in person.

Yoshiko Omata, 36, a former researcher connected with the culture institute from its inception, says: "In order to transform the future of the mountain village, the villagers must become prosperous and happy. I believe the town will become a go-ahead place not by following some administrative blueprint but through each individual living life to the full."

Omata retired from the culture institute at the end of March to open a restaurant that serves local foods and *soba* noodles.

One of the new researchers who have inherited her workload at the institute is Daisuke Kurauchi, 25, who completed a university graduate course this spring before joining the institute.

Kurauchi, who majored in urban planning, was attracted by the rustic way of life and settled down in Hayakawa Town, which had been his research subject. He lives close by the institute, in a factory whose owners went bankrupt. His monthly rent is 2,000 yen.

Kurauchi's pet theory is: "A local area needs a local planner. If you commission a consulting company located in Tokyo, it will draft a plan after a few visits to the area. I want to become a planner with deep roots in this area."

Kurauchi has created a home page (http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/) on which he hopes to bring the personalities of Hayakawa's 2,000 townsfolk to life. Villagers you feel you would like to meet with have featured on the home page, under such headings as "Grandpa's wisdom" or "Edoya-san for rice balls."

The mayor of Hayakawa Town, Kazuyuki Tsuji, defends the name Japan Upper River Culture Institute, which he played a part in choosing: "We used *joryu* (upper river) in the sense of the river source but, come to think of it, it also refers to high class or high society. In some people's opinion, the word suggested we regarded ourselves as superior, but I believe we can live with either interpretation."

平成11年7月6日　山梨日日新聞

民話伝承へ 絵本を制作

早川町のグループ

早川町の手づくり絵本のサークル「えほん・こほんの会」（大倉はるみ会長）は、同町の民話「奈良田の七不思議」の絵本づくりに取り組んでいる。

同会は町が主催する生涯学習教室のサークルで、結成三年目。月に二回、親子が参加して本の読み聞かせなどの活動を行っている。絵本の題材は町の民話「奈良田の七不思議」を取り上げ、観光客にも奈良田の言い伝えを知ってもらおうという考えだ。

これまでに原本が完成。絵は同町新倉の辻一浩さん（三）が担当し、文章は大倉会長が書いた。「片葉のあし」「せんたく池」「染めもの池」など、同地区に伝わる民話を紹介し、「二羽がらす」の話は奈良田地区の方言で書かれている。

完成した「奈良田の七不思議」の原本

色塗りと製本は会員が手分けして行う。すべて手作りで、二十冊を予定している。十一月に行われる町の文化祭での展示即売と、奈良田温泉の旅館での販売を計画。好評ならば増刷も検討している。

大倉会長は「早川の民話を掘り起こし、町の子供や親、観光客らに伝えていきたい」と話している。

平成11年7月10日　山梨日日新聞

新聞（山日）　1999年（平成11年）7月10日　土曜日

早川の新名所 発掘へ探索班

自然の魅力を再発見

上流文化圏研究所 冊子づくりも検討

町内のビュースポットを示した地図＝早川町交流促進センター

峡南

早川の自然景観を再発見！。早川町の上流文化圏研究所は、町内の眺めのいいスポット情報など町の自然の魅力を探ろうと「ビュースポット探索班」を結成した。富士山の眺望と地元の山の木々とのコントラストや、秘境の絶景などビュースポットを発掘し、情報の冊子化も検討している。

研究所は地域の自然を題材に、町民らが参加して活動している。これまでに「遊びの歳時記づくり」「蕨資料保存活用」「水環境調査」などの班をつくり、研究活動を行っている。

本年度は新たに、景観面の町の魅力にスポットを当てた。五月に開かれた最初の会合には町職員や林業関係者らが集まり、各自が知っている町内の眺めのいいポイントなどを紹介し合った。

情報提供は、町民にも協力を呼び掛けている。研究所がある町交流促進センターの玄関ロビーに早川町全体の地図を設置。訪れる町民に自由に加えてもらうよう、眺めのいい場所や対象、感想、スポットへのコースなどを書き込む用紙を備えた。

これまでに約四十のスポット情報が記されている。「富士山と紅葉が美しい」「地蔵のうねりがきれい」などの情報が寄せられている。一方で「ごみがすごい」という情報もあり、景観保護への貴重な資料ともなりそう。

同町は、春秋の彼岸に富士山頂から日が昇る光景が望めるという七面山の敬慎院（身延町飛び地）が有名で、毎年多くの人が訪れる。探索班ではこうした富士山頂からの日の出が望める町内のポイントを探し、紹介していきたい考えで、地元の富士見山なども厳選し新しいスポットを見つけていく計画。

同研究所は「探索班の活動は始まったばかり。今後、町民からの情報を集めながら実地調査も進めていく予定。集めた情報は冊子にまとめたり、インターネットなどで公開することを考えている」と話している。

かいじネットワーク

甲府担当
(055) 231-3111
FAX 231-3161

峡中支局
(0556) 22-5432
FAX 22-1797

峡東支局
(0553) 22-0339
22-7603
FAX 23-2158

峡南支局
(0556) 22-5431
FAX 22-1797

峡北支局
(0551) 22-0138
22-0158
FAX 22-8162

富士吉田支社
(0555) 24-1000
FAX 23-6997

都留支局
(0555) 22-0611
FAX 24-1796

大月支局
(0554) 22-0477
FAX 23-2324

上野原支局
(0554) 63-4833
FAX 63-4773

平成11年7月22日　静岡新聞

本川根

豊富な自然広くPR

日本上流文化圏会議　魅力など意見交換

過去の歴史を踏まえ、これからの千年を展望した河川上流部の将来像を探る第三回日本上流文化圏会議「千年の学校in南アルプス」がこのほど、本川根町奥泉の町立北小学校をメイン会場に開かれた。同会議では、同町から自然豊かな上流文化圏の素晴らしさを情報発信していくことになった。

同会議は、山梨県西宮市都早川町にある日本上流文化圏研究所（理事長・下河辺淳元国土事務次官）と、同町関係者でつくる同実行委員会（委員長・望月孝之寸又峡温泉振興会長）が開催。高崎県、北海道に続いて三回目の開催で、全国の上流部にある山間地域から活性化対策などに取り組んでいる官民合わせ、約二百人が参加した。

三日間の同会議は、二回のパネルディスカッションを中心に、山間地で生きてきた先人の智恵を子どもたちに伝えるワークショップが行われた。これには、同町の北、南の両小五、六年生四十四人が参加。まき割りや竹筒で水を引いたり、かまいり茶や蕎麦づくりなどを学んだ。

パネルディスカッションでは、下河辺さんをはじめ、建築家や大学教授らが出席。児童減少による学校統合問題など山間地の学校教育の在り方や、上流部の魅力にひかれて訪れる都市住民の受け入れなどについて活発に意見交換した。

最終日は下河辺さんが、会議の成果として上流文化圏が都市住民の心のよりどころの地域と認識されるよう同町から情報発信しようと総括。今回の参加者らがサポーターとして同町の活動を支援していくことを決めた。同町では情報発信の方法などについて検討することにしている。

平成11年9月29日　山梨日日新聞

1999. 9. 29

手づくりの絵本で
奈良田の民話紹介
早川のサークル

早川町の手づくり絵本のサークル「えほん・こほんの会」（大倉はるみ代表）が製作していた民話の絵本「秘境・奈良田の七不思議」が完成した。

絵本は縦十三センチ、横九・五センチの大きさで、全二十九ページ。「片葉のあし」「せんたく池」「染めもの池」など同地区に伝わる民話を紹介。「羽がらす」の話は奈良田地区の方言で書かれている。

今年五月から製作を開始。絵は同町新倉の辻一浩さん（三一）が担当し、文章は代表の大倉さんが書いた。月一回ペースの会の活動の中で、会員が手分けをして色塗りや製本を担当。すべて手づくりで仕上げた。

二十冊を製本し、町民会館に展示している。今後は、十一月三日に開かれる町の文化祭に出展するほか、町の小中図書館や交流センターなどに寄付する予定。絵本の原画は奈良田の民俗資料館に展示するという。

出来上がった絵本「秘境・奈良田の七不思議」＝早川・町公民館

1999.10.8　読売

資料室開放してます

今月から　早川の上流文化圏研究所

学校図書室とネット　分散型図書館目指す

早川町の日本上流文化圏研究所（同町薬袋・町交流促進センター内）は今月から、研究所の資料室を「上流研ライブラリー（仮称）」として一般に開放している。同研究所では、ライブラリーと、町内の学校図書室とをネットワーク化し、分散型の町立図書館とする構想を練っており、町作り関連の図書が充実している資料室の開放はその第一歩として期待されている。

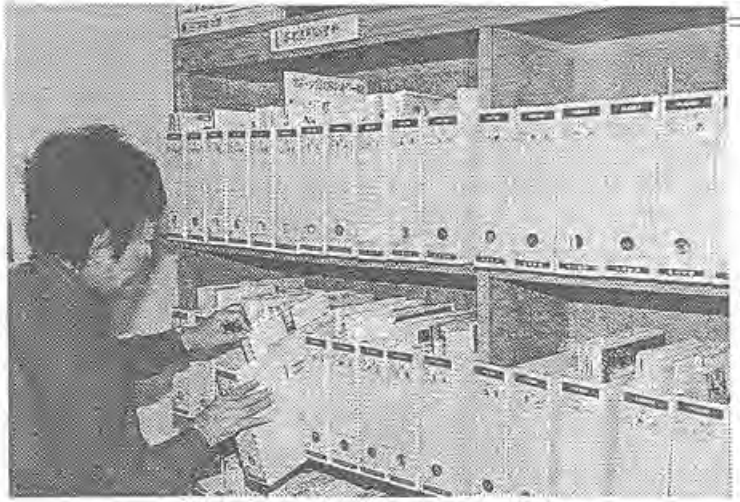
同研究所は、河川上流地域の文化研究を通じ、町おこしや情報発信を行うため、九六年に町が設立。全国の地域おこしなどに関する論文や資料も含め、約二千冊の図書を収集してきた。

ライブラリーは、これらを整理し、住民からも一般図書など約三千冊の寄付を受けて運営されている。自治体や研究団体の資料は都道府県ごとに分類、郷土史関係のコーナーも作った。また、県内の公立図書館のデータベースを検索して同研究所にしかない蔵書をリストアップし、研究所のホームページで紹介していく作業も進めている。

一方、学校図書室とのネットワーク化については、今後、町教委などと協議していく方針。町内の早川北小、南小、早川中の各図書室にはそれぞれ三千―四千冊の蔵書があり、大倉はるみ事務局長は「山間地で各集落が離れている早川町では、分散型の図書館が向いている。結びつければ、大きな図書館と同じ機能が果たせるはず」と話している。

オンラインで蔵書を検索し、必要な場合は、高齢者への配食サービスの車などを利用して図書を移動させるなど、県内では例のないユニークな試みも検討しているという。

ライブラリーは土曜、日曜休み。町民以外でも利用できる。問い合わせは同研究所（☎0556・45・2160）へ。



都道府県ごとに整理された資料

平成11年10月16日　産経新聞

3 総合 12版　平成11年(1999年) 10月16

いまこの町が元気だ ◆7◆

「上流文化圏構想」

山梨県早川町

ひ孫の代に向け／豊かな水と山の文化

南アルプスを背景とする山梨県南西部の早川渓谷は、まもなく春めくような紅葉につつまれる。

早川町は川の流れに沿って南北に長く二十八キロ、東西十五キロ。広い総面積の九六%が山林で、人口わずか二千人。この三十年間に人口が八割も減った典型的な過疎の町だが、四〇%を占める約八百人のお年寄りがめっぽう元気がいい。

ほぼ中央部にある手打ちそばの「アルプス」。近くの集落で収穫したそばを水車で製粉する昔ながらの味がいい。六十代の婦人たちが交代で店に出て、温泉客や登山者らに出す。「おとうさんが休耕田でそばを栽培するようになりました」と言う。

野鳥公園の入り口にはアレハブの「おばあちゃんたちの店」。タマネギなどの野菜や漬物、蕎麦、木工品。アロマ。介護を要する老人は七、八人。ぼケるひまがないという。

ケビアルの花器やカゴ…。「ここも文化割で、「遊んでたおじいさんが仕事をするようになりました」。

天然のブナ林に囲まれた野鳥公園にヤマセミ、カワセミ、アオサギなど百二種類の鳥がくる。六十九歳の自然指導員、川口にさんは毎朝から観察する。

□ ■ □

早川町は昭和三十一年、奥城の六カ村が合併して生まれた。発電ダムの電源開発で人口流入が進み三十五年には一万人にふくれあがったが、開発が終わると一気に減少。辻一幸さん(六九)は広がる。高齢者に囲まれ、ほうはげ。介護を要する老人は七、八人。ぼケるひまがないという。

□ ■ □

早川町は昭和三十一年、奥城の六カ村が合併して生まれた。発電ダムの電源開発で人口流入が進み三十五年には一万人にふくれあがったが、開発が終わると一気に減少。辻一幸さん(六九)は

「白と黒のヤマセミは、日本女性が着物を着ているようで、見返り美人と呼んでます」とユーモアまじりの説明が楽しい。

夕刻には廃校を利用した宿泊施設「ヘルシー美里」などの温泉で、集落を超えた交流の輪も広がる。辻さんは集落を歩き、知られている歴史、地域にある文化の掘り起こしを住民と語り合いながら奨励していった。南部の赤沢地区は日蓮宗の身延山と修験道の七面山を結ぶ宿場で、旅館や民家が江戸時代のまま残されていた。石像の道祖神など多数。手作りハム、ヤマメやイワナの養殖。「ある集落を訪ねると、そばを出される。ここに、そばは文化があったんですね。そ

「知っていく労働者に引きずられるように、住民も町から出ていく。昭和六十年、精神的なものも失って、このままではいけない。国や県に頼らないで、自分たちの足元を見つめて立ち上がっていくしかなかった」

川六カ村に二十六の集落があ

昭和三十年ごろまで行われていた焼き畑農耕の約七百ヘクタールにおよぶ用地は、国の重要有形民俗文化財に指定された。三帯状、白鳳太鼓、焼けたいまつなどの郷土芸能が見直され、北部地区に伝わる民話をもとに、小学校で児童の民話劇も上演された。今年の「はやかわの食べ物と暮らし」

こで『アルプス』を開くと、おじいさんたちが、うちのおかあが化粧じゃないと言ったと言ってくれました」

□ ■ □

早川町が全国的に注目されるようになったのは平成六年の「日本・上流文化圏構想」だった。水と山を守りながら、人間らしく暮らす生き方をさぐる壮大な試みである。その具体的な長期総合計画のタイトルが「早川・22世紀計画」。実に、ひ孫の代をにらんだ計画である。辻さんは語る。

「物ではなく人の心、生き方で定住する。人口は少なくても誇りがある。過疎という意識はありません。車や人に出合わない豊かさの意識のほうが大事で

想の起こしは産業にも向けられた。遊休農地を活用して栽培したヤマメドクのワイン、南アルプスのミネラルウオーター、手作りハム、ヤマメやイワナの養殖。「ある集落を訪ねると、そばを出される。ここに、そばは文化があったんですね。そ

が廃校から蕎麦を持ってきてくださった」

研究員の熊打大輔さん(三五)は町民と水質環境調査、早川のビュースポット探索、蕎麦の保存などに取り組んでいる。これを後押しする全国の協力員もいる。年一回、早川のような上流域で開く「上流文化圏会議」には「ぜひ当地で」と引き合いが殺到。今年は七月、静岡県の寸又峡に全国から二百人が集まった。その参加者を早川の応援団になる。

陶芸、木工、染色、能面師など十人を超える職人や芸術家が移り住み、全国の市町村から視察も多い。「早川町はやる」とかあっていいですなあ」。辻さんは「うちの町でやる」と言葉いっぱいやってるだけです」と笑ってこたえる。

早川町から日本が見えてくる。

（小田孝治）

平成11年11月23日　山梨日日新聞

1999.11.23　山日

峡南

地域おこしの事例紹介

増穂で講座　南巨摩7町共生考える

南巨摩郡七町の町おこしグループ「南巨摩共生のまちづくり塾」（赤池朗理事長）は二十一日夜、増穂町小室のゆずの里ふれあいセンターで、まちづくり夜なべ講座「上流文化圏からのメッセージ」を開いた。

早川町・上流文化圏研究所の活動成果が紹介された「まちづくり夜なべ講座」＝増穂・ゆずの里ふれあいセンター

同講座は、七町で地域おこしに取り組む人々が講師を務め、各町を回って活動内容を紹介している。今回は早川町・上流文化圏研究所の大倉はるみさんと狩内大輔さんが講師を務め、同研究所の活動成果を報告した。会場には各町から約四十人が詰め掛けた。

講師二人は同研究所について「町民を巻き込んで研究班を組織し、地域資源を発掘して活用するのが設置の目的」と説明。地域のお年寄りとの交流を通じて、麦を使った郷土料理「すばく」を発掘した活動や、眺めを資源と考え、町内で景色のいい場所を調査し、まとめる「ビュースポット探究班」の活動などを紹介した。

次回は二十八日午後七時半から南部町総合会館で、増穂町の地域おこしグループ「NA穂積」の井上光三さんが「日本一のあじさいの里を目指して」と題して発表する。聴講は自由。問い合わせは南巨摩地方振興事務所内の事務局、電話0556・22・8131。

十二月以降の予定は次の通り。

▽十二月八日午後七時、中富町総合会館、南部町内船歌舞伎保存会「内船歌舞伎はこうして今日に至った。そして、その魅力とは」▽来年一月、鰍沢町（日時、会場未定）、富沢町共生のまちづくり塾「わたしたちのまちづくり」（仮題）▽一月二十日午後七時半、富沢町（会場未定）、身延町の福興三郎さん「駅前しょうにん通りの活性化」（仮題）

近藤浩一路らの同時代作品展示

南部町立美術館

南部町立美術館は十二月五日まで、同町出身の水墨画家近藤浩一路（一八八四―一九六二年）と同時期に活躍した画家たちの作品を集めた「近藤浩一路　同時代特別展」を開いている。

館内には約五十点を展示。近藤浩一路の「朝の日」、横山大観の「竹」、川合玉堂の「冬嶺帰駿」などの日本画のほか、望月春江、穴山勝堂らの作品も紹介している。入場料は一般三百円、小中学生二百円。

近藤浩一路と同時期に活躍した画家たちの作品を紹介している特別展＝南部町立美術館

平成11年12月3日　山梨日日新聞

H11. 12. 3　山日

こま　竹馬　レンゲの首飾り

カレンダーで昔の遊び

早川の上流文化研　自然題材に製作

早川町の日本上流文化圏研究所は、「あそばざあ―21世紀の子供たちへ―」と題した二〇〇〇年版のカレンダーを製作した。屋外で遊ぶことが少なくなった子供たちに遊びの参考にしてもらおうと、油絵や切り絵、アクリル画を使い、こま、竹馬、レンゲの首飾りなど、季節にあった遊びを取り上げた。遊び道具の作り方も紹介している。

同研究所は、昨年からカレンダーを作り始めた。地域に埋もれる文化を掘り起こそうと「はやかわの食べ物と暮らし」をテーマにした。切り絵を使い、町特産のそばや郷土料理「すばく」、山ブドウの栽培などを紹介した。

二〇〇〇年版は、自然を利用した遊びが題材。外で遊ぶ機会が少なくなった子供たちに参考にしてもらおうという考え。同研究所の事業の一つ「遊び部会」の部員十五人が取材やアンケートを通して町民から集めた約百の遊びの中から、町独自や特徴的なものを選択、紹介している。

上流文化圏研究所が作製した2000年のカレンダー＝早川町交流促進センター

出来上がった作品は、上半分が絵、その下に遊び道具の作り方の解説、日付を付け加えた。一月は奈良田地区のこま「ずんぼこま」、六月は大麦のワラを使った「ホタルかご」、九月は「竹馬」を取り上げた。また、九月から十一月は、遊ぶ子供の絵の背景に、交流促進センター、ビラ雨畑、ヘルシー美里など、町の施設が描かれている。

カレンダーはA2判、町内全戸と関係者に配布した。希望者には一部千円で販売する。問い合わせは早川町企画振興課、電話0556・45・2511。

平成11年12月15日　山梨日日新聞

1999年（平成11年）　12月15日　水曜日

町民の"横顔"ページで紹介

上流文化圏研究所が公開している「二〇〇〇人のホームページ」＝早川町交流促進センター

早川の上流文化研が2000人対象

人柄通し地域アピール

峡南

早川町奥袋の日本上流文化圏研究所は、「二〇〇〇人のホームページ」と題し、同研究所のホームページに全町民を紹介する取り組みを行っている。これまでに約百人を取材、写真とともに普段の生活や人生のエピソードなども添えて公開している。

同研究所によると、市町村を紹介しているホームページは全国に多数あるが、町の歴史や施設、観光スポットなどを紹介するものがほとんどという。「本当に町を紹介する場合、町民がどんな思いを抱いているのか、どんな生活を送っているのかを紹介するのが必要」と、町民全員を紹介するホームページづくりに取り組み始めた。

町民の調査は、早稲田大理工学部後藤春彦教授の研究室の学生に協力を依頼。一つの集落を一週間ほどかけて、全員の写真を取りながら行っている。お年寄りには、生い立ち、人生のエピソード、町の印象、生活の知恵などを取材。若者には、町に対する感想や希望などを聞いている。

取材は昨年から開始。これまでに三回行い、町内三十六集落のうち、四集落（寺沢、薬袋、草塩、京ケ島）の約百人の調査を終えた。また、調査中に気付いた建物や景色など地域の見どころも合わせて取材した。

ホームページで公開する前に本人が内容を確認し、希望があれば手直しを加え、本人の了承を得てから公開している。本人が公開を断った場合は掲載していない。同研究所によると、これまでに公開を断ったのは一人だけという。

同研究所の研究員は「二〇〇〇人となると、この先十年の調査が必要となる。今後は、取材活動に地元の小中学生など子供たちにも協力を求めたい。町を見つめ直す機会にもしてほしい」と話している。

ホームページのアドレスは、http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/JORYUJ-2000/2000.html

■編集をおえて

山梨県の小さな町、早川町にとてつもない大きな目標を掲げた日本上流圏研究所が開設されて４年が経過した。

このたび、その集大成ともいうべき、研究年報が完成した。

「地域文化を見直し、新しい文化と暮らしの創造をしよう」
「全国の上流地域とのネットワークを構築し、長期的な視点で展開しよう」

この上流哲学をベースに、町民を巻き込んだ研究班がいくつか立ち上がり、活動を始めている。また、早川町をきっかけに始まった上流文化圏会議も４回目を数え、全国に上流文化圏の名前を知らしめた。卒業論文を書くために新しい考えをもった学生が町に入ってきたことも、少なからず町に新風を吹き込んだと言える。

なにもかもが全く新しい試み、そして、実践だった。でも、４年間の積み重ねは、少しずつではあるが人々を変え、全国の中山間地域を見直し、連携の輪を広げている。

上流文化圏構想の更なる実現のためにも、中山間地域に住む人々の幸せのためにも、この年報を活用してほしいと願っている。

最後に、日本上流文化圏研究所の運営のためにお力添えをいただいた早稲田大学、山梨学院大学の先生方、常任理事、ネットワーク協力員のみなさん、そして、何よりも研究所に深いご理解とご協力をいただいた町民のみなさんに心から感謝申し上げます。

2000年３月31日
日本上流文化圏研究所
事務局長　大倉はるみ

日本上流文化圏研究所　研究年報 Vol.1
「鳥の目・虫の目　1-4/1000」

タイトルは、早川町を丹念に掘り下げるミクロな視点と、全国の上流文化圏を広く眺め渡すマクロな視点を持ち合わせる研究所の活動姿勢と、これまでの既成概念にとらわれない視点で物事を見つめ、新しい価値を生み出していこうという研究所の目指すところを表しています。

〈編集〉
三井　啓心（所長）
鈴木　輝隆（常任理事）
望月三千生（常任理事）
大倉はるみ（事務局長）
小俣　佳子（元・研究員）
鞍打　大輔（研究員）
深沢　正晴（役場企画振興課）
鈴木　宏記（役場企画振興課）
河村　康孝（元・学生研究員）
石川　宜裕（学生研究員）
多田　慎二（学生研究員）

〈寄稿〉
下河辺淳、辻一幸、佐野弘、深沢作一、
深澤礼子、天野秀一、宮本高広、三代貴史、
望月敏明、小島裕一、嵯峨創平、杉山美智子、
中嶌いづみ、白井信雄、比志保、井戸隆、
田口太郎、山泉聡、永井啓宏、沖山観介、
安斉真吾、丸山弘敏、中村隆、小野真代、
後藤春彦、早川正治、早川源、藤井経三郎、
水野卓史、望月利和　　（敬称略・掲載順）

〈中扉の写真〉
早川の山野草。撮影、深沢正晴。

〈お問い合わせ先〉

日本上流文化圏研究所
Japan Upper River Culture Institute
山梨県南巨摩郡早川町薬袋430 〒409-2727
TEL/FAX 0556-45-2160
E-mail joryu@town.hayakawa.yamanashi.jp
URL http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/